EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03009 3652

（岡山製本）

明治四十五年六月二十五日印刷
明治四十五年六月二十八日發行

三國志下卷
定價金八拾五錢

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

大賣捌所　東京市神田區表神保町一番地　三省堂書店

同　大阪市東區南本町四丁目　三宅莊藏書店

不許複製

め玉ひしに、今孫皓こと〴〵く之を廢、悠々たる蒼天此何人ぞやと云て淚を流す。時に太康元年夏五月江南こと〴〵く定りければ、王濬師を收て洛陽へ回り、孫皓を引て天子に見しむ。晉帝坐を賜て、朕この座を設て卿を待こと久しと宣ひければ、孫皓答て申けるは、臣も南方に於て此座を設て陛下を待こと久しかりき。晉帝大に笑ひ玉ひければ、賈充傍に在て問て曰、孫皓吳に在て人の面を剝或は眼を鑿れりと聞しが、如何なる罪をか此の如くは罰し玉ひし。孫皓答て、人の臣として君を弑し奸佞にして不忠なる者を、皆此の如く刑を用ふと云ければ、賈充心羞て赤面す。晉帝酒宴を設て吳の君臣を持成、孫皓を皈命公に封じて其子孫封を中郎に任じ、丞相張悌が忠義に死したるを憐んで其子孫を重く賞し、王濬を輔國大將軍に封じ、其餘の將士こと〴〵く恩賞ありて天下大に定まる。蜀主劉禪晉の太康七年に薨じ、魏主曹奐太康元年に薨じ、吳主孫皓太康四年に薨じ、此より三國晉帝に皈して司馬炎一統の天下となり、軍民無爲の化に服し、四海初て太平を樂ことこそ目出度けれ。

通俗三國志下巻　終

卷之五十

晋帝
郤正

開と呼はりければ、內より御方囘りぬとて門を開きけるに、晉の大軍ことごとく亂れ入、火を掛喊の聲を擧ければ、吳の勢防ぐべき力なくことごとく降人となる。吳主孫皓は自ら首を刎んとしけるを、中書令胡沖、光祿勳薛瑩急に押止て申けるは、君なんぞ安樂公劉禪に效ひ、晉に降りて身を保ち玉はざる。孫皓これに從ひ遂に輿櫬を備て君臣みな自縛して降人に出ければ、王濬これを請取て其繩を解ゆるし、國中の圖籍を納て、吳の四州、四十三郡、三百十三縣、家數五十二萬三千、軍吏三萬二千、軍兵二十三萬、男女老少二百三十萬、米穀二百八十萬石、兵船五十餘艘、後宮の美女五千餘人、ことごとく王濬が手に屬す。浩りければ陶濬が勢も戰はずして破れ、次の日陸路の寄手鎭東將軍司馬伷、建威將軍王戎等ことごとく來り集まり、翌日杜預又來り、大に諸軍を賞し、倉を啓て百姓を賑しければ、吳の軍民みな安堵して平定せり。吳の建平の太守吳彥は、城を守ていかに攻れとも落ざりしが、國の滅びたるを聞て城を出て降りしかば、王濬その忠義を感じ天子に奏して金城の太守とす。晉帝吳の滅びたる由を聞て群臣と賀をなし、盃を擧て宣ひけるは、此みな羊祜が力なり、惜らくは直に吳の滅びたるを見せしめざることをとて、淚を流し玉へば、群臣みな默然たり。吳の驃騎將軍孫秀は國の滅びたるを見て、南を望んで大に哭き、昔し討逆將軍孫堅年壯なる時、纔なる校尉の職より此國を開て王業を創

して皆降る、この禍の興は、佞人岑昏が讒暴なるを以て、大將も士卒も怨を含故也、ねがはくは早く岑昏を殺し玉へ、某等命を弃て敵に當らん。孫皓が曰、量るに岑昏ほどの內官いかでか國を亂ること有ん。諸人みな曰、陛下ちか比蜀の黃皓を見玉はずや。孫皓が曰、しからば此者の一命を助け官を剝で奴となさん。諸人耳にも聞入ず宮中に打入て岑昏を挽裂、みな其肉を一口づつ食て快かなと喜ぶ。此に於て大將陶濬等申けるは、臣ねがはくは舟手の勢二萬人を卒し大船に乘て敵を破らん。孫皓しかるべしとて御林の軍を調ければ、陶濬これを卒して前將軍張象と二手に分れて水に泝るに、俄に西北の風吹て旌を立べき樣もなく、逆浪天を拍て、見るも膽冷じかりければ、數百艘の兵船みな行方なく吹散されて、只張象が舟ばかり數十人にて殘りけり。晉の大將王濬は兵船を連ね帆を張て進みけるが、三山を過る所に波あらく風烈して、水手楫取あわて騷ぎ、この體にては渡り難し、暫く風の靜るを待べしと議しければ、王濬劍を拔て怒り、われ今日の前に石頭城を取んとす、如何に惡ければとて追手の風に船を留ることやある、命に背ば斬て弃んと云て、了に鼓躁して大に進む。吳の勢これを見て叶じとや思ひけん、いまだ戰はざる先に前將軍張象盔を卸で降人となる。王濬對面して申けるは、汝まことに御方とならば先手に進んで城を取れ。張象乃ち手勢を引て眞先に進み、直ちに石頭城に行て門を

取んと斬て蒐りけるを、張悌力を奮て散々に戰ひ、了に亂軍の中に死ければ、沈瑩も周旨に討れて、殘る勢は四方に散て落ゆきけり。牛渚すでに破れければ、王濬洛陽へ人を上せて捷軍を奏聞するに、晉帝限なく喜び玉ふ。賈充申けるは、吳いまだ盡く平ぐべからず、殊更暑氣の甚しき時に及て、中國の勢深く吳の境に入ば必ず疫疾を發すべし、暫く軍を收時を待て討しめ玉へ。滿座の朝臣みな賈充が申ところ萬全の計なりと奏しけるを、張華只一人爭ひ諫て申けるは、今官軍すでに敵の巢に深々と入て、吳の軍民こと〴〵く膽を冷す、孫皓を擒にせんこと一月の内を出べからず、陛下もし固く御心を決し玉はずんば徒に前功を廢すべし。賈充怒て申けるは、御邊天の時を省ず地の利を審にせず、妄に兵を進めて天下の人馬を苦しめんとす、首を斬ても猒ことなし。晉帝笑て宣ひけるは、汝何とて怒を發する、朕が心も張華に同じ、何ぞ爭ふことを用ん。時に鎭南將軍杜預表を上ると奏しければ、近臣ひらき讀に、早く兵を進めて吳を滅さん、此時を失ふべからずと書たり。晉帝いよ〳〵御心を決し、勅を下して速に根を絕べき由を告玉ひしかば、杜預、王濬大に喜び、水陸共に進んで其勢ひ風雷の如し。吳王孫皓この由を聞て震ひ怖れ、今諸方の攻口みな破れて諸大將こと〴〵く討死せり、如何せんと哭きければ、殿中護衛の勢數百人頭を叩て申けるは、北國の敵軍深く國の境に入て御方の軍民戰ず

長さ十丈あまりの大火炬を造りて油を灌ぎ、鎖を張たる毎〻所に夥しく投下しけるに、水面の鐵索こと〴〵く斷て此より路ひらけしかば、王濬が大軍直ちに進て、向ふところ勝ずと云ことなし。吳の丞相張悌は牛渚を守りて居たりしが、敵すでに攻近付と聞て、先沈瑩、諸葛靚二人を出して戰はしむ。沈瑩乃ち諸葛靚に向て申けるは、諸方の攻口みな破れて敵これまで攻入たり、只よく力を盡して此要害にて支ふべし、若こゝを去て江を渡り、不幸にして打負る時は國必ず滅ぶべし。諸葛靚が曰、これ實に某が心に叶へりとて、兵の手配をする所に早馬きたりて、晉の舟手の勢流に順て攻下る、勢ひ甚だ大にして、御方こと〴〵く破れたりと告ければ、二人色を失ひ急に馳囘りて丞相張悌に見え、國すでに危し早く晉に降らんと云ければ、張悌申けるは、國家まさに滅んとして賢愚これを共にす、今もし君臣こと〴〵く降らば一人も國の爲に死する者あらじ、是大なる羞ならずや。諸葛靚が曰、存亡は自ら天數なり、丞相一人いかに思し召とも甲斐あるまじ、何故に自ら死を求玉へるや。張悌淚を流して曰、今日は是わが死する日なり、我幼より此國の祿を食ふ、位すでに丞相に昇れり、國滅ば吾も共に亡ん、焉ぞ死を惜んで不義の名を取んやと云ければ、諸葛靚も淚を推へて去にけり。張悌乃ち沈瑩を伴ひ討殘されたる纔の勢を引て進みければ、晉の大軍四方よりおつ取こめ、周旨、張尙など云大將われ討

伍延は諸方の攻口やぶれたるを見て、江陵城を弃て走りけるが、晉の伏勢に生取れて了に首を刎られけり。此に依て江陵城破れければ、浣湘を打通て逕に黄州へ進むに手にさはる者もなく、郡守縣官いまだ戰はざる先に風を望んで降人となる。杜預百姓を安んじて秋毫も犯ことなく、武昌城に攻かゝれば、一支もせで皆門を開て降を乞。これより軍威四方に振て吹風の草を靡が如くなりければ、建業を取の計を議するに、平南將軍胡奮が曰、吳は百年の仇、根深して盡くは服すべからず、殊に春水漲り來て久しく留ることを得がたし、暫く軍を收め冬に至て又進み玉へ。杜預が曰、昔し樂毅は濟西の一戰に齊の國の强を破る、今御方威風大に振て勢ひ破竹の如し、數節の後みな迎レ刃而解無レ有ニ著レ手處一とて、大軍を驅て建業に攻かゝる。舟手の大將龍驤將軍王濬は、數萬の兵船を連ね流に順て下りけるに、吳の勢これを防べき樣なく降人に出る者數を知ず。時に先手より報じて、吳の勢水中に鐵の錐を立、長き鎖を張て待蒐たり、輕々しく進まば御方の船ことごとく破れんと告ければ、王濬あざ笑ひ、何ほどのことか有んとて大なる筏を多く造らせ、草を束て人形をこしらへて弓箭兵杖を持せて夥しく筏にのせ、水に順て眞先に流し懸たりければ、吳の勢まことの人なりと思ひ我先にと逃わしる。水は急なり、水中に立たる錐ことごとく筏に懸り引取て流れければ、又水を得たる兵を擇で筏にのせ、

はじ。孫皓大に喜び急ぎ國中の鍛冶を江の邊に集めて、日夜を分たず造らせて萬全の計なりとぞ思ひける。この時晋の大都督杜預は已に江陵に出て、大將周旨を召て計を授け、汝は舟手の勢八百人を率して密に小舟に乘て江を渡り、夜に紛て樂郷を襲ひ山林の間に多く旗を立て、晝は鐵砲を鳴し鼓を打、夜は諸處に篝火を燒烟を擧て、敵の心を疑はしめよと云ければ、周旨ひそかに江を渡して巴山と云ところに埋伏す。次の日杜預水陸より進みければ、吳の大將伍延兵を引て陸路に支へ、陸景舟手を司て先手の大將孫歆一番に進み來る。杜預暫く戰うて詐て退きけるを、孫歆勝に乘て二十里あまり追蒐ければ、忽ち一聲の鐵砲を鳴して晋の伏勢四方より起る。吳の勢大に亂れて散々に走りけるを、杜預勢ひに乘て敵を討こと數を知ず。孫歆のこり少に成て巴山の城に逃入ければ、晋の大將周旨八百の兵を引て、亂れたる吳の勢に雜り城中に入て火を付たり。孫歆大に驚き、この處に敵あるは飛て江を渡りたるかと云て、門を開て出んとするを、周旨追蒐て一刀に切て落す。吳の大將陸景は南の岸に兵船を調へ、遙に巴山に火の起るを見て、御方の勝負心元なしと伺ふ所に、忽然として山際の松陰より、晋の鎭南將軍杜預と書たる旗を指出しければ、此は如何にと膽を冷し、逃れて岸に上らんとするを、晋の大將張尙馬を飛して追付、つひに首を取て指擧たれば、殘る勢は十方に散亂せり。吳の車騎將軍

將軍王濬、廣武將軍唐彬二人二十萬の勢にて攻下る。又賈充を都督として黄鉞を借、冠南將軍楊濟を副都督として、共に襄陽に陣を取て諸路の軍馬を總督さしむ。

〔王濬計取石頭城〕

去ほどに晉の大軍水陸より攻下る由呉の國に聞えければ、孫皓大に驚き群臣を集めて計を議す。丞相張悌申けるは、車騎將軍伍延を都督として江陵を守らせ、驃騎將軍孫歆を大將として夏口等を守らせ、臣自ら左將軍沈瑩、右將軍諸葛靚を引具し、十萬餘騎にて牛渚を固め、諸方の敵を防べし。孫皓これに從ひ手配を定めて向はしめ、朝を退て後宮に入ければ、佞人岑昏問て曰、陛下顏色いかなれば憂しき。孫皓が曰、晉の大軍水陸より攻きたる、陸路の敵は已に要害に支へて防しむるに、王濬と云者數萬の兵船を調て流に順て攻下る、その鋒甚だ鋭なり、此を防べき計なし。岑昏が曰、臣一つの計あり、王濬が船を盡く微塵になさん。孫皓が曰、汝いかなる良計かある。岑昏が曰、元より江南の地は鐵多し、今鐵を以て長さ數百丈、重さ二三十斤の鎖を造せて江の面に之を張、又長さ一丈あまりの錐を造りて水の底にひしと立置ば、敵の船順風に乘じて來らんに錐に當て盡く破ん、又鎖に支へられて飛でも大江を渡り候

晉帝大に喜び、王濬が論よく羊祜が計に合へり、朕いま意を決して呉を伐んと宣ひけるを、侍中王渾諫て申けるは、呉主孫皓つねに洛陽を攻んとする心ありて、軍勢を調練して境にあり、今これを伐んとせば彼が望ところに落ん、もし一年も過ば呉の勢みな疲れ苦まん、其時虚に乘て伐ば一擧して功を成べし。晉帝これに因て又止まり玉ひければ、鎭南大將軍杜預荊州より表を上て、早く時に乘じて呉を伐べき由を奏す。晉帝これを見て心いまだ決せず、後宮に入て祕書丞張華と碁を圍玉ふ時に、近臣奏して邊庭より表を上ると云ければ、晉帝ひらき見玉ふに又杜預が表なり。今呉を伐の用意こと〴〵く備りて、若中途にして閣ば孫皓必ず要害を構て守るべし、然る時は江上の險阻いかゞして渡ることを得ん、延引せば叶ふまじき由を載たり。晉帝いかゞせんと案じ煩ひ玉ひければ、張華座を起て碁盤を推のけ謹んで申けるは、陛下聖武にして國豐に兵强し、今呉の孫皓淫虐にして賢人を殺害し、國すでに滅んとす、戰はずして平ぐべし、陛下御心を決して伐玉へ。晉帝限なく喜び、卿が言明に利害を知、朕なんの疑か有んとて朝廷に出て事を議し、鎭南大將軍杜預を大都督として十萬餘騎にて江陵より進ませ、鎭東大將軍司馬伷を滁中より出し、征東大將軍王渾を油江より進ませ、建威將軍王戎を武昌より進ませ、平南將軍胡奮を夏口より出し、皆五萬餘騎にて杜預が下知を聞しむ。又舟手の大將には、龍驤

擇玉へ。晋帝これを稱謝して王者の輦を許して家に歸しむ。其年の十一月に羊祜が病すでに危なりければ、晋帝自ら其家に行幸して病を問玉ふ。羊祜涙を流して臣萬死も陛下の恩に報ずること能はずと云ければ、晋帝も涙を流して宣く、朕深く卿が呉を伐計を用ざるを恨む、誰か卿が志を繼で呉を伐べき。羊祜が曰、臣いま死せんとす、愚誠を盡さずんば有べからず、右將軍杜預は實に重く用ふべき人なり、陛下もし呉を伐玉はば必ずこの人を大將とし玉へと、云も果ずして息絶たり。晋帝聲を放て大に哭き、輦に乘て宮中に囘り玉へば、文武の百官もことごとく涙を流す。晋帝勅を下して葬を厚くし、太傅鉅平侯の封を贈て自ら之を祭玉ひ、乃ち杜預を鎭南大將軍として荆州を守らせらる。南國の百姓羊祜が死したるを傳へ聞て皆市を罷て哭き哀み、境を守る呉の勢もことごとく涙を流す。襄陽の人昔し羊祜が常に峴山に遊びしことを思うて、山の上に廟を立四時これを祭けり。往來の人その廟に立たる碑の文を讀で、涙を流さずと云こと無りしかば、世の人これを墮涙の碑とぞ號しける。益州の刺史王濬呉の滅んとするを見て、晋帝に表を上て伐んことを奏す。其表に曰、

孫皓荒淫凶逆、宜㆓速征伐㆒。若一旦皓死更立㆓賢主㆒、則強敵也。臣某作㆑船七年、日有㆓朽敗㆒。臣年七十、死亡無㆑日。三者一乖、則難㆑圖矣。願陛下無㆑失㆓事機㆒。

壞則上下震蕩。雖有智者不能爲呉謀矣。呉緣江爲國、東西數千里、所敵者無有寧息。孫皓恣情任意、與下多忌、將疑于朝、士困于野、無有保世之計一定之心、平常之日猶懷去就、兵臨之際必有應者、終不能齊力致死已可知也。其俗急速不可持久、弓弩戟楯不如中國、唯有水戰、是其所便。一入其境、則長江非復所保、還趣城池、去長入短、非我敵也。官軍縣進、人有致死之志、呉人內顧各有離散之心、如此軍不踰時可必克矣。

晉帝見了て大に喜び、諸國の軍勢を起して呉を伐んと宣ひけるを、賈充、荀勗等大に諫て、いまだ伐べからずと云ければ晉帝又止り玉ふ。羊祜これを聞て長嘆し、天下の內には必ず意に協はざること十の內に七八あり、今天の與るを取ず後必ず悔あらんとぞ申ける。其のち咸寧四年に至て羊祜すでに年老て、故鄕に回りて病を養んことを請ければ、晉帝問て曰、卿いま邦を安ずるの計あらば朕に敎よ。羊祜答て曰、呉主孫皓惡虐すでに極れり、國中これを怨で反ずと云ものなし、今もし攻ば戰はずして呉を平げん、萬一孫皓死して別に賢君を立ば、如何して呉を取ことを得ん、今の時を失ふべからず。晉帝げにもと悟て、卿わが爲に大將と成て呉を伐んやと問玉へば、羊祜が曰、臣いま年老病發て此職を領すること能はず、陛下よく智勇の人を

市に斬れ或は面の皮を剝眼を鑿なんどして人を殺し、位に卽てより十餘年の間に忠臣四十餘人を誅し、常に鎧うたる精兵五萬を從へ、岑昏と云る佞人を愛して萬づこの者の心に任す。羊祜は荊州の境を守て陸抗が官を貶されたる由を聞、いまこそ吳の滅べき時なれとて、表を上て晉帝に奏す。晉帝ひらき見玉ふに、其表に曰、

先帝西平巴蜀、南和吳會、庶幾海內以得休息。而吳復背信、使邊事興。夫期運雖天所授、其功必因人而成。不一大擧掃滅、則兵役無時得息也。蜀平之時天下皆謂、吳當幷亡、自是以來十有三年矣。夫謀之雖多、決之欲獨。凡以險阻得全者、謂其勢均力敵耳。若輕重不齊、强弱異勢、雖有險阻不可保也。蜀之爲國非不險也、一夫荷戟萬夫莫當、進兵之日曾無藩籬之限、乘勝席捲、逕至成都、漢中諸臣皆鳥棲而不敢出、非無戰心、誠力不相抗也。及劉禪請降、諸營堡索然俱散。今江淮之險不如劍閣、孫皓之暴過於劉禪、吳人之困甚於巴蜀、而大晉兵力盛於往時。不于此際平一四海、而更阻兵相守、使天下困于征伐、經歷盛衰不可長久也。今若引梁益之兵水陸並下、荊州之衆進臨江陵、平南豫州直指夏口、徐揚青兗並會秣陵、以一隅之吳當天下之衆、勢分形散、所備皆急。巴漢奇兵出其空虛、一處傾

らんと云ければ、羊祜笑て曰、陸抗は毒を用ふる大將にあらず何の疑ふこと有んとて、竟に盡く飲ければ諸人みな大に驚く。此より時々使を通じて物を送りけるが、或日陸抗が病める由を聞、呉の使きたりける時羊祜對面して申けるは、汝が主の病も推量するに我と同じかるべし、この藥を携へ囘りて陸將軍に飲しめよと云ければ、使藥を携へ來て陸抗に獻る。呉の諸將怪をなして、羊祜は敵の大將なり、此藥必ず毒あらんと云ければ、陸抗笑て曰、豈有㆓酖㆑人羊叔子㆒哉、必ず疑ふこと勿とて、了に藥を飲ければ次の日病果して平愈せり。呉の諸將喜て拜賀しければ陸抗が曰、彼は專ら德を施し我は專ら暴を爲、これ戰はずして自然に服す、不㆑如よく疆を守り、纔の小利を貪て辱めを取べからずとて、固く守て共に戰ふこと無りけり。呉主孫皓これを聞て、戰はずして徒に日を送ること甚だ然るべからず、早々に攻かゝれと催促しければ、陸抗まづ使を囘し、今戰ては却て禍を取ん、國を治め本を強し、時を待て戰ふべしと表を書て申けるに、孫皓大に怒り、さればこそ陸抗陣中にて常に敵と內通する由を聞しが、今果して此の如とて陸抗を召囘して官を司馬に貶し、左將軍孫冀を遣して荆州を攻させけれども、群臣怖て諫る者なし。孫皓いよ〳〵惡を長じて建衡と改元し、三年の後又鳳皇元年と改め、妄に人民を苦めければ上下怨ずと云者なし。丞相萬彧、將軍留平、大司農樓玄三人これを諫て、盡く

生捕、師を全して國に回りし大將なり、我これに及ぶこと能はず、今孫皓よく人を用ふ、陸抗が在ん間は我等只よく〳〵守て出ること無るべし、其國中に内變あるを伺ひ勢ひに乘て破るべし、もし時を審にせずして輕々しく進まば敗を取の道なりと云ければ、諸人拜服して境を守り、出て戰ふこと無りけり。羊祜ある日諸將と共に獵に出けるが、呉の陸抗も同く出たりと聞て手下の諸軍をよく〳〵戒め、晉の地に獵して呉の境へ一歩も入しめざりければ、陸抗これを見て嘆じて曰、羊將軍の勢紀律甚だ正し、犯べからずと互に境を越ず、終日獵暮して本陣へぞ回りける。羊祜わが陣に回り、今日の獵に得たる禽獸を點檢し、もし呉の獵場より疵を被り來て晉の兵に取れたる獸あれば、皆呉の陣に送り返さしむ。陸抗その使に對面し、汝が主の羊將軍酒を好玉ふかと問ければ、使答て曰、よき酒あれば必ず飲候。陸抗笑て曰、われに美酒あり、汝これを羊將軍に獻り、此は陸抗が手づから造る酒なり、一樽を送りて昨日獵に出たる情を表すと申し候へと云ければ、使酒を持回りけり。呉の諸將これを怪で何ゆゑに敵に酒を送り玉ふと問ければ、陸抗笑て、彼すでに德を施す、我なんぞ酬ざらんとぞ申ける。羊祜が使晉の陣に回り、陸抗が云し言を告て酒を獻りければ、羊祜笑て曰、彼も亦わが酒を好ことを知りたるかとて、樽を傾けて飲んとす。大將陳元と云もの之を諫め、敵の方より送れる物必ず毒あ

火を滅んとするが如く、必ず自ら焚ん、陛下よく察し玉へ。孫皓怒て曰、朕時に乗じて天下を定めんとす、汝いかんぞ浩る不吉の言を吐出せる、若先朝の舊臣にあらずんば、首を斬て法を正すべしとて、門外に追立ければ華覈大に嘆息し、可レ惜錦繡江山不レ久屬ニ他人ニと云て、此より隱遁して世に出ず。吳主孫皓つひに群臣の諫を用ひず、鎭東將軍陸抗を大將として川口より荊州襄陽を窺はしむ。晉帝この由を聞て百官を集めて宣ひけるは、先帝蜀を平げ玉ひし時、鄧艾流に順て吳を攻んと議す、然れども先帝これを用ひず、彼が惡虐を積で自滅する時、一擧に事を濟んと云玉へり、今却て荊州を侵す、如何して破るべき。司空賈充が曰、吳主孫皓無道にして政を理めず、上下ことごとく怨反く、陛下今荊州の都督羊祜に命じて之を防しめ、吳の國に内變あるを待て、勢ひに乗て攻玉はば一鼓して定らん。晉帝これに從ひ急ぎ勅命を傳て羊祜に敵を防せらる。羊祜字は叔子もと泰山南城の人なり。此時襄陽を守り軍民その德に懷く。常に軍中に在ても輕き裘を披て甲を著ず、護衞の兵も纔數十人を用ひければ、上下みな服せずと云者なし。此時勅を受て軍馬を調へければ諸將みな曰、いま敵の樣を窺に吳の勢みな怠り荒で備なし、一攻せめて打破らん。羊祜笑て曰、汝等みな吳の陸抗を尋常の人なりと思ふか、此人智深く計多し、先年吳王の命を受て西陵を攻けるが、歩闡を誅して其手の猛將數十人を

昭明宮を造て國の費民の哭き甚しかりければ、陸凱上疏して諫て曰、

今無災而民命盡、無爲而國財空。臣竊痛之。昔漢室既衰、三家鼎立、今曹劉失道、皆爲晉有、此目前之明驗也。臣愚但爲陛下惜國家耳。武昌土地險瘠、非王者之都。且童謠曰、寧飲建康水、不食武昌魚、寧還建康死、不止武昌居、此足明民心與天意也。今國無一年之蓄、有露根之漸、官吏爲苛擾、莫之或恤。太帝時後宮不滿百、景帝以來乃有千數、此耗財之甚者也。又左右皆非其人、羣黨相挾、害忠隱賢、此皆蠹政病民者也。願陛下省百役罷苛擾、科出宮女、淸選百官、則天悅民附、而國安矣。

孫皓これを見て心の内に怒りけれども、陸凱は先朝の舊臣なるを以て敢て色には顯さず。ある時卜者尙廣と云ものを召て、天下の吉凶を占はせければ、尙廣が曰、陛下の兆甚だ吉也、庚子の歳青蓋必ず洛陽に入玉はん。孫皓大に喜び中書丞華覈を召て申けるは、先帝の時に喃江の邊に多くの陣屋を造て、丁奉に之を守らしめたり、朕いま大軍を起して洛陽を攻取、天下を一統して劉禪が爲に讎を報ぜんと思ふは如何に。華覈諫て曰、臣きく成都滅て蜀主降り、司馬炎魏を奪て新に業を立たりと、必ず天下の大軍を興して吳を取の意あらん、陛下只德を修て民の心を懷け、要害を固く守りて敵を防の備を成玉へ、今もし輕々しく兵を起さば、麻の衣を披て

毎日朝を設て呉を伐の計を相議しける。大禮こと〴〵く定りければ、帝司馬懿、その子景帝司馬師、その弟文帝司馬昭なり。

○羊祜病中薦杜預

呉の永安七年、呉主孫休病に臥て已に危くなりければ、丞相濮陽興に太子孫𩅦を託して忽ちに命終れり。この時蜀の滅びたるを聞て、呉の軍民震ひ畏れける折節なれば、孫𩅦年幼して國を治ること能はじとて、左典軍萬彧、左將軍張布共に朱太后に奏して、烏程侯孫皓を立て君とすべき由を申す。朱太后この由を聞て、我は年老たる寡婦なり、社稷の大事は朝廷の大臣よろしく議せよと云ければ、濮陽興つひに孫皓を迎て君とす。孫皓字は元宗、孫權が太子孫和が子なり。秋七月皇帝の位に即て元興元年と改め、孫𩅦を豫章王に封じ、父孫和を文帝と謚し丁奉を大司馬に封じ、次の年又改元して甘露と號す。呉の群臣みな孫皓を賢才なりとて天子としけるが、案に相違して位を得てより日夜酒色に溺れ、悪虐日々に長じて民の禍をなしければ、丞相濮陽興、左將軍張布二人これを諫て却て三族を滅さる。浩りければ群臣いよ〳〵怖て再び諫る者なく、孫皓心の儘に凶暴を發して、又寶鼎元年と改め、陸凱、萬彧を左右の丞相に任じ、

べからず、只晉王の心に逆はず、漢の獻帝の例を帶て受禪臺を造り、明に大禮を具て位を晉王に禪り玉へ、然る時は上天心に從ひ下人情に合うて、陛下無虞の禍を免れ玉ふべし。魏主曹奐已ことを得ずして之に從ひ、賈充に命じて受禪臺を築かせ、十二月甲子の日を擇で文武の百官を盡く集め、傳國の玉璽を捧て司馬炎に禪りければ、司馬炎壇に上て大禮を具へ、曹奐を臺より下し公服を披て臣下の列に著しむ。時に賈充諸人に告て申けるは、漢の建安二十五年に魏、漢の禪を受て今に至るまで四十五年を經たり、天の祿すでに終りて天命又晉にあり、司馬氏の功德天地に彌綸し四海に溢る、正に魏の統を繼で帝位に即べし、今曹奐を封じて陳留王とす、行て金墉城を守り都に來ること勿れと云ければ、曹奐涙を流して出去れり。司馬孚これを見て大に哭き、曹奐が前に拜伏して、臣が死する日まことに大魏の純臣なりと云ければ、司馬炎その忠を憐で平王太宰に封じけれども、司馬孚さらに受ず。この日文武の百官みな萬歲を呼で再拜し、大禮すでに畢りければ、司馬炎國を大晉と號して太始元年と改め、天下に大赦を行て諫を納る官を置。これより大に治まり萬民みな安堵の思を成にける。乃ち祖父司馬懿を宣帝と諡し、伯父司馬師を景帝とし、父司馬昭を文帝とし、七廟を建て先祖を耀す。七廟は漢の征西將軍司馬鈞、その子豫章の太守司馬亮、その子潁州の太守司馬儁、その子京兆の尹司馬防、その子宣

充再拜して曰、主上まさに曹丕が漢の禪を受たる例に效ひ、復受禪臺を造て明に魏の統を繼、皇帝の位に卽て天下の人に知しめ玉へ。司馬炎これに從ひ次の日劍を佩て殿に上る。魏主曹奐いそぎ床を下て迎へければ、司馬炎高坐して問て曰、魏の天下は誰力ぞ。曹奐答て曰、みな晉王父祖の賜也。司馬炎笑て曰、われ陛下を見るに、文は道を論ずること能はず、武は邦を經ること能はず、何ぞ才德ある人を擇で位を禪り玉はざる。曹奐大に驚て口を開こと能はざりければ、傍に在ける黃門侍郎張節怒て申けるは、晉王の言甚だ差へり、昔し魏の武帝東西に蕩除し南北に征討して、容易に得玉へる天下にあらず、今上の天皇德ありて罪なし、何ぞ他人に讓るべき。司馬炎勃然として曰、この天下は元より漢の天下なり、曹操丞相と成て妄に逆威を專にし、自ら魏王と稱してつひに漢の天下を奪へり、我父祖三世魏を扶て、天下を一統したるは曹氏の力にあらず、皆これ司馬氏の力なり、四海こと〲く之を知、われ何ぞ魏の天下を受ざるべき。張節大音あげて、然る時は汝まことに國を奪ふ逆賊なりと呼はりければ、司馬炎いよいよ怒り、張節を引出して首を刎させ、我漢の爲に本を報ず、何の不可なること有んと云ければ、曹奐淚を流して哀み告ると云ども、司馬炎急に起て出去れり。曹奐左右を顧て、事すでに逼れり、如何せんと問ければ、賈充が曰、魏の天數すでに盡たり、陛下いかに思し召とも今は叶ふ

是晉王の奇瑞に應ぜり、早く十二旒の冠を披て、天子の位に卽玉へと勸ければ、司馬昭大に喜び退て宮中へ入けるが、卒に中風の疾を受て口を開くこと能はず。太尉王祥、司徒何曾、司馬荀顗等を召て、手を以て司馬炎を指さし、忽ちに命終れり。時に八月辛卯の日なり。何曾が曰、天下の大事みな晉王にありとて、司馬炎を扶けて晉王の位に上せ、葬の禮畢て父を文王と謚す。司馬炎父の業を繼で、何曾を晉の丞相とし、司馬望を司徒とし、石苞を驃騎將軍とし、陳騫を車騎將軍とす。或日賈充、裴秀二人を召て申けるは、昔曹操、もし天命在レ吾 吾其爲二周文王一と云へりと聞しが、此事まことにて有か。賈充答て曰、曹操世々漢の祿を食て、人の反逆の賊なりと呼んことを怖て此言を出せり、果して其子曹丕が時に了に漢の天下を奪へり。司馬炎が曰、わが父を曹操に比せば如何ん。賈充が曰、先君魏を助て已に三世、なんぞ曹操と同じからん。司馬炎問て曰、いかなる故ぞ。賈充が曰、曹操が功の大なる、華夏を蓋と申せども、下民その威を畏て其德に懷ず、曹丕帝位に卽て徭役きはめて重く、人民四方に驅馳して片時も安からざりしに、宣王、景王しきりに大功を立て恩德を施し玉ひしゆゑ、天下みな魏に心を服せり、文王又魏の爲に危を扶け暴を除き玉ひて功萬世を蓋ふ、此に依て晉王の位を得玉へり、豈曹操と日を同して語らんや。司馬炎よろこんで曰、曹丕だも漢の統を繼、われ何ぞ魏の統を繼ざらん。賈

心に委すこと無。これに依て群臣こと〴〵く司馬昭を推て晉王と稱しければ、司馬昭乃ち父の司馬懿を諡して宣王と號し、兄の司馬師を景王と號す。元來女房王氏は王肅が女なり。二人の子を生で兄を司馬炎と申す。人物魁偉にして垂たる髮地に及び左右の手膝を過。其聰明英武なる、方に萬人の上に出たり。弟を司馬攸と申す。生れ付溫和にして恭儉孝悌なり。司馬昭つねに司馬攸を愛して兄司馬師が家を繼しめ、平生人に語りて天下は元わが兄の天下なりと云しが、晉王と成に及んで、已に兄の家を繼しめたれば、司馬攸を以て世子に立んとす。山濤諫て申けるは、兄を廢て弟を立るは禮に違て不吉なり。賈充、何曾、裴秀等も深く諫て申けるは、長子司馬炎は神武英才まことに超世の人表あり、天下みな之を望む、人臣の相にあらず。司馬昭なほ心決せずして世子いまだ定らざりければ、太尉王祥、司空荀顗諫て曰、古より兄を廢弟を立て國を滅もの數を知ず、必ず深く慮り玉へ。司馬昭これに因て司馬炎を立て世子とし、中撫軍の職に任ず。群臣みな申けるは、近ごろ襄武縣に晝の午の刻天より怪き人下り、身の長二丈あまりにして脚跡を見れば三尺二寸、髮は雪の如にして長き髯蒼く、黃なる單の衣を披て奇げなる頭巾を戴き、藜の杖を攜へて、我は乃ち民の王なり、今來て汝等に告知す、天下換レ主立所に太平を見るべきぞと云て、三日の間市の邊を往來しけるが、忽然として行方なく成たり、

樂女

樂女
樂女

の樂を奏せしむ。蜀の諸臣これを聞て盡く涙を流しけるに、劉禪は笑ひ嬉で酒を飲。酒宴半に及て、司馬昭又ひそかに樂人に命じて蜀の樂を奏せしむるに、蜀の諸臣いよ〳〵涙に咽で哀み哭く。只劉禪は少も哀める色なく笑ひ嬉むこと初の如し。司馬昭蜀の諸臣に向て申けるは、人の無情なるは箇程にも有ものか、假令孔明が再び來るとも扶け救こと能はじ、況んや姜維が分として爭か此愚人を扶くべきとて、又劉禪に問て曰、汝心に本國を戀しく思ふか。劉禪答て曰、この間興ある酒宴に遭て某なんぞ本國を慕はん。須臾ありて劉禪坐席を起衣を更んとて出ければ、郤正も從ひ來り、何ゆゑに本國を慕ずと云玉ふぞ、倘重ねて問玉はば必ず御涙を流して、某が父の墓遠く蜀の國にあり、此ゆゑに西を望んで心悲み、日夜思はずと云こと候はずと答へ玉へ、然る時は司馬公必ず宥して蜀に回し玉はんと私語ければ、劉禪これを覺て又座席に出、酒酣にして少し醉ける時、司馬昭問て申けるは、汝が心本國に回らんと思へるか。劉禪乃ち郤正が教たる言を陳て泣んとすれども涙出ず、頻に目を塞で顏を皺めければ司馬昭が曰、それは郤正が教たる言なるか。劉禪驚て目を開き、眞に尊命の如しと答ければ、滿座みな大に笑ふ。司馬昭これより劉禪が詐なく愚痴なるを知て、更に疑ふこと無りけり。斯りければ司馬昭が權柄天下に震て靡ぬ草木もなく、魏主曹奐その名は天子と云ども、皆司馬昭が料ひを受て一つも

ず。諸人その忠義を感じて皆牙を嚙で相待ところに、日を經て人回り、天子已に降り玉ひしかば洛陽へ送り上せて魏王に見えしむと告ければ、霍戈大に怒り兵を起して追蒐んと議す。諸人諫て曰、蜀すでに滅て君とすべき人なし、不レ如魏に降りて身を保ん。霍戈已ことを得ずしてこれに從ひ、洛陽へ表を上せて魏に降らんことを望む。此時劉禪すでに洛陽に上て魏王曹奐に見え、殿階の下に拜伏しければ、司馬昭責て申けるは、汝荒淫無道にして國の政を亂る、其罪誅せずんば叶まじ。劉禪怖れ戰き顏色土の如くなりければ、魏の群臣みな曰、彼まことに罪ありと申せども幸に早く降れり、その命ばかりを扶け玉へ。時に近臣奏して蜀の建寧を守る霍戈と云もの表を上ると報じければ、乃ち披き見るに、其表に曰、

漢建寧太守霍戈、率二六部將守一上表曰、臣聞、人生二於三一、事レ之如レ一、惟難所レ在則致二其命一。今臣國敗主附、守レ死無レ所、是以委レ質、不二敢有一レ貳。

司馬昭見了て大に嘆じ、蜀に此の如き忠義の人ありとて、霍戈を舊の官に復し、劉禪が罪を宥して安樂公に封じ、住宅を與て絹一萬疋奴婢百人を賜ひ、其子劉瑤並に樊建、譙周、郤正等を盡く侯爵に封じ、黄皓が讒佞にして國を亂りしを憎で、了に市に出して首を斬しむ。次の日劉禪自ら司馬昭が家に行て昨日の恩を謝しければ、司馬昭酒宴を設て重く持成、樂人に命じて魏國

（司馬炎築二受禪臺一）

魏主曹奐景元五年を改て咸熙と號す。春三月呉の大將軍丁奉、蜀を救んとて五萬の勢にて攻上りけるが、蜀すでに滅て劉禪魏に降りぬと聞ければ、半途より引回す。これを聞て呉の中書丞華覈と云もの呉主孫休に申けるは、呉と蜀とは唇齒の國なり、蜀すでに破れて劉禪降れり、臣これを聞て心の内甚だ安からず、陛下も定めて哀み悼玉はん、推量するに司馬昭必ず魏の天下を奪て後、大軍を起して呉を攻ん、陛下諸處に守りの勢を添て深く用心し玉ふべし。孫休げにもとて、陸遜が子陸抗を鎭東大將軍として川口を守らせ、左將軍孫異に南徐の口を守らせ、江の邊に數百箇所の陣屋を造りて大將軍丁奉に守らしめ、用心きびしくぞ見えたりける。爰に蜀の建寧の太守霍戈と云もの、建寧の城に在て成都の破れたる由を聞、つひに素服して西の方を望み三日の間哭きければ、手下の大將きたり告て曰、いま成都破れて天子已に降人と成玉へり、此は誰爲に城を守り玉ふぞ、速に魏に降り玉へ。霍戈涙を流して申けるは、遠路相隔て主上の存亡いまだ知ず、魏もし降參を受て主上を重んぜば我等もこと〴〵く降るべし、萬一主上を輕んじて辱めば、我この城を枕にして討死せん、先成都の樣を委く聞までは此城を出べから

途にて鍾會、姜維が滅びたるを聞ば、此に來て我を殺し、又謀反を成んとするの心起ん、追手を遣して斬て弃べし。護軍田續が曰、鄧艾さきに江油城を攻る時、罪なきに某を斬んとせり、某ねがはくは追掛て斬殘さん。衛瓘これを許し五百餘騎を授けしかば、田續大に喜び晝夜を分たず馳てゆく。此時鄧艾父子は成都に不慮の事ありて、鍾會、姜維すでに滅たりと云をきゝ、取って回して綿竹に住り居たる所に、田續飛が如くに馳きたりければ、昔し我手下に屬せし者なれば、我を迎ん爲に來れるならんと思、近く成て問んとするを、田續一刀に斬殺す。鄧忠これを見て劍を拔て戰ひけるが、大勢に圍れて了に一處にて討れにけり。此を名付て姜維が一計よく三賢を害すと云傳たり。その後蜀の軍民大に亂れて日夜上を下へと騷動し、魏の勢四方に散て狼藉すること休ざりしかば、左將軍張翼も魏の大將師纂に討れ、劉禪の太子劉璿、壽亭侯關彝等も亂軍の中に戰ひ死す。十日あまりを經て都より賈充來り、榜を出して民を安んじければ、此より少し靜り、司馬昭が命を受て衛瓘を留て成都を守らせ、賈充は降帝劉禪を引て洛陽へ上るに、蜀の舊臣尚書令樊建、侍中張紹、光祿大夫譙周、秘書郎郤正、殿中督張通ばかり相從ひ、廖化、董厥二人は虚病して從はず、了に憂て嘆き死にしたるとぞ聞えし。

來て、是は定めて諸大將の爲わざならん、早々に殺し玉へと云ければ、鍾會宮中へ入んとするに、城外の大勢はや門の內まで攻入たりしかば、急に殿門を閉て支んとするに、宮中に捕れたる諸大將みな屋形の上に打のぼり、瓦を取て鍾會に抛かくること雨よりも繁く、死する者數を知ず。宮門の外火焰盛に燒あがりて、大石大木を飛して打合けるが、寄手つひに殿門をも打取て宮中へ亂れ入しかば、鍾會力を盡して目の前に七八人を斬ころし、猶大勢の中を蒐まはるに、四方の矢倉より遠矢に雨の降ごとく射すくめければ、了に亂れ矢に射殺さる。姜維も劍を拔て敵の大勢を縱橫に蒐立けるが、漢家の運盡たる故にや、心痛しきりに發て堪がたく成ければ、天を仰で大に嘆き、我計成ず是乃ち天命なりと呼はり、自ら首を刎て失にける。時に年五十九歲なり。此日暫時の戰ひに、宮中死する者數百人に及びしかば、監軍衞瓘大音あげて曰、鍾會すでに滅たり、諸軍みな各本陣に回るべし、妄に動ものは首を刎ん。魏の軍勢是を聞て少し靜まると云ども、姜維が屍を見て、日比親を討れ子を討れたる恨を雪んとて、爭て寸々に斬、その腹を裂て腸を取出しけるに、膽の大さ雞卵の如なり。其中に一人鄧艾に恩を受たる者あり、箇樣に鍾會も亡び姜維も討れたるを見て、夜を日に繼で道を急ぎ、鄧艾に告んとて打立ければ、衞瓘これを聞つけ驚て申けるは、われ鄧艾父子を生取て洛陽に送る、若半

ず怠ることと勿れと云ければ、丘建これより憚らず往來して、私に胡烈が使を城外へ出す。使いそぎ胡淵が陣に行て父の書簡を渡しければ、胡淵大に驚き、遍く諸大將に觸て一處に會り、父が書簡を示して申けるは、鍾會謀反を起して己に從はざる者を宮中に捕おく、必ず又我等をも捕ふべし、如何して之を誅せん。諸將皆怒て、我たとひ命を失ふとも謀反の賊に從はじと云ければ、胡淵が曰、事延引せば叶ふまじ、來る十八日に宮中へ推よせて箇樣々々に計を成んと語る。監軍衞瓘は初より鍾會が企を推し虛病して居たりしが、胡淵が計を聞て然るべしと喜び、軈て軍勢の手配を定めて、先丘建を恃で胡烈が方へ計の樣を告知さしむ。鍾會は浩ることをも知ず、城外に陣を取たる者共を盡く捕て殺さんと議しけるが、或夜數千の大蛇きたりて身を咬と云ふ夢を見て、姜維を召て夢を語るに、姜維が曰、龍蛇を夢見るは皆慶の兆なり。鍾會が曰、用意すでに備れり、早く事を起べし。姜維が曰、諸將みな從はず後必ず害を成ん、早々に先殺し玉へ。鍾會これに同じ、十八日の早旦に鎧を披て宮中へ入んとしければ、姜維にはかに心痛發て地の上に倒れ死す。是は如何にと怪を成ところに一人走り來て、宮門に失火出來たりと申す。急ぎ人を遣して見せしむるに、四方八面喊の聲大に起て、雲霞の如くなる軍勢城外より討て入ければ、鍾會色を失て如何せんと云に、姜維すでに人心地いで

會劍を抜て大に怒り、我に從はざる者は立所に斬んと云ければ、諸人震ひ怖て是非なく皆從はんと云。鍾會下知を傳て諸將を一人も殘さず一間なる處に推こめ、番を付て守らせければ、姜維が曰、今諸大將の心敢て將軍に從はず、一人も殘さず地の底に入て埋殺し玉へ。鍾會申けるは、われ已に宮中に大なる坑を掘せ白木の棒を數百本用意せり、若從はざる者は打殺して坑に入ん。時に鍾會が手下に丘建と云ものあり、本は護軍胡烈が家人にて久しく其恩を被りしかば、今鍾會が企を見て急ぎ胡烈に告て申けるは、宮中に大なる坑を掘て數千の棒を用意し玉ふは、誰にても從はざる者を打殺して埋ん爲なるべし、必ず其御心得あれと私語ければ、胡烈淚を流して申けるは、我子の胡淵は兵を率して城外にあり、定めて浩ることをも知ずしてやみ〱と殺さるべし、御邊もし昔の恩を忘れずば、我子の方へ一つの書簡を傳よ、我此の如く一間なる處に推こめられて、死せんこと旦夕にありと哭きければ、丘建が曰、御心を安くし玉へ、某よろしく計を成んとて直ちに鍾會が前に來り、將軍いま諸大將を宮中に推こめ玉ひて、內外の往來通ぜざる故にこと〲く飢渇を苦む、何か苦しく候べき、誰にても一人を許して往來せしめ、其飢渇を救ひ玉へと云ければ、鍾會もとより丘建が詞を用ひける故、實にも汝が申ところさもあるらん、乃ち汝を許して宮中に往來せしめん、此こと輕きにあらず、必

き姜維を召で申けるは、我手下の勢は鄧艾より多きこと六倍せり、司馬公わが鄧艾を容易く討べきを知玉ふ、然るに今自ら長安に來り玉ふは、吾を疑ふ故ならん、如何計を用ふべき。姜維が曰、君疑時は臣必ず死す、此みな當然の勢ひ也、將軍目の前に鄧艾を見玉へ。鍾會が曰、わが心すでに決せり、事成時は天下を取ん、事成ざる時は退て蜀の國を守り、亦玄德の如に基業を創ん。姜維が曰、近比洛陽に郭太后亡び玉ふと承はる、將軍詐て太后の詔を受たりと沙汰して、司馬昭が君を殺せる罪を正し、將軍の大才を以て天下を席の如に捲玉へ。鍾會げにもと喜び、能も我意に合へり、御邊先手をし玉へ、富貴必ず共にせんと云ければ、姜維が曰、願くは犬馬の勞を致すべし、但諸大將の服はざらんを畏る。鍾會が曰、明日は正月十五日上元の佳節なれば、此宮中に多くの燈を連ねて諸大將に酒宴を勸め、服はざる者あらば盡く殺さん。姜維心の内大に喜び、次の日諸將を招て酒を進め、遊び樂で三更の比に至り、鍾會俄に盃を弃て哭きければ、滿座驚て其故を問。鍾會答て申けるは、郭太后崩御の時に臨で詔を某に遺し玉ひ、司馬昭大逆無道にして南闕に天子を弑し、放に政を行ふ、必ず魏の天下を奪べし、何とぞ計を運して司馬昭を誅せよと也、諸大將も皆久しく魏の大恩を被れり、我に力を合せて此賊を討玉へと云ければ、魏の諸將たがひに面を合せてあきれたる體なり。鍾

其功を大なりとし、主は其謀を畏る、此の如にして身を安穏にせんと思ひ玉へるか、昔韓信は高祖に事てさしもの忠を盡しけれども、功成て後に却て醢にせられ、大夫種は范蠡が五湖の遊に從ずして卒に劍に伏て死き、此二人は主暗く臣愚なるが故に此の如ならんや、方に利害の爲しむる所なり、今將軍功成名遂て大德すでに天下に著る、何ぞ陶朱公が五湖の遊に習ひ、赤松子に從て峨嵋の嶺に隱れ玉はざると云ければ、鍾會笑て曰、御邊の言きはめて遠し、我いま年四十なれば、正に功名を萬世に傳て、先祖を黄泉の下に輝さんと欲す、爭か陶朱公に效んや。姜維が曰、將軍その御意にて候はば、某に多くの苦勞をさせんと思し食ならん。鍾會手を打て大に笑ひ、姜維よく我意を知れりと云て、此より日夜ひそかに謀反の企をぞ成たりける。姜維は鍾會に魏の諸大將を殺させ、其のち鍾會を殺して再び蜀を興さんと思ひければ、鍾會が謀反を起すを見て天の助と喜び、密に劉禪の方へ書簡を送り、望らくは陛下しばしの辱を忍び玉へ、社稷危して又安く、日月幽にして再び明に、漢室重て興るべしと告たりける、忠義の程こそ勇々しけれ。時に晉公司馬昭自ら大軍を引て長安まで出、使を馳て檄文を送ると告ければ、鍾會ひらき見るに、我いま司徒の鄧艾を誅するに萬一誤あらんことを怖れ、自ら兵を率して長安に陣を取、參會近きにあり、此故に先報ずと書たり。鍾會これを見て大に驚

者は舊の如く官を與へ、若遲く來る者は必ず三族を滅さんと書て四方に分ち、其のち檻車を用意して成都を指て急ぎければ、次の日の曉に檄文を見たる者共こと〴〵く來て、衛瓘が馬の前に拜伏す。此時鄧艾は府中に臥ていまだ起ず。俄に數十人打入て、天子の詔を受て鄧艾父子を生取と呼はるを聞て、床の上より驚起けるを、起しも立ず忽ち縛て檻車に乘。その子鄧忠これは何ごとぞとて走り來るを、又生取て檻車に乘。時に鄧艾が手下の者共追々に馳きたり、上を下へと騷ぎければ、鄧艾車の上より制して曰、われ鍾會が讒に因て此の如く擒にせらる、此天子の勅命なり、汝等みだりに狼籍せば必ず三族を滅さるべし、推量するに鍾會必ず此に來るべしと云ければ、諸人すこし靜り四方を遙に望み見るに、馬烟天を掩て鍾會が大軍馳きたる。鄧艾が手下の勢膽を冷して八方に散亂しければ、鍾會すでに馳入鄧艾を責て罵りけるは、犢を養し小兒なにとて此の如なるぞとて、馬の鞭を以て其頭を打擲す。姜維も大に罵り、鄧艾匹夫なんぞ功名を萬世に立ざると云ければ、鄧艾も大音あげて惡口す。鍾會乃ち鄧艾父子を洛陽へ送らしめ、自ら成都に在りて鄧艾に從ひし諸軍をも盡く統領しければ、威勢大に振て遠近皆服す。乃ち姜維を召よせて、我いま平生の願を遂たりと云ければ、姜維申けるは、將軍淮南を平げ玉ひてより累に大なる功を立玉ひ、今又蜀を治めて威聲天下に震ふ、此ゆゑに民は

時已に打立けるが、心の内に鍾會が謀反せんことを疑ひ、又司馬昭に見えて、鍾會いま鄧艾が逆心ある由を告ると申せども、某は深く鍾會を疑ひ申也と云ければ、司馬昭申けるは、今汝を大將として蜀に入しむ、さほどに人を疑はば我又汝を疑ふべきか、我長安に行て決斷あり、汝早く進發せよと云ければ、諸人みな司馬昭が氣宇海よりも深しと稱嘆しけり。

○姜維一計害㆓三賢㆒

晉公司馬昭、魏主曹奐を請じて長安へ出る由先達て聞えければ、鍾會いそぎ姜維を召て、早く鄧艾を誅するの計を議す。姜維が曰、まづ監軍衛瓘を成都に遣して鄧艾を伐しめ玉へ、衛瓘が手勢寡ければ必ず鄧艾に殺さるべし、然る時は諸人明に鄧艾が謀反を知て盡く將軍に屬ん、那時これを伐玉はば大事必ず成就すべし。鍾會これに從ひ監軍衛瓘に鄧艾を伐べき由を下知しければ、衛瓘兵を引て打立んとするに、手下の大將諫て申けるは、是鄧艾が手を借て將軍を殺さん爲の計なり、必ず輕々しく行玉ふこと勿れ。衛瓘が曰、われ何ぞ知ざらん別に自ら計ありとて、檄文二三十通を書て鄧艾に從へる魏の諸大將に觸をなし、鄧艾謀反の心あるを以て、我等天子の勅命を受て之を誅す、其餘の諸將は盡く罪なし、若速に來て我に從ふ

は司馬公必ず將軍に命じて鄧艾を伐しめ玉ふべし、さ候はゞ某力を盡して一擧して擒に致すべし。鍾會然るべしとて洛陽へ人を上せて、鄧艾謀反の企ありて心の任に事を行ひ、蜀の將士を結び懷くと奏しければ、魏の群臣大に驚く。鍾會又中途に人を伏て鄧艾が往來の使を捕て、書簡を傲り放なる體に書改め、鄧艾が使と號して洛陽へ上せければ、司馬昭ひらき見て其無禮なるを怒り、自ら蜀に行て鄧艾を討んとす。時に女房王氏諫て申けるは、我よく鍾會が心を知れり、利欲に心迷て義を忘恩に背もの也、今しきりに鄧艾が謀反を告ると申せども、其言深く信じ難し、能々事の樣を聞定め玉へと云ければ、司馬昭笑て曰、われ何ぞ之を知ざらん、元來鍾會が野心あることを知が故に、自ら蜀に赴なりとて、次の日鄧艾を伐と披露して、賈充に三萬餘騎を付て斜谷より蜀に入しめ、自ら魏主曹奐を請じて共に長安へ打出る。時に西曹の掾邵悌ひそかに來て申けるは、鍾會が手下の勢は鄧艾より多きこと六倍なり、何ぞ鍾會に命じて伐しめずして自ら遙々と下り玉ふぞ。司馬昭笑て曰、汝已前の言を今は忘たるか、久しうして鍾會必ず謀反せんと云ずや、我いま自ら下るは鄧艾を討ん爲にあらず、實は鍾會を討ん爲なり。邵悌笑て申けるは、某すでに此事を知て試に尋ね申なり、必ず他人に洩し玉ふな。司馬昭が曰、われ信義を以て人を用ふ、人必ず我に負じ。賈充は蜀に入んとて此の

しめ玉ふ、御邊この時いかなる高論かある。姜維が曰、鄧艾は本農人の家に生れ、常に牛を養ひ鋤を擔うて長く貧賤を苦む、名門世祿の子にあらざる故に物の大體を知ず、今幸に陰平の小路より出ることを得たりと申せども、木の根岩稜に掴付腰に繩を著て、魚を釣あげたるが如くにして、這々越て成都に入ことを得たれども、元來良計より出たるにあらず、此みな魏の天子の洪福に頼て也、將軍もし某を劍門關にて拒玉はずんば、鄧艾ことごとく陰平の谷にて餓死すべし、彼が成都を取たるも實は將軍の功なり、今又劉禪を扶風王に封ぜしは此蜀の將士を懐ん爲なり、其謀反の心明に露れたり、司馬晉公の疑ひ玉ふこと誠によく當れりと云ければ、鍾會大に喜ぶ。姜維も心の内に漢室再び興るべしとうれしくて、又鍾會に向て申けるは、暫く左右の人を退玉へ申べき事あり。鍾會これに從ひ何ごとぞと問に、姜維袖の内より一卷の圖本を取出し、昔し諸葛孔明草の廬を出る時、之を先帝に獻て曰、益州の地は沃野千里民殷に國富で霸王の業を成べしと、先帝これに因て此國を創玉へり、只今鄧艾成都にあり、爭か謀反の心起ざらんと云ければ、鍾會よろこんで披見し山川の要道を問に、姜維一々に指敎ふ。鍾會稱謝して問て曰、今いかなる計を用てか鄧艾を除くべき。姜維が曰、司馬晉公元より深く鄧艾を疑ひ玉ふ、此時に乘て將軍早く表を上て彼が謀反の企ある由を告玉へ、然る時

に諸軍を持成ける。時に監軍衛瓘は密に司馬昭が内通の書を得て、鄧艾に向て申けるは、將軍いま大なる功を立玉ひ、萬人みな威を畏れて忠を妒む、事必ず心の儘にし玉ふこと勿れ、萬づ洛陽に訴て司馬公の命を受て後行ひ玉へ。鄧艾が曰、大將外に在ては君の命も用ひずと云り、我いま蜀を平げて人の心いまだ附ず、吳は蜀と同盟なり、若禮に拘りて萬づ洛陽に訴てのちに行んとせば、必ず事の機會を誤らん、兵法にも進不レ求レ名退不レ避レ罪と云り、我事の宜に從て國を治む、何ぞ每事に問べけんやとて、又書簡を調へて司馬昭に送る。この比洛陽の小兒いづくともなく云傳て、鄧艾蜀を取て謀反せんとする工ありと沙汰しければ、司馬昭心の内疑を成。時に成都より使きたり鄧艾が書簡を獻りければ、司馬昭ひらき見るに其文の意きはめて放にして、自ら宜に從て國を治めんとのこと也しかば、以ての外に驚き左右に向て、今鄧艾漫に功に傲て謀反の色すでに露れたり、如何すべきと云ければ賈充が曰、鍾會が官を加て鄧艾を壓玉へ。司馬昭これに從ひ鍾會が官を進めて司徒に封じ、密に監軍衛瓘に命じて鄧艾、鍾會が逆心の企を伺ひ料らしむ。鍾會官を受て大に喜び姜維を召で申けるは、鄧艾が功わが上にあり、此故に太尉の職に封ぜられたるを我ふかく恨とす、今司馬公すでに鄧艾が謀反せんことを推して、我を司徒に封じて鄧艾が壓とし、衛瓘に命じて其企の樣を伺は

只一時の勇士なり、常に師を出して我と戰ひ、力を料ずして了に此の如く困窮せり。蜀の大將これを聞て皆鄧艾が德を感じければ、鄧艾心の内に深く喜び心しづかに人を懷て後、謀叛を起さんとする所存あり。時に劍門關より蔣顯回り、姜維すでに蜀の軍勢を引て鍾會に降れりと告ければ、鄧艾深く鍾會を怨み、洛陽へ使を上せて司馬昭に書簡を送る。其書に曰、

臣艾切謂、兵有先聲而後實者。今因平蜀之勢、以乘吳、吳人震恐、此席捲之時也。然大擧之後將士疲勞、兵不可便用。且徐緩之、留隴右兵二萬、蜀兵二萬、煮鹽興冶、爲軍旅要用、造舟船預爲順流之事、然後發使告以利害、吳必皈化、可不征而定也。今宜厚待劉禪、以致孫休、安士民、以來遠人。若便送禪于京都、吳以爲流徙、則于向化之心不勸。且權停留須來年冬月比、爾吳亦足平。今卽可封禪爲扶風王、錫其貲財供其左右。郡有董卓塢、爲之宮室、爵其子爲公卿、食郡內縣、以顯皈命之寵、開廣陵城陽以待吳人、吳人則畏威懷德、望風而從矣。

司馬昭見了て深く鄧艾が放なる心あるを疑ひ、されども大なる功あればとて、詔を申し下して太尉の職に任じ食邑二萬戶を加ふ。使成都に回りて勅を傳ければ、鄧艾再拜して官を受大

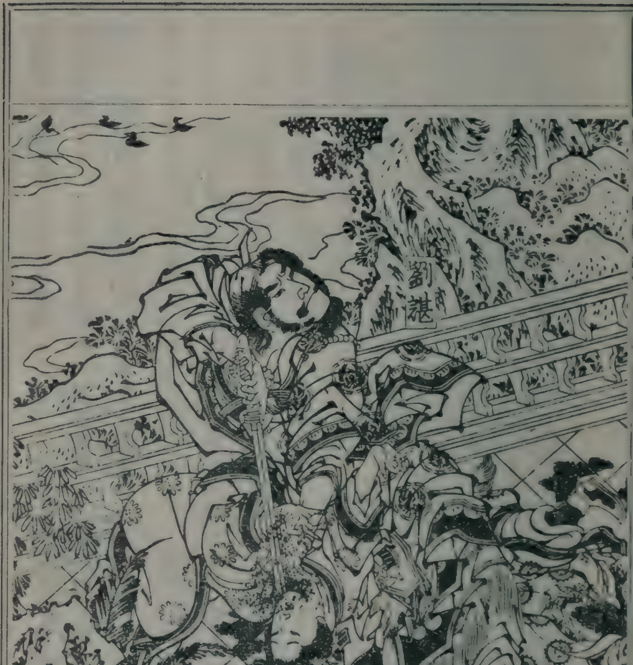
姜維、張翼、廖化、董厥等、蜀の勢を引て軍門に降を乞と云ければ、鍾會斜ならず喜び急ぎ人を出して迎へしめ、姜維なにとて今までは遲參せるぞと問ければ、姜維涕を流して曰、國家の事すべて某一人の身に係れり、今日こゝに降るも猶早しと存ずる也。鍾會この詞を奇なりとし、席を下て禮を重し左右を顧て申けるは、姜維が才の如きは誠に中國にも希なる名士なりとて、酒宴を設て持成ければ姜維申けるは、某久しく將軍の德を慕ふ、淮南の合戰より後しきりに大なる計を成玉ひて、司馬晉公の盛なるも皆將軍の力なり、某この故に頸を延て來り降る、若鄧艾ならば某命を弃て戰ひ死せん、何ぞ彼が爲に膝を屈めん、今將軍に從ひ奉るは某が元よりの願なり。鍾會この言を聞て心の內大に喜び、箭を折て誓をなし共に兄弟の交を結で、了に姜維が大將軍の印をも取納ず、猶舊の如く蜀の勢を摠司らせければ、姜維ひそかに漢の天下再び興るべしとぞ喜びける。この時成都には鄧艾都を取たる功に傲り、鍾會が漢中を取たるに十倍せりと思ひければ、先己が手下の大將に盡く官爵を授けて、師纂を益州の刺史とし、牽弘、王頎等にも州郡を分與へ、綿竹に臺を築て己が手柄の程を露し、蜀の大將を集めて酒宴をなし、半酣に至りて申けるは、汝等いま我に遇は大なる幸なり、若鍾會なんどが此處を取ば、汝等一人も殘さず殺さるべし。諸人みな拜謝しければ鄧艾又申けるは、姜維は

通俗三國志　巻之五十

○鄧艾鍾會大爭レ功

去ほどに劍門關には成都の破れたるを夢にも知ず、姜維なほ蜀の勢二十萬を率して鍾會を支へ戰ひける所に、太僕蔣顯きたり劉禪の命を傳て降參の事を告ければ、姜維大に驚き魂を失て昏絶し、諸の大將士卒も恨氣天を衝て、牙を咬目を怒らし鬚髮さかさまに竪あがりて、皆刀を拔て石を砍大に叫で申けるは、我等かくの如く力を盡し命を弃て戰はんとするに、天子なにとて早く降り玉ふぞとて、哭き哀聲遠近に響く。姜維これを見て心の内に思ひけるは、是ほどに運の協ぬを知ながらも、人の心なほ漢を思て此の如く哭く、我いかにも深き計を運して、再び蜀の都を取返さんとて、密に耳を附て諸人に計を合せ、蔣顯に成都の樣を問に蔣顯答て申けるは、鄧艾すでに成都に入と沙汰ありければ、天子自縛して降人に出玉ひ、文武の百官みな戈を倒にし盔を卸て拜伏す、鄧艾これを請取て盡く次第を定めて官を授け、某を以て將軍を招しむ。姜維ひそかに喜び、劍門關の上に遍く降參の旗を立させ、先魏の陣へ使を遣して、

を罰りしを憎み、生取て殺さんとせしに、黄皓ひそかに鄧艾が大將に金銀を賂て纔に命を免れたり。嗚呼この日何なる日ぞや、炎興元年十二月一日と申に、漢朝四百餘年の天下たちまちに滅て、魏の爲に併呑せられたる事こそ淺猿けれ。


劉諶

崔夫人
崔夫人貞節
昭烈帝の廟に北地王劉諶三人の子をさし殺して自殺す

て快く祖父に見えんと思ふなり、焉ぞ賊徒の爲に膝を屈ん。崔夫人の曰、嗚呼賢なるかな其死道に當れり、妾ねがはくは先立申さん。劉諶の曰、汝は女なれば死せずとも害なかるべし。崔夫人の曰、大王死して父に事玉ひ、妾死して夫に事ふ、其義みな當然なり、夫亡て妻ひとり生のこらんやとて柱に觸て死ければ、劉諶劍を抜て三人の子を刺殺し、崔夫人の首を提て昭烈皇帝の廟に詣り、地に拜伏して申されけるは、臣が肝膽祖父明に知玉はん、只基業の一旦に他人の物となることを羞とす、此故に先妻子を殺して妄念を散じ、又臣が一命を將て祖父に報ず、祖父もし靈あらば臣が心を察し玉へとて眼中血を流して哀み哭き、自ら首を刎て死玉ひける。蜀の人民これを聞て涙を流さずと云もの無。後主劉禪この由を聞玉ひて其屍を葬らしめ、次の日魏の大軍すでに成都に亂れ入ければ、後主自縛して死人の輿にのり、太子諸王その外群臣六十餘人を伴て北門の外十里餘出て降人と成玉ふ。鄧艾これを請取て其縛を解ゆるし、輿櫬を焼て同車して入ければ、成都の人民香華を備へて出むかふ。鄧艾まづ劉禪を驃騎將軍に封じ、嫡子劉璿を奉車都尉とし、諸王を皆駙馬都尉とし、文武の群臣こと〴〵く高下に従て官を授け、舊の宮中に回らしめて榜を出して民を安んじ、倉庫を交割して太常張峻、別駕張紹二人に命じて諸處の將士を招き降らしめ、又劍門關に使を馳て姜維が降參を催し、黄皓が讒佞にして國

鄧艾竊謂、三綱失道、群英竝起、龍戰虎爭、終歸其主、此蓋天命去就之道也。自古聖帝爰逮漢魏、受命而王者莫不在乎中土。河出圖雒出書、聖人則之以興洪業、其不由此未有不顚覆者也。隗囂憑隴而亡、公孫述據蜀而滅、此皆前世覆車之鑒也。聖上明哲、宰相忠賢、將比隆黃軒、侔功往代。銜命來征、思聞嘉響、果煩來使、告以德音、此非人事、豈天啓哉。昔微子歸周、實爲上賓、君子豹變、義存太易。來辭謙中以禮、輿櫬皆前哲歸命之典也、全國爲上、破國次之、自非通明智達、何以見王者之義乎。相會在即、先此布文、艾再拜。

後主劉禪見了て大に喜び、太僕蔣顯を劍門關へ遣して姜維等に降參の事を告させ、尙書郎李虎に命じて蜀中の簿書を鄧艾が方へ送らしめらる。凡そ家數二十八萬、男女九十四萬人、軍兵十萬二千人、官吏四萬人、兵粮四十萬石、金銀二十斤、錦繡絲絹二十萬匹、その外庫內に積貯たる物いく千萬と云ことを知ず、盡く鄧艾が手に屬す。北地王劉諶は天子すでに降人に出玉ふと聞て怒氣天を衝て憤激し、劍を帶て後宮に入玉へば、其夫人崔氏怪で問て曰、大王今日顏色つねならざるは如何なる故ぞ。劉諶答て曰、魏の勢すでに近付ぬと聞て天子懼て降參の書を送り、明日君臣ことごく降人となる、漢の社稷これより長く滅ん、我まづ自害して黃泉の底に

とし、傳國の玉璽を持せて鄧艾に降參を請せらる。此時鄧艾は雒城に陣を取成都に入んと議する所に、城外に降參の旗を建たりければ、心の内深く喜び、每日屈強の精兵數百騎を率して成都の樣を伺ひ見るに、暫く有て譙周等きたりて降參を求め、地に拜して傳國の玉璽を渡し、後主の降書を出しければ、鄧艾ひらき見るに、其書に曰、

降臣劉禪謹致書于征西將軍麾下。切聞、杯勺之水終歸江河、燕雀之徒必棲梁棟。念禪等限分江漢、遇値深遠、偕緣蜀土、斗絕一隅。干遣犯冒、漸苒歷載、遂與京畿攸隔萬里。每惟黃初中文皇帝命虎牙將軍鮮于輔、宣密溫之詔、申三好之恩、開示門戶、大義炳然。而否德暗弱、竊貪遺緒、俛仰累紀、未率大教。天威既震、人鬼歸順之數、怖駭王師、神武所次敢不革面腹、以從命。輒被群師投戈釋甲、官府帑藏、一無所毀、百姓布野、餘糧棲畝、以俟後來之惠、全元元之命。伏惟大魏布德施化、宰輔伊周含覆藏疾、謹遣私署侍中張紹光錄大夫譙周駙馬都尉鄧良、奉賚璽綬、請命告誠、敬輸忠款、存亡敕賜惟所裁之、輿櫬在近、不復縷陳、乞將軍照察。

鄧艾見畢て玉璽を請とり、回簡を調へて重く使を持成ければ、譙周、張紹等皆拜謝して城中に回り、右の趣を奏し申せば、後主回簡を抜き見玉ふに、其書に曰、

に至るまで降參の天子と云ことを聞ず、先此賊を斬て弃よ、我自ら出て戰はんと呼はりければ、後主これを見玉ふに、第五の皇子北地王劉諶なり。後主大に叱て、今群臣の議論一決して魏に降りて身を安くせんとす、汝ひとり血氣の勇を恃で如何なれば出て戰はんと申ぞ、滿城の内に血を流さん爲かと宣ひければ、劉諶答て宣ひけるは、昔し先帝世に在せし時、譙周つひに政に干ず、今妄に朝廷の大事を議す、是みな狂言にして用るに足ず、臣量に成都の軍勢なほ數萬あり、姜維大軍を率て劍關に屯す、もし魏の勢の都を攻るを聞ば必ず來て救べし、其時内外より夾で攻る程ならば、などか勝ずと云こと有ん、何ゆゑに腐れ儒者の狂言を聽て輕々しく先帝の基業を弃んとは思し食候ぞ、降參の事必ず止り玉へと云玉へば、後主怒て宣けるは、汝小兒の分として何ぞ天の時を知ことを得ん、叨に舌を動すこと勿れ。劉諶頭を以て地を扣き、大に哭て申されけるは、若勢ひ盡力窮なば父子君臣城を枕として快く戰ひ、一人も殘らず社稷に死して泉下にて先帝に見ゆべし、安んぞ賊徒に降て膝を屈ること有ん。後主いよ〱怒り、近臣に命じて拕出せと宣へば、劉諶殿より踊り下、哀み哭て地に倒れ、わが先帝容易に基業を開き玉ふにあらず、今一旦に之を弃、われ死すとも敵に膝を屈て辱を受べからずと呼はり玉ふを、近臣つひに宮門の外に引出す。後主乃ち譙周に降參の書を作せ、侍中張紹、駙馬鄧良を使

魏将

蜀の諸葛瞻
討死勇戦の図
諸葛瞻
魏兵
魏將

騷動して、老たるを扶け幼を抱て東西に迯まよひ、泣號聲天地を動す。後主劉禪此を聞て膽を冷し魂を失ひ、文武の臣を集めて如何せんと議し玉ふに、群臣みな申けるは、今兵寡大將足ずして戰ふべき質なし、不如速に成都を弃て南中の七郡に走り、險阻を固て敵を支へ、南蠻の勢を借て此難を免るべし。光祿大夫譙周が曰、必ず南中へ行べからず、南蠻國久しく王化に叛て貢物を獻ず、況や常に恩を與へたることも無に、今これを賴で其國に入ば却て大なる禍に逢ん。群臣又議して曰、吳と蜀とは同盟の國なり、今事火急にあり、早く吳の國へ行て難を避ん。譙周又諫て申けるは、古より他國を借て天子たることを聞ず、臣量るに魏必ず吳を滅さん、吳必ず魏を滅こと能はじ、今もし吳に降りて臣と稱し玉ふ時は、是羞の一つなり、吳後にもし魏に滅されば、再び魏に事て臣と稱し玉はん、是羞の上の羞なり、今陛下魏に降り玉はば魏必ず國を分て陛下を封ぜん、然る時は上は宗廟を守り下は百姓の苦を免れ玉ふべし、決して吳に降ること有べからずと云ければ、後主御心擾て決すること能ず、退て後宮に入玉ふ。次の日衆議區析れて事さらに決せざりければ、譙周事の急なるを見て上疏して諫め爭ふ。後主つひに譙周が諫に從ひ、魏に降らんと宣ひしかば、群議これに一同せり。時に屛風の後より一人躍り出て大音あげ、譙周を罵て、生を偸む腐れ儒者、いづくんぞ社稷の大事を知ん、古より今

てすきまもなく追蒐ければ、忽然として一聲の鐵砲を鳴し、魏の伏勢四方より打て出、おつ取こめて攻たりしかば、諸葛瞻喚き叫で戰ひ、左に撞右に突て立どころに魏の兵數百人を討取ければ、敵大勢なりと云ども其勢ひに辟易して引色に成けるを、鄧艾下知を傳へて雨の降如く遠矢に射すくめければ、蜀の勢四方にあらけて諸葛瞻急所を射られて死にける。諸葛尙矢倉の上より父が討れたるを見て馬に打のり出んとするに、張遵諫て申けるは、敵勝に乘て大勢なり、必ず輕々しく出玉ふな。諸葛尙大に嘆て曰、われ父子共に國の厚恩を受て、只恨らくは惡人の黃皓を殺さずして斯る禍を引出せり、今は命生ても詮なし、快く打死して黃泉の下にて父に見えんとて、馬を飛して大勢の中へ蒐入、亂軍の中にて切死にぞしたりける。鄧艾その忠義を怜で父子の屍を一所に葬り、綿竹の城に亂れ入ければ、蜀の大將張遵、黃崇、李球等一軍を引て打て出、つひに一人も殘らず討死して名を滅亡の跡に遺せり。鄧艾は綿竹の要害を守て今は手にさはる者あらじと喜び、成都を取んと評商す。

○蜀主劉禪輿櫬降ㇾ魏

去ほどに諸葛瞻も討れて綿竹やぶれ魏の勢成都の內へ攻入と沙汰ありければ、遠近上を下へと

その子に及ばずと云て武士に命じて魏の使を斬殺し、從者に首を與て追回しければ、鄧艾大に怒り、自ら出て戰はんと云に、丘本諫て申けるは、將軍かるがるしく出玉ふこと勿れ、只奇兵を用ひて破り玉へ。鄧艾これに從ひ、天水の太守王頎、隴西の太守牽弘二人に大勢を付て後の谷に伏おき、自ら小勢を率て出向ふ。諸葛瞻これを見て自ら一陣に馬を出し、魏の勢を八方へ蒐散しければ、鄧艾大に亂れて引退くを、蜀の勢勝に乘て追掛けるに、忽然として谷の内より二手の勢打て出、三方を圍で攻たりしかば、諸葛瞻殘り少に討れて綿竹の城に逃こもり、堅く守りて救を待。鄧艾息をも繼せず推よせ、鐵桶の如くに取まきければ、諸葛瞻計の施べきなく、如何せんと議するに、尙書張遵が曰、吳の國へ使を馳て救の勢を求め玉へ。諸葛瞻これに從ひ、大將彭和を使として一方の圍を衝やぶり、吳の國に赴しむ。吳主孫休對面して事の子細を尋ね、丞相濮陽興を召で申けるは、吳と蜀とは同盟の國なり、今蜀危して事すでに急なり、朕坐ら視るに忍ず、早く救の勢を起せとて、大將軍丁奉に五萬餘騎を授て沔中壽春より向はしむ。時に綿竹の城には諸葛瞻日夜攻られて安き心なく、救の勢を待かねて諸大將に申けるは、箇樣に引籠りて久しく守るは然るべからず、快く打て出て兩方の雌雄を決すべしとて、城中には諸葛尙を留めおき、自ら三の城戶を推開て驀地暗に打て出、壕の邊なる敵を追まくり

魏の勢討るゝ者數を知ず、散々に成て落行けり。鄧忠、師纂も深手を負て這々に逃回り、鄧艾に見えて軍の樣を告ければ、鄧艾二人が痛手負たるを見て罪を責ず、諸將を集て申けるは、今諸葛瞻よく父の兵法を傳て、兩度まで我一萬餘の勢を殺せり、若速に破らずんば後大なる害を成ん。監軍丘本が曰、先書簡を送て彼が心を誘て見玉へ。鄧艾これに從ひ蜀の陣に書簡を送りければ、諸葛瞻ひらき見るに、其書に曰、

征西將軍鄧艾致書於行軍衛將軍諸葛思遠麾下。切觀近代賢才、未得如公之尊父也、昔出茅盧一言已分三國、掃平荊益遂成王霸、古今鮮有及者。後六出祁山、非其智力不足、乃天數耳。今後主昏弱、王道已終。艾奉天子之命、重兵伐蜀、已皆得其地矣。止有成都、危在旦夕。公何不應天順人。仗義來皈、表公爲瑯琊王、以光耀祖宗、決不虛言、幸存照鑒。

諸葛瞻見了て心狐疑して決せざりければ、諸葛尙側に在て問て曰、父いま魏に降んと思ひ玉ふか。諸葛瞻叱て曰、われ何ぞ魏に降るべき。諸葛尙が曰、われ父の體を見るに三の疑ひあり、魏の使を陣中に召入て自ら對面し玉ふ一つなり、書簡を披て再三審に見玉ふ二つなり、魏に降らば瑯琊王に封ぜんと云を見て怒り玉はぬ三つなり。諸葛瞻これを聞て其書簡を扯やぶり、我

書付たりしかば、鄧忠、師纂これを見て遍身に汗を流して申けるは、孔明いまだ死せず、我等いかゞして此勢と戦はん、早く回て此由報ぜんとて、急に退かんとしければ、蜀の勢見濟して、すはや敵は色めきたるはとて喊を造て討て蒐り、追討に二十里あまり進みけるに、鄧艾後陣の勢を引て御方を救ひ回りければ、蜀の勢も軍を收む。鄧艾座に着て鄧忠、師纂を召て責て曰、汝戦はずして退きしは何ゆゑぞ。鄧忠が曰、蜀の陣中より孔明兵を率して攻かゝる、我等急に退かんとして此の如に亂れたり。鄧艾怒て申けるは、たとひ孔明が生反りたればとて戦はずして逃ることやあるべき、汝等敵の僞を見て何ゆゑに敗亡せるぞとて、引出して首を斬んとしけるを、諸人哀で命を乞ければ、纔に宥して人を遣し、敵の樣を伺はしむるに、其人回り來り、蜀の大將は孔明が子の諸葛瞻なり、先手の大將は其子諸葛尚と云る若武者なりと告ければ、鄧艾笑て曰、名もなき下將一戦して擒にせん。師纂が曰、いまだ敵の虚實も知ず、必ず輕々しく進べからず。鄧艾大に怒て曰、存亡の分この一擧にあり、何の疑ふことか有ん、汝二人再び向て敵を破れ、若打負ば必ず首を斬ん。鄧忠、師纂これに怖れ、已ことを得ずして一萬餘騎を從へ、又綿竹に向ひければ、蜀の陣より諸葛尚馬を出し、槍を撚て精神を抖擻し、大勢の中を蒐立けるに、魏の勢その鋒に當ること能はず、しどろに成て見えければ、諸葛瞻大軍を驅て大に進む。

みだりに無用の舌を動すこと勿れと云ければ、黄崇哀み哭き、國の滅亡ちか付たり、此人も頼がたしと云て退ける。諸葛瞻すでに軍馬を調て誰をか先手の大將とせんと云ければ、一人進み出て曰、父いま大權を執玉ふ、某願はくは先鋒たらん。諸人これを見れば、乃ち諸葛瞻が長男に諸葛尙とて年すでに十九歳、ひろく兵書を明らめて武藝衆に超たる者なり。諸葛瞻大に喜び、卽時に成都を立て綿竹を望んで進發す。鄧艾は此時すでに涪城を攻落して人馬の息を休め、馬邈を召で此國の繪圖は無かと問に、乃ち一巻の圖本を獻つる。急ぎ開き見るに、涪城より成都に至るまで百六十里、山川の路條甚だ險阻にして其間に綿竹關ありければ、驚て申けるは、若この處に逗遛して蜀の勢綿竹關を固めなば、我いかでか成都に入ことを得ん、若日を重ば姜維が勢後より來り、夾んで攻る程ならば我生ること能はじとて、急に鄧忠、師纂二人を呼、汝いそぎ二手に分れて日夜を分たず綿竹に攻かゝれ、我大軍を引て跡に續ん、汝等心を小て怠ること勿れ、若要害を敵に取れば必ず二人の首を斬ん。鄧忠、師纂命を受て直ちに綿竹に向ひければ、蜀の勢關門の前に出て八陣を布、三通の鼓を擊て中央より一輛の四輪車を推出す。車の上に一人綸巾を戴き鶴氅を披て、手に羽扇を持たるが端坐して、數十人の大將左右に排列し、前には一人の大將槍を提て馬を躍せ、車の傍に黄なる旗を立て、漢の丞相諸葛武侯と大文字に

れ玉ふ。文武の百官互に面を合せ、只あきれたる體にて詞を出もの無りければ、郤正すゝみ出て申けるは、事すでに急なり、早く詔を下して諸葛孔明の子を召よせ、共に計を議し玉へ。元來孔明が嫡子諸葛瞻字は思遠は幼より聰明にして天子の壻となり、駙馬都尉に封ぜられしが、後に父武鄕侯の爵を襲で、去ぬる景耀四年に行軍護衛將軍に遷る。常に黃皓が讒佞なるを惡で虛病して出ざりけり。後主劉禪、郤正が勸を聞て宣ひけるは、若卿が教にあらずんば朕この人を忘るべしとて、卽時に勅を下して三度までこそ召れける。諸葛瞻いそぎ朝に出て拜謁しければ、後主涙を流して宣ひけるは、鄧艾思はざるに大軍を引て攻來り、今涪城を圍と聞ゆ、成都の危こと旦夕にあり、卿先君の恩を思ひ、朕が命を扶よと宣へば、諸葛瞻も涙を流して曰、臣父子共に先帝の重恩を被りて陛下知遇の深き、肝腦地に塗るとも報ずること能はず、願くは成都の兵を起して臣に與へ玉へ、臣一命を弃て戰を決せん。後主これを聞て少し心を安んじ、成都の勢七萬餘騎を調玉ふ。諸葛瞻これを領して一萬の勢を殘して都を守らしめ、退て外に出ければ、尚書令黃崇申けるは、將軍もし用意の全く調を待玉はば、事延引して叶まじ、早く打立て敵を難所に支玉へ、若延引して敵の勢綿竹關を越なば、廣みにては防こと能はじ、速に行て先涪城を守り玉へ。諸葛瞻怒て申けるは、われ父の兵法を傳て軍の仕樣を知まじきか、汝

久しくこの國の恩を受て敵に降らんとは何ごとぞ、われなんの面目ありて汝が辱を受んやと罵り、夫の顔に唾を吐掛たりしかば、馬邈いと靜に推拭ひ、顔を赤して閉口せり。浩る所に城外俄に騷動して、魏の大將鄧艾二千餘騎にて攻入たりと聞きければ、馬邈大に驚き、急に門を開て地に拜伏し、哀み告て申けるは、某久しく魏に降んと思ふ心あり、今幸に將軍に見ゆ、願くは城中の軍民を率て盡く降人と成ん。鄧艾大に喜び、江油城を請取て降參の勢を合せ、馬邈を用て案内者とす。時に一人走り來り、馬邈が夫人首を勒て死したりと告ければ、鄧艾その故を問に、馬邈ありの儘に語りしかば、鄧艾その志を感じ、實に賢女なりとて厚く葬を成しめ、自ら行て祭を致し、城中に暫く逗留して諸軍の氣力を養ひ、陰平の路々に殘し置たる勢をも盡く召あつめて大勢に成ければ、又涪水關に攻かゝる。此時蜀の軍民鄧艾が攻來るを見て、何より入たると云ことを知ず。天より降たるかと怪み、到る所みな風を望て降參す。この由傳て成都に聞えければ、後主劉禪大に驚き、又黃皓を召て問玉ふ。黃皓申けるは、是みな詐にて候はん、神の御告なんの相違か有べき、必ず人の申すことを信なりと思ひ玉ふな。後主又神降の婆を召て吉凶を問んとて勅して尋玉へども早いづ地ともなく逃去けり。去ほどに遠近早馬を打て成都へ急を告ること雪の飛よりも繁く、使者連絡して絕ざりければ、後主色を失ひ昏絕して地に倒

置て日夜に用心したりしが、近比後主劉禪その法を廢て此の守りをも止たりと告る者ありければ、鄧艾嗟嘆して休ず、心の內驚き怖れて諸軍を集めて申けるは、我等この處まで來れども一足も囘るべき道なし、前は乃ち江油城なり、早く攻取て兵粮をも使ひ、一命を扶れと下知しければ、二千餘騎の兵共死を輕んじて江油城に攻かゝる。

○諸葛瞻大戰鄧艾

蜀の炎興元年冬十一月、鄧艾遙々と陰平の難所を七百里越て直ちに江油城に攻かゝる。城の大將馬邈は此時すでに魏の大勢漢中を攻取たりと聞しかども、更に用心することも無。この日女房李氏と云ものと圍爐裏の火を撥して酒を飲ければ、李氏問て申けるは、敵の大勢すでに漢中を攻取て邊城追々急を告、しかるに將軍全く患る色もなく、酒を飲で笑ひ樂み玉ふは何ゆゑぞ。馬邈答て曰、この國の大事は總て大將軍姜維が身に係れり、我なんぞ憂ること有ん。李氏が曰、國の大事はさること有とも、此城をさへ用心し玉はぬは如何なる故ぞ。馬邈が曰、天子酒色に溺て佞人黃皓を重じ玉ふ、我量るに國の滅亡已に至れり、魏の勢もし攻來らば一番に出て降らんと思ふ、何の用心と云ことか有べき。女房李氏大に怒り、汝男と生れて不忠不義の心を懷き、

辛萬苦を經て此處までは來りしかども、力疲て盡く此處に死せんことを哀也。鄧艾が曰、われ已に七百里の難所を超て二萬八千の兵を道々に殘し置たれば、只二千の勢を餘せり、若この嶺を越る時は麓は乃ち蜀の江油城なり、假令死すとも恨なし、元より大將と士卒の情は兄弟に異なること無、汝等志を墮さず力を盡してこの嶺を越なば、必ず希代の功を成て富貴共に受て恩澤子孫に及ぶべし。諸軍これに激されて命を弃んと勇ければ、鄧艾大に喜び、試に馬共を追下に、大半恙なく落著て身ぶるひして立たりしかば、扨は心安しとて自ら毛氈を以て身を包み、一番に轉び落ければ、諸の大將も續て落す。諸軍毛氈を持ざる者は件の差繩を木の枝に著て人々の腰を綁り、魚を釣あげたるが如にして兎角して滾り下、一人も誤たず已に摩天嶺を越ければ、此にて暫く息を休め、馬物の具を調て進み行に、路の傍に大石を立て碑の文あり。上に丞相諸葛孔明親題と大文字に鑿付たりしかば、近く寄て之を見るに、其銘に曰、

二火初興　有レ人越レ此　二士爭レ衡　不レ久自死

鄧艾これを讀で打驚き、其石を再拜して申けるは、孔明は眞に神人なり、我同じ世に生れて此人に事ざることを恨む、惜い哉と感嘆して山の傍に孔明が廟を立させ、祭を成て進み行に、向に大なる陣屋あり。これは孔明世に在し時險阻なれども此處を油斷せず、常々千餘騎の兵を

其不意。今掩其空虚、破之必矣。謹此上聞、伏希照察。

鄧艾書簡を上せて後ことゞく手下の大勢を集めて申けるは、我いま虚に乗て成都を襲ひ取んと欲す、汝等志を同うし國家の爲に忠を致さば、其名萬世に傳て恩賞は子孫の家を照べし、面々よく心を固して不思議の大功を立よと云ければ、諸軍みな答て曰、ねがはくは將軍の命に従はん。鄧艾大に喜び先その子鄧忠に屈強の兵五千人を與へて、甲盔をも披せず斧鉞を持て山路を切開かせ、三萬餘騎の精兵をすぐりて腰に乾飯を付、長き差縄を多く用意して其端に熊手を結つけたり。是は岩石なんどの登り難き所をば木の枝岩の稜に引掛て登ん爲の支度なり。十月に陰平を立て百里づつ行ては三千の勢を殘して陣屋を作て守らしめ、巓崖峻谷鳥も翔り難き所を凡そ二十日あまりに七百里超にける。是みな人の住ぬ深山なれば、虎狼の號音耳に盈て松樹の風敵の喊の聲を誤る。已に七百里が間數十箇所に陣屋を造りて兵を殘し置たれば、今は纔に二千餘騎に成て人馬ことゞく疲れたり。進んで又一つの嶺あり、摩天嶺と名づく。殊更高く岨て一片の白雲腰を縈り、岩石屏風の如く截立て、人馬一足も登ることを得ず。鄧艾馬より下て其邊を見るに、鄧忠を始として路を開く五千の勢一所に集りて啼居たりければ、如何なる故ぞと問に、鄧忠答て申けるは、此嶺の西の方は石壁天に岨て路を開べき術なし、今まで千

某この處に在て合圖を待んとて、酒宴數刻に及て鄧艾別て回りければ、鍾會手下の大將を集めて曰、人みな鄧艾を計多き者なりと云しが、今日これを見るに庸才にして用ふるに足ず。諸將その故を問に、鍾會が曰、陰平の路は嶺高く岩そびえて鳥も翔り難き處なり、焉ぞ兵を進むることを得ん、若敵の勢百餘人して要害を守らば、彼等ことゞく谷の内に飢死せん、我は法に依て正道より進む、蜀を取んこと掌にありとて、夥しく雲の梯鐵砲の架を作らせ、日夜を分たず劍閣をぞ攻たりける。鄧艾は門外より馬に乘て本陣に回りければ、諸大將みな問て曰、今日鍾會に對面し玉ひて如何なる計か候ひし。鄧艾が曰、われ實の心を以て告れば、鍾會われを侮て芥の如くす、彼漢中を取て莫大の功なりとす、我もし沓中にて姜維を圍ずんば、彼いかでか漢中を取ことを得ん、我もし成都を取ば其功彼よりも勝るべしとて、其夜陣屋を收て陰平の小路を廻り、劍閣を離こと七百里にして陣を取。鍾會は此を聞てあざ笑て鄧艾を愚なりとす。鄧艾は計を定めて書簡を調へ、雒陽へ人を上せて司馬昭に注進す。其書に曰、

切見㆓蜀寇㆒、失㆓其漢中㆒、還守㆓劍閣㆒、宜㆓遂乘㆒㆑之。今遣㆓精兵㆒、從㆓陰平㆒由㆓斜徑㆒、經㆓漢德陽亭㆒赴㆑涪、出㆓劍閣西百里㆒、去㆓成都㆒二百餘里、奇兵衝㆓其心腹㆒、劍閣之守必還赴㆑涪、則會方㆑軌而進。若劍閣之兵不㆑還、則應㆓涪城㆒之兵寡矣。軍志有㆑之曰、攻㆓其無㆑備出㆓

有ん。諸の大將こと〴〵く集て再三諫ければ、鍾會その一命を扶けて諸葛緒を檻車に因、洛陽に送り上せて司馬昭が手に渡し、雍州の勢を留て己が手下にぞ用ひける。鄧艾この由を傳へ聞て大に怒り、我鍾會と官職に高下なく、殊更われは久く蜀の疆を守て國の爲に功勞を積り、鍾會いかなれば漫に傲て我手の大將を罰しけるぞと云ければ、嫡子鄧忠諫て申けるは、聖人も小不レ忍則亂二大謀一と云り、父いま大なる功を建玉ひて若一旦鍾會と不和なる時は、必ず國家の大事を誤ん。鄧艾げにも汝が云ところ理に當れりと云て、上には色を現さずと云ども心底には深く恨を含み、自ら數十騎を引て鍾會が陣に行。鍾會これを聞て自ら數百騎の猛將を從へて出迎へければ、鄧艾心の內甚だ喜ばず、共に坐定りて鄧艾賀して申けるは、將軍早く漢中を攻取玉ひて、蜀の勢こと〴〵く膽を冷す、是まことに朝廷の幸なり、速に計を定めて劍閣を破り玉へ。鍾會が曰、いま劍閣を破るには如何なる計を用ふべき。鄧艾固く辭して曰、某不才にして爭か計を知ん。鍾會再三問ければ、鄧艾が曰、某が愚意を以て料るに、一手の勢を率して陰平の小路を廻り、漢中の德陽亭に出て却て劍閣を襲ひ、關より西の方百里ばかりに奇兵を用ひて直ちに成都へ攻入ば、姜維必ず劍閣を弃て來り救ん、將軍その時虛に乘て進み玉はば必ず全く功を成ん。鍾會大に喜で曰、この計よく我意に協へり、將軍早く成都を襲ひ玉へ、

敵いかでか入ことを得ん、少しも心に掛べからず。時に斥候より告て、雍州の刺史諸葛緒と云もの、適に陰平の橋を燒れて負腹を立、此處へ寄きたると報じければ、姜維自ら五千餘騎を率して打て出、魏の勢の眞中に蒐入て散々に揉だりけるに、諸葛緒殘り少に討れて我先にと逃わしる。その路々に弃たる馬物の具足の踏どころも無りければ、蜀の勢これを取て、廿松に弃たりし物の具を今取返しぬと喜び、皆關上へ引入にける。諸葛緒わづかに打なされて引退き、此時鍾會が劍閣を十里隔て陣を取たる由を聞、自ら行て敗軍の樣を告ければ、鍾會怒て申けるは、われ鄧艾と計を合せ、汝に命じて陰平の橋を守らせ、姜維が回る路を塞しむる所に、何故に取にがしたるぞ、剰へ今又わが下知も無に兵を進めて多くの人馬を失ひしは、是いかなる行ぞ。諸葛緒が曰、姜維計を以て雍州に攻かゝる、某これを救んとて打出たれば、姜維引回して却て橋を過去れり、某この慙を雪ん爲に手勢を引て推よせ、此の如に敗軍せり。鍾會いよ〳〵怒り、引出して首を斬と下知しければ、監軍衛瓘諫て曰、いま諸葛緒罪ありと云ども、此者は鄧艾が手下に屬する大將なり、然るを將軍もし殺し玉はゞ、鄧艾必ず怒て畏らくは不和の基と成んか、暫く命を扶けて鄧艾を待玉へ。鍾會が曰、我天子の勅を受司馬晉公の命を領じ、大軍を統て蜀を伐、たとへば鄧艾なりとも罪あらば誅すべし、何ぞ不和の基と云こと

成て之を見るに、敵には有て左將軍張翼、右將軍廖化なり。共に喜を成て先成都の樣を問に、張翼申けるは、ちか比佞人黄皓神降の婆を天子に薦め、内裏に召て吉凶を問、その詞を信じて將軍の表を用ひず、この故に漢中の破れんことを怖て兵を起して來る所に、陽安關すでに鍾會に取れたり。廖化が曰、いま四面に敵を受て御方の兵粮通ぜず、不如退て劍關を守り、別に深き計を成ん。姜維心いまだ決せず、此にて一軍して漢中を取かへさんと云ける所に、魏の勢十方に分れて推よすると躁ぎければ、廖化が曰、白水は路狹して大敵に當り難し、速に退て劍門關を固め玉へ、敵もし勢を分て關を取ば、我等皈るべき路なからん。姜維これに從て退て劍門關に入んとすれば、俄に鼓を鳴し喊を造りて數萬の精兵勢ひに乘て斬て下る。是も敵には在で蜀の輔國將軍董厥が二萬餘騎にて魏の勢を防ん爲に出たるなり。今大勢の來るを見て合圖の鼓を打て四方の伏勢こと〴〵く起りしが、却て御方なるを見て門を開て迎へ入、天子酒色に溺て黄皓が讒佞を用ひ玉ふ由を語り、共に涙を流しければ、姜維申けるは、諸將痛く哭き玉ふな、我等が生て在ん限は國を敵には取すまじ、今この要害を守て氣力を養ひ、時を待て戰はゞ、敵の勢次第に疲て自ら亂るべし。董厥が曰、この處にて敵を支へたりとも成都の内一人も然るべき大將なし、若敵に攻られなば都は忽ち瓦の如に碎くべし。姜維が曰、成都は山峭え谷絕て

こと能はず、漢中の道より走らんとするに、雍州の刺史諸葛緒と云もの大勢にて早陰平の橋を取截たりと報ず。姜維四角八方に敵を受、進退路無して、天われを喪せりと嘆きければ、副將寗隨と云もの申けるは、此諸葛緒は雍州の刺史にて候、今この處に出たれば雍州を取と沙汰し玉はば、諸葛緒驚て急に來り救ん、其時引囘して急に陰平の橋を渡り劍門關を固め玉はば、漢中又取返べし。姜維この義然るべしとて兵を孔函谷に打入ければ、案の如く諸葛緒大に驚き、姜維孔函谷に入たるは、我雍州の虛なるを取ん爲なり、我預りの國を取れば天子必ず罪を正し玉ふべし、自ら行て救んとて纔なる士卒を殘して橋を守らせ、自ら雍州を指て打向ふ。姜維これを窺ひ見て急に後陣を先陣とし、陰平橋へ殺奔するに、橋を守る勢こと〴〵く走りければ、姜維敵の陣に火を付て劍門關に引退く。諸葛緒は半途に出て後に火の揚るを見つけ、扨は計に落されたりとて、急に取て囘しける時、姜維橋を過て已に半日に及べりと云ければ、力を失て追ざりけり。

○鄧艾越嶺襲成都

姜維わづかの勢を引て陰平の橋を過ゆく所に、向うより一手の勢馬烟を立て來りければ、近く

甘松の陣に至りける時、火焔天を焦して殘る處なく火かゝりしかば、急にこれを滅んとするに、魏の大將楊欣喊を造りて討て蒐る。姜維會釋もなく蒐りければ、楊欣なじかは敵すべき、山路を望んで逃わしる。姜維急に追かけ、山に攻のぼらんとすれば、大木大石雨の如に落し掛けるゆゑ、引退かんとする時、先に留て鄧艾を防せたる兵共みな散々に成て逃きたる。魏の大勢勝に乘て十方より取巻ければ、姜維數十騎を引て圍を切ぬけ、小山の上に陣を取て救の勢を待居たり。時に早馬來り、魏の大將鍾會大軍を引て陽安關まで攻入、御方こと〴〵く破れて傳僉は討れ蔣舒は降人となる、此故に漢中すでに魏に取れ、樂城の王含、漢城の蔣斌も門を開て敵に降り、大將胡濟は漢壽城を落て成都に逃去れりと告ければ、姜維色を失ひ、斯ては叶ふまじとて取ものも取あへず其夜に彊川の口まで引ければ、向より金城の太守楊欣一軍を引て討てかゝる。姜維喚て蒐たりしかば、楊欣一戰にも及ばず大に亂れて逃わしるを、姜維急に追かけ弓を取て三度放つに、一つも中らざりしかば、腹を立て其弓を折すて、槍を撚て突んとするに、乘たる馬前足を跌き倒に落たりけるを見て、楊欣引回して斬て蒐る。姜維急に起あがり、飛蒐りて一槍突けるが、慞て楊欣が馬の腦をぐさと突。時に魏の大勢回し合て楊欣を救ひ去ければ、姜維又馬に打のりて追討に進む所に、後より鄧艾大軍を引て取まはす。姜維前後を顧る

を開て降人となり、漢中ことごとく鍾會に屬す。この時姜維は沓中に在て鄧艾が攻よすると聞、兵を揃て待ところに、一番に天水の太守王頎馬を出して大音あげ、我いま大兵百萬上將千員を揃へて二十路に配て蜀をやぶる、姜維匹夫なんぞ速に降らざると呼はり、喊の聲を擧ければ、姜維大に怒り、槍を撚て突てかゝり、戰ひ三合ならざるに王頎散々に成て走りければ、蜀の勢息をも繼ず二十里あまり追討にしける所に、忽然として鼓の聲地を動して一手の勢打て出たり。姜維是を見るに、指あげたる旗は隴西の太守牽弘なりしかば、あざ笑て、此等の奴原は我對手にあらず、蹴ちらして弃よとて又をめいて蒐たりしかば、魏の勢亂れて走けるを、十里ばかり追かけ暫く息つぎ居たる所に、忽ち喊の聲天地を崩して一彪の勢殺出す。眞先の旗を見れば魏の征西將軍鄧艾なり。姜維又入亂れて戰ひ、四方八面を蒐立るに、血は馬蹄に蹴たて屍は路に横たはりて、討つ討れつ黑烟を立て揉合けるに、蜀の勢數度の戰ひに人馬みな疲れて、然も小勢なりければ、鄧艾が三萬の生手に挫がれ、引色に成たる所に後より王頎、牽弘が勢かゝりしかば、姜維急に引退く。時に早馬一騎後陣より馳きたり、甘松の陣屋を魏の大將楊欣に燒れたりと告ければ、姜維大に驚き、諸大將に向て申けるは、汝等わが名の旗を立て此處を退かず、暫く鄧艾が勢を支へよ、我この間に自ら甘松の火を救ふべしとて、後陣の一備を引て

順二天時一、嗚呼尙饗。

鍾會祭了りければ、卽時に風やみ霧散じて、淸風習々細雨濛々として暫く有て天氣晴わたりければ、魏の勢みな盔を卸で墓を拜し、盡く城中に囘りて心やすく休みけるに、鍾會が見たりし夢こそ不思議なれ。其夜の三更の比にはかに殺氣凜々として一人綸巾を戴き羽扇を持、身には鶴氅を被て面は冠玉の如く、眉には江山の秀を聚め胸には天地の機を藏し、長八尺ばかりなるが、神仙の如く飄々然として歩み來る。鍾會夢心地に起て之を迎へ、來る人は誰ぞと問に、其人答て申けるは、我今朝將軍の祭を受たり、願くは一言を囑すべし、漢の運すでに盡たるは天命の致ところにして力及ばずとは申ながら、兩川の民年久く兵革の患に罹て、肝腦ことごとく地に塗る、是豈憐ざらんや、將軍國の境に入ば能々手下の勢に法を出して、妄に百姓を惱こと勿れとて、袖を拂て去ければ、鍾會追付んとして走ると思へば、忽ちに驚き覺けり。彌奇異の思をなし、曉より起て諸大將を集め、夢の事共を語て、此孔明の神靈たりとて卽時に下知を傳て前軍の眞先に白き旗を立させ、保レ國安レ民と大文字に書て、行ところ毎に妄に人を殺せる者あらば、必ず首を刎んと法を出して秋毫ばかりも犯こと無りしかば、漢中の人民その德に懷き、再拜して出迎ふ。浩りしかば樂城の王含、漢城の蔣斌も防事能はずして門

地を動し、數千騎の兵風に順て追かくる。魏の勢魂を失ひ膽を冷して周章慌めき、馬より落る者數を知ず、這々城中に走り入、討れたる兵を點檢するに一人一騎も死せず、只手足を損じ面目を傷へるばかりにて、陰雲の內より多くの人馬打て出、早近付て斬よと思ひしが却て人を殺さず、只一陣の旋風沙を吹立しにて有しと告ければ、鍾會いよ〳〵怪み、降人に出たる蔣舒を召で此邊に神の社なんどは無かと問に、答て申けるは、此あたりに社は一つも無候が、定軍山に諸葛孔明の墓あり。鍾會大に驚て曰、さては諸葛武侯の神靈なり、我自ら行て祭んとて、次の日定軍山に行て孔明が墓を拜し、太牢を備て祭を成。その祭文に曰、

維大魏景元四年秋八月、鎭西將軍鍾會致祭於故漢丞相諸葛忠武侯之靈曰、爲帝王之傳紀兮、有盛有衰、得將相之扶持兮、以安以危。昔先生之隱居兮、遯世無聞、遇昭烈之三顧兮、欲平四夷、向白帝之託孤兮、繼之以死。出祁山而耀武兮、神鬼莫知、屯雄師於五丈原兮、長星忽墜、此天意已絕於劉氏兮、大數難移。今後主荒迷於酒色兮、朝綱頓廢、誠社稷崩摧兮。月盈則虧、天子命予爲大將兮、保民全國、先生照耀乎肝膽兮、決不敢怠、謹拜陳辭于墓下兮、願垂聽納。三軍肅恐、而仰慕聖德兮、無不悲傷、望息神威於風雲兮、以符天命、安淸氣於山岳兮、以

傅僉
蔣舒に
関上を守らせ
自ら陽安関
を斬て下り
大勇をあらはす

○姜維大戰劔門關

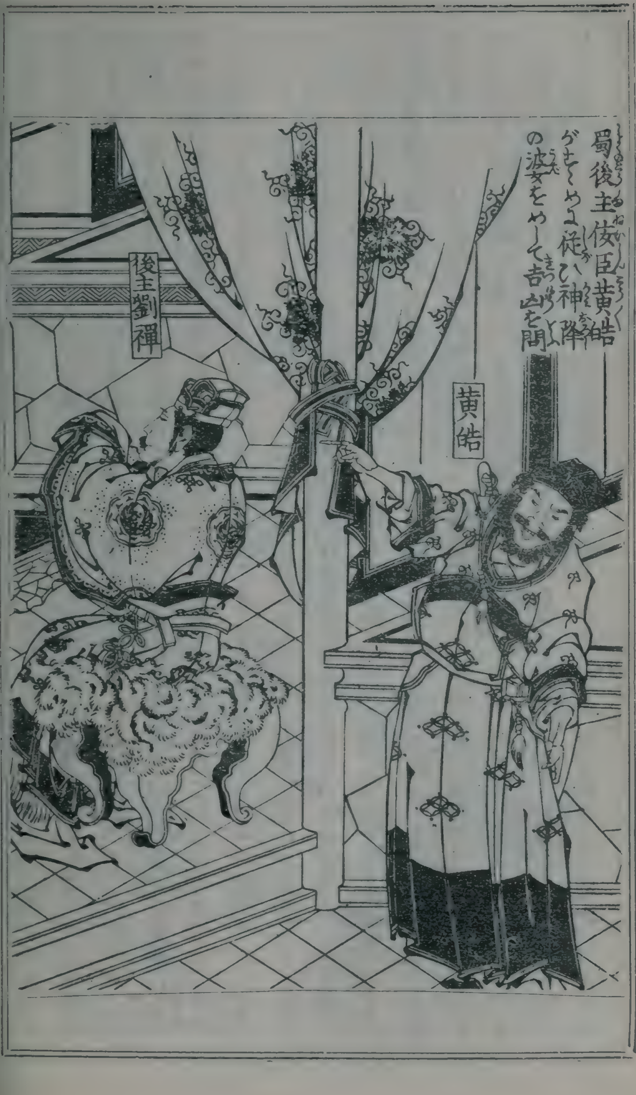
鍾會すでに陽安關を攻とり、今夜は此處に宿して人馬の足を休め、明日又進まんとて諸軍城中に入て休ければ、俄に西南の方より喊の聲天に響て出きたる。鍾會大に驚き急に出て望み見るに、敵一人も見えざりしかば心の内深く怪み、諸軍曉に至るまで睡ことを得ず。次の日もし敵や寄るとて馬に鞍おき鎧を堅めて待けれども、肯てその義も無りしかば、夜に入て暫く休んとするに、已に三更の比に至て又西南の方より喊の聲天地を崩す。鍾會色を失ひ人を出して見せしむるに、肯て日に遮る者もなし。夜あけて四方に人を分て伏勢やあると尋ねしむるに、數十里が間なんの疑はしきことも無と申す。鍾會心さらに安からず、直事に有ずとて四五日が間逗留しけるに、毎夜かくの如く驚しければ、喊の聲の響と齊く急に出て其方を問さだめ、夜明て自ら數百騎を從へ、西南の方を遠く見巡りけるに、向に一つの山あり、殺氣四方に蓋ひ、愁雲簇き布て霧山の頂を隱す。鍾會馬を回し、案内者を召て山の名を問ば、鄕導官答て曰、これ乃ち昔夏侯淵が蜀の大將黃忠に討れし定軍山にて候。鍾會心に忌々しく思ひ、驚き畏れて引回さんとすれば、何ともなく狂風吹おこり、身の毛も彌立樣に覺て、俄に喊の聲

關を守せ、自三千餘騎を引て驀地暗に斬て下る。魏の勢みな眞倒に捲り落され、我先にと走りければ、傅僉勝に乗て追かくる所に、魏の大勢又一度に取て回しければ、傅僉退て關に入んとするに、早敵入かはりて見なれぬ旗共矢倉の上に飄り、門の上より蔣舒聲を擧て、我すでに魏に降れり、傅僉早く降れと呼はりければ、傅僉勃然として大に怒り、恩を忘れ義に背の賊、なんの面目ありて天下の人に逢んと思ふぞと罵り、進んで關に入んとすれば、大木大石を投下して面を向べき様なきに、後より魏の大勢すきまも無とり圍み、逃るべき路なかりしかば、今は是まで也とて左に衝右に突をめき叫で戰ふに、三千餘騎の勢のこり寡に成ければ、天を仰で心の中に昭烈皇帝を祈念し、臣いま力盡て討死す、願くは蜀の鬼と成て敵を滅さんと云て、又馬を拍て敵の村雲立たる眞中に蒐入、四方八面を斬て廻るに、敵の圍いよ／＼重り、傅僉速に降れと呼はりければ、心怒て精神を抖擻し、命を限と戰ひけるが、槍に突れ矢に中りて披たる甲も朱に成、人馬共に疲れければ、猶賊の手に懸らんよりはとて馬より飛おり、自ら首を刎て死にけり。鍾會これに因て陽安關を乘とり、城中に貯たる兵粮武具山の如くなりしかば、心の内大に喜び、諸軍に恩賞を與て暫く人馬を息ける。

とに重しと申せども、彼が父許褚は久しく朝廷に功勞多く、其名世上に隠れなし、願くは許儀が一命を扶け、甘松の敵陣を破りて後功を以て罪を補はしめ玉へ。鍾會怒て申けるは、軍中の法は私すべからず、われ若司馬晉公の命を背ば生てよも置玉ふべきかとて、了に首を斬せければ、諸軍みな震ひ怖る。鍾會いそぎ兵を進め、息をも繼せず攻入ければ、諸人の心安からず、恨る者も多かりけり。蜀の大將王含は樂城を守り、蔣斌は漢城を守り、毎ㇾ城五千の勢ありければ、魏の大勢なるを見て引こもりて出あはず。此に因て鍾會乃ち前軍李輔に命じて樂城を圍せ、護軍荀愷に命じて漢城を圍せ、諸將に下知して申けるは、兵貴二神速一と云り、敵の備なきに乘て速に進むべしとて陽安關に攻かゝる。此關には蜀の大將蔣舒、傅僉二人守りけるが、敵すでに攻きたると聞て蔣舒申けるは、魏の勢二十萬に餘ると聞ゆれば中々出ての勝負は叶ふまじ、只よく守て防べし。傅僉が曰、いや／＼魏の勢多しと云ども皆遠路の疲れ武者、なに程の事か有べき、若出て戰はずんば樂城も漢城も忽に破るべし。蔣舒いまだ心決せず、如何すべきと論ずる所に、魏の勢早門外まで攻來れりと聞きければ、急ぎ矢倉に上て見るに、鍾會鞭を擧て呼はりけるは、我いま十萬の勢を引て此に來る、汝等もし速に降らば御方に用ひん、若迷を執て延引せば、我忽ちに踏やぶり一人も逃すまじ。傅僉これを聞て腹を立、蔣舒を留めて

よりも繁ければ、魏の勢あわて騒で急に退かんとする所を、大木大石を轉しかけたりしかば死する者數を知ず、谷の底に落て微塵になる。許儀案に相違して鍾會が前に出、この關を通ることと叶ふまじと云ければ、鍾會自ら百騎ばかりを引て來り見るに、關の上より射下す矢雨よりも緊ければ、急に引退く時城の上より望み見て、廬遜五百餘騎を率して切て下る。鍾會大に驚き馬を打て走りけるが、土橋を過る所に馬の蹄陷入て屛風を倒すが如に倒れければ、急に飛下歩立に成て走りけるを、廬遜ま近く追付、すはや討れぬと見えけるを、魏の大將荀愷引回して箭を放ければ、廬遜急所を射られて馬より倒に落て死にけり。鍾會これを見て勢ひに乘て攻のぼれと下知して大軍を一度に進めければ、蜀の勢大將を討れて弩を放つべき隙なく盡く散亂しければ、魏の勢すき間も無打入て了に南鄭關を乘とりける。鍾會まづ荀愷が敵の大將を射て我を救ひし功を賞して護軍大將に進め、鞍置馬に鎧一領そへて與へければ、荀愷拜謝して面目身に餘りてぞ見えたりける。次に許儀を召で申けるは、汝先手の大將を望みし故われ再三に戒め、山に遇ては路を開き、水に遇ては橋を掛、後陣の勢を滯らしむること勿れと云しに、我わづかに橋を過れば馬の蹄陷入て已に敵に討るべかりしを、荀愷が力に依て辛き命を逃れたり、汝すでに軍法を犯せり、罪ゆるし難しとて引出して斬せんとす。諸大將みな告て曰、許儀が罪まこ

神降


蜀後主佞臣黄皓
がすゝめに従ひ神降
の婆女をめして吉凶を問
後主劉禪
黄皓

再拜して祈り玉へば、彼婆喘涸たる聲にて申けるは、われは蜀の國の地神なり、陛下只太平を樂しめ、何をか外に祈ること有ん、魏の國も數年の内に盡く滅べし、爭か此國を攻ることを得ん、只心を安んじて遊び樂玉ふべしと云訖り、地に倒て絶入けるが、半時ばかりして甦りけり。後主限なく喜び玉ひ、神の御告なんの疑か有んとて、姜維が表を用ひ玉はず。黄金百兩錦百疋を彼婆に賜ひ、日夜酒宴をのみ仕玉ひける。此に依て姜維追々早馬を以て急を告けれども、黄皓これを藏して天子さらに知玉はねば、諸方の合圖こと〴〵く相違しけることうたてけれ。鄧艾勢を分て姜維と合戰を始むる由聞えければ、鎭西將軍鍾會いそぎ此間に漢中を攻やぶれとて、大軍備を推て十方より進發す。先手の大將許儀は勇猛なること父に劣ぬ者なるゆゑ、今度第一の先陣と定められ、己が手柄を顯さん爲に眞先に進んだりけるが、一つの山あり南鄭關と名付。蜀の大將盧遜と云もの五百餘騎にて固めたりと聞えければ、先この處を一息に踏やぶれとて諸軍を下知して上りける。この關は漢中第一の難處にて、門の前に細き橋を渡して下は岩石峭たる深き谷なり。實に一夫これを守れば萬夫も通り難き處なるに、殊に敵の寄ると聞て矢倉の上に孔明が祕傳の連弩を張、鏃みな毒を塗て一張に十筋の矢を放つ。魏の勢遥の坂を上て關門の前に近付ければ、盧遜見すまして合圖の梆子を鳴ほどこそあれ、數千の弩をつるべ放て其矢雨

の太守楊欣に一萬五千餘騎を付て甘松より出て姜維が後を攻させ、我身は三萬の精兵を引て跡に從て進發す。浩りければ諸方の早馬急を告て漢中上を下へと騒動す。姜維沓中に在て此由を聞、いそぎ成都に表を上り、左車騎將軍張翼に陽平關を守らせ、右車騎將軍廖化に陰平橋を守せらるべし、此二箇所第一の要害にして若失ある時は漢中こと〴〵く破れん、又吳の國に使を馳て救の勢を求玉へ、臣自ら沓中の勢を引て敵を支候はんと奏しける。時に後主劉禪は景耀五年を炎興元年と改め、姜維が表を視て大に驚き、昏絶して地に倒玉ひけるが、半時ばかり有て甦り、例の黃皓を召て、今魏の大將鄧艾、鍾會大軍を引て攻きたり、姜維表を上て急を告、いかゞすべきと問玉へば、黃皓が曰、これ盡く詐なり、何故に姜維が申ことを實なりと驚せ玉ふぞ、是みなさまでの事も無に、己が高名に備んとて表奏する者なり、幸に成都の内に年老たる神降の婆あり、神を供養して能吉凶を知、いそぎ此者を召て問玉へ、萬に一も違こと候はじ。後主これに從ひ、後殿に香華を備へ燈燭を陳ね、祭を設て彼婆を車に乘て宮中に請じ、龍床の上に坐せしめて後主自ら香を焚て再拜し、右の事を告玉へば、かの婆にはかに髪を亂し跣足にして殿中を躍り廻ること數百遍、又床の上に盤旋す。黃皓奏して曰、これ乃ち神の乘移らせ玉ふ也、あたりの人を屏けて自ら祈念し玉ふべし。後主これに從ひ左右の人を盡く追退け、

れば、太尉王祥これを怪み、馬上にて問て曰、いま鄧艾鍾會兩大將として蜀に向ふ、必ず功を成んと思ひ玉ふか。劉寔答て曰、必ず蜀を滅すべけれども、二人共に再び都に回ることを得じ。王祥その故を問に、劉寔唯打笑て答ざりしかば、狂人なりとて強て問ず、百官と共に回りけり。去ほどに征西將軍鄧艾は兼て隴西に居たりしが、司馬昭が命を受て先司馬望を西羌の國に下して胡の勢を集めさせ、雍州の刺史諸葛緒、天水の太守王頎、隴西の太守楊欣等が勢を催し、日を經て雲霞の如く集りしかば、日を擇で打立んとす。鄧艾ある夜の夢に高き山に上て漢中を直下に、俄に脚の下より泉迸り出て水の勢ひ高く湧あがると見て打驚き、遍身に汗を流して次の日殄虜護衛緩邵とて周易を知たる者を召、夢の吉凶を占せければ、緩邵が曰、易に山上有レ水曰レ蹇、蹇は利二西南一不レ利二東北一と云り、孔子の曰、蹇は利二西南一とは往有レ功也、不レ利二東北一とは其道窮也、これを以て案ずるに將軍必ず蜀を滅して世に稀なる功を立玉はん、但惜くは蹇滯して回り玉ふこと能はじと云ければ、鄧艾憮然として心喜ず、已に暮に及んで鍾會が方より檄文きたり、共に進んで漢中にて出合んと告ければ、鄧艾いそぎ手配を定め、雍州の刺史諸葛緒に一萬五千餘騎を付て姜維が皈る路を塞せ、天水の太守王頎に一萬五千餘騎を付て左より沓中を攻させ、隴西の太守牽弘に一萬五千餘騎を付て右より沓中を攻させ、金城

○鄧艾鍾會破二漢中一

鍾會もろ〳〵の大將を集て軍の評議しけるに、手下の大將には田續、龐會、田章、爰彭、丘健、王買、夏侯咸、皇甫闓、句安等を宗として八十餘人、護軍胡烈、監軍衞瓘みな帳下に集りければ、鍾會申けるは、然るべき先手の大將を定め、山に遇ては路を開かせ、水の渡には橋を掛させ、大軍跡に隨て進ましめん、誰人か此職に當ん。時に一人進み出、某ねがはくは先鋒たらんと云ければ、諸人これを見るに、虎侯許褚が子に許儀と云猛將なり。滿座一同に此人にあらずんば叶まじと云ければ、鍾會申けるは、汝は虎體猿班の將にして、父子共に名を得たり、諸將も一同に汝ならでは叶まじと云、汝先鋒の印を掛て五千餘騎と一千人の歩武者とを領じ、直ちに漢中に進んで三手に分、汝中軍を引て斜谷より出、左ぞなへを駱谷より出し、右備を子午谷より出せ、この路いづれも險阻艱難の地なり、汝兵を下知して山に遇ては石を破、水に臨では橋を疊み、少しも怠らしむること勿れと云ければ、許儀令を受て眞先に進む。鍾會十萬餘騎を率して已に打立ければ、百官みな遠く送りて之を見るに、旌旗日を蔽ひ槍戈霜を凝し、人強く馬壯に威風凜々たりしかば、人これを羨ずと云もの無。その中に相國參軍劉寔と云もの冷笑て立け

ば、司馬昭諸將を引て十里出て之を送る。西曹掾邵悌と云もの密に傍の人を退て司馬昭に私語けるは、鍾會は志大にして計深き者なり、今十萬の勢を引て蜀を伐、某革に彼ひとり兵權を執ば必ず宜からざること有ん、何ぞ別に大將を副て同く其職を司せ玉はざると云ければ、司馬昭大に笑て曰、われ何ぞ此を知ざるべき、孔明六たび祁山に出、姜維九たび境を侵して御方大將を討れ士卒を失ふ、今われ鍾會を見るに計みな我心に合へり、今日蜀を破らんこと掌の内にあり、諸人みな蜀いまだ討べからずと諫む、是心の臆せる也、心臆する時智勇なし、然るを強て戰はしむる時は、必ず敗を取の道なり、只鍾會ひとり蜀を伐べしと云、是その心臆せざれば也、我この故に大將として向はしむ、彼が志まことに大なりと云ども、蜀滅る時は軍民こと〴〵く御方に降らん、凡そ敗軍の將は不レ可三以言二レ勇、亡國之大夫は不レ可二以圖一レ存と云へり、是みな心膽すでに破るゝが故なり、蜀の人民こと〴〵く恐怖の心を懷て背て再び謀反する者あらんや、況や今向ふ所の中國の勢は盡く故鄕を思て片時も早く回り上んことを欲す、焉んぞ謀反の人に與して他國に住るの心あらん、鍾會もし野心を興さば是自滅を取の道なり、このこと必ず外に洩こと勿れと云ければ、邵悌再拜して高論に伏し、誠に遠大の計なりと云て退きける。

下濕にして急に破るべからず、不如蜀を平げて流に順の勢ひに乘、水陸共に進みなば是乃ち虢を滅して虞を取の計なり、推量するに蜀の勢成都を守る者八九萬、境を守る者五六萬、姜維に從て屯田する者六七萬ならん、我すでに鄧艾に命じて關外隴上の勢十萬餘騎を率し、直ちに沓中を攻やぶらしむ、姜維必ず力を盡して之を防ぎ、他處を救に暇なからん、其間に鍾會を大將として關中の精兵二三十萬を付、ひそかに駱谷の細路より虛に乘て漢中を襲しめん、今蜀主劉禪昏暗にして酒に溺れ色に迷ふ、邊城外に破れ士女内に震はば、その滅んこと日を計て待べしと云ければ、百官みな理に服し、誠に此の如ならば蜀必ず滅べしとぞ申ける。鍾會すでに鎭西將軍の職を受て諸國の勢を集めけるが、計の外に洩ん事を怕れ、偽て吳の國を攻ると披露して、青州、兗州、豫州、荊州、揚州、五箇所に大なる兵船を造らせ、大將唐咨を登萊の海近き處に遣して荐に舟を用意しければ、司馬昭これを聞て大に怪み、鍾會を召て問て曰、汝陸地より蜀を伐に何とて多く舟を造らしむる。鍾會答て曰、御方大軍を興して蜀を攻る由沙汰あらば、蜀必ず吳の國に救を求めん、某いま詐て兵船を造らせ、吳を攻ると披露する時は、吳の國驚き騷で焉ぞ蜀を救ことをせん、一年の内に蜀を平げ、今造らしむる舟を用て吳を伐ば、豈順ならずやと云ければ、司馬昭喜ぶこと限なし。此時景元四年秋七月三日、鍾會すでに都を立けれ

べきか。鍾會懐より一巻の繪圖を取出し、某すでに君の蜀を伐玉ふべきを圖り、地理を寫して此に在と云ければ、司馬昭開き見るに、蜀を攻るの法いづくより進み何くより退き、陣を取兵粮を貯ふる處こと〴〵く書付たりしかば、限なく喜で曰、汝まことに大將の才なり、急ぎ鄧艾と共に蜀を破れ。鍾會が曰、願くは忠を盡して君の恩を報ぜん、蜀を攻るに道筋多く分れたれば、一處より進み難し、鄧艾に命じて兵を進めさせ玉へ。司馬昭乃ち鍾會を鎭西將軍に封じて關中の勢を領せしめ、青州、徐州、兗州、豫州、荊州、楊州の勢を集め、又使を馳て鄧艾を征西將軍に封じて關外隴上の勢を領せしめ、鍾會と計を合せて蜀を滅すべしと下知をなし、次の日朝廷にて此事を議するに、百官みな互に面を合せて言を出す者もなし。時に前軍鄧敦と云もの進み出て申けるは、姜維九たび境を侵して御方兵を討れ、傷を病もの多く、境を守ることだに叶ひがたし、況や山谷險難の地に遙々と入て蜀を伐んことは、空く人馬を費して却て大なる殃を引出すべし、此事決して無用なりと云ければ、司馬昭勃然として大に怒り、我國家の爲に害を除き、仁義の師を出して無道の蜀を伐、汝いかなれば無用の唇を搖ぞとて引出して首を刎たりしかば、百官みな膽を冷す。司馬昭が曰、百官必ず驚べからず、吾淮南を平げてより已に六年、兵甲を用意して呉蜀を伐んと思ふこと久し、今日まづ謀るに、呉の國は地廣く

ね、綿々として長蛇の勢ひの如しと聞て潛に之を伺ひ見て、地形陣取の體を畫に寫して雒陽に上せければ、魏主曹奐これを見て、晉公司馬昭と議するに、司馬昭怒て申けるは、姜維九たび境を侵して中國を騷動し、偏に心腹の憂をなす、如何して之を滅さん。賈充が曰、姜維よく孔明が兵法を傳て急には中々滅し難からん、密に智勇の人を語らひ姜維を欺て刺殺させ玉へ。司馬昭が曰、われも常々その事を思へども、姜維を殺べき智勇の人なし。時に從事中郎荀勗申けるは、司馬公いま天下の輔相と成て道を行ひ玉ふ、只よく義を本として明に無道の輩を伐て罪を正し玉へ、爭か刺客を用て姜維を密に刺殺と云の道あらん、今蜀主劉禪酒色に溺れて佞人黃皓權を專にし、群臣惑亂して國已に危し、姜維が沓中に出て屯田するも、實は黃皓が禍を避ん爲なり、今もし大將を遣して攻玉はば、蜀必ず滅べし、若ひそかに姜維を刺殺し玉はんことは是天下を治る公道にあらず。司馬昭が曰、これ實に妙論なり、今蜀を伐には誰を以てか大將とせん。荀勗が曰、鄧艾は計多くして實に大將の才なり、又鍾會を副將とし玉はば蜀必ず破るべし。司馬昭喜び、此よく我意に協へりとて急ぎ鍾會を召て問て曰、いま汝を大將として吳を伐しめんは如何ん。鍾會が曰、君の御心本吳を伐んとにあらず、必ず蜀を伐の爲ならん。司馬昭大に笑て曰、汝よく我心を知れり、已に此の如なる時は、汝まことに力を盡して蜀を伐

の滅亡を救ひ玉はん。郤正が曰、沓中と云ところは隴西に近して其地甚だ肥饒なり、將軍なんぞ孔明屯田の計に效て天子に奏して沓中に出、屯田をし玉はざるや、是一つには麥熟せば兵粮の資とし、二つには隴右の諸郡を圖つべし、三つには魏の勢漢中を窺ことを得じ、四には將軍外に在て兵權つよく、人これを妨げ謀ること能はじ、五つには身の難を免れ、國を保ことを得玉ふべし。姜維大に喜び、席を下りて拜謝し、先生の教まことに金玉の論なり、我これに從んとて次の日天子に奏して曰、臣ねがはくは諸葛武侯の法に效ひ、沓中に屯田して魏の仇を防ぐべし。後主然るべしと許し玉ひしかば、姜維乃ち漢中に出、諸大將を集めて申けるは、我八箇度まで師を出すと云どもいつも兵粮不足にして大功を成こと能はず、今われ八萬餘騎にて沓中に出張し、麥を蒔て屯田の計をなし、兵粮の用意備て心しづかに魏を討ん、汝等久しく戰ひを苦む、不如まづ兵粮の用意備らん間は退て漢中の城を守れ、魏の勢遠路の運送に勞て自ら退き去時、我追討にして攻破るべしとて、胡濟を大將として漢壽城を守らせ、王含を大將として樂城を守らせ、蔣斌を大將として漢城を守らせ、蔣舒、傅僉二人に陽安關を守らせ、其餘の諸將こと〴〵く手配を定めて打立ければ、姜維自ら八萬餘騎にて沓中に陣を取、麥を種て長久の計をなす。魏の鎭西將軍鄧艾は姜維が沓中に出て屯田をなし、四十餘箇所に陣屋を連

れたり。姜維天子を拜し涙を流して申けるは、臣すでに祁山の軍に打勝て鄧艾を擒にせんとする所に、陛下一日の內に三度まで詔を下して、速に召回し玉ふは如何なる故にて候ぞ。後主默然として居玉ひしかば、姜維又奏して曰、黃皓巧言令色にして專に權を執、その讒佞なること靈帝の十常侍なり、陛下遠くは秦の趙高を鑑、近くは張讓を戒とし、速に勅を下して黃皓を殺し玉はば、天下自ら治り漢室再び興るべし。後主笑て宣ひけるは、黃皓は實に趨走の小臣、たとひ少しの權を執とも何ほどの事か有べき、昔し董允が常に齒を切て黃皓を憎しを朕怪しく思ひしに、卿も亦なにとて深く之を憎ぞ、必ず心に掛ること勿れ。姜維頓首して曰、今日もし黃皓を殺し玉はずんば國の禍ちかきに在ん。後主宣けるは、愛レ之欲ニ其生一、惡レ之欲ニ其死一、みな人の心なり、卿なにとて黃皓ほどの內官を强て殺んとは望めるぞとて、近臣に命じて黃皓を召よせ、姜維を拜して罪を謝せよと宣へば、黃皓乃ち姜維を再拜し、某朝夕天子に近侍して曾て國の政を犯さず、將軍いかなれば人の讒を信じて某を殺んとし玉ふぞ、願くは憐を垂玉へと云て頭を以て地を叩き、涙を流して謝しければ、姜維すべき樣なく面目を失て退出し、卻正に逢て右の趣を語る。卻正申けるは、將軍必ず禍に遇玉ふべし、將軍もし危き時は國家隨て滅亡せん。姜維が曰、先生いかなる計を以てか某が禍を除き、國

通俗三國志 巻之四十九

○姜維沓中避ㇾ禍

姜維祁山の軍に魏の勢を打やぶり、鄧艾を生取こと一戰の上にありと勇み喜ぶ所に、天子の勅命なりとて一日に三度まで召玉へば、力なく漢中まで引退き、自ら成都に入て天子に見んとすれども、後主劉禪十日餘り朝廷に出玉はざりしかば、心の内深く怪み、或日東華門にて祕書郎郤正に出あひ、天子詔して某を召返さる、其故を知玉はずやと問に、郤正申けるは、是は黄皓みだりに右將軍閻宇を愛し、彼に威を付ん爲に將軍を召かへし、閻宇を大將軍として魏を伐しめんとせしが、今魏の大將鄧艾が能兵を用ひて計多き由を聞、畏て其事を閣たる也。姜維これを聞て大に怒り、宮中に入て黄皓を殺んとしければ、郤正急に引止め、將軍いま孔明の職を繼で位すでに至極に昇り、何とて輕々しく事を行ひ玉ふぞ、萬一天子許し玉はずんば反逆の名を呼れ玉はんと制しければ、姜維げにもと心を靜めて我家に回り、次の日後主劉禪園に出て黄皓と遊び玉ふ由を聞、自ら五六騎の兵を引て園に入ければ、黄皓これを見て築山の陰に隱

と申す。鄧艾嗟嘆して休ず、姜維が計あらんことを畏て兵を制して追ざりけり。

周章ふためく所に、忽ち喊の聲地を動して魏の勢紛々として逃わしる。一人張翼に告て、姜將軍の勢來れりと云ければ、張翼勢に乘て討て出、姜維と夾んで攻ければ、鄧艾夥しく討れて祁山の陣に逃こもり、堅く守て出あはず。姜維は勝に乘て四方を圍み、息をも繼せず攻たりしかば、鄧艾すでに危く今三日とも怺べしとは見えざりけり。其ころ蜀の都には後主劉禪日夜酒色に溺て國の政みな佞人黃皓が料ひたり。これに因て百官こと〴〵く黃皓一人に阿り諛で、幸せられんことを求む。時に閻宇と云ものあり、其身一寸の功も無して黃皓に諛ひ、妄に時を得て右將軍に昇れり。近ごろ洮陽の軍に姜維が打負たるを聞て、黃皓なにとぞ閻宇に威を付んと思ひ、天子に奏して申けるは、姜維師を出して每度に打負、いま閻宇と代て魏を伐しめば必ず大なる功あらん、早く詔を下して姜維を召回し玉へ。後主昏迷してこの義に從ひ、追々勅命を傳て姜維をぞ召れける。祁山には姜維しば〳〵打勝て、鄧艾を生取にせんと勇ところに忽ち勅命あり、早く師を收て回るべしとて、一日の內に三箇度まで催促しければ、大に嘆て默止がたく、先傅僉に告知せて洮陽の勢を退かしめ、其のち大軍しづ〳〵と引て回る。鄧艾は祁山陣に追こめられ、心憂て居たる所に、一夜蜀の陣に角を吹鼓を打こと天地を崩が如なりしかば、何ごとならんと怕れ驚き、夜あけて人を出して見せしむれば、蜀の勢一人もなく退きたり

鄧艾城を守て一人も出ず。暮に及んで姜維空く退き、毎日戰ひを催して樣々に悪口すれども、鄧艾は三日が間出あはず、城中に在て屹と心づき、諸將に向て申けるは、蜀の勢夥しく討れて少しも引ず、毎日來て戰ひを催すは、必ず勢を分て祁山を襲ものならん、祁山の陣には師纂を大將として纔の人衆を付おきたれば、此者計も無れば防こと能ふまじ、我自ら行て救はでは叶まじ、鄧忠は此城に留りて心を盡して能々守れ、敵たとひ寄來るとも輕々しく出ること勿れ、我今夜ひそかに祁山を救べしとて、三千餘騎を擇で日の暮をぞ相待ける。姜維は諸將と計を議して居たりしが、夜に入て喊の聲大に響ければ、何ごとぞと問に一人走り來て曰、鄧艾城を出て夜軍を催す。諸大將これを聞て出て戰んと閧ければ、姜維が曰、これ必大なる計あらん、妄に一人も出ること勿れ。鄧艾は鄧忠に命じて蜀の陣に攻かゝらせ、其身は直ちに祁山へ向ふ。鄧忠も敵の出ざるを見て又城中へ引こもる。姜維諸將を集めて申けるは、鄧艾虛く夜軍する體にて實は祁山を救はん爲なり、張翼打向て後勝負いまだ聞えず、我自ら行では叶まじ、傅僉こゝに留りて堅く守り、敵よするとも出て戰ふこと勿れとて、自ら三千餘騎を引て祁山に向ふ。此時張翼は祁山の陣を攻て、魏の大將師纂を散々に打やぶりける所に、鄧艾新手を引て出來り、後を包で內外より攻ければ、張翼大に亂れて谷の內に追こめられ、皈るべき路なく如何せんと

の上より大木大石を抛かけ、弩を放つこと雨の如なりければ、憐べし夏侯霸五百餘騎の兵と、ことごとく壕の際にて射殺さる。城中の勢これに氣を得て司馬望自ら討て出けるを、姜維後陣を引て散々に蒐ちらす。司馬望又城中へ逃入ければ、姜維も城ちかく推よせて陣を取。その夜の二更に鄧艾自ら侯河の城より一軍を引て忍び出、小路を廻て蜀の陣へ斬て入ければ、蜀の勢大に亂れて討るゝ者數を知ず。洮陽の城中にも喊の聲を合せて、司馬望兵を引て打て出、鑼を鳴し鼓を打、天地震動して夾んで攻ければ、蜀の勢十方に散亂し、姜維自ら左に突右に撞、這々のがれて二十里退て敗軍を集むるに、晝夜の戰に手負討死勝て數へ難く、況や夏侯霸が討れたる由を聞て、諸軍みな驚き怕る。姜維いま退ては悪かりぬべしと思ひ、諸卒に向て申けるは、勝負は兵家の常なれば、大將を討れ士卒を失ふと云ども何ぞ患るに足ん、魏の勢みな此處に集りたれば、成敗の分只一戰の上に在、汝等始終心を改ること勿れ、誰にても退かんと云もの有ば立所に首を誅ん。張翼すゝみ出て曰、魏の勢みな此處に集りたれば、祁山は必ず空虚ならん、將軍は此處にて鄧艾と戰ひ玉へ、某一軍を引て密に祁山を攻とり、直ちに長安へ向ふべし、然る時は魏の勢みな歸る路を失はん。姜維しかるべしとて後陣の勢を分與へ、次の日侯河の城に推寄ければ、鄧艾も打て出て終日戰ひ暮し、夜に入て互に退き、夜あけて姜維又推寄ければ、

して侯河の小城あり、是乃ち蜀の勢の洮陽へ通る喉くび也、御邊一手の勢を引て洮陽の城に入、旗を偃鼓を息て四方の門を打開き、人なき體に見せ玉へ、我は一軍を引て侯河の城に埋伏し、姜維夏侯覇を擒にすべしとて、盡く祁山を立て二手に分れて進發す。去ほどに姜維洮陽を指て進みければ、夏侯覇馬上にて問て曰、洮陽は兵粮もなき城なり、將軍これを取玉ふは如何なる故ぞ。姜維が曰、われ七八度まで師を出して、皆敵の兵粮多き處或は戰ひに利ある地より攻蒐る、此故に敵も我心を量り知て用心をなす、われ思ふに洮陽の空城には敵定めて備あらじ、今一息に攻取時は攻其無備也、もし此城を取時は壕を深し壘を高して、漢中の兵粮を運び屯め、羌の勢を催して水陸より運送し、長久の計を成ん、この度勝ずんば大なる愧なり。夏侯覇が曰、これ妙論なり、我ねがはくは先手に進まんとて、自ら洮陽の城ちかく推よせ其體を窺ひ見るに、四門みな開て人ありとも見えず。心疑て馬を住め左右に向て、此は敵の計に有ずやと云ければ、士卒告て曰、更に人ありとも見え候はず、纔なる百姓共の怕れ騒で逃わしるあり。夏侯覇自ら馬を出して望み見るに、果して多くの百姓老たるを扶け幼を抱て西北の方へ走りければ、扨は敵用心なきぞ、眞の空城なりとて、自ら眞先に進んで壕の邊まで到りけるに、忽ち一聲の鐵砲ひゞき、四方の矢倉に喊を造りて壕の橋を拽たり。夏侯覇大に驚き急に退んとする時、城

命を受、知遇の深き萬一も報ずること能はず、假令國滅び家破るゝとも、われは身を殺して本に報ぜん、焉ぞ不忠不孝の事をせんとて、此より虚病して出ざりけり。姜維は表を上て後諸將を集め、我いま魏を伐んとす、何くより攻かゝらんと廖化に向て問ければ、廖化が曰、大將軍年々師を出し玉ひて國中片時も安からず、殊に鄧艾は智深く計多き者なり、將軍強て爲がたきことを行はんとし玉ふ、此某が知ざる所なり。姜維勃然として怒て曰、昔孔明六度まで祁山に出玉ふ、此國家の爲なり、我又八度魏を伐、一人の私にあらず、今まづ洮陽より攻蒐るべし、命に背ものは必ず斬んとて、了に廖化を留めて漢中を守らせ、自ら二十萬の勢を引て洮陽より進發す。此時鄧艾は祁山に陣を取、司馬望と軍兵を調練して居たりしが、蜀の勢の出る由を聞て人を遣し窺はしむるに、皆洮陽を指て向ふと申す。司馬望が曰、姜維は計多き者なり、虚く洮陽を取んとする體にて實は祁山に出べし。鄧艾が曰、然らず姜維實に必ず洮陽より出ん。司馬望が曰、いかなる故ぞ。鄧艾が曰、姜維師を出すこと八箇度、いつも御方の兵粮多く在所より攻かゝる、今洮陽は空城にして兵粮も無守りの勢もなし、姜維この故に其備なきを取て、洮陽城を要害に構へ、羌の勢を集めて長久を圖らん爲なり。司馬望が曰、しかる時は如何して防がん。鄧艾が曰、この處を撤おき兵を二手に分て洮陽を救べし、洮陽を離るゝこと二十五里に

鄧艾

○姜維大戰洮陽城

蜀の景耀五年冬十月、大將軍姜維落たる處の棧を造らせ、大小の車に兵粮を積漢中の川條には舟筏を浮べて、用意ことゞく備りければ、成都に表を上て、臣師を出すこと數度に及んで、いまだ大功を濟ずと申せども、頗る魏の大將の膽を挫ぐ、今兵を養ふこと日久く、戰はざる時は懶し、懶くして徒に日を送る時は必ず病を生ず、況や諸軍みな命を弃んことを願ふ、臣又師を出して若勝こと無んば、必ず罪を正し玉へと奏しければ、此時後主劉禪いよ〳〵酒に溺れ色に耽て、心昏迷して決するに暇なし。大史譙周すゝみ出て申けるは、臣夜天文を視るに蜀の分野將星暗して明ならず、今大將軍又師を出して魏を伐んとす、此度の軍必ず利あるまじ、天子詔を下して止め玉ふべし。後主宣ひけるは、今一度の勝負を見て、若利なくんば重て止むべし。譙周再三諫れども敢て從ひ玉はざりしかば、家に囘りて大に哭く。其子これを怪み、父なにを哭き玉ふぞと問に、譙周が曰、天子は酒色に溺て政を治玉はず、臣下は強して名を立んとす、軍民は恨み哭き佞人は時を得たり、國の滅亡近付ぬ、この故に悲也。其子告て曰、父すでに先見の明あり、何ぞ早く魏に降り玉はぬぞ。譙周怒て申けるは、われ先帝孤を託するの

態と歩立の勢に打混り、樹の根岩の稜に攫付、嶺を越て這々に逃のびたり。姜維、夏侯覇は鄧艾を伐んとて、歩立の勢には目も掛ず、馬を早めて逃る者を追ける故に鄧艾を打洩しけり。されども魏の勢五萬餘騎、或は討れ或は燒れて扶かる者は無りけり。王瓘は浩ることをも知ず、川口より兵粮の車を推て漸く祁山へ近付ける所に、手下の兵一人走り來て申けるは、日比の計すでに洩て鄧將軍も破れ玉ひ、蜀の大勢この處へ推よせ候。王瓘大に驚き兵を下知して兵粮の車に火を付させ、今逃れんとせば惡かるべし、汝等只命を此處に弃よとて、祁山の方へは回らず西を指て走りけるに、兵粮の車夥しく火燒あがり、蜀の勢三手に分れて追蒐る。姜維は兼て計の破れたるを知ば、王瓘定めて魏の國へ逃回るべしと思ひけるに、案に相違して王瓘却て漢中を指て逃入、難所の棧を燒落して追手を拒ぎければ、姜維漢中の破れんことを怕れて、小路より南谷に出前後を遮て攻たりけるに、王瓘が三千餘騎こと／＼く討れて、其身も黑龍江に沈で失てけり。姜維生取共をば盡く埋殺させ、勝軍はしたれども多く兵粮を焚れ、棧を落されしかば、暫く漢中に陣を取て、又師を出さんと用意をなす。鄧艾は夥しく討れて祁山の陣に回り、表を上て罪を乞自ら官を貶しけれども、司馬昭日ごろ大なる功あるを以て却て厚く恩賞し、討れたる者の妻子に財寶を與へ、又五萬餘騎を副て諸處の要害を守らしむ。

て計を約しければ、心の内深く喜び自ら司馬望と斜谷の口に出て、毎日戰を催し態と矢軍にて口を送る。已に八月十五日に至りければ、鄧艾自ら五萬餘騎にて壇山の谷に陣を取、山の上に人を上せて見せしむるに、夥しく兵粮の車谷の際より推來ると申す。鄧艾馬を出して之を望むに、運粮の旗を指て盡く蜀の勢なりしかば、肯て輕々しく進まざる所に、手下の大將告て曰、日も已に昏に及べり、早く進んで谷を出玉へ。鄧艾が曰、向の山は勢ひ深く打掩て、若敵の伏勢など有時は急に退くこと難からん、暫く此に留りて事の樣を窺ふべし。時に早馬一騎馳來り、王瓘兵粮を盜んで走る所に、後より敵の追こと甚だ急なり、速に救ひ玉へと云ければ、鄧艾これに驚き兵を引て進みけるに、已に初更の比に至て月の光も晝の如く、山の後に喊の聲起りしかば、是定めて王瓘が敵に追れて戰ふなるべしとて、急に山を廻んとする時、木陰の中より一手の勢殺到す。鄧艾驚て之を見れば、蜀の大將傅僉眞先に進んで大音あげ、鄧艾匹夫すでに姜維將軍の計に落され、何ぞ早く降らざると呼はりければ、鄧艾膽を冷し、さては計に中れりとて急に逃んとするに、四方の車より火燒出硫黃焰硝八方に散亂して、山々峰々より蜀の伏勢一度に起る。魏の勢慞騒て七斷八續討るゝ者數を知ず。鄧艾を生取ものは千金を與へ、萬戸侯に封ぜんと聲々に呼はりしかば、鄧艾膽魂も身に副ず、馬を乗すて甲盔をも卸すて、

實なりと思ひ玉ふぞ、吾久しく魏に在て了に王瓘は王經が姪なりと云ことを聞ず、必ず詐の計にて候はん。姜維笑て申けるは、われ已に其詐を知、此故に其勢を二つに分たり、我いま敵の計に就て計を用ひんと欲す。夏侯霸が曰、ねがはくは將軍の計を聞ん。姜維が曰、司馬昭が奸雄なること曹操にも超たり、已に王經が三族を滅して、焉ぞ其親き姪を生て置べき、況や兵を付て國の界を守しむることをせんや、此に因て先その詐を知、御邊の見わが意に同じとて、今まで斜谷の路より出たりしが、却て此路よりは出ず、諸處の路條に人を伏て王瓘が内通の使を捕へしむ。案の如く十日も過ざるに使を捉來りしかば、使を責て懐より書簡を出す。乃ち開き見れば乃ち鄧艾が方へ内通の書にて、今蜀の兵粮を運び候、急ぎ合戰を始め玉へ、密に兵粮を盜んで小路より回らんと書たり。姜維大に喜で先使を斬て弃させ、八月十五日に大軍を引て斜谷の外壜山の谷に來り玉へ、我等兵粮の車を盜んで馳回るべしと書改めて、一人の使を仕立鄧艾が陣へぞ遣しける。其のち蔣舒を大將として斜谷より出し、姜維自ら夏侯霸を壜山の内に埋伏して、數百輛の車に乾ける柴を稠硫黄焔硝を内に籠て、青き布を以て四方を包み兵粮の如に見せて、傅僉に命じて王瓘が分たる二千の勢に之を守らせ、運粮の旗を指て壜山の内に往來せしむ。去ほどに鄧艾は、王瓘が内通を待ていまだ戰ふことも無りし所に、使ひそかに來り

王琟

魏の王瓘いつはりて姜維に降る
姜維

此にあり、ねがはくは蜀の勢を破らん。鄧艾ひらき見て申けるは、この計まことに奇妙なれども、只畏らくは姜維を欺くこと能はじ。王瓘が曰、一命を弃て此計を成ん。鄧艾が曰、御邊志を堅して若この計を成就せば、必ず大なる功ならんとて五千餘騎を分與ふ。王瓘いそぎ斜谷の路に出向ひ、蜀の先手の勢に逢て、我は魏の國より降參の者なり、此由を大將軍に告よと呼はりければ、姜維これを聞て王瓘只一人を召て仔細を問。王瓘地に拜伏し、某は魏の尙書王經が姪に王瓘と申もの也、ちか比司馬昭その君を弑して、某が三族を市に出して首を斬、某一人は祁山の陣に在て幸に命を扶る、今將軍師を出し罪を正して魏を討玉ふ、某手勢五千餘騎を引て來り降る、願くは忠を盡して國家に報じ、司馬昭を滅して一族の讐を雪がんと云ければ、姜維限なく喜び、御邊すでに御方に降る、能忠を盡し玉へ、功あらば重く用ん、御方常に患る者は兵粮なり、今兵粮を積だる車みな川口まで出し置り、御邊ゆいて此處へ運び來れ、我は祁山に出て戰ふべしと云ければ、王瓘心の內大に喜び、一儀にも及ばず打立んとす。姜維が曰、御邊の勢五千餘騎は甚だ過たり、三千人を引て米を運ばしめよ、殘る二千の勢は我乃ち案內者として祁山に出ん。王瓘疑はれんことを怕れ三千餘騎にて出ければ、二千の勢は姜維が方に留めて大將傅僉が手に屬せしむ。暫く有て夏侯霸來り姜維に向て申けるは、何故に王瓘が降參を

曹髦を祭りければ、十日あまり過て常道郷公きたれり。賈充しきりに司馬昭を勸め、魏の正統を繼で自ら天子と成り玉へと云ければ、司馬昭が曰、昔し文王は天下を三分して其二を保ち、猶殷に事へ玉へり、此故に孔子も周を至德と稱し玉ふ、魏の武帝は猶漢の禪を受玉はず、我魏の禪を受ざるが如しと答ければ、賈充等これを聞てこそ、司馬昭が心は其子を天子にせん爲なりと知てけれ。六月甲寅の日、司馬昭自ら常道郷公曹璜を天子の位に登せ景元と改元す。曹璜位に卽て名を曹奐と改め、司馬昭を丞相晋公に封じて錢十萬貫絹一萬疋を賜ひ、百官ことごとく封賞ありて國中無事に治まり、司馬昭權を秉こと又日比に百倍せり。

○姜維棄レ車大戰

司馬昭すでに魏主曹髦を弑して曹奐を君とする由蜀の國に聞えければ、姜維大に喜び、我いま魏を伐に時を得たりとて、呉の國へ使を遣して共に兵を起させ、蜀の勢十五萬を調て數千輛の車に兵粮を積、廖化を子午谷より出し張翼を駱谷より出し、自ら斜谷より出て盡く祁山に集る。此時魏の鎭西將軍鄧艾は、祁山に陣を取て居たりしが、蜀の勢三手に分れて出來ると聞、諸將と計を議しければ、參軍王瓘すゝみ出て曰、我一つの計あり、言を以て云がたし、書付て

ひ玉ふぞと云ければ、陳泰が曰、賈充その君を弑す、早く首を刎て天地に謝すべし。司馬昭默然として良ありて申けるは、再び其次は如何すべき。陳泰が曰、賈充が首を刎る外何の次と云こと有ん。司馬昭が曰、成濟大逆無道にして仁義の君を弑せり、彼が三族を誅して罪を正べしとて、武士に命じて成濟を縛しむ。成濟大音あげ、何の罪ありて我を斬はするぞ、賈充汝が命なりと云て我に天子を弑させたりと呼はりければ、司馬昭まづ其舌を拔せ、弟の成倅と共に市に出して首を刎三族を平げしむ。其後司馬昭宮中に入郭太后に奏して申けるは、逆王曹髦兵を起して太后を弑し、百官を害せんとして却て成濟に討れたり、臣いま成濟を誅して其罪を正す、太后 詔を下して諸人の心を安からしめ玉へと云ければ、郭太后その威を畏れて之に從ふ。司馬昭乃ち太后の 詔と號して王經が三族を市に出して誅せしむ。王經すでに廷尉の方に捉はれ、老母の縛られたるを見て頭を以て地を叩き、不孝の子かゝる憂目を母に見せ申ことの哀しさよと云て哭きければ、其母笑て申けるは、人たれか死せざる者あらん、常に道に當て死せざるを畏る、今こゝに至て命を弃、わが平生の願也、何ぞ哭こと有んとて、次の日こと〴〵く市に引出されても顏色少しも變ぜず、王經に向て申けるは、我子いま死すべき道を得たり、怕るゝことと勿れとて快く笑て斬れしかば、聞人みな涙をぞ流しける。其のち太傅司馬孚王者の禮を以て

馬晉公の命なり速に弑せ。成濟戈を舞して輦に近付ければ曹髦大に怒り、匹夫いかなる無禮ぞと云も果ざるに、胷を刺て突落し成濟大音あげ、司馬晉公の命を受て無道の君を弑と呼はり、再び戈を擧て背より腹へ突透しければ、曹髦輦の下に倒れ死す。一人從ひ來れる焦伯これを見て槍を撚て蒐りけるを、成濟只一合に刺殺しけり。王經は跡より來りけるが、已に曹髦が弑されたるを見て大音あげて罵り、賈充逆賊なんぞ君を弑せると云ければ、賈充兵を下知して之を生どり、急ぎ此由を司馬昭に報ず。良ありて司馬昭來り曹髦が死したるを見て、佯て驚き頭を以て地を叩き、聲を放て哭く體をなし、百官に其由を告知さしむ。時に太傅司馬孚馳來り曹髦が屍を抱て哀み哭き、陛下の弑され玉ふは臣が罪なりと云ければ、司馬昭が曰、天下一日も君なくては叶ふまじ、早く葬りを成て別に新君を立べしとて、棺槨を備て曹髦を偏殿の西に葬る。曹髦この時年二十歳なり。司馬昭又たれをか天子と爲べきと議するに、王業が曰、武帝の孫燕王曹宇の子常道郷公いま安次縣に居玉ふ、此を立て君とすべし。司馬昭これに從ひ車駕を備て迎へさせ、其のち百官を集めて君を殺したることを議するに、尚書僕射陳泰一人來らず。此に因て其舅尚書荀顗を使として召しめければ、陳泰涙を流して出來り、喪の服を披て曹髦が靈前に詣り、拜哭して悲み祭る。司馬昭も佯て哭く體をなし、足下このこと如何思

沈これを見て密に王業と議して曰、事すでに急なり、我等空く三族を滅されんより、偕や司馬公に訴て禍を免れんとて、王經に向て、古より雖レ有ニ智慧一不レ如レ乘レ勢と云り、吾等早く司馬公に此ことを告て一命を扶らん、いざさせ玉へ作んと云ければ、王經怒て申しけるは、主憂時は臣辱らる、此天下の常なり、爭か命を惜で道に背くことをせん、我ねがはくは身を殺して仁義を成ん。王沈、王業案に相違し、王經われに從はずとて直ちに行て司馬昭に訴ふ。暫ありて魏主曹髦乃ち出て護衛焦伯と云ものに命じて、官人の召使ふ下部の類を集めさせ、三百餘人ありければ自ら劍を拔て輦にのり、鼓を打て已に南闕まで出ければ、王經地に拜伏し涙を流して申けるは、今これ等の人を以て司馬昭を伐玉はんは、羊を驅て虎の口に入が如し、空く死して何の益か有ん、臣命を惜で此ことを申に有ず、事の必ず成ざるを知故也。魏主曹髦が曰、朕すでに打出たり、汝いまは諫る事勿れとて、龍門を望んで出ければ、向より賈充鎧たる兵數千騎を率し、成倅を左に備成濟を右に備へ浩々として馳きたる。曹髦劍を執て大に怒り、朕は乃ち天子なり、汝等みだりに宮中へ入は、君を弑ん爲かと呼はりければ、賈充いそぎ成濟を呼で申けるは、司馬公つねに汝を養ひ玉ふは何の爲ぞ、今日の用に備ん爲なり、若このこと仕損じなば汝三族を滅されん。成濟戈を執て、殺べきか生取べきかと問ければ、賈充が曰、司

曹髦震ひ怕れ日を側て視居たりければ、司馬昭問て曰、われをば如何なる人と思ひ玉ふぞ。曹髦默然として答ざりければ群臣みな曰、大將軍功高く德大なり、早く晉公に封じて九錫を加へ玉ふべし。曹髦首を低て居たりしかば、司馬昭聲を荒らげて曰、われ父兄三人魏に仕て大なる功あり、今晉公たらんとす、之を許容し玉はぬか。曹髦怕れ戰て答て曰、誰か從はざる者あらん。司馬昭が曰、潛龍の詩われを以て鰍鱔とし玉ふ、是いかなる禮ぞ。曹髦答ること能はず汗を流して背を浸ければ、司馬昭あざ笑て殿を下る。百官これを見て膽を冷ずと云もの無。曹髦後宮に入日夜淚を流して、次の日侍中王沈、尙書王經、散騎常侍王業三人を召て申けるは、司馬昭が簒逆の志天下みな之を知、朕坐ら辱めを受るに忍ず、願くは汝等と共に誅伐せん。王經が曰、昔し春秋の時に魯の昭公は、季氏を討んとして却て其國を失ひ、天下の人の笑と成れり、今權柄すでに司馬昭に皈して、內外の群臣四方の武士までも逆順の道理を顧ず、皆きそひ靡て爲に命を弃んとす、陛下いま軍兵とても無大將と成べき人もなし、若辱を忍び玉はざる時は、是疾を除んとして却て疾を深する也、もし疾深き時は禍を成こと小ならず、必ず輕々しくし玉ふこと勿れ。曹髦懷より素き帛に書たる詔を出して地に投すて、是いかでか忍べき、朕が心すでに決せり、死すとも何ぞ畏れんとて、郭太后に見えて其事を告ければ、王

に上て其趣を奏せしむ。司馬昭これを聞て、さらば此時に乗て蜀を滅さんと云ければ、中護軍賈充申けるは、蜀いまだ伐べからず。司馬昭が曰、その故いかん。賈充が曰、いま天子深く將軍を疑玉ふ、若輕々しく都を出て、遠く蜀の國まで下り玉はば必ず事の變あらん、先年黃龍寧陵の井の内に顯れたる時、百官表を上て目出度瑞兆なりと申ければ、天子嘆て宣はく、是なんの目出度ことか有ん、其龍上天に在ず下田にあらず、却て井の内に在は苦を受たる幽囚の兆なりとて、自ら潛龍の詩を作り玉ひしが。詩の詞深く將軍を疑ふ意あり、其詩に曰、

傷哉龍受困　不能躍深淵
上不飛天漢　下不見於田
蟠居于井底　鰍鱔舞其前
藏牙伏爪甲　嗟我亦如然

この詩の意を以て能知玉へと云ければ、司馬昭大に怒り、此人も曹芳に效んとするかとて、賈充に向て曰、もし事の變あらば只汝が身の上にあり。賈充が曰、御心を安じ玉へ、某よく計を成ん。司馬昭左右を顧て成倅、成濟二人に向て申けるは、曹髦が首は汝兄弟が手の内にあり。二人これを聞て許諾して出ければ、時に魏の甘露五年夏四月、司馬昭自ら劍を帶て殿に昇る。

不レ如この勝軍を面目にして國に回りて人馬を息めん。廖化が曰、もし急に退かば敵必ず追來らん。張翼が曰、諸軍次第を亂さず法を守て退かしめ、我等二人後陣に備て追手を拒んとて、大軍を先しづ〳〵と退かしむ。鄧艾、司馬望この由を聞、さらば追討にせよとて急に兵を出しけるが、蜀の勢人馬亂れず前後の備整々として徐々と引ければ、鄧艾嘆じて申けるは、姜維よく孔明が兵法を傳たり、之を追ば御方却て破るべしとて盡く引回す。姜維は日夜を分たず成都に回り、朝に入て天子に見えければ、後主劉禪宣ひけるは、朕久しく卿が回らざるを見て軍民の疲んことを思ひ、此故に召回す、別に他のこと有にあらず。姜維が曰、臣祁山の軍に打勝て魏の陣を奪ひ取、すでに大なる功を立んとする所に、何故に中途にして召回し玉ふぞ、是必ず鄧艾が間諜の計に落され玉ふなるべし、臣再び師を出して天子の恩を報じ、孔明の志を繼んと奏しければ、後主默然として答玉はず、此よりして黄皓深く姜維を妬み恨るの心あり。

○司馬昭殺ニ魏主曹髦一

党均計を以て姜維を退け、祁山に回りて其事を語りければ、鄧艾大に喜び司馬望に向て申けるは、今蜀主酒色に溺て讒佞の人時を得たり、必ず久からずして内變あらんとて、党均を洛陽

負て箭四筋まで射付られたり。司馬望も夥しく討れて一處に渭南の陣に集まり、今姜維勢ひ大にして退け難し、幸に蜀主劉禪日夜酒色に溺て佞人黄皓みだりに權を專にす、間諜の計を用ひて姜維を召回させんは如何にと云ければ、鄧艾この義しかるべしとて、誰か密に蜀の都に入てこの計を成んと問に、襄陽の党均と云もの進み出て曰、某ゆいて此計をなさん。鄧艾乃ち金銀重寶を授て潛に成都に行しむ。党均忍で成都に入金銀を以て黄皓が心を結び、諸所に流言して姜維天下を怨ることあり、大軍を總て魏に降らんとすと沙汰しければ、黄皓この由を天子に奏し、事延引せば叶ふべからず、早く詔を下して姜維を召回し玉へと勸む。後主昏迷して大に驚き、追々勅を下して姜維をぞ召れける。姜維は數度の戰に打勝て心の內深く喜び、毎日魏の陣に推寄て戰ひを催せども鄧艾固く守て出ざりければ、心怪で居たる所に忽ち天子詔あり、兵を收て早々に囘れと告來りしかば、姜維その故を知ず、心驚て自ら夜を日に繼で馳囘り、廖化、張翼に命じて大軍しづ〳〵と退かしむ。廖化乃ち張翼に向て申けるは、天子いま姜維を召回さるゝは必ず敵の間諜に中り玉ふならん、孫子も將在レ外有レ所レ不レ受二君命一と云り、是ほどに戰ひ勝たる師を假令勅命なりとも退くまじ。張翼が曰、姜維每年師を出して國中の軍民一日も安からず、此故に怨を含もの多し、民の心もし變ぜば如何して國を保たん、

能この陣を布、なんぞ變法を知ざらん、此陣凡そ九々八十一の變法あり。姜維あざ笑て曰、汝試に陣を變ぜよ。司馬望乃ち中軍に入兵を此彼に排列し、良久して出て申けるは、汝わが變法を知たるか。姜維が曰、汝は是井の中の蛙なり、焉ぞ玄奥を知ん、我陣は周天の度數を按じて三百六十五の變法あり。司馬望心の内に、何とぞ時刻を移して鄧艾を後へ廻さんと思ひければ、答て申けるは、汝みだりに陣法に傲る、眞に三百六十五の變あらば試に變ぜよ一見せん。姜維が曰、わが變法を見んと思はば早く鄧艾を出せ。司馬望が曰、鄧將軍は深き計あり、汝が輩と陣法を爭ふことを好ず。姜維笑て曰、汝この處にて我を欺き留、ひそかに鄧艾を後へ廻さんと計りけるな。司馬望大に驚き兵を進めて戰はんとすれば、姜維馬の上より鞭を以て一度招くに、蜀の大軍喚て蒐り縱横無碍に蒐立ければ、司馬望なじかは怺べき、殘り少に討れて、馬物の具を打すて這々に走りけり。鄧艾は密に祁山の後へ廻りけるが、先手の大將鄭倫山の際を通る所に、忽然として鐵砲一聲ひゞき、鼓を打喊を造て一彪の軍殺到す。眞先なるは蜀の大將廖化なり。刀を舞して討て蒐り、鄭倫を馬より下に斬て落しければ、鄧艾驚て急に退かんとするに又一手の勢打て出、蜀の大將張翼勢ひに乘て攻たりしかば、鄧艾前後を包まれて討るゝ者數を知ず、命を弃て戰ひ一方を打やぶりて、這々本陣に囘りけるが、其身も痛手を

法を學びしかども更に此法を知ず、將軍よく之を知れり、明日この法を用ひて祁山の本陣を取かへし玉へ。司馬望が曰、われ此法を習と申せども姜維に及ぶこと能はず、姜維は智勇世に絶れたる上、孔明が兵法を傳て等閑の輩にあらず、我明日出て姜維と陣法を爭べし、將軍その間に一手の勢を引て密に祁山の後に廻り、兩方より夾んで攻玉へ、然る時は祁山の陣を奪べし。鄧艾甚だ喜び蜀の陣へ戰書を下して、明日陣法を鬪んと云つかはす。姜維許諾して使を囘し諸大將を集て申けるは、我諸葛武侯祕傳の兵書を受、この陣の變通共に三百六十五樣、周天の度數に法て此より外に出ることなし、鄧艾いま使を以て明日陣法を鬪はんと云送る、是必ず內に詐の計あらん、汝等これを知れりや。廖化が曰、明日陣の前にて明に見るべし。姜維乃ち張翼、廖化二人に各一萬餘騎を付て山の後に伏おき、次の日こと〴〵く祁山の前に出て陣を張。この時鄧艾は副將鄭倫を先手として、自ら祁山の後へ廻りければ、司馬望も渭南の陣を出て祁山の前に陣勢を張。姜維これを見て大音あげ、汝陣法を鬪はんと云送れり、一陣を布見物せんと云ければ、司馬望乃ち八陣を布。姜維笑て曰、これは我師の八陣なり、汝いま竊學で之を知れるか。司馬望が曰、汝が師の孔明も他人の法を竊み習へり、爭か我八陣の根本を知ん。姜維が曰、汝が八陣まことに根本ならば此陣の變法いか程かある。司馬望笑て曰、われ

又すゝみ出、姜維わが變法を見たるかと呼はりければ、姜維笑て曰、汝が變法此の如ならば我八陣と戰ふべきか。鄧艾が曰、われ何ぞ戰はざらんとて、隊伍を亂さず次第に進めば、蜀の勢も盡く打向ひ、鄧艾中軍に在て下知をなし、初の程は互に八陣を衝て戰ひ、共に破られず圍れず時すでに移ければ、姜維中軍に入旗を執て左右を招ば、忽然として變じて長蛇捲地の陣となり、鄧艾を眞中に取込て四方八面喊の聲地を震ふ。鄧艾は此陣法を知ず、心の中大に怕て次第に蜀の勢近付ければ、諸軍と力を合せて一方を蒐やぶらんとすれども、敵の圍いよ〳〵重り、鄧艾早く降れと呼はる聲諸處に聞えければ、鄧艾大に哭き、我自ら其能に傲て姜維が計に中れり、如何せんと云ける所に、忽ち西北の方より喊の聲響て一手の勢打て入。鄧艾これを救の勢と見て、力を奮て這々に逃れたり。鄧艾を救ものは司馬望なり。一手に成て本陣へ回らんとすれば、祁山に構たる九箇處の陣屋すでに蜀の勢に取れたり。鄧艾驚て渭水の南に陣をとり、司馬望を召て申けるは、我すでに危かりしに御邊なにとて姜維が陣法を知て助玉ひし。司馬望が曰、われ昔し荊州に遊學して、孔明が友に崔州平、石廣元など云ものと交り、此陣を習ひ聞り、向に姜維が變ずる陣は長蛇捲地の陣なり、若他の所より討ては破るゝと云ことなし、吾その首西北に在を見て、首より打て入たれば自ら亂れたり。鄧艾拜謝して曰、われ多の陣

と問に、一人走り來り魏の勢内外より攻て、左の陣すでに破れたりと告ければ、姜維馬に打のり兵を四方に備て中軍の前に立、妄に動ものは立所に斬んと下知して、右の陣屋へも其趣を觸つかはす。案の如く魏の勢勝に乘て十度餘り攻入んとするに、蜀の勢湛然として動ず、鏃を調て射たりしかば、鄧艾曉まで戰ひ了に引て囘りけるが、深く嘆じて申けるは、姜維よく孔明が傳授を得たり、此の如く計を用ひても亂れず、急には中々退け難からんとぞ感じける。次の日王舍、蔣斌敗軍を引て中軍に來り、拜伏して罪を請ければ、姜維が曰、汝等が罪に非ず、此わが地理を明にせざる故なりとて又兵を分與へ、討れたる屍を敵の掘たる地の中へ埋させ、魏の陣に戰書を下して明日勝負を決せんと云つかはしければ、鄧艾喜で許諾す。次の日兩方の軍勢祁山の前に打のぞみ、姜維まづ孔明が八陣の法を守て、天地風雲鳥蛇龍虎の形を成て八門を備ければ、鄧艾これを見て又魏の勢を備て八陣を布、左右前後こと〴〵く相同じ。姜維槍を提て馬を出し、鄧將軍に對面せんと呼はりければ、鄧艾も馬を陣前に乘出す。姜維大音あげて、汝いま我法に效て八陣を布、汝よく變法を知たるかと云ければ、鄧艾笑て申けるは、この陣は汝が師の孔明ならでは知ものあらじと思へるか、天下の人こと〴〵く之を知、われ何ぞ變法を知ざらんとて、馬を囘して旗を持て左右を招けば、變じて八々六十四の門戸となる。

下を定めんと欲す、先いづくより攻べきぞ。夏侯霸が曰、祁山は敵少々備ありと申せども眞に武を用るの地なり、此故に孔明六回まで此處より出玉へり。姜維この義に同じて盡く祁山を望で進發し、谷の口に陣をとる。此時魏の鎭西將軍鄧艾は隴右の勢を集め、祁山に陣屋を構て居たりしが、蜀の勢すでに谷の口まで出て、三箇處に陣を取たりと告るを聞て、自ら山に上て之を望み、我計る所に出ずと云て大に喜ぶ。是元來鄧艾よく其邊の地理を考て、蜀の勢の陣を取べき處を見定め、祁山より遙に地の底を掘て路をこしらへ置り。今蜀の勢案の如く望む處に陣を取ける故に此の如く喜ぶ也。姜維は浩ることをも知ず、地理を考て中軍の陣屋を構へ、右の陣には蔣舒、傅僉、左の陣には王含、蔣斌共に兵を分て之を守り、俄に柵を結逆茂木を構て四方の門いまだ備らず、鄧艾が掘たる路は左の陣中に通ぜり。其夜鄧艾わが子の鄧忠と大將師纂とに、各一萬餘騎を付て左右より蜀の陣に向はせ、又副將鄭倫に五百の勢を付て彼地の底より潛入しむ。蜀の陣には要害いまだ備らざれば、萬一敵の寄る事有んとて一人も油斷せず、左の陣にも王含、蔣斌二人甲をも卸ずして居たる所に、其夜の二更に俄に陣中上を下へと騒動して、又外より敵一萬餘騎にて推よせ、内外より散々に攻やぶる。王含、蔣斌命を弃て戰ふと云ども敵御方を見わけ難く、互に自ら騒亂して盡く逃わしる。姜維は中軍に在て何ごとぞ

胡氏

劉琰
劉琰疑
悪して妻
撻胡氏
をせむ

通俗三國志　卷之四十八

○姜維祁山布ニ八陣ヲ一

蜀の景耀元年大將軍姜維又二十萬の勢を興し、廖化、張翼を先手とし、王含、蔣斌を左備とし、蔣舒、傅僉を右備とし、胡濟を後備として魏を伐んとす。此時後主劉禪専ら酒に溺れ色に耽て、中貴黃皓と云る佞人を用ひ、萬づ一人に任せて日夜政を治ず、後宮に在て酒を飲玉ふ。黃皓又美女を擇で獻り、後主の心を惑して擅に逆威を震ふ。時に劉琰が女房に胡氏と云ものあり、顏色きはめて絕ければ宮中に入て皇后に見ゆ。皇后これを一月あまり留め置、その後家に回し玉ひければ、劉琰心の內に我女房の後主と私に通じたるかと疑ひ、手下の軍兵五百人を廣庭へ召出し、女房胡氏を縛て其顏を履を帶ながら蹈せける。後主この事を聞玉ひ、古より生たる人の顏を蹈刑罰を聞ずとて、武士に命じて劉琰を捉へ、五百人の士卒と共に市に出して斬せらる。是より命婦朝廷に入ことを容ず。去ほどに姜維すでに漢中に出、諸將を集めて申けるは、我每度師を出して功を成ず、心の內深くこれを愧、いま魏國臣強して君弱し、此時に乘て天

あらば、爭か渚る淺猿きこと有んとて、又書簡を蜀の國へ遣し、今司馬昭權を執て魏主曹髦を小兒の如く輕んず、旦夕に必ず變あらんと告ければ、姜維大に喜び又師を出して魏を伐んと議す。

り、餘は盡く宥と呼はりければ、内外みな安堵をなす。吳主孫休自ら武鳳樓に昇て見れば、丁奉等すでに孫綝が四人の弟を生取來る。乃ち詔を下して盡く市に引出して誅せしめ其三族を平げ、兵に命じて孫峻が墳を發き屍を出して其首を斬しめ、諸葛恪、滕胤、呂據、罪なくして殺されしかば、重く其墓を封じて忠義を現はし、遠國へ流されたる者を召回し、百官みな封賞ありて國中よく治りければ、薛珝と云ものを使として蜀の成都に遣し、後主劉禪といよ〳〵同盟の交を結ぶ。後主も使を馳て賀を述玉ひしかば、互に力を幷て魏を伐んと約す。薛珝使して蜀より回りける時、吳主孫休蜀の樣子を問に、薛珝答て申けるは、臣蜀に行て其體を窺ひ見るに、國は早滅亡に及んで候、近比中常侍黃皓と云ふもの讒佞にして權を執、内外の政みな己が心の儘に行ひ、罪なきも罰せられ功あるも賞せられず、其諂諛の甚き昔の十常侍に超たり、此故に百官こと〴〵く黃皓一人に阿り諛ひ、己が身の爲にして死を免んとす、主は昏して之を知ず、酒色に溺て國の費を顧ず、朝廷を見るに直言して君を諫る臣なく、野外を見るに百姓憔悴して顏色みな菜の色よりも青ざめたり、臣古より聞し事あり、燕雀の堂に巢をくふ、子母相樂でつねに安しと思へり、其家俄に失火ありて、棟の焚に至るまで燕雀怡然として禍の及ぶことを知ず、今蜀の氣色殆ど此に類せりと語りければ、吳主孫休天を仰で嘆じて曰、孔明もし生て

大木根より拔て曉に至て少し靜る。孫綝すでに起あがり座を起て行に、人の推倒が如くなりければ、心甚怪む所に天子勅使あり、今日は臘日にて百官と酒宴す、丞相も速に出て朝賀あるべしと告ければ、孫綝いそぎ車に乘て出んとす。其妻諫て申けるは、昨夜俄に大風起り、今朝又無故に倒れ玉へり、今日の會には出玉ふ事勿れ。孫綝が曰、今日は百官の朝賀あり、我國の執權として御林の軍馬は兄弟共に總司る、何事の畏か有ん、萬一事の變あらば、早く府中に火の手を擧て知せよと云おき、車に乘て出ければ、吳主孫休座を起て之を迎へ、孫綝に上座を讓る。酒宴すでに數刻に及びける時、諸人みな立さわいで營外に火燒出たりと云ければ、孫綝も自ら出んとするを孫休推止めて曰、丞相穩に坐せよ、營中に士卒多し、是ほどの失火は忽ちに打滅べし。時に左將軍張布自ら劍を拔て武士三十餘人を引て踊出、詔あり反賊を擒にすと呼はりければ、孫綝急に逃んとするを、武士共押止て繩を掛たりける。孫綝頭を以て地を叩き、願くは臣が命を扶け交州へ流して百姓となし玉へと云ければ、孫休叱て曰、汝なんぞ滕胤、呂據を百姓に爲ずして殺したるぞ。孫綝又淚を流し、ねがはくは一命を扶て奴とし、百官の使ものとなし玉へと云ければ、孫休が曰、汝なんぞ滕胤、呂據を奴となさゞるぞ、早く引出して殺せと云ければ、張布乃ち孫綝を市に出して寸々に斬、其のち聲を擧て、罪孫綝一人にあ

五人の諸侯あり。皆御林の軍馬を司る。冬十二月に至て呉主孫休、左將軍張布を使として牛酒を大臣の家に分ち送らしむ。張布まづ孫綝が家に到りければ、孫綝牛酒を飲で大に醉仰のけに臥て申けるは、向に孫亮を廢せし時、人みな我を勸て天子と爲んとす、我孫休が賢なるを知て了に立て天子とす、我もしこの心なくんば彼は只瑯琊王にて朽果べし、今より後われを敬ひ尊ずんば、吾必ず目に物見せんと云て恨聲絶ず。張布回りて右の趣を告ければ、孫休大に畏て心日夜に安からず。數日過て孫綝いかゞ思ひけん、中書郎孟宗を大將として、中營の精兵一萬五千を武昌へ出して陣を取せ、庫の内なる武具を盡く運ければ、將軍魏邈、武衞士施朔と云もの二人、ひそかに孫休に告て曰、孫綝いま兵を外に屯して多く武具を持運ぶ、逆心すでに露れたり、近内に必ず事を起べし。孫休いそぎ張布を召で如何せんと議するに、張布が曰、老將軍丁奉を召て圖るべしとて、丁奉を招て右の事を語る。丁奉が曰、御心を安じ玉へ、老臣一つの計あり、國の爲に害を除かん。孫休問て曰、いかなる計ぞ。丁奉が曰、明日は幸に臘日にて候へば、百官の宴會に事を託て孫綝をも招き玉へ、臣自ら計を成ん、陛下先孫綝を誅せよと云の詔を書て下し玉へ。孫休乃ち手づから書て與へければ、丁奉ひそかに魏邈、施朔と外に出て兵を調へ、張布に宮中の事を謀らしむ。其夜俄に大風吹起て沙を飛し石を走らしめ、

たとひ命を失ふとも賊臣に從はじと罵りければ、孫綝甚だ怒り自ら劒を拔て首を斬、つひに宮中に入て呉主孫亮を呼出し、無道の昏君、われ元其首を斬て天下の人に謝せんと思へども、先帝の恩を思ふ故に汝を貶して會稽王とす、我別に德ある人を君とせんとて、中書郎李崇に命じて其玉璽を奪ひ取せければ、孫亮痛く哭て泣々會稽へ赴ける。文武の百官これを見て淚を流さずと云ものなし。孫亮時に年十七歲なり。孫綝乃ち宗正孫楷、中書郎董朝二人を虎林に遣し、瑯琊王孫休を迎へて天子とせんとす。孫休は孫權が第六の子なり。虎林に在て或夜龍に乘て天へ上るに、後を顧れども龍の尾見えずと夢を見て驚て覺けるが、次の日孫楷、董朝二人來て都に上り玉へと云ければ、初めは心疑ひけるが、事の子細を委く聞て、早く打立て曲阿まで來るに、怪げなる老翁忽然として出來り、我は于休と云もの也、事久して必ず變じ、天下噪々たるべし、願くは陛下速に行き玉へと再拜して申ければ、孫休是を謝して布塞亭まで來りけるに、武衞將軍孫恩輦を備て出迎ふ。孫休辭して乘ず、乃ち小車に乘て入ければ、百官ことごとく道の傍に拜迎す。孫休車より下て答禮しければ、孫綝急に迎て宮中に入、皇帝の位に登せて傳國の玉璽を渡し、百官ことごとく萬歲を唱て大禮了りければ、天下に大赦を行て永安元年と改め、孫綝を丞相荊州の牧に封じ、兄の子孫皓を烏程侯に封ず。此より孫綝彌權を執て一門

は大事なり、謹で輕んずること勿れ。全紀が曰、臣ねがはくは此賊を誅して御心を安からしめん、陛下まづ詔を書て臣に賜へ、勅命なりとて兵を招ば從はざる者あるべからず。孫亮實にもとて手づから書て與へければ、全紀わが家に回り、此程の大事を母に知さずとも父には知しむべしと思ひ、密に父の全尙に語る。全尙は此時太常たりしが、此事を聞て其妻に告て申けるは、天子の詔を得て三日の內に孫綝を殺す。其妻さらに驚かざる體にて、私に人を遣し弟の孫綝に告知せければ、孫綝大に怒り四人の弟を召で相議し、大軍を以て內裏を圍み、全尙劉丞が家を取卷て一人も殘さず斬殺す。孫亮は曉宮門の外に鼓の聲の響を聞、これは何事ぞと問に、內侍走り來て曰、孫綝大軍を引て攻來れり。孫亮大に怒り全皇后を罵て申けるは、汝が父國家の大事を誤る、朕は乃ち皇帝の嫡子、誰か命に從はざらん、朕位に卽いてより已に五年、國の人に害をなさず、何の愧る事か有べき、自ら出て戰はんとて劍を拔て出んとするを、皇后、近臣、其外內侍、乳母なんど云もの裙を引て哭き號ぶ。孫綝は文武の百官を朝に集め、今天子荒淫にして病多く、昏亂にして無道なり、吾これを廢して新君を立んと欲す、汝等從はざる者は必ず反逆の心あるならんと云ければ、百官みな其威を怕て、誰か從はざる者候はんと答ける所に、尙書桓彝進み出て曰、汝伊尹、霍光が才なくして、焉ぞ聰明の君を廢せんとする、吾

門官私に梅を求む、然れども臣肯て之を與へ候はず。孫亮乃ち黄門官を叱て申けるは、この鼠の糞は必ず汝が所爲ならん。黄門官さらに伏せず、努々左樣の事候はずと云ければ、侍中刁玄、張邠二人申けるは、黄門官と藏奉行とが申ところ言の相違あり、獄に下して拷問せん。孫亮が曰、獄に下までもなし、之を知こと極めて易し、鼠の糞原より蜜の中にあらば内外みな濕はん、若いま俄に入たるならば内乾て外濕んとて、剖破て見るに果して内は乾きたり。此故に黄門官言なくして罪に伏す。孫亮が聰明大抵此の如く日月の明なるが如しと云ども、孫綝が勢ひを畏て自ら政を專にすること能はず。孫綝四人の弟あり。共に軍權を執て、威遠將軍孫據は蒼龍宿を衛り、武衛將軍孫恩、偏將軍孫幹、長水校尉孫闓、こと〴〵く御林の軍馬を司る。孫綝は朱雀橋の邊に己が居處を構て、常に虛病して朝に出ず。吳主孫亮これを怕れて日夜心を安んぜず。黄門侍中全紀と云ものは全皇后が父にして、孫亮が爲に舅也。常に忠心を以て事へければ孫亮その志を知、或時一人來て側に在ける故、涙を流して告て申けるは、孫綝みだりに逆威を震て罪なきに人を殺し、朝綱を專にして朕を芥の如に輕ず、今これを除ずんば了には大なる患を成ん、此故に卿に告、急ぎ將軍劉丞と計を設け、禁兵を起して城門を固よ、朕自ら出て誅伐せん、此こと必ず汝が母に告ること勿れ、汝が母は孫綝が姉なり、若洩聞る時

黄門官

番魏を伐ことも又畫餅となれり、早く退かんには不レ如とて、先歩立の勢を退け、騎馬の勢を後陣として徐々と引退く。鄧艾これを聞て笑て曰、姜維今退くは大將軍の勢の來るを知て也、必ず追こと勿れ、若追時は彼が計に中らんとて、密に人を遣して見せしむれば、案の如く駱谷の細路に乾ける柴を積置り。諸人みな怕れ驚きければ、鄧艾が曰、これ追手を燒ん爲なりとて、表を上て洛陽へ報じければ、司馬昭大に喜で重く恩賞を施しける。

○孫綝廢二吳主孫亮一

吳の大將軍孫綝は、淮南やぶれて諸葛誕すでに滅び、全端、唐咨、王祚等は吳の勢を引て魏に降りぬと聞て大に怒り、降參したる諸將の妻子一類を市に出して首を刎けり。吳主孫亮つねに孫綝が妄に人を殺を見て心の內深く怕る。或日孫亮西苑に出て遊び、傍なる黃門官に命じて藏の中なる密漬の梅を取來らしめ壺を開て梅を出に、內に鼠の糞あり。孫亮藏の奉行を呼、なにとて此の如くなるぞと責ければ、奉行答て申けるは、某つねに藏を守り、壺の口を嚴く封じて候へば、鼠の糞あるべき樣候はず。孫亮心に屹と悟り、此は必ず奉行に恨ある者の所爲ならんと思ひ、此黃門官いつにても汝に梅を求めしことは無りけるかと問に、奉行答て曰、四五日已前に黃

司馬望に書簡を送りて申けるは、御方宜く堅固に守り、出て戰はずして關東より大勢の來るを待うけ、蜀の勢の兵粮につまるを窺て急に三方より攻やぶらんに、勝ずと云こと有べからず、相構て能々城を守り玉へと云つかはし、司馬望小勢なれば行て之を助よとて、鄧忠に勢を分て城内へ入しめ、早馬を立て司馬昭に救を求む。姜維は戰書を下して鄧艾と勝負を決せんと云ければ、鄧艾詐て、明日戰はんと答ふ。姜維これに因て其夜の五更に兵粮を使ひ、曉より出て陣を張、いまや出ると待に、鄧艾が陣には鼓を息、旗を伏て人ありとも見えず。昏に及ぶまで一人も出ざりしかば、姜維空く引回し、又戰書を下して約に背ける罪を責。鄧艾その使に對面して酒を飲せ、われ昨日少の病ありて約に背けり、明日必ず戰を決せんと答ふ。使かへりて其由を告ければ、姜維又次の日の早天より出て待けれども、鄧艾昏に及べども出ず。此の如くなること五六度に及びければ、傅僉諫て申けるは、必ず鄧艾が深き計にて候はん。姜維が曰、これは必ず關東より助の勢を招て、吾を三方より攻るの計ならん、吾まづ吳の國へ書簡を送て孫綝に魏を伐しめん、然る時は關東の勢こゝを救ふに暇あらじとて、已に使を出さんとする所に、早馬來て告て曰、司馬昭すでに淮南を平げて諸葛誕が三族を滅す、吳の勢も戰に負て盡く魏に降り、司馬昭大軍を引て此處を救ふ、御用心あるべしと報じければ、姜維大に驚き、今

て之を見るに、魏の勢旗を進め浩々として出來る。さては後攻の勢きたれりとて、急に後陣を先陣として自ら馬を出しければ、魏の勢の中より年の程二十あまりなる大將槍を提て蒐出、鄧將軍を知れりやと呼はり馬を飛して突て蒐る。姜維心の内に是定て鄧艾ならんと思ひ、自ら馬を交て五十餘合戰ひ、勝負さらに分れざりしかば、姜維いつはりて山路を指て逃わしる。彼大將のがさじと追かけ來るを、鵰の羽にてはいだる鏑矢を番ひ、彀よく成ける時引囘して丁と射るに、彼大將弦音を聞て急に首を伏たりしかば、鏑は鳴ひゞいて遙に上を射越けり。姜維後を顧るに彼大將すでに近付、槍を取のべ突んとしければ、急に身を避て其槍を引奪ふ。此に依て彼大將本陣を指て走りければ、姜維甚だ嘆息し可レ惜可レ惜と云て追かけ、已に魏の陣に近付たるところに、一人の大將身の長七尺あまりなるが、刀を提て踊出、姜維匹夫わが子を追こと勿れ、鄧艾こゝに在と呼はりければ、姜維大に驚く。元來さきの大將は鄧艾が子の鄧忠なり。姜維心の内に鄧忠が武藝を感じ、又鄧艾と戰んには馬疲れて叶はじと思ひ、大音あげて、われ今日汝父子を見知たり、共に軍を休て明日快く勝負を決せんと云ければ、鄧艾も軍の利なきを見て答へて曰、已に此の如ならば互に暫く軍を收ん、詐る時は大丈夫にあらずとて相引に引退き、姜維は兩山に跨て陣を取、鄧艾は渭水に據て寨を下す。鄧艾その後蜀の陣取の體を窺ひ、

必ず簒逆の企ならん、我今天子の勅命を受兵を引て罪を正す、汝もし早く降らずんば、一々に首を刎んと罵りければ、司馬望大に怒り、汝等無禮みだりに上國を冒す、刀の頸に臨を待かと云て自ら槍を撚て出ければ、蜀の大將傅僉馬を交て十合あまり戰ひ、詐て引退く。魏の陣より大將王眞のがさじと追來るを、傅僉しり目に睨で交ひ近く成ける時、引回してむずと組ちつとも働さず、馬の上にて生取脇に挾で回りければ、李鵬馬を飛して追かくる。傅僉これを見て、十分に力を出して王眞を地の上に投すて、四角なる鐵の棒を持て李鵬が近付て刀を擧んとする所を、急に引回して盔の眞甲を破よ碎よと打ければ、李鵬が眼迸り出馬より落て死にける。王眞は地に投られて蜀の勢に寸々に斬れしかば、司馬望怕れ驚て退かんとするを、姜維大軍を驅て攻たりしかば、討るゝ者麻の如く這々のがれて長城に逃こもる。姜維下知を下して申けるは、諸軍今夜は盡く休み、明日早々に力を併せて城を攻よとて、一夜人馬を休め、次の日大軍こと〴〵く城を圍で、火矢を射かけ鐵砲を打かけしかば、城中これを防兼て焔さかんに燒あがる。姜維敵の色めきたるを見て、城の四方に乾ける柴を積、一度に火を付たりしかば、火焔天を焦して此城すはや落んと見えたりけり。城中には此を見て喚き哀む聲やまず。蜀の勢は氣に乘て壁を踰逆茂木を破りて入んとす。時に何くとも知ず喊の聲大に響ければ、姜維馬を回し

分虎裂、疾搏者獲多、遲後者見レ呑。方二今之始一、皆傳レ國易レ世矣。既非二秦末鼎沸之時一、實有二六國併據之勢一、故可レ爲二文王一、難レ爲二漢祖一。夫民之疲勞則騷擾之兆生。上慢下暴則瓦解之形起。諺曰、射幸數跌不レ如二審發一。是故智者不下爲二小利一移上レ目、不下爲二己意一以改上レ步、時可而後動、數合而後擧。故湯武之師不二再戰一而克、誠重二民勞一而度レ時審。　如遂極レ武黷レ征、土崩勢生、不幸遇レ難、雖二智者一將不レ能レ謀レ之矣。若乃奇變縱橫出入無レ間、衝レ波截レ轍、超レ谷越レ山、不レ由二舟楫一而渡二盟津一者、此伏愚之所レ不レ及也。

姜維見了て大に怒り、此腐れ儒者の論なりとて扯裂て地に弃、兵を引て即時に打立、まづ何くより攻んと議するに、傅僉が曰、長城は魏の兵粮を貯へたる處なり、今駱谷より沈嶺を超て長城を攻、その兵粮を燒すてゝ秦川に向ひ玉へ。姜維喜び、この計わが意に合へりとて駱谷より打向ふ。長城には司馬昭が一族司馬望と云もの、元より鎭守將軍に封ぜられ此を守て居たりしが、蜀の勢寄ると聞て大に驚き、王眞、李鵬と云二人の大將を呼よせ、この城兵粮は多けれども勢寡し、如何すべきと議しければ、二人答て曰、某等ねがはくは命を弃て戰ん、將軍さのみな怕れ玉ひそ。司馬望しからば打て出て支んとて、二十里出て陣を取、次の日蜀の勢近付ければ、自ら王眞、李鵬を引て馬を出す。姜維これを見て大音あげ、司馬昭その主を軍中に移す、

ひ、兩都の勢二十萬を率して淮南に下れりと告ければ、姜維大に喜び、事すでに成就せりとて表を上て後主劉禪に奏聞し、兵を引て魏を伐んとす。中散大夫譙周この由を聞て長く嘆き、蜀の勢每年師をして傷を病もの數を知ず、盡く怨を含む、姜維時の務を知ず天に背て強て事を行はんとす、剰へ天子つねに酒色に溺れ玉ひて、中貴黃皓みだりに國の政を行ひ、日夜遊び樂んで下の憂を顧ず、國すでに危しとて仇國論一篇を作て姜維に送る。姜維ひらき見るに、其論に曰、

或問、古往能以レ弱勝レ強者乎。伏愚子答曰有レ之。高賢卿曰、用二何術一以勝レ之。伏愚子答曰、處二大國一無レ患者恒多レ慢、處二小國一有レ憂者恒思レ善。多レ慢則生レ亂、思レ善則生レ治理之常也。故周公養レ民、以レ少取レ多、越勾踐恤レ衆、以レ弱斃レ強、此其術也。賢卿又曰、曩者楚強漢弱、相與戰爭無二日寧息一、然項羽與レ漢約分二鴻溝一爲レ界、各欲二皈息一レ民。張良以爲、民志既定則難レ動也、尋レ師追レ羽、終斃二項氏一。豈必由二文王勾踐之事一乎。伏愚子笑曰、賢卿止知二其一一、不レ知二其二一也。昔商周之際、王侯世尊、君臣久固、民習レ所レ傳、深レ根者難レ拔、據レ固者難レ遷、當二此之時一、雖レ有二漢祖一、安能仗レ劍鞭レ馬以取二天下一乎。當二秦罷レ侯置レ守之後一、民疲二秦役一、天下土崩、或歲改レ主、或月易レ公、鳥驚獸駭、莫レ知レ所レ從。於レ是豪傑並爭、狼

な本國に放して回らしめ、中國の寛大なるを知しめ玉へ。司馬昭實にもと同じ、是妙論なりとて呉の勢を盡く回らしむ。されども大將唐咨は孫綝が罪せん事を畏れ、長く魏に事んと望みければ、司馬昭乃ち重く用ひ、淮南すでに治りしかば、都へ回らんとする所に、忽ち早馬急を告て、蜀の勢長城を攻ると報じければ、上下みな怕れ驚て、取ものも取あへず洛陽を指て馳回る。

○姜維長城戰ニ鄧艾一

蜀の延熈二十年改めて景耀元年とす。姜維漢中に在て新に蔣舒、傅僉と云二人の大將を擇び、毎日軍馬を調練して夏侯霸に向て申けるは、御邊往日、鄧艾は少しと云ども輕ずる敵にあらずと云玉ひしを、我なに程の事か有んと思ひ侮りしが、近ごろ其計に逢て初めて心驚く、恨らくは其面を見知らず。夏侯霸が曰、鄧艾身の長七尺、濶面大耳、方頤大口、言語蹇澁なる故に、世の人呼で鄧吃と號す。姜維が曰、われ自ら天下に及ぶ者あらじと思ひしが、累に鄧艾が計に破らる、必ず誓て此恥を雪ん。時に細作來り、近ごろ淮南の諸葛誕兵を興して司馬昭を伐んとす、呉の大將孫綝これを助て壽春城に楯こもる、司馬昭これを滅さん爲に魏主幷に太后を作

の勢數百人を引て城を出けるに、壕の邊にて魏の胡奮に出合、一刀に斬て落され其勢こと〲く生取れにけり。魏の大將王基は西の門より攻入けるが、吳の大將于詮に出合、なんぞ早く降らざると呼はりければ、于詮怒て申けるは、大丈夫の士、主の命を受て敵に向ひ、功を成こと能はずして却て他人に降らんは、是禽獸の行なりとて、披たる盔を取て地に投すて、人生在世、得死於戰場、幸なりとて、大勢の中へ蒐入て三十餘合戰ひ、馬すでに疲れければ了に亂軍の中にて切死にぞしたりける。司馬昭すでに城中に入りて諸葛誕が三族を平げ榜を出して民を安ず。武士共諸葛誕が麾下の兵數百人を生取來りければ、降る者は扶けんと云に、諸軍みな、ねがはくは諸葛公と共に死せん、何ぞ敵に降るべきと云。司馬昭大に怒り、城外に引出して一々尋ね問て、降らんと云ものあらば助よと下知すれば、武士共まづ一人を斬殺して、汝等みな此の如なるべきか、早く降れと云けれども數百人の者共、一々問て殺し盡まで降らんと云もの一人も無りけり。司馬昭これを聞て心の內感嘆して休ず、皆屍を一處に葬らしむ。散騎長史裴秀きたり見えて申けるは、吳の勢いま御方に降れども、妻子一族本國に在ば、後には盡く心を變ずべし、不如みな坑に入て埋殺し玉へ。鍾會諫て曰、古の兵を用ふる者は國を全するを上として、其惡人の張本を誅する而已、いま盡く埋殺さんは不仁の甚だしき也、不如み

その子をも捉へんとす。文鴦、文虎父が斬られたるを聞て怕れ驚き手下の兵を調ける所に、諸葛誕大勢にて攻きたりしかば、二人刀を拔て喚て蒐り、近付敵二十餘人を斬倒し城を出て魏に降る。司馬昭さきに母丘儉を破りし時、文鴦只一騎大勢を蒐散して比類なき擧動を見せたれば、心の内深く恨み斬て弃んと云けるを、鍾會諫て曰、文欽父子その罪宥し難しと申せども、文欽いま諸葛誕に殺され、二人の子のがるべき路無して來り降る、今この城いまだ落ざるに、若降參の人を殺さば敵の心を固する也、必ず逃れざるを知て命を弃て防べし。司馬昭これに從ひ文鴦、文虎を召て、駿馬錦の袍を與へ偏將軍關内侯に封じければ、二人拜謝して城の四方を打巡り、我等今までの罪を宥され却て爵祿を賜たり、汝等何とて早く降らざるぞと呼はりけるに、城中の勢これを見て餓を苦こと日久しかりしかば、皆相集りて議して曰、文鴦は魏の爲に大なる讐ある人なるが、今重く用ひられたり、況んや我等を用ひ玉はぬ事は有じとて、三千餘人志を合せて降らんとす。諸葛誕これを聞つけ、日夜自ら城を巡りて降らんとする者を斬殺す。鍾會城中の變を知て司馬昭に見え、時すでに到れり、急に攻玉へと云ければ、司馬昭尤と同じ、三軍の心を激して四面雲の如に集まり、喚き叫で攻けるに、元の關戸を守る大將曾宣と云もの門を開て降人となる。此より魏の勢こと〴〵く亂れ入ければ、諸葛誕力を失ひ、麾下

されども寄手大勢にて城中次第に弱りければ、諸葛誕心の内安からず。時に手下の大將蔣班、焦彝二人きたり、城中すでに兵粮少して久しく守ること成がたし、不レ如今吳の勢を一手に合せて、城外に討て出快く勝負を決すべし、若この儘にて城を守らば、次第に力疲て自滅を求むるならんと云ければ、諸葛誕怒て曰、われ已に下知を成て固く城を守るべしと觸たるに、汝等出て戰んと云は逆心あるにては無か、再び出んと云もの有ば必ず首を刎ん。蔣班、焦彝大に嘆て曰、諸葛誕いま滅んとす、我等早く魏に降て一命を扶からんとて、其夜二更の比、壁を踰て城を出つひに魏の陣に行て降人となる。司馬昭二人を重く用ひければ、城中の將士戰ふ心ある者も皆口を閉て居たりけり。魏の勢は四方に堤を築て淮水を防ぎ、山を築て城を攻ければ、諸葛誕これを見て水の漲り出たる時、勢ひに乘て討んとするに、秋より冬の末に至るまで、雨ふる事も無りける故淮水つねよりも水少し。兎角する間に城中すでに兵粮盡て、倒れ死する者も多かりければ、吳の大將文欽、二人の子と一方を固めて居たりしが、斯ては叶まじとて諸葛誕に告て申けるは、城中兵粮につまりて兵みな弓をも墓々しく挽こと能はず、不レ如北國の勢を城外へ追出して兵粮の費を省き、吳の勢ばかりを殘して固く守らば長久の計ならん。諸葛誕大に怒て曰、汝わが手の勢を盡く出して、其のち我を擒にせん爲かとて、推出して首を斬

の聲を揚、二手の勢路を横ぎりて、左に王基右に陳騫引包んで攻ければ、呉の勢大に亂れて殘り少に討れ、安豐にも住まり得ず江の邊まで逃ければ、孫綝いよ〳〵怒り、累敗の將なんの用にか立べきとて、鑊里と云所へ引出して了に朱異が首を斬。その後唐咨等を呼よせ、汝もし壽春城の圍を解ずんば、來て我に見ゆること勿れと云て自ら建業へ囘りけり。壽春城へ入たる呉の大將全端が子の全禕と云もの、孫綝が罪せん事を畏れ、魏の陣に行て降人と成ければ、司馬昭用ひて偏將軍とす。此に因て呉の勢みな力を失ひ、大半退て舟に乘しかば、鍾會これを見て司馬昭に申けるは、呉の孫綝すでに退て外に救の勢なし、この城いまは四方を圍で攻玉へ。司馬昭實にもと喜び大軍四方を圍で息をも繼ず攻戰ひ、射ちがふる矢は雨の如く、鐵砲を飛し石を投打こと蝗の飛よりも猶しげし。全禕は新に魏に降て司馬昭が恩を感じ、自ら一通の書簡を封じて箭に挿み城中へ射入ければ、父の全端これを見るに、今孫綝不仁にして妄に人を殺す、若この度の軍を仕損じなば、一族こと〴〵く誅せらるべしと書たりしかば、ひそかに全懌と相議し、呉の勢數千人を引て魏に降る。城外の寄手これを見て勢ひに乘て攻入んとしけるを、諸葛誕自ら攻口に出て防ぎ戰ふ。魏の勢は築山に上て城を目の下に視下し、射手を揃て散散に射る。城中にも此を先途と大石を投かけ鐵砲を飛し、一日一夜戰うて兩方の死人數を知ず。

追討にし玉はば十分に利を得べし、推量するに呉の勢は兵粮の用意乏からん、我騎馬の精兵を引て密に其後に廻り、彼が運送の道を塞ば戰はずして亂るべし。司馬昭大に喜び、我いま子房を得たりとて急に大將王基に命じて、南の圍を解て三方より攻させ、土を搬で山を築き、その上に矢倉を構けるに、折節淮水溢れ漲て、築山こと〴〵く推流さるれば、城中より聲を擧てあれ見よと嘲り笑ふ。呉の勢は初度の軍に利を失て、安豐まで退きければ、大將軍孫綝大に怒り、朱異、文欽等を責て申けるは、汝等この敵を破ること能はずんば安んぞ魏を滅ことを得ん、若重て打負なば必ず汝等が首を斬ん。大將于詮すゝみ出て申けるは、いま壽春城魏の勢に圍れて、城中の勢その心一同ならず、某一手の勢を引て城中に入、共に力を合せて守るべし、諸大將は外より敵を攻玉へ、某は內より討て出ん、然る時は魏の勢度を失て敗亡すべし。孫綝これに從ひ、全懌、全端、文欽、于詮等に一萬餘騎を付て壽春城に入しむ。魏の勢これを見て、俄の事なれば大將の下知なき故に輕々しく戰はず、呉の勢南の門より城中へ入たる由司馬昭に報じければ、此定めて內外より攻るの計なるべしとて、王基、陳騫に各五千餘騎を授て、呉の勢の來らんずる路に伏おき、敵きたらば只その後を圍めと下知をなす。これをば知ず呉の大將朱異は、合圖の刻限にも成ぬとて、兵を引て魏の陣へ向ひけるに、忽然として後に喊

石苞、周泰二人は二手に分れて石頭城の側に埋伏せよ、王基、陳騫二人は後陣に備よ、成倅は先手に進んで敵を誘けとて手分すでに定まり、陳俊と云ものに牛馬車仗を備へ、士卒に恩賞する物を夥しく稠で後陣にぞ従はせける。魏の勢すでに推寄る由きこえければ、諸葛誕自ら淮南の勢を率して、呉の大將朱異を左に備へ、文欽を右に備て打て出、魏の勢の隊伍さらに整はざるを見て、是等の敵を一揉に打やぶれと下知して自ら眞先に進んで蒐たりしかば、魏の勢一戰にも及ばず散々に逃わしる。諸葛誕勝に乘て追かくる所に、忽然として一聲の鐵砲を鳴して二手の勢打て出、右に周泰左に石苞喊を造て斬て蒐る。諸葛誕大に驚て急に退かんとすれば、魏の大將王基、陳騫大軍を驅て掩殺す。諸葛誕三方を圍れて散々に亂れたる所に、司馬昭又討て出ければ、殘り少に討れて這々壽春城に逃籠り、固く守て防ぎ戰ふ。此時呉の勢は安豐に留り、魏主曹髦は項城に屯し、司馬昭は壽春城の四方を圍で、息をも繼せず攻たりける。時に鍾會申けるは、諸葛誕打負て城中へ逃入と云ども彼なほ兵粮に事を欠ず、殊に呉の勢安豐に陣を取て共に犄角の勢ひをなす、今この城を密く四方より圍で、若攻ること緩き時は彼固く守て出ること無らん、若攻ること急ならば彼必ず命を弃て戰はん、若呉の勢後より來て内外より御方を攻ば、是由々しき大事なり、不如三方より攻て南の方を圍ず、此道より敵を走らしめて

もすべき様なし。時に呉綱石頭城に行て先孫綝に見え、諸葛誕は蜀の孔明が族弟なり、今已ことを得ずして魏に事ふ、近ごろ司馬昭みだりに權を執て之を殺んと謀る、此故に呉に隨て臣たらん事を望む、今長男諸葛靚を送て質とす、願くは危こと有ば救ひ玉へと云ければ、孫綝大に喜び重く呉綱を持なし、即時に全懌、全端を大將とし、王祚を後陣とし、朱異、唐咨を先陣とし、文欽を案内者として七萬餘騎を二手に分、淮南に行て援しむ。

○于詮淮南死節

去ほどに諸葛誕、呉の勢の救を得ていよ〳〵恐るゝ所なく、討手今や來ると待ところに、司馬昭二十萬の勢にて下著したると聞えければ、一番に呉の大將朱異兵を引て討つて蒐る。魏の陣より先陣の大將王基馬を出して二三合戰ひ、朱異を散々に打やぶりければ、二番に呉の大將唐咨入かはりて戰ひ、是も叶はで退けば魏の勢勝に乘て追かくる。呉の勢回し合せて戰ふと云ども、こと〴〵く亂れて五十里退て陣をとる。司馬昭呉の勢の諸葛誕を救ふ由を聞、いそぎ散騎長史裴秀、給事黄門侍郎鍾會を呼て計を議するに、鍾會が曰、呉の勢の諸葛誕を救は實は利欲に耽て也、もし利を與て誘玉はば忽ちに破るべし。司馬昭が曰、此計大に妙なり、

此不虞の禍を防ぐ萬全の計ならん。司馬昭げにもと同じ、郭太后に奏して申けるは、淮南の諸葛誕謀反を起して樂綝を殺し都を刧さんとす、臣文武の百官と此事を議するに、太后も天子も御駕親ら征伐し玉はずんば、容易は滅び候はじ。郭太后その威に畏て、兎も角も汝が料ひに任と云ければ、司馬昭用意一々に備り次の日曹髦を請じて打立んとす。曹髦が曰、大將軍すでに天下の兵馬を總領す、自ら行て誅すべきに、何ぞ朕を作て戰場へ赴んとする。司馬昭が曰、昔し武祖四海に縱横し玉ひ、文帝、明帝共に宇宙を包括するの御心ありしかども、凡そ大敵に逢ては必ず親ら征伐し玉へり、陛下も先君の道に效て反賊を誅し玉へ、何故に戰場を畏れ玉ふぞ。曹髦もその威に畏て已ことを得ずして打立ければ、司馬昭詔と號して二十萬の勢を興し、征南將軍王基を先鋒とし、安東將軍陳騫を副先鋒とし、監軍石苞を左備とし、兗州の刺史周泰を右備とし、魏主を守護して淮南を進發す。諸葛誕は表を上て後より壽春城に楯こもり、十萬の勢を集めて楊州より新に降れる勢四萬を合せ、兵粮一年の貯を成て、長史吳綱と云ものを吳の國へ遣して、長男諸葛靚を人質に送り救の勢を求めしむ。此時吳の國には丞相孫峻すでに死して從弟孫綝と云もの國の政を攝る。孫綝字は子通、生付强暴にして大司馬滕胤、將軍呂據、王惇等を殺し、妄に逆威を震ひしかば、吳主孫亮これを憂と云ど

知して攻させければ、手下の猛將十騎あまり馬より飛おり、壕を渡て截崖の上に攀り、切ども射ども事ともせず、了に壁を打破りて大に門を開きければ、諸葛誕兵を引て亂れ入、走り散て火を掛烟の下より斬て廻る。城の大將樂綝俄の事にて防べき樣なかりしかば、火を逃れて樓に上る。諸葛誕自ら劍を拔て追かけ、汝が父樂進は久しく魏の大恩を被れり、汝その本に報ずることを思はず、却て司馬昭に從はんとするかと呼はり、一刀に斬て落し、男女一人も殘さず誅して樂綝が首を匣に入、表を添て雒陽へ上せける。其表に曰、

臣誕受二國重任一、統レ兵在レ東、揚州刺史樂綝、專詐說二臣與レ吳交通一、又言下被レ詔當上レ代二臣位一、無狀日久。臣奉二國命一、以レ死自立、終無二異端一。忿綝不忠一、輒將二步騎七百人一、以二今月六日一討レ綝、卽日斬レ首、函レ頭驛馬傳送。若聖朝明レ臣、臣卽魏臣、不レ明レ臣、臣卽吳臣、不レ勝レ發レ憤、卽日謹表陳レ愚。悲感泣血、哽咽斷絕、不レ知レ所レ如。乞朝廷察二臣至誠一、謹表以聞。

司馬昭これを見て大に怒り、時を移さず征伐せんとて兵を集めければ、賈充が曰、將軍父兄の業を受て天下の大權を執玉ひ、人の意いまだ安からざるに、一旦天子を弃て遙々と淮南に下り玉ひ、都の內もし事の變あらば後悔すとも及ぶまじ、不レ如太后に奏して天子と共に征伐し玉へ、

賈充偽酔して諸葛誕をさぐる

諸葛誕

來るまじ、若その儘にて閣玉はば、急に謀反せずとも後大なる害を成ん、不レ如今使を遣して招き玉へ、彼もし疑て來らずんば急に攻て滅し玉へ。司馬昭が曰、この匹夫もし謀反せば我自ら行て誅すべしとて、先楊州の刺史樂綝が方へ密に書簡を送て其意を告知せ、其のち淮南へ使を遣し、天子詔あり、諸葛誕を内裏に召て、司空の職に任じ玉ふと云送る。諸葛誕これを聞より、必ず賈充が司馬昭に告て召もの成んと思ひ、軈て使を捉て拷問するに使告て申けるは、某この事努々知ず、必ず楊州の樂綝よく知ん。諸葛誕が曰、何故に樂綝が知べき。使告て曰、この比書簡を持て楊州へ行たる人あり。諸葛誕その使を斬て棄、酒宴を設て手下の大將七百餘人を集め、酒を勸て申けるは、我久しくこの處を守て合戰の用意怠ず、近ごろ多くの武具を造りし所に、今天子われを司空の職に任ぜんとて都へ召るれば、武具を造しも徒事と成り、汝等さはやかに出立われに從て城外に獵をなせ。諸人然るべしとて思ひ〳〵に出立ければ、諸葛誕楊州の城下に行て見るに、南の門すでに閉て橋を挽たりしかば、大音あげて、樂綝よく聞玉へ、我天子の勅命を受維陽にのぼつて司空の職に任ぜらる、此故に今日獵の爲に出る所に、何とて門を固玉ふぞ、謀反の企あるかと呼はりけれども、城中には音もせず。諸葛誕兵を引て東の方へ廻り見るに、其門も已に閉たりしかば、樂綝匹夫なにとて此の如くなるやと怒て、兵を下

と云ものを長史として、萬づ心中の計を相議す。或時賈充ひそかに來て申けるは、將軍いま天下の權を執玉ふ、魏の舊臣必ず心に疑を成もの有ん、密に之を尋聞玉へ。司馬昭が曰、わが心も人の順まじきを怕る、汝まづ東國に下り、諸處の巡見に出たる體にて、潛に我を疑ふ者あるか窺ひ來れ。賈充命を受まづ淮南に下向して鎭東大將軍諸葛誕に見ゆ。諸葛誕字は公休、南陽の人にて乃ち孔明が一族なり。孔明が蜀に事て生て在し程は重く用ひられざりしが、孔明死して後は高平侯に封ぜられ、兩淮の勢を總て吳の國の壓たり。賈充が巡見に下りたる由を聞て自ら迎へ、酒宴を設て厚く持なす。賈充醉たる體をなし、近ごろ雒陽の諸賢魏の天子の懦弱にして君とするに堪ず、司馬公の功德天地に彌り久しく國を輔玉ふを以て、魏の禪を受て帝位に卽玉へと勸る者多し、將軍いかゞ思ひ玉ふと云ければ、諸葛誕大に怒て曰、御邊は賈豫州の子なり、數代魏の恩を被りて何とて左樣の言を吐出し玉ふぞとて、以ての外なる氣色なりければ、賈充急に應じて曰、某が心いかでか此の如なるべき、今諸人の所存を將軍に語り申なり。諸葛誕が曰、朝廷もし禍あらば我まづ命を弃て恩を報ぜん、焉ぞ匹夫の上を犯せるに從はん。次の日賈充別て都に回り右の趣を語りければ、司馬昭怒て申けるは、鼠輩爭か無禮なる、吾必ず之を伐ん。賈充が曰、諸葛誕久しく淮南に在て人の心よく服す、今もし招上せ玉ふとも必ず

○司馬昭破諸葛誕

魏主曹髦正元三年改元ありて甘露と號す。時に雍州の征西將軍陳泰が方より表を上て鄧艾計を用ひて蜀の勢を段谷にて打破りぬと告ければ、司馬昭この由を魏主に奏して鄧艾が官爵を加ふ。其詔に曰、

逆賊姜維、連年狡黠、民夷騷動、西土不寧。卿籌畫有方、忠勇奮發、斬將十數、馘首千計、國威震於巴蜀、武聲揚於江岷。今封卿爲鎭西將軍、都督隴右諸軍事。進封卿之子鄧忠爲亭侯、乃賜黃金五十兩。

甘露元年穐九月日詔

これより後、司馬昭自ら天下兵馬大都督の官に昇て、常に緊く鎧たる精兵三千餘騎を從へ、凡そ天下の政務己が心の儘に行ひけるゆゑ、魏主曹髦は有ども無が如し。此より魏の位を奪んと思ふ心切なりしかども、人の順まじきことを怕れ、常に故建威將軍賈逵が子に賈充字は公閭

姜維は御方を落さん爲に踏止りて戰ひ、大勢に圍れて已に危き所に、夏侯覇一軍を引て馳來り、鄧艾を追かへす。姜維漸に圍を出再び祁山より出んと云ければ、夏侯覇が曰、祁山の陣は已に陳泰に取れ、御方の大將鮑素も討れて、敗軍早漢中まで退きたり、陳泰すでに董亭の路を遮れり、山を越て早く走り玉へ。姜維色を失ひ、山を超路を尋ねて走りければ、鄧艾勢ひに乘て追かくる。姜維まづ諸軍を退け、自ら後陣に下て防ぎ戰ひける所に、忽然として山の後より一彪の勢殺出す。是乃ち陳泰なり。大軍を引て路を遮り、鄧艾と前後より取卷しかば、姜維小勢にて而も人疲れ馬弱りたれば、眞中に圍れて左に撞右に突ても出ること能はず。蜀の盪寇將軍張嶷は遙に漢中を指て引けるが、跡に軍ありて姜維すでに危しと聞、自ら數百騎を率して取て回し、大勢の中へ討て入。姜維救の來るを見て力を奮て殺出し、魏の勢なほ手痛く追ければ、張嶷處々にてかへし合て戰ふに、敵十方に分れて雨の降が如く矢を放ちければ、手勢こと〴〵く討死してその身も亂軍の中に射殺されけり。姜維はこの間に這々のがれて漢中に回り、張嶷が忠勇にして王事に死したる志を憐で妻子を重く育み、此度蜀の勢親打れ子討れたる者多して罪を姜維一人に歸しければ、姜維乃ち孔明が街亭の例に准へ、表を上て自ら後將軍に官を貶し、大將軍の事を假に行ふ。鎭西將軍胡濟は姜維が令を受て上邽を攻けるが、其功なきを以て同く一級を貶しける。

山を下りて討て蒐る。蜀の勢一日一夜人馬疲て散々に亂れ、互に自ら騒動して推死さるゝ者數を知ず、我先にと逃わしる。魏の勢又颯と引て盡く山に上りければ、夜明て姜維車を以て兵粮を運び、山の麓を擇で陣屋を作らんとするに、夜に入て二更の比、鄧艾五百人の精兵に投火炬を持せ、二手に分て眞先に進ませ、大軍跡に從て山を下り、蜀の陣に火を付て、入亂れて夜の明るまで戰ひ、颯と引て山に上る。姜維すべき樣なく二三里退て計を議するに、諸將みな默然たりければ、姜維が曰、いま鄧艾武城山を守て御方南安を取こと能はず、不如まづ行て上邽を取ん、上邽は南安の兵粮を集めたる所なり、之を取ば南安自ら破れんとて、夏侯霸を留て武城山を守らせ、自ら精兵を引て山越に渭水の東を渡り漸く上邽に近付、その邊の山の勢ひ險く道條難所なるを見て心の内安からず、案内者を召て處の名を問に、鄉導官答て曰、この谷を段谷と申し候。姜維大に驚き、段谷とは忌々しき名なり、若この谷にて敵に米穀を斷絶せられば、我いかゞすべきとて心いまだ決せざる所に、斥候より告て曰、山の後に馬烟の夥しく擧候は必ず敵の伏勢にて候はん。姜維膽を冷して急に退かんとすれば、魏大將鄧忠、師纂二手に分れて討て蒐る。姜維或は戰ひ或は走り、次第々々に退きける所に、向うより喊を造て鄧艾大勢にて斬てかゝり、三方より攻ければ、蜀の勢大に敗れて馬物の具を打弃、われ先にと逃囘る。

城の勢ひを奪べし、但畏らくは鄧艾計多き者なれば、兼て用心すること有ん。姜維が曰、鄧艾は偏に祁山の陣を守りて我を防んとす、何ぞ他の處を守るの心あらんとて大軍已に武城山に到り、先手の勢山へ上んとする所に、忽然として一聲の鐵砲ひゞき、鼓を鳴し喊を造て夥しく旗を指あげ、中央に黃なる旗を立て、安西將軍鄧艾と書たりしかば、蜀の勢膽を冷して退かんとするに、山の上より精兵勢ひに乘て斬て下る。その鋒あたるべからず。蜀の先陣あわて亂れて走りければ、姜維中軍を引て來り救んとする時、魏の勢已に山に上れり。姜維大に驚て心の內に思ひけるは、我孔明の兵法を傳て天下に及ぶ者あらじと思ひしに、量らざるに魏の國又この人あり、我誓て雌雄を決すべしとて、翌の日兵を齊て武城山に推寄けれども、魏の勢一人も山を下らず。姜維兵に命じて樣々に惡口せさせ、終日守り居て暮に及びければ、暫く退かんとするに、鄧艾見すまして鼓を鳴し喊を造、斬て下る勢ひをなす。姜維急に取て回して一軍せんとすれば、魏の勢又靜り反て音もせず、山の上へ攻上らんとすれば、大木大石を投懸ること雨の如し。此に因て暫く麓に陣を取、その夜の三更に退かんとすれば、又山の上に鼓を打て喊を造る。姜維又取て回せば敵一人も山を下らず。斯ては退かんこと叶ひ難し、此處に陣屋を造んとて、石を搬び木を伐せければ、又山の上に鼓を打鑼を鳴して、喊の聲天地を崩し、魏の勢

姜維

日蜀の兵出て戰ふこと無、一日の内に四五度が程わづかに百餘騎の勢出來て、或は十里十五里にして引回しければ、鄧艾山に上て遙に蜀の陣を望み、陳泰に向て申けるは、姜維は必ず此處に居ずして定めて董亭より廻て南安を襲べし、今この處を守る勢は纔なる小勢にて、毎日旗を更幟を改め大勢なる體を見する者なり、量るに大將も士卒も物の用に立もの有じ、將軍自ら一攻せめて見玉へ、必ず一鼓に破るべし、其のち勝に乘て董亭の路より進み、姜維が後を遮て盡く討取玉ふべし、我又一軍を引て南安を救ひ、武城山に續たる道條あれば、急ぎ打向て陣を取ん、姜維もし之を知ば直ちに上邽の城に向はん、上邽に一つの谷あり、段谷と號す、地狹く路險して伏勢を用ふべし、姜維來て若武城山を爭はゞ、我先二手の勢を段谷に伏て打やぶらん、姜維を擒にすること此計の中にありと云ければ、陳泰申けるは、われ二十餘年この處を守れども、さほどに地理を知こと能はず、將軍早く打立玉へ、我自ら此處の敵を破らん。鄧艾乃ち數萬の精兵を引て晝夜を分たず武城山に到り、敵いまだ見えざりしかば、長男鄧忠、司馬師纂二人に各一萬餘騎を授て先段谷の中に伏おき、能々計を授て自ら武城山の上に陣を取、旗を偃鼓を休、鳴を靜て敵を待。さる程に姜維は大軍を引て董亭の路を遙々と廻り、南安を指て急ぎければ、夏侯霸馬上にて申けるは、南安の近所に武城山と云山あり、若これを取ば南安

等閑に通じて計深くも申せども若しと年は鄧艾、曰が夏侯覇。せん期をか時の何に更ずんば伐の敵にあらず、近ごろ安西将軍の職に封ぜられたれば、必ず諸處に用心あらん。姜維が曰、彼も丈夫なり吾も丈夫なり、我なんぞ彼を怕れん、汝等他人の威を副て御方の鋭氣を失ふこと勿れ、我意すでに決せり、先隴西を取んとて、諸人諫れども聽入ず、自ら先陣にぞ進みける。已に祁山の前に近付ける時、斥候より報じて曰、祁山には敵早備を立て、九箇所に陣屋を造りたり。姜維心の内なほも信ぜず、自ら五六騎を引て山に上り遙に祁山を望み見れば、果して九箇所の陣屋その勢ひ連々として長蛇の如し。姜維大に驚き左右に向て申けるは、夏侯覇が云しこと一つも違ず、此の如き陣法は諸葛孔明ならでは知もの有じと思ひしに、今鄧艾その妙を得たり、我師の下に出ずと感じて急ぎ山より下て申けるは、魏の勢すでに此の如く待懸たれば、我この所より進ん事難し、是は鄧艾すでに蜀の勢この路より出べしと料て自ら堅く守る者なり、汝等この處に陣を取て我名の旗を指あげ、谷の口を能々守りて毎日兵を百騎づつ出し甲を更衣裳を改めて青黄赤白黒五方の旗幟を指せて多勢の籠りたる體を見せよ、其間に我却て大軍を引て偸に董亭より出て南安を襲ふべしとて、大將鮑素を留て陣屋を守らせ、自ら大軍を引て、董亭より殺奔す。此時鄧艾は蜀の勢の出たるを見て、陳泰と祁山の陣を守り居たるに、數

上は、蜀の勢畏に足ずとて、此より鄧艾を敬ひ交を結で忘年の友となる。鄧艾乃ち雍涼の兵を集めて、陣法を調練し諸方の攻口を守りければ、陳泰こと〴〵く法あるを見て嘆服して彌〳〵敬ふ。此時姜維は鍾堤に陣を居て、酒宴を設け諸將を集めて魏を伐の計を議するに、一人すすみ出て曰、大將軍しば〳〵師を出していまだ功をも成玉はず、先日洮西の戰に魏の勢大に討れて皆その威を怕る、今又師を出して萬一失ある時は諸軍の心亂るべし、暫く軍民を恤で時の至るを待玉へ。諸人これを見れば孔明が令史たりし樊建字は元長なり。姜維が曰、御邊は魏の國地寛く人多して急に滅し難からんと云事を知て、却て魏を伐に御方に五つの勝利あることを知玉ふまじ。諸人みな問て曰、五つの勝利とは如何なることぞ。姜維が曰、魏の勢洮西にて夥しく亡て甚だ氣力を失へり、我夜中に退くと云ども兵を一人も損はず、若いま師を出さば勝べきの一なり、御方は船路より進んで勞することなく、敵は陸路より來て長途に疲る、此勝べきの二つ也、御方の勢は久しく軍に馴て蒐引に調練せり、魏の勢は驟に諸方より烏の如に集りたる兵にて隊伍整ず軍に法度なし、此勝べきの三なり、魏の勢の攻口を守る道條多く分れたれば勢を分て十方にあり、御方は只一手に成て進む、其勢ひ甚だ盛なり、此勝べきの四なり、我いま祁山に出て麥の熟せる時なれば之を取て兵粮の資とせん、此勝べきの五なり、此時もし魏を

を謝しければ、陳泰酒を勸て賀して曰、姜維破れて夜中に逃去れり、必ず氣力を墜して再び來らじ。鄧艾が曰、洮西にて王經の敗軍小きならず、兵を損じ大將を討れ、百姓騷亂して殆ど危亡に至んとす、姜維夜中に退きたれども一人も兵を損はず、我量に姜維が必ず出べきこと五つあり。陳泰が曰、ねがはくは聞ん。鄧艾が曰、蜀の勢退くと云ども實に勝に乘の勢ひあり、我勢は洮西に破られて盡く疲れ怕る、是必ず出べきの一なり、蜀の勢は孔明が時より軍に馴て蒐引調練したる精兵なり、我勢は國々の驅あつめ勢にて武具なんども完からず、大將は不時に改め換て萬づ案内を知ものなし、是必ず出べきの二なり、蜀の勢多は船路より出來る、御方は盡く陸路に連りて、人馬の勞逸同じからず、其必ず出べき三なり、狄道、隴西、南安、祁山の路々みな守戰の地にして蜀の勢いづれの路より出んも知がたし、或は東を討體を見せては西を討、或は南より出る體にて却て北より出、この故に御方は兵を分て路々を守らしむ、蜀の勢は只一手に成て一處より攻きたる、御方は勢ひ弱して敵は甚だ盛なり、此必ず出べきの四なり、蜀の勢もし南安、隴西より出る時は羌の國より兵粮を運び、若祁山より出る時は今麥の熟せる時なり、之を取て粮とせん、此必ず出べきの五なり、姜維は孔明が兵法を傳て智謀ある者なれば、必ず再び討て出べしと云ければ、陳泰手を以て額を撫、朝廷福あり、又浩る異人の吾國に出來たる

ばかり進ければ、俄に東南の方に鐵砲礮て鼓の聲天に喧く、山々峯々に篝火を燒烟を揚て、四角八方同時に震動し、次第に取まはす勢ひに見えければ、姜維色を失ひ、我鄧艾が計に落されたりとて、速に下知を傳へて、張翼、夏侯霸に兵を收て退かしめ、自ら後陣を守て次第次第に引けるが、只後より鼓の聲喊の聲絶ず、大勢の追蒐る體なりければ、劍關まで退て始て二十餘箇所の寨火は皆空く設し計なりと悟り、再び兵を出さんとするに、諸軍故鄕を思て歸心箭の如なりければ、了に漢中まで回て鍾堤に陣をとる。此回夜中に退きたれども敵追ざれば一人一騎をも損ぜず。時に成都より勅使きたり、先に洮西の軍に功あるを以て、天子詔して姜維を大將軍の職に復し玉ふと告ければ、表を上て恩を謝し、又師を出さんとて諸大將を集めて計を議す。

○鄧艾段谷破姜維

姜維すでに退きければ、王經狄道城を出て、陳泰、鄧艾を迎へ入、酒宴を設て慶をのべ、大に三軍を賞しければ、陳泰乃ち鄧艾が功を錄して魏主に奏す。曹髦これを見て司馬昭と相議し、鄧艾を安西將軍東羌校尉に封じて陳泰と共に雍州、涼州の軍馬を領せしむ。鄧艾表を上て恩

も、力を空く費して中々急には落べからず、此を以て姜維が智謀の足ざるを知、御方いま高く嶮所に據て兵を項嶺に陳ね、計を以て討時は姜維なじかは足を留べき、此所謂客主不レ同時勢有レ異の計なりと云ければ、鄧艾大に喜び、將軍の計よく某が肺腑を貫く、誠に神妙の玄機なり、倡や用意を致さんとて、兵を二十隊に備て、毎レ隊五十騎づつの精兵を調へ、鑼鼓寨火、烽火の類を夥布用意し、晝は谷の内に藏れて夜は路を急ぎ、潛に狄道城の東南の方に出て、高山幽谷の間に埋伏し、暗兵の勢ひを成て、敵もし來らば鼓を打鑼を鳴して晝は夥しく旌を揚、夜は鐵砲を響し寨火を燒て、四角八方山々峯々より、敵の心を驚せとて二十隊に分て進ませ、其のち自ら陳泰と各二萬餘騎を引て打起ける。去ほどに姜維は狄道城を圍で日夜攻れども、本より究竟の名城なれば截崖の邊までも近付得ず。心の内退屈して居たる所に、ある日の昏方に何とも知ず、二手の勢出來り、征西將軍陳泰、安西將軍鄧艾と書たる旗ありと告ければ姜維大に驚き、夏侯霸に向て申けるは、御邊むかし鄧艾もし師の大將たらば、魏を伐こと能まじと云玉ひしが、今鄧艾すでに來れり、我いかゞして戰はん。夏侯霸が曰、鄧艾は深く兵法に通じて地理を能知れり、今兵を引て出來る、輕々しき敵にあらず。姜維乃ち張翼に城を攻させ、夏侯霸に陳泰を拒せ、自ら出て鄧艾を破んとて、其夜の二更に手配を定めて打立、五六里

取とす、況や今洮水の合戰に敵の勢こと〴〵く討れて、王經膽を冷し魂を失ふ、狄道城を取こと掌の内にあり、汝鋭氣を墜こと勿れとて了に兵を引て進發す。この時魏の征西將軍陳泰は雍州を守て居たりしが、王經破れて狄道城へ落たりと聞、いそぎ援の勢を起んとする所に、洛陽より兗州の刺史鄧艾來れり。陳泰やがて對面するに鄧艾申けるは、某いま司馬昭の命を受こゝに來て蜀の仇を退けんとす、某は年若して不才なり、萬づ將軍の敎を被らん。陳泰乃ち雍州、涼州の諸將を集め、今姜維狄道城を圍で事すでに急なり、諸將いかなる計かあると問に、參謀楚弈進出、王經洮水に敗して蜀の勢勝にのる、今もし共に鋒を交ば必ず御方勝ことを得じ、只よく險阻を固て出て戰ふこと無んば、蜀の勢兵粮につまりて自ら退かん、其時虛に乘て追討にすべし、此仲達が孔明を破りし計なりと云ければ、鄧艾傍に在てあざ笑ふ。陳泰が曰、この計善と云ども時同じからざることあり、今姜維兵を引て深々と重地に入原野に出て鋒を交へ一戰の利を貪んとす、御方まことに其鋭氣を避、固く守りて出て戰ふこと無るべしとは云ども、我量るに姜維いま洮水の戰に打勝東南に進で洛陽に據、兵粮の多き所に蒐て羌の勢を招き、東の方關隴を爭ひ、檄を四郡に傳る時は御方大なる患なり、然る時は固く守て出ること無るべし、今姜維この計を知ず、直ちに狄道城に攻かゝる、此城は崖高く壕深して如何ほど攻ると

あらば馬を出して快く來れ。王經左右を顧て曰、蜀の勢水を背にして陣をとる、若破るゝ時は盡く水に溺ん、汝等力を併せて敵を破れ、姜維は武勇の大將なり、輕じて仕損ずること勿れ、彼もし退かば勢ひに乘て急に進み、盡く水中に追入よと下知しければ、之を聞て張明、花永、劉達、朱芳なんど云る一人當千の兵共左右に分て打て蒐る。姜維槍を撚て暫く戰ひ、詐り負て走りければ、王經勝に乘て大軍を驅て追蒐る。姜維すでに洮水の岸の邊まで退き、急に馬を引回して味方の勢を指揮き、背に水ありて事急なり、命を弃て戰へと呼はり、自ら喚て蒐入ければ、蜀の勢ことごとく取て回して其鋒あたるべからず。魏の勢捲り立られ、大に亂れて走りけるに、張翼、夏侯霸二手に分れて路を遮り、一騎も餘さじと取込る。姜維勇を奮て左に突右に撞、恰も電光の激するが如なりしかば、魏の勢討るゝ者數を知ず。互に自ら躁亂して水中に溺れ死す。王經は這々に圍を出て、纔に百騎あまりに討なされ、狄道城を望んで落てゆく。姜維十分に打勝て討取たる首一萬餘級、洮水の濱に梟雙べて諸軍に恩賞を施し、直ちに狄道城に攻かゝる。張翼又諫て申けるは、將軍すでに洮水の戰に勝玉ひて、威聲四方に震ふ、之を以て功とし軍を收て國に回り玉へ、又狄道城へ攻かゝり玉ひて、萬一墓々しきこと無んばこの功みな廢るべし、此畫蛇添足の喩なり。姜維が曰、然らず、向に御方の打負たりし時だにも倘進んで中原を

道に喪玉へり、今われ武侯の遺命を受、まさに忠を盡して國に報ずべし、死すとも豈恨んや、今司馬師あらたに亡て魏の君臣穏ならず、若この時に伐ずんば何の時にか期せんとて、自ら五萬餘騎にて打立けり。夏侯霸申けるは、まづ馬強なる兵を率して枹罕より出、洮西、南安を攻取ば諸郡こと〴〵く定つべし。張翼が曰、前々の軍に勝ずして回りしは、皆勢の遲く出る故なり、兵法にも攻㆓其無㆒ㇾ備出㆓其不意㆒と云り、今若速に兵を進めば魏の勢驚き慌て防こと能はじ。姜維この義に從ひ直ちに枹罕より馳向ふ。洮西を守る魏の兵いそぎ雍州の刺史王經に告ければ、王經又早馬を飛して陳泰に此由を報じ、自ら七萬餘騎にて要害を守る。姜維これを見て諸大將に申けるは、我計を以て先この敵を破るべし、張翼は一軍を引て左に備へ、夏侯霸は一軍を引て右に備へ、我自ら中軍を引て敵に向ひ、詐り負て退かば敵定めて追きたらん、其時二人は左右より進んで魏の勢の後に廻れ、我又取て回して之を討ん、此古韓信が趙を破りし計なりとて、手配すでに定り、自ら洮水を背に當て陣を取。時に魏の陣より王經數十人の猛將を引て馬を出し、大音あげて申けるは、今魏呉蜀すでに鼎足の勢ひを成、しかるに汝しば〳〵師を出して我大國の疆を侵、此まことに天命を知ざる也。姜維あざ笑て答て曰、司馬師故なきに其主を廢す、隣國に居ては理に於て罪を正べし、何に況や敵國をや、汝等もし戰はんと思ふ者

喪を發して葬の禮をなす。魏主曹髦この由を聞て急ぎ使を以て、東國いまだ靜ならず、暫く許昌に陣を取、禍の本を除くべしと、司馬昭が方へ下知しければ、司馬昭心の內いまだ決せざる所に、鍾會申けるは、人の心いまだ安からず、早く洛陽へ歸玉へ、朝廷もし變あらば悔るとも及ぶまじ、司馬昭げにもとて兵を率て洛陽へ回りければ、魏主曹髦これを聞て大に驚き、司馬昭わが命を用ひず、大軍を引て洛陽へ回るは何ゆゑぞと議しければ、太尉王肅が曰、別の仔細は候まじ、彼すでに大權を執、陛下いま封爵を加て其心を安からしめ玉へ。曹髦これに從ひ乃ち王肅を使として、大將軍錄尙書事に封じければ、司馬昭朝に出て恩を謝し、此より天下の政みな司馬昭が料ひたり。この由蜀の國に聞えければ、姜維乃ち後主劉禪に奏して申けるは、司馬師すでに亡て司馬昭又權を專にす、臣ねがはくは此時に乘て魏を伐、再び漢室を興べし。後主しかるべしと勅許ありしかば、姜維又漢中に出て用意をするに、征西將軍張翼諫て曰、わが蜀の國は元より西僻の地にして金銀も兵粮も寡ければ、遠く出て戰ふ每に國の費民の哭甚だし、不如要害を堅く守て軍民を恤玉へ、是乃ち國を保の計ならん。姜維が曰、然らず、昔孔明いまだ草の廬を出ずして已に天下を三分するの計を定め、遂に鼎足の形を成て後に六度まで祁山に出て魏を伐、いかにもして中原を恢復し、漢室を興さんとし玉ひしに、不幸にして中

攻ければ、毌丘儉命を弃て戰ふと云ども、其勢こと〴〵く落失て纔に十騎あまりに打なされ、逃れて愼縣城へ落ければ、城を守る大將宋白と云もの、酒宴を設て持なし、其夜ひそかに首を斬て司馬師にぞ降りける。此より淮南平定しければ、瘤の痛いよ〳〵重りけるゆゑ、諸葛誕を征東大將軍に封じて淮南の軍馬を都督させ、諸處に守りの勢を置て吳の勢も退きしかば、了に大軍を收て洛陽へぞ囘りける。

○姜維洮西破魏兵

去ほどに司馬師淮南を平げて、許昌まで囘りけるが、瘤の痛いよ〳〵重して每夜夢ともなく現ともなく、李豐、張緝、夏侯玄、床の前に立見れて、暫くも離れざりしかば、心神惱亂して命も已に危なりぬ。此に因て洛陽より弟の司馬昭を招きよせて申けるは、我いま天下の執權として其重こと千斤を負が如し、自ら逃れんと欲すれども能はず、汝よく〳〵心を小て謹み戒め、朝廷の大事を必ず他人に託すること勿れ、萬一も他人に託せば一族滅亡の禍と成べきぞとて、跡の事共よく〳〵云おき、大將軍の印を渡して淚をはら〳〵と流し、聲を放て叫びけるが、瘤の口より眼睛迸り出てぞ死たりける。時に正元二年二月也。こゝに於て司馬昭大權を執て、

後より文欽刺史しばらく留り玉へと呼はる者あり。文欽これを見れば、昔し曹爽が門下の客たりし尹大目と云もの也。尹大目は本より曹爽が恩顧を得て文欽と共に事しが、曹爽すでに司馬懿に殺されて後、文欽は淮南に流浪し尹大目は已ことを得ずして司馬師に從ふ。今司馬師が瘤の痛甚だしければ、近き内に必ず死すべしと量り、且は曹爽が恩を報ぜんと思ひ、司馬師に見て申けるは、文欽は元より謀反の輩にあらず、母丘儉に語らはれ是非なくして與する者也、某ゆいて御方に降らしめん。司馬師しかるべしと許しければ、尹大目馬を飛して追きたり、盔を卸で鞍に掛、大音あげて、文欽刺史いま數日の間こゝに留り玉へと呼はりけるに、文欽その意を悟ず、汝は元魏の大恩を受ながら、何ぞ司馬師を助けて天下を簒んとはするぞとて、弓を執て矢を放ち馬を飛して去ければ、尹大目すべき様なく、世事敗れたりと嗟て引回す。文欽敗軍を引て壽春城に入んとすれば、敵の勢早入かはりて諸葛誕が旗あり。又項城に入んとすれば、胡遵、王基、鄧艾が勢雲霞の如くに攻きたる。此に因て身を置べき所なかりしかば、了に呉に行て孫峻に降參す。母丘儉は項城に在て、壽春城も破れ、文欽も落ゆき、樂嘉城も降ぬと聞て力を失ふ所に、大軍三方より推寄ると告ければ、自ら城を出て陣をとる。一番に鄧艾刀を舞して出ければ、母丘儉が大將葛雍鋒を交て只一合に斬て落さる。魏の勢勝に乗て三方より

て大音あげ、反賊逃ること勿れと呼はりければ、文鴦馬を交て五十餘合戰ひ、いまだ勝負を分たざる所に、司馬師が勢後より蒐りしかば、文鴦小勢にて前後を顧ること能はず、大に亂れて逃わしる。文鴦は猶鄧艾と戰ひけるが、四方に御方と云ものなし。斯ては叶ふまじと思ひ、只一騎圍を出て走りければ、數千の敵軍打止んとて追きたる。已に樂嘉の橋近く成て、追手の勢ひしく／＼と集まりければ、文鴦忽然として馬を囘し、敵の群立たる眞中へ喚て蒐入、鐵の鞭を振擧て續け打に打ければ、眞先に進んだる敵七八騎、馬と共に打居られ、殘る勢は紛々として逃わしる。文鴦又しづ／＼と囘りければ、魏の勢こと／″＼く集り、この人唯一騎わが大勢を退けたるか、四方より圍で擒にせよとて、又群立て追かくる。文鴦勃然として大に怒り、汝等鼠の輩命は惜く思はぬかと云まゝに、鐵の鞭を振て蒐入二三十が程打ければ、或は尻居にどふと打居られ、中天にづんど打擧られて盡く颷と引。敵引ば文鴦しづ／＼と馬を歩せ、敵近付ば追散し、七八度が程囘しければ、魏の大將も其怪力比類なきにや怖れたりけん、了に盡く退きけり。父の文欽は昏方より出けるが、山路の險阻に行かゝり迷て谷の內へ入、終夜路を尋ねて曉にぞ及びける。爰にて樣子を聞ば魏の勢打勝て文鴦は行方知ずと申ければ、急に退かんとするに、魏の勢後より攻來る。文欽大に驚き一方を打やぶりて、壽春城を指て走る所に、

に立て守らせ、痛を忍で居たりけり。夜すでに三更の比に及んで、陣屋の北に當て喊の聲夥しく起りければ、何事ぞと問時、一人走り來て曰、一手の敵軍北の方より推よせ驀地暗に突て入、眞先に進んだる一人の大將、その勇當る者なく御方夥しく殺されたり。司馬師色を失て心の內火の燒が如く、目の珠すでに瘤の口より迸り出血ながれて泉の如く、其痛堪がたかりしかども、諸軍の亂れんことを怕れ、被の端を咬で齒を切り、痛を忍で被は皆咬爛にけり。北の陣中文鴦一人に攻やぶられて魏の勢散々に亂れ、我先にと中軍へ落入、本陣も上を下へと騷ぎければ、司馬師急に下知を傳て、妄に動ものは切て弃んと觸たりし故に陣中少し靜りけり。文鴦は二千五百餘騎にて、魏の陣の眞中に蒐入、左へ掛立右へ追なびけ四方八面を切て廻るに、魏の大勢前後に度を失ひ適出向ふ者も、文鴦が鐵の鞭にて頭を微塵に碎かれ死する者麻の如し。文鴦は心の內に父が來るを相待、四五度が程中軍に討て入、火を散して戰ふに魏の勢こゝを破られじと、鏃を調て射たりしかば、又兵を颯と引又蒐入ては戰ひ、直ちに殺して曉方に至り、忽ち北の方より鼓の聲天に響て一手の勢出來ければ、文鴦左右を顧て、父は南より寄玉ふべきに、今北より來り玉ふは何故ぞとて、自ら馬を出して見るに、一彪の軍馬その勢ひ猛風の如く、眞先に進んだる大將は、義陽棘陽の人に兗州の刺史鄧艾、字は士載なり。刀を横

城を攻させ、兗州へ檄文を馳て鄧艾を招き、自ら大軍を引て樂嘉城へ打向ふ。この時母丘儉は項城に在て勢を分て呉の敵を防せ、不時に人を遣して樂嘉城の樣を窺しめ、心の内魏の勢の急に來て攻ん事を怕る。時に文欽つと來りければ、樂嘉城は御方第一の要害なれども救しむべき大將なし、若魏の勢速に來らば如何せんと議するに、文欽が曰、御心やすく思ひ玉へ、愚息をだに召具仕り候はゞ、五千餘騎にて之を守らん。母丘儉斜ならず喜び、文欽父子を重く賞して五千餘騎にて向はしむ。已に半途まで出ける時、斥候の士卒走り來り、樂嘉城の西に魏の勢陣を張て二萬あまり扣て候、中軍に白旄、黃鉞を立て、虎帳の内に帥の字を書たる錦の旗あり、是必ず司馬師ならん、今陣屋を造り候と告ければ、文鴦生年十八歳、身の長八尺、鐵の鞭を提て父が側に在けるが、只今の注進を聞て申けるは、魏の勢長途に疲て陣屋の要害いまだ備らず、今もし二手に分れて之を討ば、御方などか勝ざらん、今夜の昏方より打立て、父は南より蒐り玉へ、某は北より向はん、然る時は夜の三更には敵の陣に到るべし。文欽これに從ひ五千餘騎を二手に配ければ、文鴦は緊く鎧て腰に鐵の鞭を掛、手に槍を提て昏方より父子左右に分れて推寄る。司馬師は自ら樂嘉城ちかく陣を取て、兗州の鄧艾が勢を集めて來るを待居たりしが、目の下なる瘤しきりに痛て堪がたかりければ、夜に入て鎧たる精兵數百人を傍

を取ければ、王基が曰、南頓の地は第一の要害にして陣を取に便あり、早く勢を分て守り玉へ、若延引せば敵必ず取ん。司馬師これに從ひ、乃ち一手の勢を王基に授て南頓の城下に陣を張しむ。去ほどに毌丘儉は項城に在て討手の向ふ由を聞、諸將と計を議しければ、先鋒葛雍が曰、南頓の地は山に依水に沿て究竟の要害なり、魏の勢もし之を取ば急に破ること難かるべし、速に兵を遣し玉へ。毌丘儉これに從ひ、自ら兵を引て打向ふに、南頓には寄手大勢にて陣を取候と告來ければ、何條まだ敵の陣あらんとて自ら馬を進めて望見るに、果して敵の陣四方に連て色々の旗風に颺りければ、大に驚て立たる所に、後より早馬きたり、呉の大將軍孫峻この騒動を聞て虚に乘て江を渡り、今壽春城を攻ると告ければ、毌丘儉色を失て曰、壽春は我根本なり、若呉の勢に取れなば我いづくにか身を安ずべきとて、夜中に項城まで馳かへり、勢を分て呉の敵を防ぐ。司馬師は毌丘儉が退きたる由を聞、諸將と計を議しければ、尚書傅嘏申けるは、只今毌丘儉が一軍もせで退きたるは呉の勢の後を攻るを怕れて也、必ず項城に回り、二手に分て壽春を救べし、御方兵を三手にわけ、一手は樂嘉城を攻、一手は項城を攻、一手は壽春城を攻玉はば、敵の勢度を失て盡く亂るべし、兗州の刺史鄧艾は智深く計多き者なり、急ぎ召よせて先手の大將とし、將軍自ら樂嘉城を攻玉へ。司馬師これに從ひ、兵を分て三つの

心惹れて盡く離れ去ん、然る時は毌丘儉を滅さんこと掌の内にあり。司馬師喜て申けるは、この計きはめて妙なり、然れども我瘤の痛しきりに發て、此ごろ口を切たれば自ら行て敵を討事かなひ難し。中書侍郎鍾會が曰、淮南は元より武士の風強して、其鋒あたり難し、萬一この軍仕損ずる時は由々しき大事に及ぶべし、他人を遣し玉はば怕らくは失あらん。司馬師蹶然として申けるは、われ自ら行ずんば此敵を破んこと難し、卿が意見よくも合へりとて、弟の司馬昭を洛陽に留て朝廷の政を攝らしめ、魏王曹髦に右の趣を奏して、病を忍び輿に乘て打起、まづ鎭東將軍諸葛誕に豫州の勢を付て安風津より壽春を攻させ、征東將軍胡遵に青州の勢を付て譙宋より出て敵の歸る路を塞せ、荊州の刺史王基に先手の勢を付て鎭南を攻させ、自ら襄陽に出て本陣を構へ、諸大將と計を議するに、光祿勳鄭褒が曰、毌丘儉は計を好ども事情に達せず、文欽は勇ありて計なし、今御方の大軍その不意に出ば、淮南の勢鋭氣盛にして輕々しく敵すべからす、只よく陣屋を要害に造り、壘を高うし塹を深して敵の鋭氣を挫べし、是亜夫が妙計なり。監軍王基が曰、淮南の騷動は元より軍民の謀反にあらず、只毌丘儉一人に催され、勢ひを畏れて與する者なり、若いま御方の大軍速に進まば、必ず瓦の如く解て盡く亂るべし。司馬師が曰、王基が計わが意に合へりとて、自ら兵を進めて㶏水の橋の上に陣

の鞭を使ひ萬夫不當の勇あり、常に司馬師兄弟を殺して曹爽の讎を報ぜんと欲す、速に兵を起し玉へ、某先手に進むべし。毋丘儉限なく喜び、酒を飲で誓をなし、詐て郭太后の詔を受たりと沙汰し、淮南の將士を集て壽春城に楯こもり、西の方に高き壇を築き、白馬を殺して血を歃り、誓を成て申けるは、司馬師兄弟みだりに權を專にし、大逆無道にして天下を奪んとす、此ゆゑに郭太后の詔を受、義兵を起して國賊を滅さんとす、皆々忠を盡して國に報ぜよとて、上下心を一にして要害を固く守り、毋丘儉は自ら六萬餘騎にて項城に陣をとり、文欽は二萬餘騎にて遊兵となり、弱からん方を救はんとす。この時司馬師は左の目の下に大なる瘤有て常に痒く痛みけるが、忽ち早馬急を告て、毋丘儉謀反を起し淮南を騷動すと告ければ、大に驚て瘤の內しきりに痛む。乃ち醫者を召て瘤の口を切、藥を傳て二三日が間は外へ出ざる所に、又早馬きたり、淮南の騷動討手もし延引せば必ず難儀に及ばんと告ければ、是非なく外に出て太尉王肅と計を議す。王肅が曰、昔關羽北に向て天下を爭ふ意ありければ、吳の孫權呂蒙が計を用て荊州を襲ひ取、よく降參の人を恤み、將士の妻子一族を撫育ひしゆゑに、關羽が軍勢こと〴〵く落失て遂に敗亡するに至れり、今淮南にて毋丘儉に從ふ大將士卒の妻子は盡く洛陽にあり、若これを惠み恤んで、又兵を指向て其路を截塞玉はゞ、淮南の將士必ず妻子に

毋丘儉

文欽
毌丘儉文欽を招き義兵の計を議す

鉞を執て出入し、朝に入て趨ず、事を奏するに名いはず、劍を帯て殿に昇る。諸の文官武將その威を畏れずと云もの無。

○文鴦一騎破魏兵

魏の正元二年春正月、楊州の刺史鎭東將軍毌丘儉字は仲聞と云もの、久しく魏に仕て功勞多く、淮南の軍馬を惣調へけるが、司馬師兄弟みだりに逆威を震て、魏主曹芳を廢せる由を聞て心の内甚だ怒り、諸將を集てこの事を議するに、長子毌丘甸申けるは、司馬師みだりに權を執て國家の危きこと累卵の如し、父いま一方の固を掌玉ふ、爭か坐ら見て居玉ふべき、早く忠を盡して國家を匡し扶玉へ。毌丘儉大に喜び、我も斯こそ思へ、好も申たりとて、刺史文欽を招で計を議す。文欽は初め曹爽が門下の賓客たりしが、曹爽すでに司馬懿に殺されて後は、此處に下り居て元より司馬師と睦からず。毌丘儉涙を流して申しけるは、司馬師兄弟みだりに權を専にして、近比すでに天子を廢し、天下を奪の志あり、我久しく魏の恩を受て坐ら視るに忍ず、日夜この事を嘆き申なり。文欽が曰、將軍此處の固として若義兵を起して賊を討玉はば、某ねがはくは命を弃て助べし、况や愚息にて候文淑小字を阿鴦と申ものは、馬上にて長き鐵

王は我ために叔なり、今これを天子とせば我いかなる禮を以て當るべき、今思ふに高貴卿公曹髦は文皇帝の孫、温恭にして克讓る、この人を君とせん。尙書令司馬孚が曰、太后の詔まことに然り、急ぎ使を馳て招き玉へ。司馬師この儀に從ひ、元城へ使を遣して高貴卿公を招しめ、郭太后を太極殿に請じ、曹芳を呼で責て曰、汝荒淫にして天下を治るの智なし、早く傳國の璽を解て齊王の爵に復り、再び都へ入こと勿れと云ければ、曹芳淚を流して齊の國へ回るに、纔に忠義の志ある者五六人ぞ送りける。翌の日高貴卿公上り玉ふと告ければ、百官鑾駕を備て出迎ふ。高貴卿公名は髦字は彥士、乃ち曹丕が孫にして東海定王霖が子なり。百官みな南掖門の外に出再拜して迎へければ、曹髦急に答禮す。太尉王肅これを見て、主上答禮し玉ふこと勿れと云ければ、曹髦が曰、われも亦人臣なり、太后詔して招き玉ふ、其故を知ずとて輦を進むれども肯て駕ず、徒步して太極殿に上りければ、司馬師まづ出迎ふ。曹髦急に地に拜しければ、司馬師扶起して郭太后に見えしむ。郭太后喜て申けるは、われ汝が幼より帝王の相あるを知る、いま果して此の如し、汝天下に君として能恭儉にして用を節し、仁德を施して先帝を辱しむること勿れ。曹髦再三固辭しければども司馬師文武の百官を集めて卽位の大禮を調へ、嘉平六年を正元と改て天下に大赦を行ふ。此より權柄こと〴〵く司馬師に皈して、彌憚ことなく黃

かなる刑を用ふべき。曹芳默然として答ざりければ、司馬師再三責問に、曹芳跪て告て曰、其罪まことに逃れ難しと申せども、大將軍幸に之を宥せ。司馬師あざ笑て曰、陛下まづ起玉へ、國法いまだ廢べからず。曹芳が曰、三人の者いづくにかある。司馬師が曰、われ市に出して已に三族を滅せりとて、張皇后を指て申けるは、この女張緝が子なり、生ては爭か置べき、早く引出せと下知をなす。曹芳大に哭て司馬師が袖に取付ければ、司馬師袖を拂て外に出、この輩われを害せんとす、安んぞ宥ことを得ん、毒なきは大丈夫に非と高らかに云ちらし、張皇后を東華門に引出して練帛を以て勒殺す。曹芳はこの由を聞て昏絕し、哀み哭て已ざりけり。是乃ち曹操が餘に漢の獻帝を悩し奉り、伏皇后を殺したる酬い子孫に及びけると覺て淺猿けれ。其翌日司馬師朝廷に出て百官を集め、今主上荒淫にして道なく、娼優を褻近づけ奸讒を親み用ふ、罪の甚しき古の昌邑王に過たり、吾謹で伊尹、霍光が例に從ひ、別に新君を立て社稷を保ち、天下の太平を謀らんと欲す、人々いかゞ思ひ玉ふと云ければ、群臣みな答て曰、大將軍聖賢の道を行ひ玉ふ、是天に應じ人に順ふなり、誰か命に背べき。司馬師大に喜び、百官を伴て永寧宮に到り、郭太后に右の趣を告ければ、郭太后申けるは、いま誰人を以てか位に卽しめん。司馬師が曰、彭城王曹據は聰明仁孝にして天子の德あり。郭太后申しけるは、彭城

司馬師兄弟共持ニ大權一、將レ圖ニ簒逆一。所レ行詔制皆非ニ朕意一。望各部官兵將士、同仗ニ忠義一

討ニ滅無端一、匡ニ扶社稷一、天下幸甚。

司馬師これを見て齒を切り、元來汝等わが三族を滅んと謀る、我忠義の心を以てすれば却て此禍を招く、早く市に出して首を斬と下知するに、武士共簇て推出しければ、李豐、夏侯玄は路すがら大音あげて罵りける故、市に到れる時は齒を盡く撃落され、口中糊を含で叫び罵りて斬れける。其のち大勢を遣して三人の家を沒收し、三族を平げて家財こと〴〵く御林の軍に分ち施す。魏主曹芳は事の顯れたるをも知ず、張皇后と相對してひそかに議するに、張皇后但内庭に耳目多ければ、若この事洩時は妾いかなる憂目にか遭候はんと云ける所に、司馬師劍を帶て宮中へ入ければ、張皇后驚て地に倒る。司馬師目を怒らし曹芳を睨で申けるは、臣が父陛下を輔て君とす、其忠周公の下に出ず、臣又陛下に事て伊尹と何ぞ異ならん、然るに恩を以て讎とし、功を以て過とし、臣を王莽、董卓が輩とし玉ふは如何なる故ぞ。曹芳が曰、朕いかでかさること有ん。司馬師懐より御衣の袖を取出し地にはたと投打て、これは誰人の書たるぞと云ければ、曹芳驚き怕れ魂天外に飛、顏土の色の如く、震ひ戰て申けるは、是もと朕が本心にあらず、他人の強て成しむる故なり。司馬師が曰、自ら成て妄に罪を他人に讓る、此い

從ふ兵四五百人こと〴〵く武具を持て馳來れり。三人の者共震ひ畏て路の側に立ければ、司馬師問て曰、汝三人何とて遲く退きたる。李豐が曰、天子內庭にて書を觀玉ふ、我等三人侍講に召れたり。司馬師が曰、如何なる書をか讀たる。李豐が曰、夏殷周三代の書なり。司馬師が曰、天子書を觀て何事をか論じ玉ひし。李豐が曰、天子の問玉ふ所は伊尹湯を扶け周公政を攝の事なり、我これを答て、今の司馬大將軍は卽ち伊尹、周公なりと奏せり。司馬師あざ笑て曰、汝等われを伊尹、周公に比すと云ども、本心は我を王莽、董卓とすべし。三人みな曰、われ等は乃ち將軍の門下に屬する者なり、爭かさることの候はん。司馬師大に怒り、汝等口のきゝたる儘に我に諛ふ、適に宮中にて哭しは何事ぞと責ければ、李豐等みな曰、左樣の事更に候はず、必ず誤て疑ひ玉ふな。司馬師が曰、汝三人哀み哭て眼の中なほ紅なり、何とて我を欺んとする。夏侯玄事すでに洩たりと思ひ、大音あげて申けるは、われ等が哭しは汝が天子を蔑にして百官を芥の如くする故なり。司馬師いよ〳〵怒り、武士に命じて生取んとしけるを、夏侯玄拳を握て司馬師が頭を擊んとするに、一人の大將鐵の鎚を投つけ、夏侯玄を眞倒に打仆す。武士共やがて三人の者を縛りて遍く懷を搜しければ、張緝が懷より御衣の袖を取出す。上に血字ありければ、司馬師開て見るに乃ち密詔なり。其文に曰、

として臣を迎る禮あらん、陛下穩に坐し玉へ、臣自ら政を聞んとて、群臣を集めて國の政を決斷し、其のち昂然として座を起、車に乘て數千の人馬を從へ、傍を拂て回りしかば、魏主曹芳も宮中へ入けるに、相從ふ者とては中書令李豐、太常夏侯玄、光祿太夫張緝三人なり。張緝は乃ち張皇后が父にて曹芳が舅なりしかば、共に深宮に入て曹芳淚を流して申けるは、先帝未だ崩じ玉はざる時仲達は箇樣に無りしに、司馬師兄弟みだりに政を專にして朕を視ること芥の如くす、社稷必ずこの人に奪るべしとて淚泉の如なりしかば、李豐が曰、少しも御心を苦め玉ふな、臣不才なりと申せども頗る天下に名を知らる、陛下の勅を受て四方の兵を集め、この國賊を誅すべし。夏侯玄が曰、臣が一族夏侯霸が蜀に降りしも實は司馬師兄弟が害せんとするを畏れて也、この賊もし滅なば必ず御方に回り來ん、臣は元國家の舊戚、いづくんぞ坐ら視るに忍ん。曹芳が曰、只怕らくは卿等が事を成こと能ざらんことを。李豐等淚を流して曰、ねがはくは三族を弃て事を成ん。曹芳乃ち御衣の袖を執て指を破て血詔を寫し、張緝に授て申けるは、朕が父祖武皇帝を董承が討んとせしも此の如し、卿等みな忠義の臣、必ず外に泄こと勿れ。李豐が曰、陛下なにとて浩る不吉の例を宣ふぞ、臣等元より董承が輩にあらず、司馬師爭か武皇帝と同からん、御心を安じ玉へとて三人退て東華門に出ければ、司馬師劍を執て相

姜維郭淮が矢を中につかみ其矢にて郭淮を射

郭淮

りければ、姜維囘さんとするに武具を持ねば矢もなき弓を挽て弦音して見せければ、郭淮四五度が程は身を避、つひに矢の來らざるを見て彀ちかく成ける時よく挽て兵ど射る。姜維弦音を聞て身を避、その矢を中にて奪とり、わが弓に挿で走りければ、郭淮大に怒て槍を指のべ突んとする所を、姜維引囘して丁と射る。其矢郭淮が眉間の眞中を射洞し、馬よりどふと墜たりしかば、姜維首を取んとするに、魏の大勢命を弃て防ぎければ手を下に及ばず、郭淮が槍を奪て囘りけり。魏の勢いそぎ郭淮を助て本陣に囘り、鏃を掘て藥を傳たれども、深手なれば血流れて休ず忽ちに亡びける。司馬昭は鐵籠山を下りて落ゆく敵を追けるが、半途より引囘す。姜維は若干人馬を損じて路に住まることも叶はずして、了に漢中まで引退く。されども徐質を討取郭淮を射殺して殆ど敵の勢ひを拉ぎければ、功を以て敗軍の罪を補ふ。

〇司馬師廢二魏主曹芳一

司馬昭すでに洛陽に囘て兄司馬師と朝廷の上に縱横し、逆威その主を畏れしむ。此に依て魏の舊臣こと〴〵く服して魏主曹芳も薄氷を踏が如く、針を以て背を刺心地しけり。ある時司馬師劍を帯て殿に昇ければ、曹芳怕れて急ぎ床を下り起て之を迎ふ。司馬師笑て申けるは、爭か君

ず、降る者數萬人。俄何燒戈自ら頸を刎て陷穴の中にて死ければ、郭淮、陳泰兵を驅てすき間もなく羌の陣に推よせ、喊の聲を揚る程こそあれ、驀地暗に蒐たりければ、陣中慞騒で一支も支ず、迷當大王馬を打て走りけるが、了に魏の伏勢に生取る。郭淮これを見て急ぎ馬より飛て下、自らその縄を解て、魏の天子元より御邊の忠義を知玉ふ、今なにとて蜀に從ひ玉ふと云ければ、迷當深く羞て罪を謝す。郭淮本陣に囘りて厚く持成、羌の勢に恩賞を施して、討れたる者を葬りければ喜ずと云ものなし。郭淮乃ち迷當に向て申けるは、御邊ねがはくは先手と成て鐵籠山の圍を破り玉へ、我天子に奏して重く賞せん。迷當願ふ所なりと領承しければ、郭淮不レ堪レ喜、羌の勢を先手として少々魏の勢を雜へ、大軍跡に續て其夜の三更に鐵籠山に近付、まづ使を以て羌の勢來れりと報じければ、姜維いつはりとは知ず夏侯霸と共に出迎ふ。迷當まづ百騎ばかりを引て內に入、姜維に對し向ふ所に、魏の勢後より喊を造て一齊に亂れ入ければ、姜維これは如何にと驚き、馬に打乘て走らんとするに、敵の勢四方より討て入ければ、蜀の軍勢夥しく討れて四紛五落ちり〴〵に敗走せり。姜維は俄の事にて武具を取べき隙もなく、漸馬に乘て走り出、腰に弓を著たりしが、走る時箭は盡く落失たり。只一騎西を望んで馳ゆく所に、郭淮兵を引て之を追こと甚だ急なり。已に交近くなりて槍を撚て、奸賊いづくまで逃ると呼は

ことを怨玉へり、我いま司馬昭を擒にせんこそ慶しけれとぞ勇ける。此時魏の左將軍郭淮は南安郡に居たりしが、司馬昭が鐵籠山に取籠られたる山を傳へ聞、いそぎ兵を引て救はんとするに、副將陳泰申けるは、姜維すでに羗の勢を催して、先南安の城を取しめんとす、若こゝを棄て出玉はゞ羗の勢虚に乘て後を攻ん、不如詐て羗の陣に降參して中にて計を行ひ、先之を破て後に鐵籠山を救候はん。郭淮これに從ひ、陳泰に五千餘騎を授て計を行はしむ。其夜陳泰羗の陣に行、哀み哭て地の上に再拜し、郭淮妄に自ら奢を成て常に某を殺さんと謀る、此ゆゑに來て降んことを望む、願くは共に漢を扶て忠心を盡んと眞しやかに云ければ、羗の王迷當が曰、汝もし實に降ば如何なる功を爲てか忠を致べき。陳泰が曰、郭淮が陣の虚實某よく詳に知れり、今夜ねがはくは一軍を引て某まづ密に魏の陣に入、内より攻て門を開かん、大王その時大軍を引て外より攻玉はゞ一鼓して破りつべし。迷當大に喜び、大將俄何燒戈に命じ、陳泰を案内者として向はしむ。俄何燒戈降參の勢を後陣に置、羗の勢を陳泰に付て先手に備へ、其夜の二更に魏の陣へ推寄るに、其門みな打開たりければ、陳泰只一騎はせ入。これを見て俄何燒戈槍を提て續て入んとするに、忽然として天地も崩るゝ如く人馬陷穴の中に落入て上を下へと蠢ところに、陳泰が勢後より攻かゝり、郭淮内より殺到す。羗の勢死する者數を知

閧ところに、蜀の大將廖化一軍を引て前より蒐る。司馬昭後より逃んとすれば、姜維大軍を引て殺到す。魏の陣中上を下へと騷動して死する者數を知ず。司馬昭四方に路なきを見て打殘されたる兵を從へ、鐵籠山へ逃のぼる。此山元來四方みな險阻にて纔に細き一つの路あり、其上に湧出る泉ありて只百人ばかりは飮足べし。此時司馬昭が手下になほ殘る勢六千餘騎あり。司馬昭姜維に四方を圍れて外に飮べき水なければ、人馬みな枯渇して留るべき樣ぞ無りける。司馬昭天を仰で長嘆し、我この處に死すべしと云ければ、主簿王韜が曰、昔し耿恭と云し人軍中に水乏かりしかば、井を拜して泉を得たり、將軍これに效て何ぞ天に祈玉はざる。司馬昭これに從ひ、泉の邊に來て再拜し、今昭天子の詔を受こゝに來て蜀の寇を破らんとするに、不幸にして奸計に中り、逃れて此山に登る所に、相從ふ兵六千餘人山上水乏して枯渇を忍ぶこと能はず、若某が運この處に盡ば、泉をして枯盡さしめ玉へ、自ら頸を刎て亡べし、壽祿もし此に絕ずんば、願くは泉を賜て諸軍の命を助玉へと誠を盡して祈ければ、司馬氏の運や强かりけん、其泉忽ちに湧ていかに汲ども盡ることとなし。姜維は山の麓を十重二十重に取かこみ、其地の人を呼で山上の案内を問に、答て申けるは、この山の上には纔なる泉ありて百餘人は飮足べし、若汲こと多き時は湧こと無と語りければ、姜維大に喜び、昔し孔明つねに司馬懿を擒にせざる

計にて兖の勢を待ものならん。司馬昭これを聞て徐質を呼、われ向に蜀の勢を破りしは、彼が兵粮の道を塞ゆゑ也、いま蜀の勢鐵籠山の後へ兵粮を運ぶ、汝今夜五千餘騎を引て難所に陣を取、運送の路を塞ば敵自然に退かんと云ければ、徐質計を受て其夜の初更に鐵籠山の後へ出けるに、案の如く木牛流馬百匹あまりに米を負せて通りければ、喊を咄と造て蜀の勢を八方へ蒐ちらし、兵を二手に分て一手は兵粮を本陣に搬せ、一手は自ら從へて追打に十里ばかり進みける所に、行前に又車を雙べて路を遮りければ、兵を馬より下して之を開かんとするに、忽然として兩方より火燃出たり。徐質大に驚き急に退かんとすれば、纔なる細路に柴を積で火を付たりしゆゑ、焰天を焦して通るべき樣ぞ無。時に合圖の鐵砲ひゞきて二手の勢討て出、左に廖化右に張翼引包で攻ければ、魏の勢或は討れ或は燒爛て遁者一人もなし。徐質は只一騎圍を出、疲れ果て走けるが、又向より姜維一軍を引て來りしかば、膽を冷して山へ逃のぼるを、姜維追蒐て一槍に突殺す。初め徐質が兵粮を運せたる一手の勢も半途にて一人も殘らず夏侯霸に生取る。夏侯霸その甲盔を御方の勢に披かへさせ、魏の方の旗幟を指せて小路より司馬昭が本陣に向ふ。番の者共これを見て徐質が回りたるとて急に門を開きければ、蜀の勢こと〴〵く馳入、同音に喊を咄と造て四方八面を斬てまはる。司馬昭こは如何にと驚き、馬よ物の具よと

負て逃のぼりぬ、誰をか討手に向はしめんと議するに、輔國將軍徐質すゝみ出て曰、ねがはくは行て蜀の敵を破らん。司馬師元より其英雄を知ければ然べしと許し、乃ち先陣の大將として司馬昭を大都督とし、行て郭淮を扶しむ。去ほどに姜維兵を進めて董亭を過ければ、魏の勢喊を造て路を横ぎり、徐質大なる斧を打ふり眞先に馬を出す。蜀の陣より大將廖化打て出、戰ひ二三合にして叶ずして敗走す。次に張翼入かはりて戰ひ、此も叶ずして引退けば、魏の勢勝に乘て大に進む。蜀の勢まくり立られ三十里退きければ、姜維手合の軍に打まけ、夏侯霸を召んで問て曰、徐質はいかなる人ぞ。夏侯霸が曰、司馬昭が手下の一勇夫なり。姜維が曰、御邊いかなる計を用ひて擒にせん。夏侯霸が曰、明日兵を出して暫く戰ひ、詐て引退かば敵必ず追來らん。其時伏勢を以て生取べし。姜維が曰、司馬昭は仲達が子なり、豈兵法を知ざらんや、若地理の疑はしきを見ば必ず追ては來るまじ、魏の勢しば〳〵我兵粮の道を塞ぐ、今却てこの計を用て徐質を討んとて、急ぎ廖化を呼で計を授け、張翼に兵を與へて谷の間に伏おき、姜維、夏侯霸は緊く陣屋を守て路に鐵蒺藜を布散し、柵逆茂木を堅固に結て久しく駐るの體をなす。徐質は毎日推よせて戰を催せども、蜀の勢一人も出ざりければ、甚だ怪ところに、斥候より告て申けるは、蜀の勢は鐵籠山の後に出て木牛流馬を驅て多く兵粮を運ぶ、是久しく留るの

通俗三國志　巻之四十六

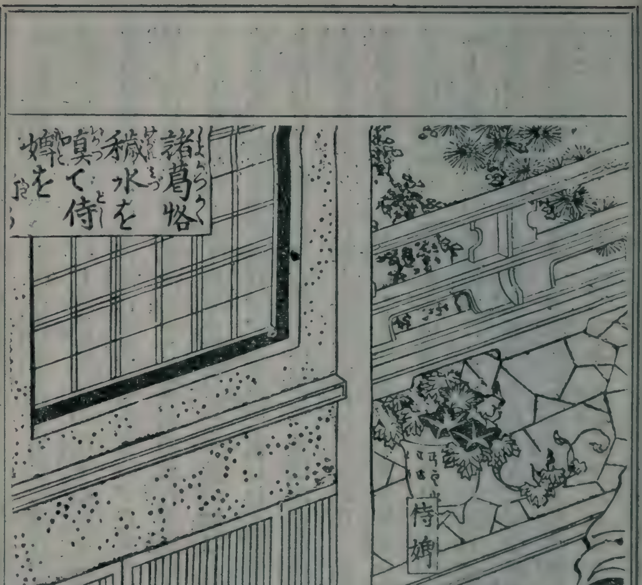
○姜維計困㆓司馬昭㆒

蜀の延熈十六年の秋、衞將軍姜維成都に在て呉の諸葛恪が訃音を聞、天子の詔を受て又二十萬の勢を興し、廖化、張翼を先手とし、夏侯霸を參謀とし、張嶷を運糧使とし、陽平關より出て魏を伐んとて夏侯霸と議して申けるは、向に雍州を攻て勝ずして空く回る、今もし再び出ば又敵の備あらん、先いづくより攻べきぞ。夏侯霸が曰、隴上の諸郡只南安郡のみ兵粮多し、若この處を取て根本とせば敵を討に便を得ん、向に打負て回りしは、羌の勢の遲きゆゑ也、先使を馳て羌の勢を隴右にて待合せ、其のち兵を進めて石營より出て董亭を過、南安郡を攻取べし。姜維尤と同じ、此計甚だ妙なりとて、郤正を使として金銀蜀錦を西羌の胡に贈り、好を結んで援の勢を隴右に出さしむ。羌の王迷當その禮物を受、昭烈皇帝の恩を慕ひ、孔明が德を憶て五萬の兵を起し、俄何燒戈と云ものを大將として南安に出て姜維を援しむ。魏の左將軍郭淮この由を聞て早馬を飛して洛陽へ急を告ければ、司馬師大に驚き、弟の司馬昭は淮南の軍に

内に居たりけるに、俄に心の驚く様にして恍惚としけるが、暫く有て侍婢一人外より來り、遍身血に汚たりければ怪で何事ぞと問に、其女目を怒し牙を嚙、高く躍り擧て其頭梁を撞、われは乃ち諸葛恪なり、今日奸賊孫峻に出拔れて殺されたりと呼はりしかば、一家の老少驚き惶て哭き號聲四方に聞ふ。不時に武士共馳きたり、其一家を縛て盡く市に斬。時に呉の大興二年冬十月也。初め江南の小兒の謠に、諸葛恪蘆葦單衣篾鉤落、于河相救成子閣と云り、昔し父の諸葛瑾つねぐ\諸葛恪が甚だ聰明にして才智ことぐ\く外へ著るゝを嘆き、此子家を保の主にあらずと云しが果して此の如し。又魏の光祿大夫張緝が司馬師に語て申けるは、諸葛恪は久しからずして必ず死せん。司馬師その故を問に、威震其主功蓋一國、何ぞ能久しからんと云けるが、盡く今日に應ぜり。呉主孫亮これより孫峻を丞相大將軍富春侯に封じて内外の事を統督させければ、權柄又一人に屬しける。

て天子に見玉へ。諸葛恪已ことを得ず相共に宮中へ入ければ、呉王孫亮出迎へて曰、朕久しく太傅に逢ず、今日酒宴を設て一大事を議せんと欲す。諸葛恪が曰、いかなる大事にて候ぞ。孫亮が曰、暫く坐せよ、國家の政を議せんとて、孫峻に命じて盃を把せければ、諸葛恪心の内安からず、臣が病いまだ痊ず、この故に酒を飲ずと云ければ、孫峻が曰、太傅は常に藥酒を製して飲玉ふと承はる、急ぎ人を馳て取來らしめん。諸葛恪が曰、わが病藥酒は苦しからず。孫峻乃ち人を遣して諸葛恪が自ら造置たる藥酒を取よせければ、諸葛恪も心を安じて之を飲、すでに數反に及びける時、孫亮事に託て外に出ければ、孫峻殿の上より走り下り、衣裳を脫で小具足ばかりに成、刀を提て躍出、天子詔あり、逆賊を誅すと呼はりければ、諸葛恪大に驚き、盃を棄て劍を拔時、頸は已に地に落たり。張約是を見て刀を舞して討て蒐り、孫峻と戰て張約右の臂を斬落され、孫峻は左の指を斬れにけり。時に武士共走り來り、張約を寸々に斬て肉泥としければ、朱恩かなはじやと思ひけん、外に走りけるを追付て斬殺す。孫峻乃ち大音あげ、諸葛恪罪ありて勅して已に誅し了り、諸人罪なしと呼はりければ、上下みな安堵をなす。其のち殿上の血を清め、再び呉主孫亮を請じて喜の酒宴をなし、蘆の蓆を以て諸葛恪が屍を裹、篾を以て上を束ね、車にのせて城南の門外石子崗の塚坑にぞ弃させける。諸葛恪が妻は房の

れども臭やまず、心の内惆悵として居たる所に、忽ち天子勅使あり、太傅を招て酒宴を成玉はん、早々に參らるべしと云ければ、諸葛恪勅を承り、急ぎ車に乗て多の兵を從へ中門まで出ければ、日ごろ養ひ置たる黄なる犬あり、走り來て諸葛恪が裾を啣へ、其聲嚶々として哭く狀を成ければ、諸葛恪が曰、この犬わが參內を止むるならんとて遂に引囘して坐しけるが、暫く有て出ければ、犬又走り來て引止む。此の如なる事三度に及びければ、扨はこの犬われに戯也とて、兵に命じて逐打せ、車を推て出ければ、俄に白き虹地より起て練絹を曳が如く天に上り失にけり。諸葛恪左右の人に向て、此は不吉の兆にあらずやと問ければ、皆答て、是慶の吉兆なりと申。已に車を早めて禁門に入ければ、武衛將軍孫峻出迎へ、地に拜して申けるは、太傅の尊體ちか比不安なると聞玉ひて、天子酒宴を設て待玉ふと云ければ、互に禮畢て內へ入けるに、御林の大將張約車の前に來て、今日宮中の酒宴は某さらに心得ず、早く此より歸玉へと私語ければ、諸葛恪大に怪で急に車を囘しけるに、太常卿滕胤つと來り、車の前に拜伏して曰、これは何とて御囘り候ぞ、早く入て天子に見玉へ。諸葛恪が曰、われ俄に腹の疼甚して天子に見ることを得ず。滕胤が曰、太傅さきに魏を攻玉ひて後、了に天子に見玉はず、今日酒宴を設て國の大事を議し玉ふ、假令いかなる事有ともこれまで來て囘り玉ふことやある、勉


諸葛恪穢水を嗅て侍婢を
侍婢

諸葛恪

孫峻に命じて用意を成しむ。去ほどに諸葛恪は淮南より回りて後心神恍惚として快らざりしかば、中堂に出て坐したる所に、忽ち何ともなく麻の衣を披て孝を掛たる者一人出來れり。諸葛恪怪で、何ものぞ、忌々しき體にて爰に來れると叱ければ、其人大に驚き、茫然としてあきれたる體なり。諸葛恪いか樣これは故あらんとて士卒を召で拷問せしむるに、其人告て申けるは、某が父ちか比亡びたり、この故に僧を請じて作善追薦の營を成ん爲にこの處を寺なりと思て入けるに、案の外に太傅の府中なりと云ければ、諸葛恪以ての外に怒りて、門を守る軍士を召て怪き人や入たると問に、皆答て、某等一刻も離ず數十人戈を持槍を執て門を戍と云ども、嘗て左樣の人を見ずと云ければ、諸葛恪いよ〳〵怪み、番衆を一人ものこさず斬殺し、其夜心安からずして臥たりしに、俄に正堂の内夥しく鳴響て、千百の霹靂の落るが如なりければ、自ら行て之を見るに、正堂の梁中より折て二つとなり、陰風習々として何ともなく哀み哭音耳に滿て、今朝殺したる麻の衣を披たる者數十人の軍士を伴ひ來り、諸葛恪が頭を摑で命を索む。諸葛恪魂を喪て地の上に倒れけるが、良久して甦り、早天に起て湯洗ひ口嗽ぎけるに、其水甚だ血腥かりければ、侍婢を叱て水を換させけるに、幾度換れども其臭こと舊の如し。諸葛恪甚だ怒り、立所に侍婢を斬て又衣服を披更んとすれば、これも血腥して、數十度披かゆ

まじとて退て國に回らんとすれば、魏大將毋丘儉これを聞つけ、大軍を率して追蒐るに、呉の勢なじかは怺べき、一支もさゝへず大半討れて這々に回りけり。諸葛恪は詮なき師を出して散散に打なされ、心の內深く羞て金瘡に事をよせ、私の家に在て肯て朝に出ざりければ、呉主孫亮自ら行て病を問、文武の百官こと〴〵く來り謁す。諸葛恪人の議論を怕れて手下の大將に過を云なし、或は首を刎又は遠く流罪せしむる者多かりければ、內外みな怕れ慄く。其のち己が親き朱恩、張約と云もの二人に御林の軍馬を統攝せければ、孫峻字は子遠と云ものあり、是は孫堅が弟の孫靜が曾孫にして孫恭が子なり。今まで御林の軍を攝て重く孫權に用ひられけるが、俄に諸葛恪が料ひとして、朱恩、張約これを領しければ心の內に怒を含み、太常卿滕胤きたりければ迎へ入て國の政を談ずるに、滕胤申けるは、諸葛恪みだりに權を專にして、罪なきに公卿を害し不仁の心いよ〳〵長ず、何ぞ早く計を運し玉はざる。孫峻が曰、われも此事を思ふなり、いざや共に天子に奏せんとて、二人打つれ呉主孫亮に見て右の由を訴ければ、孫亮が曰、朕つねに諸葛恪を怕る、いかにして除んと思へども其便を得ず、卿もし忠義の志あらば密に計を成て之を誅せよ。滕胤が曰、彼が金瘡すでに痊たり、陛下酒宴を設て招き玉へ、壁の際に武士を隱し、盃を投るを合圖に打て出て席上にて殺べし。孫亮この義に從ひ、

の角をば念なく攻やぶりぬ。城の大將張特いそぎ使を出して和睦を乞ければ、諸葛恪が曰、もし早々に降ずんば忽ちに城を蹈やぶり、一人も殘さず斬殺さん。使告て曰、魏の國は法度きはめて重く、敵もし城を攻るに、百日が間堅く守れども救の勢きたらざる時は、城を開て敵に降る、此の如くなる時は妻子眷屬も罪を免る、某この城を守て已に九十日に餘れり、願くは數日の間御待候へ、若百日の限を滿ば軍民こと〴〵く出て降るべし。諸葛恪實なりと思ひ、暫く四方の御方を收て攻ざりければ、張特緩兵の計を用ひて此隙に城の破れたる處を補ひ、用意一々に備りしかば、自ら矢倉に上て大音あげ、我城中には猶半年の兵粮あり、爭か吳の犬に降るべきと呼はる。諸葛恪大に怒り、自ら刀を提げて士卒を激し一齊に攻ければ、城の上より射下矢に諸葛恪額を射られて馬より落。諸軍救ひ回りて瘡を治するに、痛甚しくして起あがらざりければ、士卒氣を屈して戰ふ心なし。殊に炎天の暑氣たへ難に汚水を飲で病臥もの多かりけり。日を經て諸葛恪が矢瘡漸く痊ければ、自ら出て城を攻んとするに、諸人告て曰、士卒こと〴〵く病臥て安んぞ戰ふことを得ん。諸葛恪甚だ怒り、再び病のことを云ものは必ず首を斬んと觸ければ、諸卒怨を含で拔がけに落去もの衆し。時に都督蔡林一軍を引て魏に降れりと告ければ、諸葛恪驚て自ら陣中を巡り見るに、諸軍果して病臥、黃に成て腫たる者數を知ず。斯ては叶

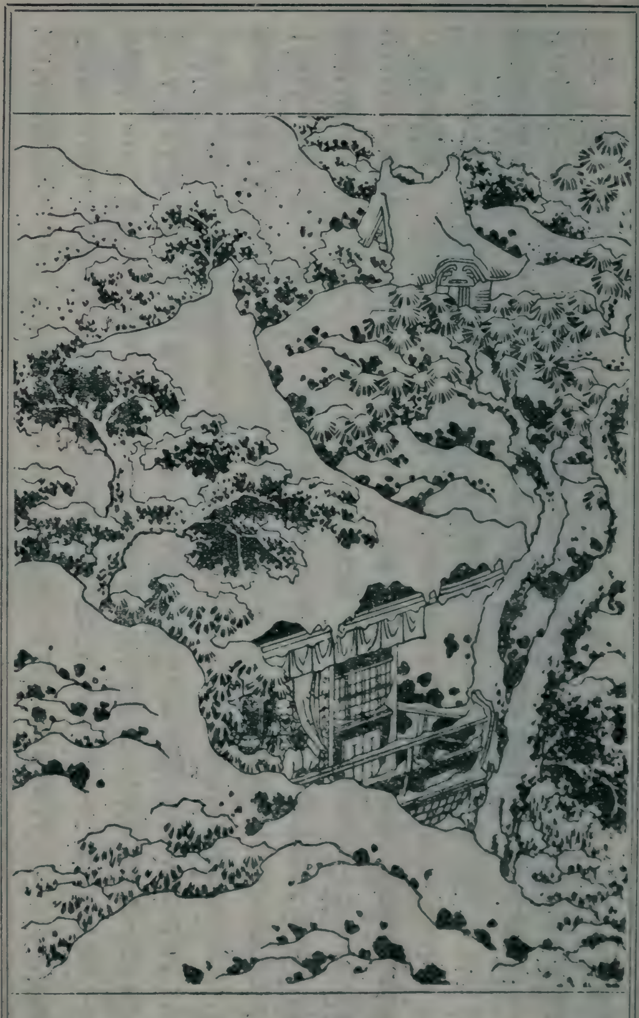
を守る、もし新城を破らば司馬師必ず膽を冷さん。諸葛恪尤と同じ、直ちに新城に推よせ、四方を圍で日夜を分かず攻戰ふ。城の大將は魏の張特と云もの也。よせ手の大勢なるを見て密く守て防ぎ戰ふ。此時洛陽には吳の國へ大勢を指むけたれば、今は漸捷軍の注進あらんと待ところに、大都督司馬昭東興の一戰に打負てこと〴〵く逃のぼると沙汰ありければ、司馬師大に驚く所に、追々急を告て、吳の勢二十萬すでに新城を圍で城すでに落んとすと報じければ、司馬師甚だ後悔し、是他人の罪にあらず、我自らなせる過なりとて如何せんと議するに、主簿虞松が曰、いま諸葛恪しきりに新城を攻るとも、この城要害よければ容易には落べからず、吳の勢遠路を來て人は多く兵粮は寡し、彼もし兵粮盡なば自ら退くべし、某愚案を運に、只毋丘儉に命じて要害に陣を取せ、敵せむるとも敢て出ず、引こもりて日數を送らば、吳の勢みな心怠り、兵粮につまりて自ら亂れん、其時見すまして虛に乘て伐ほどならば、十分の利を得べし、此の如にし玉はば吳の敵は怕るゝに足ず、推量するに蜀の勢この虛に乘て攻來らん、此を專ら用心し玉へと云ければ、司馬師げにもと同じて、又弟の司馬昭を長安へ下して郭淮と共に蜀の姜維を防せ、毋丘儉、胡遵に命じて吳の勢を防しむ。諸葛恪は數月新城を攻れども墓墓しき事も無りければ、自ら怠れる大將を誅して諸人を激し、力を盡して攻ければ、城の東北

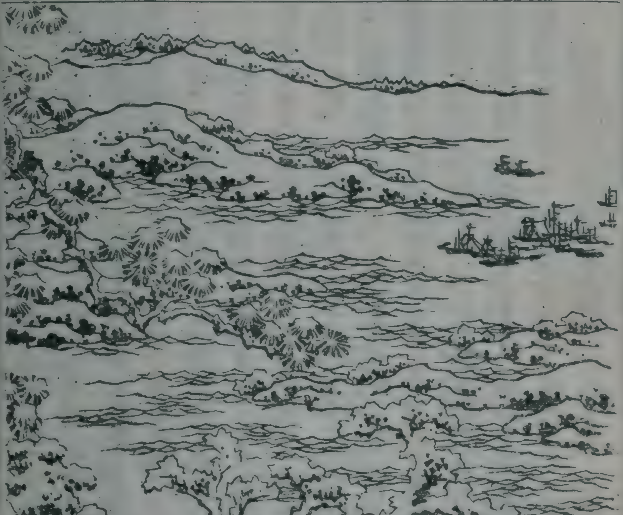
として、纔なる浮梁を渡らんとて上が上に推合ほどに、橋は忽なく蹈落して、溺れ死する者大半に及べり。況や馬物の具を棄たること足の蹈所は無りけり。司馬昭も東興の先陣破れたるを聞て案に相違しければ、斯ては協まじとて諸方の御方を收て都を指て上りける。

○孫峻計殺二諸葛恪一

呉の勢大に打勝て、魏の勢こと〴〵く敗走しければ、諸葛恪勝軍の賀をなして諸軍に恩賞を施し、諸將を集めて申けるは、司馬昭軍破れて都に回る、此時に乘て追打に攻のぼり、魏を滅して天下一統の大業を成んとて、蜀の國へ使を馳て姜維に此由を報じ、呉の勢二十萬を興して打立けるに、忽ち一道の白氣地より起て行先を遮、咫尺の內をも見分がたかりしかば、諸葛恪大に驚て馬より倒に落たりける。諸人たすけ起しければ、諸葛恪此いかなる故ぞと問に、中散太夫蔣延が曰、この氣は乃ち白き虹なり、軍に於て不吉なる兆あり、太傅早く回り玉へ、魏いまだ伐べからず。諸葛恪怒て曰、汝いかんぞ浩る忌々しき事を申て御方の氣を失しむるとて引出して斬んとしければ、諸將哀で命を乞。これに依てその命ばかりを扶け、官を剝で百姓とし、魏の國に打向ふ。時に丁奉申けるは、魏には新城を以て第一の處とし、盡くこの臨口

て三十餘艘の舟あり、毎舟百餘人乘たりければ、冷笑て内に入、諸葛誕に向て申けるは、今敵の舟來ると云ども其勢三千人に過ず、此等の者共なに程の事をか仕出さん、皆々心を安して酒を飮玉へとて、悠然として居たりける。吳の大將丁奉は三十艘の舟を一文字に馳つらね、大丈夫の士功を立名を揚るは此一戰にあり、皆々力を奮て敵御方の目を醒させよと云ければ、三千の精兵勇み躍て甲盔を脱棄て身を輕し、戟槍の長きを用ひず、皆短き刀を提げ、牙を咬で合圖を待。魏の勢は之を見てみな笑ひ哢る所に、忽然として合圖の鐵砲連て三聲ひゞきければ、一番に丁奉舟を飛して岸に著、刀を拔て躍上れば、吳の勢こと〴〵く跡に從ひ、驀地闇に魏の陣に蒐入、短兵急に挫ぐ。其鋒あたる者なければ、魏の勢大勢なりと云ども怺かねて散々になる。大將韓綜は長き戟を取て出けるに、丁奉身を側めて敵の戟を挽奪ひ、走り蒐りて一刀に韓綜を斬倒す。桓嘉これを見てすき間もなく丁奉が左の方に踊出、槍を指のべ突んとするを、丁奉又その柄を握り暫が程ひき合けるが、桓嘉槍を棄て走りければ、丁奉急に趕かけ左の肩より腰を掛て桓嘉を二つに斬て落し、棄たる槍を撚て猶大勢の中へ突て入、三千の吳の勢面もふらず四方八面を蒐通り、中軍の大旗を砍倒し、追立々々揉だりけるに、魏の勢討るゝ者數を知ず、我先にと逃走る。先手の大將胡遵、諸葛誕も馬を飛して逃ければ、亂れ立たる多勢の癖





の城をぞ攻たりける。呉の太傅諸葛恪この由を聞て文武の大將を集めて議して曰、司馬昭大都督として胡遵に浮梁を渡して東興の堤を攻させ、王昶が一軍南郡の界に向ひ、毋丘倹が一軍武昌より寇る、諸將いかなる計かある。平北將軍丁奉が曰、わが國第一の處は東興なり、この處もし破られば南郡武昌も共に危からん、今魏の勢三方より寄ると云ども、彼も定めて先東興を攻んとすべし、今東興の敵を追散し勢ひに乘て進みなば、自餘の敵は戰はずして退くべし。諸葛恪これ妙論なりとて乃ち丁奉に舟手の勢三千人を授けて江に泛べ、呂據、唐咨、劉纂に各一萬餘騎を付て向はしめ、只連珠砲を鳴を合圖に一齊に攻かゝるべし、我自ら大軍を引て跡より續んと云ければ、丁奉令を受て三十艘の小舟に取のり、折ふし北風烈しく吹ければ、順風に便を得て、東興を指て打向ふ。魏の先陣胡遵、諸葛誕は東興に推寄て堤の下に陣をとり、桓嘉、韓綜と云もの二人に左右の城を攻させけるが、左の城には呉の大將全懌、右の城には劉略いづれも固く守りて、元來要害よければ魏の勢日夜攻ければどもいまだ落ず。城の內には寄手目にあまる程の大勢なれば、只密く守て救を待、魏の本陣は徐塘と云ところに在けるが、俄に大雪ふりて寒氣甚しかりければ、酒宴を設て諸大將を會し、江山の風景を愛して居たる所に、斥候より告て曰、只今江の內に小舟三十餘艘はせ來り候。胡遵これを聞て自ら出て望見るに、岸に沿

いよ重くなりければ、諸葛恪を太傅に封じ、呂岱を大司馬に封じ、榻前に召て跡の事共くはしく云おき、忽然として亡ぶ。在位二十四年、壽七十一歳、時に蜀の延熙十五年なり。是に於て諸葛恪政を攝て孫亮を帝位にのぼせ、天下に大赦を行て大興元年と改め、乃ち葬りを厚し祭了て孫權を太皇帝と謚す。この由傳て雒陽へ聞えければ、司馬師魏主に奏して呉を伐んとす。尙書傅嘏諫て曰、呉は寇を爲こと六十餘年、君臣心を一にして吉凶これを俱にす、殊に長江の險阻ありて先帝の時だにも勝ことを得ず、不如よく疆を守りて時の變を窺はん。司馬師が曰、天道は三十年に一度變ず、安んぞ常に鼎の如く雙び存せん、我呉を伐んと思ふ事久し、今孫權すでに死して幼主孫亮懦弱なり、此時に乘て伐んとて征南將軍王昶に十萬餘騎を授て南郡を攻させ、征東將軍胡遵に十萬餘騎を付て東興に向はせ、鎭南都督毋丘儉に十萬の勢を付て武昌より攻入しめ、弟の司馬昭を大都督として諸方の勢を下知せしむ。この年の冬十月に司馬昭すでに呉の境に到り、諸大將を集めて申けるは、東興郡は呉の第一として守る處なり、此故に大なる堤を築て左右に二箇所の城を構へ、巣湖の要害にて防んとす、汝等よく心を付よ、王昶と毋丘儉とは各一萬餘騎を引て左右に分れて陣をとり、我東興を攻破るを見て一同に兵を進めよとて、胡遵、諸葛誕を先手とし、浮梁を渡して東興郡に推寄、堤の上に陣を取て二箇所

○呉魏交兵戰徐塘

魏の嘉平三年秋八月、司馬懿重き病に臥て日に副危なりければ、二人の子を呼で申しけるは、我魏に仕て官太傅に昇たれば、人臣の位その望きはまれり、諸人われに野心ありと疑へども、我いかでか不義の事をせん、我死して後も汝兄弟よく忠を盡して君に事よ、必ず不義の心を生じて我清名を汚こと勿れ、萬一この詞を背なば大不孝の子たるべきぞと云て忽然として命終ぬ。司馬師、司馬昭喪を發して魏主に奏し、葬の禮了ければ、魏主曹芳乃ち司馬師を大將軍に封じて政を攝らしめ、司馬昭を驃騎上將軍として兄弟權を取こと父が時に超たり。呉の孫權は始め太子孫登徐夫人が腹に出來けるが、赤烏四年に早世しけるゆゑ次男孫和を立て太子と定む。この子は瑯琊王夫人が腹に出來たれば、金公主と睦からず、了に讒言せられて廢られ、又第三の子孫亮太子に立、これは潘夫人が産ところ也。この時陸遜すでに死して國中の政みな諸葛恪が料ひたり。諸葛恪は諸葛瑾が子なり。天和元年八月朔日、俄に大風吹て江水わき揚り、平地水深こと八尺、呉主代々の陵墓種る所の松柏こと〴〵く根より拔て風に吹れて建業城の門外に飛きたり、道の畔に倒に立ければ、孫權大に驚き、此より病を受て次の年四月に至りいよ

追蒐けるを、姜維ひとり五路の總口を固て五手の敵を防げれば、魏の勢みな難所に支られて進み得ず。陳泰兵を下知して小高き山に取のぼり、大石を飛し雨の降が如くに矢を放ちければ、姜維こらへ兼て引退き、洮水を渡らんとする所に、郭淮喊を造て山の陰より打て出、前後を遮て餘さじと攻ければ、姜維奮死して圍を出、大半討れて陽平關を指て走る所に、向より鼓の聲天地を動して魏の勢潮の湧が如くに馳きたり、眞先なる大將は圓面大耳、方口厚脣、左の目の下に大なる瘤あり、瘤の上に黑き毛生て、是乃ち司馬懿が長男司馬師なり。都より五萬餘騎にて下りけるが、蜀の勢の退くを見てわざと此處に伏居たり。姜維これを見て、孺子いづくんぞ我かへる路を阻つると罵り、槍を撚て撞て入。司馬師刀を舞して馬を交へ、戰三合ならざるに叶ずして逃わしる。姜維は敢て戰を戀ず陽平關に入ければ、司馬師又取て回し、追すがつて入んとする時、關を守る蜀の勢一度に弩をつるべ放ちければ、其矢雨よりも繁く、魏の勢夥しく射ころされ、怺かねて颷と退く。此弩は孔明が傳し連弩にて、一張に十筋の矢を放ち、鏃みな毒をぬる。其のち麴山の城も落て大將勾安も魏に降り、姜維討れたる兵を數るに數萬人に及びければ、漢中に回りて氣を養ひ、虛病して暫くは出ず。

泰は李歆が城を出て走りたるを聞て、是定めて救を求むる爲ならんとて後攻の勢や蒐ると待に、敢て其儀も無りしかば、屹と心付て郭淮に向て申けるは、今蜀の大勢後に在ながらこの城を救ざるは、羌の勢を待そろへん爲なり、若羌の勢備らば必ず虚に乘て雍州を攻ん、今李歆圍を出て走りたるは救の勢を求めん爲なり、姜維この城の危を聞ば、必ず牛頭山に出て我後を襲べし、將軍は一軍を引て洮水を固て敵の兵粮を遮ぎり玉へ、某は勢を分て牛頭山を守らんと云ければ、郭淮げにもと同じて自ら洮水に陣を取。去ほどに姜維が先陣の勢すでに牛頭山に近付ければ、忽然として一手の勢路を遮り、魏の大將陳泰大音あげて申けるは、汝等わが雍州を襲んとするか、我久しく相俟と呼はりければ、姜維きゝもあへず槍を撚て馬を交へ、一二三合戰ひけるに、陳泰かなはで逃わしる。蜀の勢勝に乘て追討に攻ければ、魏の勢若干亡て山の頂に陣をとる。姜維は牛頭山の麓に屯して日夜戰を挑と云ども、墓々しく勝負も無りしかば、夏侯霸申けるは、此處は暫く陣を取べけれども、久しくは留りがたし、數日戰うて雌雄決せず、此敵の計ならん、不如引退て別に良圖を成玉へ。時に早馬きたりて、魏の大將郭淮洮水を固めて兵粮の路を塞ぎぬと告ければ、姜維大に驚て曰、軍中に粮なくんば安んぞ生ることを得んとて、夏侯霸に命じて兵を退けさせ、自ら後陣に備て徐々と引退く。陳泰山の上より之を見て五手に分れて

城中弱り士卒みな枯渇しければ、勾安申けるは、いま姜都督の勢いまだ來らず、如何なる故を知がたし、若又二三日も延ばこの城共に陷ん。李歆が曰、われ命を弃て圍を出、ゆいて後攻の勢を催すべし、其間いかにもして怺玉へとて、自ら數十騎を引て打て出、前なる敵を追まくりて其勢に扮れて走らんとするに、魏の勢こゝ彼にて取まきしかば、手下の勢こと〴〵く討れて李歆只一騎奮死して斬ぬけ、痛手を負て走りける。この夜北風吹て陰雲四方に覆ひ、俄に夥しく雪ふりければ、城中の者共雪を取て兵粮を炊ぐ。李歆は只一騎二日が間山路を越て姜維が勢に出あひ、麴山二箇所の城久しく大勢に圍れ、漢中の路を塞がれて兵粮通ぜず、水の源を止られて城中みな渇を苦む、幸に大雪ふりたればいま一兩日は怺候はん、事すでに急なりと告ければ、姜維が曰、われ之を救んと心の内には急げども、羌の勢の上るを待間に兎角延引せりとて、李歆を漢中へ送て瘡を治せしめ、夏侯霸と議して申けるは、いま西羌の勢までども上らず、敵すでに麴山を圍で事甚だ急なり、御邊いかなる計かある。夏侯霸が曰、もし羌の勢を待ば麴山の城必ず破れん、我量るに雍州の勢數を盡して麴山に向ふ、然る時は雍州必ず空虛ならん、將軍いま直ちに牛頭山に出て雍州の後を攻玉はゞ、魏の勢麴山を弃て來り救はん、其時前後より攻ば雍州必ず破るべし。姜維然べしと喜び、自ら牛頭山を望んで進發す。この時魏の大將陳

も易からず、緩々として兵を出し玉へ。時に秋八月、用意一齊に備りければ、姜維まづ蜀の大將勾安、李歆二人に各一萬五千餘騎を與へ、麴山の東西に城を構へて勾安に東を守らせ、李歆に西を守らしむ。魏の細作この由を聞て急ぎ雍州の刺史郭淮に報じければ、郭淮乃ち副將陳泰と相議し、雒陽へ急を告て援の勢を求め、先雍州の勢を率して戰將數十人を從へ、麴山の城に攻かゝる。勾安、李歆これを見て城を出て戰ひけるに、魏の勢五萬餘騎新手を入かへ揉だりしかば、蜀の勢小勢にて戰ひ屈し、城中に退て救を待。魏の勢は勝に乘て二箇所の城を取まはし、兵を分て漢中の路を塞ぐ。この城俄に構たることなれば、漢中の通路を止られて兵粮すでに乏く、勾安、李歆やすき心ぞ無りける。郭淮は兵を下知して城を攻させ、自ら其邊の地理を見て陳泰に向て申けるは、我この山の體を見るに、其勢甚だ高して城中に水少かるべし、然る時は必ず外に出て水を汲ん、今もし水の源を斷止ば、蜀の勢戰はずして滅ぶべし。陳泰この義げにもとて兵を分て山の尾を一文字に掘截、水の源を止ければ、案の如く城中に水乏して諸軍渴を忍こと能はず。城中右ては協まじとて大將李歆外に出て水を汲んとする所を、魏の勢すき間もなく取まきければ、蜀の勢したゝか討れて徒に引かへる。勾安も城中に水なかりければ、李歆と合圖を約し、一度に打て出て良久しく戰へども、又打負て城に入。これに因て日に隨て

今司馬懿父子權を專にして曹芳懦弱國すでに滅んとす、臣漢中に在て年久しく、兵粮の支用滿足りて、人強く馬壯なり、願くは勅命を受て師を出さん、今幸に夏侯霸降れり、此を用て案內者とし、王の師を領して孔明の志を繼、再び漢室を興べしと云ければ、尙書令費禕申けるは、近ごろ蔣琬董允相繼で亡び、朝廷いま官を闕、しばらく戰ひを休て時の至るを待玉へ。姜維が曰、人の生涯世に處ことは白駒の隙を過るが如し、左樣に徒然として月日を送らば、中原いつの時にか恢復せん。費禕が曰、孫子も知レ彼知レ己百戰百勝と云り、我等みな孔明に及ばず、孔明だも中原を復すること能はず、何に況や我等をや、不レ如國を保ち民を安じ、社稷を守て外の望を成べからず、若一擧に事を成ざる時は、後悔すとも及ぶまじ。姜維が曰、われ隴上に住居して深く羌胡の心を知れり、今師を出して外好を羌に結び、內庶民を招き集めば、假令中國を恢復せずとも隴上より西は心やすく攻とらん。其時後主宣ひけるは、姜維が申すところ一理あり、卿もし師を出さば忠を盡して鋭氣を墜こと勿れ。是に於て姜維勅を承て朝を退き、漢中に出て計を議し、先西羌の胡へ使を遣して援の勢を求め、大軍次第々々に西平關より出て雍州に近づき、麴山の下に二箇所の城を築て犄角の勢をなし、川口に兵粮を出して孔明の舊き法に效べしと云ければ、夏侯霸申けるは、山谷の路甚だ險阻にして進時も難く退く時

尚書令陳泰一軍を引て後を圍む。郭淮も之を見て取て回し、夾で攻ければ、夏侯霸大に討れて這々に逃のび、すべき樣なかりしかば了に漢中へ行て蜀の後主に降參す。姜維これを聞て信なりとせず、人を遣して魏の樣子を聞しむるに、事實なりければ、夏侯霸を城中に入て對面す。夏侯霸再拜して涙を流し、事の樣ありの儘に語りければ、姜維が曰、昔し微子周に仕て萬代の名を傳たり、御邊もし漢の爲に忠を盡さば何の不可なる事か有んとて、酒宴を設て持なし、今司馬懿父子新に權を執て魏を奪の心あり、又出て戰ふの用意ありやと問ふに、夏侯霸答て申けるは、老賊父子初めて家業を立たり、何ぞ遠く出て他國を攻るの志あらん、彼等父子は此の如しと申せども、近ごろ魏に名將二人あり、共に甚だ年若し、後に大將と成て兵を用ひば、蜀の爲に由々しき大事にて候はん。姜維が曰、いかなる人ぞ名を聞ん。夏侯霸が曰、一人は今祕書郎たり、潁州長社の人にて鍾會字士季、乃ち太傅鍾繇が子なり、司馬懿これと兵法を論じて王佐の才なりと云り、一人は今掾吏たり、乃ち義陽の人にて鄧艾字は士載と云もの也、司馬懿奇才なりとて常に軍機を度る、此二人後に大將と成て攻來らば、實に大なる患ならん。姜維あざ笑て曰、量るにその小兒なんぞ道に足んやとて、伴て成都に到り、後主劉禪に奏して申けるは、司馬懿謀て曹爽を殺し、又夏侯霸を召て殺さんとす、この故に夏侯霸來て御方に降る、

○姜維大戰牛頭山

司馬懿すでに曹爽が一家を滅と云ども、夏侯玄なほ雍州を守りて然も其親族なれば、萬一骨肉の義を思ひ、兵を起して攻のぼる事も有ん、しかる時は由々しき大事なりと思ひ出して魏主の詔を下し、雍州へ勅使を遣して征西將軍夏侯玄を雒陽へ召のぼせける。夏侯玄は乃ち曹爽が外弟にて夏侯霸が爲には姪なり。この時夏侯霸も雍州に在けるが、司馬懿が夏侯玄を召のぼせたることを聞て大に驚き、我曹爽が親族なれば了には司馬懿に殺さるべし、不如先とて手勢三千餘騎を調て謀反を企ければ、鎭守雍州の刺史郭淮これを聞つけ、時を旋さず推寄て、汝は是大魏皇帝の親族、深く天子の恩を受ながら何ゆゑに今謀叛すると呼はりければ、夏侯霸大音あげて曰、わが祖父國家の爲に大功を建、この基業を開く所に、司馬懿匹夫罪なきに曹爽を殺し、その三族を平げて却て父子三人漫に朝綱を手に握る、今又使を馳て我を都に召んとするは、必ず簒逆の企ならん、此故に我義に仗て賊を討、汝なんぞ寄來れる。郭淮きゝもあへず槍を取て蒐りければ、夏侯霸も刀を舞して相あたり、戰ひ十合餘りにして郭淮叶はずして走りけるを、夏侯霸勝に乘て追掛る所に、俄に一手の勢喊と喚て殺到す。夏侯霸驚きて之を見れば、

令女耳鼻を截て曹氏を
永続を
令女

切て自ら苦をなすぞ、殊に汝が夫の一門は已に仲達に滅されたり、今誰が爲に此の如なると云ければ、令女涙を押て申けるは、我きく仁者は盛衰を以て節を改めず、義者は存亡を以て心を易ずと、曹氏さきに全盛なりし時だにも我再び他人に嫁じと誓ひしに、今その家の滅亡を見て何ぞ心を易て嫁んや、此禽獸の行なり、我命を弃るとも之を爲まじと云ければ、司馬懿この由を聞傳へ、世にあり難き貞女なりとて、一人の子を令女が養子として曹氏の後とぞ爲しめける。太尉蔣濟ひそかに司馬懿に告て、魯之、辛敞と云もの二人は日ごろ曹爽が恩顧の者にて、剰へ門を斬やぶりて城を出たり、又楊綜は再三曹爽を諫て總兵の印を渡すまじと云り、此者を殘し置ば後日の禍を成ことあらん、盡く殺し玉へと云ければ、司馬懿が曰、彼おの〳〵其君の爲にす、此乃ち忠義の臣なり、何れも君に仕ては此者共の心をこそ持たけれとて、皆原の官職を授しかば、辛敞大に嘆息し、われ若姐の詞に順はずんば必ず大義を天下に失はんとぞ申ける。司馬懿乃ち榜を出して民を安んじ、曹爽に從し者も罪なければ原の如く用ひしゆゑ、軍民みな業を樂み、上下こと〴〵く安堵の思をなしにける。何晏、鄧颺が非命に死したるは果して管輅が占に應ぜり。那のち魏主曹芳朝を設て司馬懿を丞相に封じ九錫を加へければ、二人の子司馬師、司馬昭も重く封爵に預り、父子三人政を攝て、權柄肩を雙ぶる人もなし。

司馬懿これを見て乃ち返書を調へ、米を持せて遣しければ、曹爽ひらき見るに、其書に曰、

得レ書知ニ公之乏レ糧甚懷ニ踧踖ニ、今致ニ米一百石、并肉脯鹽豉大豆ニ相送、幸乞笑留。

曹爽大に喜び、司馬公元來我を害するの心なしと云て少も疑ふこと無りけり。司馬懿は黄門張當を捕て拷問するに、我一人の知ことにあらず、何晏、鄧颺、李勝、畢軌、丁謐五人みな密に曹爽と計を合せ、天下を簒の企なりと白狀しければ、軈五人の者共を搦め取て糾問するに、皆いま三月の內に天子を弑して國を奪の工なりと告しかば、司馬懿乃ち長き枷を入て盡く捉へ、桓範詐て太后の詔なりと號し、推て南門を通りたる由番兵の大將司蕃きたりて訴ければ、司馬懿又桓範をも獄に下し、惡逆の餘類をこと〴〵く尋出して、其のち曹爽兄弟何晏以下の者共千餘人を市に出して斬殺し、皆その三族を誅滅し、家財こと〴〵く官庫に納め、集め置たる女を其家に送り回す。爰に令女と云ものあり、乃ち曹爽が從弟の文叔が妻にして、夏侯氏の女なり。早く寡と成て子なかりければ、其父又壻を揀で嫁しめんと云に、令女その耳を截て誓を成、再び嫁すべき道なしとて今まで曹爽が家に養はれ居たり。曹爽すでに三族を滅されて後、其父魏主に訴へ、曹氏の緣を斷て又他人に嫁しめんと云ければ、令女又その鼻を截て順はず。一家の人大に驚き、人の浮世に在は喩ば輕き塵の弱き草に棲が如し、汝なにとて耳鼻を

渡しければ、今まで從ひし諸軍勢も之を見て盡く落去けり。其後曹爽わづかなる散騎官僚と城中に回り、洛水の浮橋に到りければ、司馬懿下知を下して兄弟三人を送て其家に回らしめ、餘は盡く禁獄せしむ。曹爽兄弟家に回る時相從者一人もなく、獨歩してぞ入にける。桓範すでに浮橋の邊を通りけるに、司馬懿馬の上より鞭をあげ、桓大夫なに故に此の如なるぞ、天子われを舊の職に復し玉ふと呼はりければ、桓範深く慙愧して跡をも見ずして去にけり。司馬懿乃ち魏主を守護して都に回り、曹爽兄弟を一間なる所に押こめ、鎖を以て其門戶を閉、百姓八百人に命じて四方を守らせ、高き樓を築て家の内を望ましむ。曹爽閉こめられて心の内憂ひ悶え、彈弓を挽て後園の内にて雀を取つれ〴〵を慰め居けるが、ある日樓の上なる百姓共大將軍を放して東南に行しむと唱へけるを聞て、兄弟この事を議するに、曹羲申けるは、是は百姓共の戲なり、何ぞさる事候はん、今すでに糧盡て饑に臨めり、書簡を送りて司馬太傅に些ばかりの助を乞玉へ。曹爽これに從ひ、一通の書簡を封じて門を守る者に持せ、仲達に送れと云ひければ、乃ち太傅の府中に行。司馬懿これを得て開き見るに、其書に曰、

賤子曹爽百拜、奉書太傅尊前。切念某哀惶恐怖、無狀招禍、今受居滅。前遣家人迎糧、于今未返、數日乏粮、萬望寛弘、當煩見餉、以繼旦夕。

に回りて官を退き玉はば自ら無事ならんと云ければ、曹爽默然としてもの云ず。忽ち校尉尹大目鞭を揚て來りければ、曹爽元來交親かりしゆゑ城中の樣を問に、答て曰、仲達洛水を指て誓をなし、他の心さらに無、只將軍の兵權を削ん爲なり、太尉蔣濟が書簡こゝにあり、速に城中に回りて暫く官を退き玉へ。曹爽げにもと思へる體なりければ、桓範が曰、事すでに極れり、他人の言を聞て自滅を求め玉ふな。是夜曹爽心さらに決せず、劍を拔て手に握り、大に嘆息して涙を流し、夜すでに明けれども兄弟三人心いまだ一決せざりしかば、桓範又來て、將軍兄弟三人一日一夜思案して心なんぞ決せざると催しければ、曹爽劍を地に抛て曰、われ兵を起こともも能まじ、又世に出て官職の望もなし、只一命を全して富家の老翁と成て一期を暮さば心足れり。桓範これを聞て大に嘆き、外に出て申けるは、父曹眞はさしも大將の才ありて鬼怪の人なりしに、汝三人の兄弟は共に眞の豚犢なり、何ぞ量らん今日曹氏の九族を滅さんとはとて痛哭して休ず。許允、陳泰しきりに曹爽を諫めて、大將軍總兵の印を仲達に渡し玉へと勸ければ、曹爽これを解んとするに、主簿楊綜と云もの哭て申けるは、將軍もし武官を休てその印を他人に渡し玉はば、必ず市に引出して斬れ玉はん、何とて桓範が言を用ひ玉はぬぞ。曹爽大に怒りて曰、仲達よも詐はあらじ、汝みだりに脣を開くこと勿れとて、了に印を解て

ら洛水の浮梁に陣をとる、只將軍の權重く勢ひ强を削ん爲とこそ申沙汰仕り候へ。暫ありて司農桓範馬を飛して來り、曹爽に見て申けるは、事すでに變ぜり、將軍早く天子を許昌に御幸なしまゐらせ、諸方の勢を招き集めて司馬懿を征伐し玉へ、遲き時は叶まじ。曹爽が曰、われ等が妻子一族こと〴〵く城内にあり、之を捐て何くへか行ん。桓範が曰、將軍幼より兵書を讀で世事の興廢を知玉はずや、今まで將軍の舍宅金銀を輝したるも已に他人の手に奪れ玉へり、再び富貴を求め玉ふとも、安んぞ得べき、且それ匹夫だも質を持時は一人なほ活ることを望んと欲す、將軍もし天子を挾で兵を天下に召ば、誰か命を用ざる者あらん、然るに此を弃て反て死を求るの地に到り玉はんかと云ければ、曹爽なほ決すること能はず、頻に涙を流しけり。桓範又申けるは、將軍の別營ちかく闕の南にあり、雒陽の典嚢こと〴〵く治て城外にあり、令を下して招玉はば速に來て役を致さん、今この處許昌までは路の程わづかに半宿に過ず、殊に許昌の城中には夥しく兵糧あり、軍中に憂るものは只兵糧ばかりにて候、今大司馬の印は某が腰にあり、早々に先許昌の城に楯こもり玉へ、遲き時は滅亡に及ばん。曹爽が曰、汝等あまり喧しく云こと勿れ、我よく心を鎭て工夫をなさん。時に侍中許允、尚書令陳泰二人來り、仲達いま兵を興は將軍の威勢甚だ盛なるを削ん爲なり、別に他の心はなく候、早く城中

根據盤結互恣日甚。外既如此、以黄門張當爲都監、專共交關、看察至尊、伺候神器、離間二宮、傷害骨肉、天下洶々人懷危懼。且陛下但爲寄生、豈得久安。此非先帝詔陛下及臣升御座之本意也。臣雖朽邁、敢忘往言、昔趙高極意、秦氏以滅、呂霍早斷、漢永世、此乃陛下之大鑒、臣受命之時也。太尉臣濟尚書臣孚等皆以爽爲有無君之心、兄弟宜不典兵宿衛、奏永寧宮皇太后、令勅臣表奏施行。臣輒勅主者及黄門令、罷爽羲訓吏兵、以侯就第、不得逗遛以稽車駕、敢有稽留、便以軍法從事。臣輒力疾將兵、屯于雒水浮橋、伺察非常。謹表上聞、仰于聖聽。

魏主曹芳表を聞て乃ち曹爽を呼よせ、仲達が奏する所理の當然なり、汝いかゞ之を裁斷せんと云ければ、曹爽色を失ひ手足を張て怕れ戰き、二人の弟を顧て如何すべきと問に、曹羲が曰、某これを思うて已に再三諫申せども、兄迷を執て用ひ玉はず、今日果してこの禍を引出せり、況や仲達が詭の計は天下に及ぶ者なく、孔明だも勝ことを得ず、我等兄弟いかゞして彼に敵せん、不如自縛して一命を扶るべし。浩る所に參軍辛敞、司馬魯芝二人あわたゞしく馳來れり。曹爽城中の樣を問に、二人答て曰、城中の密こと鐵桶を見が如し、仲達大軍を引て自

れば、蔣濟が曰、曹爽は駑馬の棧豆を戀が如し、必桓範が言を用まじ。司馬懿げにもとて急ぎ許允、陳泰二人を呼よせ、御邊城を出て曹爽に逢、いま我等が心は只曹爽兄弟が兵權を削ん爲なり、別に他事なしとて彼が心を安からしめよと云ければ、二人計を受て出にけり。司馬懿又校尉尹大目を呼で蔣濟が書簡を渡し、御邊は元より曹爽と交深し、急ぎ此書簡を持て曹爽を曉し、我心は只兵權を削ん爲なり、別に害心なき由を云て無事に城中へ回らしめよ、我と蔣濟と洛水を指て誓を成と申し候へとて、門を開て出しけり。此時曹爽は野外に出て鷹を飛し、犬を走らしむる所に、忽ち早馬きたり、城中に變あり、太傅表を上ると呼はりければ、曹爽大に驚て已に馬より落んとす。黄門官いそぎ跪て表を上りければ、近臣これを讀に、其文に曰、

征西大都督太傅臣司馬懿。誠惶誠恐頓首謹表、臣昔從遼東還、先帝詔陛下與秦王及臣等、升御床、把臣臂、深以後事爲念。臣言、太祖高祖亦囑臣以後事、此自陛下所見、無所憂苦。萬一有不如意、臣當死以奉明詔。黄門令董箕並才人侍疾等、皆所共知。今大將軍曹爽背棄顧命、敗亂國典、內卽僭擬、外專威權。破壞諸營、盡據禁兵、羣官要職皆置所親、殿中宿衛歷世舊人皆復斥出、欲置新人以樹私計、

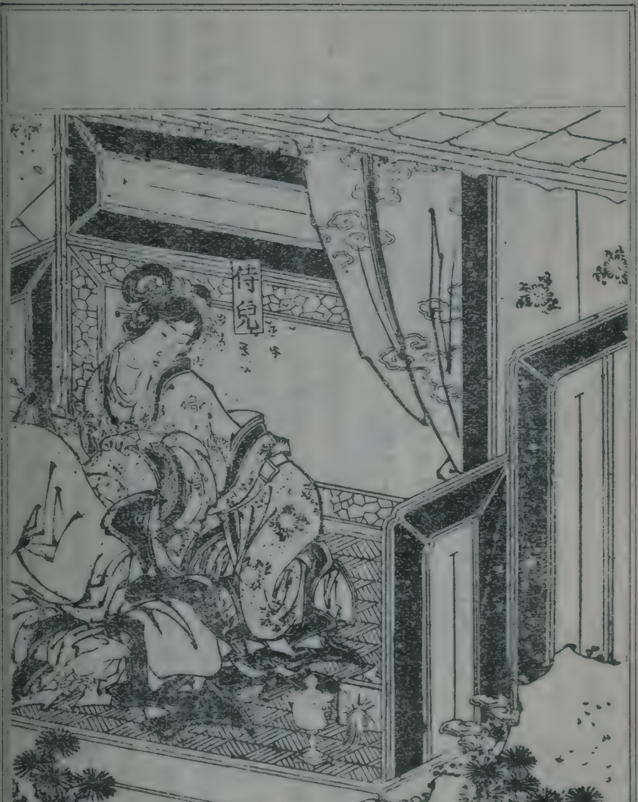
心にあらず、必ず曹將軍を殺の計ならん。辛敞が曰、この事いまだ其實を知がたし。辛憲英が曰、曹將軍は仲達の敵手にあらず、必ず敗し玉ふべし。辛敞が曰、只今魯芝きたりて某と共に城外に出んと云、いかゞして宜かるべき。辛憲英が曰、事ある時は他人だも互に救ふ、況やこれ汝が君の大事なり、早く城を出て力を扶よ。辛敞乃ち魯芝と打つれ、數十騎を率して門を戍る者を斬ちらし、城外へ馳出たり。司馬懿これを聞て司農桓範が出んことを怕れ、急に使を遣して招かしむ。この時桓範は其子と打より、城中の變を議するに、其子答て申けるは、今天子外に在す、此まゝにては居がたし、不如南門より走るべし。桓範げにもとて馬に打のり、平昌門より出んとすれば、城門すでに閉て人を通さず。門を守る大將は元桓範が下吏にてありし司蕃と云もの也ければ、桓範袖の内より竹版を取出し、此は郭太后の詔なり、早々に門を開けと云ければ、司蕃が曰、われ輕々しくは通ことあたはず、眞に詔ならば委く見せて後通り玉へ。桓範怒りて申けるは、汝は元來われに從へる下吏なり、今なにとて無禮なる。司蕃是非なくして門を開きければ、桓範つど走り出て曰、仲達いま天下を奪んとす、汝早く我に從ひ來れ、この故に太后の詔なりと詐たり。司蕃さては此人に出ぬかれたりとて、馬を飛して追掛しかども、及ばずして空く回る。司馬懿これを聞て大に驚き、智囊洩たり、如何せんと云け

尙書令司馬孚二人に表を書せて黄門官を使とし、城外に出て天子に奏せしめ、司馬懿自ら武具を貯へたる庫に行て合戰の備を成んとす。或人この由を聞て曹爽が家に告ければ、曹爽が妻の劉氏本より心早者なる故、自ら廳前に走り出、番の兵を召て、今主公外に出玉ふ、仲達俄に合戰の用意をなすは何事ぞ、能々きゝ定めよと云ければ、大將潘擧と云もの承り候とて精兵數十騎を引て矢倉に登り、四方の體を望み見るに、司馬懿兵を引て武庫に到らんとす。潘擧是を見て、さればこそ直事にあらずとて、指つめ引つめ散々に射る。司馬懿射立られて通ること能はず。時に孫謙と云る大將いそぎ矢倉に登て潘擧を制し、漫に矢を放ち玉ふな、此は天下の事なり、我等その故を知ずと云ければ、潘擧これに因て射ざりけり。須臾ありて司馬昭大勢にて馳來り、父を守護して武庫を把守りければ、司馬懿自ら洛河に陣を取、水の上に浮橋を造て守りける。曹爽が手下に司馬魯芝と云ものあり。城中の變を見て參軍辛敞と議して申けるは、いま仲達此の如く亂をなす、主公出て外にあり、如何せんと思ひ玉ふぞ。辛敞が曰、手下の勢を引て城を出、天子を守護して兎も角もならん。魯芝この議に同じければ、辛敞まづ後堂に入て母に見ゆ。その姐辛憲英が曰、何ゆゑに慌さわぐぞ。辛敞が曰、天子外に出玉ひしに、仲達俄に兵を起して城門を閉、これ天下を奪の心にて候はん。辛憲英が曰、仲達は天下を奪の

○仲達父子執レ政

曹爽已に司馬懿が病の重を聞て心の內甚だ喜び、魏主曹芳を請じて高平の陵に出、父曹叡を祭りて後直ちに野外に出て獵をなす。大小の百官こと〴〵く相從ひ、曹爽も三人の弟と御林の軍馬を整へ、何晏、鄧颺等も一齊に打出ければ、司農桓範急ぎ曹爽が馬を扣て諫て申けるは、將軍いま萬機典禁の兵馬を統て、何ゆゑに兄弟こと〴〵く城を出玉ふぞ、若野心の者ありて內より城門を鎖しなば如何して囘り玉ふべき。曹爽鞭を擧て叱て曰、兵權みな我にあり、誰か左樣の企を成んとて、了に馬を早めて盡く打出たり。司馬懿この體を窺ひ見て大に喜び、舊將を招あつめて急に軍馬を調へ、先司徒高柔に節鉞を假て大將軍の事を典て曹爽が營に據しめ、太僕王觀に中領軍の事を行て曹羲が營に據しめ、司馬懿自ら宮中に入て郭太后に見え、曹爽みだりに先帝孤を託するの重を忘れ、奸雄にして國を亂る、廢せずんば叶まじ、今この故に兵を起し候と云ければ、郭太后大に驚て曰、天子いま外に出玉へり、卿これを如何せん。司馬懿が曰、臣すでに計あり、御心を苦め玉ふべからず。太后震ひ畏れて制する事能はず、卿よく料ひ候へと云ければ、司馬懿が曰、今日國賊を誅する時は天下の幸甚なりとて、太尉蔣濟、

司馬懿偽病して李勝を詐る


侍兒

史に封じ玉ふ也、幷州にては候はず。司馬懿笑て曰、御邊いま幷州より來れるか。李勝が曰、漢上の荊州なり。司馬懿が曰、御邊荊州より來れるか。李勝が曰、太傅の病なにとて此の如なる。左右の人答て曰、太傅ちか比耳聾て聞こと能はず。李勝乃ち硯を求め書付て見せければ、司馬懿これを見て笑て曰、われ病に犯されて耳ものを聞ことあたはず、御邊荊州に到らばよく務めて功を建、その身を保重せよと云て手を以て口を教れば、侍婢乃ち湯を進む。司馬懿これを飲で湯流れて襟を濕しければ、李勝笑て曰、諸人みな太傅の舊風發ぬと云しが、今果して此の如し。司馬懿乃ち哽噎の聲を成、われ老衰して病重し、死すること旦暮にあり、二人の子不肖なり、御邊よく教へ導き、曹將軍に見えられれば、千萬二人の子を賴みたる由つたへて玉はれと云て床の上に倒れ臥、聲斷ひ氣喘ぐ。李勝拜し別て曹爽が府中に到り、右の趣を告ければ、曹爽大に喜でこの老父なほ餘氣あり、形色すでに離る、乃ち泉下の人なり、我なんの慮か有んとぞ申ける。司馬懿は李勝が回りたるを見て起あがり、二人の子に向て申けるは、李勝わが病の樣を語らば、曹爽等再び我を疑まじ、唯いつにても彼等が城外に出て獵をする時急に計を施さんとて、密に用意して待居たり。

兄いま毎日遊宴をのみ事として威勢を以て天下の人を畏れしむ、長久の計にあらず、況や遠く城外に出て獵をし玉ふ、萬一害を謀る者ありて城内に變あらば、後悔すとも及ぶまじと云ければ、曹爽怒て曰、兵權こと〴〵く我手の内にあり、誰か害を謀る者あらん、無用の事をも云もの哉と氣色を損じて叱ければ、曹羲涙を流して退きけり。何晏ある日曹爽に見えて、今司馬仲達病と號して久しく出ず、君なんぞ心を付て虚實を窺玉はざると云ければ、曹爽笑て、量にこの老夫なんぞ道に足んとぞ申ける。其のち正始十年改めて嘉平と號し、李勝を荊州の刺史に封ず。曹爽專ら内外の權を執、久しく仲達が消息を聞ざりしかば、病の虚實を知ん爲に密に李勝を呼で計を敎へ、汝刺史と成て荊州へ赴かんとす、急ぎ仲達が家に行て暇乞して彼が病の體をよく〳〵見きたれと云ければ、李勝直ちに太傅の府中に到る。門吏先その由を報じければ、司馬懿ひそかに二人の子を呼で曰、これは曹爽わが病を探ん爲なり、我又計を成んとて急ぎ冠を卸で髮を亂し、床の上に臥て身に被を纏ひ、二人の女に扶け拘へられ、李勝を呼入て對面す。李勝床の前に再拜し、久しく太傅に見ゆる事無りしが、料ざりき此の如くに衰へ玉はんとは、天子いま某を荊州の刺史に封じ玉へり、此ゆゑに御暇乞を申ん爲に參たりと云ければ、司馬懿いつはりて答て曰、幷州は胡ちかき處なり、必ず油斷なく守り玉へ。李勝が曰、荊州の刺

なる者は亡ぶ、害盈の數盛衰の期、思はずんば有べからず、此ゆゑに山地中に在を謙と云、雷天中に在を壯と云、謙は損多して益寡し、壯は禮に非ば行ふこと勿れ、未レ有二損レ己而不レ先大一、行レ非而不二傷敗一者は、願くは二公上は文王六爻の旨を追、下は尼父彖象の義を思ひ玉へ、然る時は三公の位をも得て青蠅驅盡べしと憚るところ無申ければ、鄧颺勃然として怒て曰、これ老生の常談なり。管輅も二人が用ひざるを見て、老生は不生を見、常談は不談を見ると罵り、袖を拂て回りければ、何晏、鄧颺大に笑て、是まことに狂人なりとぞ申ける。管輅は家に回りて其舅に右の趣を告ければ、舅驚て申しるは、何晏、鄧颺は威勢甚だ盛にして、天下の人ことごとく怕れざるはなし、汝なに故に無用の言を出して二人の意に逆うたるぞ。管輅が曰、われ死人と語る、何ぞ少しも怕るゝこと有ん。舅驚て曰、死人とは何事ぞ。管輅が曰、われ鄧颺を視るに行歩筋不レ束レ骨、脉不レ制レ肉、起立傾倚して手足なき人の如し、此を鬼躁の相と號す、何晏は魂不レ守レ宅、血不レ華レ色、精爽烟浮にして其容枯木の如し、此を鬼幽の相と名づく、共に遐福の人にあらず、近き内に粉骨碎身せられて累必ず三族に及ぶべし、我この故に怕れずと云ければ、聞人みな大に笑ひ、狂人なりとて嘲りしが、後にぞ思ひ合されたり。曹爽は何晏等と日夜酒を飲て遊びけるが、氣鬱して煩はしきとて常に城外に出て獵をなす。その弟曹羲これを諫、

て天下の政を議し、四方の名士來て門下に投ずる者數を知ず。司馬懿はこの黨逆を知て虚病して朝に出ず、二人の子も職を辭して外に出ず、時を待て計をなさんとす。曹爽これに因て彌憚るところなく奢を長じ、毎日何晏等と酒を飲で樂をなし、衣食器皿みな朝廷と齊く、玩好珍奇の物も魏主に獻らずして已が家に貯へ、佳人美女を擇で府院に集め、黄門官張當と云ものを語ひければ、張當諂ひ阿りて私に先帝の侍妾七八人を選で曹爽の家に送り、良家の美女五六十人を家樂とし、重樓畫閣を建、金銀の器皿を造り、其榮耀きはめずと云こと無りけり。何晏ある時昔日神卜管輅と云者深く易の理を明め、人の吉凶を卜しと語りければ、鄧颺申けるは、われ毎夜不思議なる夢を見る、幸に卜しめんとて急ぎ管輅を招きよせ、我毎夜數十疋の青蠅とび來て鼻の上に落ると夢を見る、吉凶を卜ひ玉へと云ければ、何晏も申けるは、我等が相は三公となるべき人物なりや、願くは卜ひ玉へ。管輅答て曰、元愷舜を輔て慈惠を宣、周公周を佐て坐して旦を待、この故に光を六合に流て萬國みな寧し、此乃ち道を履の休祥なり、豈筮を以て卜ことを用んや、今二公その身侯位に居して職山岳よりも重く、名雷霆の震が如し、徳を懐ものは寡く威を畏るゝ者は衆し、殆ど小心翼々たる多福の人にあらず、況や鼻は天中の山高して危からず、長く貴を守る所以なり、今青蠅惡臭に依て此にあつまる、位峻ものは顚り、輕豪

餘人あり、其内五人は皆浮華諂佞の者なりしかば、明帝世にありし間は遠ざけて用ひざりけるが、今政を攝に至て又こと〴〵く諂ひ事ふ。その五人と申は何安字は平叔、鄧颺字は玄茂、李勝字は公昭、丁謐字は彦靜、畢軌字は昭先なり。其外大司農桓範字は元則と云もの媚を成て阿り從ひ、共に巧言令色を以て己が富貴を得んと料る。何晏ある時曹爽に告て申けるは、軍兵を統司の大權もし他人に托し玉はば、後必ず禍あらん。曹爽が曰、われと軍中の大事を統攝は仲達なり、この人は先帝孤を托し玉へる舊臣なれば、我爭か廢るに忍ん。何晏が曰、將軍は知し召ぬことも候はん、昔日御父曹眞は仲達と共に蜀の敵を破る時長安に出玉ひしに、仲達しきりに恥を與へて氣を病しめけるに因て、了に陣中にて逝去し玉へり、今將軍なんぞ之を察し玉はざる。曹爽げにもと省て此より仲達を退けんことを謀り、或日魏主曹芳に見て申けるは、司馬仲達久しく先朝より事て功高く德重し、宜く太傅の位に昇せ玉ふべし。曹芳幼して自ら主張すること能はず、宜く料ひ候へと云ければ、曹爽乃ち司馬懿を太傅に進めて、天下の兵馬こと〴〵く我一人の下知に從はしむ。是に因て弟の曹義を中領軍とし、曹訓を武衛將軍とし、曹彦を散騎常侍侍講として、兄弟三人御林の軍馬を統督し、放に禁宮に出入す。又何晏、鄧颺、丁謐を尙書とし、畢軌を司隸校尉とし、李勝を河南の尹として、此五人つねに曹爽を扶

に逢ことを得たり、死すとも何の恨か有ん。司馬懿頓首して曰、臣途中にて聖體の不安なることを承はり、心ばかりは急ぎしかども兩脇に翼なきを恨む、今幸に龍顔を拜する事を得たり。曹叡乃ち郭皇后、太子曹芳、大將軍曹爽、侍中劉放、孫資等を床の前に呼よせ、自ら司馬懿が手を執て申けるは、昔し蜀の劉先主は白帝城にて病危かりし時、太子劉禪を孔明に託せり、此に因て孔明忠誠を盡し、命を弃て孤を扶く、偏邦の人臣だも猶かくの如し、況や中國をや、朕が孤曹芳は年わづかに八歳なり、爭か社稷を理ることを得ん、願くは太尉並に宗兄、及び元勳の舊臣、伊尹、周公の忠に效て共に孤を扶ば、宗廟生靈の大幸なりとて、太子曹芳を近く呼よせ、司馬仲達は朕と違ことなし、今より後必ず重く敬へと云て司馬懿に命じて曹芳を抱しむれば、曹芳乃ち司馬懿が頸に取付て手を放ず。曹叡これを見て涙を流し、太尉よく今日の事を思ひ、必ず誤ること勿と云ければ、司馬懿頓首して涕泣す。曹叡昏沈して言こと能はず、唯手を以て太子を指し、須臾にして命終りぬ。在位十三年、壽三十六歳。時に景初三年正月下旬なり。此に於て曹爽、司馬懿まづ曹芳を帝位に卽しめ、曹叡を高平陵に葬て明帝と謚し、郭皇后を皇太后と尊號して正始元年と改め、二人内外の政を攝て、曹爽殊に司馬懿を敬ふこと父の如し。曹爽字は昭伯、故大將軍曹眞が子にして、乃ち魏主の至親なり。始め門下の賓客五百

○仲達謀殺曹爽

景初三年の正月に魏主曹叡許昌の殿中に在けるが、或夜の三更に一陣の陰風吹起て側なる燈を打滅し、何くともなく哭哀音して、先年殺されし毛皇后數十人の宮女を作ひ來り、座邊に依て命を索む。此より重き病を受て一身安からず、日に副危く成ければ、劉放、孫資二人に樞密院の事務を掌せ、武帝の子燕王曹宇を大將軍に任じて太子曹芳を輔しめんとす。曹宇は生れつき恭儉溫和にして堅く辭し申により、曹叡乃ち劉放、孫資と誰をか用んと議するに、二人昔し曹眞が恩を受たりしかば、其子を勸ん爲に答て申けるは、燕王自ら才の淺を知て此職を辭す、別に才ある人を擇玉へ。曹叡問て曰、朕が宗族の內誰人をか用ふべき。二人答て曰、曹眞の子曹爽この職に任ずべし。曹叡是に從ひ、曹宇を本國へ追返し、曹爽を大將軍として朝廷の政を總攝しめ、使を馳て司馬懿を召。この時司馬懿は已に遼東を平げて都を指て回りけるが、途にて此事を聞、いそぎ許昌に來て曹叡に見ゆ。曹叡が曰、朕死を忍で卿が回るを待、いま已

早く頸を洗て刀を受よとて逐立て回ければ、衛演頭を抱へ、鼠の逃るが如くに馳かへり、公孫淵に告ければ、公孫淵膽を冷し、其子公孫修と千餘騎を引具し、其夜の二更に南門より出て東南の方へ走りけるに、敵一人も見えざりしかば心を安んじ、行こと十里ばかりにして忽然として山の上に鐵砲ひゞき、鼓の聲地を動して一手の勢路を遮り、司馬懿中央に馬を躍せ、司馬師、司馬昭を左右に備へ、反賊いづれへか逃ると呼はりければ、公孫淵膽を冷し、引回して逃んとするに、合圖の火の手を揚て魏の先鋒胡遵眞先より討て蒐り、左に夏侯霸、夏侯威、右に張虎、樂綝、十方より打圍で鐵桶の如くなりしかば、公孫淵父子共に地に跪て降參を乞。司馬懿大に笑ひ諸將に向て申けるは、適に丙寅の日この處へ星落たりしが、今夜壬申に相應ぜりとて了に二人の首を刎させ、直に襄平の城に入んとすれば、先鋒胡遵すでに城を打やぶり、國中の人民香を燒て出むかふ。司馬懿城中に入て公孫淵が一族官僚七十餘人を斬殺し、榜を出して民を安んじ、賈範、倫直が公孫淵を諫めて殺されたるを憐み、二人の墓を封じて其子孫に恩賞し、國中すでに治まりしかば兵を、收て洛陽へ回りけり。

を矢倉の上より繩を以て城外へ縛り下し、魏の陣に行て降參を望しむ。二人司馬懿が前に再拜し、太尉ねがはくは四方の圍を解て二十里退き玉へ、盡く城を開て降らんと云ければ、司馬懿大に怒り、汝いかなれは輕々しく來て我を欺ぞとて引出して二人の首を切、その從者に與て檄文を添て回しける。公孫淵この由を聞ていよ〳〵驚き、自ら檄文を開き見るに、その文に曰、

魏征西大都督太尉司馬公、檄下二公孫淵一。切謂、楚鄭列國、而鄭伯猶肉袒牽レ羊迎レ之。孤乃天子上公、而建甫等欲二孤解レ圍退一レ舍、豈得レ無レ禮耶。二人老耄傳レ言失レ指、已被二吾斬一レ之、若意有レ未レ已、可下便少年有二明決一者來上。稍有二稽遲一、悉皆誅戮。故檄。

公孫淵これを見て怖れ戰き、如何せんと議しければ、侍中衛演が曰、某ねがはくは行ん。公孫淵よく〳〵云含めて魏の陣に遣ければ、司馬懿これを聞て、諸大將を華やかに出立せて中軍に排列せしめ、其後に呼入けるに、衛演膝行肘歩して帳下に拜伏し、跪て申けるは、冀はくは太尉雷霆の怒を息、虎狼の威を靜て某等が降參を許し玉へ、先その子公孫修を出して質とし、君臣みな自縛して降るべし。司馬懿が曰、凡そ軍をするに大法五あり、能戰ふ者は戰ひ、戰ふこと能はざる者は守る、守ること能はざる者は走る、走ること能はざる者降る、降ること能はざる者は死す、汝等出て降こと能はずんば當に死すべし、我人質を取て何の用にかせん、

いまだ手を束て降人に出ず、われ此ゆゑに無能の事を爲て敵の心を安からしむ、今もし小利を貪て城を攻ば、敵必ず命を弃て戰ふべし、只軍を休て敵の兵粮につまるを伺へ、今十日の内に天氣必ず晴べし、那時力を盡して攻やぶらんと語りければ、諸將みな再拜してこれ眞に神武の計なりと感服す。司馬懿乃ち洛陽へ人を上せて兵粮を催促しければ、群臣みな奏して曰、近ごろ秋雨ふり續いて一月やまず、人馬こと〴〵く疲れ苦む、早く詔を下して司馬懿を都へ召回し玉ふべし。曹叡が曰、仲達よく兵を用ひて危に臨で變を制す、必ず深き計あらん、朕ちかき内に必ず公孫淵が首を見るべし、卿等患る事勿れとて夥しく兵粮を下しける。司馬懿は戰を休て雨の晴を待に、數日の内に天氣果して晴にけり。其夜外に出て天文を見るに、一つの星その大さ斗の如く、光數丈を流て首山の東北より襄平の東南の方へ落ければ、諸人みな大に驚く。司馬懿笑て曰、五日の内にこの星の落たる處にて必ず公孫淵を打取べし、明日力を倂せ一攻にせめよとて、夜すでに明ければ、四方の寄手相ちかづいて喊を造り、山を築て雲の梯を造り、鐵砲を飛し石を投かけ、地を掘て攻入ければ、城中の勢こゝを先途と防ぎけれども、兵粮すでに盡ければ牛馬を殺して朝夕を送る。斯ては始終いかゞと議する所に、結句城中に野心の者ありて常に公孫淵を殺さんと覷ひければ、日夜心を安んぜずして相國王建、御史柳甫二人

とを願ひ候と告ければ、司馬懿勃然として怒て曰、われ已に令を出す所に、汝なにとて冒レ法せるぞとて引出して仇連が首を刎、轅門に梟させければ、諸軍ふるひ怕て再び移さんと云もの無。此に於て司馬懿南の陣を二十里退け、態とゆる〳〵と攻て城の内の者共みな外に出て牛馬を牧柴薪を取せければ、司馬陣珪と云もの問て申けるは、昔し孟達が謀反せし時上庸の城を攻玉ふに、兵を八路に分て道を急ぎ、遂に孟達を生取玉へり、今御方の勢四萬、はる〳〵数千里を來りて却て緩々と攻玉ふは如何なる故ぞ、願くは教玉へ。司馬懿笑て曰、汝は司馬の官に居して兵法を知ず、昔し孟達は上庸の城に籠て、兵粮一年の貯ありて兵は小勢なり、其時我勢は敵に四倍して却て兵粮は一月の用意もなし、我一月の兵粮を以て敵の一年の兵粮に對せば、焉んぞ久しく戰ふことを得ん、四倍の兵を以て敵の小勢を攻ば勝ずと云こと有べからず、この故に夜を日に繼で急に攻させ、了に孟達を擒にせり、今遼東の勢多く此城に楯こもりて御方の勢は甚だ寡し、敵は兵粮に乏して御方は兵粮に飽足り、此ゆゑに日を送るに從て城の中兵粮につまり、必ず南門より走べし、其時勢ひに乘て之を攻ば、勝ずと云こと有べからず、我この故に緩々と攻させ、南の攻口を二十里退けたり、是敵を走らしめん爲なり、兵法にも兵者詭道也、戰者逆道也、善因二事變一と云り、敵いま兵粮に乏しと云ども御方の勢の水中に在を恃として、

打喊を造りて魏の伏勢こと〴〵く起り、左に夏侯覇右に夏侯威勢に乗て討て蒐る。卑衍、楊祚大に驚き、一支へも支へず襄平を指て走りければ、又向より司馬懿自ら討て出、三方より圍ければ、遼東の勢討るゝ者數を知ず、降る者大半に及べり。卑衍、楊祚は命を捨て這々に圍を出、首山の麓まで走りける所に、公孫淵大勢を引て馳きたりければ、一手に成て敵を待に、魏の勢つゞいて追蒐しかば、卑衍馬を出して大音あげ、汝等魏の逆賊詐の計を休て分明に勝負を決せよと呼はりければ、魏の陣より夏侯覇馬を馳出し、戰ひ二三合にして一刀に斬て落す。遼東の勢驚き怕れて色めき立たるを見て、魏の勢をめいて蒐たりしかば、公孫淵散々に亂れて襄平の城に逃こもる。魏の勢四方を圍て日夜せむれども要害堅固にして更に落ず。時秋の半に至て霖雨一月に餘り、平地水深こと三尺、この故に兵粮を運ぶ船も遼河より直ちに城下まで來る。魏の勢みな水中に在て患ひ苦まざる者なく、戰ふ心なかりしかば、都督裴景と云もの司馬懿に告て申けるは、大雨久しく降つゞいて陣中みな泥の中に居が如し、前なる山へ陣を移して暫く晴を待玉へ。司馬懿怒て曰、われ此を知まじきか、公孫淵を生取こと目の前にあり、安んぞ今陣を移さん、必ず無用なる舌を搖して諸軍の心を迷しむること勿れ、重ねて陣を移さんと云ものあらば必首を斬んと觸たりける。其後右都督仇連來り、御方の軍勢水を患て皆陣を移さんこ

必ず敵の計に中らん、推量するに遼東の勢大半この處を守りたるらん、然る時は其巣必ず空虚なるべし、我この處を打弃て直ちに襄平に攻かゝらば、敵必ず來り救ん、那時半途に伏て之を破らば十分に討勝べしとて、盡く襄平を指て進發す。遼東の大將卑衍きびしく守りて出ざりけるが、楊祚を召で申けるは、魏の勢たとひ攻來るとも我等必ず戰ふべからず、彼はるゝゝと四千里の道を來り、人多して粮足ず、我等堅く守て月日を送らば、彼が兵粮忽ちに盡て自ら亂れ去ん、那時追打にせば盡く滅べし、昔し司馬懿渭水の陣を固めて出て戰ふこと無りしかば、孔明果して兵粮盡て亡びたり、今日よく此理に合へり、我いま司馬懿を生取て孔明が爲に仇を報ぜんとていよゝゝ緊く守る所に、斥候の兵走り來り、寄手の勢この處を打弃て山路より南を指て進んだりと告ければ、卑衍驚て曰、彼すでに御方襄平の虚なるを知て此を打弃て却て後へ廻れり、襄平もし破れなば我等一日も生ること能はず、早く行て救んとて陣屋を收て打立ける。司馬懿は兼て千餘人の兵を土民の體に出立せ、處々に殘し留めて敵の樣子を伺はせけるに、遼東の勢陣屋を收めて襄平を救と告ければ、司馬懿あざ笑て曰、我計に出ず、夏侯覇、夏侯威二人は濟水の濱に伏て此の如くに計を用ひよと下知しければ、二人計を受て出にけり。案の如く遼東の勢襄平を救はんとて、濟水の邊まで來りければ、忽然として鐵砲ひゞき、鼓を

り、如何して容易く平げん。司馬懿が曰、兵は多きを用ず、奇を設け智を用ひば、公孫淵必ず擒と成ん、臣ねがはくは君の洪福に託て一鼓に遼東を平治すべし、少しも御心を苦め玉ふな。曹叡が曰、朕いま卿が計を聞ん。司馬懿が曰、臣いま公孫淵が爲に圖るに、城を弃て豫め走るを上計とし、遼東を守て大軍を拒を中計とし、坐ら襄平を守て動ざるを下計とす、是を以て必ず敵を生捕ん。曹叡が曰、三つの計卿いづれをか用ふべき。司馬懿が曰、よく我と彼とを料るに、彼必ず破るべし、公孫淵は愚濁の匹夫いづくんぞ城を捨て走ることを知ん、必ず先遼東を守りて次に襄平を守るべし、焉んぞ臣が度る所に出ん。曹叡が曰、卿いま遼東へ下らば何れの日か都に回らん。司馬懿が曰、四千里の路なれば、百日に彼國に到、攻ること百日、回ること百日、休息すること六十日、此の如なる時は前後一年の内には事治らん。曹叡が曰、もし呉蜀より攻來らば如何せん。司馬懿が曰、臣すでに呉蜀を禦の計を定め置り、陛下必ず憂玉ふな。曹叡大に喜びければ、司馬懿諸の大將を伴ひ、胡遵を先手の大將として直ちに遼東へ下りけり。公孫淵この由を聞て卑衍、楊祚に八萬餘騎を授け、遼隧に打て出て、周り二十餘里に陣屋を造り壕を深うし鹿角緊く結て守らしむ。先陣の大將胡遵この體を見て急ぎ司馬懿に報じければ、司馬懿笑て曰、これ戰はずして密く守り、寄手を疲さん爲の計なり、もし今攻ば

に敵すべき。公孫淵大に怒り、賈範を縛て獄に下しければ、參軍倫直諫て申けるは、賈範が詞まことに理の當然なり、聖人も禍福將レ至、善必先知レ之、不善必先知レ之と宣へり、わが國しば〳〵不思議の事あり、君なんぞ察し玉はざる、近ごろ一匹の犬あり、怪き頭巾を戴き紅の衣を披て、人の屋に入て往來す、是一つの不祥なり、城南の百姓飯を炊けるが、釜の中に一人小兒の蒸れたる死骸あり、是二つの不祥なり、襄平の北なる市に俄に大なる陷坑出來て、内より死人の肉を出せり、太さ二三尺、五體共に備て却て手足なし、往來の人切ども射れども更に透らず、何ものならん知人なかりしゆゑ、卜者に之を占はせければ、形ありて手足なく、口ありてものいはず、國家すでに亡びんとして浩る形を現と云り、是三つの不祥なり、孔子も國家將レ興必有二禎祥一、國家將レ亡必有二妖孽一と云り、君たゞ凶を避て吉に就玉へ、今もし謀反し玉ひなば必ず其身を亡し玉はんと云ければ、公孫淵いよ〳〵怒り、了に賈範、倫直二人を市に出して首を刎、即時に卑衍と云ものを大將とし、楊祚と云ものを先陣とし、十五萬の勢を起して在々處々に火を放ち、鄕民を掠劫す。是に因て北國の騷動斜ならず、洛陽へ急を告ること雪の飛が如なりければ、魏主曹叡大に驚き、司馬懿を召て計を議するに、司馬懿が曰、臣が手下に四萬の勢あり、必ず此賊を退治すべし。曹叡が曰、卿わづかの勢にて遙々と下

を集て計を議す。

○仲達興㆑兵定㆓遼東㆒

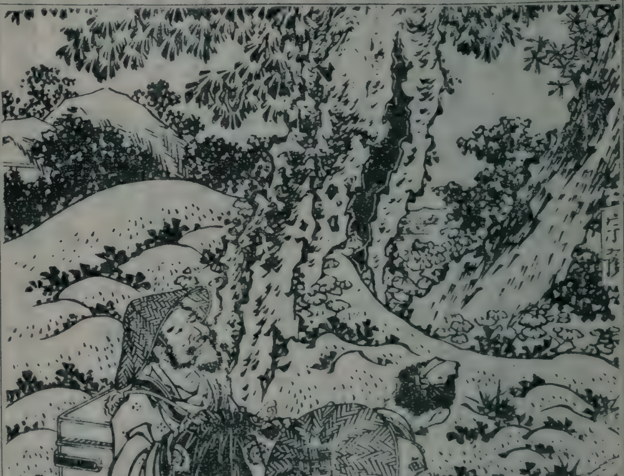
遼東の公孫淵は乃ち公孫度が孫公孫康が子なり。去ぬる建安十二年曹操自ら袁尚を追蒐ければ、公孫康乃ち袁尚を斬て首を送り上せけるゆゑ、曹操その恩賞に公孫康を襄平侯に封ず。公孫康二人の子あり、兄を公孫晃と云弟を公孫淵と云。公孫康死して二人の子幼によりて、公孫康が弟公孫恭その國を保ち、曹丕が時に車騎將軍襄平侯に封ぜらる。その後太和二年公孫淵すでに年長じて武力人に絕れしかば、了に公孫恭が位を奪ひけり。曹叡これを揚烈將軍遼東の太守に封じければ、吳の孫權わが國の援とせんが爲に張彌許宴と云者を使とし、金銀を送て好を結び、公孫淵を燕王に封ず。然れども魏を怕るゝの心ありければ、吳の使を殺して其首を魏に送る。曹叡これを賞して太司馬樂浪侯に封じければ、公孫淵これを不足なりとし、諸將を集めて謀反を企、自ら燕王と號して紹漢と年號を定む。時に賈範と云もの諫て曰、何とて浩ることを企玉ふぞ、曹叡の送れる官職卑しと云にあらず、然るに謀反を興し玉はば、必ず大なる殃を招ん、況や司馬仲達よく兵を用ひて孔明だも尙怕れたり、我國の分として爭か中國

め曹叡いまだ位に卽ず平原王たりし時、甚だ毛氏を愛して出入つねに輦を同くせしかば、帝位に卽て卽時に皇后に具へける。其のち郭夫人を寵愛して毛皇后には目をだにも向ず、日夜郭夫人と樂に耽り、常に月を經も宮を出ず、是歳の三月上林苑の内に百花爭ひ開けて、春風興を催しければ、曹叡郭夫人と遊びをなし、花萼樓にて酒宴を設く。郭夫人問て曰、天子なんぞ毛皇后を召で共に花を見玉はざる。曹叡が曰、もし毛皇后を一目見れば朕一滴の水も喉に入ことを得ずとて、宮女に命じて四方を守らせ、毛皇后を此邊へ寄ること勿れ、朕見ることを欲せずとて、郭夫人と遊びける。毛皇后は一月にあまれども曹叡が來らざるを怪み、此日十餘人の宮女を伴ひ、翠花樓の邊に出て心を慰めけるが、遙に音樂の聲を聞て是は何くの樂ぞと問に、宮女答て、是は天子郭夫人と花見をし玉ふ御遊なりと云ければ、毛皇后心の内憂ひ悶え、宮中に回りて次の日車にのりて園に出けるが、廻廊の邊にて曹叡と出あひ、昨日北園にての御遊はさこそ樂深く候はんと云ければ、曹叡大に怒り、武士を呼で毛皇后を絞殺させ、相從ふ宮女をも盡く殺して了に郭夫人を皇后とす。時に景初二年春正月、長安より早馬きたり、幽州の刺史毌丘儉表を上て遼東の公孫淵謀反を起して自ら燕王と稱し、紹漢と年號を立て夥しく兵をあつめ北國を動亂す、速に討手を下されずんば勇々しき大事に及んと告ければ、曹叡大に驚き、群臣

怕れず火を付て臺を焼せ、只銅人金盤を取て洛陽に上り、右の趣を語りければ、曹叡が曰、銅の柱は安にある。馬均が曰、みな重きこと百萬斤にして中々動ことを得ず。曹叡又大勢を遣し銅の柱を打碎て洛陽へ運ばせ、之を以て銅人を二つ造り、翁仲と號して司馬門外に立させ、又銅の龍鳳を造り、龍は高さ四丈にして鳳凰は三丈あまり也。みな之を殿前に立て、上林苑の内には奇花異木を夥しく集め、珍禽怪獸を畜ひ、又美女千餘人を選び集めて其費みな民の嘆と成ければ、少傅揚阜表を上て之を諫む。曹叡怒りて表奏を扯やぶり、武士に命じて揚阜を門外へ引出させ、自ら馬にのりて上林苑に出んとすれば、太子舍人張茂字は彦林と云もの、髪を亂して身に紙錢を掛、地に跪て表を上りければ、曹叡ひらき見るに又諫る詞なりしかば、勃然として色を變じ、張茂は只中書令なり、何とて狂言を出して朕を謗るぞとて、武士に命じて首を斬しめければ、張茂大に叫で曰、無道昏君早晩必ず敵の擒と成んと罵りて、了に首をぞ斬れける。曹叡その首を百官にしめし、又馬均に命じていよ〳〵高臺銅人を造らせ、禁裏の墀に大なる鼎をすゑて油を日々に沸かへらせ、若諫る者あらば烹殺さんとぞ觸たりける。百官これに怕れて司馬懿に告ければ、司馬懿が曰、魏の運すでに盡たり、必ず諫ること勿れ。是よりして諫る者一人も無りけり。時に青龍五年改めて景初元年とす。皇后毛氏は本河内の人なり。初

が曰、朕元より董尋が忠義を知、これを殺に忍ず、官職を剝で百姓となし、重ねて諫むる者あらば首を斬んとて、即時に董尋が官を剝とり、馬均を召て申けるは、朕が建る高臺峻閣は仙人と往來し、長生不老の術を求めんと欲す、汝が意いかん。馬均が曰、陛下昔し漢の武帝の立玉ひし柏梁臺の事を聞玉はずや。曹叡が曰、朕いまだ詳に知ず、汝試に之を語れ。馬均が曰、漢朝二十四代の中只武帝のみ國を保ち玉ふこと最久しく、壽も亦高し、天上日精月華の氣を服し、長安の宮中に一つの臺を造て柏梁臺と名づく、上に銅人を造て手に一つの盤を捧げ、之を承露盤と號し、三更の時分に北斗の降せる沆瀣の水を承て天漿と名づけ、又甘露とも名づく、美玉を屑とし調へて之を服する時は、自然に老たるも童と成て百病を除と申傳て候。曹叡大に喜び、汝行て承露盤を取來れとて、一萬の人夫を馬均と共に長安へ遣しける。馬均夜を日に繼で馳下り、柏梁臺の四方に材木をくみ擧て梯とし、縄を引て上にのぼり、五千の人夫に先銅人と金盤とを取おろさせんとすれば、忽ち銅人潸然として涙を流す。諸人みな心怪ところに、俄に一陣の狂風ふき起り、沙を飛し石を走らしめて、その烈きこと急雨の如く、何くともなく喨く音の聞えけるが、天も崩れ地も裂が如く、其響四遠に聞えて銅の十圍に餘れる圓柱一度に倒て、高さ二十餘丈の臺こと〴〵く崩れしかば、人夫千餘人壓に打れて失にけり。馬均これにも

て密奏しければ、後主急ぎ蔣琬を召て議し玉ふ。蔣琬が曰、楊儀さきには魏延を孔明に讒す、魏延これに因て已事を得ずして謀反せり、是諸人の明に知ところ也、いま又渚る言を吐出す、必ず國の禍を生ん。後主いよ〳〵怒り、獄に下して斬て捨よと宣へば、蔣琬が曰、楊儀いま罪ありと申せども久しく孔明に從て功勞あり。之を殺に忍難し、只官職を削て百姓となし玉へ。後主これに從ひ、命ばかりを助て漢中の嘉郡に徙し玉ひければ、楊儀これを羞て自ら首を刎て失にけり。此より國中大に治り、姜維兵糧を貯はへて二十年の計をなす。乃ち蜀の建興十三年なり。時に魏の靑龍三年、魏主曹叡は孔明すでに死して吳蜀久しく兵を起ず、國中甚だ靜なりければ、司馬懿を太尉に封じて各處の軍馬を總督させ、自ら許昌に在て夥しく材木を集め、多く宮殿を建て三年を經て盡く成就す。又洛陽に朝陽殿、太極殿、總章觀を築き、倶に高さ十餘丈なり。又崇華殿、靑霄閣、鳳凰樓、九龍池を造り、博士馬均と云ものを奉行として財用の費を厭ず、華麗を極て金玉を鏤め、雕梁、華棟、碧瓦、金磚、錦繡重々として光彩日に輝く。天下の巧匠三萬餘人、人夫三十餘萬を選で晝夜を分たず是を造らせ、若も便を得ざること有時は、公卿大夫に土を擔せ石を搬しめければ、萬人の哭き已時なし。司徒董尋表を上て諌めければ、曹叡怒て、汝死を怕れざるかと云。近臣みな法に於て斬て弃べしと云ければ、曹叡



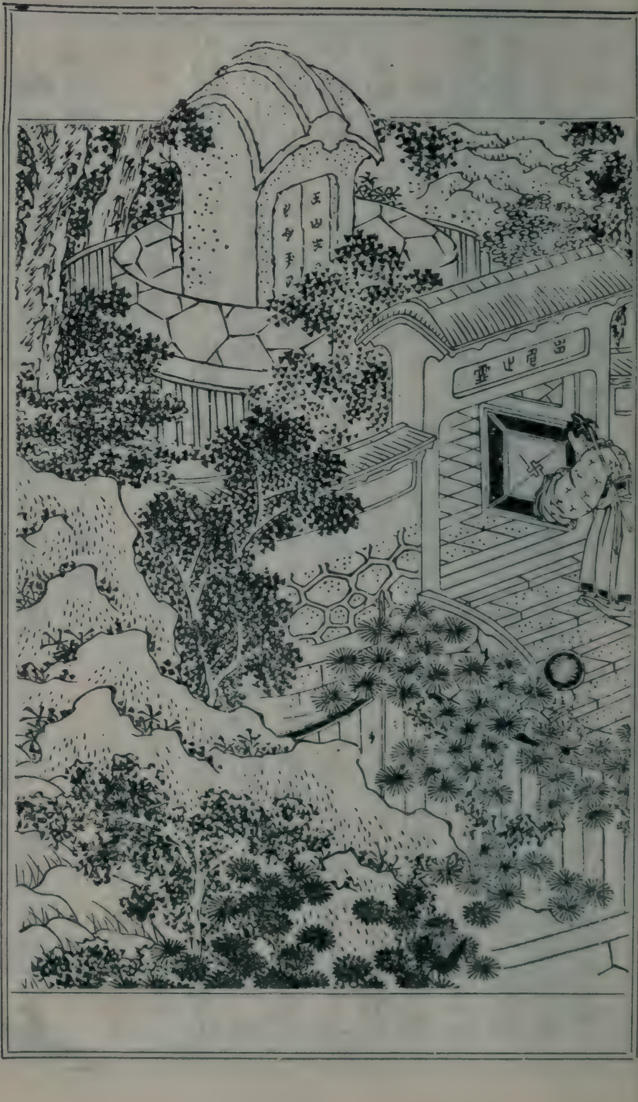
蜀の宗預
呉國へ
おもむく

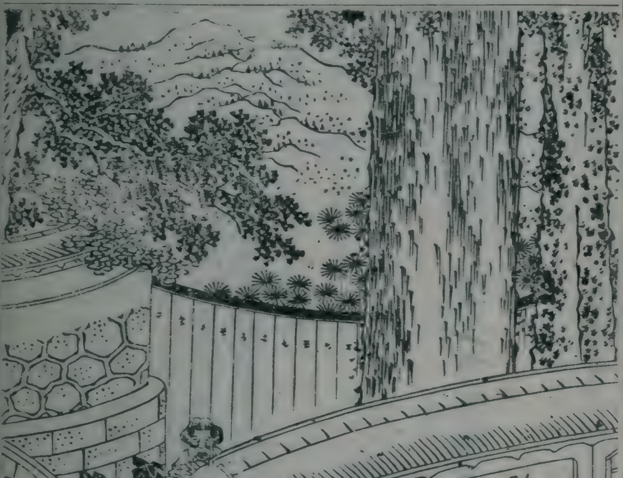
この人も眞の俊傑なり、昔日の鄧芝に劣ずとて近く呼で申けるは、朕新に孔明が亡たるを聞て毎日涙を流し、諸葛瑾が一族に孝を掛て祭を成しめ、左右の者までも盡く喪を發せしむ、萬一魏の勢この弊に乘て蜀を攻んことを怕れ、巴丘に勢を添て守らしむる、此同盟の好を以て也。宗預頓首して曰、わが國の天子孔明が新に亡びたるを以て、臣に命じて喪を陛下に奏し、彌好を結しむ。孫權矢を折て誓をなし、朕すでに交を結ぶ上は、焉んぞ義に背の理あらん、若誓に背ば朕が子孫天の罰を被らんとて香帛禮物を具へ、別に使を馳て喪を弔しむ。宗預わかれて成都に歸り、後主に奏して申けるは、吳主孫權も孔明新に亡たる由を聞て自ら涙を流し、諸葛瑾等に孝を掛て祭を成しめ、魏の勢の虚に乘て蜀を攻ん事を怕れ、巴丘に戍りを添て我國を援く、彌同盟の交を結ばん爲なり、此故に別に使を馳て喪を弔はしむ。後主大に喜び、吳の使を重く持成て囘らしめ、宗預を厚く賞して那後孔明が遺言に任せて蔣琬を丞相大將軍錄尙書事とし、費禕を尙書令として同じく丞相の事を理めさせ、吳懿を車騎將軍とし、節を假て漢中を守らしめ、姜維を輔漢將軍平襄侯とし、諸處の軍馬を統て漢中に出て魏の勢を防せ、其餘の諸將ことぐく封賞ありけるに、楊儀は己が委用せられざるを恨て、孔明五丈原に亡びたる時、我もし諸軍を率て魏に降ば、箇程寂寞き日には遭まじき者をと云けるを、近臣これを聞

凛々威風鎮八番　羽扇綸巾扶社稷　忠肝義膽展江山
壯懷未遂身先喪　提起令人血涙斑

○魏折長安承露盤

後主劉禪すでに孔明を葬りて朝廷に回り入せ玉ふに、近臣奏して申けるは、只今邊官早馬を打て吳の大將全琮數萬騎の勢を調て巴丘へ出たりと告來れり。後主これを聞て色を失ひ、丞相ちか比亡びたるに、吳もし盟に背て攻來らば如何すべきと宣へば、蔣琬が曰、臣ねがはくは王平、張嶷等と數萬の勢を引て永安城を守らん、陛下一人の使を吳に遣し、丞相の喪を告て其心を窺はしめ玉へ。後主これに從ひ、誰をか使にせんと宣へば、一人すゝみ出て曰、臣不才なりと申せども願くは吳に使せん。これ乃ち南陽安衆の人に參軍右中郎將宗預字は德豔なり。蔣琬この人しかるべしと奏しければ、後主詔を下して吳に遣さる。宗預直ちに吳の金陵に到り、禮を施して孫權が左右を見るに、近侍の人こと〴〵く喪の服を披たり。孫權申けるは、吳と蜀とは一家の交なるに、御邊が君なにとて永安城に守りの勢を添たる。宗預が曰、臣意に、東は巴丘の守りを添、西は永安の勢を增、事の勢ひ皆然り、何ぞ之を怪玉はん。孫權笑て曰、





丞相祠堂何處尋　錦管城外柏森々　映階碧草自春色
隔葉黄鸝空好音　三顧頻煩天下計　兩朝開濟老臣心
出師未捷身先死　長使英雄涙滿襟

宋の東坡が廟の記に曰、

密如鬼神、疾若風雷、進不可當、退不可追、晝不可攻、夜不可襲、多不可敵、少不可欺、前後應會、左右指揮、移五行之性、變四時之令、人也神也仙也、吾不知之、眞臥龍也。

延平の李先生朱子に謂て曰、

孔明不若子房之從容、子房不若武侯之正大也。

宋の參政葉士能が贊に曰、

退莫追兮進莫攻　來如風雨去無蹤　神機妙算誰能測
果是人間一臥龍

程伊川が挽詞に曰、

六出雄師度劍關　運謀投策笑談間　巍々功業蓋三國

制法を行ふこと能ずんば、柩いづれの日か國に回り魏延いかんぞ滅ることを得ん、是みな卿が力なりとて、楊儀を中軍師に封じ、馬岱忠義の功衆に超たりとて魏延が官職を加へ玉ふ。楊儀乃ち孔明が遺表を上りければ、後主披き見ていよ／＼哭き、數日朝へも出玉はず、地を擇で厚く葬らしめんと宣へば、費褘奏して曰、丞相終に臨で定軍山を墓とし、墻を構へ磚を布ことを用ひず、又一切の祭をも爲べからずと宣へり。後主これに從ひ、十月吉日を擇で自ら柩を送り、定軍山に葬り玉へば、文武の百官軍民老幼こと／＼く拜哭して考妣に喪するが如く、祭り哀聲天を振ひ地を動す。後主懇に祭を營み、詔を下して忠武侯と謚し玉ふ。其詔に曰、

惟君體資文武、明睿篤誠、受遺託孤、匡扶朕躬、繼絶興微、志存靖亂。爰整六師、無歳不征、神武赫然、威鎭八荒、將建殊功于季漢、參伊周之巨勳。如何不弔、事臨垂克、遘疾殞喪。朕用傷悼、肝心若裂。夫崇德序功、紀行命謚、所以光昭將來、刊載不朽。今使使持節左中郎將杜瓊、贈君丞相武鄕侯印綬、謚君爲忠武侯。魂如有靈、嘉茲寵榮。嗚呼哀哉。

後主祭を畢、廟を沔陽に建て四時怠らず祭しめ玉ふ。されば唐の世に至るまで此廟の前に種たりし栢の木なほ殘りければ、杜子美これに題する詩に、

我乃ち漢中を汝に與んと云ければ、魏延大に笑て曰、楊儀匹夫よく一言をきけ、孔明もし生てあらば我少は憚ること有ん、今孔明已に亡ぶ、天下の人たれか我に敵すべき、三聲のことは扨おき、三萬聲呼はるとも我なんの怖か有ん、汝たしかに聞とて刀を横たへて大音あげ、誰か背て我を殺さんと呼はる。其言いまだ了ざるに後より一人聲を擧て曰、われ敢て汝を殺さんとて一刀に魏延が頸を切て落す。諸人驚て見るに、魏延を斬ものは馬岱なり。是元來孔明葫蘆谷にて司馬懿と魏延とを燒殺さんと計り、五百の勢を魏延に付て司馬懿を谷の内へ帶き入させしが、思の外に大雨ふりて其計つひに成ず、却て科を楊儀に皈して痛く馬岱が罪を責、密に計を授て詐て魏延に從はしめたる也。馬岱すでに魏延を斬ければ楊儀乃ち其三族を滅し、表を上て天子に奏す。後主これを聞て、魏延いま罪を正して誅すと云ども、前々多くの功勞ありとて、詔を下して屍を厚く葬らしめ玉ふ。那後楊儀、姜維等孔明が柩を扶けて已に成都に入ければ、後主群臣を伴ひ、孝を掛て二十里出て迎へ、聲を放て哭玉へば、上公卿より下山野の百姓までも慟ずと云ものなく、哀み叫ぶ聲四方に響く。柩すでに城中に入ければ、成都の民家々に祭を設て盡く拜哭す。先柩を送て丞相の府に入、孔明が嫡男諸葛瞻字は思遠に命じて之を守らせ、後主朝廷に入せ玉へば楊儀自縛して罪を請。後主近臣に命じて縛を解しめ、卿もし丞相の

武藝人に超たる時は、自ら霸王の業を思ひ立べし、何ぞ區々として人に膝を屈んや、我將軍を見るに智勇共に備れり、蜀中の大將たれか能敵すべき、我ねがはくは將軍と共に先漢中を取て兵粮を貯へ、兵を集めて蜀を取ん、事すでに掌にあり、將軍なにをか疑ひ玉へる。魏延限なく喜び、共に南鄭の城へ推よする。姜維矢倉に上て望み見るに、魏延、馬岱勇を震ひ威を耀し、風擁して來ければ、急に門を閉て堀の橋を挽しむ。魏延城外に馬を躍せ、早々に城を開かずんば忽ちに踏破らんと呼はりければ、姜維ひそかに楊儀と議して曰、魏延が勇猛なる、馬岱又これを助く、小勢なれども退け難からん。楊儀が曰、丞相終に臨で、若魏延謀反せば互に陣を取向うたる時、此錦の嚢を披き見よ、自ら魏延を殺の計あらんと宣へり、今果して此の如しとて錦の嚢を出して見れば、上に魏延と相對して馬上にて披き見よと書たり。姜維喜び、扨は丞相約束の計あり、長史これを行玉へとて自ら槍を執て馬にのり、三千餘騎にて討て出、喊を吶と造て陣勢を張、大音あげて、反賊魏延なにゆゑに謀反すると呼はりければ、魏延刀を横たへて曰、我元より汝に遺恨なし、早く楊儀を出し來れ。此間に楊儀旗の陰にて錦の嚢を開き見て陣前に進み出、反賊魏延、丞相世に在し時汝が必ず謀反せん事を宣ひしが、今果して此の如し、汝もし馬上にて誰か肯て我を殺さんと高らかに三聲呼はらば、是まことの大丈夫と云つべし、

何平は南谷に推よせ、鼓を打て喊を造り、大音あげて、反賊魏延いづくに在と呼はりければ、魏延すゝみ出笑て申けるは、汝楊儀を扶て謀反をなし、我を反賊とは何事ぞ。何平が曰、丞相ちか比亡び玉ひて屍なほ冷ず、汝いかなれば謀反するとて、又鞭を指て大音あげ、汝等諸軍は盡く蜀の兵、故郷に遺れる父母妻子つねに涙を流して歸を待、殊には丞相の大恩を思ひ謀反の賊に從ふこと勿れ、早く故郷に回りて恩賞に預れと呼はりければ、魏延が手下の勢こと〴〵く四方へ散て去にけり。魏延これを見て大に怒り、直ちに何平に討て蒐り、戰ひ二三合にして何平馬を打て走りければ、魏延のがさじと追來るを、何平が三千餘騎一度に弩を放ちければ、魏延射立られて引退く。其勢次第に落失ければ、魏延腹を立て自ら追附て落ゆく勢を斬殺しけれども、了に一人もなく落失て、今は馬岱が手に屬へる三百餘騎ぞ殘りける。魏延申けるは、われ平生眼ありながら盲人に異ならず、日比久しく我に從へる者共も盡く落失たるに、御邊一人殘り玉ふ御志の程わすれ難し、我楊儀を殺して恨を雪ぎ、其後蜀の國を奪ん事掌の内にあり、御邊と共に太平を享て生死を共にせんと云ければ、馬岱が曰、われ常に孔明が用ひざるを恨む、今幸に將軍に從ふ、ねがはくは心を盡して事を計ん。魏延が曰、今勢少く糧足ずして大儀の計畧を成がたし、暫く魏に降んは如何に。馬岱が曰、將軍の言甚だ不智なり、大丈夫の士

董允すゝみ出て曰、これ眞に我意に協へり、楊儀は市井の志ありと云ども肯て謀反する者にあらず、魏延は功ありと云ども常々丞相を怨る意あり、元より魏に降らんと思ふ所に、楊儀が諸軍を惣領するを見て許て表を上りて詔を假て討んとする者なりと申ければ滿座みな一同して魏延を引人さらに無。後主宣けるは、魏延果して謀反せば誰か能これを討ん。蔣琬が曰、丞相素より此人を疑玉へり、必ず計を遺して楊儀に教玉ふべし、楊儀もし無用の人ならば焉んぞ無事に谷の内までも退くことを得ん、魏延必ず楊儀が爲に誅せらるべし。暫ありて魏延又表を上り、楊儀が謀反事すでに急なりと奏しければ、群臣これを開き見るに、楊儀早馬を飛して魏延が謀逆事いよ／＼明白なりと奏し、二人かはる／＼に表を捧て各是非を論じければ、群臣いまだ決せざる所に、忽ち費禕歸り來り、魏延が謀逆の樣を有のまゝに奏す。後主宣けるは、若かくの如なれば董允を使として節を持せ、好言を以て先魏延が魏へ降らぬ樣にすべしとて、董允を遣し玉ふ。此時魏延は棧道を燒落し、南谷に陣を取て居たりければ、姜維、楊儀は密に槎山の細路より忍で南谷の後に出、漢中の破んことを畏れ先鋒何平に三千餘騎を付て魏延を攻させ、姜維等は柩を守りて皆漢中を望んで進發す。ある人この由を魏延に告て、楊儀ひそかに何平を槎山の路より廻し、此所へ寄來ると云ければ、魏延大に怒り、兵を引て出向ふ。時に

殺さんと思へども其勇烈の勝れたるを憐で暫く助け置と宣へり、今楊儀等が謀反したりと訴るは必ず詐にて候はん、楊儀は乃ち文學の人、孔明用ひて長史とし、常に軍中の大事を司る、何ぞ背て謀反すべき、卒爾に魏延が訴を用ひば楊儀等心ならず魏に降ること有ん、よく〳〵遠き慮を出すべしと宣へば、文武の百官この事いかゞと議する所に、忽ち長史楊儀急を告て表を上ると奏す。近臣ひらいて之を讀。その表に曰、

長史綏軍將軍臣楊儀、誠惶誠恐頓首謹表。丞相臨レ終將二大事一委二於臣一。照二依舊制一不二敢變更一、使三魏延斷二後、姜維次レ之。今魏延不レ遵二丞相遺語一、自提二本部人馬一攙越先入二漢中一、即日放レ火燒二斷棧道一、刼二丞相靈車一逆二從魏兵一、阻二其歸路一、意在二火速一、具レ表以聞。

群臣これを聞て皆默然たりければ、吳太后の曰、百官なんぞ各意見を云ざる。時に蔣琬申けるは、臣いま公道を以て論ぜんに、楊儀が生れつき性甚だ急にして物を容こと能はずと申せども、糧草を籌度し共に軍機を賛ることは丞相に從て多年なり、此故に丞相終に臨で盡く軍中の大事を任せ玉ふ、必ず其謀反せまじきを知てなり、魏延は自ら己が功に傲り、常に不平の意ありて丞相を怨む、今楊儀が下知に從はんことを恥て又私の仇を含み、棧道を燒て皈路を遮るものならん、臣ねがはくは一家の人を以て楊儀を保たん、魏延を保こと能はずと奏しければ、

の兆なり、陛下の御夢かた〴〵不吉なり。後主いよ〳〵驚き怖れ、李福が回るを待玉ふ所に、程なく回り來り、頓首して申けるは、臣五丈原に到りたる時丞相はや人心地もなく、諸人皆地に伏て哭哀候けるが、須臾ありて又目を開き、臣が前に立たるを見て、天子必ず後の事を問しめ玉ふならん、蔣琬宜からんと宣へり、臣又その次を問ければ、費禕を用よと宣へり、臣重ねて問しに丞相答ず、目を塞で薨じ玉へり、臣夜を日に繼で馳來れりと涙を流して奏しければ、後主大に哭き、天われを喪せりとて龍床の上に倒れ玉ふ。侍臣後宮に扶入ければ、吳太后これを聞て聲を放て哭玉ひ、内外の群臣こと〴〵く涙を流し、諸の軍民哀慟せずと云もの無。後主は連日涙を流して飲食共に廢れ玉ひけるが、忽ち征西大將軍魏延表を上て楊儀等丞相の柩を奪ひ、盡く謀反すと奏しければ、こは如何にと驚て床の上に倒れ玉ひ、吳太后も膽を冷して起玉ふこと能はず。近臣魏延が表を讀に、其文に曰、

楊儀自總二兵權一、率レ衆造レ反、刧二丞相靈柩一、欲下引二敵人一入上レ境。臣先燒二斷棧道一、以レ兵守禦、然後討レ之。

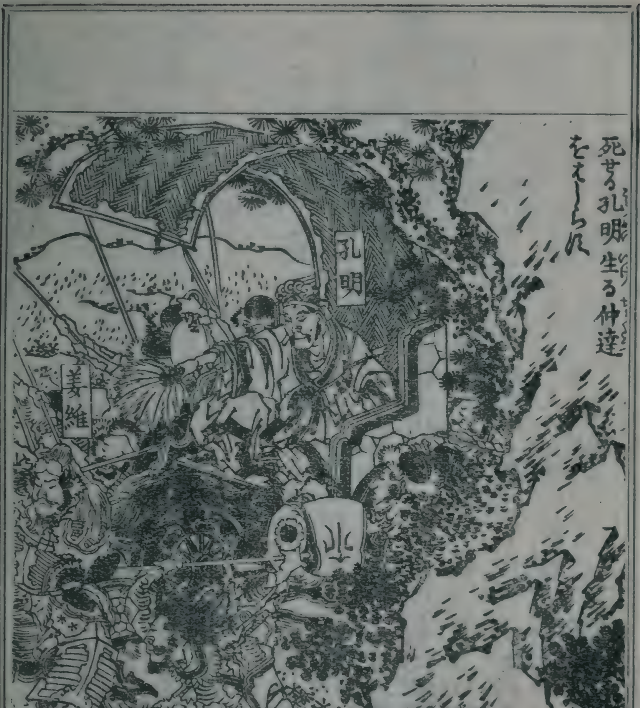
後主これを聞て魏延は武勇の大將なれば楊儀を容易く防べきに、何とて棧道を燒たるぞと宣へば、吳太后の曰、先帝つねに、魏延が頭の後に謀反の骨あることを孔明よく知れり、此ゆゑに

○孔明遺レ計斬ニ魏延一

去ほどに姜維は長蛇の陣を張て徐々と退きけるが、魏の勢みな赤岸坡より引回しぬと告ければ、楊儀衣を更て喪を發し、哭き哀聲地を震ひ、士卒みな物をも食せずして死する者多かりける。先陣すでに棧道を超んとする所に、向に火を付て喊の聲響ければ、諸人色を失ひ、料ざりき此處に敵の伏勢あらんとは、如何して通るべきとて楊儀に此由を告ければ、乃ち人を出して見せしむるに、棧を燒ものは魏延なり。楊儀大に驚て曰、丞相つねに魏延必ず謀反すべしと宣ひしが、今果して此の如し、棧道を燒て通るべき樣なし、如何して漢中へ入ん。費禕が曰、推量するに魏延必ず天子に奏して我等が謀反したると申べし、我等も早く表を上て此由を奏すべし。姜維が曰、この傍に槎山と云る細路あり、甚だ險阻なりと云ども密に廻て棧道の後に出べし、唱や此路より漢中へ入んとて、先二人の士卒に表を持せて成都へ遣し、費禕自ら跡に從て進發す。この時成都には後主劉禪孔明が病の危を聞玉ひて動止安からず、寢食廢れて居玉ひけるが、或夜成都の錦屏山崩たりと夢を見て、旦を待て群臣に問玉へば、太史譙周奏して曰、臣昨夜天文を視るに、一つの星その色赤して光芒角あり、東北より西南の方へ落たり、是丞相大凶

取て小路より渭水の陣へ回りける。諸の大將四方に散て尋聞ければ、近邊の百姓來て申けるは、蜀の兵引て谷の內へ入時、哭き哀聲地を動し、軍中に白旗喪旛を建たり、孔明すでに死して只姜維が一軍千餘騎にて後陣に備たり。司馬懿が曰、鼓の聲夥しく聞えしは何なる故ぞ。百姓告て曰、追手の近付たるを見て蜀の勢こと〴〵く旗を返し、一度に鼓を鳴して却て皆退きたり、車の上なる孔明は木像にて候ひし。司馬懿大に嘆て曰、吾能料二其生一、不レ能レ料二其死一とて、急に兵を興して又追しむ。是より世の諺にも死諸葛能走二生仲達一とは申なり。是に依て司馬懿急に馬を飛し、適に伏勢のありし林の內を見れば虛く孔明が旗ばかり立たり。心を安じ、赤岸坡まで來りけるが、蜀の勢遠く隔りしかば諸大將に向て申けるは、蜀の勢すでに遠く去れり、之を追ても益なし、不レ如二兵を收て回る一べし。諸將問て曰、もし蜀の勢重て來らば如何ん。司馬懿が曰、孔明すでに死せり、再び人の及ぶ者なし、我等みな枕を高して安臥せんとて、遂に兵を收て回りけるが、路すがら孔明が陣を取たる跡を見るに、前後左右こと〴〵く整々として法ありければ、眞に天下の奇才なりと稱嘆し、長安に回りて諸將に各處の要害を守らせ、其身は洛陽へ上りけり。

漢丞相
司馬懿
夏侯威
夏侯霸


死せる孔明生る仲達をはしらす
孔明
姜維

て山際に一聲の鐵砲ひゞきて、鼓の聲天を動し喊の聲地に震ふ。司馬懿驚て色を失ひ、馬を駐めて之を見れば、蜀の大軍こと〳〵く取て囘して木陰の内より大漢丞相諸葛武侯と書たる旗を指あげ、中軍に例の四輪車を推出して數十人の大將これを守り、車の上に孔明綸巾を戴き鶴氅を披て手に羽扇を持て端坐し、前に一人の大將馬を躍せ槍を撚り大音あげて、反賊司馬懿早早に首を渡せと呼はる。是乃ち姜維なりければ、司馬懿膽を冷し、孔明いまだ死せざるに、我かる〳〵しく深入してその計に中れりと云て馬を打て走りければ、魏の勢大に亂れて魂も體に著ず、甲盔を卸すて弓矢をかなぐり捨て互に命を助らんと、推ころされ蹂躪られ自ら死する者數を知ず。司馬懿は馬を飛して五十里あまり走りけるが、日比迅と思ふ名馬なれども只一處に躍る樣に覺え、累に鞭を加へける所に、跡より二人の大將追付んとして來れるを、敵の追ぞと心得て澗を超山を下りに逃ければ、一人の大將すでに追付、司馬懿が馬を曳とめて都督怕れ玉ふなと云ければ、司馬懿手を以て頸を撫て申けるは、われに頭ありや。二人の大將申けるは、さのみ怕れ玉ひそ、蜀の勢は程も遠く隔りたり。司馬懿息をも繼あへず半時ばかりして顏色しづまり、目を認て見れば二人の大將は夏侯霸、夏侯威なり。蜀の勢こと〳〵く引退て只わづかに殘りし後陣の勢なり、再び追んと云けれども司馬懿怖て心決せず、終に徐々と轡を

かりしかば、馬岱を召でこの事を議す。馬岱が曰、さきに費禕が出るを見れば門外より馬を飛し、鞭を加て馳去れり、彼が云しこと必ず詐にて候はん。魏延が曰、汝行て本陣の體を見來れとて、十騎あまりを付て窺しむるに、馬岱いそぎ馳回り、後陣は乃ち姜維が勢と見えて候が、大軍こと〴〵く打立て、大半退いて谷の内へ入て候と告ければ、魏延大に怒り、憎き腐れ儒者、いかでか我を欺たる、必ず奴を殺さんとて急に陣屋を收め、山際の路條より南を指て打立けり。此時夏侯霸は五丈原に來りて能々窺ひ、引回して司馬懿に申けるは、蜀の軍勢こと〴〵く引退て姜維が一軍ばかり後陣を守、魏延が陣にも人ひとりも無、盡く山際より退き去れり、其外諸處の陣中人馬みな退て候。司馬懿足をそばだてゝ曰、さればこそ孔明すでに死せり、速に追蒐べし。諸將問て曰、いつも甚だ疑ひ怕れ玉ふが、今なにとて其死せるを知玉ふぞ。司馬懿が曰、五臓みな損ず、孔明なんぞ生ん、我自ら追んとて二人の子を引具し、大軍を卒して出ければ、夏侯霸申けるは、必ず輕々しく進み玉ふな、別に大將に命じて追しめ玉へ。司馬懿が曰、他人は兵法を知ず、汝多言すること勿れとて直ちに五丈原に推寄、大軍鼓躁して攻入けるに、陣中には人ひとりもなし。司馬懿乃ち二人の子に向て、汝は大軍を引て後陣に續け、我自ら前手に進んとて一陣に馬を飛し、揉にもんで追かけ、已に蜀の勢に近付ける所に、忽然とし

玉ふぞ。魏延怒て申けるは、孔明もし我計を用ひ玉はば長安は疾取ん、向には楊儀われを葫蘆谷の内にて焼んとす、幸に天の祐を得て大雨ふりたればこそ我命を免れたれ、我いまだ此恨を雪ず、況や我官は前軍征西大將軍南鄭侯なり、楊儀が如き長史の爲に焉んぞ跡に下りて敵を防ん。費褘が曰、將軍の言わが意に協へり、楊儀は纔なる長史の官なれば爭か丞相の大事を攝ん、我たとひ命を捨るとも彼が下に出て辱を受べからず。魏延が曰、足下われを助玉へ、我大軍を統て敵を破らん。費褘が曰、ねがはくは將軍の命に從はん。魏延が曰、さあらば同盟の狀を寫して必ず約を背玉ふな。費褘欣然として書付しかば、魏延大に喜び酒宴を設て持成ける。費褘が曰、すでに此の如しと云ども輕々しく動て敵に笑れ玉ふな、我もし楊儀に對して利害を說ば、彼必ず兵權を將軍に授け、自ら柩を守て國に回るべし。魏延げにもと同じければ、費褘馬に騎て本陣に回り、右の趣を語ければ、楊儀が曰、少も驚くべからず、丞相終に臨で某に宣ひけるは、魏延が勇猛敵人みな怕る、此ゆゑに殺に忍ず、後必ず謀反せんと宣へり、我すでに彼が從ふまじきを知る、この故に兵符を以て其心を探るに、果して丞相の言に違ず、早く姜維を後陣とし、丞相の制法に依て徐々と退くべしとて自ら兵を收て柩を守り、姜維と共に內外の事を攝て盡く打立けり。魏延は費褘が來るを待けるが、待期すぎて程も餘に久

魏延ち變化升騰の象なり、將軍今より到るところ敵する者なく、戰はずして功を得玉ふべし。魏延限なく喜て申けるは、もし足下の圓に違こと無んば、必ず重く禮を致すべし。暫く有て趙直別て回りけるに、半途にて尙書費禕に出合。費禕問て申けるは、御邊いづくへか行玉ひし。趙直が曰、われ今魏延が陣へ行たるに、魏延頭に角を生ずと夢を見て我に吉凶を決せしむ、我その怪んことを怕れ、詐て麒麟蒼龍の事を云て彼が心を安からしむ。費禕が曰、この夢の吉凶その實はいかん。趙直が曰、角と云字は刀を用ふと書字なり、今頭の上に刀を用ひば其凶なること甚し。費禕打うなづき、この事必ず外に沙汰し玉ふなとて直ちに魏延が陣に到り、あたりの人を退けて申けるは、昨夜三更丞相すでに世を辭し玉へり、終に臨で再三將軍に傳へ示し、後陣に備て司馬懿を防しめ、緩々として引退き、喪を發すること勿れと宣へり、兵符こゝにあり、將軍早く打立玉へ。魏延が曰、丞相に代て軍中の大事を攝は誰人にて候ぞ。費禕が曰、丞相一切の事みな楊儀に任せ、兵法の密法口傳こと〴〵く姜維に授玉へり、此兵符は乃ち楊儀が令なり。魏延が曰、孔明すでに亡と云ども猶この魏延あり、楊儀は只柩を守て國に回り、地を擇で葬を致べし、我自ら兵を統て魏を伐ん、焉ぞ孔明一人の故を以て國家の大事を廢せんや。費禕が曰、丞相終に臨で先本國に引退けと云玉へり、將軍なにとて自ら戰はんと云

通俗三國志　巻之四十四

○死孔明走生仲達

この夜司馬懿天文を見るに、一つの大なる星その色赤して光芒角あり、東北より西南の方に流れ、蜀の陣へ墜て三たび投じて再び起り、投ずるは大にして起は小に、隱々として聲ありければ、驚て申けるは、孔明いま死せり、追掛て討んとて自ら大軍を引て已に陣門の外まで出けるが、二人の子を顧て申けるは、孔明は八門遁甲の法を得て六丁六甲の神を使ふ、久く我等が出ざるを見て詐て死したる體を天文にあらはし、我追かくる時計を以て伐の術ならん、我もし輕々しく出ば必ず計に中るべし、不如たゞ能守らんとて又こと〴〵く引回し、夏侯覇に十騎あまりを付て五丈原の樣を窺はしむ。蜀の陣には魏延先手に屯して居たりけるが、或夜の夢に頭の上に角を二つ生ずと見て、覺て後大に怪む。時に行軍司馬趙直來りければ、迎へ入て問て申けるは、我昨夜頭に角を二つ生ずと夢を見たり、足下元より易の卜を知玉ふ、願くは吉凶を決し玉へ。趙直答て曰、これ大吉の兆なり、麒麟頭に角あり、蒼龍も亦角あり、乃

輔たらんことを思ひ、己が官職の低を恨で怏々として謗やまざりしかば、孔明怒りて官職を剝去、汶山と云ところに徙し置しが、孔明が死したる由を傳聞て大に哀み、吾終爲左衽と云り。梓潼郡に流されたりし李嚴も、孔明が生て在ん程は、再び召囘るゝことも有べしと、せめては心の内に頼けるが、孔明が死したる由を聞て日夜涙を流し、了に病に臥て亡けるとかや。其夜は天愁ひ地慘で月の色も光なく、孔明奄然として天に皈れり。姜維、楊儀肯て人に知せず、萬づ舊制を守て絲毫も動ず、法に依て殯を成、車にのせて龕を以て蓋ひ、身ぢかき兵三百人を擇で守らしめ、令を傳て魏延を後陣とし、姜維、楊儀その次に備て、各處の陣寨こと〴〵く次第を守り、一營々々徐々と退き囘る。

敵ちか付とも人馬を亂さず我木像を推出して、大小の將士こと〴〵く左右に排列せば、司馬懿必ず逃去べし、魏の勢遠く去て後心靜に喪を發せよ、喪車の上に一つの龕を作り、其上に我を坐せしめ、米七粒水少を以て口の内に放ち入、足の下に一盞の燈明を燃し、柩を氈車の内に安置せば、軍中靜なること常の如ならん、必ず哀み哭こと勿れ、然る時は將星墜ず、我魂來て守るべし、先しづ〳〵と後陣より引退き、次第を守りて一營〳〵回るべし、汝等文武の諸將みな能心を盡して國に報じ、職に負こと勿れと云ければ、楊儀が曰、丞相御心を安んじ玉へ、某等みな遺言を背候はじ。其夜孔明人に扶られ出て北斗を仰ぎ、遙に指敎て是わが將星なりと云ければ、諸人望み見るに其色煌々として墜んとす。孔明劍を以て之を指、口に呪を念じて急に內へ回りけるが、早人心地も無りけり。時に成都より李福又馬を飛して來りしが、孔明が昏絶したるを見て大に哭き、我國家の大事を誤れりと云ければ、須臾ありて孔明又目を開き、李福が前に立たるを見て申けるは、李福重て來り玉ふは天子勅して誰をか丞相の職に任ぜんと問しめ玉ふなるべし、必ず蔣琬宜からん。李福が曰、蔣琬が後は誰をか用ん。孔明が曰、費禕を用よ。李福又その次を問ければ、孔明答ず。諸人ちか付て見れば已に息絶て薨じたり。時に建興十二年秋八月二十三日、壽五十四歲也。初め蜀の長水校尉廖立と云もの自ら才名を恃で孔明が

疑、吳懿等は盡く忠義の士なり、久しく戰場を經て勤勞多し、皆用るに堪たる者共なり、我死して後は凡そ事みな舊制に順ひ、緩々として兵を退けよ、汝はよく兵法に通ず、多く囑するに及ばず、姜維は智勇共に備れり、後陣に備て敵を防しめよ、魏延後日に謀反する時、汝唯さきに授し錦の嚢を開き見よ、愼で怠ること勿れと云ければ、楊儀淚を流して再拜す。孔明文房の四寶を取よせ、病を扶て自ら遺表を書、死して後天子に獻らしむ。其表に曰、

丞相武鄕侯諸葛亮伏聞、生死有常、難逃定數、死之將至、願盡愚忠。臣賦性愚拙、時遭艱難、分符擁節、專掌鈞衡、興師北伐、未獲成功、何期病在膏肓、命垂旦夕。伏願、陛下淸心寡慾、約己愛民、達孝道于先君、布仁恩于寰宇、提拔幽隱以進賢良、屛斥奸讒以厚風俗。臣家成都、有桑八百株薄田十五頃、子孫衣食自有餘饒、至于臣在外任、無別調度、隨身衣食悉仰于官、不別治生以長尺寸、若臣死之日、不使內有餘帛外有贏財以負陛下也。臣亮不勝涕泣懇切之至。

孔明表を寫し畢り楊儀を召て申けるは、我死して後必ず喪を發すること勿れ、若外に知れなば司馬懿必ず追來らん、我木を以て自ら像を造り置り、之を車にのせて青き紗を以て上を蓋ひ、人をして見せしむべからず、汝一順一逆長蛇の陣を布て、司馬懿追來らば旗を回し鼓を回し、

を造る、矢の長さ八寸にして一弩に十筋の矢を放つ、皆畫圖に寫し置り、汝よく法の如くに造れとて授けしかば、姜維謹で之を受。孔明又曰、蜀の國は諸處の道條ことぐ〳〵く憂る所なし、惟陰平の道は險阻なりと云ども頼がたし、久して必ず害あらん、汝よく仔細にせよとて、長史楊儀を召で申けるは、汝に錦の嚢を授く、久して魏延必ず謀反すべし、那時に至りて開き見よ、自ら魏延を誅するの計あらんとて、此日一々調度し畢、忽ちに昏絶しけるが、晩に及で甦り、晝夜昏絶すること數度に及べり。此由早馬を飛して成都に奏しければ、後主劉禪大に驚き、尚書僕射李福に命じて病の樣を問しめらる。李福晝夜の分もなく馬を飛して五丈原に來りければ、孔明近く召て申けるは、我不幸にして中道に亡び、虚く國家の大事を廢して罪を天下に得たり、吾死して後遺表を天子に獻り、諸の公卿大夫みな舊き政に順て改め易ること勿れ、我用ひたる人々も妄に必ず廢ること有べからず、馬岱は忠義諸人に越たり、後必ず重く用ひよ、我兵法の祕密ことぐ〳〵く姜維に傳たり、他日よく國を守らんとて、再三丁寧に告ければ、李福別れて又成都へ回りけり。孔明は左右の人々に扶られ車に乗て陣中を巡見しけるが、秋風面を吹て骨に徹りて冷かりければ、涙を流して曰、再不能臨陣討賊、悠々蒼天曷此其極とて嘆息良久して内に入、病いよ〳〵重りければ楊儀を召で申けるは、王平、廖化、張翼、張

して殊に明なりしかば、心の内甚だ喜び、彌切に祈けり。姜維は帳外に守護して内の樣を窺見るに、孔明髮をさばき劍を取、蹈罡布斗て將星を壓鎭め、祈を成て居たりければ、心喜で守る所に、忽然として陣外に喊の聲夥しく聞ゆ。姜維急に人を出して問しめんとする時、魏延あわたゞしく入り來り、魏の勢が推よせて候と云て其邊を馳まはりけるが、誤て主燈を蹈滅してけり。孔明劍を投すて嘆じて曰、死生有命富貴在天、主燈すでに滅たり、われ生こと能はず。姜維これを見て大に怒り、劍を拔て魏延を斬んとしけるを、孔明急に留て曰、これ我天命の絕たる也、なんぞ魏延が過ならんとて血を吐て床の上に倒れし、魏延に向て申けるは、此寄手は仲達すでに我病を推して虛實を搜ん爲の計なり、汝速に蒐やぶれ。魏延馬に打のり兵を引て出ければ、夏侯覇大に怕れ、慌騒で逃けるを、魏延二十里あまり追て回りけり。孔明は血を吐て止ず。姜維を召で申けるは、我本忠を盡し力を盡して中原を恢復し、再び漢の天下を興さんと欲するの所に、如何せん旦夕に死せんとす、我平生學ところ已に書に著して共に二十四篇計十萬四千一百一十二字、內に八務、七戒、六恐、五懼の法あり、遍く御方の大將を見るに、汝ならでは授べき者なし、切に洩こと勿れと云ければ、姜維流るゝ淚を推へ、再拜して之を受。孔明が曰、われ連弩の法あり、いまだ之を用ひず、汝必ず後に用ひよ、鐵を以て折疊ね、燒打て此

孔明

五丈原に孔明北斗をまつる

とす、謹で靜夜を以て昭に皇天后土北極元辰に告す、伏して望らくは天慈監察を垂玉へとて、乃ち靑詞を誦して曰、

伏以周公代姫氏之厄、翌日乃瘳、孔子値匡人之圍、自樂不死。臣亮受託之重、報國之誠、開剏蜀邦、欲平魏國。率大兵于渭水、會衆將于祁山、何期舊疾纏身陽壽欲盡。謹書尺素、上告穹蒼、伏望天慈曲垂臣算、上報先帝之恩德、下救生民之倒懸。非敢妄祈、實由懇切、下情不勝屏營之至。

孔明祝し了て旦を待、次の日病を扶て事を理めけるが血を吐て止ず、死して又甦る。晝は共に魏を伐の計を論じ、夜は步罡踏斗禳をなす。

○孔明秋風五丈原

司馬懿ある夜天文を視て大に驚き、急ぎ夏侯霸を召て申けるは、我將星の位を失へるを見る、孔明必ず重き病發り、久しからずして便ち死せん、汝千餘騎を引て五丈原に推寄て窺ひ見よ、蜀の勢もし奮然として討て出ば、孔明が病輕き也、もし驚き騷で出ざる時は、孔明すでに危きなりと云ければ、夏侯霸兵を引て出向ふ。孔明は祭を爲てすでに六日に及びけるが、主燈滅ず

人に扶られ外に出て天文を仰ぎ、大に驚て内に入、姜維を呼で申けるは、我命すでに旦夕にあり。姜維泣て曰、丞相いかなれば浩ることを宣ふぞ。孔明が曰、われ三台の星の中を見るに、客星ます〳〵明にして主星の光幽に隱れ、少し其色を變じたり、此を以て我命を知。姜維が曰、古より祈を爲て禳ことあり、丞相幸に此術を知玉へり、今なんぞ禳を爲て天に祈玉はざる。孔明が曰、われ此術を習ふこと久し、汝鎧たる兵七々四十九人を擇で皆皁き旗を取、身には皁き衣を被て帳外に守護せしめよ、我自ら帳中にて北斗を祭べし、若七日が間主燈滅ざる時は我壽命又十二年を添ん、若主燈滅る時は我必ず逃れ難し、汝必ず無用の人を入ること勿れと云ければ、姜維命を受て他の人を堅く制し、萬づ用ふる所の器物は童子二人に運しめけり。此夜は涼風蕭索として銀河天に横たはり、零る露冷にして旌旗動ず、刁斗の聲も無していとゞ物さびしかりけるが、姜維四十九人の兵と帳外を守護しければ、孔明自ら帳中に入て香を焚花を捧げ、大なる七盞の燈明を燃して廻に四十九の小燈を連ね、中央に本命の主燈一盞を置て自ら拜伏して祭をなし、天に祈て申けるは、亮亂世に生れて身を農迹に隱ところに、先帝三顧の恩を受孤を托するの重を被る、此に因て犬馬の勞を盡して貔貅の大軍を領し、六回まで祁山に出て誓て逆賊を誅せんとする所に、意ざりき將星墜んとして今生の命まさに終ん

して固く守て一人も出て戰ふ事無らしめ玉ふ、此故に司馬懿も背て出ずとて、人の嘲をぞ避たりける。蜀の典軍書記樊建、丞相令董厥二人この由を傳へ聞、いそぎ孔明に告ければ、孔明笑て曰、これ司馬懿が諸軍を安じて動かしめざるの計なり。姜維が曰、丞相なにとて知玉へる。孔明が曰、仲達元より出て戰ふの心なし、表を上て遙々と戰はん事を求むるは、武勇ある程を人に知しめん爲なり、豈聞ずや、大將外に在ては君の命も受ざる所あり、安んぞ千里の遠に出て君に戰を請こと有ん、是仲達が我に辱められたるを見て手下の諸將怒て戰はんと勇む、之を制せん爲に斯は沙汰するなるべし。諸將みな再拜して曰、丞相まことに萬里の明見あり。時に成都より尙書費禕きたり孔明に見て申けるは、吳の孫權三十萬の勢を興して三方より攻のぼるに、魏主曹叡自ら合淝城に出て滿寵、田豫、劉劭に兵を分て防せ、滿寵まづ計を用ひて吳の大勢を巢湖にて夜討にす、吳の勢多く討れ兵粮武具を燒て盡く氣を失ひ、病臥もの大半に及べり、陸遜又孫權に表を上て敵の後を襲しめんとするに、其使半途にて魏の伏勢に生捕れ、機謀こと〴〵く洩て吳の勢大に打まけ引退きたりと告ければ、孔明これを聞て長嘆する事一聲、昏絕して地の上に倒れけるを、諸將扶け起しければ、半時ばかりして人心地つき、大息ついて申けるは、我心昏亂して舊病又興れり、今生の壽必ず久しかるまじとて其夜

これを聞て言には出さずと云へども心なほ怒りければ、司馬懿が曰く、われ本より出て戰はん事を思ふ、今都へ表を上、天子に奏して後諸大將と快く出て戰ふべしとて、軈使をぞ上せける。

魏主曹叡この時猶合淝の城に在けるが、司馬懿が表を得て開き見るに、表に曰、

臣司馬懿謹表、臣才薄任重、深蒙眷委、令臣堅守不戰、以待其敝。今者蜀臣諸葛亮輕臣如奴隸、待臣如婦人、遺以巾幗、恥辱至甚。臣先達聖聰、旦夕將效死一戰、以報先帝之大恩、陛下之重祿。臣不勝感激之至矣。

曹叡見了て群臣に向て申けるは、朕すでに司馬懿に命じて堅く守て出ること勿れと云へり、今なにゆゑに遠く表を以て戰はんことを望めるや。衞尉辛毗が曰、仲達元より出て戰ふことを欲せず、是必ず孔明が辱むるを見て諸大將みな戰はんと怒り、之を制すべき樣なくして虛く表を上て天子より制し玉はんことを願の計にて候はん。曹叡げにもと同じ、乃ち辛毗を勅使とし節を持て司馬懿が陣に到らしむ。司馬懿迎て禮了り、諸大將を集めて共に詔を聞に、辛毗申けるは、天子勅命あり、彌出て戰ふ事勿れ、再び戰はんと云ものは是勅命に背なり、必ず罪を正さんと云ければ、諸將みな默然として退散す。司馬懿乃ち辛毗に向て曰、足下よく我心を知玉へり、浩る上は再び出んと云もの有まじとて其邊の士民に此事を云傳させ、魏の天子辛毗を使と

行、私業外に求ずして皆一家の内に備れり、家の主は從容として心を安んじ枕を高して飲食ふ、若この勞を主一人ことごとく務ば、形疲氣困じて了に一つも成こと無ん、是智の奴婢雞犬に及ばざるにあらず、家主の法に背ば也、この故に古人も坐而論レ道謂二之三公一、作而行レ之謂二之士大夫一と云り、昔し丙吉道に横たはれる死人を問ず、却て牛の喘を憂とす、陳平は錢と米との數を知ずして是自ら主どる者ありと云り、今丞相いかなれば細なる事までも自ら務て終日汗を流して勞し玉へる、況やこの炎天の暑氣に値て了には爭か神氣の倦疲玉はぬ事候べき、司馬懿が云し言は眞に肺腑を見すかしたる語にて候と諫ければ、孔明涙を流して、われ此を知ざるにあらず、但先帝の重恩を被り孤を託するの重を受て、常に他人は我心の如く力を盡ざることを思ふ、故に斯自ら務る也と云ければ、聞人みな涙をぞ流しける。案の如く日を經て孔明氣疲病發て心身安からざりければ、諸將堅く守りて互に軍は無りけり。此時魏の陣には諸の大將、孔明巾幗縞衣を贈て辱めけるに、司馬懿これを受て彌戰はずと聞つたへ、怒を含で盡く本陣に集まり、我等は皆大國の名將なり、焉ぞ蜀の人に恥められん、願くは出て勝負を決せんと云ければ、司馬懿笑て曰、われ戰はずして辱めを得ることを好にあらず、如何せん天子詔して堅く守て戰ふ事勿れと宣へり、今もし出て戰はば是勅命に背なり。諸將

漢丞相武鄕侯諸葛亮嘗聞、管子有云、禮義廉恥國之四維、四維不張國乃滅亡。切惟、司馬仲達既爲大將、統領中國之衆、不思披堅執鋭以決雌雄、乃甘窟守土巢以避刀箭、與寡婦又何異哉。今遣人送巾幗素衣、如不出戰、可再拜而受之。倘有男子之胷襟、早與批回、依期赴敵。

司馬懿見了て心中には怒れども佯て打笑ひ、我を婦人の如くに侮るかと云て即ち贈ものを留めおき、其使を重く持なし、孔明が寝食つね〳〵軍中の務を問に、使答て曰、丞相夙に興夜に寐、罰二十以上は皆親ら是を覽る、つねに啖ところの食は數升に過ず候と語りければ、司馬懿傍の人々に向て申けるは、孔明食少して事煩し、豈よく久しかるべけんやとて乃ち使をぞ回しける。使五丈原に回りて、司馬懿贈物を受書簡を見て、只寝食軍務の事を問しゆゑ、某此の如に答たり、司馬懿これを聞て孔明食少して事煩し、豈よく久しかるべけんやと申候ひしと語りければ、孔明大に嘆じて曰、仲達よく我を知れり。時に主簿楊顒と云もの進み出て申けるは、某つねに丞相の簿書を撿玉ふを見る、凡そ事を治むるに定れる體あり、上下相侵べからず、某ねがはくは家を治るの譬を述ん、夫人の家を治むる道は必ず奴婢の使ひ者あり、奴は出て田を耕し、婢は内に在て飯を炊ぐ、雞は晨を告、犬は盗をかむ、牛は重を負、馬は遠を

魏延是より楊儀を恨み、延に見て罪を謝し、元來某が所爲にあらず楊儀が計なりと告ければ、孔明に告て馬岱を己が手下に用ん事を望む。孔明再三許容せざりしが、魏延强て求めければ乃ち許しけり。司馬懿は敗軍を集て渭水の北に引こもり、諸軍に法を出して申けるは、我諸人の勸に因て出て戰ふ毎に破れずと云ことなし、今より後再び出んと云ものあらば必ず首を刎んとて、彌〻固く守て出ざりけり。或時郭淮來り、孔明大に戰ひ勝て渭南の砦を奪ひぬれば必ず處を擇で陣を移べし、この比孔明が自ら出て巡見するはこの爲なるべしと云ければ、司馬懿が曰、孔明もし武功に出て山に依、東の方に陣を取ば我等が爲に大なる害なり、是まことに憂べし、若渭水の南に出て五丈原に陣を取ば御方まさに患なしとて、人を出して窺はしむれば、果して孔明五丈原に陣を移たりと申す。司馬懿手を以て額を撫て申けるは、これ大魏皇帝の福なり、孔明必ず久して變あらん、一人も出ること勿れとて彌〻緊く守りける。孔明は陣を移して五丈原に出張し、毎日戰を催せども魏の勢一人も出ざりければ、司馬懿を辱めん爲にわかき女の髮を飾る巾幗と云ものと縞き衣とを盒に入、書簡を添て魏の陣へ遣しけり。魏の諸大將なに事かと怪み、使を住て司馬懿と共に盒を開けば、巾幗縞衣を入て一つの書簡を添たり。乃ち披き見るに、其書に曰、

回りけり。

○孔明秋夜祭二北斗一

孔明兵を收て渭南の陣に回りければ、魏延來り見えて曰、馬岱葫蘆谷の路を截塞ぎ、司馬懿と共に某を燒殺さんとす、若大雨ふるにあらずんば某五百の勢と盡く谷の内にて亡べし、此いかなる所爲にて候ぞ。孔明いつはりて驚き怒り、馬岱を召て責て曰、魏延は我第一の大將なり、汝に司馬懿をこそ燒せたるに、何とて魏延を殺さんとは工たるぞ、幸に朝廷の洪福にて俄に大雨ふりたればこそ魏延は生て回りたれ、萬一失ある時は又わが右の臂を墜が如しとて、引出して斬しめんとすれば、諸の大將再拜して一命を乞。孔明怒り猶やまず、死罪を暫く免して馬岱が衣裳を剝とり、四十杖鞭て平北將軍陳倉侯の官を削り、士卒の列にぞ貶しける。馬岱痛く責られ退て我陣に回りければ、孔明ひそかに樊建を使として諭して申けるは、我本より汝が忠義を知てこの計を成しむる所に、思はざりき大雨ふりて司馬懿をも取にがし魏延をも殺し得ず、今日已事を得ずして汝を鞭つ、先咎を楊儀が所爲なりと云て魏延が憤を避よ、他日功を以て第一とし、恩賞諸人の上に出べしとて能々計を授しかば、馬岱密に喜び、次の日魏

盡ざるにや、俄に狂風吹起り、眞暗に霧掩て霹靂一聲響はどこそあれ、驟雨ふり來て其急なること盆を傾るが如く、大雨滂沱として申の刻より亥の刻に至り、平地水深きこと三尺ばかりなりければ、谷中に燒あがりたる火盡く滅て地雷響ず火器功なし。司馬懿大に喜び、この時に出ずんば何をか期せんとて力を盡して路を開き、谷の口まで出ければ、蜀の大將馬岱兵を引て追きたる。時に一彪の軍馬馳來り、司馬懿を救て戰ひければ、馬岱小勢にて引回す。司馬懿を救ものは張虎、樂綝なり。敗軍を收めて渭水の陣に回りければ、南の陣屋は已に蜀の勢に攻とられ、郭淮、孫禮浮橋の上に支て喚き叫で攻戰ふ。司馬懿兵を引て回りければ、蜀の勢も引退き渭水の南に陣をとる。司馬懿は砦の陣を敵に取れ、猶河を渡して攻來んことを畏れ、浮橋を燒落して岸より北に扣へたり。祁山に向うたる魏の大勢なほ此時まで戰ひけるが、渭南の砦を敵に取れ司馬懿も大に打負たりと聞て以の外に慞さわぎ、敵に後を圍れじとて散々に逃走る。蜀の大勢これに氣を得て追立々々攻ければ、引立たる魏の勢討るゝをも顧ず手負をも扶ず、只われ先にと敗走して這々渭水の北へ退きける。孔明は山の頂に在て魏延が司馬懿を谷の内に引入、馬岱が火を放を見て大に喜ぶ所に、俄に大雨ふり來て滿谷の火こと〴〵く滅、司馬懿も逃出たりと告たりしかば、天を仰で長く嘆き、謀レ事在レ人、成レ事在レ天と云て、了に渭南の陣へ

を左右に備、飛が如に追かくる。魏延散々に打負て甲盔を脱弃、遙に望に七星の旗谷の口に飜りければ、五百の勢を引て盡く谷の内へ逃入けり。司馬懿つゞいて追蒐けるが、谷の口に馬を駐め人を入て内の様を見せしむるに、谷の内には敵の勢も無候が、只山の上に多くの假屋を立連ねたりと告ければ、司馬懿が曰、是敵の兵粮を貯たる所なり、速に火を掛よとて人馬勢ひに乘て盡く谷の中へ入けるが、忽ち假屋の上に柴を積だるを見付、前に魏延が刀を横たへて立たるを見て、司馬懿大に驚き、二人の子に向て申けるは、萬一敵の勢後なる谷の口を塞ば如何して出べきぞとて急に退かんとする所に、忽然として喊の聲響て山の上より夥しく火炬を投おろし、谷の口を燒塞ぎしかば、司馬懿膽魂を失ひ、兵を一處に集むる所に、四方の山より火矢を射ること雨の如く、鐵砲地上に迸り、立連ねたる假屋の中より乾き切たる柴薪に火もえ付て火炎天を焦し、地の底より硫黃焔硝燒出て黑烟谷の内に遍滿せり。魏延は思ふ圖に敵を谷の内へ帶き入、兼ての計なれば後の細路より出んとするに、早大木大石を以て截塞ぎたれば天を仰で長嘆し、我いま非命の死を受と云て茫然として立居たり。去ほどに火焔谷中に滿て藥線ことごとく迸り、逃るべき路なく諸卒死する者大半に及びければ、司馬懿馬より下て二人の子を抱きかゝへ、聲を放て哀み哭き、我いま父子共にこの處にて死すべきかと叫所に、運命いまだ

根本なり、我いま直ちに其根本を攻ば、四方に分れて陣を取たる敵こと〴〵く來て之を防べし、我その隙に自ら一軍を引て葫蘆谷に入、彼が貯たる兵粮を燒ん、然る時は前後相救こと能ずして必ず大に亂るべし。二人の子服して曰、父の計きはめて妙なり。司馬懿又張虎、樂綝を呼、汝二人は共に五千餘騎を引て救の爲に我跡に續き、硫黃焰硝の類を携へて火を付る用意をせよと云ければ、二人兵を調て後陣にぞ續たる。孔明は自ら山の上より望み見るに、魏の勢五千三千一群々々隊伍を亂さず前後相盻て渭水の陣を出ければ、扨は祁山へ向ふなるべしとて急に諸大將に觸を成、もし司馬懿自ら寄來らば却て勢を分て渭水の南なる魏の陣を奪ひ取とて、備を立て相待しむ。去ほどに魏の大勢こと〴〵く祁山の陣に推よせ、喊の聲を揚る程こそあれ、喚き叫で攻ければ、蜀の兵四方より來り集まり、力を併せて防ぎ戰ふ。司馬懿は蜀の勢の一處に集まりたるを見て心の內大に喜び、二人の子を伴ひ、中軍の精兵わざと小勢をすぐりて葫蘆谷に馳向ふ。魏延は兼てこの路に居たりしが、魏の勢の來るを見て五百餘騎にて路を遮る。司馬懿眞先に進んで大音あげ、賊將逃ること勿れと呼はりければ、魏延刀を舞して二三合戰ひ、馬を打てにげ走る。司馬懿のがさじと追掛しかば、魏延は七星の旗を望で且戰ひ且走る。司馬懿は勝に乘て外に敵の勢なく、魏延又小勢なるを見て天の助と喜び、兵を三手に分て二人の子

御方久しく出ざるを見て蜀の勢四方に散て田を造り、皆怠り荒で用心すること無候。司馬懿乃ち生捕を放して盡く回らしめんと云ければ、夏侯和が曰、何ゆゑに放玉ふぞ。司馬懿が曰、量に此等の士卒を殺して罪つくりに何かせん、盡く放して魏の大將の仁慈なるを知しめん、是又彼が心を結んで其戰ふ心を怠らしむ、呂蒙が荊州を取たる計なり、今より後名もなき士卒を生取ば盡く放して回らしめよとて、諸軍に恩賞を施しける。孔明は高翔に命じて葫蘆谷の內へ兵粮を運び集る體をなさしめ、木牛流馬を驅て谷の口に往來せしむ。此計を知もの更に無りけり。此時魏の勢日々に戰ひ勝て分取高名せずと云ものなく、已に二十日ばかりに成ければ、司馬懿も毎日御方の利あるを見て心の內甚だ喜ぶ。又ある時蜀の勢を五六十人生取きたりければ、司馬懿こと〴〵く放して問て申けるは、孔明は今いづくにある。答て曰、毎日葫蘆谷へ兵粮を運で自ら谷より十里ばかり西に陣を取候。司馬懿つぶさに問て酒を飲せ、引出物とらせて回らしめ、其夜諸大將を集めて申けるは、孔明いま自ら葫蘆谷の西に陣を取て祁山には自餘の大將を留め置り、わが久しく出ざるに油斷して盡く怠り荒む、汝等明日力を併せて一齊に祁山の陣に攻かかれ、我も自ら後陣に續ん。諸將命を受て退きければ、司馬師問て曰、今蜀の勢四方に散て陣を取、父いま其前を攻ずして却て祁山を攻玉ふは如何なる故ぞ。司馬懿が曰、祁山は蜀の勢の

ば我必ず手捕にせん、是汝が功なりと云ければ、魏延計を受て出にけり。孔明又高翔を呼、汝は木牛流馬を驅て或は二十或は五十を一群とし、各米を積で山路に往來し、魏の勢きたらば態と之を奪はれよと云ければ、高翔計を受て出にけり。孔明乃ち祁山の大軍を手配して諸處の陣を能守らせ、汝等他の勢の來り攻る時は詐て戰ひ負、もし司馬懿が自ら來れるを見ば共に力を倂して大に戰ひ、却て虛に乘て渭水の本陣を攻とれとて諸將によく計を授け、自ら葫蘆谷の傍に陣を取てぞ居たりける。魏の陣には夏侯惠、夏侯和自ら司馬懿に見えて申けるは、今蜀の勢四方に散て陣を取、おの〳〵屯田を成て久く留るの計をなす、若時を趁て除ずんば根を深し蔕を固して、後これを如何んともすべからず。司馬懿が曰、われ但孔明が計を畏るゝ也。二人又曰、もしさ程に孔明を怕れ玉はば天下の人いづれの日か太平を見ん、我等二人罷向て戰ふべし。司馬懿が曰、汝等は我左右を離こと勿れ。夏侯霸、夏侯威を用ふべしとて卽時に一萬の勢を授け、二手に分て戰を催しむ。夏侯霸、夏侯威直ちに蜀の陣に向ひければ、半途にて蜀の大將高翔が兵粮を運ぶ勢に出あひ、兩方より喊を造て討て蒐りけるに、蜀の勢さわぎ亂れて走りければ、魏の勢木牛流馬五六十疋を奪ひ取、敵の捨たる馬物の具金鼓を撫ひ取て本陣に回り、次の日又推よせて蜀の勢百餘人を生捕來る。司馬懿その虛實を問ければ、諸卒みな答て曰、

さほどに怖玉ふぞ。時に斥候より告て、蜀の大將魏延先日落し玉へる黄金の盔を竿に指あげ、様々に惡口吐て戰を催候と報じければ、司馬懿笑て曰、聖人も云る事あり、小不ㇾ忍則亂ニ大謀ヲと、只よく堅く守るを上の計とす、諸將血氣の勇を恃こと勿れと云ければ、諸人みな怒を推て出ざりけり。葫蘆谷には馬岱程へて木柵寨を造り成、孔明に見えて申けるは、某この間谷の内に塹を掘、乾ける柴を積で硫黃焰硝火を引ものを灌ぎ、山の上には虛く假屋を造り雙べ、内に乾ける草を籠て内外みな地雷を伏せ、地の底に藥線を通じて用意一齊に備れり、今幸に炎天にて能乾ける時なればこの計用ふべしと云ければ、孔明大に喜び、密に耳を附て計を授け、汝葫蘆谷の後なる細路を截塞ぎ、兵を谷の内に伏せて、司馬懿が魏延を追てこの谷に馳入時急に伏勢を以て前なる谷の口を截塞ぎ、一度に火を付て燒殺せ、若合戰すでに初りたるを見ば晝は七星を畫る旗を立、夜は七の鐙に燈明を燒して山の上に出すべし、是司馬懿を引入るの道なり、我元より汝が忠義を知、この故に斯る大事を行しむ、切に怠こと勿れと云ければ、馬岱計を受て出にけり。孔明又魏延を呼よせ、汝は五百餘騎にて魏の陣に推よせ、司馬懿と鋒を交へば必ず勝ことを用ひず、只いつはり負て渭水の東へ逃きたれ、司馬懿もし追來ば汝却て晝は七星の旗を立たる所に走り、夜は七つの燈明を望で走れ、いかにもして司馬懿を谷の内へ引入な

く大軍を率して襄陽城へ推寄ければ、魏の勢これを見て城を出て戰はんと勇む。曹叡急に止めて曰、陸遜深く計あり、此敵を誘ん爲なり、輕々しく出ること勿れとて數日引籠りて居たりしが、忽ち斥候の兵走り來り、吳の勢三方こと〴〵く退きたりと告ければ、曹叡人を出して窺はしむるに、一人も殘らず回りしかば、大に驚て曰、陸遜が兵を用ふる、古の孫子吳子にも劣ず、東南いまだ平ぐべからずとて諸將を分て要害を守らせ、自ら合淝の城に屯して敵の變をぞ窺ひける。此時祁山には魏の勢久しく出ざるを見て、孔明蜀の兵を分て屯田を致させ、魏の百姓と相雜て田を作り、百姓に二分を與て蜀の兵は一分を取。もし此に背ものあれば忽ち首を斬て法を正しける故に、魏の百姓も其德を感じ心を安して業を樂む。司馬懿久しく渭水の陣に引こもり、孔明を退くべき計なく心の內悶え患る所に、長男司馬師來て申けるは、蜀の勢適には御方の兵粮を夥しく奪とり、今又百姓と打雜て渭水の邊に屯田をなす、百姓これに因て盡く心を傾け其恩に服せずと云もの無、これ長久の計なり、必ず國家の大患をなさん、然るに何を期すともなく引籠て居玉はんより、何ぞ日を定めて孔明と快く大に戰ひ、兩方の雌雄を一時に決し玉はざる。司馬懿が曰、われ此を思はざるにあらず、如何せん孔明に勝べしと思ふ計なし。司馬師が曰、智ある者は智を使ひ、智なき者は力を使ふ、父いま百萬の大軍を統て何とて

葛瑾問て曰、陸遜は兵馬を調て合戰の備をするか。使答て曰、陸都督の陣は上下みな怠荒で用心の體は無候。諸葛瑾いよ〳〵怪み、今魏の勢長く驅て大に進む、陸遜もし之を防の備なくんば早く本國へ退くべきに、今油斷せば必ず敗んと云て自ら陸遜が陣に行て其體を見るに、果して敵を防の用意は無して諸軍勢は陣外に出て豆を蒔、陸遜は諸大將と轅門にて碁を圍む。諸葛瑾直ちに内へ入、陸遜に向て申けるは、今魏主曹叡自ら出て戰を援け、其勢甚だ大なり、都督いかゞして防ぎ玉はん。陸遜笑て曰、われ此を思ふに已に久し、いま魏の大軍流に順の勢に乘て直ちに吳楚を呑んとす、若共に鋒を交ば空く兵を損じて益なかるべし、近ごろ敵の後を遮んとて表を以て天子に奏する所に、半途にて敵に奪はれ機謀すでに洩たり、今又天子に奏し先大軍を徐々と引退かしむ、我御邊の機を見て動ん。諸葛瑾が曰、いま手下の勢みな退かんとする心あり、若延引せば害あらん。陸遜が曰、諸軍もし退くの意あらば能々諭して其心を定め玉へ、我却て變術を設て打立べし、今もし急に退かば魏の勢勝に乘て追來らん、是敗を取の道なり、御邊まづ船を調て敵に進の勢ひを成玉へ、我自ら兵を只一手に合せ襄陽を攻る體をなし、却て退き回るべし、是敵を疑はしむるの計なり、魏の勢背て追來らじ。諸葛瑾尤と喜び、我陣に回りて舟を調へ、敵に向ふの勢ひを成て潛に歸國の用意をぞしたりける。陸遜は盡

を下へ騒動し、刀よ物の具よと閧ところに、魏の勢喚て蒐入、走り散て火を掛たれば、呉の勢水に溺れ燒死する者數を知ず。大將諸葛瑾は這々のがれて多くの兵粮武具を敵に取れ、沔口まで引退く。魏の勢は呉の船を燒盡して事初よしと喜び勇み、躍て本陣に回る。次の日諸葛瑾が破れたる由陸遜が方へ聞えければ、陸遜諸將を集めて申けるは、いま魏の勢新城を救はずして三手に配て來る者は、御方の勢を牽ん爲なり、我いま表を以て天子に奏し、新城の圍を解て却て魏の勢の後を圍せ、兵粮の道を塞で我又その前より攻かゝり、首尾相顧ること能ざらしめん。諸將みな尤と同じければ、陸遜表を調へ一人の小校を使として新城へ遣しけるに、半途にて魏の伏勢に生取る。曹叡これを責て陸遜が表を捜し出し、乃ち披て見るに、孫權に大軍を以て後を圍せ前後より攻んとの計なりければ、曹叡大に嘆じて曰、陸遜まことに深妙の策なり、若後を圍れなば我いかゞして一日も怺べき、幸に此使を捕たり、急で後の用心せよとて劉邵に命じて固く守らしむ。諸葛瑾は巣湖の戰に負て諸軍みな氣を墜し、殊に炎天の暑氣に値て人馬病臥もの多かりしかば、書簡を調て陸遜が陣に遣す。陸遜ひらき觀るに、今魏の勢力大にして御方みな氣を失ふ、不如軍を收て本國に回らんとありければ、乃ち使に對面し、我自ら計あり、少しも心を勞し玉ふこと勿れ、汝回りて此由を申せと云ければ、使回て諸葛瑾に右と報ず。諸

を失ひ疲れたる時、却て大軍を以て一度に攻かゝらば一鼓して破るべし、今もし輕々しく向はば必ず敵の計に落入ん。常侍劉劭が曰、不ㇾ如まづ數千の勢を遣、新城を救と號して大軍却て吳の勢の後に廻り、其かへる路を塞で兵粮を止むべし、然る時は吳の勢戰はずして自ら走らん。魏主曹叡申けるは、諸將の意見いまだ然らず、先帝むかし東には合淝の城を構へ、南は襄陽の城を固し、西は祁山の要害を守り、若敵の攻る有時はいつも此三箇處にて防ぎ玉はずと云ことなし、朕いま兵を三手に分、先帝の例に效て防んに、敵いかでか計を成の暇あらんとて、劉昭を大將として江夏を救しめ、田預を大將として襄陽を救はせ、曹叡自ら滿寵等と大軍を引て合淝の城にぞ向ひける。去ほどに滿寵先陣の勢を引て巢湖の邊に到り、遙に向の岸を望めば、吳の勢夥しく兵船を調て色々の旗風に飜へる。滿寵よく其邊の體を窺ひ、曹叡に見えて申けるは、吳の勢すでに東の岸に在と云ども、味方いま遠路を來りぬれば軍は定めて明日ならんと思ふべし、今夜思ひよらず敵の船に夜討をして、其備なきを攻ば彼必ず亂るべし。曹叡この義しかるべしとて、驍將張球に五千の勢を付て投火炬を用意し、湖口より攻かゝらせ、滿寵に五千の勢を付て東の岸より向はしむ。夜も已に二更の比に至りて、魏の勢二手に分れて吳の水寨に近付、同音に喊を造りければ、案に違はず吳の勢みな敵よすべしとは思ひ寄ず、喊の聲に驚て上

魏の兵粮一萬斛あまりを取來り、共に勇み傲ければ、魏延今日の軍に己が功名せざるを怒り、累に怨言を吐けれども、孔明は知ぬ體にて居たりける。

○孔明葫蘆谷燒$_{二}$仲達$_{一}$

司馬懿諸處の軍に多の軍馬を失ふのみならず、木牛流馬數百疋を奪はれ、渭水の陣に逃こもりて心の内患ひ苦む所に、雒陽より早馬きたり、此ごろ吳の孫權大軍を三手に分て荆州より都へ攻入んとす、蜀の勢いまだ退かざるに吳の大敵東を犯して都の騷動斜ならず、萬一事を仕損ずる時は天下の安危この時にあり、能々要害を固めて出て戰ふこと勿れとの勅命なりと告ければ、司馬懿大に驚き、いよ〳〵緊く引こもりて一人も出ること無。この時吳の孫權は孔明が書簡を得てより三十萬の勢を起し、三手に分て魏を攻んとす。魏主曹叡これを聞て、朕自ら出て破らずんば、西に孔明あり、都の内靜なるまじとて、文武の諸將を集めて計を議しければ、太尉滿寵が曰、いま吳の勢三方より攻上る、御方まづ新城を救て敵を破り、勝に乘たる勢を引て流に順て襄陽城を救ば吳の勢自ら退くべし。將軍田預が曰、吳の勢いま力を盡して新城を取んとす、然れども要害よければ中々急には落こと能はじ、今その攻るに任せ、後に攻あぐんで銳氣

を密に舌を扭もどし、風擁して引かへる。郭淮これを見て膽を冷し、是直事にあらず、必ず神の助けならん、追こと勿れとて徒に皆回りけり。司馬懿は渭水の陣に居たりけるが、北原に軍ありて敵兵粮を奪ひぬと告ければ、急に兵を引て救の爲に出けるに、思も寄ず半途に至て俄に鐵砲ひゞき喊の聲地に震て、二手の勢前後より討て出たり。魏の勢驚て之を見れば、蜀の前軍都督張翼、飛衛將軍廖化なり。司馬懿色を失ひ暫く支て戰ふと云ども、前後を防こと能はず、散々に亂て討るゝ者數を知ず、我先にと逃わしる。司馬懿は只一騎馬を飛して林の中を走りけるを、廖化これを見付て、願ふ所の敵かな、天の與なりと喜び、揉にもうで追かけ、已に交近くなりける時、司馬懿大木を遶て走りけるを、廖化刀を舉てはたと斬。司馬懿が運の強きにや、其鋒打迯して大木に斬つけ、拔んとする間に、司馬懿すでに林の外へ出にけり。廖化腹を立跡を慕て追蒐しが、俄に其行方を見失ひ、傍なる路に司馬懿が被たる黄金の盔を落したりければ、此路へぞ逃つらんとて飛が如くに追てゆく。司馬懿はあまりに緊く追れ盔を卸で林の東に落し、却て西の路へ走りければ、廖化は盔を取て東の路へ追て行ける。此に因て司馬懿辛き命を逃のびたり。是も一時の智謀なり。廖化は西を望んで谷の口まで來り、姜維が勢と一手になり、本陣に回りて司馬懿が盔を出し、この日第一の功と定め、張嶷は木牛流馬を驅て

王平
蜀の王平岑威を一刀に斬
魏の木牛流馬を奪とる

岑威

萬の勢を率し、北原に行て敵を防ぎ、木牛流馬を送り來れ。又廖化、張翼を呼て、汝二人は共に五千餘騎を引て司馬懿が來る路を塞げ。又馬岱、馬忠を呼、汝二人は各二千餘騎を引て魏の陣に推よせ、渭水の南にて戰を催せとて手配すでに了ければ、皆思ひ〳〵に出にけり。去ほどに魏の鎮遠將軍岑威は夥しく木牛流馬を驅て隴西より兵粮を運けるが、向に一手の勢しづまりかへつて扣へたるを見て、人を遣し何者ぞと問しむれば、皆兵粮を運ぶ者なりと答ふ。是に依て心を安じ、已に交ひ近くなりける時、其勢忽然として喊を咄と造り、蜀の牙門將軍王平馬を飛して討て蒐る。岑威大に驚て之を防んと騒ところを、王平只一刀に斬て落し、木牛流馬を奪て北原の路より回らんとす。魏の敗軍この由を北原の城に告ければ、大將郭淮大勢を引て討て出、これを追こと甚だ急なり。王平兵を下知して木牛流馬の舌を扭轉し、盡く打弃て且戰ひ且走る。郭淮木牛流馬を取返しぬとて急に引て回らんとすれば、如何に引ども更に動ず。是は何事ぞと怪み驚き、弃てや回ると議する所に、忽然として鼓角天に喧しく、喊の聲地を動して二手の勢殺到す。是乃ち姜維、魏延なり。之を見て王平も取て回し、三方より攻ければ、淮郭大に敗れて退く所に、又山の中より火烟を放て一彪の神兵飛が如くに蒐出たり。魏の勢膽を冷して之を見れば、怪げなる鬼形の者共手に劍を拔て錦の旗を閃かし、彼動かざる木牛流馬

疋を奪はれたりと告ければ、孔明笑て曰、これ我願なり、汝等見よ近き內に不思議なる兵粮を夥しく得べし。諸將問て曰、これ如何なる故にて候ぞ。孔明が曰、司馬懿必ず我寸尺に效て木牛流馬を造らん、我その時に計を用ひんとて十日ばかり經ける處に、案の如く斥候の兵告て申けるは、魏の勢木牛流馬を造て隴西より渭水の陣へ兵粮を運び候。孔明大に喜び、わが計に出ずとて王平を召て申けるは、汝千餘騎の精兵を引て魏の勢に出立、夜中に北原を通て問ものあらば兵粮を運ぶ者なりと答へ、隴西の路條に出て魏の勢の木牛流馬を引來る時一度に斬て蒐りて盡く追ちらし、其牛馬を奪て北原より囘り來れ、北原には魏の大將郭淮が城あり、定めて討て出て戰ふべし、汝等その時木牛流馬の口を開き、舌を扭轉して弃おけ、然る時は敵背て追來らじ、我別に計ありと敎へければ、王平兵を引て出にけり。孔明又張嶷を呼て申けるは、汝五百の勢を率し、皆六丁六甲の神兵に出立、頭は鬼の如く身は獸の如く五色を以て面に塗、甲子甲寅の模樣の如く怪げなる形に成て、一つの手には寶劒を執、一つの手には錦の旗を持、腰に葫蘆を掛て內に硫黃焔硝を入、山の陰に深く隱て魏の勢の北原より出て木牛流馬を引囘る時一度に蒐出て火烟を放ち、敵を追散して木牛流馬を奪ひ來れ、魏の勢これを見ば心みな驚き疑て逃去べし、是乃ち神師の計なり。次に姜維、魏延を召て申けるは、汝二人は各一

を破り、丞相の徳に報ぜんとぞ申ける。司馬懿は先日の戰に夥しく軍馬を失ひ、固く守りて出ざりけるが、忽ち斥候より告て蜀の勢木牛流馬を造り出し、夥しく兵粮を運で人も苦ず、牛馬の飼料をも用ひずと報じければ、司馬懿大に驚き色を失て申けるは、われ堅く守て戰はざるは、只敵の兵粮につまるを待もの也、孔明いま木牛流馬を用ふるは是長久の計なり、我いかがして退くべきとて急に張虎、樂綝を呼よせ、汝二人は五百餘騎を引て斜谷の小路に埋伏し、蜀の勢の木牛流馬を驅て來る時後より切てかゝり、何とぞ四五疋奪ひ來れと云ければ、二人命を受、夜中に路を潛て谷の内に伏居たり。この時右將軍高翔木牛流馬を驅て夥しく通りけるに、思ひも寄ぬ後より鼓を打て喊を造り、魏の勢二手に分れて殺到す。蜀の勢騒ぎ亂て我先にと逃ければ、張虎、樂綝わざと之を追ず、木牛流馬各二疋を奪ひ、上に積だる兵粮を打弃て急ぎ馳回りける。司馬懿よく〳〵見るに進退誠に生るが如なりければ、喜て申けるは、孔明これを用て兵粮を運ぶ、我なんぞ用ひざらんやとて巧匠百餘人を集めて尺寸長短少も違へず、夜を日に繼で造らせければ、半月の内に二千匹を造り出し、孔明が法に相違なく進退よく便を得たり。司馬懿限なく喜び、鎭遠將軍岑威を大將とし、千餘騎の兵を授て隴西より兵粮を運しむること休時なし。蜀の大將高翔は祁山に回りて孔明に見え、魏の勢に木牛流馬各二

流馬を造る法に曰、

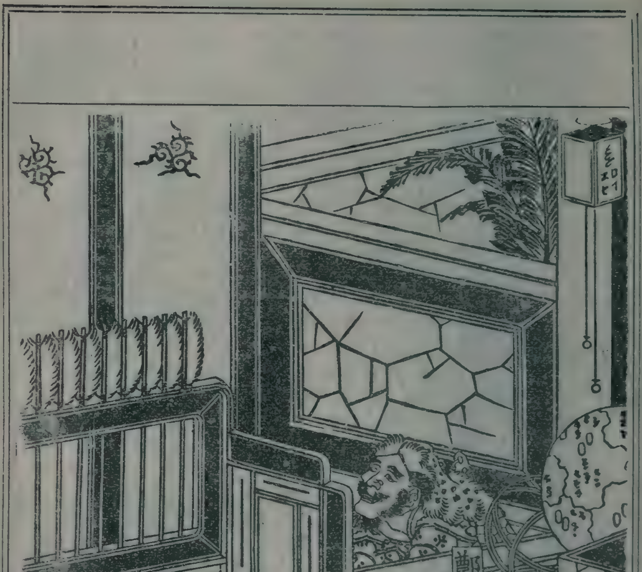
肋長三尺五寸、廣三寸、厚二寸二分、左右同。前軸孔分墨去頭四寸、徑中二寸、前脚孔分墨二寸、去前軸孔四寸五分、廣一寸。前杠孔去前脚孔分墨二寸七分、孔長二寸、廣一寸。後軸孔去前杠分墨一尺五分、大小與前同。後脚孔分墨去後軸孔三寸五分、大小與前同。後杠去後脚孔分墨四寸七分、後載尅去後杠孔分墨四寸五分、前杠長一尺八寸、廣二寸、厚一寸五分、後杠與等。板方嚢二枚、厚八分、長二尺七寸、高一尺六寸五分、廣一尺六寸、毎枚受米二斛三斗、從上杠孔去肋下七寸、前後同。上杠孔去下杠孔分墨一尺三寸、孔長一寸五分、廣七分八、孔同前後。四脚廣二寸、厚一寸五分、形制如象軒、長四寸、徑面四寸二分、孔徑中三脚、杠長二尺一寸、廣一寸五分、厚一寸四分、同杠耳。

諸人これを見て大に驚き、拝伏して申けるは、丞相は眞に神人なり、漢の天下再び興るべし、半月を出ざるに木牛流馬こと〴〵く造り出し、宛然として生るが如く、山に上り嶺を下て各其便を盡しければ、諸軍これを見て喜ずと云もの無。孔明まづ右將軍高翔を大將として千人の人夫を遣し、劍閣より兵粮を運せければ、蜀の軍勢みな粮に飽て心勇ずと云もの無、打て出て敵

にすること只この計にあり、若外に泄しなば必ず汝が首を斬んとて一々に計の樣を敎ければ、馬岱命を受て谷の内に入、日夜に工造しむ。孔明も每日行て指圖を成ければ、覺ず十餘日を過しけり。浩る所に長史楊儀來り告て、いま蜀中より運ところの兵粮こと〴〵く劍閣にあり、牛馬を以て運送すと云ども、道路艱難にして軍用足ず、いかゞすべきと云ければ、孔明笑て曰、われ本國を出ざる時已に此事を慮る、適に蜀中より運び來れる材木を用て木牛流馬を造るべし、然る時は牛馬の飼料をも用ず、晝夜路を急で便あらん。諸人みな驚て曰、伏羲乾坤を開闢し玉ひてより今の世に及ぶまで了に木牛流馬の事を聞ず、ねがはくは敎玉へ。孔明か曰、われ已に法の如く造しむと云ども、いまだ全く備ず、今精く寸尺を寫して明かに汝等に敎ん。諸の將士きたり集り座を環て之を見るに、木牛を造る法に曰、

方腹曲脛、一股四定、頭入領中、舌著于腹、載多而行少。獨行者數十里、羣行者二十里。曲者爲牛頭、雙者爲牛脚、橫者爲牛領、轉者爲牛足、覆者爲牛背、方者爲牛腹、垂者爲牛舌、曲者爲牛肋、刻者爲牛齒、立者爲牛角、細者爲牛鞅、攝者爲牛鞦紬。牛御雙轅、人行六尺牛行四步、每牛載十人所食一月之糧、人不太勞、牛不飲食也。

萬餘騎は命を弃て戰ひ、了に一人も殘らず亡て秦朗たゞ一騎圍を突て逃んとするを、蜀の大勢雨の降如く矢を放て亂軍の内に討れたり。孔明山の上より金を鳴して軍を收め、皆本陣に入ければ、天氣忽ちに晴て月の光晝の如し。孔明乃ち鄭文を引出して其首を刎させ、重く諸軍を賞しける。司馬懿は這々のがれて本陣に囘り敗軍を集めければ、一人告て曰、初更の時分に天氣俄に陰たりしは孔明八門遁甲の法を用ひし故なり、後に蜀の勢こと〴〵く收りて天氣又晴わたりしは、孔明乃ち六丁六甲の神を驅て浮雲を掃ひ除きし也と語りければ、司馬懿大に嘆じて曰、孔明は眞に神人なりとて、堅く要害を守て出て戰ふこと無りけり。孔明は毎日戰ひを催せども魏の勢更に出ざりしかば、自ら車にのりて祁山の前渭水の東に出、其邊の地理を考るに、忽ち形葫蘆の如くなる谷に到り、内へ入て之を見れば、その廣さ千餘人を容つべし。兩方の山相合て又一つの谷あり、四五百人を容つべし。其後は大山聳て鳥も翔がたく、纔に細き小路ありて一人一騎を通じつべし。孔明心の内深く喜び、案内者を呼で谷の名を問ば上方谷と申し、又葫蘆谷とも申と答ふ。孔明本陣に囘り、潛に馬岱を呼で申けるは、汝一千五百の勢を率て五百人には谷の口を守らせて人を容ず、千人は谷の内にて箇樣〳〵に工を成しめよ、是兵一人も外へ出すこと勿れ、又この外に一人も内へ容こと勿れ、我自ら不時に行て汝に敎べし、仲達を擒


鄭文

孔明鄭文が
書簡を以て
仲達を計る
孔明

汝に恩賞せんとて、合圖を定めて囘らしむ。使囘りて右の趣を告ければ、孔明大に喜び、必ず司馬懿を擒にせんとて仗劍步罡祈禱をなし、王平、張嶷を召て計を授け、又馬忠、馬岱を呼で計を授け、次に魏延を呼で計を教へ、皆手配を定めて出ければ、孔明自ら山に上て望み見る。司馬懿は鄭文が書簡を信と思ひ、二人の子を作て自ら蜀の陣に打むかはんとしければ、司馬師諫て申けるは、父なに故に唯一片の紙を賴にして深く敵の地に入玉ふぞ、萬一敵の計あらば如何して逃れ玉はん、別に大將を擇で先手とし、猶も心元なく候はば自ら後陣に備玉へ。司馬懿げにもと同じて大將秦朗に一萬餘騎を付て先手とし、自ら大軍を率して後陣に續く。其夜は風淸く月明なりけるが、初更の比より俄に陰雲四方に掩ひ、夥しく霧起りければ、司馬懿限なく喜び、是天われを助るなりとて、人は枚を啣み馬は口を勒して已に蜀の陣に推よせ、秦朗が一萬餘騎眞先に蒐入けるに、敵一人も見えざりしかば、扨は計に落されたりとて急に引囘さんとする時、四方に火を懸て喊の聲大に震ひ、鼓角天に喧しく鐵砲地に迸る。魏の勢驚き亂て騷ところに、左より王平、張嶷、右より馬岱、馬忠一齊に討て出、一騎も餘さじと取こむる。司馬懿後陣の勢を引て之を救んとする所に、忽然として喊を咄と造り、左に魏延右に姜維二手の勢討て出、散々に蒐やぶりしかば、司馬懿大半討れて我先にと敗北す。秦朗が一

秦明と申もの也。孔明笑て曰、司馬懿いつはりて汝を降らしめ、中にて計を行はんとす、汝ありの儘に告ずんば我必ず首を斬ん。鄭文震ひ怕れ了に企の樣を白狀しければ、孔明が曰、汝もし命を扶らんと思はば自ら書簡を調へ、司馬懿に內通して我陣を攻させよ、然る時は重く用ひん。鄭文已ことを得ず乃ち書簡を調へければ、孔明まづ檻車に入て捉へ置。時に樊建問て曰、丞相なにとて此人の詐なるを知玉へる。孔明が曰、これ等の計は其氣色を視ても知べし、況や司馬懿は輕々しく人を用ひず、若秦朗を前將軍に封ぜば、武藝必ず人に勝たるらん、今鄭文と馬を交て只一合に討れしは眞の秦朗にあらざる驗なり、この故に我幼より知れりと云て試るに果して秦明と云もの也と云り、我敵の計に就て計を用んとて、一人よく言ものを擇で潛に計を行しむ。其人直ちに魏の陣に到り、鄭文が書簡を出しければ、司馬懿見了て問て曰、汝は如何なる者ぞ。答て曰、某は元中國の人なるが、流落して蜀の國にあり、昔し鄭文と同鄕の好ありて今一大事の使を賴れたり、孔明すでに鄭文が秦朗を斬て功あるを喜び、用ひて先手の大將とす、明日の暮方に火を擧て合圖をせば、都督自ら大軍を引て攻玉へ、內よりも揉合せて孔明を擒にすべしとの使なりと告ければ、司馬懿再三これを問て書簡も扮なき鄭文が手跡なりしかば、心の內大に喜び酒食を與て持なし、明夜の二更には事必ず成就せん、重く

○孔明造二木牛流馬一

浩る所に魏の大將鄭文と云もの、蜀の陣に來て降參せんことを望みければ、孔明對面して其故を問に、鄭文申けるは、某は魏の偏將軍なり、近ごろ秦朗と申ものと共に兵を興して司馬懿が催に應ず、司馬懿私ありて秦朗を前將軍とし、某を芥の如に輕んじ、剰へ殺さんとする意あり、此故に丞相に降る、願くは忠を盡して、此恨を報ぜん。時に斥候の兵馳來り、魏の陣より秦朗と云もの兵を引て推寄、鄭文と戰はんと呼はり候と告ければ、孔明申けるは、秦朗が武藝汝に比せばいかん。鄭文が曰、某もし戰はば立どころに打取ん。孔明が曰、秦朗いま攻來れり、汝これを討取ば、我必ず重く用ん。鄭文喜んで馬にのり、刀を舞して向ひければ、孔明も自ら出て望み見るに、秦朗大音あげて、反賊鄭文なんぞ我馬を盜だる、速に返せとて槍を撚て蒐りけるを、鄭文刀を舞して只一合に斬て落し、魏の勢を散々に打やぶり、首を提て囘りければ、孔明申けるは、汝二度ゆいて秦朗が屍衣裳をも取來れ。鄭文とり來て孔明に見せければ、孔明大に怒り、武士に命じて首を斬しめんとす。鄭文叫で曰、某なんの罪かある。孔明が曰、われ幼より秦朗を知れり、汝なにとて我を欺く。鄭文拜伏して曰、これ乃ち秦朗が弟に

を廣陵より出して淮陽を取しめん、其勢都て三十餘萬、日を定めて打立べしと云ければ、費褘拝謝して曰、まことに此の如くならば魏を滅さんこと百日の外に出候はじ。孫權酒宴を設て重く持なし、費褘に問て申けるは、孔明陣中の先手はいかなる人ぞ。費褘が曰、專ら魏延を第一と仕り候。孫權が曰、功勞を記し兵粮の大事を司るは誰人ぞ。費褘が曰、長史楊儀なり。孫權笑て曰、朕いまだ魏延、楊儀を見ずと云ども、久しくその行狀を聞知れり、是まことに小輩なり、國の爲に益なし、若一旦孔明なくんば此二人大なる禍を生ん、御邊なんぞ君の前にて深く論ぜざる。費褘再拝して曰、陛下の教臣肺腑に銘じて忘るゝ事なかるべしとて、直ちに祁山に回りければ、孔明問て曰、孫權いかに兵を起か。費褘が曰、孫權自ら三十萬の勢を興し、三路に分れて日を擇で發向す。孔明が曰、外に云しことは無りけるか。費褘乃ち魏延、楊儀を論ぜし由ありの儘に語りければ、孔明嘆じて曰、まことに聰明の君なり、我この二人を知ざるにあらず、其智勇の勝れたるを惜で殺に忍ず。費褘が曰、丞相よく料玉へ。孔明が曰、われ之を思ふこと已に久し、後必ず除くべしとて費褘を成都に回らしめ、呉の勢の勝負を聞しむ。

費禕呉より來つて
孫権より孔明の
書を呈す
費禕

孫權

を焦して四方八面伏の勢ことぐく起る。王平、張嶷大音あげ、此にて一防ぎ防がずんば叶まじ、快く戰へとて喚き叫で戰ひけるが、大敵凌に難ければ蜀の勢大半討れて散々にぞ逃たりける。孔明敗軍を收て祁山に回り、手負討死を數ふるに一萬人に餘りければ、心の內患ひ苦む。長史楊儀ひそかに告て、いま魏延深く丞相を怨み、吾を用ひ玉ふこと糞土の如しと申候と云ければ、孔明大に叱り、我自ら知ざるにあらず、汝妄りに讒言すること勿れと云に、楊儀畏れて退出す。時に成都より尙書費禕きたりければ、孔明對面して申けるは、我御邊を使として吳に行しめん。費禕が曰、丞相の命われ何ぞ辭せん。孔明乃ち書簡を封じて吳の建業へ赴しめければ、吳主孫權呼入て對面し、其書を披き見るに、其文に曰、

漢丞相武鄉侯臣諸葛亮頓首再拜、致書東吳皇帝陛下。漢室不幸王綱失紀、曹賊簒逆、蔓延及今、皆思勦滅、未遂同盟。亮受昭烈皇帝寄託之重、敢不竭力不盡忠。今大兵已會祁山、狂寇將亡於渭水。伏望陛下以同盟之義、令將北征共取中原、同分天下。書不盡言、萬希聖聽、可察。

孫權見了て甚だ喜び、朕つねに魏を伐んと欲す、幸に孔明祁山に出たり、朕自ら兵を引て居巢門より魏の合淝、新城を取、陸遜、諸葛瑾等に江夏、沔口を討て襄陽を取せ、孫昭、張承

れば、魏の大將孫禮兵を引て討て出、いつはり負て引退く。魏延その計を疑て肯て追ず、少し退かんとする所に忽然として喊の聲大に起り、左に司馬懿右に郭淮勢ひに乘て蒐出、引包で攻ければ、蜀の勢さわぎ亂れて討るゝ者數を知ず。魏延、馬岱命を捨て戰ひ、這々圍を出て走りけるに、魏の勢急に追掛ければ、渭水の流にせき落されて、人馬死する者大半に及べり。然れども吳懿一軍を引て來て救ひければ、蜀の勢わづかに遁れて回りけり。吳班此時流に乘じて筏を下し、已に浮橋へ近付ける所に、岸の上より張虎、樂綝二千餘騎にて殺出し、指つめ引つめ散々に射たりければ、蜀の勢死する者數を知ず。大將吳班も水中に射殺さる。敗軍いよいよ亂れて盡く中に滅びければ、筏は魏の勢に取れけり。王平、張嶷は御方の敗たるをも知ず魏の本陣に推よせけるが、夜も已に二更の比に至り、又喊の聲はるかに聞えければ、王平申けるは、御方北原の勝負未だ知ず、敵の本陣は今前にあり、敵これ程まで出ざるは萬一御方の計を司馬懿か推したるにては無か、暫く待て樣子を窺ひ、浮橋に火の起るを見て一齊に攻かゝらん。張嶷げにもと同じて相待ところに、忽ち早馬一騎はせ來り、大音あげて呼はり、丞相の命なり、軍を收て速に退き玉へ、北原も浮橋も御方みな打負たりと告ければ、王平、張嶷大に驚き、急に退かんとする所に、魏の勢元より後に伏て鐵砲を響ほどこそあれ、火の光天

攻させて我自ら其前を攻ん、若渭水の南を取時は御方の勢ひ泰山よりも大ならんとて能々諸將に計を授け、魏延、馬岱を北原に向はしめ、吳班、吳懿に筏を下して浮橋を燒せ、王平、張嶷を先陣とし、姜維、馬忠を中軍とし、廖化、張翼を後備とし、三手に分れて其日の午の刻に祁山を立、虛に乘て魏の本陣を攻んとす。去ほどに渭水の北に蜀の勢多く筏を浮たる由魏の陣に聞えければ、司馬懿諸大將を集めて曰、孔明今河の北に多の筏を浮べ、北原へ攻かゝる體をなせども、我よく料るにその內必ず詭の計あらん、虛く北原を攻る體にて却て水に順て筏を下し、我浮橋を燒落して前後より本陣を攻る爲ならんとて、夏侯霸、夏侯威に命じて申けるは、もし北原に軍始りたるを聞ば、汝二人渭水の南なる山の陰に陣を取て敵の來るを打やぶれ。又張虎、樂綝に命じて申けるは、汝二人は二千の射手を調て渭水の浮橋を渡たる北の岸に伏て、敵の勢筏を下して近付ば一度に出て射殺べしとて、又北原の陣へ人を遣し、孔明もし推寄ば、其陣勢少して待て戰ふこと叶まじ、只半途に出て埋伏し、始は詐負て引退き、敵追來らば射手を出して之防げ、我水陸共に進んで救ふべしと下知しければ、郭淮、孫禮計を受、半途に出て敵を待。この時蜀の兵こと〲く打立て魏延、馬岱前後に備て北原に攻かゝれば、吳班、吳懿は筏を浮べ燒草を積で時刻を待。時に日すでに暮に及んで魏延まづ北原に推よせけ

構へ、五萬の勢を分て竹木を伐せ、渭水の上に九箇所の浮橋を懸て夏侯霸、夏侯威二人は河より西に陣を張。又本陣の後も東の方に廣き原ありければ、城を構て用心を成、諸將と計を議する所に、郭淮、孫禮二人來り見えて曰、いま蜀の勢祁山に在て水邊に陣を連ぬ、若河を渡して原に出、北山を截塞で隴西の通路を止ば、民夷動搖して由々布大事に及ぶべし。司馬懿が曰、我まことに此を忘居たり、御邊二人は隴西の軍馬を領して北原に陣を取、溝を深し壘を高して堅く守り、必ず出て戰ふこと勿れ、只敵の兵粮盡て退く時を窺ひ、虛に乘て追討にせよとて兵を分て緊く守らしむ。孔明は祁山に出て五箇所の陣屋を造り、左右中前後に備ふ。斜谷より劍閣に至るまで十四箇所に陣屋を連て勢を分て守らしむ。是乃ち久しく留ん爲の計なり。每日人を出て魏の陣を窺はしむるに、忽ち告て曰、魏の大將郭淮、孫禮二人隴西の軍馬を領して北原に陣を取候。孔明乃ち諸將を集めて申けるは、いま魏の勢北原に陣を取は隴西の路を塞れんことを怕て也、われ今いつはりて北原を攻る體を成ば、司馬懿驚て來り救ん、我却て虛に乘て渭水の本陣を攻とり、敵の備なきを討ん、先木を伐て百餘座の筏を造り、上に乾ける柴を積、水を得たる兵五千人を揃て夜中に北原に攻蒐らしめば、司馬懿必ず自ら救ん、其時引違て我先手の勢は岸に上り、後陣の勢は流に乘て筏を下し、火を付て渭水の浮橋を燒盡し、敵の後を

が才智を特で天道に背く、是自滅を招也、臣願くは陛下の洪福に賴て四人の大將を作ひ、同く行て敵を敗ん。曹叡が曰、卿誰をか伴はん。司馬懿が曰、夏侯淵四人の子あり、夏侯霸字は仲權、夏侯威字は季權、夏侯惠字は雅權、夏侯和字は義權也、夏侯霸、夏侯威は弓馬に達して武藝に精し、夏侯惠、夏侯和は六韜三畧を諳じてよく兵法を知れり、此四人父夏侯淵が漢中にて討れし恨を散ぜんとて常に牙を嚼で居候、臣ねがはくは夏侯霸、夏侯威を左右の先鋒とし、夏侯惠、夏侯和を行軍司馬とし、共に軍機を賛て孔明を退くべし。曹叡が曰、向には夏侯楙駙馬軍を出して若干の人馬を失ひ、今に羞怕て國に囘らず、此四人夏侯楙が如の者にては無か。司馬懿が曰、この四人みな夏侯楙と太だ違へり。曹叡大に喜び、司馬懿を大都督として凡そ大將士卒こと〴〵く其命に順はしめ、雒陽、長安、山東、山西、河南、河北の勢を摠領せしむ。司馬懿恩を謝して打立ければ、曹叡自ら城外に送り、密に告て申けるは、卿渭水の濱に陣を取、只堅く守るを本として專ら敵の鋒を挫ぎ、もし出て戰はざるを見ば、蜀の勢詐て引退くことと有ん、卿よく其虛實を窺ひ、彼が兵粮盡て實に退き還る時、虛に乘て追討にせよ、然る時は十分に勝ことを得て軍馬の疲勞を免るべし、是長久を保の計なり、卿怠こと勿れと云ければ、司馬懿頓首して勅を受、直ちに長安に出て諸方の勢四十萬を集め、渭水を前に當て陣屋を

ま北にあり、御方の爲に利あらず、魏いまだ討べからず、又成都の人柏樹の毎夜哭き哀を聞ものあり、箇樣の事共皆不吉の象なり、丞相よく謹で出玉ふこと勿れ。孔明が曰、われ先帝の遺命を受、當に力を盡して賊を討べし、何ぞ風雲虚謬の兆を以て國家の大事を廢せんやとて、自ら先帝の廟に詣して太牢の祭を備へ、涙を流して申けるは、臣亮五たび祁山に出て更に一寸の地をも得ず、其罪かろきにあらず、今又全師を統て再び祁山に出んとす、誓て力を盡して賊を滅し、惟死すべき而已と云て慇懃に祭了り、朝を辭して出ければ、後主自ら百官を率て城外に送り玉ふ。孔明まづ漢中に出て人馬を調へ諸大將を集る所に、龍驤將軍關興病重して亡たりと告ければ、孔明聲を放て大に哭き昏絕して倒れけるが、半時ばかり有て甦り、可憐忠義之人、天不肯與壽と云て長く嘆き、魏延、姜維を先鋒とす。時に李恢すでに兵粮を運で斜谷の口まで出たりと報じければ、孔明三十四萬の勢を五手に分て祁山を指て進發す。魏主曹叡は去年摩陂の井中より青龍天に昇たるを以て改元して青龍と號す。この時青龍二年春二月蜀の勢三十四萬五手に分れて又祁山に出たりと告ければ、曹叡大に驚き、司馬懿を召て問て曰、孔明この三箇年は軍を出さざりしが、今又祁山に出たり、卿いかなる計かある。司馬懿が曰、臣夜天文を視に、旺氣北に盛にして御方に利あり、彗星太白を犯して蜀の爲に不吉なり、孔明己

○孔明六出祁山

此三年の間は孔明師を出さず、成都に在て軍民を恤みけるが、今年建興十二年春二月朝に出て奏して曰、臣すでに軍士を養こと三年、糧草軍器こと〴〵く滿足て、人強く馬壯也、この時を失はず早く魏を平げて先帝知遇の恩を報ずべし、この囘もし奸賊を平げて漢室を恢復せずんば、誓て再び陛下に見候はじ。後主劉禪宣けるは、今三國鼎足の勢成て吳魏曾て寇をなさず、丞相なんぞ安坐して太平を樂ざる。孔明が曰、臣三箇年の間師を出さずと申せども、寐覺の內も魏を伐の計を思はずと云こと無、實に忠を竭し力を極て陛下の爲に中原を恢復し、再び漢室一統の基を興すべし。時に一人すゝみ出、魏いまだ伐べからずと呼はりければ、諸人これを見るに譙周字は允南、いま太史の職に居して深く天文地理を知れり。進み出て奏しけるは、臣司天臺の職を掌る、禍福みな奏せずんばあるべからず、近ごろ數百の群烏南より飛來て漢水の中に落て死す、是大なる不吉なり、臣夜天文を視るに、奎星太白の分野に纒れ、盛氣い

國に囘る是謀反の企なりと奏す、天子これに因て某を勅使として事の實不を聞しめ玉ふ。孔明怪で申けるは、李嚴われに急を告て吳の勢すでに攻來ると云り、我この故に囘りたり。費禕が曰、李嚴は却て丞相の逆心ある由を奏せり。孔明大に怒り、人を遣して其仔細を尋ね聞しむるに、是乃ち李嚴元より孔明が命を受て祁山の陣へ兵粮を出しけるが、其用意兎角調ひ難きに依て罪せられんことを怕れ、暫く師を退けさせんとて詐て此計を用ひたる也。孔明いよ〳〵怒り、匹夫己が過を飾のみならず、國家の大事を廢す、首を斬んと云ければ、費禕が曰、先帝昔孤子を李嚴に托し玉へり、丞相もし殺し玉はば天下の人物を容こと能ざるを謗ん、已に大なる罪を犯ぬれば只官職を剝で一命を助玉へ。孔明これに從ひ、費禕に表章を書せて天子に奏し、李嚴は先朝の舊臣なるを以て死罪一等を宥され、官を剝で庶人となし、梓潼郡に遠流せらる。其後孔明成都に入て李嚴が子の李豐を用ひて長史劉琰等と兵粮を奉行せしめ、車馬を調練して陣法を講せ、三年の間は師を出さず。政教正しく國治りければ、人民こと〴〵く恩德を仰で孔明に事こと恰も天地父母の如なり。

中れるを知、急に退かんとすれば、山の上より大音あげ、諸葛丞相こゝに在と呼はる。魏の勢驚て之を見れば、孔明火の光の中に立、われ今日獵を成て馬を取んと思ひし所に却て猪を得たり、汝等魏の勢心しづかに引退き、仲達必ず我爲に擒と成ん、能々兵法を學び來れと申し候へと呼はりければ、魏の大勢膽を失ひ魂を落し、我先にと逃回りて司馬懿に斯と告ければ、司馬懿哭き悲み天を仰で嘆じて曰、張郃が討れしは我過也、諸將よく境を守れとて自ら洛陽へ上りける。魏主曹叡この由を聞て大に哭き、敵國いまだ滅ざるに良將まづ死せり、朕いかゞせんと哀ければ、群臣みな曰、張郃は棟梁の才なり、今日すでに亡ぶ、國の棟梁折けたり。諫議大夫辛毘が曰、群臣いかなる事を奏し玉ふぞ、昔し建安年中には萬人みな天下一日も武祖なくんば有べからずと云しが、已に崩御し玉ひて位を文皇帝に傳玉ひし後は、又天下一日も文皇帝なくんば有べからずと云り、文皇帝崩殂の後いま陛下龍の如くに興玉ひ、國中文武の臣雨の如し、何ぞ一人の張郃を失てさほどに悲み惜んやと云ければ、群臣みな口を緘。曹叡喜て申けるは、辛諫議が言眞に當れりとて、木門道より屍を取上せて厚く葬らしむ。孔明は漢中まで引退き成都へ入んとする所に、尙書費禕勅使として來れり。急ぎ迎へ入て對面するに、費禕申けるは、近ごろ永安城の李嚴自ら天子に見えて、軍勢の兵粮は夥しく運送仕り候に、孔明軍を收て

張郃

張郃氣に乘て追蒐ければ、關興刀を舞して路を遮る。張郃大に怒りて又十合ばかり戰ひければ、關興馬を拍て急に走る。蜀の軍勢さわぎ亂れて槍を弃刀を落し、鎧盔を卸すてて散々に敗走しければ、魏の勢みな馬より下て爭ひ摭ふ。關興、魏延或は戰ひ或は走り、日すでに夕山に傾き木門道の谷の口まで帶きけるに、張郃自ら眞先に進み、敗將いづく迄にぐるぞと呼はりければ、魏延又取て回し、汝は乃ち叛逆の賊、われは是漢の名將、われ汝を害せざるに汝却て追來るは何事ぞ、快く勝負を決せんやと罵りければ、張郃いよ〳〵怒り、槍を撚て突てかゝる。魏延又二十餘合戰ひ、盔を落して走りければ、張郃直ちに木門道に追て入、仲達が戒をも今は早打わすれ、谷の間に馬を馳て揉に揉で追ところに、後の山に鐵砲ひゞきければ、魏の勢聲々に張將軍もはや回り玉へと呼はりけれども更に耳にも聞入ず、力を竭して馳たりけるに、日すでに昏て山の上に火燒出、大木大石を投下こと雨よりも急なりければ、張郃大に驚き、悞て計に中れり、早く出よと下知するに、纔なる山際の細路を大木大石を以て截塞ぎ、兩方は岩石屏風の峙るが如くなりければ、進退路無していかゞせんとあきれたる所に、一聲の梆子響て兩方の山の上より萬弩一齊に放ち出し、其矢雨よりも繁ければ、憐べし張郃百餘騎の大將と皆谷の内にて射殺され、立たる矢は柴の如し。跡に續たる魏の大勢その路の塞りたるを見て張郃が計に

ん。張郃が曰、大丈夫身を捨て國に報ず、死すとも何ぞ悔ること有ん。司馬懿が曰、われ能々思ふに汝必ず追ことなかれ、別の大將を用ふべし。張郃が曰、その故いかん。司馬懿が曰、御邊天性火の燒が如し、必ず孔明が計に中るべし。張郃聲を勵して曰、孝は當に力を竭べし、忠は當に命を弃べし、何ぞ惜こと有ん。司馬懿が曰、御邊堅く行んことを欲す、今われ五千餘騎を擇んで御邊に授く、先手に進んで敵を破れ、賈翔、魏平に二萬餘騎を付て跡より進め、敵の伏勢を防しめん、我も自ら三千餘騎にて追掛べし。張郃限なく喜び、勇み躍て飛が如くに追かけ三十里あまり來る所に、忽然として後に喊の聲を揚て一手の勢林の陰より討て出、一人馬を躍せて大音あげ、賊の大將いづくへか行、魏延こゝにありと呼はりければ、張郃屹と見て取て回して二三合戰ひけるに、魏延詐負て逃わしる。張郃急に追かけ二十里あまり來て馬を勒め、四方を能々窺はしむるに敵一人も見えざりしかば、又馬を飛して追ところに、忽然として山の後より喊の聲起り、蜀の大將關興一軍を引て討て出、賊將逃ること勿れと呼はりければ、張郃奮怒して馬を交へ、十合あまりにして關興急に走れば、張郃又これを追かけ、前に茂たる林ありければ伏勢やあるとて兵を下知して搜さしむるに敵一人も無。扨は心安しとて飛が如くに馳たりしかば、魏延忽然として谷の中より討て出、戰ひ十合あまりにして詐り負て散々に走る。

司馬懿が曰、兵法にも善戰不レ如二善守一と云り、孔明いま兵糧に乏し、彼が利する處は急に勝負を決するにあり、我却て堅く守りて日を送る、彼退屈せば自ら走るべし。大將魏平外より來て申けるは、只今蜀の勢祁山を立て引退く、都督なにとて急に追玉はぬぞ。司馬懿が曰、これ孔明が計なり、汝等又わが下知を用ひず、大なる敗を仕出さん爲かとて、堅く制して追しめず。次の日斥候の兵きたり告て曰、齒城に籠たる蜀の勢みな木門道を指て退きたり、城の内にも多少は知ず殘り住る勢ありと見え候。司馬懿いまだ信ぜず、自ら行て望み見るに、城の上に多く旗を挿で内より煙起りければ、大に笑て曰、これ空城なり、行て見よとて人を入て見せしむるに、果して一人も無。司馬懿喜で申けるは、孔明いま引退くは必ず吳の國に變あるならん、追掛て打やぶるべし。張郃すゝみ出て曰、某ねがはくは先手に進ん。司馬懿が曰、御邊は天性もの騷して烈火の如し、畏くは失あらん。張郃が曰、都督さきに長安を出る時某を第一の先鋒とし玉へり、今日大功を立る時に至りて却て用ひ玉はぬは何事ぞ。司馬懿が曰、兵法にも皈レ師勿レ掩、窮寇勿レ追と云り、孔明いま國に囘る、險阻の處には必ず伏勢あらん、十分に行先を窺ひ見て、敵の伏勢を心に掛て追ずんば必ず大なる禍に遭ん。張郃が曰、われ已に之を知れり、少しも慮を費玉ふな。司馬懿が曰、われ量に御邊これを追ば必ず大なる悔あら

近聞、東呉令人入洛陽、與魏連和、令呉取蜀。幸呉未曾起兵、今嚴哨知消息。伏望丞相深謀遠慮、早施良圖、切勿怠忽。

孔明心疑ひ、諸將を集めて申けるは、今李嚴が注進を見るに、魏ちか比呉の國と好を結び、呉の勢を興して蜀を取しめんとす、若陸遜攻來らば誰か之を防ものあらん、我速に國に回らんとて、祁山の陣へ人を遣して王平等に下知を傳へ、我この處に在ん間は敵肯て追かくること有まじとて、王平、張嶷、呉班、呉懿二手に分れて祁山の陣を收め徐々と回らしむ。この勢すでに漢中へ入たるを見て、孔明ひそかに楊儀、馬忠を呼で計を授け、一萬餘騎の射手を調て劍閣の木門道に埋伏し、我合圖の鐵砲を聞て一齊に矢を放ち、急に大木大石を投下して其回る路を塞げと下知しければ、二人すでに打立たり。孔明又關興、魏延に計を授て後陣に打せ、城の上に虚く旗を指あげ内に柴を積で烟を立、人の籠たる體に見せて盡く鹵城を引拂ひ、木門道を指て退きける。魏の左將軍張郃は初めより渭水の陣を守りけるが、蜀の勢祁山を退きたるを見て急に上邽の城に來り、司馬懿に見えて申けるは、今蜀の勢引退く、此いかなる故ぞ。司馬懿が曰、孔明は詭の計きはめて多し、我等よく〱要害を守り、久して彼が兵粮盡て回るを窺ひ追掛て討やぶらん。張郃が曰、都督いかなれば孔明を虎の如くに怕れて天下の人に笑れ玉ふぞ。

る難儀に及ぶとも必ず信義を失ふまじとて其趣を觸たりければ、蜀の勢これを聞て皆涙を流して申けるは、丞相此の如く恩を施し玉ふ、某等なんぞ其危を見ながら回るべき、願くは命を捨て敵を防ぎ、丞相の徳に報ぜん。孔明が曰、汝等すでに日限に及べり、盡く回りて休息せよ。諸軍いよ〳〵感激して皆城を出て戰はんと勇みければ、孔明が曰、汝等強て戰んと欲せば城を出て陣を取、敵の來るを見ば少しも足をためさせず、急に蒐りて打やぶれ、是乃ち逸を以て待レ勞の法なり。蜀の勢限なく喜び、勇み躍て相待ところに、雍涼の軍勢出來り、大勢なりと云ども、皆長途に疲れて城ちかく來て先向ひ城を構んとするに、蜀の勢息をも繼せず喚て蒐り、短兵急に拉ぐ。魏の勢これを防んと此彼に勢を配る所を、蜀の兵馬強く人壯なれば掛立掛立八方に相あたり、黑煙を立て揉だりしに、討るゝ者數を知ず、一支も支ず散々に成て落行けり。

○木門道萬弩射二張郃一

孔明信義を以て三軍を激し、魏の勢を破りて喜をなす所に、永安城の李嚴早馬を打て急を告ければ、孔明大に驚き、何事ぞとて檄文を開き見るに、その書に曰、

勢を催しければ、孫禮大勢を引て不日に來る。司馬懿限なく喜び、計を授けて郭淮と共に劍閣を襲はしむ。此時孔明は鹵城に在て、數日魏の勢の來らざるを見て急ぎ姜維、魏延を召て申けるは、今魏の勢固く守りて出ざるは、一つには我刈取たる麥盡て兵粮につまるを待、二つには勢を分て劍閣を襲ひ、兵粮運送の路を塞んと謀る成ん、汝二人各一萬餘騎を引て劍閣の要害を守れ、魏の勢これを見ば自ら退くべし。二人兵を引て出ければ、長史楊儀告て曰、丞相適に兵を二手に分て百日ばかりに休しめんと宣へり、今すでに日限に及び、漢中の勢も早打立たる由先達て申し來れり、今こゝに八萬の勢あり、この內四萬を分て回らしめん。孔明が曰、我すでに法を出したれば何ぞ一日も約を違へん、早々に代らしめよ。諸軍これを聞て大に喜び、旅立の用意をする所に、忽ち早馬きたり、魏の大將孫禮、雍涼の勢二十萬騎を率して郭淮と劍閣に攻かゝる、司馬懿は新手の勢を驅て直に進んで此處へ推よせ候と告ければ、蜀の勢怕れ驚き、故鄕を望んで哭ずと云もの無。楊儀これを聞て急ぎ孔明に告て申けるは、魏の勢來ること甚だ急なり、暫く代の勢を留め置、この敵を防ぐべし。孔明が曰、われ師を出して大將を用ひ士卒を使ふ、皆これ信義を以て本とす、假令戰ひに勝とも信義を人に失ふべからず、今かはるべき勢は盡く代らしめよ、彼等が父母妻子も今や回るとて門に倚て相待べし、我いま如何な

攻ば必ず敵の備あらん、今夜思ひも寄ず夜討にして其備なきを攻ば、城は低し壕は淺し、立所に破るべしとて、打よすると齊く馬を乘放ち、壕の中に飛下、われ先に入んとぞ爭ひける。已に初更の比に到て郭淮が勢も馳來り、四方を圍で同時に揉合せんとする所に、城中より數千の弩を一齊に放ち出して其矢雨よりも繁く、大木大石を投懸々々防ぎしかば、切崖に著たる寄手の勢死する者數を知ず。魏の勢案に相違して少し引退かんとする所に、敵の合圖の鐵砲と覺て耳根に響ければ、此は何くの勢か來るやらんと驚き怪む所に、四方より火を掛て伏の勢一度に起り、喊を合せて前後左右を取まきければ、城の内にも鼓を打て喊を作り、四方の門を颯と開て拔つれて討て出、内外より攻ければ、魏の勢なじかは怺ふべき、散々に逃走りて屍は遍野の草に横たはり、血は流て溝をなす。司馬懿は這々に圍を出、小山の上に馬を留て敗軍の勢を集め、又上邽の城に引退き、緊く守て出ざりければ、郭淮來りて申けるは、今蜀の勢と相對すること日久し、之を退くべき計なし、今夜又大に負て手負三千人に餘れり、若早く計を成ずんば必ず難儀に及ぶべし。司馬懿が曰、われも甚だ苦めども孔明に勝べき計なし。郭淮が曰、檄文を馳て雍州、涼州の勢を招き、力を併せて戰ひ、某一軍を引て劍閣を襲ひ、蜀の勢の皈る道を取切、兵粮の運送を留めば孔明必ず敗るべし。司馬懿これに從ひ、急ぎ檄文を馳て雍涼の

て曰、三方の伏勢は皆眞の孔明にあらず、姜維、魏延、馬岱なり、一つの車に千五百の勢を付てその内五百人は鼓を打、只一番に進んで敵を誘き出したるが眞の孔明なりと語ければ、司馬懿天を仰で長嘆し、孔明神出鬼沒の計ありとて彌怕れて出ざりけり。浩る所に副都督郭淮來り、某承はる、蜀の勢はさまで大勢にては候はずと、今鹵城の内にて青麥を乾、御方の大軍これを圍ば一人も生ては回さじと申ければ、司馬懿つぶさに右の趣を語る。郭淮笑て曰、これ等の計は孔明わづかに欺き得たれども、今已に手ぎはの程を見すかさる、何ぞ道に足べけんや、某一軍を引て鹵城の後を攻ん、仲達は大軍を引て其前を攻玉へ、孔明必ず擒とならん。司馬懿この議に同じ、二手に分て推よする。此時孔明は鹵城の内にて麥を乾せけるが、忽ち諸大將を呼で申けるは、我量るに今夜は必定敵夜討に寄來るべし、幸に城の四方みな麥の盛なれば、兵を伏て打破らん、誰か城を出て敵を討ん。姜維、魏延、馬岱、馬忠ひとしく出て曰、某等ねがはくは行ん。孔明大に喜び、姜維、魏延に各二千餘騎を授て城外東南西北の兩處に伏おき、馬岱、馬忠に各二千餘騎を付て西南東北の兩處に伏せ、只鐵砲を鳴を相圖に四方より出よとて、孔明自ら百餘人を從へ、鐵砲を持せて麥の中にぞ伏居たる。司馬懿は大軍を引て上邽を打立、すでに夕陽西に沈ければ、心の内密に喜び、諸將に向て申けるは、若白晝に城を

より二十四人皁き衣に髪をさばき、跣足にして劍を執、一輛の四輪車を推出して、其上に孔明簪冠を戴き鶴氅を被て、手に羽扇を持て端坐せり。司馬懿大に驚て曰、此にも又孔明あり、追て見よとて五十里あまり追ども車は前に在て追付ことを得ず。司馬懿馬を住めて怪哉々々と云ところに、忽然として右の山より鼓の聲震動して一彪の軍馬殺到す。司馬懿これを見れば、又四輪車を推出して左右二十四人初の如く車を推、孔明その上に端坐せり。司馬懿驚き怕れ、諸將に向て是直事にあらず、必ず神兵ならんと云ければ、諸軍心亂れて震ひ戰く所に、又鼓の聲天地を崩して一彪の勢殺到しければ、司馬懿魂を失ひ、又孔明なるかとて之を見るに、一輛の四輪車を推出、孔明その上に端坐して、左右二十餘人その出立初めの如くなりければ、魏の勢膽を冷して駭然たらずと云もの無。司馬懿も人か鬼かの分を知ず、前後左右に孔明ありければ、勢の多少も知がたく、膽魂も身にそはず、上邽の城に逃こもる。此間に蜀の勢三萬人、思ふ儘に青麥を刈て鹵城の内にて乾たりける。司馬懿は城中に入て三日の間出ざりしが、蜀の勢退きぬと聞て人を出して窺はしむるに、路にて一人の士卒を生取きたる。司馬懿その繩を解ゆるし、何者ぞ明かに告よと云に、その人答て曰、某は麥を刈たる者なるが、馬を失ひしゆゑに生捕れたり。司馬懿が曰、四方に孔明ありて怪き者共出たりしは如何なる勢にて有しぞ。答へ

羽扇を持、車の上に端坐して、二十餘人髪をさばきたる兵跣足にして劍を執、前に一人の大將怪げなる態にて手に皁き旗を持、隱々として天神の如なりければ、司馬懿怒て曰、又孔明が妖たるは、急に蒐りて人も車も微塵にせよとて、二千餘騎の精兵を出して討しめんとす。孔明之を見て乘たる車を取て囘し、徐々と引退く。魏の勢勝に乘て馬を飛して追掛るに、何くともなく陰風にはかに吹起り、冷く霧掩て孔明が車目の前にあれども近付こと能ず。魏の勢馬を勒め驚て申けるは、奇怪々々、われ等馬を飛して追こと三十餘里、孔明が車しづ〳〵と行て前にあり、追付こと能ざるは何事ぞ。孔明魏の勢の住りたるを見て又車を囘して進來りければ、魏の勢心疑て良久しく望み居けるが、車すでに近付たるを見て二千餘騎をつと喚て蒐たりけるに、孔明又車を取て囘し、徐々と退きければ、魏の勢又二十里追に、車は元の如く前に在て肯て追付ことを得ず。諸人甚だ心を迷はし、是直事にあらずとて一處に馬を磬ければ、孔明又車を囘して進み來る。時に司馬懿馬を飛して馳きたり、諸軍を制して申けるは、孔明よく八門遁甲の法を得て六甲六丁の神を使ひ、日月を手に握り乾坤を袖に藏す、今これを追ども追付こと能ざるは、六甲天書の内の縮地の法なり、必ず追こと勿れとて急に兵を退けんとすれば、忽然として左の山より鼓の聲天地を動し、一彪の軍馬殺到す。司馬懿驚て之を見れば、蜀の勢の中

軍を引て隴西に向ひければ、齒城を固めたる魏の大將、孔明が來るを見て門を開て降人に出。孔明問て曰、この地いづくか能麥熟せる。答て曰、隴上麥熟して上面殊に盛なり。孔明乃ち張翼、馬忠を住て齒城を守らせ、自ら隴上へ出ければ、先陣より報じて魏の大勢この處に陣を取て、司馬懿が旗を打立て磬候と申す。孔明大に驚て曰、此人すでに我來て麥を刈んことを量知れり、尋常にては協ふまじとて、沐浴して身を淨め、常に自ら乘るに少しも違ざる四輪の車を四輛取出し、我兼て其用意ありとて一つの車には姜維を乘て、千餘騎の兵に車を守せて五百の勢に鼓を持せ、之を上邽の後に伏おき、二番に馬岱を車にのせて右に伏せ、三番に魏延を車にのせて左に伏せ、みな千餘騎の兵に車を守らせ、五百の勢に鼓を持せ、每車に屈強の者を擇で二十四人みな跣足にして皁き衣を著し、髮を亂し劍を執て左右に相並で車を推こと〴〵く手に七星北斗の旗を持、天兵の如くにぞ見せたりける。四番に孔明自ら車にのり、初の如くに出立せて闘輿を結束して怪げなる體になし、天蓬の模樣にして手に皁き七星の旗を執、歩立にて車の前にして從はせける。其外屈强の勢三萬餘騎に繩鎌を持せ、隙を窺て麥を刈しむ。去ほどに孔明例の車を推せて魏の陣に向ひければ、斥候の兵大に驚き、人とも見えず鬼とも見えず、膽を冷して司馬懿に報ず。司馬懿自ら出て望み見るに、孔明簪冠を戴き鶴氅を被て手に

諸方の勢を集めて手配を定めければ、左將軍張郃が曰、某ねがはくは一軍を引て雍郿の城を守り、蜀の勢を防べし。司馬懿が曰、われ御方多の大將を見るに、先手に進んで敵を破るべき者御邊より外に有べしと思はず、若雍郿の城を守ることは大將の任にあらず、我御邊と志を立て國恩を報ぜん、御邊總軍の先鋒たるべきか。張郃が曰、某本より忠義を盡し、國の爲に命を捨んと欲す、今幸に都督の爲に用らる、萬死も何ぞ辭すること有ん。司馬懿乃ち張郃を大先鋒とし、郭淮に隴西の諸郡を守らせ、自ら渭水の前に出張す。此時孔明は王平、張嶷を先手として陳倉より出て劍閣を過、散關を經て斜谷より進む。司馬懿が兵を引て出る時蜀の先陣すでに祁山を取ければ、司馬懿諸大將を集めて曰、われ量に孔明必ず隴西に行、青麥を刈て兵粮の資と成ん、我自ら郭淮等と天水の諸郡を守り、蜀の勢の麥を刈んとするを討破るべし、張郃は此渭水を守て祁山の敵に當れとて、四萬餘騎を分與へ、自ら大軍を引て隴西へぞ向ひける。孔明は後陣の大勢を率して已に祁山の陣に出、渭水の岸に魏の勢の守りあるを見て諸大將に申けるは、是必ず司馬懿が勢ならん、我料に李嚴が方より運び送る兵粮も四五日は延引すべし、然る時は兵粮今不足也、幸に隴西の青麥漸く熟すらん、密に之を刈取べし、王平、張嶷、吳班、吳懿は、祁山の陣を固めて魏の勢を防げ、我自ら諸大將を引て先歯城を攻落し、青麥を刈んとて大

して其外の者共を宮外へ逐出し、蔣琬、費褘を責て申けるは、佞人妄に我を讒す、汝二人なんぞ天子を諫ざる。二人告て曰、某元より此事を知ず。孔明百官を正して又漢中へ打出、永安城へ檄文を馳て李嚴に兵粮を運送せさせ、諸將を集めて魏を伐の計を議するに、楊儀が曰、丞相しば〳〵師を出し玉ひて前には怨を含める士卒多かりき、不如兵を二つに分て半を漢中に留め、三月がはりに休息せしめ、今二十萬の勢を先十萬餘騎にて進發し、三月の内これを用ひて次第々々に交代せしむべし、是日落れば月昇り、日出れば月沒の狀なり、此の如くならば蜀の勢不乏して長久の計ならん。孔明笑て曰、これ方に我意に協へりとて即時に軍勢を二つに分ち、百日がはりに交代せしむ。此日限を三日違ば五十枚鞭打、五日違ば百杖、十日違ば首を刎んとて、建興九年春二月上旬に一半の勢を引て祁山を望んで進發す。時に魏の太和三年、曹叡朝に出ければ、近臣申しけるは、いま長安より急を告て蜀の勢又討て出たりと報じ來れり。曹叡驚き急に司馬懿を召て申けるは、今邊庭急を告て蜀の勢又出たりと注進す、卿さきに打向ていまだ其根を平げず、今いかゞして之を破らん。司馬懿が曰、曹眞すでに死去せる上は臣力を盡して敵を滅し、陛下の恩を報ずべし。曹叡大に喜び、酒宴を設て計を議する所に、又早馬きたり、蜀の仇すでに急なりと告ければ、曹叡自ら司馬懿を城外に送る。司馬懿直ちに長安へ到り、

が智謀わが及ぶ所にあらずとて遂に雒陽へぞ上りける。

○孔明五出祁山

孔明兵を退け、竈を增の法を用ひて易々と漢中へ退き回り、諸軍を重く賞して後自ら成都に到り、帝に奏して申けるは、老臣祁山の戰に打勝て長安を取んとする所に、如何なる大事の出來て速に召回し玉ふぞと云ければ、後主劉禪宣ひけるは、朕久しく丞相に遇ずして心の內甚だ慕へり、此故に召返しぬ、別に何ぞ仔細あらん。孔明が曰、これ定て陛下の本心より出るに有ず、必ず惡人ありて臣が謀反の企ありと讒を成たるならん。後主答べき詞なく、默然として居玉へば、孔明又曰、もし內に奸邪の人ありては臣安んぞ敵を討ん。後主宣けるは、これ內官の者共が早く召回せと勸めしに依てなり、今日朕が疑の意開けたり、後悔すれども及ばず。孔明怒て內官を盡く呼出し、何故に天子に勸たると責ければ、苟安が爲なりと申ものあり。孔明急に之を捕んとするに、早魏の國へ逃去しかば、いよ〳〵怒て妄に諂し內官を斬殺

司馬懿よく兵法に通ず、我引て退くを知とも肯てかる〴〵しくは追來らじ、能々虚實を窺て那後に追蒐來らん、されども伏勢あらんことを怕れてわが宿りし跡の竈を數へんに、毎日一倍するを見ば、扨は兵を添て追手を討の計なりと疑て、必ず退いて本陣を守るべし、我心徐に回る時は何ぞ人馬を損ぜんやとて、五路に分れてぞ退きける。此時司馬懿は本陣を固く守り、苟安が計成就せば孔明必ず退くべし、其時跡より追討にせんとて窺ひ居たる處に、斥候の兵馳來り、蜀の勢こと〴〵く退きたりと告ければ、司馬懿が曰、孔明きはめて計多し、此頃大に打勝て何ぞ今退くべき、油斷せば計に中るべきぞとて、蜀の勢の捨置たる陣の邊を能々窺しむるに、近邊に敵の伏勢なしと云ければ、自ら百餘騎の猛將を引て其内へ入て竈を數へ、次の日又進んで昨夜蜀の勢の宿りたる跡の竈を數へ、毎日竈を數ふるに日々に一倍しければ、司馬懿舌を捲て申けるは、我孔明か計あらんと思ひしに果して然り、昔し孫臏が竈を減せし法に效て詐て引退く體をなし、兵を添ゆるに竈の數一倍す、是は疑はずして急に追來らんを四方に大勢を伏て討ん爲なり、われ若これを追ば必ず龐涓が馬陵の患に遭ん、孔明更に退かず、能々本陣を守れとて渭水の陣に引こもりて一人も出ざりけり。扨こそ孔明が大軍は一人一騎も損ぜずして徐々と漢中へ入にける。其のち川口の人きたり、孔明兵を退くる時次第に兵を減じ

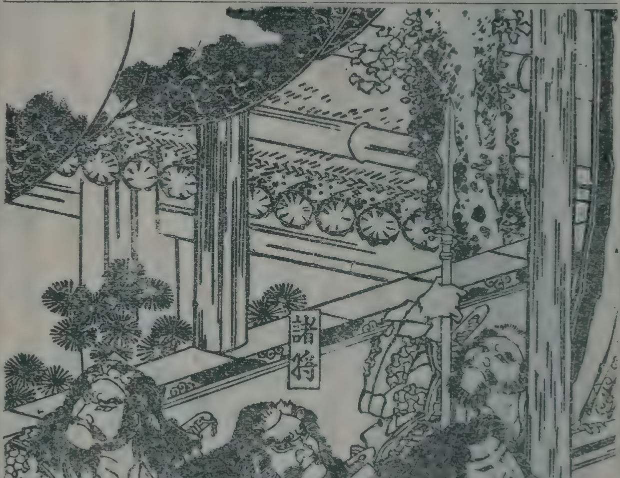
成んと企由を云て後主劉禪の心を疑はせ、孔明を召返さしめば是汝が功ならん。苟安許諾して成都に入、例の諂諛を以て志を得たる內官に賂をなし、諸處に流言を散じければ、後主このことを聞玉ひ、驚て色を失ひ、孔明もし國を奪の心あらば我いかゞすべきと悲み玉ふ。內官みな申けるは、早く孔明を召返され、其兵權を削て簒逆の禍を免れ玉へ。後主この義に從ひ、勅を下して速に孔明を召回し玉へば、蔣琬奏して曰、丞相師を出してより累に戰ひ勝て魏の勢みな驚き怕る、今いかなる事ありて召返し玉ふぞ。後主宣けるは、朕一大事の機密あり、直に丞相に問んとて節を持て夜を日に繼でぞ召れける。使命祁山の陣に入て勅命を傳ければ、孔明天を仰で大に嘆き、主上御年幼して佞人漫に事を行ふ、我いま戰ひ勝て累に大功を立んとす、何故に呼回し玉へるや、若回らざる時は臣として君を欺に似たり、今又回る時は祁山再び得がたしと云ければ、姜維が曰、もし大軍一度に退かば司馬懿勢に乘て追來らん。孔明が曰、われ今退いて國に回る、兵を五手に分て路を易て退くべし、今日まづ此陣を引退き、只一千の兵を留て二千の竈を掘せ、次の日は三千の竈を掘せ、其次の日は四千の竈を掘せ、每日兵を退けて却て竈を一倍すべし。楊儀が曰、昔の孫臏は兵を添て竈を減ずる法を用ひ、丁に龐涓を討て勝ことを得たり、今丞相兵を減じて却て竈を添玉ふは如何なる故ぞ。孔明が曰、

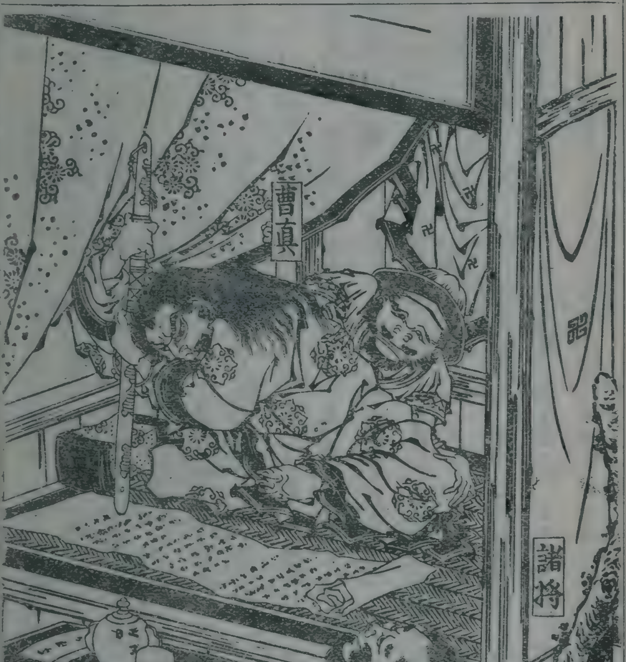
驚き、三方より攻られて討るゝ者數を知ず、散々に逃たりしかば、蜀の勢勝に乘て之を追こと五六十里。司馬懿は這々に圍を出て、討るゝをも顧ず手負をも扶ず、渭水の陣に逃入て再び出ることは無りけり。孔明は勝軍を收め祁山の陣へ回る所に、この時永安城より李嚴夥しく兵粮を運送して、都尉苟安と云ものを奉行とす。苟安酒を過して路を怠り、日限十餘日遲なはり、孔明が罪せんことを怕れて、某途中にて丞相の魏の勢と戰ひ玉ふ由を聞、もし敵に奪ることも有んと危み、此故に延引せりと云ければ、孔明怒て曰、わが軍中には兵粮を大事とす、已に法を出して、三日誤ば徒罪に處し、五日誤ば斬罪に處す、汝いま十日誤て何ぞ詞を飾れるやとて引出して斬せければ、長史楊儀が曰、苟安は李嚴が用ふる人なり、多くの錢粮を蜀中に出して功勞まさに大なり、若これを殺し玉はば今より後兵粮を出すもの有べからず。孔明これに依て死罪を宥め、八十杖鞭打て放しければ、苟安痛く責られて心中に怨を含み、夜中に五六騎を引て魏の陣に降參す。司馬懿呼入て對面しければ、苟安地に拜して右の趣を語る。司馬懿が曰、尤さること有んずれども、孔明元より詭の計多ければ、我いま汝を信じ難し、汝もし國の爲に功を立ば、那時天子に奏して重く用ん。苟安が曰、某なにごとを成てか功を立てん。司馬懿が曰、汝再び蜀の都に入て諸處に流言して、孔明君を怨ることありて自ら蜀の主と

すれども叶ねば、了に西南の方へ打向ふ。跡に續たる戴陵と樂綝とが六十騎の勢も已に陣中に切て入、衝ども打ども通り得ず。皆蜀の勢に射立られて、重々疊々として諸處に門戸多かりければ、三人の大將東西南北に度を失ひ、大勢に蒐隔られて又一處に集まることを得ず、互に自ら騒亂して愁雲漠々慘霧濛々として、喊の聲此彼に響けるが、九十餘騎の者共ひし〳〵と一人も殘らず生捉れて孔明が前に引出さる。蜀の諸將孔明に向て、此者只今陣を侵して候と告ければ、孔明が曰、我たとひ此等の者を生取と云とも、さまで奇妙とするに足ぬこと也、いま汝等が命を扶て回らしむ、早く回て司馬懿に、今の如くにては焉んぞ我に及ばん、再び兵書を讀で學問を加へ、其後に來て戰を決せよと申せ、汝等すでに我陣を侵しぬれば、其儘回さんも無興なりとて、九十人の馬物の具を剝で赤裸になし、その顏に墨を塗追立て回しければ、司馬懿これを見て大に怒り、我この處に出て久しく戰はず、何の面目ありて人に見んや、只命を弃て戰へとて、自ら劍を拔て百餘騎の大將を前後左右に圍せ、大軍を只一手に合せ、太山の崩が如くに討て蒐りけるに、忽然として後より鼓の聲天を動し喊の聲地に震て、蜀の大將關興一軍を引て蒐出たり。司馬懿兵を分て防んとするを、孔明大軍を驅て直ちに進み、喚き叫で戰ひけるに、魏の勢俄に亂れ立て蜀の大將姜維思ひも寄ざる方より一軍を引て蒐たりしかば、司馬懿大に

陣法を闘はしめんか、又は兵を闘しめんか。司馬懿が曰、まづ陣法を闘はしめん。孔明が曰、汝まづ一陣を布、見物せん。司馬懿乃ち中軍に入黄なる旗を以て兵を分配し、又馬を出して、汝わが陣を知たるかと問ければ、孔明笑て曰、我軍中には末々の大將も其陣を知、是乃ち混元一氣の陣なり。司馬懿が曰、汝も一陣を布、見物せん。孔明乃ち中軍に入、羽扇を持て一度招き、又車を出して曰、汝よく我陣を知れりや。司馬懿が曰、量に何ぞ知ざらん、是乃ち八卦の陣なり。孔明が曰、汝すでに之を知、又能この陣を攻破らんか。司馬懿が曰、われ已に陣法を知れり、如何んぞ此を破らざらんとて、乃ち中軍に入て戴陵、張虎、樂綝三人の大將を呼、いま孔明が布たる陣に八の門あり、休、生、傷、杜、景、死、驚、開と號す、開、休、生の三門は吉にして傷、杜、景、死、驚の五門は凶し、東の方は生門、西南の方は休門、北の方は開門、この三門より打て入ば此陣必ず破るべし、汝等三人まづ生門より打入、休門より切て出、又開門より取て回さば、蜀の勢こと〴〵く亂れ走らん、相かまへて志を激して敵に笑はるゝこと勿と云ければ、三人の大將計を受て張虎前に備へ、戴陵中に備へ、樂綝後に備へ、各三十騎の精兵を率し、をつと喚て東の方なる生門より打て入ければ、兩方の軍勢一度に鼓を鳴し喊を造て威を助く。張虎まづ三十騎を引て蜀の陣に蒐入けるが、其陣たゞ連城の如くにて衝て通んと

中に曠き平野ありて、馬の蒐引自在なれば、誠に無雙の戰場なり。去ほどに兩方の軍勢相近付て賊を造り、矢合の鏑を射出し、鼓角の響靜りければ、魏の陣に門旗を開て司馬懿もろ〱の大將を從へ、馬を出して蜀の陣を望めば、孔明四輪の車にのり、手に羽扇を持て出向へり。司馬懿大音あげて申けるは、我君堯の舜に禪玉ひし法に效て相傳て二世を經たり、坐ら中國を鎭て、いまだ吳と蜀とを滅し玉はざるは、寛厚の仁德深して多くの民を苦めん事を思ひ玉ふ故なり、汝は元より南陽の一耕夫、天運の數を知ずして妄に師を出して境を犯す、其罪誅を容し難しと云ども、若又心を改て前非を悔、早く國に回りて己が境を守り、鼎足の勢ひを成て百姓塗炭の苦を免れしめば、汝等が一命全く生ることを得て、戎馬の亂自ら休べしと呼はりければ、孔明大に笑て曰、われ先帝孤子を託するの命を受、いづくんぞ力を竭して賊を討ざらん、汝等久しからずして必ず漢の爲に滅さるべし、汝が先祖も皆漢の臣下として世々漢の祿を食へり、今その本に報ずることを思はず、却て反國の逆賊を助く、我なんぞ誅せざらんと答ければ、司馬懿羞しめられ再び言を出すこと能ず。吾いま汝と快く雌雄を決せん、汝必ず奇兵を出すこと無、正兵を以て明に戰ひ勝ば我誓て再大將たらじ、汝も亦打負ば早く本國に回りて重て境を侵こと勿れ、我必ず害を加へじと呼はりければ、孔明が曰、汝大將を鬪はしめんか、


諸將
補之兵


曹真
諸将

一人曹眞が陣に行彼書簡を出しければ、曹眞何事やらんとて病を扶て之を見るに、其書に曰、
漢丞相武鄕侯諸葛亮、致書於大司馬曹子丹之前。切謂、夫爲將者、能去能就、能柔能剛、能進能退、能弱能強、不動如山岳、難知如陰陽、無窮如天地、充實如大倉、浩渺如四海、眩曜如三光、預知天文之旱澇、先識地理之平康、察陣勢之期會、揣敵人之短長。嗟爾無學後輩、上逆穹蒼、助篡國之反賊、稱帝號於雒陽、走殘兵於斜谷、遭霖雨於陳倉、水陸困乏人馬猖狂、拋盈郊野之戈甲、撒棄滿地之刀槍、都督心崩而膽裂、將軍鼠竄而狼忙。無顏見關中之父老、何面見相府之廳堂。文官秉筆而記錄、百姓衆口而傳揚。仲達聞陣而惕々、子丹望風而遑々。吾軍兵強而馬壯、大將虎奮以龍驤、掃秦川爲平壤、蕩魏國作坵荒。

曹眞讀了て恨氣胷に塡り、其日の晩方に亡びければ、司馬懿屍を車にのせ、雒陽に送て葬しむ。魏主曹叡この由を聞て司馬懿に詔を降し、早く大軍を進めて孔明と雌雄を決せよと下知しければ、司馬懿乃ち孔明が陣に戰書を送る。孔明これを見て諸大將を集め、扨は曹眞死してけり、明日戰を決すべしとて、先司馬懿が使を回し、其夜ひそかに姜維、關興を呼で計を授け、次の日自ら祁山の大軍を引て渭水の前に出向ふ。此處は一方は大河流れて一方は山高し。

渭水の陣に引籠て病すでに危しと告ければ、孔明大に喜び、我一つの計あり、一片の紙を以て忽ちに殺すべしとぞ申ける。

○孔明祁山布二八陣一

時に建興八年秋八月、孔明すでに祁山に出、曹眞が司馬懿と賭に負て心の内羞怖れ、重き病を得て渭水の陣に引籠由を聞、諸大將に向て申けるは、若曹眞が病輕んば長安へ回るべきに、今渭水の陣中に住れるは病甚だ重き故也、是は諸軍の心を安くせん爲に少しも退かずして病を養もの也、われ一紙の書簡を送らば曹眞忽に亡べしとて、斜谷の内にて降人に出たる勢を呼集め、汝等は皆魏の士卒なれば、跡に殘りし妻子共の討れもやしつと哭らん、久しく御方に留べからず、今宥して回らしむべしと云ければ、皆拜謝して涙を流す。其内に長く蜀の民たらんと願ふ者百餘人ありければ、孔明これを殘し留め、歸んと云ものに向て申けるは、曹眞ひそかに我に約を成ことあり、汝等いま幸に歸る、これを曹眞が陣に送り達せよとて書簡を封じて渡しければ、皆喜び踊て渭水の陣に到り、孔明が情を以て恙なく回されたりと語りければ、司馬懿笑て曰、孔明恩を以て我軍の心を結ん爲なりとて、其勢を戰には用ひず、皆兵粮をぞ運せける。

曹眞一支も支ず、我身さへ逃れ兼て逋路は何くぞと走り迷ふを見て、蜀の勢急に追蒐、すでに討れんとせし所に、司馬懿一軍を引て馳來り、漸に救ひ出す。曹眞辛き命を扶けられ、大に羞たる體なりければ、司馬懿が曰、孔明すでに祁山の要害を奪たれば、我等この處に居難し、早く渭水の南に陣屋を構へ、再び良圖を成ん。曹眞が曰、御邊は何とて此に來て我危を救ひ玉へる。司馬懿が曰、適に使の回りて申を聞ば、足下蜀の勢は一人も見えずとて更に用心をもし玉はず、此故に計に中玉はんことを知、必ず賭物したる事を心に思はず、國家の計を成玉へとて渭水の岸に陣を取けるが、曹眞は心の內深く慚愧して了に氣の病となり、床に臥て起あがらず。この時孔明は十分に討勝て大軍すでに祁山に出、諸軍を重く賞して後魏延、陳式等を箕谷より呼よせければ、二人惶恐して地に拜伏す。孔明が曰、誰か我下知に背て多の人馬を失うたる。魏延が曰、陳式更に丞相の令を用ひず、深く兵を進めて此の如くに敗たり。陳式が曰、某が兵を進めしも魏延が再三勸しに依て也。孔明が曰、魏延は却て汝が圍れしを救たり、然るに科を魏延に讓詞を飾て我を欺く、推出して軍法を正せと下知しければ、武士共陳式を引出し首を伐てぞ出しける。孔明この時魏延を殺ざるは、後日の用に立て、那のちに斬んため也。陳式が首をば諸大將に示て帳前に梟させ、後來の戒とす。時に斥候の兵來たり、魏の大都督曹眞、

して戰はんとする者一人も無ければ、討るゝ者數を知ず。山の上より降る者は扶んと喚はりければ、大半は盔を卸で地に拜す。秦良は圍を破りて逃んとしけるを、廖化一刀に斬て落す。孔明討れたる屍を壑の中に捨させ、降人を後陣に置、その者共が物の具旗幟を取て蜀の勢五千餘騎を魏の勢に出立せ、關興、廖化、吳班、吳懿に計を授、先曹眞が陣へ早馬を立て蜀の勢少ばかり出たりしを、秦良こと〴〵く討取たりと告ければ、曹眞まことなりとして大に喜ぶ。暫く有て司馬懿が方より使きたり、箕谷より蜀の勢出たりしを、伏勢を以て四千五百餘騎を討取たり、定めて斜谷よりも出候はん、賭物したる事を思ひ玉はず、能々御用心あるべしと告來りければ、曹眞が曰、蜀の勢爭か輕々しく出來らん、此方へは一人も見え候はず、詐を云玉ひそ、賭には早勝て候と答て、司馬懿が使を回しける。浩る所に秦良こそ勝軍を收て回り候と告ければ、曹眞喜に堪ず、自ら出て之を見る。元來似せ出立たる蜀の勢秦良が旗を指て徐々と來りければ、曹眞少しも疑はざる所に、忽ち陣屋の後に燒亡出來たりとひしめき立て、曹眞驚き救んとする時、前より關興、廖化、吳班、吳懿、喊を造て討て蒐る。左より馬岱、王平、右より馬忠、張翼、鼓を打て蒐立る。魏の勢四方の敵に膽を冷し、俄の事なれば上を下へと騷亂して、刀よ槍よと拽合ほどに、討るゝ者數を知ず。火焰天に漲り黑烟地を掩ひ、喚き叫ぶ聲止ざりければ、

曹眞が陣の後を攻よ、我自ら大軍を正路より進め三方より打破るべし。四人の大將左右に分れて打立ければ、孔明又關興、廖化を呼て耳を附て計を私語、自ら大軍を引て進みけるが、路にて又吳班、吳懿を呼でひそかに計を授て眞先に進ましむ。魏の大都督曹眞は司馬懿と賭を爲て後も、蜀の勢必ず出まじと思ければ、諸軍の怠れるをも戒ず、已に七日を過けれども猶蜀の勢見えざりしかば、十日の日限にも至らば司馬懿に羞を與へんと心の內喜ぶ所に、谷の內より勢の多少は知ず、蜀の兵來り候と申す。曹眞いそぎ大將秦良に五千餘騎を授て指つかはし、假令蜀の勢出たりとも何とぞ谷の內にて遮り止め、旗を偃鼓を息て十日の日限終るまで必ず外に沙汰すること勿れ、いま三日の間外に聞えざる時は、賭には早我勝たる也とて、中々用心する體も無りけり。秦良は谷の口に出て蜀の勢を望み見るに、盡く引て回る體なりければ、只追掛よとて五六里が程馳たりけるに、蜀の勢一人も見えず。秦良大に怪み、暫く人馬を息めんとて皆馬より下て息つぎ居たる所に、一人走り來り、此邊の谷の間には盡く敵の伏勢ありげに候と告ければ、秦良急に高き處に登て望み見るに、馬烟夥しく起りければ、早く退けとひしめく所に、四方に賊の聲して前よりは吳班、吳懿、後よりは關興、廖化勢ひに乘て討て蒐る。前後は此の如くに圍れぬ、左右は皆岩石屏風の如くに峙て泄て出べき樣なかりけり。魏の勢膽を冷

陳式今を限と戰ひける所に、一彪の軍馬喊を造て討て入、陳式を救ひ出す。是乃ち魏延なり。陳式辛き命を助ると云ども、五千餘騎の勢ことごとく討れて纔に四五百人のこりしが、此も痛手を負て半死半生なり。魏の勢なほ跡より追蒐けるを、張嶷、杜瓊新手を以て討散し、要害にを取て孔明の先見まことに神に通ぜりとぞ感じける。此時鄧芝は孔明に見て魏延、陳式が無禮の樣を語るに、孔明笑て申けるは、さぞ有らん、魏延本より謀反の相あり、われ今まで殺さで置しは其勇猛にして敵の懼を憐で也、むかし先帝と此事を云しが今已に露たり、我これを除べし。時に早馬きたり、陳式昨夜敵の伏勢に圍れて四千五百餘騎討れ、只五百人のこると申せども半死半生なりと告ければ、孔明乃ち鄧芝に向て申けるは、汝は箕谷に行て陳式が心を安からしめよ、恐らくは變を生ずること有ん、我料に司馬懿必ず箕谷を固め、曹眞斜谷を守るべし、我早く之を破らん、今二手の勢を潛に敵陣の後に廻らしむ、魏の勢必ず走るべしと云ければ、鄧芝拜辭して箕谷に到る。孔明乃ち馬岱、王平を呼で申けるは、斜谷の口にもし魏の勢の守りあらば、汝二人手下の勢を引て山を越嶺を攀て、夜は路を急で晝は木陰に埋伏し、速に祁山の左に出て火を掛て相圖を知せよ。次に馬忠、張翼を呼で曰、汝二人手下の勢を率して山そばの細路より夜行て晝は伏せ、直ちに祁山の右に出火を揚て相圖をなし、馬岱、王平と一度に

器も盡く毀れ損じて我先にと退き回る、只急に追掛て掩殺すべし、何ぞ片時も怠らん、適には丞相すでに某等に命じて、早く箕谷より進て斜谷より寄る勢と齊く祁山にて出合べしと宣へり、今又進むべからずとは、是手の裏を反ごときの號令なりと云ければ、鄧芝が曰、丞相の計一つとして當ずと云ことなし、御邊みだりに舌を動こと勿れ。陳式又笑て曰、丞相の計當ずと云こと無んば街亭の敗は有まじきものを。魏延も兼て孔明に不足の意ありければ、共に嘲て申けるは、丞相さきに若我等が計を用ひて子午谷より出玉はば、長安は申すに及ばず洛陽をも攻取べし、今度々祁山に出たればとて何の益か有や、已に大將たる人一言の下知を成て兵早半途まで出たるに、又進むこと勿れとは何事ぞ。陳式が曰、それは兎も角も我等は手勢五千餘騎を引分て、直ちに箕谷より出て人より先に祁山を取、陣屋を構て丞相の羞るか羞ざるかを見るべしとて、已に兵を引て出ければ、鄧芝再三諫れども聞ざりしゆゑ、急ぎ引回して孔明に報ず。去ほどに陳式五千餘騎を率して其夜箕谷より進みけるが、敵一人も見えざりければ馬上にて大に笑ひ、人みな孔明を鬼神に通ぜる計ありと云へるが、我いま其證を見たりと嘲て二里ばかり出ければ、忽然として鐵砲を響ほどこそあれ、四面より魏の伏勢一度に起る。陳式驚て急に退かんとすれば、敵の大勢野に滿山に漫り百重千重に取圍で漏て出べき樣なかりければ、

も來らぬに此の如く氣力を費し、無用なる賭なんどして多の人を苦め玉ふことこそ安からねとつぶやく者ありければ、司馬懿本陣に囘りて彼偏將を呼よせ、大に怒て申けるは、朝廷軍士を養ふこと千日、只一時の用に立んが爲なり、汝なにとて怨の言を出して諸人の心を慢しむる。偏將肯て服せず、某更に怨ることなし、何ものの讒言にて候やらんと云ければ、司馬懿乃ち一座に居たりし者を出して證據とするに、偏將逃るべき言なく、果して罪にぞ服しける。司馬懿が曰、われ曹眞と妄に賭物を爲にあらず、只蜀の仇を防ん爲なり、若敵に勝時は諸軍の功を記して天子に奏し、都に囘りて恩賞を申與べし、汝漫に怨言を出して自ら罪を得たり、引出して首を刎よと下知すれば、武士共その首を斬て獻る。諸大將これを見て皆膽を冷しければ司馬懿が曰、汝等諸將みな能心を盡して敵を待、わが中軍に相圖の鐵砲を放つ時四面より打て出よとて、今や來ると待懸たり。此時蜀の大將魏延、張嶷、陳式、杜瓊は二萬餘騎にて箕谷の道より進けるが、忽ち參謀鄧芝來り、丞相の命ありと呼はりければ、四將馬を住て其故を問に、鄧芝が曰、丞相の命なり、箕谷より向勢は必ず能敵の伏勢を心に掛て輕々しく進むこと勿れ。陳式これを聞て冷笑て申けるは、丞相の兵を用ひ玉ふこと何とて斯は疑多き、只日夜に路を急ぎ不意に追掛て之を討ば、曹眞、司馬懿一鼓して擒と成ん、況や魏の勢この間の大雨に甲冑も軍

大將みな兵を引て打立ければ、孔明自ら大軍を統、關興、廖化を先鋒として跡に續て進發す。此時曹眞、司馬懿追かくる敵なかりければ盡く引退いて難所を越、いまは引取とて伏の勢も回りける。其のち十日あまりを經れども絕て蜀の勢の音耗なかりしかば、曹眞申けるは、此程の霖雨に路々の棧こと〴〵く損じ落て、蜀の兵我等が退きたるをも知ざるならん。司馬懿が曰、蜀の兵必ず跡に從て出來るべし。曹眞が曰、其故いかん。司馬懿が曰、此の如く天氣すでに晴たるに孔明追ても出ざるは我伏勢有んことを恐て也、この故に我等が遠く退きたるを見て急に出て祁山を取んと謀る者なり。曹眞肯て服せざりければ、司馬懿又曰、足下なにとて疑ひ玉ふぞ、孔明必ず二手に分て箕谷、斜谷より來るべし、我足下と兵を二手に備て兩方の谷を守るべし、十日の內に若蜀の勢出ずんば我面に紅粉を塗身に女の衣裳を被て必ず足下の前に來て罪に服せん。曹眞が曰、蜀の勢もし十日より內に出ば我天子の賜たる玉帶一條名馬一疋を御邊に與んとて兵を二手に分ち、司馬懿は祁山の東なる箕谷の口を守り、曹眞は祁山の西なる斜谷の口をぞ守りける。司馬懿は孔明が必ず出んことを料り、一軍を谷の間に伏おき、其外の勢を四方に分て晝夜怠ず守らせ、常に夜巡の內に雜て自ら陣々を戒けるに、ある營中に一人の偏將天を仰で怨み嗟き、この間の長雨に晝夜苦みを受て安き間もなかりし上に、今この處に逗り、敵

勢こと〴〵く引退くと告ければ、孔明その使に對面し、魏の勢回るとも必ず追こと勿れ、我別に計ありとて使をぞ回しける。

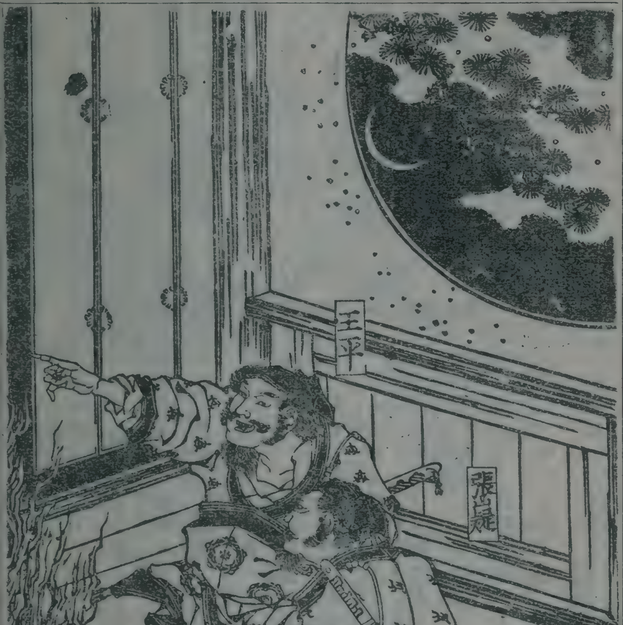
○孔明四出二祁山一

去ほどに魏の軍勢こと〴〵く引退く由その聞えありければ、蜀の諸大將孔明に見て曰、いま魏の勢久しく大雨に逢て病疲れ氣を失て逃回る、某等この時に乘て速に追蒐たらましかば、一人も生ては回さじ、丞相なんぞ追蒐玉はざる。孔明答て申けるは、司馬懿よく兵を用ふ、今退いて國に回ると云とも、必ず路に伏勢あらん、我もし之を追ば必ず其計に中るべし、不レ如彼が遠く去て後われ却て斜谷より進み、直ちに祁山を取て魏の人をして防こと能ざらしめん。諸將問て曰、長安を攻るに路條多し、丞相なんぞ毎度に祁山を取玉ふ。孔明が曰、祁山は乃ち長安の首なり、隴西の諸郡より若勢の上る時はこの祁山を通らずと云ことなし、殊更前は渭水に臨み後は斜谷に靠、左に出右に入兵を伏つべし、是武を用ふるの地なり、我この故に先祁山を取て地の利を占む。諸將みな拜服しければ、孔明乃ち魏延、張嶷、杜瓊、陳式に命じて箕谷より進ませ、馬岱、王平、張翼、馬忠に命じて斜谷より進ませ、倶に祁山にて出合しむ。八人の

て軍器盡く濕ひ人馬共に苦て、晝夜少しも安きこと無。すでに降つゞいて三十餘日に成ければ、馬に飼べき草もなく兵粮の道絕て死する者數を知ず、盡く病臥て怨み哀む聲やまざりしかば、此由傳て洛陽に聞え、魏主曹叡壇を築て自ら晴を祈ども雨さらに休ず。太尉華歆、城門校尉揚阜、散騎黃門侍郎王肅等ことゞゝく表を上て、蜀は山河の固險阻にして容易に破るべき國にあらず、況や大雨ふり續て御方の軍民ことゞゝく病臥、民は是國の本なり、昔し周の武王軍を還して殷の仇滅ぶ、陛下速に此勢を召返し、德を以て民を養ひ玉はば、吳蜀の仇自然に服せんと申ければ、曹叡これに從ひ卽時に詔を傳て師を還さしむ。此時曹眞、司馬懿は雨の休ざるを患ひ、連陰三十餘日軍士みな戰ふ心なし、若漫に動て落行ば、悔るとも甲斐あるまじ、不レ如師を收て回らんと議する所に、忽ち天子詔あり、早く師を還さしめ玉ふと告ければ、曹眞が曰、蜀の勢もし跡より追ば如何せん。司馬懿が曰、先二手の勢を谷の內に伏て後陣とし、大軍次第を亂さず退くべしとて徐々とぞ回りける。孔明は一月の間秋雨の晴ざるを料て大軍を赤坡に移し、自ら一軍を引て城固に陣を取、諸大將を集めて申けるは、推量するに魏の勢この霖雨に疲苦んで今は漸く引退くべし、我いま急に追ば却て敵の計に中らん、不レ如彼が遠く去に任せ重て良圖を成べしと云ければ、諸人尤と同ずる所に、忽ち王平、張嶷が方より魏の

てさほどに愚癡なるぞ、今汝等を遣に仔細あり、昨夜われ天文を見るに畢星太陰の分野に纏る、此月の内には必ず大雨降ん、魏の勢何萬騎ありとも安んぞ險阻の地に深入せん、此故に大勢を指向んは徒に人馬を疲さんと思ふ也、我漢中に在て氣力を養ひ、魏の勢の病疲て退き、天氣の快く晴を待て、大軍を推て跡より進まば、是逸を以て勞を討なりと云ければ、王平、張嶷心喜び、兵を引て出にけり。孔明乃ち大軍を引て漢中に出、處々の要害を守て乾ける柴を用意し、霖雨を防ぐ備を成て、皆心安く一月の内は休息せよとて衣食を賜て軍馬を養ふ。王平、張嶷は千餘騎にて陳倉の難處を守り、高き阜の上に陣を取て假屋を構へ、長雨を防用心をぞしたりける。此時曹眞、司馬懿大軍を引て陳倉城に來りけるが、在家一宇も無りければ其地の人を求て仔細を問に、孔明さきに引退く時何の故ともなきに盡く燒拂て通り候と申す。曹眞直ちに陳倉道より進まんとしければ、司馬懿止めて曰、必ず輕々しく進むべからず、我昨夜天文を視るに畢星太陰の分野に纏る、此月の内には必ず大雨ふらん、若かる〴〵しく深入して常に勝時は苦しからず、萬一打負なば人馬甚だ苦を受ん、那時退くことも難かるべし、只この處に暫く逗留して雨を防用意をなし玉へ。曹眞これに從ひ竹木を伐て假屋を造らせけるに、十日ばかりを經て大雨車軸を成、陳倉の城外平地水深きこと三尺に過ければ、魏の勢みな水中に在り

孔明


王平
張嶷

日あまりを經て司馬懿荊州より回りければ、曹叡蜀を伐の計を議するに、司馬懿が曰、臣が荊州へ下りしも吳の國の體を窺ひ見て蜀の國を攻ん爲なり、臣荊州に在て能々搜り窺に、孫權果して兵を動さず、この間に先蜀を平げて禍の本を絕ん。曹叡限なく喜び、曹眞を大司馬征西大都督とし、司馬懿を大將軍征西副都督とし、劉曄を軍師とし、四十萬の勢を興して直ちに蜀の國へ向はしむ。曹眞、司馬懿都を立て長安にて諸將の手配を定め、郭淮、孫禮等を會合して劍門關を指て推よせたり。境を守る蜀の勢いそぎ成都へ急を告ければ、此時孔明病すでに平復して每日軍馬を調練し、八陣の法を習はせ、近日魏を攻んと議するに、早馬きたり此由を告ければ、孔明まづ王平、張嶷を呼て曰、魏の大勢わが國に寄來る、汝二人千餘騎を率し、陳倉の古道を守て魏の勢を難所に支へよ、我も大軍を整へて漢中まで進むべし。王平、張嶷驚て申けるは、我きく魏の勢四十萬、詐て八十萬と號し、其勢は泰山の如し、今千餘騎を以て之を防んに如何して當るべき。孔明が曰、われ大勢を向んことは徒に士卒を勞せんと思ふ故なり。王平、張嶷たがひに面を見合せて出ざりければ、孔明が曰、もし打負て回りたりとも汝等が罪にあらず、早く兵を引て打向へ。二人哀んで申けるは、丞相某二人を殺さんとならば只この所にて首を刎玉へ、爭か千餘騎にて司馬懿が八十萬に當るべき。孔明大に笑て曰、何と

と云もの笑て申けるは、向に劉曄早く蜀を伐玉へと云り、今この事知ずとは何ぞや、我天子に見て問べしとて内に入て奏して曰、陛下なんぞ兵を起して早く蜀を伐玉はざる。曹叡笑て曰、卿は書生なり、安んぞ兵法を知ん。楊曁が曰、劉曄は先帝の謀士なり、已に蜀を伐玉へと勸たり、臣この故に申なり。曹叡心の内に是は如何さま劉曄が深き所存あるべしと思ひければ、色を正して曰、劉曄肯て朕に此事を勸ず。楊曁が曰、劉曄外に出て百官に向て、蜀は中々伐べからず、却て徒に人馬を費んと云り、臣この故に疑ひを爲。曹叡乃ち劉曄を召て申けるは、汝朕を勸て速に蜀を伐べしと云り、今又伐べからずと云は如何なる故ぞ。劉曄が曰、陛下なにとて聞玉ひし。曹叡が曰、いま楊曁來て朕に語れり。劉曄が曰、臣よく〳〵思ふに蜀は必ず伐べからず。曹叡これを聞て大に笑ふ。暫ありて楊曁退いて出ければ、劉曄色を正して曰、臣つねに陛下は飽まで兵書を看玉ひしと思ひしが、實は其玄機を知玉はず、昨日蜀を伐玉へと申しは是一大事の機密なり、夢の間も此事の外に泄んことを怖る、何ぞ他人に向て之を語らん、兵を用ふる道は詭なり、事いまだ發せざる時は宜く祕して人に知しむべからず、臣この故に百官に向て必ず蜀は伐べからずと云り、陛下なに故に楊曁に此事を知せ玉ひしと云ければ、曹叡げにもと悟て曰、卿が言乃ち金玉なり、朕いまより愼べしとて此より彌重じけり。後十

○仲達興レ兵寇二漢中一

建興八年秋七月、魏の都督曹眞が病すでに平復しければ、表を上て魏王曹叡に奏しけるは、蜀の勢累に界を犯して中國を煩す、若この儘にて指置ば必ず大なる害を成ん、今秋の涼時に至人馬共に安閑なり、臣ねがはくは仲達と大軍を引て直ちに漢中に推よせ、蜀の奸黨を打滅して海内を掃ひ清めんと望みければ、曹叡大に喜び、司馬懿ちか比荊州に下れり、早く召のぼせて此事を議すべしとて、偏殿に出て侍中劉曄に問て申けるは、曹眞いま朕を勸て蜀を伐んとす、卿が意いかん。劉曄答て、是眞に臣が意に相合へり、今もし伐玉はずんば後必ず悔有んと云ければ、曹叡喜び、司馬懿が囘るを待て兵を興んと云。劉曄退いて家に囘ければ、百官ひそかに來て問て曰、向に天子兵を興して蜀を討んと宣へり、足下この事如何思ひ玉へるぞ。劉曄が曰、此事更に知ず、夫蜀は山川の險あり、圖やすき地にあらず、若いま輕々しく之を伐ば徒に軍馬を費さん、天子元より懼玉ふ、安ぞ此事有ん。百官默然として囘りければ、楊暨

るに、成都より早馬きたり、虎翼將軍張苞破傷風つひに癒ずして相果たりと告ければ、聲を放て大に哭き、血を吐て昏絶す。諸人扶け起しければ暫く有て甦り、是より病を得て床の上に打臥ければ、諸將みな感激して危ずと云もの無。その後十日あまりを經て孔明ひそかに董厥、樊建等を呼て申けるは、我憶ざるに病を受て、昏沈して軍事を理ること能ず、汝等必ず人に知しむること勿れ、司馬懿もし聞ば必ず急に攻來ん、不如暫く漢中に退き、病を養て後再出んと思ふ也、諸大將に觸を廻して今夜の内に引取とて、一夜の内に盡く漢中へぞ入にける。後五日すぎて司馬懿初て此ことを聞、大に嘆じて申けるは、孔明まことに神出鬼沒の計あり、我及ぶ所にあらずとて諸將を分て要害を守らせ、自ら洛陽へ上りける。孔明心しづかに漢中まで退き、自ら成都に回りければ、文武の百官こと〴〵く出むかへ、送て丞相府に扶け入、天子自ら來て病を問、御醫に命じて治療を盡させ玉ひければ、日を追て快驗をぞ得たりける。

司馬懿兵を引て王平、張翼を圍なば、汝二人は二手に分れて直ちに司馬懿が渭水の本陣に攻蒐れ、司馬懿これを知ば長安の破れんことを畏れて慞ふためき走るべし、其虚に乘て之を伐ば其陣を奪ひ得ずとも十分に利を得べしと書たり。二人大に驚き、丞相の神計なりとて二手に分て渭水の陣に推よする。司馬懿は元より孔明が計を畏れ、途々に絶ず人を殘して跡の樣子を聞繕ひけるが、前なる軍強して入亂れて戰ふ所に、追々早馬きたり、蜀の勢二手に分て本陣を攻ると告ければ、司馬懿色を失ひ、さればこそ孔明が計に落されたり、我等あまりに長追して本陣を敵に取れば、如何して生のこる者あらん、早く回れと云ほどこそあれ、自ら馬を飛して走りければ、魏の勢魂を失ひ膽を冷し、甲盔をかなぐり捨て我先にと引回す。是に氣を得て蜀の大勢息をも繼ず追蒐しかば、張郃、戴陵も殘り少なに討れ、這々に走りけるを、關興、王平等手しげく追て十分に打勝ければ、軍は是までぞ、さのみ長追なせそとて皆引回して孔明に見ゆ。司馬懿は本陣に逃入敗軍を集めて申けるは、諸將みな兵法を知ず、只血氣の勇を恃で我命を用ひず却て此敗を取り、今より後みだりに動もの有ば決して軍法を正さんと怒りければ、諸大將みな羞怖れて退出す。此日の合戰に魏の大將の討れたる者その數きはめて多く、史上記に暇なし。孔明は十分に戰ひ勝て敵の捨たる馬物の具を取あつめ、諸軍を賞して再び進んとす

討つ討れつ火を散し、追つ返しつ時うつるまで戰ふ所に、又喊を咄と造りて二手の勢打て出、魏の勢の後を遮て餘さじと取こむる。此乃ち蜀の牙門將裨將軍王平、前軍都督張翼なり。張郃これを見て大音あげ、諸軍この時に命を捨ずんば何の時を期すべきぞ、早御方後陣の大勢近付ぬらん、引な〱と勵して自ら勇を震ひ、威を逞うし、喚き叫で十方に相當り、須臾に變化して利兵堅を碎き、二時あまり戰ひけるに、敵御方に討れたる者數を知ず、血は混々として馬蹄に蹴たて、屍は累々として山の如し。されども蜀の勢は新手にて八方より入替々々攻ければ、魏の三萬餘騎みな戰ひ疲れて引色に成たる所に、忽然として鼓の聲天に喧しく、喊の聲地を動して一彪の軍馬打て蒐る。此乃ち魏の大都督司馬懿なり。新手を以て王平、張翼が後を圍ければ、張郃、戴陵又色を直して散々に攻戰ふ。之を見て張翼大音あげて申けるは、諸葛丞相の計に出ず、必ず我等を救ひ玉はん、諸軍命を捨て戰へとて兵を二手に颯と引わけ、自ら司馬懿が勢と戰へば王平は張郃、戴陵と戰ひ、叫殺天に連り、互に引なと恥しめていつ果べしとは見えざりけり。爰に姜維と廖化とは二手の勢を合せて六千餘騎、初より山の頂に伏て居たりしが、遙に合戰の體を見るに、魏の勢力大にして蜀の勢疲て見えければ、餘にながめ居て御方の弱り爲出したるも由なし、倡や今は錦の囊を開き見んとて、二人ひそかに之を見れば、若

張部、戴陵は三萬餘騎の精兵を引て其勢猛風の如く勇み躍て追かけ、喊の聲を揚ければ、蜀の聲鼓を鳴して討て出たり。張郃これを見れば奮威將軍馬忠、撫戎將軍張嶷、左將軍吳懿、安樂侯吳班、四手に分れて陣を張。魏の勢勇み進んで少ともためらはず、喚て蒐入散々に戰ひければ、蜀の勢或は戰ひ或は退き二十里あまり走りければ、魏の勢は勝に乘て息をも繼ず追蒐、六月中旬の事なれば流るゝ汗泉の如く、又五十里あまり追掛て暫く人馬を息んと、皆大息ついて支たり。孔明山の上より魏の勢の皆疲れ撓めるを見て紅の旗を動ければ、關興五千餘騎にて谷の內より討て出たり。此を見て蜀の大將馬忠、張嶷、吳班、吳懿ことごとく取て回しければ、張郃、戴陵又喚て蒐り、

前なる山の頂に埋伏し、魏の勢もし王平、張翼を圍で、十分に危き時に至らば此囊を開き見よ、自ら敵を破るの計あらん。二人計を受て出ければ、次に吳班、吳懿、馬忠、張嶷を呼よせ、潛に告て申けるは、明日魏の勢攻來らば、初の程は銳氣甚だ盛にして、中々鋒に當り難かるべし、汝等或は戰ひ或は退き、關興が討て出たるを見ば一度に取て回して急に戰へ、我又兵を出して力を助べし。四人の大將計を受て退きければ、孔明又關興を呼で曰、汝は五千餘騎を引て谷の間に深く隱れ、只山の上より我紅の旗を颭を見ば、急に出て敵を討とて手配すでに定りければ、孔明自ら山に登て望み見る。去ほどに魏の大將張郃、戴陵は三萬餘騎の精兵

日の合戰は御方の一人敵の十人に當ほどの働なくては叶まじ、我却て伏勢を以て敵の後を遮ん、智勇共に備りたる大將にあらずんば用ひ難しとて、累に魏延が顔を見るに、魏延頭を低てもの云ず。忽ち王平すゝみ出、某ねがはくは敵に當らんと望みければ、孔明が曰、もし失あらば如何ん。王平が曰、身を弃て國に報ず、失あらば首を獻らん。孔明嘆じて曰、王平は漢の忠臣なり、身を捨て矢石を冒す、眞に良將の才なり、然れども魏の勢二手に分れて前後より來る、必ず我伏勢を夾んで攻ん、王平まことに智勇ありと云ども、爭か身を分て前後の大敵に當ることを得ん、今一人の大將を副んと欲するに、如何せん我軍中に身を捨て敵に當り、我大計を成しむべき人なしと云ければ、又一人すゝみ出て曰、某ねがはくは行ん。諸人これを見れば前軍都督張翼なり。孔明が曰、張郃は魏の名將萬夫不當の勇あり、汝張郃が對手にあらず。張翼が曰、もし失あらば首を獻らん。孔明が曰、汝すでに行んことを望む、然らば王平と各一萬餘騎を率して山の後に伏かくれ、魏の勢の通り過るを待て打て出て跡を遮れ、若司馬懿が後陣の勢來らば其時二手に分れて、王平は前なる敵を防ぎ、張翼は後なる敵を防げ、共に忠を激して命を限に戰へ、我別に計を以て敵を破らん。王平、張翼計を受て出ければ、孔明又姜維、廖化を呼で曰、汝二人はこの錦の嚢を持て各三千餘騎を率し、旗を伏せ鼓を息て

里退きたり。司馬懿本陣に回り、諸大將に向て曰、これ乃ち孔明が計なり、必ず追こと有べからずとて、又十日あまりを經て人を出して見せしむれば、蜀の勢又三十里退て住れりと申す。張郃すゝみ出て曰、孔明緩兵の計を用ひて心靜に引退く、何ゆゑに疑を成て追玉はぬぞ、今もし追ずんば天下の人の笑草と成ん、某ねがはくは一軍を引て討止ん。司馬懿が曰、孔明は詭の計きはめて多き者なり、若追掛て其計に中らば、御方の鋭氣を失ふべし、必ず輕々しく追こと勿れ。張郃が曰、都督の自ら出玉ふまでも無、某一軍を引て之を追ん、若打負て回りなば必ず軍法に預らん。司馬懿が曰、御邊强て追んことを望む、然らば兵を二手に分つべし、汝は一軍を引て眞先に進み、力を盡して攻戰へ、我自ら精兵を率して後陣に續ん、是乃ち首尾相應するの計なり、汝明日早く打立、半途にして陣を居、一夜馬の足を休め、次の日追付て戰を決せよ、然る時は軍馬疲ずして力强しと云ければ、張郃大に喜び、戴陵と共にすぐれたる精兵三萬餘騎を率して先半途に出て住りければ、司馬懿は大勢を殘して本陣を守らせ、自ら五千餘騎を擇で後陣にぞ續きける。孔明は次第々々に引退く體を見せけるが、路々に密かに人を隱し置て魏の勢の追來るを窺はせけるに、此日張郃半途に出て陣を取、合戰は明日と定め候と告來しかば、急ぎ諸大將を集めて曰、いま魏の勢追來る、必ず命を弃て戰ふべし、汝等明

建興七年夏六月詔

孔明詔を聞て申けるは、我國事いまだ成ず、安んぞ丞相の職に復らん。費禕が曰、いま若受玉はずんば諸の將士みな心を冷淡して其望を失んとて再三勸たりければ、孔明乃ち丞相の職を受、恩を謝して費禕を回らしめ、いでさらば珍しき一軍して諸人の睡を醒さんとて、計を定めて諸大將に觸をなし、陣屋を收て國に回る。魏の兵この由を聞て急に司馬懿に告ければ、司馬懿が曰、孔明必ず大なる計あらん、追掛ば其計に中らん、能々守りて出ること勿れ。張郃が曰、これは定めて蜀の勢の兵粮につまりて回るなるべし、急に追蒐て一騎も餘さず討取ん。司馬懿が曰、無用々々われ料に去年豐年なりしに、今年又麥熟せり、孔明が兵粮滿足れり、然れども山路甚だ險阻にして常に運送に勞す、我推量するに今孔明が陣に猶半年の兵粮あらん、然る時は焉んぞ退き回らんや、是は久しく出て戰はざるに退屈して此計にて我を誘き出して、伏勢を以て討ん爲なりとて、密に人を出して窺はしむれば、孔明すでに三十里退いて住れりと申す。司馬懿が曰、われ料に孔明必ず退かじ、只よく要害を守て出ること勿れとて、已に十日ばかりを經れども絕て蜀の勢の消息も無りければ、又人を出して見せしむるに、蜀の勢すでに遠く退きたりと申す。司馬懿心疑ひ自ら衣を被更て士卒と共に出て潛に窺へば、蜀の勢又三十

ん、蜀の陣の後より亂るゝを窺ひ、一度に攻合せて一揉に打破らんとて、今や〳〵と待ところに、戴陵、張郃只二人忽然として出來り、慚愧して申けるは、孔明兼て我等が計を推量し、伏勢を以て取こめたりし故、御方二萬餘騎一人も殘らず亡び、又我等二人も五體を燒れ痛手を負て馬をも乘すて、這々に囘りたりと告ければ、司馬懿色を失ひ、孔明は眞に神通を得たり、早く此處をも退けとて自ら馬を飛して走りければ、魏の大勢魂も身に附ず、甲盔を打弃て散々に逃囘り、渭水の南に陣を取て一人も出ざりけり。孔明は十分に打勝、敵の捨たる馬物の具を取あつめ、本陣に囘て諸軍を賞し、魏延を遣して毎日戰ひを催せども、魏の勢固く守て已に半月ばかりを過しけり。孔明徒に日を送らば御方みな運送に勞れて兵粮に事を缺ん、如何すべきと議する所に、成都より侍中費禕勅を承はりて使たり。孔明乃ち香を焚て出迎へ、禮了て詔を聞。その詔に曰、

街亭之役咎由二馬謖一、而君引レ愆深自貶抑、重違二君意一。聽二順所一レ守、前年耀レ師馘二斬王雙一、今歲爰征二郭淮遁走。降二集氐羌一復二興二郡一。威震二凶暴一功勳顯然。方今天下騷擾、元惡未レ梟。君受二大任一幹二國之重一、而久自挹損、非レ所三以光二揚洪烈一矣。今復二君丞相一、君其勿レ辭。

で細路を横截通るべき樣なかりしかば、張郃心驚き、是必ず孔明が計ならん、早々に退けと下知する所に、忽然として鼓の聲天に喧しく、四方八面こと〴〵く火燃出、蜀の伏勢一度に起て魏の勢を眞中に取こめ、孔明山の頂に在て大音あげて呼はりけるは、張郃、戴陵わが言を聞、司馬懿わが武都、陰平に行て民を安んじ、此處に在じと料て汝二人を後より廻し、却て夾んで攻んとす、早く降人に出よ、一命を助んと罵ければ、張郃怒て、汝は乃ち山野の匹夫、なんぞ來て我大國の境を侵せる、我今汝を擒にし微塵に成て棄んと呼はり、馬を打て眞平地に上らんとすれば、山の上より大木大石を投ること雨よりも繁し。張郃これに因て上ること能はず、槍を撚て圍の中を蒐出るに、百重千重に取巻たる蜀の大勢その鋒に當る者なく、皆路を開てぞ通しける。張郃つと蒐出たりけるが、戴陵なほ出ること能はざりしかば、急に又取て回し、勇を震ひ威を激して大勢の中を馳まはり、了に戴陵を救ひ出し徐々と回りければ、孔明山の上よりこれを見て左右に向て申けるは、昔し張飛と張郃と大に戰ひを成たりとて世の人みな驚き怖れしが、我いま之を見て憶ひ知れり、其勇萬軍の中に在て人の敢て當る者なし、後必ず大なる害を成ん、我これを除べし、若この者を生て置ば又一つの病を添る也とて皆本陣へぞ回りける。この時司馬懿は大軍を引て正道より祁山の陣に推よせ、今は漸く搦手の勢も近付ぬら

る所に、忽然として喊の聲天地を動し、姜維、王平二手の勢殺到し、引包で餘さじと攻ければ、魏の勢討るゝ者數を知ず。適命を扶る者も甲盔を卸すて赤裸に成て走りけり。郭淮、孫禮あまりに強く追掛られて馬を乘すて、木の根岩の稜に摑み付、山を超て逃んとするを、張苞遙に望み見て急に馬を飛せ、只一順に進まんと一鞭を加て追掛ければ、乘たる馬岩に蹪て張苞乘ながら澗の底へ落たりけり。蜀の兵馳集て急に救ひ回りけるが、巖稜に打れて張苞が頭破損じければ、孔明成都に送て病を養しむ。郭淮、孫禮は辛き命を扶り這々本陣に回りて右の趣を告ければ、司馬懿大に驚て曰、全く御邊等が罪に有ず、孔明が智謀わが先にあり、再び兵を引て雍郿の二城を守り玉へ、我別に敵を破るの計あり。郭淮、孫禮二手に分れて出ければ、司馬懿乃ち張郃、戴陵を呼で曰、いま孔明新に武都、陰平の二城を攻取たれば、其民を定め懷ん爲に自ら行て事を理むべし、然る時は祁山の本陣には自餘の大將を留て守らしめん、汝二人おの〳〵一萬餘騎を率して今夜くらまぎれに忍で祁山の後へ廻り、共に力を合せて攻やぶれ、我自ら大軍を進めて其前を攻ん、然る時は敵前後に度を失ひ盡く亂るべし、若祁山の要害を取時は孔明自ら退くべし。張郃、戴陵計を受、左右に分れて谷の際を廻けるが、夜の三更に兩軍齊く出合、いざや攻んとて蜀の陣の後へ深々と入ければ、數百輛の車に柴を稠

は急ぎ小路より武都、陰平に馳行、よく〳〵城を守らせて却て祁山の後へ出玉へ、敵自ら亂るべし。郭淮、孫禮計を受て共に五千餘騎を率し、隴右の小路より廻りけるが、郭淮馬上にて申けるは、仲達と孔明と何れを勝れりと思ひ玉ふぞ。孫禮が曰、孔明遙に仲達よりも勝れり。郭淮が曰、然りと云ども此度の計は仲達が人に超たる智謀なり、蜀の勢もし武都、陰平の城を攻ば、我等後より推よせ、内外夾んで戰はんに、などか敵を討ざらんやとて、馬を早めて行ところに、忽ち早馬きたり、陰平の城は蜀の大將王平に打破られ、武都の城は姜維に取れぬ、蜀の勢勝に乘て早この處へ攻來り候、御油斷あるべからずと告ければ、郭淮、孫禮大に驚き、二箇處の城すでに破れぬる上は我等こゝに在ても甲斐なし、早く退かんと議する所に、敵の相圖と覺て鐵砲の聲耳根に響て、山の後の松陰より一手の勢渦巻出たり。魏の軍兵魂を失て遙に望めば、漢丞相諸葛亮と書たる旗を指あげて中央より一輛の四輪車を推出し、孔明その上に端坐して關興、張苞を左右に備へ、笑て申けるは、郭淮、孫禮逃ること勿れ、司馬懿が計を以て爭か我を欺ん、毎日祁山の陣に軍をしかけ、其間に汝二人を我後へ廻さんとす、武都、陰平は我すでに攻取たり、汝等早く馬より下て降參せよ、又は兵を戰はしめて快く勝負を決せんかと呼はりければ、魏の勢みな色を失ひ誰趕としも無れども、我先にと翔きて散々に走りけ

とを奏せんとて又床の上に臥ければ、司馬懿が曰、天子すでに某を召て此職に任じ玉へども、某が才の薄を顧て肯て受ず。曹眞大に喜び、已に詔ある上は何ぞ辭すること有ん、御邊早く打立て孔明を退けよ、我病を養て後共に蜀を攻破べしとて、乃ち印を授しかば、司馬懿これを請取天子に見て右の趣を奏し、十萬餘騎を率して長安に發向し、孔明と共に智を闘はしむ。

○孔明計破仲達

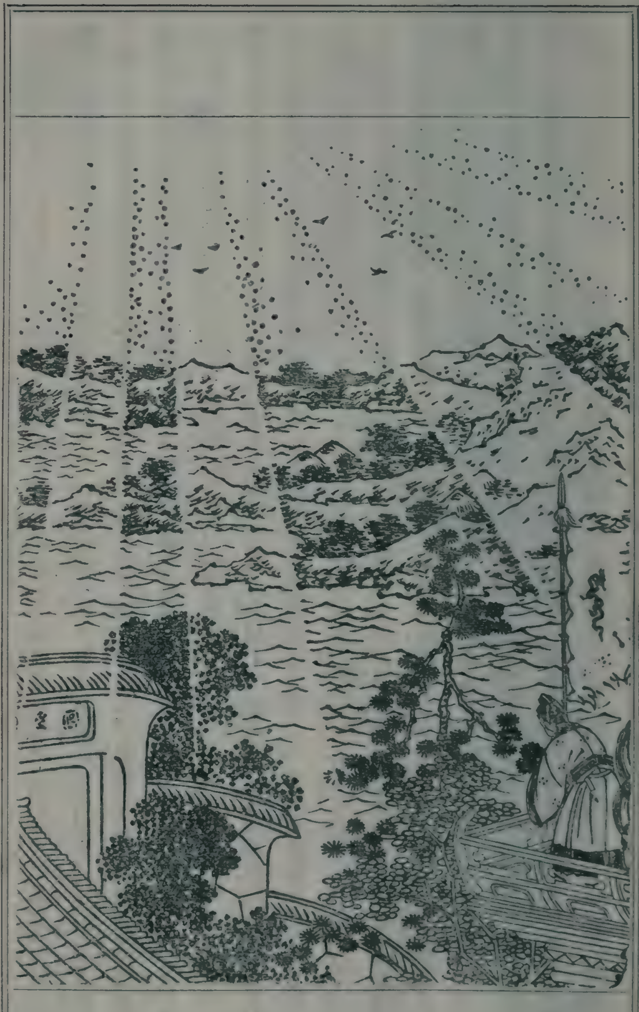
蜀の建興七年夏四月、孔明祁山に在て三箇處に陣屋を造り、魏の勢いまや來ると相待けり。司馬懿は十萬餘騎にて張郃を先鋒とし、戴陵を副將として直ちに渭水の南に出、兵を分て陣を取ければ、郭淮、孫禮きたり見ゆ。司馬懿問て曰、蜀の勢すでに祁山に出てより、御邊推よせて戰ひ玉へるか。二人答て曰、討手の下向を待ていまだ一度も戰はず。司馬懿が曰、蜀の軍勢遙遙と此處に來て、利する所は急に勝負を決するにあり、然るに今軍をもせずして日を送るは孔明必ず大なる計あらん、隴西の諸郡は何の音信も聞えざるか。郭淮が曰、已に人を遣して諸處の城を問しむるに、御方みな怠ず用心す、只武都、陰平の二箇處は人いまだ回り來らず。司馬懿が曰、扨は孔明この二處を襲なるべし、我は大軍を引て祁山の陣に攻蒐らん、御邊二人

固し、吳の勢を興して假に御方を攻るの勢ひを成しめ、中國を驚さんとす、吳も亦つねに蜀を攻んと欲すれども蜀の勢の虛に乘て來らんことを憚り、坐ら成敗を窺もの也、今吳の國より攻來ると申は詭の計にて、蜀の勢の祁山に出たるは眞實の情なりと云ければ、魏王曹叡嘆じて曰、卿は眞に大將軍の才なり、早く打向て孔明を破れとて卽時に大都督に封じ、近臣を曹眞が府中に遣し、總兵大將の印を取來て司馬懿に授けしめんとしければ、司馬懿が曰、臣いま陛下の詔を承、萬死も何ぞ辭すること有ん、總兵の印は臣自ら行て請取候はんとて、遂に退いて曹眞が府中に到り、病を問了て申けるは、吳の孫權自ら帝位に登て大軍を起し、陸遜を大將として攻上んと企、蜀の孔明又祁山に出張して兩處の早馬急を告ること雪の飛よりも頻なり、足下これを聞玉へるか。曹眞驚て曰、われ病に臥て曾て知ず、國家此の如く危し、天子なんぞ御邊を都督として先孔明を防せられざる。司馬懿が曰、某は才薄く智淺し、安んぞ其大任を領ずべき。曹眞自ら起あがり總兵の印を授けて、我は此の如く病を得たり、御邊この職を領じて國家の急を救へと云ければ、司馬懿固く辭して曰、都督 慮を緩し玉へ、某一臂の力を助て其に忠を致べし、總兵の印は某なんぞ受ることを得んやとて再三に及べども受ざりしかば、曹眞が曰、御邊もし此印を受ざる時は、中國必ず危からん、我自ら病を推て天子に見え、直に此こ

王平に一萬餘騎を付て武都を攻させ、王平に一萬餘騎を付て陰平に向はしむ。魏の左將軍張郃は長安に引退て郭淮、孫禮と相議し、郝昭すでに亡て蜀の勢散關を攻とり、孔明又祁山に出て大軍を屯すと告ければ、郭淮大に驚て曰、然る時は孔明必ず雍郿の二郡を取ん、張郃は長安を守り玉へ、我自ら郿城を固めて孫禮に雍城を守らしめんとて兵を配て打立、まづ洛陽へ早馬を飛せて討手の勢をぞ望みける。魏主曹叡これを聞て膽を冷す所に、又近臣奏して曰、近ごろ滿寵等急を告て呉の孫權すでに皇帝の位に卽、蜀と好を結で陸遜を大將とし、武昌に勢を調て攻寇る勢を成候と告來れり。曹叡兩處の急を聞ていよいよ驚き、今大將軍曹眞は病に臥ていまだ起ず、先いづれをか退くべきとて司馬懿を呼て問ければ、司馬懿が曰、臣が愚意を以て料に呉の孫權が攻來ると申は必ず詭にて候はん。曹叡が曰、その故いかん。司馬懿が曰、呉の孫權本より江東の八十一州を保て其心に不足なし、然るに思ひの外に陸遜荊州を攻取しかば、孫權自ら甚だ過たりと思へり、今又帝位に登て民の心安からず、爭か輕々しく大軍を興べき、蜀の孔明は先主玄德の恩を思ひ、街亭の恥を雪んことを欲し、了には呉の國をも滅して漢の天下一統の功を成んと謀れども、力足ざるが故に暫く呉と好を結ぶ、兵を興して魏を攻ると云ども、呉の孫權が虛に乘て成都を襲んことを畏れ、使を以て交を

某等なにをか患んやとて退て出んとしければ、孔明が曰、汝二人甲を卸こと勿れ、早く兵を引て散關を襲取、關を守る魏の勢汝等が急に攻るを見ば必ず弃て走るべし、若行こと遲延せば敵の生手加りて攻るとも破ることを得じ。姜維、魏延いそぎ兵を引て散關に推よせ、喚き叫で驀地暗に攻のぼるに、魏の勢俄に慞騒、戰はずして散々に走る。姜維、魏延念なく關を乘とり、倡や甲を卸で休んと云ところに、遙に馬烟を蹈立て魏の勢夥しく馳きたる。姜維驚て申けるは、さればこそ丞相の計に出ず、若行こと遲き時は魏の大勢きたらんと宣ひしが、今果して此の如しとて、魏延と樓に上て之を見ば、魏の左將軍張郃なり。この時張郃は郝昭に代んとて來りけるが、早陳倉の城破れて蜀の勢散關まで出たりと告を聞て、急に引回さんとするに、魏延後より追蒐しかば、魏の勢さわぎ亂て我先にとぞ落行ける。姜維、魏延この由を注進しければ、孔明自ら大軍を引て陳倉、斜谷より進み、建威を攻落して祁山に出ければ、成都より大將陳式後主の敕命を承はり、生手を引て馳加る。孔明諸將を集めて申けるは、我さきに二度この處に出て其利を得ず、今又この處に出て陣を屯す、魏の人必ず舊戰の地に依て我を防ぎ、蜀の勢先雍郿の二郡を取んと料て、必ず兵を指向て用心すべし、我陰平、武都の二郡を見るに漢と境を連たり、もし此城を攻取ば魏の兵の勢を分つべし、誰か行て之を取ん。姜維、王平ひ

より込入、内外より攻たりしかば、城中の勢こと〴〵く降参して片時が間に自ら靜まりけり。姜維、魏延は浩ることとは夢にも知ず、已に城の邊に推よせ、其體を窺ひ見るに、立たる旗は一面もなく更に人ありとも見えざりければ、二人驚き疑ところに、忽然として一聲の鐵砲ひゞきて四方に色々の旗を颯と指擧ければ、姜維、魏延打驚き、馬を勒て之を見るに、一人綸巾を戴き鶴氅を披て手に羽扇を持たるが櫓の上より聲をあげて、汝二人なにとて晩く來りたると呼はる。是乃ち孔明なりしかば、二人馬より下て地に拜伏し、軍師まことに神計なりと云ければ、孔明門を開て二人を呼入、われ常に此城の守り堅固にして攻がたきことを患ひ、人を遣して窺しむるに、郝昭が病きはめて重しと云り、我汝二人に三日の内に打立と命じたるは、諸人の心を穩にせん爲なり、我却て關興、張苞に一手の勢を付て夜中に漢中を出し、我自らその内に雜り居て終夜道を急ぎ、不意に城下まで推よせ、敵に兵を調ることを得ざらしむ、先ひそかに城中へ忍を入置て内より火を掛させ、内外より夾で攻やぶる、軍に主將なき時は必ず自ら亂る、我この故に容易く破んことを知、兵法に出ニ其不意一攻ニ其無レ備と云るは是なり、今郝昭すでに死すと云ども我甚だ其忠義を憐む、早く屍を柩に入、妻子と共に魏に送り回してその忠を表べしと云ければ、姜維拜伏して曰、丞相の兵を用ひ玉ふこと鬼神も測がたく、仁德も亦厚、



孫權
諸士
百官

る由を告ければ、孔明さらば時を運さず此方よりも攻かゝれとて兵を調へけるが、陳倉道に魏の大将郝昭が城を構て守りたるを心に患ひて輕々しくは進み得ず、密に人を遣して其様を窺しむるに、其人回り來り、陳倉城の郝昭重き病を受て已に危しと告ければ、孔明限なく喜び、事すでに成就せりとて、急に姜維、魏延を呼で曰、汝二人五千餘騎を引て夜中に陳倉の城に推よせ、城中に火の起るを見ば力を倂せて攻やぶれ。姜維、魏延その心を知ず、何れの日打立候はんと問に、孔明が曰、三日の内に用意して、我に再び問に及ばず早々に馳向ふべし。二人命を受て退きければ、孔明又關興、張苞を呼よせ、耳を附て計を授しかば、皆命を受て退散す。此時陳倉の城に郝昭病に臥て已に危なりけるゆゑ、張郃これを聞て洛陽へ表を上り、替の大将を乞けるに、路遠して急に代しめんこと難かりしかば、郭淮その變あらんことを怕れ、張郃に向て申けるは、郝昭元より我と交ること至て深し、今病すでに急なり、都の左右を待までも有まじ、御邊早く行て替玉へ、我この由を天子に奏すべし。張郃これに從ひ、自ら三千餘騎を率して夜を日に繼で陳倉城に馳てゆく。此夜郝昭は病甚だ危く呻吟して居たりしが、俄に蜀の軍勢城下まで推よせたりとて城の内さわぎければ、先人を出して見せしむるに、早諸處の門々に火を掛て喊の聲大に響き、上を下へと騷動しければ、郝昭魂を失て忽ちに死す。蜀の軍勢四方

攻んと勸む。張昭が曰、陛下初て寶位に登り玉ひて民の心いまだ服せず、妄に兵を動べからず、只宜く文を修し武を偃て學校を增設け、民の心を安くし玉へ、先蜀の國へ使を遣し、彌好を結で天下を平分せんことを約し、緩々と計を成玉ふべし。孫權この義げにもとて急ぎ國書を修して成都に使を遣しければ、後主劉禪群臣を集めて此事を議し玉ふ。蔣琬が曰、早く漢中へ使を馳て孔明に告玉へ。後主乃ち陳震を以て孔明に此由を告玉へば、孔明が曰、此方よりも使を遣して禮物を贈り、卽位の賀を述て彌脣齒の交を結び、吳の勢を起して陸遜に魏を攻させなば、魏必ず司馬懿に命じて防しめん、司馬懿もし吳と戰はば我又虛に乘て祁山より長安を取ん、是魏の勢を分つの計なりとて直ちに陳震を使とし、名馬、玉帶、金珠、寶貝を捧て吳に行しむ。陳震すでに建業に入て禮物を捧て賀をのべ、孫權に見えて國書を呈しければ、孫權大に喜び酒宴を設て重く持なし、返書を修して送り回し、陸遜を呼で魏を攻るのことを議しければ、陸遜が曰、これは孔明が司馬懿を怕るゝの計なり、已に好を結び玉ふ上は從はずんば有べからず、臣よく兵の鋭氣を養ひ、孔明が魏を攻ること至て急なる時を窺て虛に乘て攻蒐りなば、洛陽を取んこと掌にありとて、荆州襄陽の軍馬を調へ、假に魏を攻んとする體を見せて日を擇で打立とぞ披露しける。陳震は直ちに漢中に回り、孔明に見えて孫權が兵を起して魏を攻

呉國武昌の
東山に鳳皇
來儀し
大江に黄竜
出現せと
黄龍

鳳凰

賀を成ければ、早く呉の勢を起して魏を伐玉へと勸る者多し。孫權猶豫して決せざる所に、張昭すゝみ出て申けるは、近ごろ武昌の東山に鳳凰來儀し、大江の中に黄龍出現す、今君の德唐虞に配し、明文武に並べり、早く皇帝の位に卽て其のちに魏を伐玉へ。滿座みな然るべしと一同して遂に四月丙寅の日を擇び、武昌の南郊に壇を築き、孫權を請じて扶け登せ、大禮ことごとく具りて祭の禮了りければ、天下に大赦を行ひ、黄武八年を黄龍元年と改め、父の破虜將軍孫堅を武烈皇帝と謚し、母の呉氏を武烈皇后とし、兄の討逆將軍孫策を長沙桓王と號し、嫡子孫登を皇太子とし、諸葛瑾が子諸葛恪を太子左輔とし、張昭が子張休を太子右弼とす。諸葛恪字は元遜、身の長七尺、折頞廣額にして鬚眉寡し、聲甚だ清高にして極て聰明に應對を能せしかば、孫權つねに之を愛して幼より傍に侍せしむ。諸葛恪が六歳の時、酒宴の席にて孫權戯て父の諸葛瑾字は子瑜が顏の長を見て、一匹の驢馬を引せて粉を以て馬の面に諸葛子瑜と書ければ、滿座腹を抱て大に笑ふ。諸葛恪幼き心に父の笑はるゝことを患て跪て申けるは、願くは筆を借て二字を添んとて諸葛子瑜之驢と書ければ、諸人みな驚嘆せり。其聰明なること衆に超けるゆゑ、今輔佐として太子に侍せしむ。孫權すでに帝位に卽て顧雍を丞相とし、陸遜を上將軍とし、共に太子を扶て武昌城を守らしめ、自ら建業に囘りければ、群臣みな魏を

延が旗も前に見えたり。王雙馬を躍せ大音あげ、魏延走ること勿れ、快く回せと呼はりければ、蜀の勢震ひ怖れて我先にと逃かへる。王雙馬を飛し揉にもうで追ところに、後より手下の勢馳來り、將軍早く回り玉へ、魏延は却て跡に在て御方の陣に火を掛たりと告ければ、王雙後を顧るに火の光天を焦す。扨は誘られたりとて慌ふためき取て回す所に、思ひも寄ぬ山の坡の上より兵一騎喚て蒐出、魏延こゝに在と呼はりければ、王雙大に驚く所を、魏延一刀に斬て落す。魏の勢大將を討れて盡く亂れ、伏勢あらんことを疑て我先に命を扶らんと、蛛の子を散が如く十方へぞ落たりける。此ゆゑに魏延は三十騎の兵を引て後陣に下り、徐々と漢中へ回りける。曹眞は夥しく討れて心の内慚愧する上に、陳倉城より郝昭が早馬きたり、王雙が討れたる由を告ければ、哀み哭て病を受、郭淮、孫禮、張郃等を留めて長安を守らせ、其身は洛陽へ上りけり。

○孔明三出祁山

この時吳王孫權は文武の大將を集め、蜀の孔明兩度大軍を興して魏を攻、曹眞を大に破りて魏の國の將士こと〴〵く怖れ震ふ、今已に蜀と交を結うへは、一家の大慶これに過べからずとて

賀を成ければ、早く呉の勢を起して魏を伐玉へと勸る者多し。孫權猶豫して決せざる所に、張昭すゝみ出て申けるは、近ごろ武昌の東山に鳳凰來儀し、大江の中に黃龍出現す、今君の德唐虞に配し、明文武に並べり、早く皇帝の位に卽て其のちに魏を伐玉へ。滿座みな然るべしと一同して遂に四月丙寅の日を擇び、武昌の南郊に壇を築き、孫權を請じて扶け登せ、大禮ことごとく具りて祭の禮了りければ、天下に大赦を行ひ、黃武八年を黃龍元年と改め、父の破虜將軍孫堅を武烈皇帝と謚し、母の呉氏を武烈皇后とし、兄の討逆將軍孫策を長沙桓王と號し、嫡子孫登を皇太子とし、諸葛瑾が子諸葛恪を太子左輔とし、張昭が子張休を太子右弼とす。諸葛恪字は元遜、身の長七尺、折頞廣額にして鬚眉寡し、聲甚だ淸高にして極て聰明に應對を能せしかば、孫權つねに之を愛して幼より傍に侍せしむ。諸葛恪が六歲の時、酒宴の席にて孫權戲て父の諸葛瑾字は子瑜が顏の長を見て、一匹の驢馬を引せて粉を以て馬の面に諸葛子瑜と書ければ、滿座腹を抱て大に笑ふ。諸葛恪幼き心に父の笑はるゝことを患て跪て申けるは、願くは筆を借て二字を添んとて諸葛子瑜之驢と書ければ、諸人みな驚嘆せり。其聰明なること衆に超けるゆゑ、今輔佐として太子に侍せしむ。孫權すでに帝位に卽て顧雍を丞相とし、陸遜を上將軍とし、共に太子を扶て武昌城を守らしめ、自ら建業に回りければ、群臣みな魏を

延が旗も前に見えたり。王雙馬を躍せ大音あげ、魏延走ること勿れ、快く回せと呼はりければ、蜀の勢震ひ怖れて我先にと逃かへる。王雙馬を飛し揉にもうで追ところに、後より手下の勢馳來り、將軍早く回り玉へ、魏延は却て跡に在て御方の陣に火を掛たりと告ければ、王雙後を顧るに火の光天を焦す。扨は誘られたりとて慌ふためき取て回す所に、思ひも寄ぬ山の坡の上より兵一騎喚て蒐出、魏延こゝに在と呼はりければ、王雙大に驚く所を、魏延一刀に斬て落す。魏の勢大將を討れて盡く亂れ、伏勢あらんことを疑て我先に命を扶らんと、蛛の子を散が如く十方へぞ落たりける。此ゆゑに魏延は三十騎の兵を引て後陣に下り、徐々と漢中へ回りける。曹眞は夥しく討れて心の内慚愧する上に、陳倉城より郝昭が早馬きたり、王雙が討れたる由を告ければ、哀み哭て病を受、郭淮、孫禮、張郃等を留めて長安を守らせ、其身は洛陽へ上りけり。

○孔明三出二祁山一

この時吳主孫權は文武の大將を集め、蜀の孔明兩度大軍を興して魏を攻、曹眞を大に破りて魏の國の將士こと〴〵く怖れ震ふ、今已に蜀と交を結うへは、一家の大慶これに過べからずとて

次第々々に退けとて、夜に入ければ金鼓を撃者ばかりを少々殘し留め、常の如く分明に時刻を打せて人ある體に見せ、祁山の陣を引拂て一夜の中に盡く退きけり。魏の陣には曹眞夥しく人馬を討れ、心の内憂ひ苦み、堅く守りて出ざる所に、都より左將軍張郃一軍を引て下着せり。曹眞呼入て對面すれば、張郃が曰、某勅命を承はり軍の樣を窺ん爲に來り候。曹眞が曰、御邊來る時司馬仲達には逢ざりしか。張郃が曰、いま某が來れるは元仲達が料ひ也、路にて承はれば孫禮計を仕損じて御方若干討れぬと、其のち蜀の陣を窺ひしか。曹眞が曰、此ごろ大に打破られ、其後は一人も外に出ず。張郃が曰、某が都を出る時司馬仲達が申しは、蜀の勢兵粮に事を缺たりとも輕々しくは退かじ、魏の勢戰ひ勝時は孔明いつ迄も陣を守り、若魏の勢戰ひ負ること有ば、孔明必ず退き去ん、此乃ち兵家の玄妙なりと云り、試に人を出して窺せ玉へ。曹眞敢て信ぜず、密に人を出して見せしむるに、果して蜀の陣には數十面の旗ばかり立て人ひとりも無、孔明退いて已に兩日を過たりと申ければ、曹眞頭を搔て後悔し、張郃に命じて急に追しむると云ども、遂に其甲斐も無りけり。この時陳倉道には、初より魏延が一軍王雙を支へて居たりしが、孔明ひそかに計を授けしかば、其夜の二更に魏延陣屋を收て國に回る。王雙これを聞て自ら大軍を引率し、勢に乘て二十里あまり追蒐ければ、已に間近く成て魏

大將吳斑、吳懿二手の勢打て出、皈る路を遮り散々に蒐立ければ、魏の勢のこり少に討れ、我先にと逃走り、本陣へ入んとすれば、櫓の上矢間の陰より雨の降如く矢を射出して、蜀の大將關興、張苞すでに陣屋を奪ひとり、拔つれて斬て出ければ、張虎、樂綝又夥しく討れ、皆曹眞が陣に落あつまる。時に一手の敗軍みな燒爛て馳回りければ、之を見るに孫禮が勢なり。共に孔明が計に中り、兵みな亡ぬと告ければ、曹眞驚き怕れ、其後よりは堅く要害に引籠りて一人も出る者なかりけり。蜀の諸大將はこと〴〵く分取高名せずと云もの無、十分に勇み矜て祁山の陣に回りければ、孔明いそぎ人を陳倉道へ遣して密に魏延に計を授け、諸處の陣を收て國に回る。楊儀怪で問て曰、いま御方戰ひ勝て魏の勢みな膽を冷し魂を失ふ、然るに盡く回り玉ふは何ゆゑぞ。孔明が曰、われ軍を出して魏を攻るは我病を敵の知ざる故なり、我病は乃ち兵粮なり、御方の利する所は急に戰を決するにあり、今敵固く守て出合ず、道條塞て兵粮の運送絕たり、我病又發れり、此故に退んと欲す、今魏の勢大に破る、洛陽必ず援の勢あらん、若輕騎を以て我かへる道を襲ば、那時いかゞして回ることを得ん、早く魏の勢の出ざる間に盡く退くべし、我患る者は陳倉道を守る魏延が一軍なり、王雙と相對すれば急々には退き難かるべし、此ゆゑに魏延に計を授て王雙を斬殺さしむ、魏の勢肯て追來らじ、今夜後陣より

告ければ、曹眞これを聞て、卽ち張虎、樂綝を呼で曰、今夜西の山に火燒出ば、蜀の勢ことぐく出て祁山の陣は空虛なるべし、汝二人急に推よせて陣屋を奪ひ取と下知しければ、二人計を受て兵を調へ、樓の上に人を登せて火の燒をぞ窺はせける。此時孫禮は多くの車を山の傍に集置、谷の內に兵を埋伏し、蜀の勢もし車を奪んとて來りなば、一度に打て出て火を掛よとて鳴を靜めて待居たり。其夜の二更の比蜀の大將馬岱三千餘騎を率して、人は枚を啣み馬は口を勒し、直ちに西の山へ馳來りけるに、數千の車重疊して山の如く、車の上に多く旗を挾んで、折節西南の風吹ければ、蜀の兵走り散て南の方より火を掛たりけるに、乾ける柴に火燒付て光天を焦が如なり。孫禮これを見てすはや相圖の火を付たるは、一人も餘さず討取とて一度に咄と出ければ、忽然として後より鼓角天を崩して二手の勢殺到し、眞先に進は蜀の大將馬忠、張嶷なり。孫禮驚き取て回して防んとすれば、又喊を咄と揚て蜀の大將馬岱火の光の中より討て蒐り、三方より攻ければ、孫禮が支度相違して討るゝ者數を知ず。偶命を助る者も創を被り燒爛て這々に逃かへる。見苦しかりける形勢なり。張虎、樂綝は孫禮が敗たるをも知ず、西の山に火の掛りたるを見て相圖の刻限に成ぬとて、盡く兵を引具し蜀の本陣に推よせ、勢に乘て打入けるに、敵一人も見えざりしかば、扨は計に中れるか、早く出よと呼はる所に、蜀の

魏主に從て出て大石山に獵をなす、忽ち大なる虎を獵出して虎怒て魏主の前に飛かゝるを、孫禮馬より下て劒を拔て斬死せり、此に因て用ひられ上將軍に封ぜらる。孔明笑て曰、これは魏の大將わが陣に兵糧の乏からんことを量り、車の上に乾ける柴なんどを稠で兵糧の如に見せ、我奪んとて蒐りなば火を付て燒討にせん爲の計なり、われ平生專ら火攻を用ふ、彼爭か我を欺ことを得ん、我勢車を奪はんとて打出なば、魏の勢虛に乘て本陣を襲べし、敵の計に就て却て計を用んとて、馬岱を呼で申けるは、汝は三千餘騎を引て魏の勢兵糧の車を集置たる處に行て輕々しく其内へは入ず、唯風上より火を懸よ、若火の燒を見ば魏の勢必ず我本陣を襲べし、我まづ馬忠、張嶷におの〳〵五千餘騎を付て本陣の外に伏置、內外より夾んで討んと云ければ、皆計を領して出にけり。次に關興、張苞を呼で曰、魏の勢の掛雙たる陣屋は四方の道々に連れり、今夜西の山に火の起を見ば、魏の勢必ず來て我本陣を攻べし、汝二人は豫め敵の陣近く伏て彼が盡く出るを窺ひ、虛に乘て敵の陣屋を奪ひとれ。又吳班、吳懿を呼で曰、汝二人は各一軍を引て本陣の外に伏せ、魏の勢きたらば其皈る路を塞げとて、手配すでに了ければ、孔明自ら祁山の頂に登り西を望んで坐し居たり。去ほどに魏の細作ひそかに蜀の陣を窺に、兵粮を奪んとて盡く祁山の陣を打出る體に見えければ、急ぎ其由を孫禮に報ず。孫禮又曹眞に

を知れり、久して蜀を破らん者は仲達にて候はん。曹眞が曰、もし蜀の勢退かずんば如何せん。郭淮が曰、ひそかに使を馳て王雙に計を授け、小路のつまり〳〵を堅く守らしめば、蜀の勢兵粮盡て一月の内に退くべし、那時虚に乘て之を追ん。孫禮が曰、某祁山の路に出て隴西より御方の兵粮を運ぶ體をなし、車の上に乾ける柴を積、硫黄焔硝を灌で外に青き布を張、兵粮を載たる車の如くに見せば、蜀の勢もし兵粮につまらば必ず來て車を奪はん、其時四方より火を掛て伏勢を出して取こめ盡く滅べし。曹眞喜び、此計きはめて妙なりとて、孫禮に兵を分與て祁山の西に行しめ、又陳倉道へ人を遣し、王雙に計を授て諸所の道條を塞しめ、郭淮に箕谷、街亭を守らせ、又張遼が子偏將軍張虎を先鋒とし、樂進が子牙門將樂綝を副先鋒として本陣を守らせ、大將の下知を聞て急に打て出よと下知をなす。孔明は祁山の陣に在て毎日戰を催せども、魏の勢固く守て更に出ざりければ、乃ち姜維等を呼よせ、今魏の勢嶮阻を守て出ざるは、我兵粮の盡を料てなり、殊さら陳倉の道條往來通ぜずして、其外の小路より少々運び出すと云ども甚だ以て艱難なり、御方貯たる兵粮一月の用に足ず、如何すべきと議する所に、忽ち告て曰、魏の勢數千の車を以て隴西より祁山の西へ兵粮を運び候、大將は涿郡容城の人に孫禮字は德達と申もの也。孔明問て曰、孫禮はいかなる人ぞ。降參の人あり、答て曰、この人昔し

退ぞかん、その時虚に乗て逃るを追ば、孔明必ず擒とならん。曹叡欣然として曰、卿すでに先見の明あり、何ぞ自ら行て計を成ざる。司馬懿が曰、臣身を惜み命を重ずるにあらず、兵を養ひ調て呉の國の敵を防ん爲なり、呉主孫權自ら王と稱すること久し、近き内に必ず帝位に卽ん、若帝位に卽ば陛下の征伐し玉はんことを恐て、必ず兵を興して攻のぼるべし、臣この故に遠く出ず、少しも御心を苦め玉ふな。時に早馬きたり、曹眞しきりに破れて自ら守ること能はずと告ければ、司馬懿又曰、陛下速に使を馳て丁寧に曹眞を戒め、凡そ蜀の勢を追時も能その虚實を窺ひ、輕々しく重地に入て孔明が計に中ざるの備を成しめ玉へ。曹叡これに從ひ太常卿韓曁を使として節を持て曹眞を戒め、出て戰ふこと無らしむ。司馬懿城外に出て韓曁を送りて申けるは、我この功を以て曹眞に讓る、必ず某が申たりと云玉ふこと勿れ、蜀の勢の退く時此を追掛るに仔細あり、必ず性の躁き人に追しむべからず、輕々しく進まば却て孔明が計に中らん、唯天子の勅命なりと云て能々戒玉へと云ければ、韓曁別れて打起けり。此時曹眞は蜀の勢の攻來んことを畏れ諸將と計を議する所に、太常卿韓曁節を持して勅使たりと告ければ、急ぎ出迎へ、禮了て詔を承はり、退いて郭淮、孫禮と此事を議す。郭淮笑て曰、これ乃ち仲達が見なり。曹眞が曰、この見いかゞ思ひ玉へる。郭淮が曰、これ深く孔明が兵を用ふる法

分て威勢遠近に震ひければ、曹眞後悔すれども囘らず、郭淮、孫禮と相議して洛陽へ急を告。

○孔明遺レ計斬二王雙一

孔明又祁山に出張して、曹眞大將を討れ兵を損じたる由、早馬急を告て援の勢を乞ければ、魏主曹叡いそぎ司馬懿を召て計を問に、司馬懿が曰、臣すでに孔明を退くるの計あり、御方の勢の威を揚武を燿ことを用ひず、蜀の勢をして自然に走らしめん。曹叡喜で問て曰、卿が計いかん。司馬懿が曰、臣さきに陛下に奏して孔明必ず陳倉道より出んとて、城を構て郝昭に守らせ置しかば、案の如く孔明この道より出て通ることを得ず、蜀の兵粮を運送する、此道より通る時は甚だ易して便ありと云ども、今郝昭、王雙が守り緊ければ孔明敢て此道より運ことを得ず、他の細路より運べし、然る時は道路嶮難にして爭か久しく大軍を養ふべき、臣今蜀の軍勢費ところの兵粮を量るに、一月の用意あらん、彼もし兵粮盡る時は必ず引て國に囘らん、蜀の勢の利する所は急に勝負を決するにあり、此ゆゑに御方よろしく險阻を守て出合ず、軍を休て日を送らば、蜀の陣中兵粮に事を缺で自ら退き去べし、陛下早く勅使を馳、曹眞に詔して唯よく諸方の攻口を堅く守り、出て戰ふこと無らしめ玉はば、一月を須ずして蜀の勢自ら

りければ、孔明羽扇を持て一たび招けば、左に馬岱右に張嶷二手に分れて討て蒐る。魏の勢一支もさゝへず三十里ばかり走て跡を顧れば、蜀の後陣に火の手を擧て喊の聲俄に起れり。費耀馬を引回し、すはや相圖の火を付たるは、取て回せよと下知して勢に乗て攻ければ、蜀の勢われ先にと逃わしる。費耀刀を提げ姜維が相圖を違へじとて、馬を飛して已に火を掛たる山ちかく來りければ、谷の内より鼓の聲天に喧しく喊の聲地を動して二手の勢討て出、左に關興右に張苞、大木大石を雨のふる如く投かけ、喚き叫で蒐たりしかば、費耀大に驚き、扨は出抜れたり、早く退けとて山の際より逃んとするに、人馬共に疲れ果て討るゝ者數を知ず。その勢のこり少に打なされて散々に走りければ、向の谷の内より一彪の軍馬かけ出、眞先なるは姜維なり。費耀大音あげ、不忠不孝の賊われ誤て計に中れりと呼はりければ、姜維あざ笑て曰、われ曹眞を擒にせんと思ひしに、思の外に汝を得たり、早く盔を卸で降人に出よ。費耀力疲て叶がたく、是非なく路を奪て谷の中に入、柴を積だる車山の如く重疊して一度に火燒出ければ、後へも退くこと能はず前へも進まず、自ら首を刎ければ、其手の兵こと〴〵く降人となる。孔明勢に乗て晝夜を分たず直ちに祁山に出て陣を取、重く姜維を賞しければ、姜維が曰、某恨らくは曹眞を生取ざることを。孔明が曰、可レ惜大計小用ることをとて、四方に勢を

姜維

姜維費耀と誘く
烟中に追ふ
姜維軍
費耀

ごとく都督に皈せん、萬一敵の詐に遭ば某自ら其科を蒙らん。曹眞大に喜び、忠心を見るに足れりとて五萬餘騎を授しかば、費耀乃ち斜谷の道より進發し、先前の様子を窺はしむるに、其日の申の刻ばかりに蜀の勢出來れりと告ければ、自ら出て戰はんとするに、蜀の勢一戰にも及ばず我先にと逃わしる。費耀これを追て進みければ、蜀の勢取て回して且く戰ひ、又ことごとく引退く。此の如くなること數度に及び、墓々しき戰ひは無して、蜀の勢不時に寄來て、且戰ひ且走りければ、魏の勢五萬餘騎一日一夜氣をつめて更に休こと能はず。次の日の午の下に至ては人馬盡く疲れ、若蜀の大勢攻來らば手痛く戰はんこと成難し、先兵粮を使て相待べしと議する所に、忽然として四面に喊の聲をあげ、鼓角の響天地を崩して、蜀の大勢野に滿山に漫て來りければ、魏の勢皆怕れ驚く。時に蜀の勢の中より大なる旗を擧て一輛の四輪車を推出し、孔明聲を揚て魏の大將に對面せんと呼はりければ、費耀遙に孔明を見て心の中ひそかに喜び、左右を顧て申けるは、今蜀の勢切て蒐らば汝等いつはり負て引退き、敵の後陣に火の掛るを見ば急に取て回して戰へ、自ら援の勢あるべきぞと云ふくめ、自ら刀を横たへて馬を出し、前には敗將いま又羞をも知ずして來れるかと呼はりければ、孔明が曰、汝は何者ぞ、早く退いて曹眞を出せ、申べき事あり。費耀罵て、曹都督は玉葉金枝、何ぞ反賊と出合んと呼は

書に曰、

天水郡姜維百拜、書呈大都督曹麾下。維念、世食魏祿忝守邊城、叨竊厚恩無門補報。昨日誤遭諸葛之計、陷身於巓崖之中、思念老母日久號咷。今幸蜀兵西出、諸葛亮甚不相疑。賴都督聽納忠言、親提大兵而來、如遇敵人可以詐敗。維當在後、可以擧火爲號。先燒蜀人糧草、却以大兵翻身掩之、則諸葛亮可擒也。非敢立功報國、實欲贖其前罪。倘蒙照察、速須來命。

曹眞見了て心喜び、是天われを助て功を成しむる也とて重く使を持成、日を約して使を回しめ、費耀を呼で相議し、今姜維ひそかに御方に志を通じ、我に兵を進めて蜀の陣を攻させ、態と打負て引退かば孔明必ず追來ん、彼その時後陣に火を掛て蜀の勢の兵粮を燒、前後より攻べき間、火の手を見ば又取て回して戰へと云送れり、我これを天の助と思ふ也、早く用意をせよと下知しければ、費耀が曰、孔明智深してよく兵を用ふ、姜維も計多して尋常の及ぶ所にあらず、恐らくは詭の計ならん。曹眞が曰、姜維が母は今魏の境にあり、彼なんぞ久しく蜀に住らん、一旦孔明が計に落て是非なくして從ふ者なり。費耀が曰、都督かる〴〵しく出玉ふこと勿れ、只よく此本陣を守玉へ、某ねがはくは一軍を引て姜維が内應に從ひ、若事成就せば其功をこと

堅固に守りければ、孔明計きはまり、姜維を呼で問て曰、陳倉道は敵強して通難し、別に如何なる計をか成ん。姜維が曰、陳倉の城堅固にして郝昭が守り緊く、今又王雙が助を得て破るべき計なし、某料に此處には一人の大將を殘し留め、山に依水に傍て陣を取せ、又よき大將を擇で街亭の要害を守らしめ、丞相自ら大軍を引て直ちに祁山に出玉はば、某計を用ひて曹眞を擒にせんとて密に計を私語ければ、孔明喜び、此の如ならば大事成んとて、王平、李恢に命じて街亭の小路を守らせ、魏延を留めて陳倉の谷口に陣を張せ、自ら大軍を引て馬岱を先陣とし、關興、張苞を後陣とし、小路を廻て斜谷に出、祁山を指て推よする。此時魏の大都督曹眞は先に司馬懿に功を奪れしことを口惜く思ひ、已に長安に來りてより郭淮、孫禮に命じて東西の關所を守らせ、陳倉城を蜀の勢手痛く攻ると聞て、王雙に一萬餘騎を付て救はしめけるに、王雙荐に戰ひ勝て蜀の大將を討取たりと報じければ、心の内深く喜び、中護軍費耀を權に總軍の先鋒とす。時に谷の間にて蜀の兵を一人生取きたりぬと告ければ、曹眞引出して之を見るに、其人地に跪て曰、某は細間の者にあらず、一大事を申ん爲に來れり、左右の人を退け玉へ、密に申べき事の候。曹眞乃ち縄を解せ近く呼で何事ぞと問に、其人告て曰、某は姜維に從ふ者なり、密に書簡を獻れとて使に參り候とて懐より出しければ、曹眞ひらき見るに、其

行ん。孔明が曰、汝は我先手の大將なり、輕々しく行こと勿れ。大將謝雄申けるは、某ねがはくは行て迎ん。孔明乃ち三千餘騎を付て向はしめ、又誰か二陣に續んと問ければ、大將龔起が曰、ねがはくは行ん。孔明又三千餘騎にて向はしめ、城中より討て出んことを畏れて二十里退いて陣をとる。去ほどに蜀の大將謝雄三千餘騎にて打向ひ、魏の先鋒王雙と馬を交へて戰ひ、いまだ三合ならざるに一刀に斬て落されしかば、其勢散々に逃わしる。魏の勢これを追て進みければ、二陣の大將龔起兵を引て防んとするに、又王雙に斬て落され、蜀の勢こと〴〵く討れしかば、孔明この由を聞て大に驚き、廖化、王平、張嶷を三手に分て防しむ。一番に張嶷馬を乘出しければ、魏の陣より王雙六十斤の刀を舞して出むかへ、戰五六合にして勝負を分たず。王雙心に計を生じ、いつはり負て走りければ、張嶷勝に乘て追かくる。廖化、王平その失あらんことを怕れ、追こと勿れと呼はりければ、張嶷馬を引囘さんとする時、王雙流星鎚を投付たり。張嶷背の正中を打れ鞍の上にうつ伏に壓れければ、王雙急に趕きたる。王平、廖化兵を進めて防ぎ戰ひ、張嶷を救て囘りければ、王雙勢に乘て掩殺し、陳倉城よりも郝昭一度に打て出、夾んで攻ければ、蜀の勢おびたゞしく討れ、張嶷は血を吐て死生を知ず。王雙は二萬餘騎を引て陳倉の城外に陣を張、大小の車に材木を積で四方に柵を結まはし、壕を深して十分

も陷入山海も崩れやすらんと、見るに膽冷く、已に切崖の邊まで推よせ、あはや此城只今微塵に成んと思ふ所に、城中には猶音もせず、一聲の梆子を鳴して三千の兵一度に火矢を射出しければ、梯こと〴〵く火もえ付て、上に在ける蜀の軍勢燒死する者數を知ず。寄手これに驚き怺かねて退かんとする處を、城中より大木大石を投かけ〳〵打ける間、死生不知の者或は手足を燒れ五體を損じて散々にぞ成にける。孔明大に怒り、汝わが梯を燒、われ又衝車の法を用て攻やぶらんとて、諸軍に命じて夜を日に繼で之を造らせ、四面より喊を造り鼓躁して進みける。城中にはこれを見て郝昭兵を下知して多く石を運ばしめ、穴を穿て葛繩を用て之を通し、蜀の勢の近付を待て夥しく投かけしかば、其車こと〴〵く折て微塵になる。孔明又井闌百丈を構へ、弓鐵砲を四方に調て雨の降が如くに放させ、土を運で壕を塡させければ、郝昭又城中に厚き壁を築て之を禦ぐ。孔明又廖化に三千の兵を授け、夜中に地の底を掘て城中へ潛り入しめんとすれば、郝昭又城中に橫截に壕を掘て防ぎけるゆゑ、是も又入ことを得ず。寄手質を替て責れば城中工を替て防ぎける間、いまは兎も角も爲べき樣なくして二十日あまりに及び、孔明心の內憂ひ苦む所に、忽ち早馬きたり、東の方より後攻の勢と覺えて魏の先鋒王雙が旗を指あげ候と告ければ、孔明驚て申けるは、誰か行て之を防ん。魏延すゝみ出て曰、某ねがはくは

る也、ねがはくは能これを思へと呼はりければ、郝昭大に怒り、弓に箭をはげて申けるは、われ前言已に定れり、汝必ず再び口を開くこと勿れ、早々に回れ、我いま汝を射ず。勤祥回て其由を告ければ、孔明怒て曰、匹夫甚だ無禮なり、汝われを輕じて城の堅固なるを恃か、我すでに攻支度一々に備れり、自ら行て蹈やぶらんとて、大軍一度に攻かゞる。

○孔明二出祁山

孔明その地の人を呼で陳倉の城中に軍勢いか程かあると問ふに、答て曰、委くは存じ候はねども三千人には過候はじ。孔明笑て曰、量に是ほどの小城に充滿したる勢なりとも、さまで恐るるに足ぬ敵なり、安んぞ能われを拒ん、救の勢の來ぬ前に一揉に攻やぶれとて、軍中に雲の梯をこしらへ、梯一つに數十人を上せ、四方に板を圍で身を遮り、下には輪を構て車を推が如く、一方に梯百乘を調へて四方より推よせ、城を目の下に直下て諸の軍勢みな短き梯を持て相續き、相圖の鼓を聞て一度に登り入んとす。城中には此體を見て三千の兵火矢を用意し、梯近付ば一齊に放ち出さんと鳴を靜めて待ところに、孔明自ら大軍を驅て鼓を打喊を造て威を助け、梯の上に連珠砲、九霄砲、碗口銃、一窩蜂、大將軍、呂公車なんど云る多くの鐵砲を構て、天地

遠ざかれり、願くは利害を説て降らしめんとて、馬を打て城下に到り、故人勤祥きたれり、門を開き玉へと呼はりければ、城中の勢いそぎ郝昭に告て門を開く。郝昭むかへ入て問て曰、故人なにとて此に來れる。勤祥が曰、われ久しく蜀に事て孔明と軍機を贊く、此ゆゑに上賓の禮を以て重ぜらる、今此に來れるは御邊を作て出て孔明に對面させんが爲なり。郝昭勃然として色を變じて申けるは、孔明は我國の敵なり、我は魏に仕へ、汝は却て蜀に仕ふ、昔は兄弟たりと云へども今は敵なり、必ず再び舌を動こと勿れ、早々に出よと怒りければ、勤祥重て口を開んとするに、郝昭早座を起て櫓に登れり。魏の勢勤祥を馬にのせ城外へ逐出しければ、勤祥堀の邊にて跡を顧るに、郝昭櫓に登て高欄に靠て居たりしかば、鞭を指て、郝伯道なにとて情薄きと呼はりけるに、郝昭答て曰、魏の國の法度は御邊の明に知れる所なり、我國の恩を受ること身に餘れり、一命を弃んと欲す、早く孔明に城を攻させよ、我怖ことなしと呼はりければ、勤祥回て孔明に見え、備に右の趣を語る。孔明が曰、汝再び行て利害を説。勤祥又城下に到り馬を住て大音あげ、郝伯道よく我忠言を聞、汝は乃ち一孤の小城、なんぞ御方の大軍を拒がん、今もし早く降らざるは是愚の甚しき也、もし城やぶれ身亡びば何の益かある、然るに猶迷を執て大漢に順ず、却て膝を屈て魏の逆賊に仕ふ、是天命を知ず、清濁を辨ざ

曹叡字は子全と申ものなり、臣ねがはくは此人を先鋒とし、孔明を生取きたらんと云ければ、曹叡いそぎ王雙を召出し、殿に上せて此を見れば、身の長九尺眼黄にして面黒く、腰は熊の如くにして背は虎に似たり。曹叡笑て曰、朕この大將を得たり、何の患か有んとて遂に虎威將軍前部大先鋒に封じ、錦の袍金の甲を賜ひ、曹眞を大都督に封じければ、曹眞恩を謝し十五萬の勢を率して長安に來り、郭淮、張郃等と會合して諸處の要害を固ける。去ほどに蜀の先鋒魏延兵を引て陳倉道より進みけるが、敵すでに城を構て大將郝昭と云もの楯籠りたりと告ければ、急ぎこの由を孔明に報じ、陳倉道には魏の鎭西將軍郝昭要害に城を構て輕々しく通り難し、不如この道を棄て太白嶺の鳥道を越、祁山に打て出べしと云ければ、孔明が曰、陳倉道の北は街亭なり、若この城を攻落さずんば兵を進め難し、早く攻やぶりて城中の兵粮を我軍の資とせんとて、魏延に命じて數日息をも繼せず攻させけるに、城の構堅固にして少しも弱れる體なかりければ、孔明心怒り魏延を斬て弃んと云ける所に、一人進み出て曰、某不才なりと申せども丞相に從こと年久し、ねがはくは陳倉の城中に入、郝昭を勸て御方に降らしめん。諸人これを見れば部曲の長に勤祥と云もの也。孔明喜で曰、汝いかゞして降らしむべき。勤祥が曰、郝昭は某と同鄕の友なり、昔は一處に在て交を結びしかども、某久しく西川に流落して彼と互に

之所有。若復數年、則損三分之二也。當何以圖敵、此臣之未解五也。今民窮兵疲、而事不可息、事不可息、則住與行勞費正等、而不及早圖之、欲以一州之地與賊持久、此臣之未解六也。夫難平者事也。昔先帝敗軍於楚、當此時、曹操拊手謂、天下已定。然後先帝東連呉越、西取巴蜀、擧兵北征、夏侯授首、此操之失計、而漢事將成也。然後呉更違盟、關羽毀敗、秭歸蹉跌、曹丕稱帝。凡事如是、難可逆見、臣鞠躬盡瘁、死而後已。至於成敗利鈍、非臣之明所能逆覩也。謹表以聞、仰於聖斷。

建興六年冬十一月日　丞相諸葛亮上表

後主劉禪表を見了て、丞相早く大兵を統て賊徒を誅伐せらるべしと宣ひければ、孔明詔を承て三十萬の勢を調へ、魏延を先陣の大將として陳倉道より進發す。境を守る魏の勢この由を聞て洛陽へ急を告ければ、魏主曹叡文武の大將を集めて計を問に、大將軍曹眞すゝみ出て曰、臣さきに隴西を守る、功徴にして罪大なり、慚愧至て深し、いまだ力を竭して忠を攄ること能ず、近比一人の大將を得たり、よく六十斤の刀を使千里の征駝馬に騎て兩石鐵胎の弓を開き、暗に二箇の流星鎚を藏し、百たび發せば百たび中る、萬夫不當の勇あり、乃ち隴西狄道の人に王雙

故知臣伐賊才弱敵強也。然不伐賊、王業亦亡。惟坐而待亡、孰與伐之。是故託臣而弗疑也。臣受命之日、寢不安席、食不甘味、思惟北征、宜先入南。故五月渡瀘深入不毛、幷日而食、臣非不自惜也。顧王業不可偏安於蜀都。故冒危難、以奉先帝之遺意、而議者謂爲非計。今賊適疲於西、又務於東、兵法乘勞、此進趨之時也。謹陳其事如左。高帝明並日月、謀臣淵深、然涉險被創、危然後安。今陛下未及高帝、謀臣不如良平、而欲以長計取勝坐定天下、此臣之未解一也。劉繇王朗各據州郡、論安言計、動引聖人、群疑滿腹、衆難塞胸。今歳不戰明年不征、使孫策坐大遂併江東、此臣之未解二也。曹操智計殊絕於人、其用兵也髣髴孫吳。然困於南陽、險於烏巣、危於祁連、逼於黎陽、幾敗北山、殆死潼關、然後僞定一時爾。況臣才弱、而欲以不危而定之、此臣之未解三也。曹操五攻昌覇不下、四越巣湖不成、任用李服、而李服圖之、委任夏侯、而夏侯敗亡。先帝毎稱操爲能、猶有此失、況臣駑下何能必勝、此臣之未解四也。自臣到漢中、中間期年爾。然喪趙雲陽群馬玉閻芝丁立白壽劉郃鄧銅等、及曲長屯將七十餘人、突將無前五十餘人、賨叟青羌散騎武騎一千餘人。此皆數十年之內所糾合四方之精鋭、非一州之

を養ひ兵粮武具の用意盡く備て、今は師を出して魏を討んと思ふ所に、呉の國より使きたり、早く虚に乘て攻かゝれと催しければ、限なく喜び酒宴を設て諸大將を集めける所に、忽然として一陣の風東北の方より吹通、庭前の松を折ければ、滿座みな興を醒して怕れ驚く。孔明ひそかに之を占ひ、この風一人の大將を失ふ兆なりと云ける所に、鎭南將軍趙雲が子趙統、趙廣兄弟きたれりと報じければ、孔明大に驚き、持たる盃を地上に投すて、嗟趙雲休矣と云て、急ぎ對面しければ、二人拜哭して曰、某が父昨夜三更の比老病重して遂に亡ぬ。諸軍これを聞てみな聲を放て哭きければ、孔明足を翹て曰、今歳不レ想、喪二許多將佐一、いま趙雲又死す、是國家一つの棟梁を失ひ、我一つの臂を墜せるが如しとて痛く哀み、成都に入て朝に奏せしむ。後主この由を聞玉ひ聲を放て哀み哭き、朕むかし趙雲が扶くるに有ずんば必ず亂軍の内に殺さるべしとて、卽時に謚して大將軍順平侯に封じ、成都の錦屏山の東に葬り、廟堂を建て四時祭しめ、趙統を虎賁中郎に封じ、趙廣を牙門將として父の墳を守らせける。時に近臣奏して曰、諸葛丞相すでに軍馬を分撥し、楊儀を使として再び出師の表を上る。後主乃ち御案の上にて開き見玉ふに、其表に曰、

先帝深慮下漢賊不二兩立一、王業不中偏安上。故託レ臣以レ討レ賊也。以二先帝之明一量二臣之才一。

ひ、馬を雙て内に入重く諸軍を勞ひ、周魴が髪を切たるを見て、汝が忠心の深き、髪を切て此大事を成、功名まさに竹帛に記べしとて卽ち關内侯に封じ、酒宴を設て賀を伸ければ、陸遜が曰、いま曹休やぶれて魏の將士膽を冷す、早く使を以て蜀の後主に書簡を送り、御方の威風を表して共に好を結び、孔明に魏を攻させせんと云ければ、孫權げにもとて急ぎ書簡を成都に送る。

○孔明再上二出師表一

蜀の建興六年秋九月、魏の都督曹休石亭の戰に負て大軍數を知ず討れ、兵粮武具夥しく失ひければ、心の内懼れ慙て洛陽へ逃のぼり、氣の患に因て背に癰疽いでき、立處に死ければ、魏主曹叡勅して厚く葬らしむ。其のち司馬懿も兵を收め夜を日に續て都に上りければ、諸大將問ひて曰、いま曹休やぶれて諸軍大に亂る、足下しばらく留まりて國の境を治め玉はず、取ものも取あへずして早く上り玉ふは何事ぞ。司馬懿が曰、われ量に御方呉の勢に破られぬと聞えば、孔明必ず虛に乘て長安へ攻來らん、隴西もし急あらば誰か能救もの有ん、我は蜀の敵を防ん爲に回りたりと云ければ、諸大將あざ笑て司馬懿を怯とぞ嘲りける。この時呉の使蜀の成都に入つて書簡を呈しければ、後主劉禪早く漢中に行て孔明に報ぜさせらる。孔明は日久しく軍馬

呉の勢賊を作て喚き叫で揉だりしかば、曹休にはかの事にて防べき様なく慌て馬に飛乗、火石道を望んで奔ければ、向うより呉の先鋒徐盛大軍を引て攻きたり、路を横ぎりて戰ひけるに、魏の勢前後に度を失ひ、死する者數を知ず、降る者一萬餘人。たま〳〵命を扶かる者も馬を乘すて物の具を棄て右往左往にぞ逃たりける。大將曹休は呉の大勢に圍れ、命を棄て戰へども逭るべき樣なかりし所に、一手の勢賊を吶と造て山の後より蒐出、眞先に進は建威將軍賈逵なり。呉の勢の圍を破りて曹休を救ひ出し、馬を飛して走りければ、曹休深く慙愧し、我御邊の諫を用ずして却て浩る禍に逢り、幸に今御邊の救を得たり、後れ馳の者を待揃へんと云ければ、賈逵が曰、片時も早く此道を出玉へ、若呉の勢に大木大石を以て截塞がれなば、一人も生て囘る者あるべからずとて、揉にもんで馳たりけるが、呉の勢の急に追來んことを怖れ、林の陰山の間に多く旗ばかりを立て疑兵を爲て走りけり。案の如く徐盛跡を慕て飛が如に追蒐しが、路の難處に多く旗を立たるを見て伏勢あらんことを疑ひ、兵を引て囘りける。是に因て曹休不思議の命を助り、無事にこそは囘りけれ。一方の軍やぶれたるを聞て司馬懿滿寵等も盡く引退きければ、陸遜十分に利を得て魏の陣に棄置たる牛馬車仗軍資器械をこと〴〵く運び取せ、數萬の降人を引具して武昌城に囘りければ、呉主孫權自ら城を出て遠く迎へ、御蓋を傾けて陸遜を覆

るゝことも有んとて、大將張普を先鋒として呉の陣に向はしむ。張普馬を飛して眞先に進み、賊將早く降れと罵ければ、呉の先鋒徐盛きゝもあへず槍を提げて出むかへ、二三合戰ふと見えし。張普打負て引退き、曹休に見えて徐盛が勇あたるべからずと云ければ、曹休が曰、われ奇兵を出して勝べし、汝は薛喬と各三萬餘騎を率して石亭の南北に埋伏せよ、明日辰の刻にわれ千餘騎にて打向ひ、詐負て退くべし、然る時は呉の勢必ず勝に乘て追ひ來らん、敵を思ふ圖に北山の前まで帶きよせ、相圖の鐵砲を鳴す時一度に出て四方より圍なば、徐盛必ず擒にすべしと云ければ、張普と薛喬と各計を受て打向ふ。陸遜は朱桓、全琮二人を召て申けるは、魏の大軍ことく〳〵く石亭に陣を屯す、汝二人は今宵おの〳〵三萬の勢を引て、密に敵の後に廻り火を付て相圖をせよ、我自ら大軍を驅て大に進み、前後より攻やぶるべし。朱桓、全琮計を受、左右に分れて暮方より廻りければ、其夜の二更の比山路のさしも難所なる所にて魏の伏勢に出あひ、大將張普敵とは知ず馬をのさ〳〵と出して誰人の勢ぞと問ける所を、朱桓一刀に斬て落し、散々に蒐たりしかば、魏の勢のこり少に討れ四方へ颷とぞ散にける。朱桓まづ相圖の火の手を揚させ、魏の陣に攻かゝれば、全琮も魏の陣に廻ると石亭の北なる山路にて魏の大將薛喬に出あひ、勢ひに乘て打て蒐りしかば、薛喬が勢一たまりも支へず我先にと本陣へ逃入けるを、

周魴髪を截て曹休を詐る

曹休

めんとす、汝いかなれば無用の舌を搖して諸軍の心を慢しむる、汝兵を東關に進めて却て我功を奪はんと巧む、われ爭が汝に欺るべきやとて、引出して斬て弃よと下知しければ、諸將告て曰、いま大軍を興していまだ戰を交ざるに、大將を斬玉ふこと不吉なり、且く死を宥して後日に沙汰し玉へと諫しかば、曹休これに從ひ賈逵を留めて陣屋を守らせ、自ら兵を進めて東關へぞ向ひける。周魴ひそかに此由を聞、喜で申けるは、曹休もし賈逵が諫を用ひば吳の爲に利あらじ、今賈逵兵權を削られ曹休が勢たゞ一處より進む、是天御方を助る也とて、密に皖城へ使を馳て陸遜に告知せければ、陸遜申けるは、前面は石亭の山路にして伏勢を用ふべし、早く濶みに陣を張て魏の勢を欺とて、徐盛を先鋒として眞先に進ましむ。この時曹休は自ら大軍を率し、周魴を先に打せて行けるが、馬上にて問て申けるは、向の山はいかなる處ぞ。周魴が曰、石亭と申ところなり、この處に陣を取玉へ。曹休これに從ひ、大軍を分配して石亭に陣を取、兵粮武具の車山の如に運びあつむ。次の日斥候の兵まへに吳の國の勢と覺て多少は知ず山に沿て陣を取たりと告ければ、曹休大に驚て曰、周魴われに向て吳の勢は此邊に一騎も無と申けるが、何とて此の如なるとて急に周魴を呼しめければ、軍士來り告て曰、周魴は今朝數十人の手の者を引て行方しらず逃去れり。曹休甚だ後悔して曰、われ老賊が計に中れり、然れども何ぞ怖

曰、近比御邊の書を得て陳る所の七箇條、こと〴〵く理にあたれるを以て天子に奏聞し、大軍を三手に分て進發す、もし吳を破る時は御邊の功小ならず、我も亦恩爵を得ん、われ元より御邊を疑はずと云ども、御邊素より計深を知て、若くは詭ならんと疑ふ者あり。周魴之を聞て大に哭き、傍なる人の劍を拔て自ら首を刎んとしければ、曹休あわてて推止む。周魴申けるは、某が陳る所の七箇條恨むらくは肝膽を吐出すこと能はざることを、然るに今却て疑を含玉ふは必ず吳人の間諜ならん、我忠心は天の照覽にあり、願くは死して忠を露んとて又首を刎んとす。曹休驚て抱き住め、われ戲なり、少しも心に掛玉ふなと云ければ、周魴劍を取て髻を切落して申けるは、我忠義の心少しも詐なくして將軍に對す、將軍いかなれば戲をなし玉ふぞ、我いま父母より得たる髮を切、しばらく首にかへて心中の誠を表すと云ければ、曹休いよ〳〵疑はず、酒宴を設て共に計を定めしかば、周魴わかれて出にけり。其のち建威將軍賈逵來て曹休に見て曰、某料に吳の勢は盡く皖城に屯すべし、都督必ず輕々しく進み玉ふこと勿れ、某が兩方より夾んで攻るを御待候へ。曹休怒て申けるは、これ如何なることぞ、汝われを欺て此度の功を奪はん爲か。賈逵が曰、某きく、周魴髮を切て誓を爲たりと、此みな詐なり、昔し背を斷て慶忌を刺殺さんとせしが如し、必ず信とし玉ふな。曹休色を變じて曰、われ今兵を進

顧雍が曰、この大事は陸遜にあらずんば叶ひ候まじ。孫權げにもとて軈て陸遜を輔國大將軍平北都元帥に封じ、御林の軍馬を總て王事を攝せ、文武の百官こと〴〵く其命に從はしめ、自ら鞭を執て重じければ、陸遜恩を謝し二人の大將を擧て左右の都督とし、三手に配て三路の敵を迎んと申ければ、孫權乃ち吳郡の朱桓字は休穆を左都督冠帶奮武將軍嘉興侯とし、又錢塘の全琮字は子璜を右都督綏南將軍錢塘侯とし、三手に分て進發せしめ、自ら遠く送りければ、陸遜了に江南八十一州幷に荊湖の勢を興して七十萬餘騎、晝夜引も切ずぞ打たりける。朱桓計を獻じて申けるは、曹休は金株玉葉にしてこの囘の大任を司る、眞に智勇の良將にあらず、今きく周魴に出ぬかれて深く重地に入りと、元帥もし攻玉ひなば破れんこと必せり、彼破るゝ時は二條の逃路あり、左は夾石右は桂車なり、この二つの路は皆山際の細徑にて、險峻なること鳥も翔がたし、某ねがはくは全琮と谷の間に伏て大木大石を積で路を截塞ぎ、魏の勢を一人もなく擒にせん、曹休もし擒とならば長く驅て大に進み、手に唾して壽春城を取ん、然る時は次第に兵を進めて、此乃ち天下を掃蕩するの計なり、元帥よく察し玉へと云ければ、陸遜が曰、われ自ら妙計あり、汝みだりに言こと勿れとて、諸葛瑾等に江陵を守らせて司馬懿が勢を防しむ。去ほどに魏の都督曹休は大軍を引て已に皖城まで來り、周魴出迎て見えければ、乃ち問て

の計を進む、早く兵を興して吳を滅べしと奏しければ、魏主曹叡表章を案の上に開き、司馬懿を召て之を議す。司馬懿が曰、この計きはめて理あり、事もし偽なくんば吳の國必ず滅べし、臣ねがはくは兵を引て馳下り、曹休を助て吳を伐ん。曹叡然るべしとて急に兵を催しければ、一人すゝみ出て曰、吳の國の人は反覆常ならず、輕々しく信じ難し、必ず兵を誘ん爲の詭計ならん。諸人これを見れば河東襄陵の人に建威將軍賈逵字は梁道と云ものなり。司馬懿が曰、御邊よく吳の虛實を知玉ふか。賈逵が曰、われ邊庭に居て素より知れり、孫權武昌に在て西は江夏に從ひ、東は廬江を取、つねに兵を進めて攻來んとす、況や周魴は智謀の深き大將なり、必ず御方に降るまじ、我これを以てその詐ならんことを知。司馬懿が曰、御邊の言も理に當れり、此時節も捨がたし、兎角某と共に楊州に下り、曹休と相議して宜に從ひ玉へとて、魏主に奏して兵を三路に分つ。皖城へは曹休を都督として大軍を指遣し、東關へは賈逵を大將として前將軍滿寵、東皖の太守胡質二人を副將として陽城より向しめ、江陵へは司馬懿自ら本部の勢を率して東安より進發す。此時吳の孫權は武昌の東關に在て文武を集めて議して曰、いま鄱陽の太守周魴ひそかに計を用て七箇條の利害を說、魏の曹休を出拔、深く難處に帶き入て伏勢を以て擒にし、禍の根を絶んとす、今魏の勢三路より攻來る、汝等いかなる高見かある。

通俗三國志　巻之四十一

○陸遜石亭破曹休

蜀の建興六年は乃ち魏の太和二年なり。夏六月に司馬懿街亭の戰に利を得て蜀の勢を追退け、兵を收て都に歸ければ、魏主曹叡限なく喜び、蜀を攻るの計を議するに、司馬懿答て申けるは、蜀いまだ攻べからず、方に今天道亢災必ず兵を出すべからず、若深く敵の地に入て難所に支へられば、如何して戰ふことを得ん、是敗を取の道なり。曹叡が曰、孔明再び出ばいかゞせん。司馬懿が曰、某すでに計を設たり、孔明もし重て出ば、昔し韓信が陳倉道を渡し例に效て兵を進むべし、此ゆゑに臣さきに一人の大將を擇で陳倉の道に城を構て守らしむ、孔明再び出るとも容易は通り得じ、城を守る大將は太原の人に雜霸將軍郝昭字は伯道と申ものにて、身の長九尺、よく弓を射て計深く、忠義の心凜然たり。曹叡喜び郝昭を鎭西將軍に進めて堅く要害を守らしむる所に、忽ち楊州の司馬大都督曹休が方より表を上て申けるは、吳の鄱陽の太守周魴字は子魚と云もの魏の臣たらんことを願ひ、密に使を通じて七箇條の利害を說、吳を破

明に問て曰、丞相いま數十萬の兵あり、再び又魏を伐玉はんか。孔明が曰、大軍さきに祁山、箕谷に屯する時、敵は小勢にして却て御方を破る、全く軍は兵の多少によらず、唯これ主將の心にあり、今われ兵は減し大將を省き、罰を明にして過を思ひ、變通の道を計較すべし、若然らざる時は兵多しと云とも何ぞ用るに足ん、今日より諸人遠く國家の爲を思ふ者は務て吾闕たる所を責よ、もし我過を責るの心ある時は、事定つべく賊滅べし、功を成こと足を翹て待べしと云ければ、費褘を初として聞人みな其德を稱す。費褘その後暇を請て成都に回りしかば、孔明は漢中に在て軍民を撫養し、兵粮武具を調へて又魏を伐んと用意をなす。

後主見了て宣ひけるは、勝負はこれ兵家の常なり、丞相は國の大老、なんぞ輕々しく官を貶すべきとて、勅使を下して舊の官職に復さんとし玉ふを、侍中費禕すゝみ出て、臣承る、古より國ををさむるの人は、法を正を以て重しとす、法もし行はれざる時は何を何てか諸人を服せん、丞相敗績して自ら職を降る、是まさに法を正なり、若又舊職に復し玉ふ時は道の正きに非と諫めしゆゑ、後主これに從ひ、孔明が職を貶して右將軍に任じ、丞相の事を行て兵を總督さしめ玉ふ。費禕漢中に行て勅命を傳へ、孔明丞相の職を降りければ、費禕心の内に孔明が羞んことを思ひ、乃ち賀して申けるは、蜀中の民みな丞相の西城より多の百姓を移し玉ふことを喜び候。孔明色を變じて曰、これ如何なる事を云玉ふぞ、普天の下漢の民に非と云ことなし、然れども國家の威力いまだ足ずして百姓みな豺狼の口に苦む、一夫も死すること有ば是乃ち吾罪なり、御邊われを賀するは却てわれを罵辱しむるに同じ。費禕申けるは、近ごろ丞相天水の大將姜維を得玉ふと承る、天子も之を喜玉ふ。孔明大に怒て曰、いま兵やぶれ軍還て曾て一寸の地をも得ず、是大なる罪にあらずや、量るに一人の姜維を得たればとて魏に於て何の損かある、西城の民を移すと云ども爭か街亭の敗失を補ん、御邊の詞たゞ吾を賀するのみにあらず、これ諂の佞言なりと云ければ、費禕震ひ怕れて退き出づ。次の日又孔

惜むべしと雖も、其罪のがれ難しとて了に斬しむ。須臾ありて武士其の首を獻りければ、孔明これを見て悲しみ哭いて地に倒る。蔣琬問て曰、いま馬謖罪を正して誅を受く、却て痛く悲み玉ふは豈遲からずや。孔明が曰、われ馬謖を憐で哭に非ず、彼もと我に從て恩義恰も父子の如し、今法を犯して國刑を被る、安んぞ悔ること有ん、思ふに先帝白帝城に在して、危に臨み、密に我に向て馬謖は言過二其實一、不レ可二大用一と宣へり、今その金言たがはずして斯る禍を仕出せり、是ゆゑに己が不明を恨て先帝の明を追想し、覺ず淚を流したりと云ければ、一座の人々皆袖をぞ濕ける。馬謖今年三十九歲、時に建興六年夏五月なり。孔明乃ち馬謖が首を陣陣へ普く示し、其のち線を以て屍に縫付、棺を具て厚く葬り、自ら祭を設て慇懃に執行ひ、馬謖が一家の老小を恤み育て月々俸祿を給ひけり。今度の合戰夥しく國用を費して、却て徒に引回りぬれば、罪の歸する所一人にありとて、孔明自ら丞相の職を降り、蔣琬を成都に返して天子に表を奏せしむ。後主劉禪ひらき見玉ふに、表に曰、

臣本庸才、叨竊二非據一、親秉二旄鉞一以勵二三軍一、不レ能二訓レ章明レ法、臨レ事而懼一。至レ有二街亭違レ命之闕、箕谷不レ戒之失一、咎皆在レ臣。授レ任無レ方。臣明不レ知レ人、臨レ事多レ闇。春秋責レ帥、臣職是當、請自貶二三等一、以督二厥咎一。臣不レ勝二慚愧一、俯伏待レ命。

る。馬謖が曰、某力を盡して戰ふと云へども、魏の勢雲霞の如なりしゆゑ了に斯の如く亂れたり。孔明が曰、汝妄りに詐ること勿れ、若早く王平が諫をきかば、豈此禍あるべけんや、今軍を敗り大將を失ひ、城を陷され地を棄しは皆これ汝一人の過に依り、汝すでに軍法を犯、必ず我を怨ること勿れ、汝が家の妻子をばわれ月々に俸祿を與て育べし、少も心に掛ること勿れとて、武士に命じて引出さしむ。馬謖泣て申けるは、丞相つねに某を以て子の如くし玉ふ、某又丞相を以て父の如くす、某が罪まことに大なりと云ども、願は丞相古帝舜の鯀を殛して禹を用ひ玉へる義を思ひ玉はば、某死すとも黃泉の下に恨なかるべしとて、聲を揚て大に哭く。孔明も涙を流し、われ本汝と義兄弟に同じ、汝が子は卽ち我子なり、我安ぞ用ひざらん、汝速に軍法を正せ、必ず妻子を以て心に掛ること勿れと云ければ、武士共了に馬謖を轅門の外に引出す。三軍これを見て皆哀み慟く所に、成都より蔣琬來り、この體を見て甚だ驚き、暫く先切こと勿れ、我内に入て丞相に見ゆべしとて、帳中に入て孔明に申けるは、むかし楚國に得臣を殺して文公よろこぶ、今天下いまだ定らざるに智謀の臣を戮玉ふ、豈惜まざらんや。孔明が曰、古の孫子よく制㆓勝於天下㆒者、これ法を用ること明なるに依て也、いま四海わかれ爭ひ、干戈一日も休ざるに、又法度を廢て正さずんば、何を以てか賊を討ん、馬謖まことに

く感嘆し、先帝つねに趙雲が徳を稱し玉ひしが、今果して斯の如しと云て彌厚く敬ひける。
時に馬謖、王平、魏延等歸りぬと報じければ、孔明まづ王平を呼で曰、汝馬謖と共に街亭を守り、何ぞ之を諫ざる。王平が曰、某再三諫め爭ひ、路に當て陣を取逆茂木を引て固く守らんと申ければ、參軍怒て某が無禮なるを責、この故に某五千の勢を分て山を離るゝこと十里あまりにして陣を取と申せども、魏の勢雲霞の如く四方を圍み、密きこと鐵桶の如なりしかば、某兵を引て十度あまり攻入んとするに、却て魏の勢に蒐ちらさる、次の日山上の御方ことごとく土の如に崩れ瓦の如に解て、降人に出る者數を知ず、某小勢にて守りがたく、魏延に援を求むる所に、半途にて又魏の大勢に取巻れて谷の中へ推こめられ、死戰してのがれ出ければ、早陣屋を敵に奪はる、是に依て列柳城へ入んとするに路にて高翔に出合、又兵を三手にわけ魏の陣を劫して街亭を取んと向ふ所に、魏延、高翔敵の大勢に圍れたり、某力を盡して敵を掃ひ、陽平關の破れんことを畏れて急に退いて關を守れり、某が諫ざるにあらず、丞相信なりとし玉はずば各部の諸將に尋て某が忠義を知玉へと云ければ、孔明又馬謖を呼に、馬謖自縛して帳前に跪る。孔明色を變じて曰、汝幼より兵書を讀で熟戰策を諳ず、われ丁寧に告戒め、街亭は是わが喉なりと云ければ、汝一類の命を掛て此重任を乞求たり、今如何なる詞かあ

日々に盛にして呉蜀自ら滅べし、是豈算に勝ざらんやと云ければ、曹叡實にもと悟て司馬懿に問ふ。司馬懿答て、これも又公論易安の理也と云ければ、曹叡即ち孫資が諫に從ひ、郭淮、張郃を留めて長安を守らせ、諸所に大將を殘して洛陽へ歸りけり。孔明は漢中に入て諸大將を集むるに、趙雲、鄧芝いまだ回らざりければ心怪み、關興、張苞に命じて迎へしめんとする所に、忽ち回り來れりと告ければ、孔明喜で自ら諸將と共に出迎ふ。趙雲これを見て急ぎ馬より飛下、地上に拜して敗軍の將なんぞ勞二丞相遠接一と云ければ、孔明心の内に自ら慙、急に扶起し手を執て申けるは、吾眼明ならず、賢愚を知ずして此の如く敗れたり、諸方の大將みな敵に追れて兵を損じ物の具を失ひしに、御邊一人は易々と回りたるは如何なる故ぞ。鄧芝告て曰、趙雲たゞ一騎跡に殘りて敵を防ぎ玉ひしゆゑ、某兵を引て徐々と退ぞき、敵大將を討れて逃かへりしゆゑ、軍資什物一つも殘さず運び來れり、豈兵を損ふこと有んやと語りければ、孔明大に稱嘆し、眞の大將軍なりと云て本陣に回り、庫内の黃金五十斤を出して趙雲に贈り、絹一萬疋を以て其手の兵に施しければ、趙雲固く辭してこれを受ず。三軍いま尺寸の功なく、某等みな罪を逃れ難し、然るに却て此恩賞を被らんこと丞相の賞罰明かならざるに似たるべきか、先しばらく庫内に返し納め、寒氣の甚しきに至て諸軍勢に分與玉へと云ければ、孔明深

り、遺れる百姓を召て事の由を問に、答て曰、さきに孔明兵を諸處に分てこの城には只二千五百の勢あり、武將とては一人もなく、外に伏の勢もなし。又武功山の土民來て、さきに關興、張苞各三千の兵あり、只山を轉て鼓を打喊を造しばかりなりと告ければ、司馬懿天を仰で長歎し、我つひに孔明に及ばずと云て各所の要害に守りの兵を殘し、長安に回りて魏主に見ゆ。

○孔明揮涙斬馬謖

司馬懿すでに長安に回りければ、魏主曹叡限なく喜で曰、いま又隴西の諸郡を得は皆これ卿が力なり。司馬懿奏して曰、いま蜀の勢退くと申せども尙漢中に陣を取、臣ねがはくは天下の兵馬を率て蜀を平げ、盡く根を絕べし。曹叡しかるべしと同ければ、列座の内より一人すゝみ出て曰、臣一つの計あり、吳蜀の仇を滅さん。諸人これを見れば尙書孫資なり。曹叡問て曰、汝いかなる計かある。孫資が曰、むかし太祖武帝自ら漢中に入て張魯を平げ玉ふ時、危して後に濟り、常に群臣に向て、南鄭の地は眞に天獄の中、斜谷の路は五百里の石穴、これ武を用るの地にあらずと宣へり、若いま天下の兵を興して蜀に向はば、吳必ず虛に乘て攻來ん、陛下ねがはくは慮玉へ、不如大將を分て諸方の要害を固く守らせ、內百姓を安んずる時は、中國

るかと呼はりければ、蘇顒震怖れ、又こゝにも趙雲あり、我生ること能はずと云て迯けるを、趙雲一槍に刺殺し、殘る勢を八方へ切ちらして徐々と退く所に、又一手の勢追きたる。是乃ち郭淮が大將萬政と云もの也。近々と寄ければ、趙雲馬を取て囘し、御方の勢に向て申けるは、汝等は三十里ゆいて相待べし、我は只一騎この敵を討やぶるべきぞとて、只一人道の傍に立。これを見て魏の勢敢て進ざりければ、日すでに暮に薄て趙雲又馬を囘せば、郭淮も大軍を引て追きたる。萬政乃ち郭淮に見え、趙雲が英雄なほ昔に易らず、此ゆゑに輕々しく追ずと告ければ、郭淮が曰、彼は只一騎なり、何ほどの事か有べきぞとて、大軍を引て追かけしかば、萬政又數百騎にて眞先に進み、林の中を通る時後より大音あげて、趙雲こゝにありと呼はりければ、魏の勢みな驚て馬より落るもの百餘人、のこる者共は嶺を越て逃のびたり。萬政是非なく畏ろしながら刀を提げて打向ひければ、趙雲一矢に萬政が盔の纓を射ける。萬政この矢に膽を冷し澗の底へ落たりけるを、趙雲此を殺んともせず、今われ汝が命を助く、早々に囘りて郭淮を出せと云ければ、萬政からき命を扶り、這々に逃わしる。是に依て趙雲心閑に漢中に囘り、曾て一人一騎をも損せざりけり。曹眞、郭淮は何の仕出したることもなければ、敵の棄たる三郡を取て己が功とす。司馬懿は敵すでに遠く退きたりと聞て敢て追ず、自ら一軍を引て又西城に來

護衛使龍驤將軍關興が旗を指あげ、山谷響を交へて勢の多少をも見わけねば、魏の勢馬物の具を打すて四角八方に散亂せり。張苞、關興は敢て敵を追ず、道に棄たる軍器粮草を撫ひ集て皆漢中へ引回る。此時曹眞は孔明が退く由を聞、いそぎ兵を調て追んとする所に、山の後より喊を造り鼓角を鳴して蜀の勢討て出、姜維、馬岱眞先に進んで散々に蒐たりしかば、曹眞驚き急に退て回らんとする時、大將陳造と云もの已に馬岱に斬殺さる。曹眞これを見て膽魂を失ひ、鼠の如くに竄たりしかば、蜀の勢は皆心靜に漢中へぞ回りける。趙雲、鄧芝二人は兼て箕谷の路に伏て居たりけるが、孔明令を傳て漢中に退ぞかしむ。鄧芝申けるは、われ等今しりぞかば魏の勢必ず追かくべし。趙雲が曰、われ先一軍を引て谷の中に埋伏すべし、御邊は吾等が名の旗をあげてしづ〳〵と退き玉へ、我跡より護送せんとて、鄧芝しづ〳〵と引回る。魏の都督郭淮は孔明が退く由を聞大將蘇顒を呼て曰、蜀の趙雲と云ものは世に雙びなき英雄なり、汝よく心を小て追かけよ、若輕々しく進ば却て敵の計に落べし。蘇顒が曰、都督大軍を以て跡に續き玉はば、某必ず趙雲を擒にすべしとて、前部三千餘騎の精兵を率し、さしも險き箕谷の細路を飛が如に追掛ければ、向に紅の旗見えて趙雲と云文字あり。蘇顒この旗を見て退んとする所に、傍なる山の上より一彪の勢をめいて蒐出、一人の大將槍を横たへて馬を躍せ、趙雲を知た

農夫
農夫

童子
孔明
童子
司馬懿

孔明は常に事を愼み、險阻なればとて少しも油斷せず、今四方の門を開きたるは必ず伏勢を以て伐んとの計なるべし、我もし輕々しく進まば其計に落さるべし、汝いかでか之を知んとて、三方の寄手こと〴〵く退きければ、孔明これを見て手を撫て大に笑ふ。諸人驚き怪で其ゆゑを問に、孔明が曰、仲達は名將、いま十五萬の勢にて寄きたる、彼元より我平生事を愼み險阻なればとて油斷せざるを知、いま此の如なる體を見て伏勢あらんことを疑ひしもの也、われ今險阻を賴にあらず、已ことを得ずして此計を用ひたり、司馬懿定めて北なる山路より退くべし、われ已に關興、張苞を伏おきたりと云ければ、諸人拜伏して曰、丞相の玄機鬼神も之を測り難し、某が心を以ては、敵の來るを見る時は必ず城を棄てて走るべし。孔明が曰、われ只二千あまりの兵あり、若城を棄て走りなば忽ち仲達に生取るべし、この故に計を以て彼が心を疑はせたりとて、即時に西城の百姓を盡く漢中に移し一齊に引取ければ、天水、南安、安定の軍民陸續して來りけり。司馬懿は兵を退け武功山の小路を望て囘りける所に、忽ち山の後に鼓を打て喊を造る。司馬懿大に驚き二人の子を顧て、我もし早く退かずんば必ず孔明が計に當るべしと云ける所に、早蜀の勢討て蒐り、右護衛使虎翼將軍張苞と云旗を指擧ければ、魏の大勢散々に亂れ、甲を棄戈を落して走る所に、又山の後に鼓の聲喊の聲天地を崩して蜀の勢殺出し、左

顧るに、大將こと〴〵く諸方へ分つかはして一人も在あはず。只わづかなる文官ばかり在て、先に從へ來れる五千餘騎も已に半を分て兵粮を運せたりければ、二千五百ばかりの士卒ぞ城中に殘りける。魏の大軍雲霞の如くに來ると聞て、人皆色を失ひあきれたる體なりしかば、孔明自ら櫓に上て望み見るに、寄手の軍勢三方より攻きたる。孔明すべき樣なく、俄に一つの計を案じ出し、即時に下知を傳て城に立たる旗を伏させ、兵を盡く城内に隱し、一人も動こと勿れ、聲を高して物がたりすること勿れとて、城の四門を打開き、每門に兵二十人を百姓の如く出立せて道を掃ひ水を洒しめ、敵たとひ近付とも少しも動こと勿れと云て、自ら華陽巾を戴き鶴氅を被て、二人の童子を左右に伴ひ、琴を攜へて高櫓に上り、欄干によりて香を焚、端然として坐しければ、魏の先陣この體を見て早く司馬懿に訴ける。司馬懿あざ笑てまことにせず、自ら馬を飛して馳きたり、遠々として望み見るに、孔明果して城樓の上に坐し、香を焚琴を調て笑へる容掬しつべく、左に寶劍を持右に玉麈尾を捧て童子二人相したがひ、城の門大に開けて二十餘人の百姓共首を低て地を掃ひ、傍若無人の形勢なりければ、司馬懿心の內深く疑ひ、急ぎ中軍に馳回りて後備を先手とし、北なる山路に向て退きければ、次男司馬昭笑て曰、これは孔明手下に勢なきゆゑ斯る態を成て人を惑なるべし、父なにゆゑに退き玉ふぞ。司馬懿が曰、

外に驚き玉ふぞ。孔明が曰、われ此繪圖を見るに守るべき要道を棄て山の頂に陣をとる、若魏の大勢四方を圍で水を汲の路を塞ば、一日の内に戰はずして亂るべし、街亭もし破れなば我いかゞして國に回らん。楊儀が曰、某不才なりと申せども願くは行て馬謖に代ん。孔明乃ち陣取の法を教へ已に打起ところに、早馬來て街亭も列柳城も盡く破れて御方多く討れたりと告ければ、孔明これを聞て大に嘆き、大事去矣、これ我過なりと云て急に關興、張苞を呼よせ、汝二人は各三千餘騎を引て武功山の小路に行、もし魏の勢來らば必ず大に討こと勿れ、只鼓を鳴し賊の聲を揚て疑兵をなし、敵の心を驚しめよ、然らば戰はずして敵自ら走るべし、其時之を追こと勿れ、只敵の盡く退くを待て陽平關に回り來るべし。次に又張翼を呼び、汝は一軍を引て早く劍閣の道を造れ、我この道より退き回らんと云て、密に觸を成て國に回る用意をなさしめ、馬岱、姜維を殿と定めて先山際に伏置き、御方の勢の退き了るを待て其のちに引回れと云て、又馬忠を呼よせ、汝は兵を引て態と曹眞の陣に攻かゝれ、然らば彼怕れて追來らじとて、又天水、南安、安定の三郡へ人を遣し、官吏軍民を移して漢中に入しめ、手わけ已に定りければ、自ら五千餘騎を引て西城縣に到り、處々の兵粮を運で漢中に送らしむる所に、追々人走り來り、司馬懿自ら十五萬の勢を引て此所へ攻來ると云て騒ぎければ、孔明色を失ひ左右を

やかに曹眞と兵を揃へて追討に攻玉へと云ければ、郭淮城を出て囘りけり。司馬懿又張郃を呼で曰、曹眞、郭淮わが全く大功を立んことを妬み、列柳城を取て己が功に具んとす、我ひとり功名せんと思はざれども、是倖にして勝ことを得たり、我量るに魏延、王平等敗軍を引て必ず陽平關を守るべし、もし輕々しく攻かゝらば孔明必ず後より來らん、兵法にも歸師勿レ掩、窮寇莫レ追と云へり、若急に追かけなば却て敵の計に落べし、吾いま小路より密に蜀の勢の後に廻り、彼が輜重をこと〴〵く奪べし、汝は山路を經て箕谷より進め、吾自ら斜谷の敵に當るべし、若蜀の勢わしるとも盡く討んとすること勿れ、只その半途を討て蒐ちらさば、馬物の具兵粮の類こと〴〵く奪べしと云ければ、張郃計を受て出迎ふ。司馬懿乃ち兵を揃へ、今われ直ちに斜谷より進まば、中道必ず西城に到ん、この西城は山そばの小縣なりと申せども、蜀の兵粮を多く貯へたる所にして、三郡通路の總口なり、若この城を取ば三郡再び得べしと云て、申耽、申儀を留めて列柳城を守らせ、自ら大軍を率して西城を望んで進發す。此時に孔明は馬謖を街亭に遣して後より猶心の内安からざる所に、忽ち街亭より王平が使來り、陣取の繪圖を獻る。孔明ひらき見て前なる案をはたと打、大に驚て曰、馬謖匹夫わが軍を陷坑に落入しむ、早晩必ず長平の禍有ん、急ぎ代の大將を遣べし。長史楊儀が曰、丞相いかなれば以ての

敵はいづくに在ぞと窺ところに、忽然として鐵砲ひゞき、是を合圖に四方八面鯨の聲地を動し火の光天を焦して、魏の伏勢こと〴〵く起り、おつ取こめて餘さじと揉だりければ、魏延、高翔のこり少に討れ、出んとすれども叶はざる所に、山の坡より鯨を咄と造て一手の勢斬て入、これ乃ち王平なり。魏延、高翔を救ひ出し、直ちに走て列柳城に囘らんとすれば、傍なる山陰より一手の勢かけ出、指上たる旗に魏の副都督郭淮と書付たり。是元來曹眞と郭淮と祁山の前に在て孔明を防ぎけるが、街亭すでに破れぬと聞て司馬懿一人が功名と成んことを恐れ、列柳城を取て己が手柄とせん爲に兵を引て來れる也。この時蜀の勢こと〴〵く疲れければ、郭淮が新手にしたゝか討れ、殘る者共も痛手を負て又戰ふべき樣なかりしゆゑ、魏延つひに王平、高翔と陽平關をぞ守りける。郭淮は蜀の勢を討ちらして心の內に喜び、左右の者に向て申けるは、われ街亭を得ずと云ども今列柳城を攻取たり、是功司馬懿に劣ずとて已に城中へ入んとすれば、俄に櫓の上に鐵砲を鳴して夥しく旗を指あげ、眞先なる一面の大旗には平西都督驃騎大將軍司馬懿と書たり。郭淮大に驚き、城の上を見れば司馬懿自ら櫓にのぼり、前なる高欄に凭て打笑ひ、郭淮何とて來ること遲かりしぞと呼はる。郭淮心の內甚慙愧し、我すでに仲達に及ばずと思ひ、內に入て對面す。司馬懿が曰、いま街亭やぶれたれば孔明定めて走るべし、御邊すみ

まり來りければ、忽ち喊を吶と造て魏の伏勢四方より起り、左に司馬懿右に司馬昭引包で攻ければ、魏延命を棄て散々に攻戰ふ。

○孔明智退㆓仲達㆒

魏延すでに司馬懿が大勢に取こめられ、大半討れて危ところに、喊の聲地に響て一手の勢馳來る。是乃ち蜀の牙門將軍王平なりければ、魏延救の來るを見て我又生たりと云て王平と一手に成、力を振て戰ひしかば、魏の勢亂れて逃わしる。魏延、王平兵を收め急に我陣に回らんとすれば、早魏の勢入かはりて色々の旗共風に飜へり、申躭、申儀二手の勢透間もなく殺出しければ、王平、魏延又大に破れ、列柳城に走て高翔と一手に成んとす。是時右將軍高翔、街亭すでに破れぬと聞て一萬餘騎を率し、御方を救んとて出けるが、途中にて魏延、王平に出合、戰の樣を尋るに、三箇處の陣みな司馬懿に取れたりと告ければ、高翔が曰、斯ては叶ふまじ、魏の勢今日の軍に勝傲て、今夜は定て油斷すべし、早く推よせて其怠れるを劫し、再び街亭を取返すべしとて、日すでに暮ければ魏延まづ兵を引て街亭に推よせたるに、敵一人も出合ず。是は敵の計ならんかと心の内に疑をなし、輕々しく進まざる所に、高翔も後陣を率して出きたり、

まき、水を汲路を止たりける。蜀の軍勢山の頂より望み見るに、魏の大勢山に漫り野に滿て旌旗天を掩ひ、隊伍嚴整なりければ、いまだ戰はざる先に盡く膽を冷す。大將馬謖すは蒐れとて紅の旗を搖しけれども、互に顏を見合せ一人も動ざりしかば、馬謖怒て自ら大將二人を斬ころす。士卒これに怕れて是非なく山を下て討て蒐ると云ども、魏の勢湛然として動こと無れば、了に叶ずして又山上へ逃のぼる。馬謖事の危を見て只山上の陣を守り、偏に外の援を待。王平は十里西にありけるが、魏の勢山を圍だりと聞て急に後を攻んとて打起ければ、魏大將張郃大勢にて路を取きり、散々に攻戰ふ。王平力を盡して十餘合に及びけるが、入かはる勢なければ戰ひ屈して引退く。此に因て山上には救の勢も來らず水を汲路も斷て、辰の刻より戌の下まで兵粮を使べき様なかりければ、陣中疲れ亂れて夜半の比山の南に在ける者共一度に山を下て魏に降參したりしが、司馬懿こと／＼く之を殺し、扨は山上亂れたりと見るぞ、火を掛て攻上れとて四方より喚き叫で蒐りければ、馬謖とても遁れぬ所と思ひ、兵を一手になし、山の西より咄と下りければ、司馬懿わざと路を開て是を通し、張郃跡に順ひ追討に攻て三十里あまり來りける所に、忽ち鼓の聲響て蜀の勢打て出、魏延眞先に馬を飛して馬謖を救ひ、張郃に打て蒐ければ、張郃人馬つかれて散々に走る。魏延勝に乘て追かけ、街亭を取返さんとて五十里あ

の故に破り易しと申なり。司馬懿喜て曰、もし蜀の勢山の頂にあらば、此天われを助くる也、自ら行て窺はんとて、衣服を更め十騎ばかりを引て出けるが、今夜は月の光朗に照しければ、山の四方を打巡て能々窺ひ、左右に向て申けるは、今敵要道を棄て絶地に陣を取、やぶらんこと掌に在とぞ喜びける。馬謖は山の上より遙に敵の來るを望み、あざ笑て曰、魏の勢命あらば來て山を圍こと無るべし、若來て山を圍ば我一人も殘さず討取ん、汝等もろ〳〵の將士、もし魏の勢來る時山の頂に紅の旗を搖さば、一度に四方より斬て降れとて拳を握て相待ける。司馬懿はよく〳〵其邊を窺ひ、本陣に囘て問て曰、山を守る蜀の大將はいかなる人ぞ。一人答へて曰、馬良が弟に馬謖と申もの也。司馬懿笑て曰、これ庸愚の才なり、一鼓して破りつべし、孔明よく計を用ふれども却て人を知ず、是等の者を大將として何事をか誤ざるべきとて、張郃を呼て問て曰、街亭の邊に別に蜀の勢は無きか。張郃が曰、山を離ること十里ばかりにして蜀の大將王平と云もの陣を取て候。司馬懿が曰、汝一手の勢を引て王平が來るべき路を取截、われ申耽、申儀に二手の勢を付て山を圍せ、まづ水を汲路を塞ば山上の勢みな戰はずして亂るべし、其時虛に乘て此を伐ば、街亭念なく攻とるべきぞとて、次の日早天に張郃まづ兵を引て王平が來る路を取きり、司馬懿自ら大軍を驅て喊の聲天地を動し、山の四方を百重千重に取

だも事に臨で我と計を議し玉ふ、汝いかなれば命を用ひざる。王平が曰、參軍もし山の頂に陣を取玉はば、五千餘騎を分て某に付玉へ、某は山より西に陣を取て犄角の勢をなし、魏の勢山を圍ば某後より之を破るべしとて議論時を遷す所に、忽ち其邊の百姓亂躁で魏の勢來れりとひしめきければ、王平五千餘騎を引て出んとす。馬謖怒て、汝すでに吾命を用ず、我敵を破て後丞相の前にて罪を正すべきぞと云ければ、王平つひに山を下り、十里西に陣を取、くはしく繪圖に寫して早く孔明にぞ訴ける。馬謖は王平が諫を聞ず山の頂に陣を取、敵もし來らば勢に乘てかさより落さんと待ところに、右將軍高翔と鎭北將軍魏延と孔明の命を受、列柳城の邊に兵を揃へ、街亭の勢を扶と告ければ、いよ／＼怕るゝ所なく今や來ると待居たり。この時司馬懿は孔明さだめて街亭には守を置まじと思ひ侮り、次男司馬昭を遣して行前の樣を窺はしむ。司馬昭兵を引て先手に進ければ、張郃告て申けるは、街亭には山の上に蜀の大勢陣を取たり。司馬昭回て父に見え、其趣を告ければ、司馬懿大に驚て曰、孔明は恰も神に通ぜり、我いかでか及ぶべき。司馬昭笑て曰、父なにとて驚き玉ふぞ、某量るに街亭を取こと掌の内にあり。司馬懿が曰、汝いかなる計かある。司馬昭が曰、某向に自ら行て窺ひ見るに、路條には固めたる勢もなく柵逆茂木の備もなし、只側なる山の上に一軍わづかに陣を取、こ

り出、まづ郿城を攻取べし、若この城を取ば長安を破らんこと掌の内にあり。趙雲、鄧芝計を受すでに箕谷に出ければ、孔明は姜維を先手とし、斜谷より出て郿城を取んと打起たり。去ほどに馬謖、王平二人は二萬五千餘騎を率し、街亭に行て地形を見定め、馬謖笑て申けるは、丞相は何とて疑の心多き、量るに此山深き細路を魏の勢いかでか來るべき。王平が曰、然りと云どもこの五つに分れたる路の總口を固めて陣を取、大木を伐て柵を結、久く守るの計を成ん。馬謖が曰、この側なる山は四方みな斷絶たるが如くにして、樹木多く茂りたり、是天われを助玉ふ也、この頂に陣を取ん。王平が曰、いや〳〵若五路の總口に陣を取ば、魏の勢一人も通ることを得じ、もし又山の頂に陣を取ば、魏の勢來て四方を圍み、兵を分て進む時は如何して防玉はん。馬謖あざ笑て曰、汝まことに女子の見なり、兵法にも凭レ高視レ下、勢如レ劈レ竹と云り、若魏の勢來らば一人も生て囘る者あらじ。王平が曰、吾つねに丞相に從ひて陣に臨毎に、到る所丞相つぶさに教玉へり、今此山を見るに此絕地なり、若魏の勢來て四方の麓を圍み、水を汲路を塞ば、山上の御方戰はずして亂るべし。馬謖が曰、汝みだりに舌を動こと勿れ、孫子も置二之死地一而後生と云り、あはれ魏の勢來て水を汲路を塞げよかし、御方の兵命を棄て戰ひ、一人以て敵の十人に當るべし、吾幼より兵法を學で深く計に通ず、丞相

邊の地形陣取の様を委く繪圖に書寫し、早馬を以て我に見すべし、凡そ事よく謹んで行へ、必ず容易にすること勿れ、若よく〳〵守て危こと無時は、長安を取第一の功なり、戒レ之戒レ之と云ければ、二人拜辭して打向ふ。孔明心の内に馬謖、王平が萬一失あらんことを怕れ、右將軍高翔を呼よせ、街亭の東北に當て一つの城あり、之を列柳城と號す、汝この處に向ひ、一萬餘騎を引て城外に陣を取、街亭もし危こと有ば兵を率して之を救へと云ければ、高翔命を受て出にけり。孔明心の内更に安からず、高翔は張郃が對手に不足なりと思ひければ、大將魏延を召て申けるは、汝手下の勢を率し街亭の後に行て陣を取、敵もし來らば討て出て御方を救へ。魏延が曰、某は已に先手の大將を承りぬれば、一陣に進んで敵を破ることは萬死と云とも辭すべからず、今又街亭の後に指向て安閑の處を守らしめ玉ふは如何なるゆゑぞ。孔明が曰、いま汝を以て街亭を救しめ、陽平關の守りとす、此乃ち大都督の職なり、何ぞ安閑の處と云ん、必ず容易にすること勿れ、先手に進んで敵を破るは偏將軍裨將軍の職なり、汝よく〳〵心を小て吾に代りて街亭を守れと云ければ、魏延欣然として出にけり。孔明少し心を安んじ、趙雲、鄧芝を呼で申けるは、いま司馬懿大將軍として兵を用ふ、尋常の敵にあらず、汝二人共に一軍を率し、箕谷に出て疑兵をなし、或は戰ひ或は退き、敵の心を驚しめよ、我大軍を引て斜谷よ

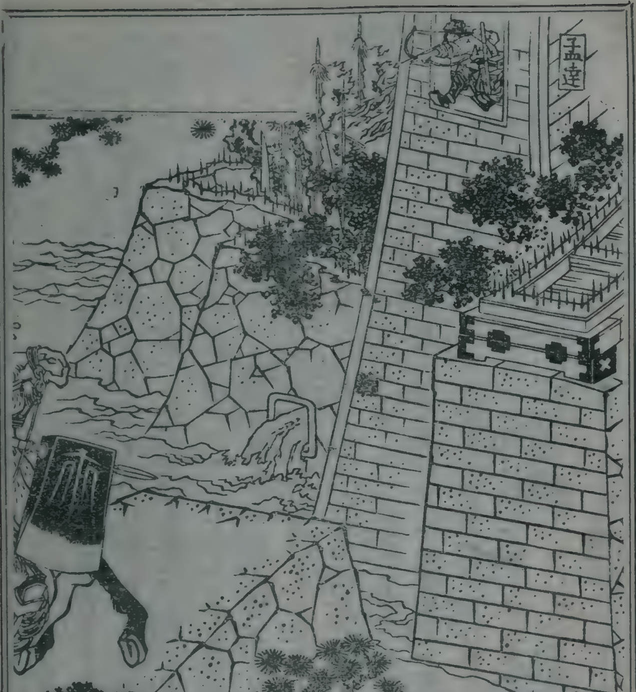
騎の勢を揃へ、此ところへ攻來り候と語りければ、孔明大に驚て曰、孟達が討れしは今更惜に足ず、司馬懿大軍を引て出來らば、必ず先街亭を取べし、街亭は我喉なり、若この處を取れては我十日も此に住ること能ず、誰か行て之を守らん。參軍馬謖が曰、某ねがはくは行て守らん。孔明が曰、街亭は我喉なり、重きこと泰山の如し、萬一失ある時は御方こと〴〵く亡べし、汝は元より計に通ずと云ども、此地は城郭とても無、さまで險阻にても有ざれば守ること甚だ難し。馬謖が曰、某幼より兵法を學で已に此年に及べり、量に街亭一つを守り得ずんば某を用て何にかし玉はん。孔明が曰、街亭の北は第一の要害なり、若この處を破らるる時は我喉を絶なり、況や司馬懿は等閑の輩に有ず、先鋒張郃は世に雙びなき勇將なり、汝怕らくは守ること能はじ。馬謖が曰、司馬懿、張郃は扨おき曹叡自ら來るとも、某なんぞ之を怕れん、若失あらば某は云に及ばず一類を誅し玉へ。孔明が曰、軍中には戲言なし。馬謖が曰、ねがはくは軍令狀を獻らん。孔明これに從ひ、軍令狀を受取、いま汝に精兵二萬五千餘騎を授く、又一人の副將を付べし、共に計を合せて敵を防げとて牙門將軍王平を召出し、我素り汝が平生事を謹で輕々しくせざるを知、この故に浩る緊要の地を守らしむ、必ず心を小て怠ることなく、要道の所を擇で陣を取、敵を一人も漏すこと勿れ、若陣を取定めば早く其

辛毘に守らせ、若蜀の勢よせ來らば奇兵を以て戰はしめん、是萬全の計なるべしと云ければ、張郃が曰、都督は是勢を引て何くへか向ひ玉ふ。司馬懿が曰、われ本より秦嶺の西に街亭とて一つの細路あるを知れり、傍に列柳城とて一つの城あり、此二處は漢中の喉に逼れり、孔明いま曹眞が計なきを侮て定めて此處に用心の勢を置じ、吾御邊と進んで先街亭を取ば、陽平關へ程近し、孔明もし街亭の要害を取れて兵粮の路絶ば、隴西の諸郡守り難を知て必ず漢中に回るべし、其時われ精兵を諸處の小路より出し、兵粮運送の路を壘斷せば、一月の內に蜀の兵ことごとく餓死すべし。張郃實にもと悟、都督の妙計たれか能及ぶべきと云て地に拜伏しければ、司馬懿申けるは、しかれども孔明は孟達が類の者にあらず、御邊先手に進んで必ず輕々しくすること勿れ、宜しく山西の路に沿ひ遠く斥候を出して敵の伏勢を窺ひ、能々計を合せて進むべし、若怠ること有ば必ず孔明が計に逢べきぞとて、檄文を馳て曹眞に計を告げ、出て戰ふこと無らしむ。此時孔明は祁山の陣に在て諸大將と孟達が事を相議し、必ず司馬懿が手に殺さるべしとて人を出してその消息を聞しむるに、其人回り來り、司馬懿道を急て八日が內に新城に推よせければ、孟達にはかの事にて防べき樣なかりし上、申耽、申儀、李輔、鄧賢等こと〴〵く城を開て魏の勢を引入しゆゑ、孟達つひに亂軍の內に討れたり、今司馬懿長安に出て二十萬

○仲達計取街亭

去ほどに魏主曹叡は長安に御幸して潁州陽翟の人に辛毘字は佐治と云ものを軍師とし、涿郡容城の人に孫禮字は德達と云ものを護軍とし、五萬の精兵を二手に分ち、行て曹眞を援しむ。司馬懿は二十萬騎の勢を引て長安の關より外に陣を取、先鋒張郃を呼て申けるは、吾平生御邊の忠勇なるを知、これに依て天子に奏して先手とす、今蜀の敵を破ることは容易の事にあらず、孔明元より當世の英雄にして兵を用ふること神通を得たり、天下の人たれか之を怕れざらん、今大軍を引て祁山に出、その勢甚だ大なり、然れども曹眞が計なきを侮てさまでの用心をもせず、數度の戰に打勝て諸軍の心みな傲り怠り、却て吾召返されて向ふことを知ず、我よく此邊の地理を考るに、山谷險難の細路十餘箇所あり、孔明は常に萬づ愼深して苟も造次に事を行ず、危からざるを見て其のちに行ふ、我もし孔明に替て魏を攻ば、先子午谷より直ちに長安へ攻入べし、孔明これを知ざるには有ず、愼ふかき者なる故、險阻なればとて賴とせず、是ゆゑに斜谷より出て郿城にかゝる、もし郿城を取ば必ず兵を二手に分て一手は箕谷に向ふべし、此二箇處は檄文を馳て曹眞に郿城を守らせ、固く守て出合ず、箕谷の路をば孫禮、

徐晃


孟達

に喜び、孟達が首を洛陽の市に曝して微塵に碎かせ、申耽、申儀に官を加へ司馬懿が手下に屬へ、李輔、鄧賢に新城、上庸を守らせければ、司馬懿は其より長安に赴き、城外に兵を殘して自ら入て魏主に見ゆ。魏主曹叡近く召よせ、朕一時の不明誤て敵の間諜に當り、卿を久しく黜たり、之を悔れども及ず、今孟達謀反を興す、若卿が力にあらずんば兩京こと〴〵く破るべしと云ければ、司馬懿申けるは、臣宛城に在て兵を集る所に、申耽ひそかに孟達が企を告知す、此に因て天子に奏して後馳向はゞ、事延引して惡かりなんと思ひ、勅命をも受ず、早早に推よせ、八日が内に馳著て了に孟達が首を得たり、若延引に及ばゞ必ず孔明が計に落入候はんとて、孔明が孟達を戒る書簡を出しければ、曹叡ひらき見て深く喜び、汝が才古の孫吳に超たり、孔明ふかく汝を怕る、今より事の急なるあらば、朕に告るまでも無よろしきに從て料ふべしとて、金作の斧鉞一對を賜ければ、司馬懿恩を謝して曰、臣今勅を受て孔明を破る、願くは一人の大將を擧て先手とせん。曹叡が曰、卿たれをか用ふべき。司馬懿が曰、河南の張郃字は儁義と申もの今右將軍の職にあり、願くは此人を用ん。曹叡笑て曰、朕が心本より此人を用んとすとて、卽時に張郃を大先鋒としければ、司馬懿長安を出て孔明を防ぐ。

り、急に壕の橋を挽ければ、徐晃大音あげて、反賊孟達早々に首を渡せと呼はりて、喊の聲をぞ揚たりける。孟達いそぎ弓を取て兵ど射るに、其矢あやまたず徐晃が額を射透しければ、馬より倒に落る所を、城の上より弩をつるべ放つ。其矢雨よりも繁かりしかば、魏の勢亂れて退きけるを、得たり賢と一度に門を開て討て出、四方を望み見れば、司馬懿が大軍雲霞の如に出來る。孟達天を仰で哀み嘆き、果して孔明の量る所に違ずとて、城門を密く守り力を盡して防ぎ戰ふ。右將軍徐晃は額の矢瘡重して其日の晩方に死ければ、柩を具へ都に送て葬しむ。時に魏の太和二年正月なり。次の日孟達矢倉より望み見るに、魏の大勢城の四方を圍で密きこと鐵桶の如くなれば、心の內驚き怕れて安からざる所に、忽ち城外に二手の勢馳きたる。旗を見れば申躭、申儀なり。孟達救の勢なりと見て城中より門を開て出ければ、案に相違して申躭、申儀大音あげ、反賊孟達快く刀を受よと云まゝに、勢に乘て攻かゝる。孟達驚て急に城中へ囘んとすれば、此間共に一大事を計りし李輔、鄧賢と云もの櫓に上て雨の降が如に矢を放ち、われ已に城を開て魏に降れりと呼はりければ、孟達力を失ひ路を尋て走る所を、申躭急に追かくる。孟達囘し合せて戰ひけるが、氣つかれ馬弱て了に申躭に討れ、手下の勢こと〴〵く降人となる。司馬懿城中に入て人民を安んじ、先早馬を以て天子に奏聞するに、魏主曹叡大

は先手に進まん。司馬懿大に喜び、徐晃を先鋒とし、二人の子を後備とし、自ら中軍を守て飛が如に馳ければ、路にて孟達が使を捕へ、孔明が回書を捜し出して事の由を拷問するに、その使孔明と孟達と此間往復せし事を有の儘にぞ語りける。司馬懿馬上にて孔明が孟達を戒る書を披き見て大に驚き、世間の能者見る所みな同じ、わが玄機早く孔明に知れたり、幸に此使を捕ふ、是天子の洪福なり、孟達必ず計なかるべしと云て感嘆して已ず、夜を日に繼で路を急ぐ。此時孟達は新城に在て金城の太守申儀、上庸の太守申耽と日を約して事を起んとて、日夜に計を議しければ、申耽、申儀は兵を揃へ、魏の討手の勢向ひ來らば内應せんと待蒐たり。孟達いまだ兵粮の用意備ざりければ、敢て事を起さゞる所に、忽ち參軍梁畿來り、司馬懿が下知を傳て兵を催促しければ、孟達が曰、われ不日に勢を揃へ長安にて出合べし、司馬都督いつか長安へ向ひ玉はん。梁畿が曰、司馬都督は已に宛城を打起て長安へ出玉へり、太守速に跡より來り玉へ。孟達心の内しすましたりと喜び、梁畿を送り出して軈て申耽、申儀に此由を報じ、司馬懿すでに長安へ出たれば我いよ／＼怕るゝことなし、明日は大蜀の旗を指擧、初めて事を起し、諸方の勢を集て洛陽へ攻入べしとて相議する所に、一人走り來て曰、誰とは知ず馬烟を立て大勢此所へ來り候。孟達大に驚き矢倉に上て望み見れば、眞先に右將軍徐晃が旗あ

達を欺て生捕候はんとぞ申ける。司馬懿これを聞て手を以て額を撫て申けるは、これ乃ち天子の洪なる福なり、今孔明が大軍祁山に在て御方こと〴〵く膽を冷す、是に依て天子長安に御幸なる所に、孟達又謀反を起し虚に乗て洛陽を取んとす、萬一いま我を召出し玉はずんば、洛陽、長安一度に破れん、今孟達ひそかに孔明に內應す、我まづ之を破らば、孔明必ず心を寒して自ら退き去ん。司馬師が曰、しからば早く表を上て天子に奏し、勅を受て後退治し玉へ。司馬懿嘆じて曰、いま天子に奏して其のちに打起時は、路遠して一月を過べし、然る時は孟達が用意こと〴〵く具ん、彼みな險阻を守て城郭を固せば、吾たとひ百萬の勢ありとも急には中々やぶり難からんとて、卽時に兵の手分を定め、一日に二日の路を打て新城へ向ひけるが、孟達が心を安んぜん爲に先參軍梁畿と云者を新城へ遣し、われ天子の勅を受兵を起して孔明を破る、早く其邊の勢を集め我旗下に來るべしと觸送り、大軍あとに付て路を急ぐ。已に打起て二日と申すに、山中より一手の勢蒐出たり。是魏の右將軍徐晃が長安へ赴く勢なり。司馬懿が來を見て怪で問て曰、天子すでに長安に御幸して都督と共に孔明を防ぎ玉ふ、今都を指て上り玉ふは如何なる故ぞ。司馬懿耳を附て密に低語き、今新城の孟達謀反を起し、虛に乘て都を取んとす、吾まづ行て之を擒にすと云ければ、徐晃が曰、その儀に候はば某ねがはく

り。父の傍に在て問て曰、父いま何を嘆き玉ふぞ。司馬懿申けるは、汝が輩安ぞ大事を知ん。司馬師が曰、天子の用ひ玉はぬを嘆き玉ふな。司馬昭が曰、近き內に必ず召出し玉ふべし。司馬懿大に驚き、何ぞ料ん我家に又麒麟兒を出さんとはと云も果ざる所に、忽ち天子より勅使あり、節を捧て來れりと告ければ、急ぎ迎へ入て勅命を受。軈て宛城諸路の勢を集けるに、一人外より走り來り、一大事を告申さんと云。司馬懿ひそかに何事ぞと問に、答て申けるは、某は金城の太守申儀が手下の大將なり、此ごろ新城の太守孟達俄に謀反を起し、上庸の太守申躭と我主人申儀とを呼で、吾は元より蜀の大將たりしが已ことを得ずして魏に降る、文帝の時は重く我を用ひ玉ひしが、今曹叡位に卽て後は、他國の者なりと云て芥の如に輕んず、今孔明大軍を引て攻きたり、夏侯楙を破り曹眞を追ちらして、魏の君臣こと〴〵く膽を冷す、三郡すでに歸順して勢破竹の如し、長安旦夕に破るべし、我いま天理に順て本に皈り、此處の兵を率して直ちに洛陽を攻取、內外より心を合せて孔明に力を添なば、魏を滅こと目前にあり、汝等われに從ふべきかと云ければ、申躭、申儀心中にはいかゞと思ひながら、彼が害せんことを怕れ詐て之に從ひ、各城を固く守て日を定めて事を起す、然れども申躭、申儀、李輔、鄧賢みな無二の心ありて蜀に仕へんことを思はず、若早く討手を向られ候はば此者共を語ひ、孟

適承ニ鈞敎一、安敢少怠。切謂ニ司馬懿之事一、達以爲必不レ懼也。宛城離ニ洛城一約八百里、至ニ新城一一千二百里、若司馬懿聞ニ達擧レ事、須レ表ニ奏魏主一、往復即一月間之事也。達城池已固、諸將亦與ニ三軍一皆在ニ深險之地一、司馬懿便來、達何懼哉。丞相寬レ懷惟聽ニ捷報一。

孔明これを見て地に抛すて足を翹て大に嘆き、孟達必ず司馬懿が手に死せんと云ければ、馬謖申けるは、なにとてさほどに嘆き玉ふぞ。孔明が曰、兵法に攻ニ其不レ備、出ニ其不意一と云へり、孟達いま司馬懿たとひよせ來るとも、路の程遙なれば必ず一月をも過んと云、魏主曹叡すでに司馬懿を用て大將軍とす、然る上は寇ある時は卽ち除く、何ぞ君に奏することを用ん、司馬懿もし孟達が謀反を聞ば、十日より內に路を早めて速に馳行ん、其時孟達いかゞして之を防んや、必ず手捕にせらるべしと云ければ、諸將みな理に服す。孔明又書簡を封じ孟達を深く警て、いまだ事を起さずんば必手下の人にも知しむること勿れ、若人に泄さば必ず命を失はんと書て急に使を囘しける。此時司馬懿は官を罷られて後久しく宛城に閑居して居たりけるが、孔明兵を起して魏の勢こと〴〵く破れぬと聞、天を仰で長く嘆ければ、二人の子あり、兄を司馬師字は子元、弟を司馬昭字は子尙と云。兄弟共にその志大にして飽まで兵書を明めた

るは、量るに曹叡とても何ぞ怕るゝに足ん、忽ち長安へ攻入て擒にすべし、丞相なにをさ程に驚き玉ふぞ。孔明が曰、われ何ぞ曹叡を怕るべき、我平生患る者は司馬懿一人なり、今幸に孟達御方に内應せんとす、司馬懿もし召出されなば此事必ず破るべし、孟達は司馬懿が對手に有ず、事あらはれなば忽ちに生取るべし、孟達もし亡る時は魏を討こと成がたし。馬謖が曰、しからば急に書簡を遣し、孟達に心を付て油斷なき樣に警め玉へ。孔明これに從ひ、夜を日に續で途を急げとて、乃ち其使に書簡を渡す。孟達は新城に在て孔明が返事を相待ところに、使回りて書簡を出しければ、封を開て之を見るに、書に曰、

近得レ書、足レ知下公忠義之心不上レ忘二故舊一、吾甚爲二喜慰一。公若成二此大事一、即漢朝中興第一之功也。然極宜二謹密一不レ可二容易託一レ人。雖二兄弟妻子一亦難レ保也、愼レ之戒レ之。近聞、魏叡復詔二司馬懿一、起二宛洛之兵一、若聞二公擧一レ事、必先至矣。須二萬全隄備一、勿レ視二爲等閑人一。吾猶懼レ之、公請詳察。

孟達見了てあざ笑ひ、世みな孔明を疑の心多き人なりと申すが、今これを以て知に足りと云ければ、使者告て曰、しからば再び書簡を送て孔明の心を安んじ玉へ。孟達これに從ひ、又書簡を以て孔明に答ふ。孔明これを得て披き見るに、其書に曰、

急に呼入てその故を問ば、李豐が曰、某こゝに來て喜を申す。孔明が曰、いかなることぞ。李豐が曰、昔し孟達が蜀を背て魏に降りしは已ことを得ざる故なり、其時は曹丕深く之を愛して大將の才ありと稱し、常に金銀珠玉を與へ、輦を同して出入し、散騎常侍に封じて新城の太守とし、上庸金城をも惣守らしめ、西南の軍務を盡く彼に任す、曹丕すでに死して曹叡位に卽て後は甚だ之を輕んじて、剩へ諸の大將そねみ疾んで害せんと計る、この故に孟達が心日夜に安からず、手下の大將を集て申けるは、我は元來蜀の舊臣、魏の臣と成ことは已ことを得ざる故なり、今義に仗て本に報ぜんとて使を以て某が父の許へ書簡を送り、早く此趣を丞相に申せ、我志の程は昔日五路の兵を起せし時丞相よく知玉へり、丞相すでに祁山に出玉ひて魏の諸大將こと〴〵く氣を失ふ、若すみやかに長安を攻玉はば、我自ら新城、金城、上庸の勢を起し、直に洛陽を攻取て、不日に天下を定べしと云送れり、此ゆゑに某いま使を伴て來り候と語りければ、孔明手を打て限なく喜び、我いま外より攻るに孟達又内より助ば、天下再び興るべしとて、其使を召出し厚く持成て恩賞を給ふ所に、忽ち早馬はせ來て曰、魏主曹叡自ら大軍を引て長安に御幸し、又司馬懿を召返して平西都督に封じ、兵を集めて共に蜀の勢を防しむると沙汰仕り候と告ければ、孔明これを聞て大に驚き、首を低て色を失ふ。參軍馬謖申け

玉はば、諸軍命を用て敵必ず退くべし、若自ら御幸ならずして他の大將を用ひ玉はば、幾度戰ふとも御方勝こと候はじ。大傅鍾繇すゝみ出て曰、凡そ大將たる者その智人に過る時は必ず能人を制す、孫子も知レ彼知レ己、則百戰百勝と云へり、臣推量するに曹眞よく兵を用ふと申せども、孔明が對手に不足なり、願くは一人を薦て孔明を防しめん。曹叡が曰、卿は是國の太老、なん人を進て朕が心を安んずべき。鍾繇が曰、さきに孔明軍を起さんとして此人の御方に在ことを畏れ、間諜の計を以て流言をなし、陛下の御心を疑はしめたれば、陛下悞て斬る柱石の臣を棄玉へり、是に因て孔明心の儘に攻來れり、若又この人を用玉ふ時は孔明自ら退くべし、此人は驃騎將軍司馬懿字は仲達にて候。曹叡長嘆して曰、朕常に心の内に後悔す、仲達いま何にかある。鍾繇が曰、近ごろ仲達は宛城に閑居すと申し候。曹叡急に使を立、節を持て仲達を平西都督に封じ、南陽諸路の軍馬を興して孔明を防しめ、自ら鑾駕を備て長安に御幸し、日を定めて仲達と出合、共に力を盡して孔明を破るべしとて急に諸方の勢をぞ集めける。此時孔明は祁山の陣に在て諸大將を集め、我軍を起してより全く勝利をのみ得て、勢已に四邊に振ふ、早く長安を取て次に洛陽を取んと云て計を議する所に、白帝城の鎮守李嚴が方より其子李豐使として來れりと云ければ、孔明打驚き、是定めて吳の國より仇を成か、直事ならじと思ひ

ん、御方の勢を二手に分、勢に乘て追打にすべしとて大軍を二手になし、曹遵、朱讃を先手として飛が如に追ところに、忽ち喊を咄と作て一彪の軍馬討て出、眞先に進は蜀の鎭北將軍魏延なり。大音あげて反賊にぐること勿れと呼はり、戰ひ三合ならざるに曹遵をたゞ一刀に斬て落す。魏の副先鋒朱讃も勢に乘て追かけたるに、忽然として鼓の聲天を碎き、一手の勢蒐出、眞先にすゝむは蜀の征南將軍趙雲なり。朱讃驚て急に逃んとすれば、趙雲追蒐て一槍に突ころし、首を取て指あげたり。曹眞、郭淮先手の討れたるを聞て急に退かんとすれば、後より喊を造て二手の勢討て出。これ乃ち蜀の關興、張苞なり。おつ取こめて散々に揉だりければ、魏の勢のこり少に討れ渭水の陣に囘らんとするに、早蜀の大勢入かはり、內外より攻めたりしかば、曹眞、郭淮わづかに命を助り、二人の先手を討れて心の中深く哀み、再び戰ふべき力なければ、洛陽へ早馬を立て援の勢をぞ求めける。

○司馬仲達擒孟達

曹眞早馬を打て援の勢を求めければ、魏主曹叡大に驚き、文武の諸將を集めて如何せんと議するに、華歆が曰、孔明蜀の大軍を引て御方の勢こと〴〵く討る、天子御幸なりて自ら之を防ぎ

蜀兵

孔明雪中に鉄車の兵を鏖にす
鉄車軍

遙に平々たる原野あり。雪ふり積て敵ひとりも見えざりければ、羌の大軍鐵車を連ね勢に乘て廣みに出んと馳たりけるに、忽然として鼓の聲天に響き喊の聲地を震し、大山の崩るゝが如く皆陷穴に落入て人馬いやが上に重り、坂を下りに馳たる鐵車なれば前の難儀をも云ず馳落し、急に引かへすべき樣なければ、壓つぶされて微塵になり、蹂躙られて手足を折、上を下へと蠢く所に、左より關興右より張苞、兵を引て弩を放ち、後よりは姜維、馬岱、張翼三手に分れて殺到し、散々に攻たりければ、越吉元帥山に上て走りけるを、關興兼て谷の内に待うけ一刀に斬殺す。雅丹丞相は馬を飛して逃たりしが、馬岱引組で了に生どる。孔明本陣に回りければ、馬岱自ら雅丹丞相を縛り來る。孔明急にその繩を解、酒食を與て、我君は大漢の皇帝なり、われ勅命を受て逆臣を誅す、汝なんぞ逆臣の詞を聽て吾昔しの好を忘たるぞと云ければ、雅丹丞相頓首して罪を謝す。孔明生取をことごとく赦して、引出物とらせ本國へ回しければ、皆拜謝して德を感じ、躍り喜で去にけり。孔明乃ち越吉元帥が首を匣に入、酒宴を設て喜をなし、又祁山に回て成都へ使を遣し、表を以て天子に勝軍をぞ奏しける。此時魏の都督曹眞は渭水の陣を固く守り、毎日羌胡の消息を待けるが、細作走り回り、只今蜀の軍勢共盡く祁山の陣を收め退て國に回り候と告ければ、郭淮申けるは、定めて羌の勢の後を攻るゆゑ此陣を引とるなら

朔風雪を催す、吾計施べし、汝紅の旗を動を見ば急に兵を退けよと云ければ、姜維計を受兵を引て羌の陣に推よする。羌の軍勢かの鐵車を馳出し、潮の湧が如に進みければ、姜維引回して逃わしる。羌の勢勝に乘て追かけ、蜀の陣中へ攻入けるが、虚く旗ばかり有て人ひとりも無れば、心怪ていまだ進ず。時已に十二月の末なれば、朔風凛々として夥しく雪降、姜維又討て出ければ、羌の軍勢鐵車を馳て攻かゝる。姜維一戰にも及ず散々に走て陣屋の内に入、門をも閉ず後より逃わしりければ、羌の勢五六千騎追かけて陣屋の前まで來り、門の開けたるを怪み内の體を窺ひ見るに、人ひとりも見えずして琴を彈音聞えければ、心疑て進み得ず、急に越吉元帥に是由を報ず。越吉元帥心あやしみ猶豫していまだ進まざりければ、雅丹丞相が曰、これ又孔明が詭の計にて人を疑はしめん爲なり、唯攻入て奴原に膽をつぶさせよ。越吉元帥兵を引て蜀の陣中に打入ければ、孔明車に乘て琴を携へ、五六騎を従へて陣の後より逃わしる。羌の勢のがさじと追かけゝれば、孔明しづ〳〵と車を推せ隱々として林の中へ藏れ入れり。雅丹丞相あざ笑ひ、是は孔明鐵車の勢に怕るゝ者なり、此ほどの伏勢は何ほどの事をか仕出さん、只平攻に進めと下知して馬を早めて追ところに、姜維又雪の中より兵を引て討て出たり。越吉元帥大に怒り鐵車を驅て進みけるが、山路の少し狹き所を通るとて向を望めば、

關興不思議の思ひをなし、父の教に任せて走りければ、夜半に至て忽ち一軍はせ來る、是乃ち張苞なり。張苞問て曰、向に御邊は父に遇玉はずや。關興が曰、いかゞして知玉へる。張苞が曰、われ向に鐵車の兵に圍れ已に討るべかりし所に、御邊の父忽然として出來り、羌の勢を打散し、此道を教て早く吾子を救と云玉へり、是に因て此所に來れり。關興大に驚き、扨は疑ふ所もなく父の神靈われを救玉ひしもの也とて、向の事共を語りて共に本陣に回り、馬岱と計を議しければ、馬岱が曰、この勢やぶるべき樣なし、某はこの要害を守て防べし、御邊二人早く祁山に行て丞相に見え、計を求て來り玉へ。關興、張苞二人夜を日に繼で路を急ぎ、孔明に見て右の趣を語りければ、孔明申けるは、いま曹眞かたく守て戰をせず、我この間に自ら羌の勢を退くべし、諸將よく此陣を守れとて姜維、張翼を伴ひ、又三萬餘騎を分て關興、張苞と西平關に來り、馬岱が陣に著て次の日自ら山に登り、羌の陣を望み見るに、鐵車夥しく相連て人馬縱横に馳まはりければ、孔明あざ笑ひ、量るにこの敵を破ること何の難かあるべきとて、馬岱、張翼に箇樣々々と計を教へ置、次に姜維を呼で問て曰、汝この鐵車の兵を破る計を知たるか。姜維が曰、西羌の夷たゞ一勇の力を頼む、安くんぞ子牙が妙術を知ん。孔明笑て曰、汝よく我心を知り、吾向に關興、張苞に計を教へ、伏勢を以て討やぶらしむ、況んや今彤雲起て

に推付られ、鐵車を以て四方を取まはしたれば、蜀の勢なじかはたまるべき、討るゝ者麻の如し。關興只一騎山に上て谷の中へ逃たりければ、日すでに夕陽に及んで羌の軍勢皁き旗を簇らし、大將越吉元帥鐵の鎚を提げ馬を飛して追かけ、小將いづくへか逃ると呼はりければ、關興怕れ驚き鞭を加て走りけるが、前に大なる澗ありければ、是非なく引回して越吉元帥と戰はんとするに、見るに怕ろしげなる形勢なれば、又取て回して澗の中へ馬を馳入たりしに、越吉元帥はや追付て鐵の鎚を打付けるを、關興身を側めて避んとしければ、乘たる馬胯を打れ澗の中に倒れ死す。關興水中に落入けるが、後に物の響く音して越吉元帥馬と共に倒れしかば、急に起あがりて見るに、誰とも知ぬ一人の大將岸の上に馬を躍せ、續く羌の勢を四角八方へ切ちらす。關興刀を取直し越吉元帥を斬んとすれば、早躍り超て逃たりける。關興其馬を奪て岸に上り、四方を望み見れば、先に見たりし大將なほ羌の勢を追かくる。この人いかなれば我あやふき命を助て敵を追拂やらん、對面せばやと思ひ、馬を馳て近付ければ、只隱々たる雲の中に一人の大將あり、面は重棗の如く眉は臥蠶の如し。綠の袍を著て金の鎧を重ね、青龍刀を右に提げ長き髯を左に握り、分明に是父の關羽と見てければ、怪みを爲て問んとする時、彼人手を以て東南の方を指をしへ、我子早くこの路より回れと云て一陣の風ふき起り、容は見えず成にけり。

かりければ、關を守る蜀の大將韓禎早馬打て孔明に報ず。孔明これを聞て諸大將を集め、誰をか指向て羌の勢を防しめんと云ければ、龍驤將軍關興、虎翼將軍張苞ひとしく出て曰、某ねがはくは行ん。孔明が曰、汝二人は彼地の案内を知まじ、馬岱は西涼州に在て能羌胡の意を知れり、汝二人馬岱を案内者として精兵五萬餘騎を率し、早く行て西平關を守れと云ければ、三人兵を揃て路を急ぎ、數日過て早羌の先陣の勢よせ來りければ、關興まづ百騎ばかりを從へ、山に上て望み見るに、羌の軍勢蜂の群れるが如く彼鐵車を進て首尾を連ね、車の上には槍薙刀をひしと集め、恰も城を見るが如なれば、關興これを破るべき計なく、本陣に回て張苞、馬岱と評議するに、馬岱が曰、まづ一軍して敵の虚實を窺ひ、其後に計を議せんとて、次の日早天に五萬餘騎を三手に分、關興中軍に備へて張苞、馬岱を左右に立、喊を作て蒐りければ、忽ち皁き鵰の羽の旗山に漫り野に滿て、羌の軍勢夥しく討て出、大將越吉元帥手に鐵の鎚を提げ、腰に寶鵰の弓を掛、馬を飛して眞先に進ければ、關興三方の御方を招き、鋒を雙べて討てかゝる。時に羌の陣より彼鐵車を放て潮の湧が如く、弩を飛すこと雨の如くなれば、蜀の兵車に碎かれ矢に當て散々に亂れけり。張苞、馬岱防ぐべき力なく漸に退きけるが、關興が一手はいかがしたりけん羌の大勢に取こめられて、出んとすれども其圍鐵桶の密きが如く、了に西北の角

の計あり、蜀の兵前後に度を失て自ら亂るべし。曹眞が曰、いかなる計ぞ。郭淮が曰、西羌の夷は太祖武帝の御時より毎年貢ものを捧て、文帝又甚だ恩を施玉へり、吾等いま險阻を前に當て日を送り、西羌の夷を語ひ、孔明が後より攻させて夾んで兩方より懸らば、豈勝ずと云の理あらんや。曹眞然るべしと喜び、重寶の贈ものを用意し、西羌へ使をぞ下しける。此西羌の夷と申は、國王徹里吉久しく曹操が時より貢ものを獻り、文官に雅丹丞相と云ものあり、武將に越吉元帥と云もの、青眼黃髯、身の長一丈重さ百斤に作たる鐵の鎚を使ひ、萬夫不當の勇あり。此日魏の使金銀珠玉を捧て先雅丹丞相に見、曹眞が書簡を呈しければ、雅丹丞相その贈ものを受收め、國王に見えて書簡の趣を語る。徹里吉いそぎ越吉元帥を呼でこの事を議しければ、越吉元帥申けるは、君久しく魏の恩を受玉ふ、早く兵を起して救ひ玉へ、某罷向て忽ち蜀の勢を打やぶり、根を斷て葉を枯さん。徹里吉これに從ひ、羌胡の勢二十五萬を集て雅丹丞相を相そへ、魏の使と共に打起しむ。元より羌の軍立は尋常に事替て、弓弩、槍刀、鐵蒺藜、流星鎚を能つかひ、又軍の車あり。此車は皆鐵を以表を裹み、密く大釘の鋭なるを毛の如に指あつめ、其内に兵粮武具を貯て駱駝の馬に付、或は騾馬に負せて一息に數千里を走る。是に觸る者砕て微塵に成ざるはなし。此ゆゑに鐵車の兵と號す。已に國を起て蜀の西平關に攻か

時、俄に火の光天を焦す。朱讃も兵を引て馳來りけるが、火の光に驚き急に退んと推合騒で、互に上を下へと蠢き、踏殺さるゝ者數を知ず。早四方に喊の聲を揚て蜀の大將馬岱、王平、張翼、張嶷一齊に討て出、あまさじと揉だりしかば、魏の勢したゝか討れ、曹遵、朱讃はわづかに百騎ばかりに成て走る所に、忽ち鼓の聲地を動して趙雲が一軍路を遮り、賊將いづくへか逃る、早々に首を渡せと呼はり散々に攻ければ、曹遵、朱讃這々にげて走る所に、又魏延が一軍路を塞ぎ引包で攻たりしかば、五六騎に討なされ、漸に本陣を指て逃入けるに、本陣を守る兵共蜀の勢夜打に寄たりとて慌て合圖の火を付たれば、是を見て左より曹眞右より郭淮喊を作て討て出、曹遵、朱讃を中に取こめ、同士打をすること數刻なり。相續て蜀の軍勢追來り、中央より魏延、左より關興右より張苞勢に乘て攻入ければ、魏の大勢亂れ騒ぎ、蛛の子を散が如く十里退て止りけるが、討れたる大將多かりけり。

○孔明大破鐵車兵

曹眞今夜の合戰に兵大半討れて砦の陣を孔明に奪はれければ、氣を失て再び戰はんとする心なし。副都督郭淮申けるは、軍の習ひ勝負は是兵家の常なり、負たりとても必弱とせず、某一つ

を呼出し、汝二人兵を揃へ魏の陣を夜討にせよと云ければ、魏延申けるは、曹眞は深く兵法に通ず、今日王朗すでに死したれば、敵の喪に乘て攻來んことを量り、必よく用心すべし。孔明が曰、われは曹眞に蜀の勢の夜討することを知せんと願なり、彼必ず祁山の後に兵を伏せ、御方の勢の夜討に出るを窺ひ、却て其虚に乘て御方の本陣を取んと巧べし、汝二人いま兵を引て夜討に蒐る體を見せば、魏の勢必ず來て此本陣を攻べし、吾その時火を擧て合圖を成ん、汝二人急に引回して魏延は山際の路を塞ぎ、趙雲は兵を引て敵の後より攻やぶれ、強てあまさず討こと勿れ、敵必ず自ら亂るべしと云ければ、二人兵を引て出にけり。孔明又關興、張苞を呼、汝二人は兵を分て祁山の險阻に埋伏し、魏の勢の通り了るを見て却て魏の本陣へ攻蒐れと云ければ、共に計を受て出にけり。孔明又馬岱、王平、張翼、張嶷四人を呼よせ、計を授て陣屋の外に伏置、本陣には柴を積で敵の來る時火を付て合圖を知しめよとて、自ら陣屋の後に藏れて今や〳〵と窺ひ見る。去ほどに魏の先手の大將曹遵、朱讚二人は二萬餘騎を二手にわけ、昏方より出て密に祁山の後に廻り、夜の二更の比谷の內に伏て望み見れば、蜀の軍勢夥しく陣屋を出て夜討に向ふ體なりければ、曹遵心の內しすましたりと喜び、その通り了るを待て急に兵を率し、馬を飛して蜀の陣中へ蒐入けるに、人ひとりも見えざりしかば、心怪み退て出んとする

七十に餘りぬれば不日に定て亡べし、黄泉の下に到て何の面目ありて漢の二十四帝に見べき、老賊早く退け、吾逆臣を誅せんと呼はりければ、王朗これを聞て心にや愧たりけん、氣塞て動こと能ず、苦しげに一聲叫びけるが、馬より倒に落て死にけり。孔明扇を擧て曹眞を招き、われ今人の喪に乘て急に戰を迫ることなし、汝よく兵を整へよ、明日雌雄を決すべしと云て車を回して去ければ、曹眞いそぎ王朗が屍を收め、送りて長安へぞ上せける。副都督郭淮申けるは、孔明いま退きたるは王朗が死たるに乘て今夜必ず夜討せんとの心ならん、御方の勢を四手にわけ、二手は本陣の傍なる山際に伏おき、敵の來るを跡より圍み、却て二手の勢を小路より廻し、虛に乘て敵の本陣を攻させば、是備なきを攻るの計ならん。曹眞喜び、此計よくも我心に合へりとて、先手の大將曹遵、朱讃を呼て申けるは、汝二人は共に一萬餘騎の勢を率る、潛に祁山の後を廻て蜀の陣を窺ひ、敵もし陣屋を出て夜討に來らば、其虛に乘て攻やぶれ、萬一敵出ること無んば輕々しく進むべからず、早々に引て回れと云ければ、二人計を受左右に分れて馳向ふ。曹眞又郭淮に申けるは、われ等二人は二手に分れて陣屋の外に埋伏し、陣中には柴を積で纔なる士卒を殘し、敵の來るを見て火を付させ、是を合圖に討て出べしとて用意ことごとく備りければ、敵今や來ると四方に伏て待かけたり。此時孔明は本陣に回て趙雲、魏延

心の内に思けるは、昔し季布と云し者漢の高祖を罵て其陣を破りしが、王朗いま此計を用ひたり、孔明いかゞ口を開くべきとて色を失て屹と見れば、孔明車の上に在て大に笑ひ、聲を擧て申けるは、王朗よく我詞をきけ、我初め汝は漢朝の舊臣なるにぞ定て清き高論あらんと思ひしに、量らざりき浩る大逆の詞を吐んとは、我一言あり、兩方の軍勢靜にきけ、昔し桓帝靈帝微弱にして漢統陵夷し、國亂れ年凶にして四方こと〳〵く騷亂す、段圭を平津に斬ければ、董卓又出て朝野を亂り、四寇尋で起て漢帝を民間に遷し、生民を溝壑に殘暴す、廟堂の上には朽たる木を以て宮殿とし、陛階の間には禽獸を用て祿を食しめ、狼心狗幸の輩群て道に當り、奴顏婢膝の徒集て政を秉、社稷を以て丘墟とし、生靈を塗炭とす、吾本より能汝を知、世々東海の濱に居て初め孝廉に擧られ、漢朝に仕て恩を受、この故に道を論ぜば、汝ひとへに君を匡して國を輔け、漢を安んじて劉氏を興すべきことなるに、何ぞ逆臣に事て共に位を奪ひけるぞ、汝が罪天地の間に容がたし、四海の人こと〳〵く汝が肉を生ながら啖んと欲す、今幸に天この孔明を世に出し玉ふ、是なほ漢を棄ざる也、われ天子の詔命を受順を以て逆を討、義に依て師を出す、汝は是諂諛の臣なり、只身を潛め首を縮め、衣服を求て食を貪り、竊に就て家に居べきに、何とて軍の前に出て妄に舌を動し天數なりとは申ぞ、皓首の匹夫蒼髯の老賊、年すでに

けるぞと云ければ、孔明答て曰、われ勅命を受て逆臣を誅す、安んぞ無名の師と云ん。王朗が曰、天數は變あり、神器更め易て天下みな徳ある人に皈す、此定まれる道理なり、昔し桓帝、靈帝より以來四海わかれ爭ひ、人々霸王と稱する者その數勝て計がたし、黄巾は鉅鹿に縱横し、張邈は旗を陳留に揚、袁術は帝號を壽春に僭し、袁紹は鄴土に王稱し、劉表は荊州に據、呂布は天下を虎の如くに吞、その外群盜蜂の如に起り奸雄鷹の如に揚る、社稷累卵よりも危く、民倒懸の苦を受、然る所に我太祖武皇帝六合を掃ひ清めて八荒を席の如に捲、萬民を救て四方みな其徳を仰ぐ、是權を以て取に有ず、實に天命の皈する所なり、世祖文皇帝神文聖武大統を受て天に應じ人に從ひ、堯の舜に禪り玉ひし例に習て中國を保ち萬邦を懷く、是豈天心人意に有ずや、御邊いま大才を抱き、自ら管仲、樂毅に比せんとす、何ぞ伊尹、周公に效て其功を百世に傳へざる、是故に强て事を行ひ、天理に背き人情に逆ふ、古人も順レ天者昌、逆レ天者亡と云、今わが大魏雄士百萬、大將千員、向ふところ泰山を以て卵を壓が如し、量に汝腐草の螢火、爭か我天上の明月に及ん、御邊早く甲を解て降參せよ、必ず封侯の位を得ん、然る時は國安く民治りて共に太平を慶ぶべしと云ければ、蜀の軍勢これを聞て嗟嘆して已ず、一々道にかなへる詞かなと感じける。孔明は是を聞て默然としてもの云ず、あざ笑て居たりければ、蜀の參軍馬謖

ひ行ん。曹叡これに從ひ、乃ち曹眞を大都督として節鉞を賜ひ、郭淮を副都督とし、王朗を軍師とす。王朗字は子興、東海郯の人にて漢の獻帝の時より仕へ、此時年七十六歳なり。曹眞乃ち洛陽長安の軍勢二十萬騎を起し、舍弟宣武將軍曹遵を先手とし、盪寇將軍朱讃を副先鋒とし、十一月に都を起ければ、魏主曹叡自ら西門の外に送る。大軍すでに長安に到り、渭水の東に陣を取て計を相議しければ、王朗申けるは、明日兵を整へ隊伍を備て旗を開玉へ、吾自ら出て只一言の下に孔明を降參させん、然る時は蜀の勢戰はずして亂るべし。曹眞然るべしとて蜀の陣に使を立て戰書を下し、明日勝負を決せんと云遣し、夜の四更の比兵粮を使ひ、夜あけて兩方の軍勢祁山の前に陣を張、三通の鼓を鳴しければ、孔明敵の陣を望み見るに魏の勢みな雄壯にして夏侯楙が軍立とは事易れり。時に軍師王朗馬を出し、左右に曹眞、郭淮を備へ、孔明に逢て一言を申さんと呼はりければ、蜀の陣中に門旗さつと開けて關興、張苞左右に分れて馬を躍らせ、一隊の大將次第を亂さず兩邊に備へ、孔明四輪の車に端坐し、綸巾を戴き鶴氅を被て手に羽扇を握り、中央より推出して向を屹と望み、使を以て漢の諸葛丞相こゝにあり、王朗出よと呼はらせければ、王朗近々と馬を出し、孔明よく我一言を聞玉へ、われ久しく御邊の名を聞て幸に遇ことを得たり、御邊元より天命を知よく當時の務を知、なに故に無名の師を興し

通俗三國志　卷之四十

○孔明祁山破二曹眞一

蜀の建興五年の冬孔明すでに天水、南安、安定の三郡を攻とり、冀城上邽ことごとく落て其威遠近を靡し、大軍すでに祁山に出、渭水の西に陣を取ければ、諸方の早馬洛陽へ急を告ること雪の飛が如し。此時魏の太和元年、曹叡この由を聞て大に驚き、群臣を集て評議しければ、司徒王朗列を出て曰、夏侯楙敗れて孔明いよいよ勢にのる、臣曾て先帝の軍をし玉ふを見るに、大將軍曹眞向ふ所必ず敵を破る、早く此人を大將として蜀の勢を退治し玉へ。曹叡しかるべしとて曹眞を呼出し、先帝危に臨で孤子を汝に托す、今蜀の兵攻來て夏侯楙已に破れたり、汝早く行て之を退けよと云ければ、曹眞が曰、臣才淺して其職に稱ず。王朗が曰、將軍は是社稷の臣、必ず辭退し玉ふな、某不才に候へども共に打向て敵を破らん。曹眞又奏して申けるは、臣久しく國恩を受、ねがはくは不才を顧ず命を棄て敵を破らん、一人の副將軍を付玉へ。曹叡が曰、卿たれを副將とせん。曹眞が曰、太原陽曲の人射亭侯雍州の刺史郭淮字は伯濟を伴

を見るに、計みな我心に合へり、この故に喜ぶこと甚し、今三軍すでに得たり、都を攻るに難ことなしとて、已に祁山まで出張す。

天水の城中に尹賞、梁緒と云ものあり、二人共に某と厚く交る、若書簡を以て城中へ射入なば、戰はずして自然に亂れん。孔明然べしと喜びければ、姜維乃ち二通の書簡を矢に拴り城中へぞ射入ける。軍士これを得て太守馬遵に與ければ、馬遵開き見て大に驚き、夏侯楙に見て申けるは、梁緒、尹賞二人姜維と志を合せ、內應して蜀に降らんとす、早く呼出して首を刎べしとて使を以て招ける。尹賞密にこの由を聞、梁緒と議して申けるは、我等只犬死せんよりは唱や門を開て蜀に降らん、早く用意をせよと云ところに、夏侯楙使を以て招ければ、二人大に怒り、物の具ひし〳〵と固め、手下の勢を引て本陣に討て入、門を開て蜀の勢を引入ければ、夏侯楙、馬遵すべき樣なく、わづかに百餘騎を引て羌胡の城へ逃こもる。孔明天水の城を乘とり、梁緒、尹賞を重く賞し、上邽を取の計を問ければ、梁緒が曰、上邽を守る大將は、某が弟の梁虔と申もの也、某ねがはくは城に入て呼來ん。孔明しかるべしと喜びければ、梁緒自ら城中に入、梁虔と門を開て降參す。孔明みな重く恩賞を與へ、梁緒を天水の太守とし、尹賞を冀城の令とし、梁虔を上邽の令とし、大軍長安を指て進發す。諸將問て曰、夏侯楙いま羌の城に逃こもる、何ぞ是を生取玉はぬ。孔明が曰、われ夏侯楙を放は一つの鴨を放が如し、今姜維を得たるは一つの鳳凰を得るが如し、古より千兵易レ得、一將難レ求と云り、われよく姜維が軍立

來れり、卒爾し玉ふなと呼はりければ、馬遵大に笑て曰、汝すでに蜀に降り、昨夜こゝに來て無禮をなし、今又われを欺ん爲かとて指つめ引つめ散々に射る。姜維あきれ果て立たる所に、蜀の大勢追來りければ、横ぎりに馬を飛せ、上邽の城下に到て門を開けと呼はる。これを聞て大將梁虔矢倉に上て望み見るに、蜀の軍勢夥しく向ひ來りければ、姜維匹夫こゝに來て我を欺んとするか、吾すでに汝が蜀に降れるを知れりと云て鏃を揃へ散々に射る。姜維は何とも事の子細を知ねば、驚迷て答ふべき樣なかりしかば、兩眼に涙を含み、又長安へと志て走る所に、茂りたる林ありて喊の聲地を動し、數千の軍馬討て出たり。是乃ち蜀の大將關興なりしかば、姜維馬疲て戰ふこと能ず、引返して走る所に、又一軍路を塞ぎ、一輛の四輪車を推出して、孔明綸巾を戴き鶴氅を被、手に羽扇を持て端坐し、姜維こゝに至て何ぞ快く降參せざると呼はりければ、姜維これを見て後に關興あり、前に孔明あり、逃るとも叶まじと思ひ、馬より下て降人となる。孔明いそぎ車より下、禮を厚して敬ひ、吾草の廬を出てより以來遍く天下の賢才を求め、平生習ひ置たる兵法の大事を授んと思ひしかども了にいまだ其人を得ず、今御邊に遇て吾願ひ足れり、必ず兵法を御邊に傳ん、能忠を盡して國に報ぜよと云ければ、姜維その志を感じ再拜して甚だ喜ぶ。孔明乃ち本陣に回り、天水上邽を取の計を議しければ、姜維が曰、

受て何とて今蜀に降れる。姜維が曰、汝書簡を以て吾に降參せよと云て身を脫れ、今却て此に在か、我已に蜀に降て重く用ひらる、安んぞ魏に囘らんやと罵り、兵を下知して城を攻させ、曉に及で引退く。今夜の姜維は孔明が計にて詐て人を姜維に仕たて、火の光の中なれば眞僞を見わけ難くぞしたりける。孔明は自ら兵を引て冀城に推よせけるが、元來この城中兵粮乏して兵みな餓を苦む。是に因て敵を欺ん爲に、大小の車に兵粮を積でもろ〳〵の陣屋へ運しむるに、姜維矢倉の上より之を見て、自ら三千餘騎を引て城を出、兵粮を奪はんと蒐りければ、蜀の勢車を棄て逃わしる。姜維車を奪て囘らんとするに、忽ち一手の勢路を塞ぎ、蜀の大將張翼馬を飛して討てかゝる。姜維すこしも驚ず、兵を下知して戰ふ所に、又蜀の大將王平一軍を引て取まはす。姜維小勢にて防こと能はず、路を奪て城中に囘らんとすれば、蜀の大勢すでに入代て色々の旗を立雙べ、魏延内より斬て出たり。姜維散々に討やぶられ、圍を出て天水の城を指て走りければ、相從ふ勢十騎ばかりに成て、又張苞が勢の渦巻たる中を蒐通りければ、只一騎に討のこされ、馬を飛して天水の城下に到り、門を開けと呼はりければ、城中の兵この由を馬遵に報ず。馬遵が曰、これは姜維この城の門を開かせ、蜀の勢を引入ん爲なるべし、只射殺せとて雨のふる如く矢を放つ。姜維驚て、われは冀城の姜維なり、敵に追れて逋

百姓なるが、今姜維城を開て蜀に降る、是に依て蜀の大將魏延兵を引て亂れ入、火を放て亂妨し、家に入て財寶を掠む、この故に吾等家を棄て上邽へ走るなり。夏侯楙が曰、いま天水郡の城主は何ものぞ。答て曰、太守馬遵なり。夏侯楙これを聞て天水の城に向てゆく所に、又多の百姓泣叫で老たるを扶け幼を抱き、紛々として逃わしる。夏侯楙その故を問に、皆初の如く答ければ、扨は姜維が心替眞なりと思ひ、天水の城下に行て門を開けと呼はりければ、太守馬遵これを見るに夏侯楙なりければ、驚て迎ひ入地に再拜してその故を問。夏侯楙が曰、われ已に蜀の兵に生取れしが、番のゆるかせなるを窺て逃來れり、冀城の姜維すでに城を開て蜀に降れり、汝これを知たるか。馬遵驚て曰、なんぞ量らん今姜維が蜀に降らんとは。夏侯楙乃ち先に百姓の語りしことを告ければ、梁緒が曰、何條いま姜維が心替を致すべき、夏侯駙馬を救ん爲に詐て降れるならん。夏侯楙が曰、われ是を明に知れり、何ぞ少しも疑はん。其夜すでに初更の比に及で俄に蜀の軍勢四方より推よせ、柴を積で火を掛、一人馬を躍せ槍を横たへ、大音あげて、我は冀城の姜維なり、城中の人々に申すべきこと有と呼はりければ、太守馬遵夏侯楙と櫓の上より見るに、姜維城外にて威を振ひ勇を逞し、我夏侯駙馬の命を求めて已に蜀に降參せり、早く城を開て皆々蜀に降り玉へと云ければ、夏侯楙が曰、汝久しく魏の恩を

攻ず、三十里退て陣を取ければ、魏の細作この趣を聞、いそぎ城中に回て太守馬遵に見え、今孔明陣を退けたるは兵を分て上邽冀城を攻ん爲なりと告ければ、姜維哀んで申けるは、いま某が母冀城にあり、もし敵に劫さるゝ時は子たるの道に背く、願くは某一軍を引て冀城を救ひ、且は母を守るべし。馬遵これに從ひ、姜維に三千餘騎を副て冀城に遣し、梁虔に三千餘騎を付て上邽を救はしむ。姜維喜び冀城を指て向ふ所に、蜀の軍勢路を遮り、魏延眞先に馬を出す。姜維槍を撚て突て蒐り、二人しばらく戰ひ、魏延詐て逃ければ、姜維は城中に馳入、老母を守護して城を出ず。趙雲は已に上邽の城に向ひけるが、梁虔兵を引て救の爲に來りければ、態と退て城に入しむ。孔明は南安城に人を遣し、先に生取おきたる夏侯楙を取よせ、汝命を惜かと問ければ、夏侯楙拜伏して曰、もし丞相の慈悲を以て二つなき命を保たば、身を終るまで忘れ候はじ。孔明が曰、いま天水郡の姜維と云もの冀城に籠りたるが、使を以て書簡を送り、若夏侯楙を赦し玉はば必ず蜀に降らんと望む、是に依て汝が一命を助く、早く行て姜維を伴きたれ、然る時は共に御方の大將とせん。夏侯楙が曰、某ねがはくは冀城に行、姜維を招て共に來らん。孔明乃ち衣食を與へ馬を備ければ、夏侯楙只一騎路を尋て走る所に、多の百姓みだれ躁で逃る者あり。夏侯楙問て曰、汝等は何くの者ぞ。答て曰、われ等は盡く冀城の

ところに、城の内にも鑼を鳴して喊の聲を合せければ、孔明心驚き急に退かんとするに、四方の敵軍潮の湧が如く引包で攻かゝり、城の内よりも鋒を揃て討て出ければ、蜀の勢散々に亂れ、討るゝ者麻の如し。孔明は關興、張苞に扶られ圍を出て走りければ、東の方に一手の勢路を横ぎり、火の光天を焦してその勢長蛇の如し。孔明これを見て長く嘆じ、是勢は中々大勢とは見えず、惟大將の勢の立樣に依り、眞に稀なる奇才なり、關興先に進で見て參れと云ければ、關興軈て馳回り、これ姜維が勢なりと申す。孔明嗟嘆して已ず、後より敵軍追蒐來りければ、姜維が備に是非なく討て入蒐拔て走けるに、蜀の勢夥しく討れけり。孔明敗軍を引て本陣に回り、良久しく計を思案し、左右を顧て申けるは、量るに一人の姜維にだも勝こと能はず、安んぞ魏を破ることを得んとて、安定郡の人を呼で問て曰、姜維は母に事て孝行なりと云しが、今母は何くにある。答て曰、姜維が母は冀城の中にあり。孔明又問て曰、この處の金銀兵粮なんど貯へたるは何の城ぞ。答て曰、天水郡の兵粮一切の用物こと／＼く上邽の城にあり。孔明乃ち魏延を呼よせ、汝は一軍を引て冀城に向ふと沙汰せよ、然らは姜維必ず行て母を救ん、其時是を遮ることなく心の任に入しめよ。又趙雲を呼よせて、汝は一軍を引て速に上邽の城に攻かゝり、箇樣々々に計を成と云ければ、二人兵を引て打向ふ。孔明は天水の城を

らんとは、我大軍を引て自ら向ひ、城を攻破て姜維を生取んとて、自ら兵を備て發向す。去ほどに姜維は勝軍を收て城中に回り、太守馬遵に向て申けるは、いま趙雲敗て逃去れり、孔明又自ら來ん。馬遵が曰、汝すでに大功を立たり、後必ず重く用ん、若孔明自ら來ば如何して防べき。姜維が曰、某量るに、孔明定めて敵は皆城中にありと思ひ、偏に城を圍で攻んとすべし、今御方の勢を四手に分、某一軍を引て城の東に埋伏し、敵の後を遮るべし、太守は梁虔、尹賞と三手に分れて皆城外に伏玉へ。馬遵げにもとて梁緒を留めて城を守らせ、皆外に出て四方の谷に埋伏す。孔明は姜維が軍立を心にくく思ひければ、自ら先手に進で天水の城に推よせ、下知を傳て申けるは、凡そ敵の城を攻るには初て向ふ日を簡要とし、兵を勵し氣に乘て攻やぶるべし、若日數を經ぬれば中々落されぬ者ぞかし、汝等もろ〳〵の大將三軍の心を勇め、速に競ひ蒐て、切とも射とも用ひず乘越々々攻入べしとて攻鼓を打ければ、大軍なじかは猶豫すべき、喚き叫で壕を渡り壁に取つき、勢に乘て攻かゝる。されども城の内には鳴を靜めて音もせず、忽然として鐵砲を響けるが、是を合圖に色々の旗を指あげ、四方の矢倉より雨のふる如く矢を射かけ、大木大石を抛たりければ、蜀の軍勢手負死人その數を知ず。已に夜半の比に及で俄に四方より火を付て、喊の聲天を碎き鼓の音地を動す。蜀の軍勢何くの敵の來れるをも知ず、皆膽を冷

大將梁緒矢倉に上り、汝却てわが姜將軍の計に落され、刀の頸に臨むを相まつかと云ければ、趙雲その義ならば只一揉に攻やぶれと下知して四方より蒐入んとすれば、城中より雨のふる如く矢を射出し、俄に喊の聲後に響て四方に火の手を揚ければ、趙雲大に驚き、これは何くの敵なるらんとて後を屹と見れば、年若き大將眞先に馬を躍せ、槍を提て大音あげ、汝天水の姜維を知たるかと呼はり、趙雲に突て蒐る。趙雲馬を交へて散々に戰ひけるが、姜維が力壯にして槍の法よの常ならざりしかば心の内驚き、この所に此の如き名將あるべしとは思はずとて戰ふ所に、又喊の聲天地を碎くが如く二手の勢斬て蒐る。是乃ち馬遵、梁虔なり。四方を圍で餘さじと攻ければ、趙雲小勢にて散々に亂れ、我先にと逃けるを、姜維勢に乘て追かけ、息をも繼せず兵を進しかば、趙雲すでに危見えたる所に、蜀の大將張翼、高翔二手の勢馳きたり、漸々に救ひ回る。趙雲敗軍を收て孔明に見え、姜維と云もの計を用て御方したゝかに討れたりと告ければ、孔明驚て申けるは、姜維如何なればわが計の玄機を知たる。南安郡の人あり、答へて曰、姜維字は伯約とて天水郡冀城の人なり、母に事て至て孝なり、文武兼全く智勇衆に出たり、眞に當世の英雄にて候。趙雲が曰、汝が云ところさも有べし、姜維が槍の法われ七十に及べどもいまだ見ず。孔明が曰、われ天水郡を取こと掌の内に在と思ひしに、量らざりき此人あ

城を取んと計りしもの也、必ず輕々しく出玉ふこと勿れ。馬遵げにもと悟て曰、姜維が敎に有ずんば我必ず敵の計に陷入ん、今いかゞして之を防べき。姜維が曰、これを破るに難きことなし、先裴緒が首を刎玉へ。馬遵が曰、萬一實の使なるを輕々しく殺しなば、後日の罪のがれ難からん。姜維が曰、心易く思ひ玉へ、某一つの計あり、孔明を擒にすべし。馬遵が曰、いかん。姜維が曰、此城の後には必ず敵の伏勢あらん、某ねがはくは五千餘騎を率して要害に埋伏すべし、太守は南安城の後攻に向ふと號し、城を出ること三十里ばかりにして又取て回し玉へ、火の手を擧るを合圖にこと〴〵く討て出、前後より攻やぶるべし、孔明もしその中に在ば某必ず擒にせん。馬遵大に喜び、只今後攻に向ふと沙汰して自ら兵を引て城を出、梁緒、尹賞を留て城を守らせ、其外の勢を皆城外に埋伏す。孔明は趙雲に一手の勢を付て天水郡の山中に伏おき、太守馬遵が城を出るを窺ひ、急に攻蒐て其そなへ無を破と下知しければ、趙雲今や出ると待ところに、斥候の兵走り來り、只いま太守馬遵城を出て南安郡の方へ向うたりと告ければ、趙雲心喜び、張翼、高翔に告知せて馬遵が行先を遮しめ、自ら五千餘騎を率して天水の城に推よせ、四方より喊を造り大音擧て、我は常山の趙雲なり、汝等わが計に落たるを知たるか、早く門を開ずんば一人も殘さず斬殺さんと呼はりければ、城中に咄と笑ふ聲して、

天水郡の太守馬遵は夏侯楙が南安の城に圍れたるを聞、もろ〳〵の大將を聚て如何せんと議しければ、功曹梁緒、主簿尹賞、主記梁虔等すゝみ出て曰、夏侯駙馬は金枝玉葉、もし差ある時は隣に居ながら救ざるの罪を得ん、太守早く兵を起して救ひ玉へと勸る所に、忽ち魏の大將裴緒と云もの夏侯駙馬の使たりと申す。馬遵よび入て問ければ、裴緒汗に濕たる書簡を出す。馬遵開き見るに、早く兩郡の勢を起して南安城の後攻をせよと也。馬遵まづ裴緒を客屋に入て休息せさせ、廻文を以て兵を集めければ、次の日人走り來り、安定の太守は兵を引て早打起玉へり、速に向ひ玉へと催促す。馬遵取ものも取あへず已に城を出んとするに、一人外より來て、無用々々、太守すでに孔明が計に落され玉へりと呼はる。諸人これを見れば天水冀城の人に姜維字は伯約なり。父姜冏は戎狄を攻て討死し、姜維幼より母に事て孝を盡し、博く群書を讀で兵法武藝こと〴〵く通ぜずと云ことなし。太守馬遵問て曰、御邊なに故に無用と云。姜維が曰、孔明ちか比南安の城を圍でその密きこと水も泄ずと承はる、何とて城中より使の出ることを得ん、況や裴緒と云もの了に魏の大將と成たるを聞ず、今又安定郡の使たゞ早く出玉へとばかり云て書簡をも持來らず、是を以て能々思ふに、この人は蜀の兵にて、詐て魏の大將裴緒なりと云ものならん、太守の城を出玉ふ時兼てより伏勢を置、虛に乘て其備なきを攻、

ば崔諒が詐を知玉ひし。孔明が曰、われ已にこの者の降參心より起るに有ず、已ことを得ずして降れることを知れり、此ゆゑに城中に入て試るに、彼必ず實を以て夏侯楙に告、計に就て計を用んと巧べし、吾又彼が來るを見て彌その詐なるを知る、此ゆゑに關興、張苞を副て城中に遣んと云しは、彼が心を安からしめ疑こと無を知しむるなり、彼もし眞の心あらば關興、張苞を伴ひ行じ、却て欣然として伴ひ行しは吾疑はんことを畏れて也、われ兼て二人に計を授け、城外にて之を斬しむ、是城中には敵の伏あらんことを量る故なり、我又大軍跡に續て攻かゝるは、是又不意に出るもの也と云ければ、諸大將みな拜服す。孔明又曰、われ崔諒を欺て安定の城より出し、南安の後攻に向しむるは、兼て人を仕立、魏の大將裴緒と云もの也とて救を乞しむるに依てなり、又天水郡へも人を遣し、太守馬遵を欺き城を出て後攻せさせんと計りしが、今に其便を聞ず、この時に乘て攻取べし、若三郡を取時は威勢大に振べしとて、大將吳懿を留て南安を守せ、劉琰を留て安定を守らせ、魏延を安定の城より呼回して天水郡に進發す。

○孔明計伏姜維

諒答て曰、これは安定郡より救の勢なりとて、密に矢を城中へ射入ければ、楊陵これを見るに其矢に文を拴付たり。開て是を見れば、今孔明二人の大將を我に副て城中に入おき内外より攻んとす、少しも驚ず門を開け、城中に入て後取こめて討べしと有ければ、急ぎ夏侯楙に其事を語る。夏侯楙大に喜び、孔明すでに我計に落たり、先その用意をせよとて精兵百餘人を油幕の陰に藏おき、今蜀の大將二人崔諒と共に城に入べし、早く門を閉て討ころせ、其のち火の手を揚て合圖を成ば孔明必ず自ら來るべし、其時ことごとく出て討取とて用意すでに備りければ、楊陵門を推ひらき、是へ御入あれとて迎ける。關興は崔諒より前に進み、張苞は態と後に在けるが、楊陵が出るところを關興まづ一刀に斬ころす。崔諒驚き、計の露れたるを知馬を回して逃んとすれば、張苞大音あげて、汝等やさしくも丞相を欺んと計れる、御方の大軍すでに來れり、吾まづ門を開ん爲に汝に從ひ來れりと呼はり、矛を取のべ崔諒を刺殺す。關興すでに城中に入て火を掛ければ、是を合圖に蜀の大軍四方より亂れ入。夏侯楙ふせぐべき便なく、南の門より落ける所に、一手の勢路を塞ぎ、蜀の牙門將軍王平馬を飛して討て蒐り、只一合に夏侯楙を馬の上にて生取、のこる勢を斬ちらす。孔明は南安の城中に入、法を出して民を安んじ、夏侯楙を檻車の中に囚へおき、諸大將を集て其功勞を記しければ、鄧芝問て曰、丞相いかなれ

んぞ蜀に降らん、只敵の計に就て却て計を用ひ、奴原に膽をつぶさせんとて、崔諒と共に夏侯楙が前に出事の由を告ければ、夏侯楙が曰、いかなる計をか用ふべき。楊陵が曰、いま崔諒が勸に依て某城を開て降參すと詐り、蜀の勢を引入て城中にて殺すべし、崔諒は早く孔明が陣に行、この計を行ひ玉へ。崔諒乃ち城を出て孔明に見え、某いま楊陵に逢て降參を勸るに、楊陵元より蜀に降らんと思ふ心あれども、手下の勇士少きに因て夏侯楙を生取きたること能はず、若丞相自ら兵を引て攻かゝり玉はば、内より門を開て引入候はんと云ければ、孔明が曰、楊陵すでに御方に降る心ある時は、夏侯楙を生取こと掌の内にあり、若楊陵が勢少を患ば、今御邊に從て我に降れる兵百餘人あり、此内に御方の大將を隱おき、安定郡の勢に仕立、城中に入て夏侯楙が陣の邊に伏おき、夜半の時分に我自ら推よすべし、其時御邊早く楊陵と門を開玉へ。崔諒これを聞て心の内に思けるは、若蜀の大將を伴まじと云ば孔明必ず疑ふべし、不如城中に伴ひ行、ひそかに之を殺すべしとて、尊命に從はんと答ければ、孔明申けるは、わが大將關興、張苞二人を御邊伴て城中に入、夜半に火の手を擧て合圖をし玉へ、吾自ら兵を引て攻入夏侯楙を生取べしとて、日已に暮ければ、關興、張苞二人緊く鎧て安定郡の勢に雜り、崔諒に隨て南安の城下に到りければ、太守楊陵矢倉の上より問て曰、是はいづくの勢ぞ。崔

關興兵を引て路を遮り、後には張苞大勢にて攻かゝる。崔諒膽を冷し度を失て立ければ、手下の勢いまだ戰はざる先に散々に逃わしる。崔諒力なくわづかに百餘騎を從へ、命を棄て敵の圍を切ぬけ、小路を廻て安定の城に囘らんとすれば、蜀の勢はや入かはりて城の上より雨のふる如く矢を放つ。これ本より蜀の大將魏延孔明が計を受て、崔諒が城を出るを待て急に攻よせ、虚に乘て奪ひし者なり。この時崔諒前後に敵ありて城中に入ことも叶ず、天水郡を指て落ける所に、向より一彪の軍馬討て蒐り、大なる旗を進め、綸巾を戴き鶴氅を被て車の上に坐する者あり。是乃ち孔明なりければ、崔諒驚き馬を囘して逃んとするに、關興、張苞二手の勢討て出、いづくへか逃る、早々に降參せよと呼はりければ、崔諒四面道なきを見て了に馬より下て降人となる。孔明喜んで重く敬、乃ち問て申けるは、いま夏侯楙が逃こもりたる南安郡の太守は御邊と交り深きか。崔諒が曰、南安郡の太守は揚阜が族弟にて楊陵と申もの也、某と隣なるゆゑ交の深きこと兄弟の如し。孔明が曰、御邊ねがはくは南安の城に入て楊陵に利害を說、夏侯楙を生取て降り玉へ。崔諒が曰、しからば暫く南安城の圍を解玉へ、某城中へ入て共に出て降るべし。孔明これに從ひ、圍を解て二十里退きければ、崔諒只一騎城の門を開かせ、内に入て太守楊陵に見え、右の趣を明かに語りければ、楊陵が曰、われ久く魏の恩を受て今いづく

柴を積草を集て城を燒崩さんと云沙汰しければ、夏侯楙城中より之を見て大に笑ひ嘲り、畏る氣色ぞ無りける。此時安定郡は南安郡と北に隣て太守崔諒城中に在けるが、蜀の大勢南安の城を取まき夏侯楙を攻ると聞えければ、四千餘騎の兵をそろへ用心きびしくて居ける所に、忽ち南の門を扣て一人の使者事の急ありと呼はる。崔諒招き入て其ゆゑを問ば、答て曰、某は夏侯楙駙馬の大將に裴緒と申す者なり、今夏侯楙南安の城に在て事すでに急なり、此に依て某を使とし、天水、安定の二郡に救を求めしむ、太守兵を起して早々に後攻し玉へ、城中にも火の手を揚て合圖を知せ、内外より蜀の兵を攻やぶるべし、若救の勢遲き時は忽ちに落城すべし。太守崔諒が曰、夏侯駙馬の檄文は無か。裴緒息をも繼あへず、膚に付たる書簡を出しければ、崔諒いつはりとは知ず兵を揃へて救はんとす。裴緒は馬を乘かへ、是より又天水郡へ參り、太守を勸て救の勢を起さしめんとて、又城を出て走りけり。後二日すぎて一人馬を飛して馳きたり、天水郡の太守は已に兵を引て後攻に蒐り玉ふと呼はりければ、崔諒これを聞て諸將を集め、早人に先をせられたり、急ぎ出よとて、わづかなる文官を殘して城を守らせ、南安郡を指て向ふ所に、相圖の火と覺て遙に火の光見えければ、彌馬を早めて已に五十里ばかりに成ける時、俄に喊の聲地を動しければ、崔諒驚て是は何事ぞと問に、早馬告て曰、前には蜀の大將

○孔明智取三郡

夏侯楙わづかに逃れて南安郡の城に走ければ、趙雲、關興、張苞、鄧芝息をも繼せず追かけ、四方を圍で初め十日の間は晝夜力を盡して攻けれども、城の構へ堅固にして中々落べしとは見えざりけり。孔明も後ぞなへを沔陽に留め、左備を陽平に屯し、右ぞなへを石城に殘し、自ら中軍の勢を引て南安城に來りければ、趙雲等こと〴〵く見て計を求む。孔明が曰、われ自ら城の體を窺に、地僻に路險して急には爭か攻落ことを得ん、われ師を用ふること此城一つに限るべからず、汝等久しく此を圍ば、魏の勢必ず路を分て攻來るべし、若うしろに敵有て漢中を襲ば、悔るとも及ぶまじ。鄧芝が曰、夏侯楙は魏の駙馬、もし此人を生取なば自餘の大將百人にも勝るべし、今この所に追きたり、爭か棄て退くべき、一攻せめて御覽候へ。孔明が曰、われ自ら計あり、此處はいづくの地へか續たる。知者あり答て曰、西は天水郡に連り、北は安定郡に通じ候。孔明が曰、二郡の太守は如何なる人ぞ。答て曰、天水郡の太守は馬遵と申し、安定郡の太守は崔諒と申す。孔明乃ち魏延を呼て密に箇樣々々と計を私語き、又關興、張苞二人に計を敎へ、又物馴たる者を使者に仕たて、能々みな計を授て其のち南安城に攻かゝり、

の命を受、老將軍を援ん爲に五千餘騎にて來る所に、魏の大將薛則に出合、首を取て來れりと申す。趙雲心喜び、兵を引て敵を追んとするに、又西北の方より一手の勢討て出、魏の勢を四角八方へ蒐ちらす。趙雲これを見れば眞先なる大將右の手に青龍刀を提げ、左の手に首を持。これ乃龍驤將軍關興なり。某丞相の命を受て老將軍を援ん爲、五千餘騎を引て來る所に、今魏の大將董禧と云ものと戰ひ、首を取て來りたりと申す。趙雲大に喜び、二將軍共に希代の功を立玉ふ、何ぞ勢に乘て夏侯楙を生取玉はぬぞと云ければ、關興、張苞兵を引て追かくる。趙雲左右を顧て曰、彼等二人は吾ためには姪の如し、今日敵の大將を討て大なる功をなせり、吾は是國家の上將、朝廷の舊臣なるに、却て是小兒に及ず、吾まさに老の命を棄て先帝の御恩を報ずべしとて、兵を驅て追かけ、關興、張苞と一手に成て、落ゆく魏の勢を此に追つめ彼こに薙ふせ、鄧芝も跡に續てあまさじと攻ければ、屍は遍野に横たはり、血は流れて河の如し。元來夏侯楙は計なく、年若して軍に馴ざる大將なれば、大軍の亂れたるを見て一支も支ず、手下の大將百餘人を從へ南安郡を望んて逃わしり、城中に入て命を扶りければ、諸國の軍勢はみな行方なく落失たり。

鼓の聲響て魏の勢四方より討て出たり。鄧芝大に驚き急に退んとすれば、左に董禧、右に薛則、引つゝんで一騎も餘さじと散々に攻戰ふ。鄧芝小勢にて圍を出ること能はず。趙雲も初め深入して掛隔られ、東を討西を突て、いかに出んとすれども敵の圍いよ〳〵重なり、矢を射ること雨の如くにして、手勢纔に千餘騎に討なされ、人馬つかれて戰ふこと能ず。夏侯楙は山の頂に上て御方を下知し、旗を持て兵を使ひ、趙雲東に走れば旗を持て東を指し、魏の勢みな東を圍む。趙雲西に走れば旗を持て西を指、魏の勢又西を圍む。これに依て趙雲卒に出ること能ず。山の上へ登んとすれば大木大石雨の降る如くに拋下す。蜀の勢こと〴〵く傷を被り、辰の刻より酉の下まで圍を出ることを得ず。趙雲も馬より下て息を繼、月の明なるを待て一方を討やぶらんと待所に、東の山の端に月すこし揚りければ、魏の勢次第に近附、四方に火を付て喊の聲天地を崩し、石を投かけ矢を放つこと雨よりも繁く、趙雲早く降參せよと呼はりければ、趙雲怒て蒐破らんとすれども、十方より射かくる矢に蜀の兵すゝむこと能ず。趙雲天を仰で大に哭き、われ不服老、いま此にて討死せんかと云ところに、忽ち東北の角より喊を咄と造りて、取圍たる魏の勢散々に逃わしる。時に一彪の軍馬殺到し、眞先に進める大將素き袍に銀の甲を被、丈八の矛を横たへて手に一つの首を提げたり。趙雲これを見れば虎翼將軍張苞なり。某丞相

夏侯楙に飛でかゝる。夏侯楙畏て本陣へ逃入ければ、鄧芝兵を驅て掩殺するに、魏の勢討るゝ者その數を知ず、十里退て陣をとる。夏侯楙終夜諸大將を集、われ久く趙雲が名を聞けり、今日年老たりと云ども英雄あたる者なし、昔し當陽の長坂にて比類なき手柄を露したりと聞しが、今思ひやられたり、如何すべきと問ければ、參軍程武は程昱が子なり。進出て申けるは、某推量するに、趙雲勇なりと申ども、計を知じ、恐るゝに足ぬ敵なり、明日兵を引て打出玉ひ、詐り負て敵を誘き、伏勢をもつて四方より取かこみ、都督自ら山に上て下知し玉はゞ、忽ちに生捕にせん。夏侯楙これに從ひ、神武將軍董禧に三萬餘騎を付て左に伏せ、征西將軍薛則に三萬餘騎を附て右に伏せ、次の日大軍を進め、金を鳴し鼓を打て推よせたり。趙雲敵の來るを見て一陣に馬を出しければ、鄧芝諫て曰、昨夜魏の勢多く討れ、今日又よせ來るは必ず詐の計あらん、老將軍よく愼玉へ。趙雲が曰、量に乳臭の小兒なんぞ道に足んや、我今日夏侯楙を生取べし。時に魏の陣より大なる旗を指あげ、夏侯楙諸大將を引て馬を出す。趙雲槍を撚て蒐りければ、魏の偏將軍潘遂と云もの二三合鋒を交て散々に逃わしる。趙雲追かけて進ければ、又魏の陣より大將八人ぬき連て討て出、しばし戰て逃ければ、趙雲勢に乘てせめ蒐る。夏侯楙兵を引て散々に走りければ、趙雲、鄧芝計とは思ひも寄ず、鬨を作て追かくる所に、忽ち

く成ければ引回して兵と射る。其矢韓瓊が面に中り、馬より落て死ければ、韓瑤急に追かけ一刀に斬んとするを、趙雲身を側め槍を抛て韓瑤を引つかみ、生取て陣中に回り、又馬をのり替て出ければ、韓徳四人の子を目の前に討れ、膽を冷して怕れわなゝき、走て陣中へ入にける。西涼の勢兼て趙雲が名を聞知たれば、今その英勇を見て一人も出る者なく、戰はずして大に亂る。趙雲只一騎四方八面を蒐破り、無人所を行が如なりければ、鄧芝兵を引て掩殺するに、魏の勢散々に討れ、大將韓徳も甲を捨て馬を失ひ、歩立に成て命を助かる。見ぐるしかりける有樣なり。趙雲兵を收て陣中に回りければ、鄧芝賀して曰、某今日將軍の振舞を見るに、齡すでに七旬に過たりとは存じ候はず、精神なほ昔に替ず、四人の大將を討取玉こと誠に世に例なきことにて候。趙雲が曰、丞相われを老人なりとして用ひ玉はず、我これを以て其功を表さんとて、韓瑤を生捕て孔明に捷軍をぞ報じける。魏の都督夏侯楙は韓徳が破れたる由を聞、自ら兵を引て出ければ、趙雲も自ら千餘騎を率して鳳鳴山に陣を張。時に夏侯楙白き馬に騎て金の盔を戴き、旗の下に立て趙雲が往來するを望み、自ら出て戰んとしければ、後にありける韓徳すゝみ出て曰、われ四人の子を趙雲に殺されたり、ねがはくは此恨を散ぜんとて、大なる斧を打振、馬を飛して討て蒐る。趙雲槍を舞して出むかへ、戰ひ三合ならざるに韓徳を一槍に突ころし、又

趙雲

趙雲一鎗に韓徳を突殺す
韓徳

で大なる路に蒐り、法に依て兵を用ふる時は、豈勝ずと云の理あらんやとて、了に魏延が計を用ず、趙雲、鄧芝に命じて兵を進めしむ。去ほどに魏の都督夏侯楙長安に在て諸國の勢を集めければ、不日に來り從ふ勢二十萬に餘れり。中にも西涼の大將韓徳と云もの能大なる斧を使て萬夫不當の勇あり。西羌の兵八萬餘騎を引て馳來りければ、夏侯楙甚だ喜び、厚く恩賞を與て先手に備ふ。韓徳もとより韓瑛、韓瑤、韓瓊、韓琪とて四人の子あり、共に弓馬に達して力よの常に超たりければ、吾に敵する者あらじとおもひ、八萬餘騎を率して鳳鳴山に到り、蜀の勢と出あひ、たがひに陣を取て四人の子を左右に立、大音あげて、反國の賊徒なんぞ吾境を犯と呼はりければ、趙雲槍をひねりて突てかゝる。韓徳が長男韓瑛馬を出して、戰三合ならざるに趙雲に刺殺されければ、次男韓瑤刀を回して斬て蒐る。趙雲虎威を逞しうし、勇を振て戰ひければ、韓瑤すでに危く見えけるを、三男韓瓊方天戟を持て討てかゝり、二人夾んで攻けれども、趙雲すこしも槍を亂さず、火を散して戰しかば、四男韓琪これを見かねて兩口の日月刀を打ふり、三方より攻けれども趙雲なほ怕るゝ色なく戰ひけるが、暫ありて韓琪槍に當て馬より落。時に魏の軍中より援の勢かゝりければ、趙雲馬を打て引回を、韓瓊追かけ弓を取て矢を放けるに、續て三筋まで皆槍にて打落されしかば、戈を揮て追かくる。趙雲しり目に之を見て彀よ

乃ち都を起て長安に下著し、關西の軍馬二十萬騎を集め、孔明を破んと備を成て待蒐たり。

○趙雲大破魏兵

時に蜀の建興五年夏四月、孔明三十萬の勢を引て已に沔陽に著、こゝに馬超が墳ありければ、馬岱に命じて祭を成しめける所に、早馬馳來り、魏主曹叡すでに夏侯楙と云者を大將とし、關西の兵を集めて長安を出て防がんとすと告ければ、魏延進み出て曰、夏侯楙は魏の駙馬都尉に封ぜられて、乃ち膏粱の子弟懦弱にして計なし、願は某に五千餘騎を借玉へ、直に褒中の路より秦嶺を越、子午谷に出て北に向ひ、十日の內に長安に到るべし、夏侯楙思ひよらず、某が俄に出たるを聞ば、必ず橫門邸閣を望で走るべし、然る時は敵の棄たる兵糧を奪ひ、某東より攻かゝり、丞相大軍を引て斜谷より進み玉はゞ、咸陽より西は一鼓して攻とるべし、これ乃ち萬全の計なり。孔明あざ笑て曰、これ萬全の計に有ず、汝甚だ敵の計なきを欺く、敵もし山際の切所を兵を分て塞ぎなば、汝が五千餘騎一人も生て回る者あるべからず、此計甚だ危し、決して行こと有べからず。魏延が曰、丞相兵を率して本道より進み玉へば、敵も大軍を集て要害に防ぐ、然る時は徒に人馬を損じて何の時にか中原を平ぐべき。孔明が曰、われ隴右より進

精兵を分て戰將十人を指そへ、趙雲、鄧芝を前部大先鋒とし、大軍すでに都を出ければ、後主劉禪百官を作ひ、北門の外十里送り玉ふ。孔明が到るところ百姓路に沿て出迎へ、簞食壺漿して王の師を勞ふ。大軍の通るところ秋毫も犯ことなく、漢中を望んて進發す。去程に早馬急を告て孔明せめ上るとひしめきければ、魏主曹叡以ての外に驚き、群臣を集めて問て曰、いま孔明三十萬騎にて攻上る、誰を大將として防べき。時に一人進み出て申けるは、某が父漢中の戰ひに討れし、齒を切の恨ありと申せども、今に之を報ずること能はず、今蜀の勢境を犯す、臣願くは打向ひ、關西の兵を催して、上は國の爲に力を盡し、下は父の爲に仇を報ずべし。諸人これを見れば夏侯惇が子に、安西鎭東將軍尙書駙馬都尉夏侯楙字は子休なり。幼少より夏侯惇に養はれ、漢中の合戰に父夏侯淵蜀の大將黃忠に討れしかば、曹操之を憐み、乃ち壻として淸河公主を娶しむ。是より諸人重んじ尊と云ども、天性躁して慳吝なりし故、未だ一度も戰場へ臨ず。魏主曹叡其望に任せ、大都督に封じければ、司徒王朗諫て曰、夏侯駙馬元より軍に馴ず、今初て大軍を司るは其宜に當ず、況や孔明は尋常の敵にあらず、別に大將を擇で防玉へ。夏侯楙怒て申けるは、汝は孔明と私に內通の心あるか、我幼より父に從て兵法を學び、通ぜずと云事なし、君孔明を生捕ずんば誓て此處へ再び囘じと呼りければ、重て言を出す者なし。夏侯楙

帳前左護衛使龍驤將軍關興
右護衛使虎翼將軍張苞

此等を宗徒の者として用意一々に備りければ、後主劉禪孔明を平北大都督丞相武卿侯領益州の牧に封じ、內外の事を總攝らしむ。孔明乃ち檄文を白帝城へ遣し、李嚴等に川口を守て吳の國の壓たらしめ、建興五年春三月丙寅の日を選で打起ければ、忽ち一人の老將すゝみ出、某いま年老たりと申ども、尙廉頗が勇馬援が力あり、何ゆゑに我を用ひ玉はぬぞと呼はる。諸人これを見れば乃ち常山の趙雲なり。孔明が曰、われ南蠻を平げて都に回て後、馬超病を受て亡たり、吾甚だ之を惜で右の臂を失ふが如し、今將軍年すでに老て、萬一差ある時は一世の英名を動搖して御方の鋭氣を失はん。趙雲聲を勵て曰、我先帝に從てより已來陣に臨んで退くことなく、敵に逢て先を蒐ずと云ことなし、大丈夫の士は戰場に死するを以て幸とす、某ねがはくは此度第一番の先手と爲て敵の陣をやぶるべし。孔明再三止めて從はざりければ、趙雲申けるは、もし某を以て先鋒とし玉はずんば、只今首を刎て亡ぶべし。孔明が曰、御邊しひて望み玉はば一人の副將を付べし。時に列坐の中より聲をあげ、某不肖に候へども願くは老將軍と先手に進んと呼はる者あり。諸人これを見れば中監軍揚武將軍鄧芝なり。孔明然るべしと喜び、五千の

前將軍征南將軍劉巴
前護軍偏將軍漢成亭侯許允
左護軍篤信中郎將丁咸
右護軍偏將軍劉敏
後護軍典軍中郎將官雝
行參軍昭武中郎將胡濟
行參軍諫議將軍閻晏
行參軍偏將軍爨習
行參軍裨將軍杜義
武略中郎將杜祺
綏戎都尉盛勃
從事武略中郎將樊岐
典軍書記樊建
丞相令史董厥

後軍領兵使安漢將軍領建寧太守李恢
副將軍定遠將軍領漢中太守呂義
兼管運糧左軍領兵使平北將軍陳倉侯馬岱
副將飛衞將軍廖化
右軍領兵使奮威將軍博陽亭侯馬忠
撫戎將軍關內侯張嶷
行中軍師車騎大將軍都鄉侯劉琰
中將軍揚武將軍鄧芝
中參軍安遠將軍馬謖
前將軍都亭侯袁綝
左將軍高陽侯吳懿
右將軍玄都侯高翔
後將軍安樂侯吳班
領長史綏軍將軍楊儀

るに、又魏を征伐せば恐らくは神思を勞せんと宣へば、孔明申けるは、臣先帝の孤を托する命を受て晝夜に心を安んぜず、今南蠻を平げて國に囘り、已に一年に及びぬれば軍馬よく整ひ器械みな備れり、此時に乘て中原を攻取ずんば、何の日をか期し申さん。時に列坐の中より太史譙周すゝみ出て申けるは、臣よく天文を見るに、北方旺氣盛にして星の光ます〱明なり、魏いまだ討べからず、丞相は深く天文を知玉ふ、何とて强て事を爲玉ふぞ。孔明が曰、天道の理は變易常ならず、何ぞ是に拘るべけんや、我いま軍馬を漢中に駐め、敵の虛實を伺て時を待つて攻かゝるべしとて、了に諸人の諫を用ひず。郭攸之、董允、費褘を侍中として宮中の事を總治めさせ、向寵を大將として御林の兵を掌らしめ、蔣琬を參軍とし、長裔を長史として丞相の事を行はしめ、杜瓊を諫議大夫とし、杜微、楊洪を尙書とし、孟光、來敏を祭酒とし、尹默、李譔を博士とし、郤正、費詩を祕書とし、譙周を太史とし、內外の文官武將百餘人を留て蜀中の事を掌しめ、孔明丞相府に歸て諸大將を集む。其人々には、

前督部鎭北將軍領丞相司馬涼州刺史都亭侯魏延

前軍都督領扶風太守張翼

牙門將裨將軍王平

大小悉以咨之、必能使行陣和睦優劣得所。親賢臣遠小人、此先漢所以興隆也。親小人遠賢臣、此後漢所以傾頽也。先帝在時毎與臣論此事、未嘗不嘆息痛恨於桓靈也。侍中尚書長史參軍、此悉貞亮死節之臣也。陛下親之信之、則漢室之隆可記日而待也。臣本布衣躬耕南陽、苟全性命於亂世、不求聞達於諸侯。先帝不以臣鄙、猥躬自枉屈、三顧臣於草廬之中、諮臣以當世之事。由是感激許先帝以驅馳。後値傾覆、受任於敗軍之際、奉命於危難之間。爾來二十有一年矣。先帝知臣謹愼、故臨崩寄臣以大事也。受命以來、夙夜憂慮、恐付托不效以傷先帝之明。故五月渡瀘深入不毛。今南方已定兵甲已足。當獎率三軍北定中原。庶竭駑鈍、攘除姦凶、以復興漢室還於舊都、此臣所以報先帝而忠陛下之職分也。至於斟酌損益進盡忠言、則攸之禕允之任也。願陛下託臣以討賊興復之效。不效則治臣之罪、以告先帝之靈、責攸之禕允等之咎以彰其慢。陛下亦宜自課以諮諏善道、察納雅言、深追先帝遺詔。臣不勝受恩感激、今當遠離。臨表涕泣不知所云。謹表。

後主劉禪これを見玉ひ、相父南蠻を平げて遠く艱難を渉り、始めて都に回て坐いまだ安からざ

べし。魏主曹叡なほも心穏ならず、如何せんと案じ煩ひければ、華歆が曰、彼に兵馬を司しむべからず、官を剝で故郷に追回し玉へ、是漢の文帝の周勃に報じ玉ふ例にて候。曹叡これに依て司馬懿が官職を削りて故郷へ回し、曹休に命じて雍涼の軍馬を司しむ。蜀の細作これを聞て其趣を注進しければ、孔明限なく喜び、吾久しく魏を伐んと思へども司馬懿が雍涼の勢を司るを爲方なく思ひしに、いま已に計を以て退けたり、吾なんの憂かあらんとて、次の日後主劉禪朝を設玉へば、孔明列を出て出師の表を上る。其文に曰、

先帝創業未半而中道崩殂。今天下三分、益州疲敝、此誠危急存亡之秋也。然侍衛之臣不懈於內、忠志之士忘身於外者、蓋追先帝之殊遇、欲報之於陛下也。誠宜開張聖聽、以廣先帝遺德、恢弘志士之氣。不宜妄自菲薄引喩失義、以塞忠諫之路也。宮中府中俱爲一體、陟黜臧否不宜異同。若有作姦犯科及爲忠善者、宜付有司論其刑賞、以昭陛下平明之治。不宜偏私使內外異法也。侍中侍郎郭攸之費禕董允等、此皆良實、志慮忠純。是以先帝簡拔以遺陛下。愚以爲、宮中之事、事無大小悉以咨之然後施行、必能裨補闕漏、有所廣益。將軍向寵性行淑均、曉暢軍事、試用於昔日。先帝稱之曰能。是以衆議擧寵爲督。愚以爲宮中之事、事無

を擾亂せしめ、其虛に乘て討んと計ること有べし、何の閒定たることも無、容易に兵を起し玉ふこと甚だ以て然るべからず。魏主曹叡が曰、司馬懿が謀反若實なるに、其儘にて閣ば大なる禍を成ん。曹眞が曰、もし御心安からずんば漢の高祖の雲夢に遊び玉ひし例に效て、陛下自ら安邑へ行幸し玉ひ、司馬懿が御迎に出る時其氣色を窺て車の前にて生捕玉へ。曹叡これに從ひ、曹眞を大將として十萬の勢を從へ、自ら安邑へぞ赴ける。司馬懿は浩る事ありとは夢にも知ず、天子行幸なると云を聞て己が勢の程を知しめんと思ひければ、華やかに兵を整へ數萬騎を引て出迎ふ。近臣これを見てすはや司馬懿が推よすると躁ぎければ、曹叡色を失ひ曹休に命じて防しむ。曹休承はり、兵を備て出ければ、司馬懿これを見て御幸なりと思ひ、馬より下て地に伏す。曹休すゝみ出て大音あげ、仲達先帝の孤を托する遺命を受て、今なに故に謀反すると呼はりければ、司馬懿大に驚て遍體に汗を流し、是はいかなる故にて候ぞと問ば、曹休委く其故を語る。司馬懿が曰、これは吳蜀間諜の計にて君臣の間を隔害し、虛に乘て討んとするもの也、某天子に見て此由を奏すべしとて、兵を盡く退け、車の前に拜伏して流涙曰、臣先帝孤を托するの命を受て、安んぞ野心を挾べき、是みな吳蜀の計にて間諜を以て君臣を亂さんとす、ねがはくは詔を受て先蜀を攻やぶり、次に吳を滅して國の恩を報ず

に、其文に曰、

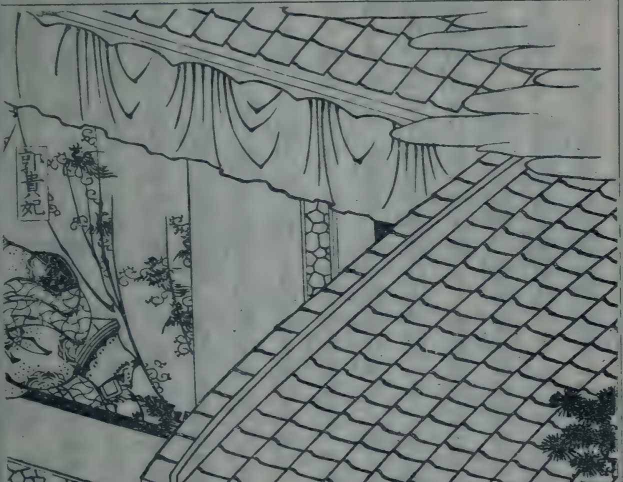
驃騎大將軍總領雍涼等處兵馬事司馬懿、謹以信義布告天下。昔太祖武皇帝創立皇基、本欲立陳思王子建爲社稷主。不幸奸讒交集、歲久潛龍。今皇孫曹叡素無德行、妄自居尊、有負太祖之遺意。今吾應天順人、以慰萬民之望。克日興師到闕、皆早皈命新君。如不順者、當滅九族。先此告聞、想宜知悉。

曹叡これを見て心の內深く疑ひ、群臣を集て評議しければ、太尉華歆等申けるは、司馬懿ゆゑ無に表を上て雍涼を守んと願ひしは此企あるに依て也、昔太祖武帝つねに某等に向て、司馬懿は鷹の如くに視て狼の如に顧る、必ず之に軍兵を司しむること勿れ、若兵權附ば國家の禍を成べしと宣へり、今日謀反すでに露たり、早々に征伐あるべし。王朗が曰、司馬懿は深く韜畧を明て善兵機を曉る、若早く誅せずんば後必ず王莽が禍を成ん。曹叡乃ち詔を下して兵を招きあつめ、自ら征伐せんと云ければ、列坐の中より大將軍曹眞すゝみ出て曰、諸公の意見わが意と相違せり、文帝崩御の時に臨んで臣等四人を召よせて孤を托し玉ひしは、司馬懿が謀反の心なきを能々知せ玉ふ故なり、然るにかる〴〵布兵を起して征伐せば、彼已ことを得ずして自ら謀反を成べし、況んや吳蜀の敵いまだ滅ず、間諜の計を用て君臣の間

官武將こと〴〵く官を進めて天下に大赦を行ひける。時に雍涼の州郡守る人なかりければ、司馬懿表を上て西涼の州郡を守らんと請。魏主曹叡これに從ひ、司馬懿を雍涼等處の兵馬提督としければ、司馬懿乃ち西涼州に下りける。蜀の細作これを聞て孔明に告ければ、孔明大に驚て曰、曹丕すでに死して曹叡を國の主とす、是等の事は心に掛るまでもなし、河内温人司馬懿字は仲達と云ものは當世の英雄なるに、今もし雍涼の兵を司らば後必ず蜀の患を爲ん、急ぎ兵を起して早々に討やぶるべし。參軍馬謖が曰、いま丞相南蠻を平げて回り玉へば、人馬こと〴〵く疲て物の用に立ず、然るに遙々兵を興して魏を伐玉はんは甚だ以て宜しからじ、某一つの計あり、曹叡を欺て必ず司馬懿を殺さしめんと云ければ、孔明喜で其計を問。馬謖計を獻じて曰、司馬懿久しく魏に事ふと申せども、曹叡つねに之を疑ふ、密に洛陽鄴城の邊に人を遣し、司馬懿謀反の企ありと沙汰させ、廻文を數十通作て諸方に分ち遣さば、曹叡いよ〳〵疑を成て必ず司馬懿を殺すべし。孔明然るべしと喜び、密に人を遣し此計を行はせければ、案の如く鄴城の門を守る者彼廻文を見て急に曹叡に獻つる。曹叡色を失て開き見る

○孔明初上出師表

郭貴妃張韜と語合
蜜計と
張韜


郭貴妃

鹿畏れて曹叡が馬の下に逃臥たり。曹丕聲を揚、汝なにとて其子鹿を射ざると云ければ、曹叡馬上にて涙を流し、父君いま鹿の母を射ころし玉ふ、我いかでか又その子を殺に忍んと云ければ、曹丕弓を地に抛すて、我子は眞に仁德の主なりと云て了に曹叡を齊公に封じ、後に亦平原王に封ず。夏五月曹丕傷寒の病を受て諸の醫藥しるし無、すでに危なりければ、嘉福殿へ中軍大將軍曹眞、鎭軍大將軍陳羣、撫軍大將軍司馬懿三人を呼よせ、國家の大事を託して太子曹叡を呼、いま朕が病すでに重し、此子年幼して天下を治むること能まじ、汝三人よく心を盡して之を輔け、朕が心に背こと勿れと云ければ、三人みな答て曰、陛下なにゆゑに浩ることを宣ふぞ、臣等ねがはくは力を盡して忠を致し、千秋萬歲を祝すべし。曹丕が曰、今年許昌の城門ゆゑなきに自ら崩る、是不祥の兆なり、朕これに因て死せんことを知。時に征東大將軍曹休きたり、內に入て病を問ければ、曹丕喜て曰、卿等四人は皆是國家柱石の臣なり、朕死すとも何の恨か有ん、よく力を盡して太子を佐よと云すて、忽然として命終れり、時に年四十歲。是に依て曹眞、陳羣、司馬懿、曹休等哀を擧喪を發して軈て曹叡を大魏皇帝と仰ぎ、父の曹丕を文帝と謚し、母の甄氏を文昭皇后と謚し、鍾繇を太傅とし、曹眞を大將軍とし曹休を大司馬とし、華歆を太尉とし王朗を司徒とし、陳羣を司空とし司馬懿を驃騎將軍とし、其餘の文

ば、後主たすけ起して車を並べて都に回り、太平の酒筵を設て三軍を勞ひ玉へば、南蠻より貢を捧て來り服するもの二百餘箇所に及べり。孔明又討死したる者の子孫を尋て、一々あつく恩賞を施しければ、蜀中自ら治り年豐に人悅で、萬づ安寧ならずと云こと無りけり。魏の曹丕は初め甄氏の女を以て夫人とし、傾國の色世に勝れたれば其寵愛かぎりなし。この甄夫人は中山無極の人にて上蔡の令甄逸が女なり。一旦袁紹が二男袁熙が妻となりけるが、曹丕が夫人と成て男子を産り。是を曹叡字は元仲と云。幼より聰明なりければ、曹丕甚だ是を愛す。後に安平廣宗の郭永と云もの一人の女を持、顏色殊に美かりければ、其父つねに我女は乃ち女中の王なりと云り、是に因て世の人女王と號す。曹丕これを迎て貴妃とし、寵愛又甄皇后が上に出。甄皇后は色衰へ寵休であるも無が如くに成ければ、郭貴妃つねに甄皇后を殺して自ら正宮たらんことを計り、曹丕が幸臣張韜と云ものを語ひ、或時曹丕疾に臥たる時甄皇后が居所の邊より出たりと沙汰して、桐の木にて作れる人形を取出し、其上に何の年月天子此の如く地に埋べしと書たるを曹丕に見せければ、曹丕大に怒り、遂に甄皇后を勒殺して郭貴妃を皇后とす。此に依て曹叡は郭皇后に養はれ、年十五に及んで能弓馬に達しければ、其年の二月に曹丕、曹叡を伴て獵に出、山際より妻鹿の子を連たるを追出す。曹丕一矢に妻鹿を射殺しければ、子

生則有勇、死且成名。今則凱歌欲還。獻俘將及。汝等英靈尙在祈禱必聞。隨我旌旗逐我部曲同回上國各認本鄕、受骨肉之蒸嘗領妻子之祭祀、莫作他鄕之鬼徒爲異國之魂。當念姻親泣哭於朝昏、子女號咷於旦暮。吾奏皇帝使爾等各家盡霑恩露、年々請給衣糧、月々不絕俸祿、用玆酬答、以慰汝心。父子傳孫、名題蜀史。今則聊表丹誠、陳其祭祀、各領酒食共享一餐。依此靈旛隨我返國、嗚呼哀哉、伏惟尙饗。

祭文よみ了りければ、孔明聲を放て哀み哭き、痛切して已ざりしかば、情三軍を動し、蠻夷の奴までも涙を流して盡く哀慟す。孔明まつりの物を水中に投入ければ、但愁雲怨霧の中に隱隱として數千の陰鬼風に隨て散失たり。次の日大軍こと〴〵く瀘水を渡りけるに、浪靜に風穩なりしかば、共に鐙を叩て凱歌を唱へ、已に永昌郡まで來て呂凱、王伉を留て四郡を守らせ、孟獲に暇を賜て、汝よく政を勤て下を馭め、居民を懷て農務を怠しむること勿れと云ければ、孟獲拜謝して此より南蠻國に回りけり。孔明兵を率て已に成都に入ければ、後主劉禪鑾駕に召れ、自ら三十里出て迎へ玉ひ、路の傍に立て父に事るが如に敬ひ玉へば、孔明車より飛下地に拜伏して、臣すみやかに蠻方を平ぐること能はず、主上の宸襟を安からざらしむと云けれ

を引て此河を渡りける時、數百人毒に當て水中に亡たり、その外南蠻の兵限なくこの邊にて討れしかば、其魂魄怨を懷て祟を成と覺えたり、今夜自ら祭べしとて膳夫を呼よせ、牛馬の肉を以て麪に和し、人形に首を作て此を饅頭と名づけ四十九の首に代、今の饅頭は此遺法也。その夜岸に沿て招魂の旛を建、四十九の燈を連て、三更の時分風やみ浪平なりければ、孔明金冠を戴き鶴氅を被て慇懃に祭をなし、董厥に命じて祭文を讀しむ。その文に曰、

維大漢建興三年秋九月一日、武鄕侯領益州牧丞相諸葛亮謹陳二祭儀一、享三於故歿二王事一蜀中將校本土神祇及蠻夷亡者陰魂上曰、昨自二遠方一侵レ境異俗起レ兵、縱二蠆尾一以興レ妖、恣二狼心一而逞レ亂。且我大蜀皇帝威勝二五霸一明繼二三皇一、定二乾坤於戰場之中一、立二社稷於干戈之內一。一自二蠻夷一罔レ窮、天道來叩二皇風一。吾奏二君王一、請二三軍一暫別二龍庭一、諸公祖餞、棄二六親一遠辭二家國一。於レ是問二罪南蠻一、莫レ不二逢レ山開レ路息レ浪爲一レ橋。大擧二貔貅一將レ除二螻蟻一。大軍雲集、狂寇氷消。纔聞二破竹之聲一、便是失猿之勢。但士卒兒郞盡是九州豪傑、將校官僚皆爲二四海英雄一。習レ武從レ戎、投レ明事レ主、莫レ不下同伸二三令一共展中七擒上。齊堅二奉國之誠一、並是忠レ君之志、何期汝等偶失二兵機一緣レ落二奸計一、或流矢所レ中魂掩二泉臺一、或槍劍所レ傷魄歸二長夜一。志堅二忠孝一命終二於刀斧之前一。正直奉レ公、骸棄二塵埃之內一。

○孔明秋夜祭瀘水

蜀の建興三年秋九月、孔明思ふ圖に南蠻を攻順へ、勝軍を收めて都に回りければ、南蠻王孟獲もろ〳〵の洞主、酋長を率て遙々と相送る。先陣すでに瀘水の岸に近付ければ、俄に雲掩ひ霧起て、狂風沙を飛し白波天に漲て、渡るべき便を得ず。孔明これを聞て孟獲に其故を問ば、答て曰、この河は昔より猖神ありて、動すれば禍を成、往來の人祭を成ざれば、いつも容易く通ることあたはず。孔明問て曰、いかなる物を用て祭をなすべき。孟獲が曰、昔より此水神を祭るには、七々四十九の人の首を斬て黑き牛白き羊を以て之を具ふ、然る時は風恬に浪穩にして年自ら豐なり。孔明が曰、われ今南蠻を平定して安んぞ妄に人を殺すべきとて、自ら岸の邊に出、處の者を呼で問ければ、老人數十人來て曰、先に丞相この處を御通ありて後、毎夜鬼神の哭き號ぶ聲して、曉に至るまで人の毛孔を寒からしむ、何さま瘴烟の中に怪げなる陰鬼あつまり、禍をなすと見えて候。孔明嘆息して曰、これ我積惡のなす所なり、先に馬岱兵

まつりをなし、皆相呼で慈父と號し、われ劣じと金珠、珍寶、丹漆、藥材、耕牛、戰馬を送り、毎年天子に貢物を進めて、誓て又叛じと云て南方すでに定りければ、孔明大に諸軍を勞ひ、魏延を先陣の大將として都を指てぞ打起ける。

汝等を盡く放して回らしめ、又人馬を集めて勝負を決せよと宣ぞ、早く回りて再び戰の備をなせと云せければ、孟獲涙を流して曰、七たび擒にして七たび縱と云こと古より未だ聞ず、我化外の人なれども頗る禮義を知れりとて、遂に一族を引具して皆地の上に匍匐し、肉袒して罪を謝し、丞相の天威南人再び反じと云ければ、孔明が曰、御邊いま心服せるか。孟獲泣て曰、某子々孫々みな覆載生成の恩を感ず、安んぞ服せざらん。孔明乃ち孟獲を帳上に請じ、酒宴を設て喜を伸永く南蠻の王たるべしとて、奪ひ取たる地を盡く返しければ、孟獲及び宗黨に至るまで、踊躍して喜び拜謝して去にけり。長史費禕ひそかに孔明を諫て申けるは、今丞相自ら不毛の地に遙々と入て、已に蠻夷を服せしめ玉へり、何ぞ官人を留め置て孟獲と共に國を治させ玉はぬぞ。孔明が曰、もし官人を留置時は三の易からざることあり、他國の人を留る時は軍兵をも殘し置べし、是兵糧の運送に勞す一つの不易なり、數十度の戰に南蠻の勢親を討れ子を討れたる者多し、若官人を留めて軍兵をのこさずんば必ず禍を成ん二の不易なり、蠻夷しきりに廢殺の罪ありて自ら疑の心を挿む、若官人を留め置時は了には相共に疑を發して禍の基と成ん三の不易なり、我いま人を留めず糧を運ずして、自然に安からんと云ければ諸人みな拜伏す。此時蠻夷こと〴〵く孔明が徳を感じ、生祠を立て四時不レ怠

の間には伏勢あらんと疑ふべし、この故に旗ばかり立置たり、魏延に十五度の戰を負させたりしは、敵の心を傲しめんが爲なり、心傲時は必ず勝に乘て追蒐る、我盤蛇谷を見るに只一つの路ありて、四方みな屏風を立たるが如く、地中こと〴〵く沙なるゆゑに天の助なることを知、これによりて馬岱に命じて樹木を伐拂ひ敵の心を疑はざらしむ、先の黒き櫃の內には兼より地雷と云ものを造り置たり、一つの鐵砲に九つの珠を藏め三十歩づつを隔て地に埋め、大竹の節を通し藥線を引て四方みな通ぜしめ、纔に一處に火を著る時は皆同時に震動して山を崩し岩を裂、われ又趙雲に命じて預め乾ける柴を車に積、內に硫黃焰硝の類を籠置しめ、山の上に大木大石を集めて路を塞の備を成しめ、魏延に命じて兀突骨並に藤甲の軍を谷の內へ引き入させ、後より魏延を出して急に前後の道を塞ぎ、一同に火を掛たる者なり、吾聞り水に利ある物は必ず火に利あらずと、藤の甲は刀も矢も透らず水に入て濕はずと云ども、元來油に浸せる物なれば火きはめて著やすし、南蠻の勢此の如く頑皮なれば、火攻に非ば安んぞ能勝ん、然れども烏戈國の人を盡く燒て種類を留ざるは、我身の罪なりと語りければ、諸將拜伏して曰、丞相の天機鬼神も測がたし。孔明乃ち孟獲、祝融夫人並に孟優、帶來洞主その外の一族共を盡く解ゆるさせ、諸將に命じて酒を飮して、丞相いま汝が皮の厚き面を見んことを羞て、早々に

りも易く、兵粮の車と見えたる中より硫黄焰硝迸り出て、兀突骨を初として三萬の藤甲の軍勢、こと〴〵く谷の内に燒殺さる。孔明山の頂より望み見れば、盤蛇谷の中に死したる蠻兵拳を伸脚を張て、大半は鐵砲にて頭を打れ微塵に碎けて、上が上に重り臥その臭こと聞べからず。孔明涙を流して嘆息し、吾社稷の爲に功ありと云ども必ず壽命を損ずべし、烏戈國の勢を一人も漏さずと云ければ、聞人みな哀を催ける。この時南蠻王孟獲は御方の燒殺されたるをも知ず、本陣を守て居けるが、忽ち蠻兵千餘人來り喜び笑て再拜し、烏戈國の軍勢蜀の勢を打やぶり、孔明を盤蛇谷の中にて取卷たり、大王早く來り玉へと告ければ、孟獲大に喜び一族を引具して直ちに盤蛇谷に來る時、火の光夥く起て臭こと甚しかりければ、扨は計に中りぬと思ひ急に退かんとする時、左に張嶷右に馬忠二手の勢殺出す。孟獲一軍して落んとするに、又喊の聲耳本に響て、手下の勢に大半蜀の兵雜り居ければ、ひし〳〵搦め取、孟獲は只一騎圍を出山路を尋ねて走りけるに、忽然として向より一輛の車を推出し、孔明その上に端坐して大音聲を擧、反奴孟獲この度服すやと呼はりたれば、孟獲急に馬を回して走りけるに、馬岱五百餘騎にて路を横ぎり、了に生取てぞ回りける。孔明は本陣に回り諸將を集めて申けるは、吾いま此計を行は已ことを得ざる故なり、大に陰德を損ず、我料に南蠻の勢山の内林

三百餘里きたれり、蜀の勢膽を冷し風を望んで逃わしる、大事すでに定れりと云ければ、兀突骨勇喜び、自ら眞先に進み來る。第十六日に及んで魏延敗軍を引て進みければ、兀突骨白象に騎て眞先に出、頭に日月の狼鬚帽を戴き、身に金珠の纓絡を垂腹背に鱗生て、眼の光星の如く、大軍を驅て進み來る。魏延震ひ怕れ一支も支ず、山を轉に盤蛇谷の内へ走りければ、兀突骨つゞいて追かけ山に草木なきを見て、伏勢なしと喜び心の儘に入ければ、黑き櫃を載たる車數を知ず弃置たり。南蠻の勢これを見て、此は蜀の軍勢つねに兵粮を運路なるが、大王の來り玉ふを見て車を弃て走りたる也と報ず。兀突骨太だ喜び兵を驅て進み、爭うて車を奪ひ引て谷の口に出んとすれば、山の上より大木大石を投下して、已に谷の口を截塞だり。兀突骨自ら兵を下知して道を開かんとするに、前に柴を積だる車あり、一齊に火燒出たりしかば大に驚て、すは大事に及ぶぞ早く退けと聲々に叫ぶ所に、後に又喊の聲して、後の路も乾ける柴を積で敵すでに塞だりと報ず。時に大小の車に火燒出、内に硫黄焰硝ありて一齊に燒付けれども、兀突骨四方に草木なきを見て心さのみ周章せず、路を尋ねて走らんとするに、兩方の山の上より投火把を雨のふる如く投下しければ、地の底に伏たる藥線ことゞく火燒付鐵砲谷の中に遍滿し、火の光みだれ舞て天に漲り地に溢る。況や藤の甲は油に浸せる物なれば、火の燒著こと蘆葭よ

時に土安、奚泥を呼よせ、汝二人兵を引てこの敵を蹴散して弃よと下知すれば、二人いそぎ藤甲の軍を引て水を渡り、蜀の陣に突て入。魏延いつはり負て走りければ、南蠻の勢背て追ず水を渡りて回りけり。次の日魏延又陣屋を造りければ、南蠻の勢水を渡て攻かゝる。魏延しばらく戰て散々に走りければ、南蠻勢十里あまり追蒐、よく四方を窺はしむるに伏勢も無りしかば、敵の弃たる陣屋へ籠て次の日勝軍を報じければ、兀突骨自ら大軍を引て水を渡り來る。魏延これを見て兵を退けしかば、兀突骨勢に乘て追かくる。蜀の勢われ先にと逃て甲盛を脱すて、白旗の立たる處を望んで逃あつまりければ、一つの陣屋あり。此中に籠て戰ふに兀突骨大軍を驅て進みければ、魏延又陣屋を弃て逃わしる。南蠻の勢その陣を乘とり勢に乘て追かけしかば、魏延取て回し五六合戰うて又わしり、白旗を望んで來りければ又一つの陣屋あり。乃ち此處に屯劄しければ、次の日南蠻の勢大に進む。魏延しばらく戰うて又わしりければ、南蠻の勢その陣を攻とり、已に十五日が間に蜀の陣屋七つを取て、十五度の戰に打勝ければ盡く勇み喜び、兀突骨自ら眞先に進んで追かけ、林の陰谷の内を探しむるに、只蜀の旗ばかりを立て兵ひとりも無りければ、孟獲大に喜て申けるは、孔明すでに計きはまり十五度の戰に負て七所まで陣屋を奪はる、御方の勢勝に乘て何ぞ敵を畏れんや、已に桃葉の渡を離て

勢を能々警め盤蛇谷の前後を固めて、法の如くに行へ、半月の内に盡く完く備しめよ、若失こと有ば軍法を正さんと云ければ、馬岱計を受て出にけり。孔明又趙雲に申けるは、汝盤蛇谷の後なる三江の大路に行て、此の如く〱に用意せよ、日限を誤ること勿れ。次に魏延に申けるは、汝手下の勢を引て桃葉の渡に陣屋を造り、南蠻の勢もし水を渡して攻かゝらば、汝その陣を打すて白旗の立たる所を望んで走り來れ、今日を始として十五日の内に十五度の戰ひに打負て、態と敵に七所の陣屋を奪はせ、汝は只いづくにても白旗の處に來れ、自ら身を脱るゝの道あらんと云ければ、魏延命を受て心の内たのしまず、怏々として去にけり。孔明又張翼を呼で敵を誘く道條に白き旗を立て陣屋を造しめ、張嶷、馬忠に降參の蠻兵千餘人を授て皆計を云含め、大に笑てこの度必全く功を成んと云ければ、諸將勇み進んで出向ふ。去ほどに孟獲は兀突骨が桃花水の戰に勝たるを見て心忻び、急ぎ出迎へて申けるは、孔明は詭の計多き者にて候、凡そ向ふところ必ず伏勢を用て敵を破る、今より後よく〱心を付て谷の内林の陰あらば必かる〴〵しく進み玉ふな。兀突骨が曰、大王の言まことに然り、我すでに中國の人は能詭の計を成と聞り、我は先手に在て戰はん、大王は後陣に在て道を敎玉へ。時に一人走り來り、桃葉の渡の北岸に蜀の勢陣屋を造ると報じければ、兀突骨きゝもあへず卽

れて逃わしる。南蠻の兵さのみ長追をもせずして回りしかば、魏延その回るを見るに皆甲を被ながら水を渡て去、その内疲れたる者あれば甲を脱で水に泛べ、其上に坐して渡りければ、魏延いそぎ孔明に見えて其由を語る。孔明乃ち呂凱を召て此事を議しければ、呂凱が曰、某元より南蠻の後に烏戈國ありて、人倫に有ざることを聞知れり、更に藤の甲を被て矢も刀も透らず、桃葉の惡水毒ありて、本國の人は之を飲で精力を添、他國の人は之を飲で必ず死す、縱ひ十分に勝玉ふとも益あるまじ、不如早く軍を收て回り玉へ。孔明笑て申けるは、われ此に來ること容易にあらず、豈かる〴〵しく弃て回らんや、始終なきは不智の人なり、吾明日これを平ぐるの計ありとて、趙雲に魏延を助て共に陣を堅く守らせ、次の日自ら其地の人を案内者とし、車に乘て桃葉の渡に到り、北の岸に沿て遍く地理を觀るに、山險く嶺崎て車さらに通ぜざりしかば、自ら歩行して山に上り、谷の内を望に、形長蛇の如くにして、四方みな岩石屏風の如く截たて、樹木少も無して中に一つの大路ありければ、此谷の名を問に土人答て曰、この谷を盤蛇谷と號し、谷を出れば乃ち三江城の路條なり、谷の前を塔郎甸と號す。孔明喜て申けるは、これ天われに成功を賜なりとて、遂に本陣に回り密に馬岱を呼て申けるは、いま汝に黑き櫃を載たる十輛の車を授く、竹竿を以て櫃の中なる物を用ひ此の如く〳〵にせよ、手下の

を取て油に浸こと半年、その後とり出して日に曬し、乾けば又油に浸し、此の如すること十遍あまりにして、之を以て甲を造る、甚だ輕して水に濕ほはず、此を被て江を渡る時は自ら沈ことなく、刀も矢も透ことなし、このゆゑに藤甲の軍と號す、もしこの勢の救を得ば蜀の勢を破らんこと、竹を破勢の如くならん。孟獲大に喜び遂に遙々と烏戈國へ來て見るに、其國みな室なくして土穴の内に住居す。乃ち國王兀突骨に見て偏に賴よしを告ければ、兀突骨一義にも及ばず、二人の大將土安、奚泥と云ものを呼て、三萬の勢を起さしめ、皆藤の甲を披て烏戈國を離れ、東北を望んで蜀の陣に近付。前に一つの江あり桃花水と號す。兩岸に桃の樹多く年を經て葉を水中に落す。若他國の人これを飲時は忽ちに死して、烏戈國の人ばかり之を飲時は精力を倍。兀突骨桃葉の渡に陣を取て、蜀の勢を待よし聞えければ、孔明大軍を引て進み來り、江を隔て向を望むに、南蠻の勢みな人の形に類せず、皆惡鬼の如く見るに怕しき體なりしかば、處の者を呼で其故を問に、桃の葉落る時水飲べからずと語る。孔明退くこと五里にして陣を取、魏延を大將として之を守らしむ。次の日兀突骨自ら江を渡て推よせ、鼓を打金を鳴して喊の聲地に振ければ、魏延兵を下知して弩を放しむるに、藤の甲に中る矢は盡く碎て立ことなく、刀も槍も更に透らず。南蠻の勢みな大なる刀を使て散々に切て廻りければ、蜀の勢大に亂

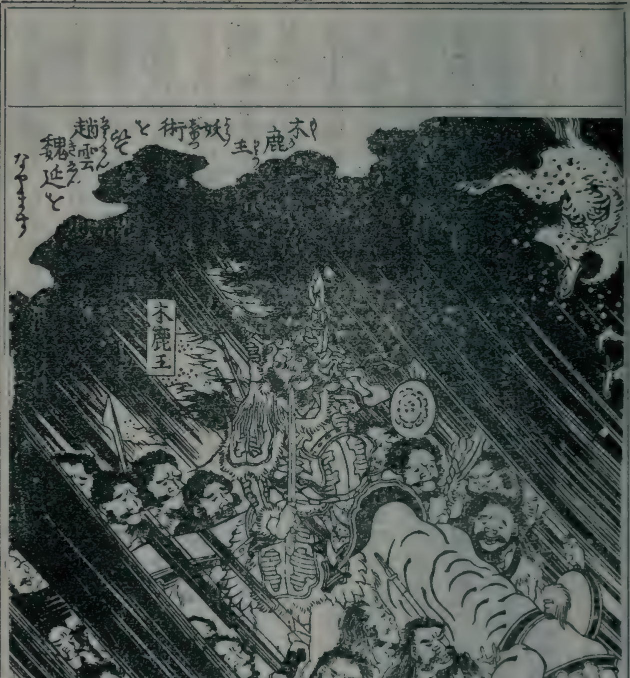
が生取たるにあらず。孔明が曰、われ已に汝を擒にすること六度に及べり、然れども肯て服せざるは何れの時を待んと欲する。孟獲が曰、汝もし七度われを生取ば快く服して再び反じ。孔明が曰、汝が巣ことごとく破れたり、放とも何程のことか有んとて、武士に命じて縄を解せ、若いま一度生取たる時汝肯て服せずんば、我必ず軽々しく放さじと云ければ、孟獲等みな頭を抱て鼠の竄が如くに去にけり。

○孔明七擒二孟獲一

孟獲ゆるされて走り返り、帯來洞主と議して曰、わが本洞すでに蜀の勢に奪はれたり、何れの處にか身を安ぜん。帯來洞主が曰、いま計きはまり力盡ぬと申せども、一つの身を安んずべき國あり。孟獲喜て曰、ねがはくは教へ玉へ。帯來洞主が曰、此より東南の方七百里に一つの國あり、烏戈國と名づく、國王の名を兀突骨と號す、身の長一丈あまりにして常に五穀を食ず、生たる蛇を取猛き獸を殺して朝夕の食物とし、身には鱗生て刀も矢も通り得ず、手下に藤甲の軍とて一手の勢あり、至て長の矮ものも九尺に足ずと云ことなく、面は悪鬼の如にして見る者ことごとく驚き怕る、この洞中に多の藤あり、澗より生て石屋の内を盤る、國中の人これ

虎豹豺狼眞先に突來る。孔明すこしも怕れず羽扇を以て一たび招けば、其風却て南蠻の勢に吹かゝる。時に蜀の勢より件の獸を放出し、口より火焰を吐て鼻の内より黑烟を出し、身に銅の鈴を鳴し牙を張爪を舞して來りければ、南蠻の眞の獸みな怕れて散々に走り、却て自ら騒亂しければ、孔明大軍を驅て一度に進め、鼓角天地を崩して縱橫無碍に蒐たりしかば、木鹿大王すでに亂軍の中に討れ、孟獲等みな家を弃て行方しらず落失たり。孔明すでに銀坑洞を乘とりて諸軍を勞ひけるに、次の日孟獲が妻の弟に帶來洞主と云もの、累に孟獲を諫れども孟獲が從はざるを以て、了に盡く生取て獻ると告ければ、孔明あざ笑ひ張嶷馬忠に計を低語き、屈强の勢二千餘騎を廻廊の陰に伏せ置しむ。時に帶來洞主きたり見え、孟獲等を縛て引据ければ、孔明急に寄や兵共この曲者を生取と呼はる程こそあれ、廻廊の陰より二千の精兵踊り出つひに盡く擒にす。孔明笑て申けるは、量に汝浩る詐の計を以て爭か我を欺得ん、汝すでに兩度まで本洞の人に生取れ來りしをわれ害せずして放し回しぬ、汝さきに銀坑洞は三江の要害重關の固あり、若この處にて生取れば永く誓て負じと云り、今その心服せるか、今詐て我に降り信なりとて油斷せば、忽ちに刺殺んと謀し者なりとて、懷の内を探しむるに果して皆刀を藏せり。孟獲が曰、われ何ぞ汝に服せん、今日生取れしは我自此に來りし故なり、汝

風に乗て馳きたり、牙を張爪を舞して陣中に突て入。蜀の勢なじかは暫も怺べき、一支も支ず散々に走りければ、南蠻の勢直ちに三江の界まで追蒐大に勝て引回す。趙雲魏延いそぎ孔明に見て右の趣を告ければ、孔明笑て曰、われ昔し草廬を出てより、已によく南蠻に虎狼を驅の法あることを知れり、此ゆゑに蜀を出ざる時此敵を破る用意を成り、今軍中に能々封じたる二十輛の車は、半を以て此敵を破るべし、紅の櫃を載たる車十輛を取きたれ、殘る黒き十輛の櫃は後に又用ふることあり。諸人みな其意を知ず紅の櫃を取きたりければ、孔明自ら開き出すに、皆是木を以て造れる獸にて、五色の線を毛とし鐵を以て牙爪を造り、一つの獸に十人を容て腹の内にて機を使はしむ、今の獅子是なり。孔明乃ち千餘人の精兵をすぐりて件の獸百匹を領せしめ、內に火烟の物を容て車の中に隱し置、次の日自ら大軍を驅て大に進み洞口に陣勢を布。木鹿大王はじめ一陣に戰ひ勝て自ら我に敵する者あらじと思ひける所に、蜀の勢打て出たりと告ければ、心怒て進み來る。蜀の勢に一輛の四輪車を推出して、孔明身に鶴氅を披綸巾を戴て、手に羽扇を持て坐しければ、孟獲が曰、あれなる車に坐したる者は便ち孔明にて候、若この者を生取玉はば大事すでに定らん。木鹿大王これを聞て又口の内に呪を念じ、手に蔕鐘を搖し腰に懸たる寶刀を拔て、孔明を斬んと進みければ、須臾の間に狂風起り、


木鹿王妖術を以て趙雲魏延をなやます
木鹿王

趙雲

に馬を回して見る時祝融夫人眞倒に馬より落。これ元來馬岱ひそかに此處に埋伏し、馬の蹄を引倒して祝融夫人を生取ける也。南蠻の勢これを見て急に來救んとする時、趙雲一陣を大殺しければ、其勢のこり少に成て四方へぞ走りける。孔明まづ祝融夫人が繩を解て酒を飲しめ、孟獲が陣へ使を遣し、夫人を以て張嶷、馬忠と換んと云ければ、孟獲喜び即時に二將を送り回す。孔明も祝融夫人を洞中に回しければ、孟獲如何して敵を防んと議する所に、忽ち八納洞の木鹿大王きたれりと告ければ、急に出迎て見るに、其人白き象に騎て身には金珠纓絡を垂、腰に大なる刀を二振懸て、軍中に虎狼を養兵あり簇て出來る。孟獲再拜して迎へ入酒宴を設て持成ければ、次の日木鹿大王數萬の兵を率し、彼猛き獸を引て蜀の陣に打向ふ。趙雲、魏延これを見て兵を引て陣勢を張、馬を立て望み見れば、南蠻の勢旗幟馬物具に至るまで盡く常ならず。多くは赤裸にして面は惡鬼羅刹に異ならず。軍中に鼓角を鳴さず、但金を篩て號令をなし、木鹿大王腰に二つの寶刀を懸手に蔕ある鐘を持、白象に乘て大旗の下に出ければ、蜀の勢みな驚て色を失ふ。趙雲申けるは、われ此年に及べども了に此の如き敵に遭ず、如何して戰はんと議するに、忽ち木鹿大王口の内に咒を念じ手に蔕鐘を搖しければ、俄に大風ふき起りて、砂を飛し石を走らしむること急雨の如く、嗚々たる響の中に、虎豹豺狼毒蛇猛獸

忠これを救んとて出ければ、又南蠻勢に四方を包れ、左に突右に撞ても出ることを得ず。時に祝融夫人丈八の棒を握り、馬を躍して來りければ、馬忠急に前へ向て戰んとするに、南蠻の勢繩を掛て後より拽落し、又生取て回りけり。孟獲小踊して喜び、酒宴を設て諸軍を持成ければ、祝融夫人生取を拽出して早く首を刎んとするに、孟獲制して申けるは、孔明われを縱こと已に五度なり、今この者を生取て乍ち殺んは大なる不義なり、天下の人豈笑ざらんや、暫く洞中に囚へ置てこの者を辱しめ、孔明を生取て後共に殺さん。祝融夫人これに從ひ、上下喜び笑て樂をなす。去ほどに蜀の敗軍孔明に見え、馬忠、張嶷が生取れたる由を告ければ、孔明大に驚き急ぎ馬岱を呼で計を授け、次に趙雲、魏延を呼で計を教ければ、皆兵を引て出にけり。次の日趙雲まづ兵を進めければ、祝融夫人馬に乘て打て出、二人五六合戰ひ趙雲いつはり負て走りければ、祝融夫人伏勢あらんことを怕れて敢て追ず。魏延又一軍を引て打て蒐り、暫く戰うて又走りけれども、祝融夫人更に追ず靜々と引回す。次の日趙雲又推寄時うつるまで戰ひ、いつはりて走りけれども祝融夫人あへて追ず、引て本陣へ回らんとしければ、魏延兵を引て聲々に訇り辱しむ。祝融夫人大に怒り急に馬を取て回しければ、魏延いつはり負けて逃わしる。祝融夫人兵を驅て趕ければ魏延山路の内へ走り入けるに、忽ち後に喊の聲きこえしかば、急

呼はるを聞て、矢倉なる兵共弩を射出さんとするに、大半すでに蜀の勢に生取れけり。城の内上を下へ騒動して互に推あひ踏殺さるゝ所に、蜀の勢喊を造て蒐たりしかば、朶思大王も亂軍の中に討れて、其勢右往左往に逃わしる。孔明三江城を乘取て得る所の珍寶を諸軍勢に分與へ、進んで皆江を渡りしかば、孟獲これを見て如何せんと議する所に、忽ち屏風をがはと踏倒して一人前に進み出、大に笑て申けるは、汝男と生れて何とて斯は智恵なきぞ、我女なりと云ども、願くは兵を率して蜀の勢を打破るべし。諸人これを見れば孟獲が妻の祝融夫人なり。乃ち上古祝融氏の後裔にして世々南蠻に居、よく刀を飛して人を殺し、百たび發せば百たび中る。孟獲死して再び甦たる心地して限なく忻びければ、祝融夫人自馬に打のり、猛將數百人精兵五萬餘騎を引て進發し、蜀の陣に推よせければ、蜀の大將張嶷一軍を引て打出たり。南蠻の勢これを見て兩旁へ颯と分れければ、祝融夫人髪をさばき、跣にして身に絳き衣を披、背に五つの刀を挿み手に一丈八尺の棒を持、捲毛の赤き馬にのり眞先に進み來る。張嶷その勢を見て心驚き、馬を交へて二三合戰ひけるに、祝融夫人引回して走りければ、張嶷急に趕蒐るところに、空中より一つの刀飛下りければ、身を側て避んとする時、其刀左の臂に中り倒に馬より落ければ、喊の聲咄と響て南蠻の勢四方より取かこみ、了に張嶷を擒にす。蜀の大將馬

り向はしむるに、其勢すでに截崖に近付ける時、城の上より數百張の弩を一度に放ち出ければ、面に進んだる蜀の勢、象碁倒をするが如く盡く倒にけり。元來この處の者は常によく弩を習て、一つの弓に十條の矢を放ち、鏃に皆毒を塗、この故に箭に中る者は皮肉爛壞れ、五臓を出して死にける。魏延、趙雲、城を攻ること能はず、退て孔明に報じければ、孔明自ら車に打のり城の虚實を望み見て、二三里ばかり陣を退けしかば、南蠻の勢大に笑て相喜び、蜀の勢弩に怕て引退くならんとて皆怠てぞ居たりける。孔明二三里退て陣をとり五日が間出ざりけるが、第五日の暮方より俄に風吹起ければ、諸軍を下知して申けるは、汝等一人も殘らず一幅の衣の襟を、初更の時に至て用意せよ、無ものは首を斬ん。諸將その故を知ず命に從ひて盡く用意しければ、已に初更に及て孔明又下知して曰、諸軍一幅の襟に盡く土を包め、無ものは、必斬ん。諸軍みな用意しければ孔明又下知して曰、包たる土を持て早く三江の城に到れ、先に來を重く賞せん。諸軍われ先にと爭て馳集ければ、孔明その土を積で足だまりとし、早く城へ登る者を第一の功とせん、進め〳〵と呼はりければ、蜀の勢十萬餘騎、並に降參の蠻兵一萬餘騎、ひた〳〵と馬より飛おり、一々に土の嚢を城下に積あげ、二十餘箇所より攻のぼりければ、城の内には此間敵の來らざるに油斷して皆よく寐入たるが、あはや敵こそ城に登れと

とを求め、名づけて藥鬼と號。男女長成する時は溪の中にて沐浴せしめ、自ら混淆して其配偶するに任せ、父母と云ども禁ぜず、之を學藝と名づく。歳豐にして雨水よく調時は五穀熟し、若熟せざる時は蛇を殺して羹とし象を煮て飯とす。この日四方の洞主酋長を集め、宮中に酒宴して地の上に席を敷、前に金銀の器を列ねて、孟獲諸人に向て申けるは、我しきりに蜀の勢に辱しめられ、誓て之を報ぜんと欲す、汝等いかなる高見かある。時に一人すゝみ出て曰、大王しば〳〵孔明が辱しめに逢玉ふを見て、某深く心に怒る、若兵法を以ては必ず急に勝ことを得がたからん、某一つの計あり蜀の勢を忽に破らん。諸人これを見れば乃ち孟獲が妻の弟に、八番の部長帶來洞主と云もの也。孟獲喜て問て曰、いかゞして蜀の勢を破らん。帶來洞主が曰、此より西南に八納洞あり、洞主木鹿大王深く法術に通じて、出る時はいつも象に騎、もし敵陣に臨時は風を呼雨を喚、虎豹豺狼毒蛇惡蝎の類相跟て先に進む、殊に手下に三萬の神兵あり、甚だ英勇にして向ふ所みな手を束て之に降る、大王いそぎ禮物を具て此人を賴玉へ、某自ら使として彼洞に到るべし、此人もし助なば何ぞ蜀の勢を怕れんや。孟獲大に忻び即時に書簡を封じて八納洞へ赴しめ、朶思大王に三江城を守らしむ。この時孔明は直ちに三江城に推よせ遙に望み見るに、三方は江に沿て一方は陸に續きたれば、魏延、趙雲に兵を付て陸路よ

天の助を得て恙なく此に來る、汝いかなれば迷を執て服せざる。孟獲が曰、われ先祖より銀坑山の中に居して三江の要害重關の固あり、この處にて一合戰し、若重て生取れば子々孫々永く叛じ。孔明が曰、われ又汝を放して回らしめん、思ほど兵を整て快く勝負を決せよ、那時もし生取て汝又服せずんば、我必ず其九族を滅べしとて繩を解て放しければ、孟獲再拜して回りけり。孔明又孟優と朶思王とを引出させ、酒を飲せて申けるは、孟獲が謀反は汝二人が罪にあらず、能々諫よとて馬を與へて送り回しければ、二人愧怕れ拜謝して去にける。

○孔明六擒孟獲

孟獲ゆるされて銀坑洞に回り、千餘人の宗黨を集て三江の城にて軍評定をなす。抑この三江と申は、瀘水、甘南水、西城水三つの流相湊りて三江となり、北は二百餘里が間、地甚だ平にして多く萬物を產し、西は二百里にして鹽井あり、南は三百里にして梁都洞あり、四方みな高山にして多く銀を出す、此故に銀坑山と名付。其内に宮殿樓閣を建て南蠻王の巢とし、又一つの祖廟を建て家鬼と號し、四時牛馬を殺して祭をなし之を卜鬼と名づく。每年外國の人を捕て牲に具ふ、採生の類の如し。人もし病ある時は肯て藥を飲ことなく、只巫師に禱て愈こ

たりければ、孟獲心喜び酒宴を設て重く持なす。已に半酣に至ける時楊鋒申けるは、いま軍中に樂なし、幸我に從ふ蠻姑あり、善刀を舞して興をなす、願くは座中の一笑を助ん。孟獲然べしと喜びければ、須臾にして數十人の蠻姑みな髪をさばき跣足にして帳外より舞て入れば、諸人手を拍てぞ歌ひける。時に楊鋒二人の子に杯を執て孟獲、孟優が前に到らしめ、すは手を下せと云ほどこそあれ、二人の子共孟獲、孟優を蹴倒して便ち繩を掛たりければ、朶思王急に逃んとするを、數十人の蠻姑刀を持て遮り止め、遂に楊鋒に生取れけり。孟獲哀み告て申けるは、兎死すれば狐これを悲む者は、其同じき類に禍の及ぶを傷ゆゑ也、われと汝は皆是南蠻の洞主、つねに仇を成こと無りしに、何ゆゑに此の如なる。楊鋒が曰、わが兄弟子姪みな孔明の恩を被る、汝いかなれば王化に叛て軍民を苦しむる、是ゆゑに擒にすとて孟獲が勢を盡く放して回らしめ、蜀の陣に行て生取を獻る。孔明招き入て楊鋒に對面すれば、楊鋒五人の子を引て帳下に再拜して申けるは、某等皆丞相の恩德を感じ、孟獲等を擒にして獻る。孔明みな重く恩賞を與て送り回し、其のち孟獲を引出させ、大に笑て申けるは、汝この度心服すや。孟獲が曰、われ汝に生取れたるに有ず、我洞中の人互に害を成て此の如し、殺さば殺せ我心は服せず。孔明が曰、汝われを水なき路に賺し入、更に啞泉、滅泉、黑泉、柔泉を以て毒に中しめんとす、我

もし漢を弃玉はずば願くは甘泉を賜て諸軍の苦を救玉へ、若漢の運氣すでに盡ば臣等みな此處に死せんと盡誠終夜祈り、夜明て見れば十餘箇處の井ことゞく甘泉溢て人馬まさに安然たり。孔明斜ならず喜び、大軍を引て小路より遂に禿龍洞に入、地を擇で陣を取。南蠻の兵これを見て急ぎ孟獲に報じ、蜀の軍勢瘴疫の氣に染ず、又枯渇の患もなく恙なくして洞中へ入たりと告ければ、朶思大王これを聞て更に信と思はず、自ら高き山に登て望み見るに、果して蜀の軍勢安然として大小の桶にて水を運ぶ。朶思大王大に驚き、毛髮みな倒に立、孟獲を顧て曰、これ尋常にあらず、必神の助ならん。孟獲が曰、われ兄弟二人快く一合戰して切死にせんと存ずる也、安んぞ手を束ねて擒と成ん。朶思大王が曰、蜀の勢已にわが洞中に入、もし御方破るゝ時は我等が妻子も保がたし、當に牛を殺し馬を宰して士卒を勞ひ、水火を避ず驀地暗に蜀の陣に推よせ、命を限に戰ふべし。孟獲喜び大軍を賞して打立んとする所に、忽ち銀冶洞主楊鋒二十一洞の精兵三萬餘騎を引て戰を助と報じければ、孟獲大に喜て曰、隣の勢われを助く、此必ず勝べきの吉兆なりとて、朶思王と共に出迎ければ、楊鋒内に入て申けるは、われ三萬の精兵あり、皆鐵の甲を被て山を越嶺を飛、なんぞ蜀の勢を怕るべき、我又五人の子あり、皆武藝世に勝て大王を助るに足りとて、呼出して對面せしむるに、何れも彪軀虎體にして威風凜々

飲しむるに、即時に悪き涎を吐て盡く能言ければ、童子又諸軍勢を引て萬安溪の中に沐浴せしめ、薤葉の芸香を一葉づつ含せけり。老人自ら柏子の茶松花の菜を進めて持成、孔明に告て申けるは、此間洞中に毒蛇悪蝎多し、柳の花落て溪の中に入時は其水毒ありて飲べからず、但地を掘て水を求めて飲玉へ。孔明拜謝して姓名を問に、老人笑て曰、某は孟獲の兄に孟節と申もの也。孔明大に驚きければ、老人笑て曰、丞相驚玉ふな、願くは來由を說ん、某同じき父母の生だる兄弟三人あり、某は嫡子にして次は孟獲、其次は孟優なり、父母早く亡て二人の弟强悪を放にし、敢て王化に從はず、某しば〳〵諫れども更に用ひざりしゆゑ、某了に此谷に隱る、今二人の弟服せずして丞相不毛の地に入玉ふことを勞せしむ。孔明嘆じて曰、古も柳下惠、盜跖が如き兄弟あり、世異なれども今に同じ、我ねがはくは天子に奏して先生を南蠻の王とせん。孟節が曰、某功名を嫌て此に隱れたり、何ぞ再び富貴を貪の心あらん。孔明金帛を贈るに孟節堅く辭して受ざりしかば、嗟嘆して已ず。拜し別れて本陣に回り、軍士に命じて地を掘しむるに、二十餘丈掘ても水なかりしかば、諸軍みな力を落す。孔明又他の處を掘しむるに、二十餘箇所掘ても盡く水無りしかば、夜半に香を焚天に祈て告て曰、いま諸葛亮不才にして大漢の恩を被り、詔を受て南蠻を平げんとするに、途中水乏して人爲みな枯渇を苦む、天

受、ねがはくは其姓名を聞ん。老翁起て廟の中に入、われは乃ちこの處の山の神なり、伏波將軍の仰を承り、特に來て右の事を告教と云訖り、廟の後なる石壁を開て入ければ、孔明大に驚き謹で再拜し、車に乘て本陣に回り、次の日神の敎に從ひ、毒水に中たる者共を引具して西の方なる谷に赴、二十里あまり入て見れば長松大柏森々として、茂竹奇花籬落を繞り、數間の茅屋相列て異香風に飄り、恰も仙人の境界に入が如し。已に一の山莊に到て、柴の戸を叩ければ、内より童子出迎て何人ぞと問。孔明名字を通ぜんとする所に、忽ち竹の冠に白き衣を被て碧眼黃髪なる老人出來り、只今駕を枉玉ふは漢の丞相にては候はぬかと云。孔明笑て曰、先生なにとて某が名を知玉へる。老人申けるは、久しく丞相の南蠻を攻玉ふことを承はる、安んぞ知ざらんやとて迎て草堂の内に入、禮了て坐さだまり、孔明告て申けるは、某昭烈皇帝の孤を托し玉へる遺命を受、後主の聖旨を承て大軍を引て南蠻を服せしめんとす、期せざるに孟獲ひそかに洞中に入、難所を守て更に出ず、この故に深く其境を探んとして誤て啞泉の水を飮、昨日伏波將軍の神命を受て先生の庵に藥の泉あるを知、ねがはくは憐を垂て救玉へ。老人申けるは、量に老夫は山野の世捐人、何ぞ丞相の駕を枉玉ふことを勞せん、其泉は庵の後にあり、早く飮しむべしとて童子に命じて王平その外の啞に成たる者共を引せ、溪の邊に行て水を

孔明神翁の教によつて諸将乃死を免る
孔明
神翁

路西南の方に滅泉あり、水沸て湯の如し、人もしこれに沐浴すれば皮肉たゞれて忽ちに死す、南の方に黒泉あり、人もしこの水を身に洒時は手足黒く成て必ず死す、東南の方に柔泉あり、其水きはめて冷なり、人もし飲時は喉の内煖氣絶て必ず死す、この四箇所の泉はみな毒氣のあつまる所にして、藥も之を治すること能ず、元より此路には別に水なく、瘴烟つねに起て惟未申酉二時の間に往來を通ずべし、其外に通る時は毒氣に觸て必ず死す。孔明嘆じて曰、此の如なる時は南蠻を平ぐること能ず、南蠻服せずんば如何して吳魏を討ん、吳魏もし滅ずんば安んぞ漢室を興ん、然る時は先帝の遺命に背く、空く生て甲斐なし、不レ如この處に死んとて厓より下に身を投んとしけるを、老翁急に止めて申けるは、丞相なにとて此の如なる、某ねがはくは之を救ん。孔明が曰、老翁いかなる高見かある、願くは敎へ玉へ。老翁申けるは、此より二三里西に行て一つの谷あり、谷の内へ入こと二十里にして萬安溪と云る泉あり、其上に一人の隱士あり、萬安隱者と云、この人溪を出ざること數十年、庵の後に一つの水あり、安樂泉と名づく、人もし毒に中りて此水を飲時は自然に無事なり、或は疥癩を病、或は瘴氣に感ずる人、此萬安溪の内にて浴する時は、自ら平愈す、又庵の前に一種の草あり、薤葉芸香と號す、人もし一葉を口に含時は、瘴疫の氣に染ず、丞相速に行て之を求玉へ。孔明拜謝して曰、幸に活命の德を

て王平まづ本陣へ引回しけるが、皆言んとしても聲出ず、只口を指さすばかり也。孔明大に驚き、扨は毒に中れる成んとて自ら車に打のり數十人を引て來り見るに、一つの泉あり。其水甚だ清して深きこと底なく、水氣凛々たりければ、孔明車より下て山に上り、其邊を望み見るに、四方の峯屏風を立たるが如くにして鳥の聲だに聞えざりしかば、心の中更に安からず、遠く崗の上に古き廟の有を見付て、葛に取つき藤を攀て石屋の中に到り、一りの將軍の像ありて傍に石を立碑の銘を刻みたれば、乃ち之を看るに、漢の伏波將軍馬援が廟なり。南蠻を平げて此處まで來りしに、土人その德を感じ廟を立て之を祀と記せり。孔明再拜して申けるは、われ先帝孤を託する遺命をうけ、後主の詔を承て此處まで來り、南蠻を平げて其心を服せしめ、吳魏を滅して漢室を安ぜんと謀る所に、今手下の勢地理を知ず、悞て毒水を飮みな聲を出すこと能はず、望らくは尊神漢朝を顧て擁護の力を副玉へと信心に祈念し、廟を出て處の者やあると尋させければ、傍なる山の上より怪げなる老翁一人杖にすがりて出來れり。孔明これを招て岩の上に坐し、その名を問ば老翁答て曰、われ久しく此處に在て丞相の大名を聞、いま幸に見ることを得たり、蠻夷の奴みな活命の恩を被て喜ずと云もの無。孔明又泉の故を問に、老翁答て曰、いま飮たる水を啞泉と名づく、之を飮時は忽に啞と成、數日して必ず死す、この

るを見ば、必ず西北の山路より進まん、この路水なくして時いま極熱盛なれば、喉かわいて自ら彼四つの毒水を飲、一人も殘らず亡べし、何ぞ刀を拔ことを用んと眞に快く云ければ、孟獲限なく喜び手を以て額を撫、今日われ身を安ずるの地ありと云て天を仰で笑ひ、北を指さして申けるは、孔明いかなる神機妙算もあらばあれ、此四の泉まさに日比の恨を報ずべしとて、此より朶思大王と日夜酒宴して居たりけり。去ほどに孔明は數日孟獲が寄來らざるを見て西洱河の陣を離れ、大軍南を指て進みけるが、時すでに六月にて炎天の暑氣恰も燒が如なり。忽ち早馬きたり、孟獲いま禿龍洞へ逃籠て路の要害を截塞ぎ、兵を分て固く守る、嶺聳え岩嶮て一足も進むこと能はずと告ければ、孔明乃ち呂凱を召て案內を問に、呂凱申けるは、某この禿龍洞に二條の路ありと承はりしが、委は存知候はず。蔣琬が曰、すでに孟獲を四度まで生捉玉ひしかば、南蠻の軍民こと〴〵く膽を冷す、爭か重ねて中國を犯べき、時今暑熱盛にして人馬みな疲れたり、不如これより國に回らん。孔明が曰、汝が心の如くせば此孟獲が願なり、我いま退て回らんとせば彼必ず勢に乘て追きたらん、已に此處まで攻入、いづくんぞ半途にして回らん、再び退かんと云ものは必ず斬んとて王平に數百騎を授て先陣とし、降參の蠻兵に路を引せて西北の小路より進ませけるに、人馬みな渇を苦で傍なる泉を飲、此路條を孔明に告んと

大王その故を問て更に一議にも及ず、自ら兵を引て孟獲を遠く迎へ、酒食を進めて持成ければ、孟獲が曰、われ孔明が辱しめを受、この故に大王を頼で身を安んぜんと欲す。朶思王が曰、御心やすく思ひ玉へ、若蜀の勢こゝに來らば我必ず一人も生ては回さじ。孟獲喜て其計を問に、朶思王が曰、この處へ來るには只二條の路あり、東北なる路は只今大王の來れる路なり、地平に水甘して人馬とほり易しと申せども、大木大石を以て洞口を截絶時は、たとひ百萬の勢にても通ること能はず、又西北の方なる山路は岩石そびえて鳥も翔がたく、殊に毒蛇惡蝎の類多して暮方より瘴烟おこり、巳午の時まで收らず、惟未申酉三時の間往來すべし、況や此路水無して人馬甚だ行がたし、四箇所に毒の泉あり、一つには啞泉と名づく、其水甚だ甘して、人もし飲時は言こと能はず、十日を過ずして必ず死す、二つには滅泉と名づく、此水溫にして湯の如し、人もしこれに沐浴すれば皮肉忽ちに爛れ、骨を出して必ず死す、三には黑泉と名づく、其水少し潔く、人もし身に洒時は手足みな黑して必ず死す、四つには柔泉と名づく、其水恰も氷の如く、人もし飲時は喉の內煖氣絶身綿よりも柔に成て忽ちに死す、此ゆゑに人は申に及ばず虫もなく鳥も無、惟漢の世に伏波將軍馬援のみ此處に來り、古今いかなる英雄も了に此路を通りたること無、今東北なる大路を截塞で大王の御心を安からしめん、蜀の軍勢大路を截塞ぎた

れり、たとひ死すとも目を塞じ。孔明武士に命じ引出して斬しめんとするに、孟獲全く怕るゝ色なく、孔明を顧て、若再び我を放ば必ず四度の恨を雪んと云ければ、孔明大に笑ひ、其縄を解ゆるさせ、酒を飲せて問て曰、われ已に四度まで汝を生取る、何ゆゑに服せざる。孟獲が曰、我は蠻夷の人なるゆゑに丞相の如く詭の計を施こと能ず、我なんぞ服すべき。孔明が曰、今又ゆるして回らしめん、汝又戰ふべきか。孟獲が曰、もし重て生取玉はば我必ず心を傾けて服し、誓て永く反まじ。孔明馬を與て送り出しければ、孟獲拜謝して回りけり。

○孔明五擒孟獲

孟獲蜀の陣を出て路にて敗軍の士卒を集め、數千人を引て走りけるに、向より馬烟を立て一手の勢來りければ、誰なるらんと怪み見るに、弟の孟優が兄の仇を報ぜんとて敗軍を率ゐ來れる也ければ、二人手を取て哀み哭く。孟優が曰、蜀の勢勝に乘て其鋒あたるべからず、只山陰の洞中に入て其鋭氣を避玉はば、蜀の勢この極熱を苦で自ら退くべし。孟獲が曰、いづくに入て避べきぞ。孟優が曰、これより西南の方に禿龍洞と云ところあり、洞中の主を朶思大王と云、某と交甚だ深し、行て此人を頼べし。孟獲これに從ひ、先孟優を禿龍洞へつかはすに、朶思

すれば、又一手の勢討て出、蜀の大將馬岱引包で餘さじと攻たりける。孟獲數十騎を引て這々に逋れ出、谷の中へ走りけるが、南北西三方火の光天を焦して馬烟夥しく起りしかば、車を指て落ゆき、山の腰を轉て向を屹と見るに、深き林の内より蜀の兵數十人一輛の四輪車を推出し、車の上に孔明綸巾を戴き鶴氅を被て、手に羽扇を搖し、大に笑て、いかに孟獲われ久しく此處に相待と呼はりければ、孟獲左右を顧て申けるは、われ此人の計に遭て三度まで羞を得たり、今幸に此處にて出合、汝等力を盡して人も車も微塵にせよやとて一度に喊を咄と造り、轡を雙べて蒐たりけるが、忽ち天地の崩るゝが如く陷坑の中へ落て上を下へと蠢きければ、魏延數百騎を引て林の内より蒐出、つひに一人も殘さず生取けり。孔明まづ本陣に回り生取を引出して酒を飲せ、盡く放して回しける所に、張翼自ら孟優を縛り來りしかば、孔明が曰、汝が兄迷を執て我に服せず、已に四度まで生取れたり、何の面目ありて人に見ん、汝よく諫て反しむること勿れ。孟優甚だ慙愧し地に伏して命を乞ければ、孔明が曰、われ汝を殺こと今日にあらず、今しばらく饒して回らしむ、必ず孟獲を諫よとて武士に命じて其縄を解せ、送り出して回しければ、孟優涙を流し拜謝してぞ去にける。次に孟獲を引出しければ、孔明怒て申けるは、匹夫又われに生取れ、何の理ありてか說こと有ん。孟獲が曰、われ今悞て詭の計に中

報ず。夜明て孟獲自ら大軍を率きたり、蜀の陣を窺ひ見るに、三箇所の陣中に人馬ありとも見えず、只數百輛の車に兵粮を積で處々に弃置たれば、孟優申けるは、孔明いま陣を弃て去は必ず大なる計ならん。孟獲笑て曰、われ推量するに孔明が陣屋を弃て引退くは必國中に事の急ある者ならん、呉の國より攻るか魏の國より攻るか、此二つを逊まじ、此ゆゑに昨夜むなしく燈を列て疑兵の計をなし、取ものも取あへず兵粮をも弃去れり、速に追蒐て一騎も餘さず生取とて、自ら眞先に進んで西洱河の端に到り、向うの岸を望み見れば一帶の長城を築て數百箇處に櫓をかき、色々の旗を揚て槍戟の光目に燦、近付べき樣ぞ無りける。南蠻の勢案に相違して敢て進まんともせざりしかば、孟獲弟に向て申けるは、孔明は計深き者なるゆゑ、我等が急に趕んことを恐て北の岸に踏留ると云ども、一日二日の内には必ず走るべしとて兵に命じて竹を伐せ、筏を造て北に渡らんと用意して、却て蜀の勢の其後へ廻ことを知ざりけり。其日俄に狂風吹おこりて石を飛し砂を飄しければ、南蠻の勢敵の弃たる陣中へ入んとするに、忽然として四方より火を付、蜀の勢鼓を鳴して討て出ければ、南蠻の軍勢大に驚て散々に亂れ、踏殺さるゝ者數を知ず。孟獲は一族を引具し敵の圍を突て本陣に回らんとすれば、陣中より喊を咄と作て蜀の大將趙雲兵を引て殺到す。孟獲魂を失ひ西洱河の傍より山路にかゝりて走んと

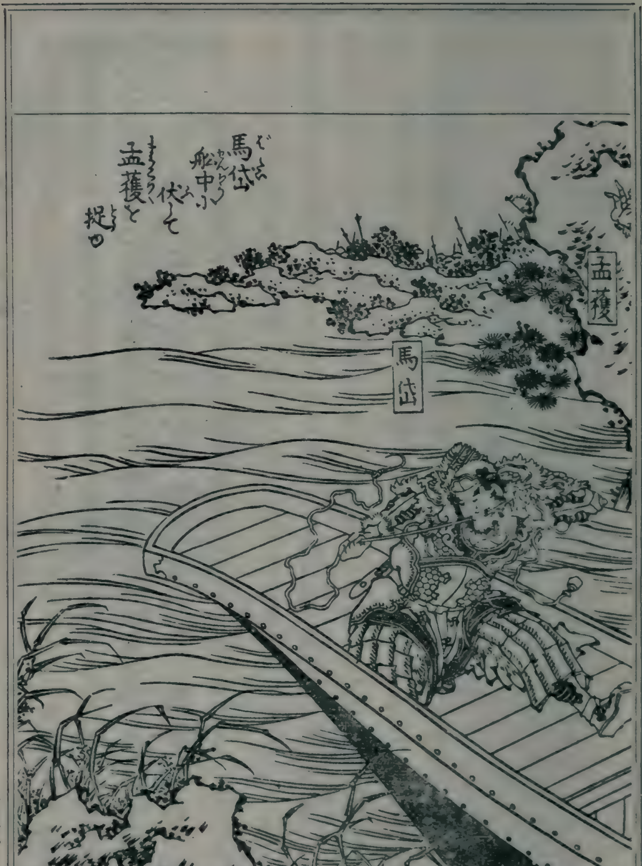
赤毛の牛に乘て勢傍を拂て見えければ、孔明四輪の車を引回し、陣中に入て堅く守る。南蠻の勢刀を舞して往來し、赤裸になりて陣門の前に來り、様々に罵りければ、蜀の大將是を見て孔明に見て戰はんことを望む。孔明敢て許ざりしかば、諸將申けるは、南蠻の奴あまりに我等を辱しむ、討て出て蹴散さん。孔明急に留て曰、南蠻の人久く王化に遵ず、今この處に寄來て狂惡殊に盛なり、之を討んとて戰はば御方も多く亡べし、只堅く守て出ることなく、日を經て彼等が怠る時を窺ひ、我計を以て破るべしとて自ら高き所に登て望み見るに、數日ありて南蠻の勢みな勇氣たゆみ怠り疲れたりければ、乃ち諸將を集て曰、汝等出て戰ふべきか。諸將忻で出んと請ければ、孔明まづ趙雲、魏延を呼よせ、耳を附て計を授け、王平、馬忠を呼て計を訓へ、次に馬岱を呼て申けるは、われ今この三箇所の陣を弃て河より北へ退くべし、汝は此浮橋を河の下に移し、趙雲、魏延を渡して後同く河を渡して如此々々にせよ。又張翼を呼て申けるは、わが勢こゝを退て北の岸に到らば、汝この陣中に多く燈を燃し置、孟獲これを見ば必ず急に追來るべし、汝は却て敵の後を遮れとて一々手分了りしかば、孔明四輪の車に乘關索を伴て河の北にぞ退きける。この時南蠻の勢は數日蜀の陣へ寄來れども敵一人も出ざりければ、皆疑ひ怪む所に、或夜陣中に夥しく燈を列て星斗の欄干たるが如なりしかば、急に此由を孟獲に

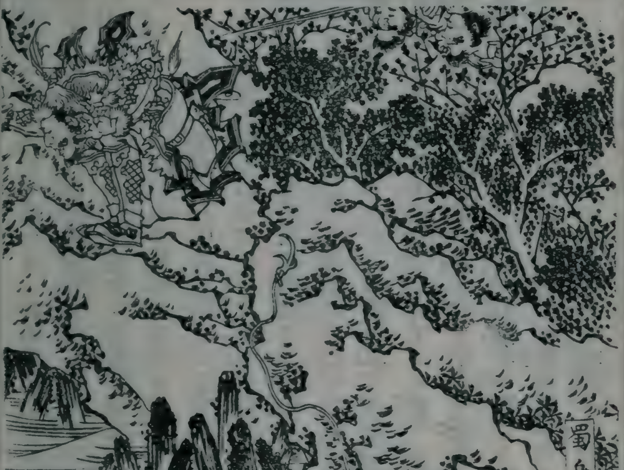
通俗三國志　卷之三十八

○孔明四擒孟獲

孟獲三度まで生取れて心の内甚だ慙愧し、八番九十三甸の洞主に金銀を送て數十萬の兵を借、程なく雲霞の如に集りければ、日を擇で蜀の陣を攻んとす。細作この由を聞て孔明に告ければ、孔明大に笑て曰、南蠻の勢遠近より集るは我元よりの願なり、彼等に我能を見せしめんとて、自ら四輪の車を推せて出けるに、前に河ありて西洱河と名づく。水の勢緩しと云ども船筏なかりければ、其邊の木を伐て筏を渡さんとするに、其木みな沈けり。孔明これを見て呂凱を呼、いかゞしてこの河を渡らんと問に、呂凱申けるは、某久しく西洱河の上に山ありて大竹多しと云ことを傳へ聞り、人を遣して之を伐せ、浮橋を造て渡すべし。孔明いそぎ三萬人を河上に遣し、大竹を伐流して濶さ十丈あまりの浮橋を造り、大軍を北の岸に揃て河を以て塹とし、一面に長城を築て南の岸にも大なる陣屋を三箇所に造て、敵の來るを相待けり。この時孟獲は自ら一萬餘騎の精兵を引て先陣に進み、身には犀の皮の甲を著、左の手に楯を持、右の手に刀を提げ、

心なほ穩ならず、弟を詐て降らしめ、内外より攻んとす、我擒にして殺さざりしは只心を傾けて彼が服するを待もの也、盡く殺して其種類を遺さざるは仁者の爲ざる所なり、馬謖が意見われに同じ、今この故に汝等に語る、必ず勞を辭せず國の爲に恩を報ぜよと云ければ、諸人拜伏して曰、丞相の智仁勇、太公、張良も爭か及ばん。孔明が曰、われ安ぞ古の人を慕ん、偏に諸將の力を賴なりとて、酒宴を設て悅をなす。


馬岱船中に伏して孟獲を捉ふ
孟獲
馬岱


蜀兵

事ぞ。孟獲首を低て答ざりければ、孔明笑て曰、われ又汝を放して回らしめんか。孟獲が曰、丞相もし我等兄弟を放ば一族諸將を集て快く一合戰し、那時又生取れば是乃ち力盡る也、必ず心を傾て服すべし。孔明が曰、重ねて生取ば決して輕々しく恕さじ、汝よく心を小て軍書を考へ、再び兵を整へ來れ、必ず後に悔ること勿れとて盡く放しければ、孟獲、孟優等拜謝して回り、已に瀘水を渡りける所に、岸の上に色々の旗風に飜りて蜀の大將馬岱陣前に高坐し、手に劍を持て孟獲を指まねき、汝重て生取ば決して放こと無んと云ければ、孟獲怕れ驚き已が陣中へ逃入んとするに、蜀の大將趙雲すでに奪ひ取、旗を建武具を列て營前に立出、丞相此の如く大恩を施す、汝必ず忘ること勿れと云ければ、孟獲急に引回し山路より走らんとするに、蜀の大將魏延千餘騎を引て坡の上に陣を取、刀を提て聲を勵し、いま已に深く汝が巣の中に入、汝なんぞ迷を執て猶大軍を拒んとする、重て生取ば必ず寸々にきざむべしと云ければ、孟獲膽を冷し、頭を抱て鼠の竄が如に回りけり。孔明は瀘水を渡て南の岸に陣を取、大に諸軍を勞ひ、諸將に向て申けるは、我已に孟獲を生取こと三箇度にして皆義を以て放したり、是元恩を以て蠻夷の心を結び、其自ら亂るゝを待ん爲なり、初め我孟獲を引て御方の陣々を巡り、兵粮武具の多を見せたるは彼必ず火を掛て攻破んとの心起んことを思ふ故なり、果して孟獲その

但手を以て口を教へければ、扨は孔明が計に中れりとて弟を救ひ出さんとする時、忽然として喊の聲響き、一手の軍馬討て出、蜀の大將王平槍を撚て突て蒐る。孟獲怕れ驚き散々に亂れて走りければ、左の方より一手の勢討て出、蜀の大將魏延勢に乘て蒐たりしかば、南蠻の勢討るゝ者數を知ず、我先にと逃る所に、又右の陣より喊を咄と造て火の光天地に輝き、蜀の大將趙雲一軍を引て蒐出、勇を振て攻たりしかば、孟獲三方より包れて只一騎這々に圍を出、濾水の上下を馳まはりて舟や有と尋ぬるに、岸に沿て一艘の小舟あり、南蠻の勢五六十人取のりたれば此こそと喜び、がはと飛乘て、すは早く舟を出せと云に、舟の中なる兵共孟獲を取て拽伏せ、了に繩をぞ懸たりける。是元來孔明が計にて、馬岱手下の兵を引て南蠻の勢に出立せ、夜中なれば眞僞を辨がたかるべしと料り、この舟を浮て相待けるなり。孔明本陣に在て生取を盡く引出させ、酒を飲せて送り回し、次に孟獲を引出させ、笑て申けるは、汝まづ弟を詐て降參させ、我を出抜て內外より攻んと計れり、今すでに擒にせらる、汝が心われに服すや。孟獲が曰、これは我弟の孟優が食ひ物を貪て誤て毒に中り、醉倒て計を仕損じたる故なり、我もし外より攻て弟もし內より應ぜば、必ず大に打勝ん、是天より敗する也、わが負たるに有ず、焉ぞ服すべき。孔明が曰、われ已に三度汝を生取、仁義を以て放と云ども猶服せざるは何

ん。孔明が曰、汝が兄は今いづくにかある。孟優が曰、銀坑山に入て種々の珍寶を集め、取來て天子に獻らんとす。孔明が曰、いま汝に從ひ來れる者いか程かある。孟優が曰、わづかに百餘人ありと申せども、皆これ寶を運べる士卒なり。孔明乃ち盡く召入て之を見るに、皆黑き面に紫の毛生て眼の中青く、耳に金環を垂て身長く力強き者共なりければ、傍に坐せしめて酒を飮せ、孔明自ら孟優等と笑ひ樂で酒宴數刻に及びける。孟獲は本陣に在て孟優が相圖を待ける所に、忽ち士卒二人馳かへり、孔明すでに禮物を受て實なりと忻び、中軍に招き入て酒宴を設て持成候、此に依て孟優ひそかに某を以て大王に告知さしむ、今夜の二更に大軍を引て推よせ玉へ、內よりも攻合せて同時に孔明を生取べしと云ければ、孟獲しすましたりと喜び、三萬餘騎の精兵を揃へて三手にわけ、皆硫黃焰硝の類を持せ、蜀の陣に火を付て孔明を生取んと約をなし、日暮より打起て忍やかに瀘水を渡り、自ら猛將百餘騎を引て蜀の陣へ打向けるに、敵一人も出ざりしかば馬を飛して中軍へ入けるに、燭の光白日の如く、孟優を始として手下の兵こと〴〵く醉臥たり。是元來孔明が計にて、馬謖等樂人に雜て慇懃に酒を勸め、酒の中に藥を入置たれば、南蠻の兵みな醉倒て死せるが如なり。孟獲この體を見てこは如何にと驚き、引起して問んとすれども人心地ある者更になく、其内に只一人すこし醒たる者あり、

り、早く本陣に來れと云つかはしければ、二人忽ち來りけるを、相圖の鐵砲を鳴して伏の兵一度に起り、盡く殺して屍を澗の内に弃させ、諸將を分て要害を守り、自ら夾山峪に向て馬岱と戰はんとするに、蜀の勢一人も見えざりしかば、處の者を呼で尋ぬるに、昨夜みな瀘水を渡て回りぬと申す。孟獲本陣に回り、弟の孟優を呼で申けるは、孔明が陣中の虚實われ明に能知れり、汝箇樣々々に計を行へと低語ければ、孟優これに從ひ、屈強の精兵百餘人を擇て金銀珠玉寶貝の類を持せ、瀘水を越て孔明が陣に赴かんとするに、岸の邊より鼓角を鳴して一彪の軍馬打て出、蜀の大將馬岱一文字に路を横截ければ、孟優驚き怕て降參の由を申す。馬岱まづ孟優を外に留め、人を走して右の趣を告ければ、孔明この時諸將と計を議しけるが、この由を聞て馬謖に問て申けるは、汝これを知れりや。馬謖が曰、言を以て伸がたし、書付て見せ申んとて紙筆を求め、書て孔明に見せければ、孔明これを見て大に笑ひ、手を拍て申けるは、孟獲を擒にするの計我已に定め置り、汝が意見よくも我に合へりとて、先趙雲を呼て密に計を授け、又魏延を呼で計を低語、次に王平、馬忠、關索を召て盡く分付し了り、孟優を招き入て對面しければ、孟優地に拜伏して曰、某が兄孟獲深く丞相の恩を蒙り、某に命じて先金銀寶貝を獻らしめ、自ら天子の貢物を捧て跡より來り降らんとす、願くは永く服して背こと無

孟獲が曰、われ南蠻の夷なれども善兵法に通ず、今もし放し玉はば洞中に回りて勢を集め、快く勝負を決せん、其時又生取れば我心を傾て汝に服し、敢て又背こと無ん。孔明が曰、われ重て生取て汝又服せずんば、決して輕々しく恕こと無るべしとて、兵に命じて繩を解せ、酒を飲せて申けるは、我すでに草の廬を出てより、戰に勝ずと云ことなく攻るに取ずと云ことなし、汝蠻夷の人、なんぞ早く服せざる。孟獲默然として答ざりしかば、孔明乃ち引て馬にのせ、諸大將の陣屋を打巡り、兵粮山の如く軍器霜を凝し、數十萬の精兵甲の袖を列ね盔を耀かして凛凛たるを見せ、孟獲に向て申けるは、汝服せざるは眞の愚人なり、我此の如き精兵あり、汝いかでか勝ことを得ん、若早く服せば我天子に奏して汝を國王に封じ、子々孫々永く南蠻を領せしめん。孟獲が曰、某いま服すべけれども、洞中の人いまだ敢て心を安んぜず、丞相もし某を放し玉はば、百姓を率て共に服せん。孔明忻然として又中軍に回り、酒宴を設て持なし、晩に及んで自ら瀘水の岸まで送り、船を以て扶け回らしむ。

○孔明三擒孟獲

孟獲本陣に回りて其夜數百人の兵を伏て董荼奴、阿會喃等を殺さんと料り、孔明が方より使あ

とごとく來り集て曰、我等蠻方に居と云ども了に中國を犯ことなし、此故に中國又わが境を犯せることとなかりしに、孟獲みだりに强を恃み、是非なく我等を催して浩る大亂を引出せり、況や孔明が計は鬼神も測こと能はず、魏の曹操呉の孫權だにも之を怕る、我等蠻夷の徒いかでか之に及ぶべき、孔明殊に我等が命を扶し恩あり、倡や孟獲を殺して孔明に降り、百姓の塗炭を救ふべし。董荼奴が曰、汝等諸軍の心は如何に。其勢みな孔明に放れたる者共なりければ、皆音を齊して曰、ねがはくは孟獲を殺して禍を免れん。董荼奴大に喜び、手に刀を提げ百餘人を引て本陣に走り入。此時孟獲は前後も知ず帳中に臥て、猛將二人傍に立たりければ、董荼奴申けるは、汝等も孔明の恩を受たる者なり、如何に我に與して百姓の禍を除んや。二人の猛將答て曰、我等元より此意あり、將軍の手を下し玉ふにも及ばず、某まづ孟獲を擒にせんとて押へて繩を懸たりしかば、董荼奴いそぎ船に乘て瀘水を渡り、蜀の陣に引てゆく。孔明この由を探り聞、諸將に下知を傳て陣々に兵を整へ置せ、先董荼奴を中軍に召て對面し、其子細を問て一々に恩賞を與て先洞中に回らしめ、次に孟獲を引出させ、孔明笑て申けるは、汝さきに再び生取れば降らんと云しが、今日は如何ん。孟獲が曰、これ汝に生取れたるに有ず、我手下の者自ら事を仕出して此の如し、我心なんぞ服せん。孔明が曰、われ又汝を放さば如何ん。

勢多少は知ず、密に瀘水を渡て夾山の峪に屯し、平北將軍馬岱が旗を擧て兵粮の道を塞げりと告ければ、孟獲笑て曰、量に此小輩なに程の事か有ん、只蹴散して弃よとて、大將忙牙長に三千餘騎を與て夾山へ向はしむ。馬岱は敵の來るを見て兵を山の前に出しければ、忙牙長槍を撚て突て蒐り、兩馬相交り馬岱に一刀に斬られけり。南蠻の勢大將を討れてなじかは怺ふべき、散々に走て逃かへり、孟獲に見て右の趣を告ければ、孟獲諸將を呼て申けるは、たれか行て馬岱を破らん。董荼奴が曰、某ねがはくは行ん。孟獲大に喜び遂に三千餘騎を與て向はしめ、又蜀軍の瀘水を渡らんことを恐れ、阿會喃に三千餘騎を付て流沙口をぞ守らせける。董荼奴兵を引て已に夾山谷に向ひければ、馬岱も山の前に打て出、これは董荼奴が勢なりと告る者ありければ、馬岱馬を出して大音あげ、恩を忘れ義に背の賊、わが丞相先に汝が命を扶け玉へり、汝又羞をも知ずして來れるかと呼はりければ、董荼奴慙愧して答ふべき詞なく、戰ずして退きけるを、馬岱追蒐て四角八方へ斬ちらす。董荼奴回て孟獲に見え、馬岱が英雄あたるべからずと云ければ、孟獲怒て曰、われ能汝が陣を賣の計を知、汝さきに孔明が恩を受たりし故、今戰ずして退きたりとて、引出して斬しめんとするを、諸人再三一命を乞ければ、孟獲わづかに其命を扶け、棍を以て背を百杖ぞ打せける。董荼奴痛く責られて我陣に回りければ、諸大將こ

はめて妙なり、其渡るべき路あるべし、汝等案内せよとて屈強の兵五六百騎を擇で馬岱に授け、木を伐て筏を浮べ、夜半の比流沙口より渡りけるに、果して恙なく南の岸へ著にける。馬岱限なく喜び、孔明が授けたる繪圖を觀て千餘騎の精兵を卒し、土人を案内者として直ちに洞中より兵粮を運ぶ路に出、その路兩方は高く聳たる大山にて、中に一つの細路二人相雙んでも通り難き所ありければ、谷に跨て陣を取けり。この時南蠻の勢は夢にも之を知ず、兵粮を運び來りけるに、馬岱が勢に前後を遮られ散々に走りければ、馬岱すでに兵粮の車百輛あまりを奪ひ得たり。孟獲は南岸の城に在て日夜に酒を飮で軍務を理ず、諸人に向て申けるは、我もし孔明と戰はば必ず彼が計に中らん、今この瀘水の險阻を守て敢て彼と戰はず、この酷しき暑氣を受て彼が軍いつまでか怺べき、近き内に自ら走り去べし、我其時後より追討にせば、必ず孔明を生取べしとて手を拍て大に笑ふ。時に一人すゝみ出、流沙の渡は水甚だ淺し、蜀の勢こゝより渡らば御方の爲に害なるべし、一軍を分て守らしめ玉へと云ければ、孟獲笑て曰、汝この地に住居して何とて知ぬぞ、我は蜀の勢あはれ瀘水を渡て皆水中に死んことを願ふ也。又一人すゝみ出て曰、瀘水いま毒氣あつまると申せども、處の者もし夜渡る法を敎ば如何ん。孟獲が曰、わが領内の人いかでか他國の敵に之を敎ん、汝必ず疑ふこと勿れ。時に早馬きたり、蜀の

なるを問て先藥を諸軍に分ち、汝いか程の勢をか率ゐ來れると問に、馬岱が曰、三千餘騎を引ゐ來れり。孔明が曰、わが勢は此間の戰に盡く疲れたり、汝新手を引て先手に進まんか。馬岱が曰、みな是朝廷の軍馬なれば何ぞ我と彼とを分べき、丞相もし某を用ひ玉はんとならば、一命を弃とも何ぞ惜ん、某つねに先帝の恩を報ずるに所なきを恨る也。孔明が曰、いま孟獲瀘水の南に在て出合ず、我まづ彼が兵粮の路を絶塞ば、彼戰はずして自ら亂れん。馬岱が曰、いかゞして絶塞ん。孔明笑て曰、此より百五十里を離て瀘水の下に流沙口と云處あり、此處水の勢緩して船筏にて渡るべし、汝三千餘騎の生手を率し、此處より渡して先その兵粮を運ぶ路を遮れ、其後董荼奴、阿會喃に内變を成しむべしと云ければ、馬岱欣然として直ちに流沙口に到り、兵を驅て水を渡るに、思の外に淺かりしかば大半は筏にも乘ず、馬を打入て渡しけるに、河の半に到て人馬なにとも無こと〴〵く倒ければ、急に相救て引回しけるに、口より血を吐て五六百人は死たりけり。馬岱大に驚き早馬打て孔明に告ければ、孔明その邊の人を尋ね出してこの故を問に、里人答て曰、いま炎天の暑氣甚して毒こと〴〵く瀘水に集り、晝の間は殊に盛なり、この故に渡る人あれば必ず其毒に中り、此水を飲時は必ず死す、若夜に入て水冷に成時は毒氣起ず、その時よく〳〵食に飽て渡れば自ら無事なり。孔明嘆じて曰、土人の言き

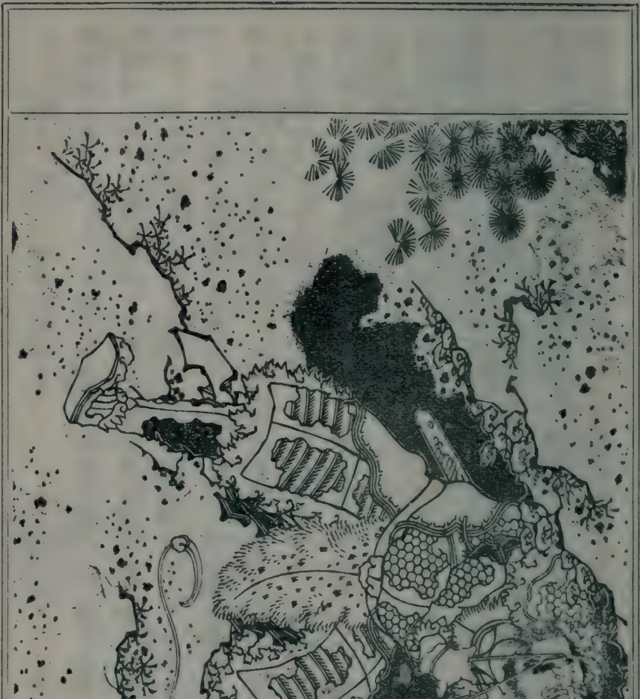
十分堅固に備りければ、孟獲大に喜び萬全の計なりとぞ思ひける。この時孔明は大軍を率して進發しけるが、先陣すでに瀘水の岸に到り、南の方を望み見れば、水の勢甚だ急にして白浪天に漲り、岸の額に壁を塗て一帶の長城を築き、處々に矢倉を竪て逆も木しげく引かけたり。況や時すでに五月の半に及んで南方の地は暑氣殊に酷しく、人みな甲を被ることだに能ざりければ、敵の十分堅守りたるを見て退屈せずと云ものなし。孔明これを聞て自ら瀘水の邊に來り、敵の體を望み見て本陣に囘り、諸將に令を傳て曰、いま孟獲城を構て我を防ぐ、われ已に此處まで來て豈打弃て空く囘らんや、汝等みな山に依林に傍、涼からん處を擇で暫く人馬を休めよ、幸に呂凱は案內者なり、林木の茂れる陰を陣屋に構よと命じければ、呂凱よく地理を考へ、瀘水を百里ばかり隔て諸大將の陣屋を列ね、棚の上に草を掩て炎天の暑氣を凌げる。參軍蔣琬これを見て孔明に申けるは、某いま諸大將の陣取を見候に、山に依林に傍て昔日先帝の吳の陸遜に破られ玉ひし陣に似たり、若南蠻の勢ひそかに瀘水を渡り、火を付て攻來らば如何して防ぎ玉はん。孔明笑て曰、これ汝が知ところに有ず、我自ら不思議の計あり。時に蜀の都より大將馬岱暑氣を拂藥と兵粮米とを送り來れりと報じければ、孔明軈て對面し、都の無事

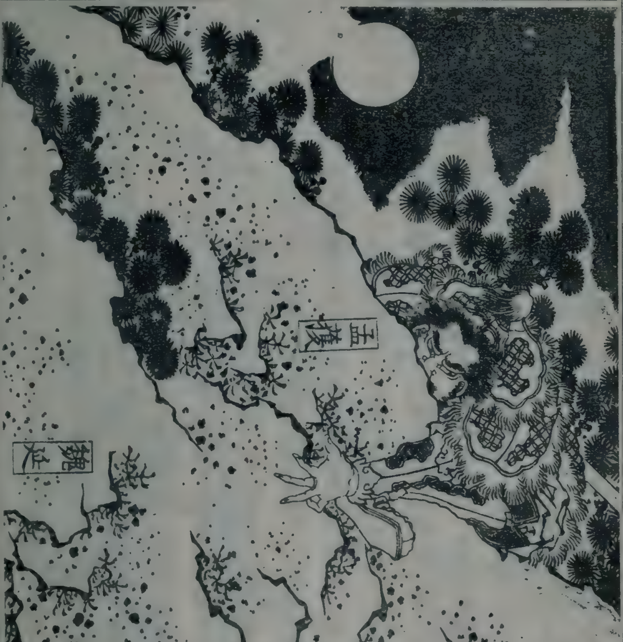
こと嚢の中より物を取出が如し、その心を服せしめば自ら平安ならん、汝等怪こと勿れと云ければ、諸人敢て其意を知ず、あざ笑てぞ退きける。

○孔明二擒孟獲

南蠻王孟獲は孔明に放れて瀘水の邊まで來り、敗軍の士卒こゝ彼より馳あつまり、大王いかゞして回り玉へると問ければ、孟獲答て曰、われ難處に行つまりて蜀の勢に生取れけるが、夜に入て我自ら番の者共十餘人を打殺し、忍び出て走りけるに、一手の軍馬路を塞ぎしかば、我自ら打やぶりて八方へ蒐散し、此馬を奪て逃れ來れり。南蠻の勢限なく喜び、相扶て瀘水を渡り、陣屋を構て諸洞の大將を招きければ、四方より相あつまりて程なく又十萬餘騎にぞ成にける。この時董荼奴、阿會喃は已に洞中へ回りけるが、孟獲使を以て呼よせければ、已ことを得ずして來りけり。孟獲諸將に申けるは、われ已に孔明が計を知れり、只戰はざるに若べからず、戰ふ時は彼が計に中る。蜀の勢遙々この處に來り、炎天の暑氣に遭て安んぞ久しく留ることを得ん、我この瀘水を前にあて、岸の上に壁を塗、城を構て堅く守り、出て戰ふ事無んば、如何なる孔明なりとも、やはか怺べきと云ければ、諸人みな之に從ひ、船筏を南の岸に集め、山に

して、帳上帳下に槍を列ね戟を立て其光氷雪の凛々たるが如く、左右に御林の精兵を排して十分に威を逞し、生取たる南蠻の軍兵を喚出し、盡く其縄を解放して申けるは、汝等本より罪あらず、孟獲に語はれて已ことを得ざる故に此の如く生取れたり、汝等が父母妻子は皆門に依て歸を望べし、若いま生取れたるを聞ば血を流して泣哀まん、我ことごとく放して汝等を回らしむ、必ず再び惡人を助ること勿れとて、酒を飲せ粮を與て回しければ、南蠻の軍民深く其恩を感じ、涙を流して去にける。次に武士共孟獲を引出しければ、孔明申けるは、先帝つねに汝を憐み玉ふこと薄からず、何とて又謀反せるぞ。孟獲が曰、兩川の地は元來他人の物なるを、汝が主人みだりに逆威を震て奪ひ取れり、吾は世々この國を保つ、汝等無禮いかなれば境を犯せる、却て我を謀反と云は何ごとぞ。孔明が曰、われ已に汝を擒にす、汝心我に服せるか。孟獲が曰、錦帶山の路狹して誤て汝に生取れたり、我心なんぞ服せん。孔明が曰、汝服せずんば我放して回らしめんは如何に。孟獲が曰、汝もし我を放ば我再び兵を整へて共に雌雄を決すべし、重ねて我を生取ば我心を傾て汝に服せん。孔明が曰、今汝を放して回らしむ、再び兵を整へ來れとて其縄を解て衣裳を與へ、酒を飲せて送りてぞ回しける。蜀の諸將これを見て、孟獲は南蠻の國王、いま幸に擒にして又放玉ふは何事ぞと問ければ、孔明答て、われ此者を生取


伏勢


孟獲

として左右を顧み、人みな孔明が兵を用ふること神通を得たりと云しが、今この勢を觀るに旗の色も整ず、行伍紛々として一つも我に勝りたることなし、誰か一陣に進んで奴原を蹴散さんと云ければ、南蠻の大將に忙牙長と云もの、薙刀を打ふり黃驃馬を飛して討て蒐り、王平と五六合戰ひけるに、王平いつはり負て逃ければ、孟獲勢に乘て追蒐る所に、關索一軍を引て迎へ戰ひ、共に詐り負て走りければ、孟獲兵を驅て息をも繼ず二十里あまり趕ところに、忽然として喊の聲起り、左に張嶷右に張翼二手の勢討て出、南蠻勢の後を遮りければ、王平、關索も一度に取て回し夾で攻たりける。南蠻の勢前後に度を失ひ、散々に亂れて討るゝ者麻を散せるが如なりしかば、孟獲這々に圍を出、錦帶山を指て走りけるに、跡より蜀の勢喊を造て追かくる。已に走ること二三里にして谷の內より一彪の軍馬討て出、一文字に路を橫截て蜀の大將趙雲眞先に馬を出しければ、孟獲大に驚き急に路を易て小路より走らんとするを、趙雲咄と喚て蒐たりしかば、南蠻の勢大半討れて生取るゝ者數を知ず。孟獲は死戰して逃れ出、數十騎を引て走りけるが、跡より敵の追こと急にして、路は狹し爲べき樣なかりしかば、馬を乘弃木の根岩の稜に摑付、嶺を越て逃けるに、忽ち谷の內より鼓の聲地を動して魏延五百餘騎にて蒐出、四方より取卷て了に一人も漏さず生取てけり。孔明はこの時本陣に酒宴を設け色々の肴を用意

大に驚く。孔明が日く、われ呂凱が繪圖を觀て已に南蠻勢の陣を取べき處を知れり、この故に言を以て趙雲、魏延を𠷣し、深く重地に入て先金環三結が陣を攻、直ちに兵を分て左右の陣の後に向はんことを量り、王平、馬忠に其前を攻て前後より打破しむ、このこと趙雲、魏延にあらずんば叶まじ、我又董荼奴、阿會喃が必ず山路より走らんことを料り、兼て張嶷、張翼を伏て山の間に待せ、關索に命じて若のこる所あらば討留よとて遣したり。諸人これを聞て地に拜伏して、丞相の兵機鬼神も測がたしとぞ感じける。孔明乃ち董荼奴、阿會喃を引出して其繩を解ゆるし、酒を飲せ衣服を賜て送り皈し、今より惡人を扶ること勿れと云ければ、二人涙を流して德を感じ、小路よりぞ囘りける。孔明諸將に申けるは、明日は孟獲必ず自ら攻來るべし、計を用て擒にせよとて、趙雲、魏延に各五千餘騎を授けて計を敎へ、王平、關索に各一軍を與て計を授ければ、皆相わかれて出にけり。去ほどに南蠻王孟獲は先陣の勝負を聞しむるに、三洞の元帥皆孔明に生取れて其勢大半討れぬと告ければ、自ら大軍を率して打出けるに、端なく蜀の大將王平に出合、兩陣相對して王平馬を出し、南蠻の勢を望めば數百騎の大將みな怪き出立にて兩邊に排列し、孟獲旗の下に捲毛赤兎の馬を躍せ、頭に七寶の紫金冠を戴き、身には纓絡紅錦の袍を被て腰に碾玉の獅子帶を繫、脚に鷹嘴抹綠の靴を穿ち、松紋廂寶の劍を懸て昂然

あがりて兵粮をつかはんとす。趙雲、魏延よき時分ぞと喜び、兩方より喊を咄と造て攻入ければ、南蠻勢思ひも寄ざることなれば、以ての外に騒動して上を下へとかへしける。趙雲直ちに中軍に突て入、大將金環三結に出合、兩馬合まじはり、只一槍に刺殺し、其首を取て縱横無碍に蒐たりしかば、南蠻の勢大半討れて四方へ颰と散亂す。魏延一軍を引て急に董荼奴が陣に向ひければ、趙雲も兵を引て阿會喃が陣に推よせける時、夜も早若々と明にけり。魏延直ちに董荼奴が陣の後より攻ければ、南蠻の勢こゝを破られじと火花を散して戰ふ所に、又陣門の前に喊を作て王平が勢すでに馳來り、挾で攻ければ、董荼奴が勢こと〲く亂て我先にと逃ちりける。趙雲は兵を引て阿會喃が陣の後へ出けるが、蜀の大將馬忠すでに其前を攻て挑み戰ふ最中なりければ、後より喊を咄と造て蒐たりけるに、南蠻勢前後に度を失て散々にぞ逃たりける。蜀の勢思ふまゝに打勝、各軍を收て本陣に回り、孔明に見て右の趣を告ければ、孔明問て曰、三洞の蠻兵こと〲く敗亂す、大將を捕得ざるか。趙雲乃ち金環三結が首を出して第一の功と記しければ、諸軍みな曰、董荼奴、阿會喃二人は皆嶺を越山を攀て逃去れり、この故に生捉ことを得ず。孔明笑て曰、董荼奴、阿會喃二人は我すでに擒にせり。諸大將みな信なりとせざる所に、暫ありて張嶷は董荼奴を生取、張翼は阿會喃を生取、引て帳下に來りしかば、諸人みな

翼を呼で曰、汝二人は共に一軍を領して中路の敵と戰ふべし、今日勢を整へて明日王平、馬忠と一同に打立と云ければ、二人計を受て退出す。趙雲、魏延はこの日の軍に用ひられざるを深く怒れる體に見えたりければ、孔明申けるは、われ汝を用ざるにあらず、二人すでに中老に及たれば、南蠻勢に遭て地理を知ず、却て鋭氣を失んことを恐るゝ故なり。趙雲が曰、我等もし地理を知ば如何ん。孔明が曰、汝二人よく心を小よ、妄に輕々しく動こと勿れ。趙雲退て密に魏延と議して申けるは、我等二人國を出る時先陣の大將を承はりながら、却て地理を知ざるとて今日用ひられざるは大なる羞にあらずや。魏延が曰、倡や二人は手下の勢を率して密に打出、この地の者を捕て案内者とし、人より先に敵の陣を破らん。趙雲げにもと同じ、共に兵を引て打出、二三里ばかりにして遠く望めば、馬烟を立て南蠻勢五六十騎が程はせ來る。趙雲、魏延山の間に伏て前後より取卷ければ、南蠻の勢驚て逃わしるを、蜀の勢追掛て擒にす。趙雲、魏延酒を飲せ引出物取せて路條を問に、南蠻勢その恩を感じて申けるは、眞先には金環三結が大寨山に傍て兵を屯し、東西に二條の路ありて五溪洞に通じ、阿會喃等が陣にも相通ぜり。趙雲、魏延これを聞て遂に精兵五千餘騎を率し、生取を案内者として其夜の三更に打立、月殊に明なりければ直ちに金環三結が陣に到りける時、すでに四更の比に及び、南蠻の勢も漸起

心を皈伏せしめ、恩を感じ徳に懐て長く背ざるの計を思ひ玉へと云ければ、孔明長嘆して曰、御邊の高論よくわが肺腑を貫けりとて、遂に馬謖を留めて參軍とし、大軍を驅て進發す。この時南蠻王孟獲は孔明が雍闓等を平げて直ちに攻來る由を聞、いそぎ諸將を集めて計を議するに、三洞の元帥とて第一金環三結、第二董荼奴、第三阿會喃と云ものあり、共に五六萬騎の勢を領して本より孟獲が麾下に屬す。此日こと〴〵く來りければ、孟獲申けるは、いま蜀の大軍わが境を侵、汝等なんぞ早く來て告知せざる。金環三結すゝみ出、某ねがはくは眞先かけて奴原を踏やぶらんと云ければ、董荼奴、阿會喃二人も先手に進んことを望み、互に爭うて已ざりけり。孟獲が曰、汝三人ひとしく行んことを願ふ、しからば三手に分れて打向ひ、金環三結は中路に備へて、董荼奴を左に備へ阿會喃を右にそなへ、各五萬の勢にて打立べしと下知しければ、三人命を受て出にけり。孔明は陣中に在て兵の手分を定むる所に、忽ち斥候の兵きたり、孟獲いま三洞の元帥を三手に分て寄きたると告ければ、孔明諸の大將を集て曰、いま南蠻の勢三手に分れて寄きたる、我趙雲、魏延を用んと思へども彼二人は地の利を知ず、この故に敢て用ひず、王平は左備の敵を防ぎ、馬忠は右備の敵を防げ、我又趙雲、魏延を跡より進て汝等に力を添させん、今日兵を揃て明日早天に出よと云ければ、王平、馬忠命を受て退出す。孔明又張嶷、張

久く御邊は永昌の高士なることを聞り、今大軍を引て此より南蠻國を平げんと欲す、然るべき計あらば教玉へと云ければ、呂凱一卷の繪圖を出して曰、某久く南蠻の王化に順はざるを愁ひ、密に南蠻國へ人を遣し、地理を察して繪圖を造らしめ、名付て平蠻指掌の圖と號す、今丞相に見るは大なる幸なり、願くは之を獻つらん。孔明一々見了て限なく喜び、遂に呂凱を行軍教授として案内者と定め、大軍を進めて南蠻國へ打立ける所に、忽ち天子勅使ありと報じければ、孔明中軍に請じて對面するに、馬謖素き袍を被て入ければ、孔明その故を問に、馬謖が曰、某が兄馬良近ごろ死せり、此ゆゑに喪の服を被る、今天子某に勅して諸軍に酒を賜とて詔を出しければ、孔明拜し讀で賜を諸軍勢に分ち、馬謖を留て物語し、吾いま大軍を引て南蠻を平げんとす、御邊いかなる高見かある、我ねがはくは聞んと云ければ、馬謖が曰、某一言あり、丞相これを聞玉へ、夫南蠻は國遠く山險して容易く入がたきを恃で、昔より王命に順はず、今日これを破ると云ども、明日は又叛く、丞相いま大軍にて向ひ玉へば必ず功を成玉ふべけれども、都に回り玉ひて後は忽ちに叛て、虚を窺て害を成んと謀らん、若又ことごとく誅して蠻夷の種類を絕んは仁者の心にあらず、況んや容易は滅し難からん、夫兵を用ふるの道は心を攻るを上とし、城を攻るを下とす、心の戰を上とし兵の戰を下とす、願くは丞相但その

はば願くは手下の勢を率して朱褒を生取きたるべし。孔明が曰、もし然る時は我なんの疑か有ん。高定乃ち鄂煥を伴ひ、手下の勢を引て直ちに朱褒が陣に推よせけるに、朱褒も兵を引て陣を出、高定が來るを見て何事か有て來り玉ふと問ければ、高定罵て曰、汝いかなれば孔明に書簡を送て反間の計を成んとする。朱褒これを聞て夢にも知ざることなれば答べき詞なく、目ばかり働ところを、鄂煥馬を飛せて後より一刀に斬て落す。高定大音あげて、我に順はざる者は盡く誅せんと呼はりければ、諸軍皆地の上に拜伏す。高定蜀の陣に回りて朱褒が首を獻りければ、孔明大に喜て曰、われ御邊に功を立させんことを思ひ、計を用ひて雍闓、朱褒を誅せしめたりとて、遂に高定を益州の太守として三郡を總守らしめ、鄂煥を衙將とす。されば永昌郡の圍も自ら解て、太守王伉城を出て迎へければ、孔明城中に入て民を安んず。

○孔明一擒孟獲

去ほどに益州すでに平定して永昌郡の圍自ら解、太守王伉城を出て孔明を迎へければ、孔明内に入て問て曰、御邊は誰人と力を合せてこの小城を守り玉ひし。王伉答て曰、某この城を落されざりしは、永昌不韋の人に呂凱字は季平と云者の力なり。孔明乃ち呂凱を呼て對面し、我

定げにもとて酒宴を設て雍闓を招きけるに、雍闓も心の内深く疑を成て居けるゆゑ事に託て來らざりければ、高定さればこそとて手下の兵を揃て其夜雍闓が陣へ攻入けるに、適に孔明に扶られたる者共多く高定を慕意ありければ、時に乘じて戰を助け内外より揉だりしかば、雍闓俄の事にて戰ふべき樣なく、只一騎山路を指て逃わしり、二里ばかり來けるに忽然として一棒の鼓を鳴して一彪の軍馬路を遮り、鄂煥戟を舞して討て蒐り、只一合に雍闓を斬て落し、首を取て高定に渡しければ、高定斜ならず喜び、首を獻りて孔明に降る。孔明その首を見て急に武士を呼、高定を引出して斬て弃よと下知しければ、高定驚て曰、某深く丞相の恩を感じ、今雍闓を誅して來り降る、何ゆゑに殺さんとはし玉ふぞ。孔明あざ笑て曰、今汝が降參は詐の計なり、この首も實の雍闓が首に有ず、我兵を用ひて五十に餘れり、これ程の計に出抜るべきか。高定が曰、なにとて我を詐とは宣ぞ。孔明乃ち匣の中より一封の書簡を出して申けるは、汝これを見よ、朱褒すでに使を以て降らんことを願ひ、高定は雍闓と堅く生死の交を結べりと云送れり、汝なんぞ輕々しく雍闓を殺べき、此に依て詐なることを知。高定叫で申けるは、これは朱褒が反間の計なり、丞相必ず信と思ひ玉ふな。孔明が曰、われ亦汝が言を信ぜず、朱褒と對談せずんば眞僞を辨ること能はじ。高定が曰、丞相もし某を疑ひ玉

等高定が手の者なりと詐ずんば一人も殘らず殺さるべきなど物語りしければ、其人よく〳〵陣中の樣を窺ひ、回り來て高定に報ず。高定心の內安からず、又ひそかに孔明が陣に忍を入その樣を窺はしむるに、途にて伏勢に生取れ、孔明が前に引出さる。孔明いつはりて雍闓が手下の者也と思ふ由にて陣中に招き入て申けるは、汝が主の雍闓は已に御方に降參せんと願ひ、高定、朱褒が首を取て來り降らんと約せしが、何ゆゑに遲なはれる、汝速に回てこの事を申せとて一通の書簡を封じて其人に渡し、これ一大事の書簡なり、雍闓に與へよとて酒を飮せて回しければ、其人いそぎ本陣に回り、高定に見えて右の趣を語り、孔明われを以て雍闓が兵なりと思ひ、書簡を封じて送りたりとて出しければ、高定ひらき見るに、早く二人が首を取て御方に來らば天子に奏して重く用んと書て雍闓に送れる書簡なりければ、高定大に怒り、此上は疑ふことなし、我眞の心を以て交れば雍闓却て我を殺し、己が功名に備て蜀に降らんと巧む、是なんぞその儘にて指措べきとて、急ぎ鄂煥を召て申けるは、孔明は仁德の人なり、我等が謀反は雍闓が勸に依り、いま早く雍闓を殺して孔明に降らずんば忽ちに禍に遭ん。鄂煥が曰、いま陣中に酒宴を設て雍闓を招き玉へ、此人別の意なくんば坦然として喜び來らん、若疑の意あらば敢て來らじ、その時君自ら推よせて攻玉へ、某は彼が陣の後に伏て忽ちに生取ん。高

乃ち諸將に計を敎て雍闓が手下の生取と高定が手下の生取とを別の處に捕へ置、ひそかに軍中に云傳て、高定が手の者は放るべし、雍闓が手の者は盡く殺さるべしと諷說せさせければ、生取れたる者共これを聞て高定が手の者は喜び雍闓が手の者は哀む。暫ありて孔明まづ雍闓が手の者を引出させ、知ぬ由にて汝等は何人の手下に屬せるぞと問ければ、生取共もし雍闓が手の者なりと明に云ば必ず殺されんことを畏れ、詐て答て曰、皆高定が手下の者にて候。孔明申けるは、高定は御方に忠ある者なり、盡く宥べしとて酒のませ引出物とらせて送り回し、次に眞の高定が手下の生取を引出させ、汝等は誰人の手下に屬せるぞと問に、生取共答て曰、みな高定が手の者にて候。孔明が曰、汝等まことに高定が手下の者ならば中軍に入て酒を飲とて盡く宥して引出物とらせ、今日雍闓ひそかに使を送て汝等が主の高定と朱褒とが首を刎、來て御方に降らんと願ふ、我元より高定が忠義を知たれば、徒に討れんことを憐む、今汝等を放して回らしむ、必ず再び反くこと勿れ、若重て生取ば決して一人も宥すまじと云て盡く放しければ、皆恩を謝して本陣に回り、高定に見て右の趣を語り、雍闓ひそかに孔明に內通して君を殺さんと仕る、油斷し玉ふなと云ければ、高定心疑ひ密に雍闓が陣へ人を遣して其體を窺はしむるに、蜀の陣より放されて回りたる士卒共と覺しくて相あつまりて孔明が德を感稱し、我

魏延戰ひ二三合にして詐て引退く。鄂煥勝に乗て趕掛ければ、忽然として喊の聲起りて張翼、王平二手の勢殺到して引裹で三方より攻、つひに鄂煥を擒にし、本陣に回て孔明が前に引出す。孔明急に其繩を解ゆるし酒肉を與て持成ければ、鄂煥深く其恩を感ず。孔明問て曰、汝は誰人の手下に屬せる。鄂煥が曰、某は高定が手下の大將なり。孔明が曰、われ本より高定は忠義の士なるを知る、今雍闓に欺れ悞て謀反に與す、今汝を放して回らしむ、高定に此事を語て共に御方に來れ、我必ず重く賞せん、若延引に及びなば大なる禍を被るべし。鄂煥恩を謝して我陣に回り、高定に見えて孔明が德を語り、共に感嘆して居たる所に、雍闓つと來り、如何に鄂煥は何とて無事に回りたると問に、高定答て曰、孔明情ありて放し出せり。雍闓が曰、御邊これを知ずや、此は孔明が反間の計にて、御邊と我とを不和にせん爲なり。高定心いまだ決せざる所に、蜀の大將魏延せめ來れりと告ければ、雍闓自ら三萬餘騎を引て打向ひ、共に陣勢を布ければ、魏延罵て申けるは、恩を忘れ義に背の賊早々に降參せよ。雍闓大に怒り馬を拍て鋒を交へけるが、叶はずして逃ければ、魏延二十里あまり追殺す。次の日雍闓又兵を引て出ければ、孔明堅く陣屋を守て三日が間戰はず。第四日に至て雍闓、高定二人二手に分れて推よせければ、孔明兼てより路の難所に勢を伏せ置、散々に打やぶりて大半を擒にす。孔明

て或は剛にし或は柔にし、時に應じて計を用ふべし、輕々しく他人に任べき處にあらず。王連再三諫れども孔明肯て從はず。零陵郡の蔣琬字は公琰と云ものを參軍とし、江夏鄳縣の人に費禕字は文偉と云ものを長史とし、董厥、樊建二人を掾吏とし、趙雲、魏延を大將とし、王平、張翼を副將とし、其外の大將數十人軍勢五十餘萬、益州を指て打立ところに、關羽が二男關索と云もの馬を飛して來り見ゆ。孔明これを見て淚を流し、荊州の破れたる時汝すでに討れぬるよと思ひしに、今まで何くに在たると問ば、關索申けるは、荊州の破れし時身深手を被りしかば、鮑氏の家に隱て病を養ひ、先帝の吳を攻玉ふ時も金瘡いまだ痊ずして打立こと能はず、今丞相の南蠻を征し玉ふと承て早々に馳きたれり。孔明これを聞て嗟嘆して已ず、朝廷に奏問して軈て先手の大將とし、大軍の通るところ秋毫も犯すこと無。去ほどに建寧の太守雍闓は孔明が自ら向ふ由を聞、高定、朱褒を呼て計を議し、高定を中路に備へ、雍闓左にありて朱褒を右に備へ、共に五六萬の勢を率し、高定が大將に永昌永平の鄂煥とて、身の長九尺あまりにして面は惡鬼の怒れるが如く、常に方天戟を使て萬夫不當の勇ありけるを先陣の大將とし、本陣を離て蜀の勢を迎へしむ。孔明が大軍すでに益州の境に入て鄂煥が勢と出合ければ、魏延眞先に馬を出し、反賊早く降れと呼はりける。鄂煥きゝもあへず戟を舞して蒐りければ、

雍闓は漢の雍齒が苗裔にて、武畧の勝れたる者なれば、久して害を成ん、臣自ら大軍を率し行て之を平ぐべし。後主劉禪宣ひけるは、東に呉の孫權北に魏の曹丕、虚に乘て攻入んと窺ふ、今丞相朕を弃て遠く南蠻の地に赴き、呉魏もし兵を興して攻きたらば如何して防べき。孔明が曰、臣すでに計を定め置り、今呉の孫權共に好を結ぶ上は、爭か逆意を存すべき、殊に李嚴を白帝城に籠置たれば、此人の智謀呉の陸遜をも防べし、魏の曹丕は新に呉の勢に破られ、氣力を墜して都に回る、焉んぞ遠き計あらん、殊に馬超に漢中の要害を守らせ置たれば、是又何の憂か候はん、臣又關興、張苞に二手の勢を付て何方にても危ところを救はしむ、萬に一つも失あるべからず、陛下御心を安からしめ玉へ、臣南蠻を平げて後の憂を絶のぞき、其後に魏を滅して先帝三顧の恩を報ずべし。後主宣けるは、朕年幼して大事を知ず、丞相宜く之を議せよ。時に一人すゝみ出無用々々と呼はりければ、諸人これを見るに、諫議大夫王連字は文儀なり。孔明いかなる故ぞと問に、王連諫て曰、南蠻は不毛瘴疫の地、丞相國家の重任を司て何ぞ遠く出て征伐し玉ふ、今雍闓等謀反すと申せども、喩ば癬疥の病の如し、捨置とも何ほどの事を仕出さん、只一人の大將に命じて之を討しめ玉へ、自ら功を成ん。孔明が曰、南蠻の地は國を離るゝこと甚だ遠してみな王化に習ず、之を平げんこと甚だ難し、我自ら征し

ばゝ哀み哭て厚く葬り、再び兵を集て蜀の敵を拒んとするに、蜀の大將趙雲すでに長安へ攻かかりしが、南蠻の勢蜀の四郡を攻るゆゑ、孔明檄文を馳て呼返したりと告ければ、彌要害に守の勢を添、境を保て敢て動ず。

○孔明興レ兵征ニ南蠻一

蜀の建興三年の春孔明成都に在て後主を扶け國の政を治めければ、兩川の民みな其德に懷て夜も門戸鎖ず、路に遺たるあれども拾ことなし。幸に打つゞき豐年なりしかば、老幼腹を鼓て謳ひ樂み、凡そ徭賦を差して工役ある時は、先を爭て辨んことを願ふ。此に依て馬物の具兵粮等に至るまで備らずと云こと無。時に益州より早馬きたり、南蠻國の王孟獲十萬の勢を起して境を犯しけるに、建寧の太守雍闓謀反して孟獲に與す、牂牁郡の太守朱褒、越嶲郡の太守高定二人も此に心を合せたるに、永昌郡の太守王伉一人は忠義を存じて順はず、此に依て南蠻の大勢永昌郡を攻ること甚だ急なり、今王伉百姓を集て城を守り、功曹、呂凱と命を弃て敵を防ぐ、討手の勢延引に及びなば事必ず大事ならんと告ければ、孔明いそぎ朝に出て奏して曰、臣久しく南蠻の樣を觀るに、乃ち國家の大なる患なり、今雍闓等孟獲と內應して四郡を亂る、此

り、湊の内へ入にける。時に早馬急を告て蜀の大將趙雲陽平關より出て長安を攻ると報じければ、曹丕色を失ひ、急ぎ軍を收て都に回れと下知する所に、呉の勢鼓を打喊を造て攻來る。曹丕諸大將に命じ兵粮武具を盡く打弃て龍舟を淮水の内へ入しむるに、俄に喊の聲響て一彪の軍馬討て出、呉の大將孫韶眞先に馬を飛して散々に蒐たりければ、魏の勢なじかはたまるべき、大に亂れて大半は討れ、溺死する者數を知ず。諸將も命を弃て這々に圍を出、魏王を救て淮河を渡るに、行こと三十里ばかりにして蘆葭の繁りたる中より火燃出、元來魚の油を灌たれば焔風に順て盛に黑烟天地を掩ふ。龍舟大にして通るべき樣なかりしかば、曹丕急に小舟に乘うつり漸く岸に近付ければ、龍舟すでに火かゝりぬ。曹丕驚き怕れ馬に乘て走らんとすれば、岸の上より呉の勢喊を咄と造り、大將丁奉勢に乘て攻かゝる。張遼事の急なるを見て馬を拍て戰はんとすれば、丁奉弓を取て兵と射るに、其矢張遼が腰に當り、已に馬より落んとするを、徐晃急に來り救ひ、曹丕を扶て都に逃回りければ、魏の勢のこり少に討なさる。孫韶、丁奉は逃る敵を追かけ、路に弃たる馬物の具兵粮武具兵船に至るまで限なく拾ひあつめ、江を渡て回りければ、徐盛は大なる功を立て重く封賞を被りけり。魏王曹丕は這々都に逃のぼり、士卒大半討れたれば心の内安からざるに、大將張遼が腰を射られたる矢瘡重して了に苦痛して死けれ

えざりければ、三更の比に至て斥候の兵馳かへり、呉の國の人民みな陛下の大軍に魂を失ひ、行方なく逃隱れて一人も殘り留る者なしと告ければ、曹丕甚喜び笑てぞ居たりける。已に其夜も明方に及て朝霧ふかく立掩ひ、咫尺の内も見えざりしが、日のぼり風吹て霧晴雲收りければ、遙に江南の方を望に、岸の上に數百里が間城を築き、矢倉の上に色々の旗を挾み、戈を建槍を列て光り日に耀て見えければ、曹丕大に驚てあれは如何にと怪ところに、追々人きたり、南徐より江に沿て直ちに石頭城まで數百里が間に城郭を構て連々として絕ず、只一夜の内に成就せりと報じければ、魏の勢みな膽を冷し、矢倉の上壁の陰に弓箭兵杖を携たる軍勢すき間もなく雙居たれば驚き怕れずと云もの無。これ元來徐盛が計にて兼てより用意し、月黑く霧深き夜を相待、一夜の中に僞の城郭を構へ、草を束て靑き衣を被せ、武具を持せて立雙べたる也。曹丕よく〳〵之を見て長嘆して申けるは、わが手下に數千の大將あれども皆用ふるに足ず、呉の國の人物此の如し、いまだ急に破ること能はじとて心の内疑を成ところに、忽然として大風ふき起り、白浪天を拍て江水曹丕が衣を洗し、虛空に動搖して船すでに覆らんとしければ、文聘いそぎ小舟を推きたり曹丕を救ひ駕んとするに、波荒して船しきりに飛揚し、人みな起あがることを得ざりければ、文聘龍舟の上に飛のり、曹丕を負て小舟に乘うつ

とも事の缺べき事更に無、いまより後も再び用ふること勿れとて馬に乗てぞ回りける。其夜人來り、孫韶手下の勢三千餘騎を引てひそかに江を渡れりと告ければ、徐盛心の内怒りけれども、呉主孫權の再三請受て救玉へる者を無代に殺すべき樣なしとて、丁奉に善々計を授て三千餘騎を引て救はしむ。去ほどに曹丕が大軍兵船を列て已に廣陵まで來り、先手の大將曹眞大江の岸に船を列ねければ、曹丕まづ敵の樣を問しむるに、曹眞答て曰、遠く向の岸を望み候に敵一人も見えず、又立たる旗もなし。曹丕が曰、これ必ず詭の計ならん、朕自ら其虚實を觀んとて龍舟を放て大江の下に浮べ、岸に傍て龍鳳日月五色の旗を建、白旄黃鉞を列ねて其光日に耀き、柄の曲りたる黃羅の蓋を捧て曹丕自ら舟端に立出、遙に江南の岸を望に、敵ひとりも見えざりしかば、劉曄、蔣濟を顧て申けるは、今敵の用心する體も見えず、直ちに兵船を向うの岸に寄て一同に攻上んは如何に。劉曄が曰、兵法に實々虚々鬼神莫測と云り、輕々しく渡り玉ふこと勿れ、今御方の大軍この處まで攻きたる、彼なんぞ備を成ざらん、今陛下造次に事を行はず、四五日が程その氣色を窺て、那後に先手の勢を密に渡し玉へ。曹丕が曰、これ眞に朕が意に合へりとて江北の岸に傍て船を連ね、此夜月も黑かりしかば數千の船に燈火を燒て光り天地に耀き、恰も白日の如くなるに、江南の岸には火の光も更に見えず、人ありとも見

救ければ、孫韶哭て申けるは、臣昔年廣陵に在て深く地の利を知れり、早く打向て曹丕を破らずんば、曹丕兵船を列て長江に下り、國中不日に破るべし。孫權乃ち作て陣中に入ければ、徐盛これを見て色を正して申けるは、大王すでに臣を封じて大都督とし玉ふ、今揚威將軍孫韶軍法に順はず、此ゆゑに首を斬て法を正す、大王いかなれば赦し玉へる。孫權が曰、孫韶年若して血氣の勇に傲る、この故に軍中の令を背く、ねがはくは幸に罪を恕せ。徐盛が曰、それ軍中の法度は臣が立る所にも非、又大王の立る所にも有ず、乃ち國家の典刑なり、若親を以て之を恕し、疎を以て殺さば公論と云べきか。孫權が曰、この子もし宗室に有ずんば將軍の心の儘に任べし、孤なんぞ救ことを得ん、如何せん是は孫伯海が親き姪にて、少して父を失ひ伯海が爲に養る、本兪氏の子なりしが孤兄これを愛して乃ち姓を孫と改む、今もし之を殺さば兄の義に背き、又兪氏の後を絶に至る、幸に之を恕せ。徐盛が曰、臣已ことを得ず、大王の龍顏に對して死罪を宥ん。孫權限なく喜び、孫韶に命じて徐盛を拜謝せよと云に、孫韶昂然として拜せざりければ、徐盛問て申けるは、汝いま我に服すや。孫韶聲を勵して曰、わが計は偏に兵を引て曹丕を破り、戰場に命を弃んことを欲す、何ぞ汝が懦弱なる計に服せん。徐盛怒て色を變じければ、孫權急に孫韶を叱て追退け、徐盛を顧て申けるは、今この者を用ひず

孫部
徐盛軍

徐盛

何の憂かあらんとて、遂に徐盛を安東將軍に封じて建業南徐の軍馬に都督たらしむ。徐盛恩を謝して即時に諸將を建業に集め、手分を定めて下知を成ければ、諸人みな許容して退きけるに、一人昂然として下知に從はざる者あり。徐盛これを見れば乃ち吳主の姪に揚威將軍孫韶字は公禮なり。幼より極て膽畧ありければ今日更に徐盛が下知に順はず。進み出て申けるは、今日大王將軍を都督に封じて魏の勢を破り、曹丕を擒にせんと欲し玉ふ、將軍なんぞ早軍馬を揃て江北に渡り、淮南の地に出て敵を迎玉はざる、今若江南の岸を守て敵の來るを待ば魏の大軍一度に來て御方防べき樣なく、國中の民震動せん。徐盛が曰、曹丕勢大にして殊に名將を先手とす、御方江を渡て戰はば安ぞ彼が勢に敵せん、我只江南の岸を守り彼が江北の岸に集るを待て別に計を用て破るべし。孫韶が曰、わが手下に三千餘騎の兵あり、殊に先年廣陵を守て其邊の地利を知り、我ねがはくは江北へ渡て曹丕と快く雌雄を決せん、若勝ずんば我首を刎玉へ。徐盛再三許容せざりけるに、孫韶强て望みければ、徐盛怒て曰、汝いま我下知に從はず、我もし之を閣ば何を以てか諸將を服せんとて、武士に命じて首を斬と云。武士共孫韶を引て轅門の外に推出しけるが、吳主の姪なれば若救ふ人も有んかとて輕々しく斬ざりければ、孫韶が手下の大將いそぎ吳主にこの由を報ず。孫權驚き馬を飛して馳きたり、武士を退けて孫韶を

ば、大小の兵船を揃て蔡潁より淮水に入、壽春に出て廣陵に至り、江口を渡て直ちに南徐へ攻入玉へ。曹丕これに從ひ夜を日に繼で龍舟十餘艘を造せ、長さ二十餘丈にして二千餘人を容べし。其外の兵船三千餘艘不日に造り出しければ、魏の黃初五年秋八月曹眞を前部先鋒とし、張遼、張郃、文聘、徐晃等を大將として先手に備へ、許褚、呂虔を中軍の護衛とし、曹休を後備とし、劉曄、蔣濟を參謀として都合その勢三十餘萬、日を擇で打立、仲達を尙書僕射に封じ、都に留めて國の政を行はしむ。この由すでに吳の國に聞えければ、孫權驚き文武を集て計を議するに、顧雍すゝみ出て曰、今蜀と好を結ぶ上は、急ぎ書簡を送り、孔明に兵を起して長安へ攻かゝらせ、又大將を擇で南徐の要害を守らしめ玉へ。孫權が曰、この事陸遜に在ずんば叶ふまじ。顧雍が曰、陸遜いま荊州を守りて北國の大敵を拒ぐ、もし陸遜を召返し玉はば夏侯尙等が勢時を得て攻入、荊州必ず破るべし。孫權が曰、孤これを知ざるに非、如何せん眼前力を盡して孤を救べき人なし。時に一人すゝみ出て曰、大王いかなれば群臣を輕んじ玉ふぞ、臣ねがはくは一軍を領して魏の勢を防ぎ、曹丕自ら江を渡らば必ず生取て獻ん、若江を渡らずんば魏の勢を大半は打殺さん、この言もし相違せば九族を誅して罪を正し玉へ。諸人驚て之を見れば、乃ち瑯琊莒縣の人に徐盛字は文嚮なり。孫權喜て申けるは、もし卿が江南を守るならば孤

通俗三國志　巻之三十七

○曹丕泛二龍舟一伐レ呉

蜀の後主劉禪呉の孫權と好を結び、共に力を合せて魏を伐んとする由きこえければ、魏主曹丕大に怒り、人に先をせられざる時は必ず御方に利あり、不レ如朕自ら呉を伐んとて、文武の臣を集て計を議す。この時大司馬曹仁、大尉賈詡二人すでに病を受て亡しかば、命じて厚く葬らしめ、百官に向て申けるは、近ごろ呉の孫權蜀の劉禪と好を結び、使者を通じて唇齒の約を堅す、必ず兵を起して都を侵べし、朕先呉を平げて次に蜀を破んと思ふ、汝等いかなる計かある。侍中辛毘すゝみ出て曰、天下新に定て、地は濶と云ども民は少し、然るに又大軍を興して呉を伐玉はんは、甚だ以て宜かるまじ、不レ如よく兵を養て十年あまり屯田をなし、足レ食足レ兵て其後に攻玉はば、呉蜀自ら破るべし。曹丕怒て申けるは、これ腐れ儒者の論なり、いま呉と蜀と好を結て已に都を攻んとす、何の暇ありて十年を待んやとて、即時に兵を催しければ、司馬仲達申けるは、呉の國は長江の險阻を保て船ならでは攻がたし、陛下自ら征伐し玉は

と呉に入て答禮せしめければ、張溫國に囘りてまづ呉主孫權に見え、備に後主と孔明が德を稱し、永く好を結ん爲に又鄧芝を使たらしむと告ければ、孫權大に喜び酒宴を設て鄧芝を持なし、若呉と蜀と心を同して魏を滅さば必ず天下の太平を得ん、然る時は天下を平分して共に百姓を治めん、豈樂ざらんやと云ければ、鄧芝辭に應じて答て曰、天に二つの日なく民に二りの王なし、若魏を滅しての後は大王天命の皈する所を誰ならんと思ひ玉へる、但君たる者その德を修め臣たる者その忠を盡ば、自ら合戰やまん、然らずんば何ぞ樂こと有ん。孫權笑て曰、君は乃ち誠實の士なり、蜀に浩る賢才の人あり、孤いづくんぞ妄に境を侵べき、但ねがはくは永く好を結んとて鄧芝に厚く金帛を與へ、送て蜀に囘らしめければ、此より呉と蜀と好を結で長く唇齒の國と成けり。

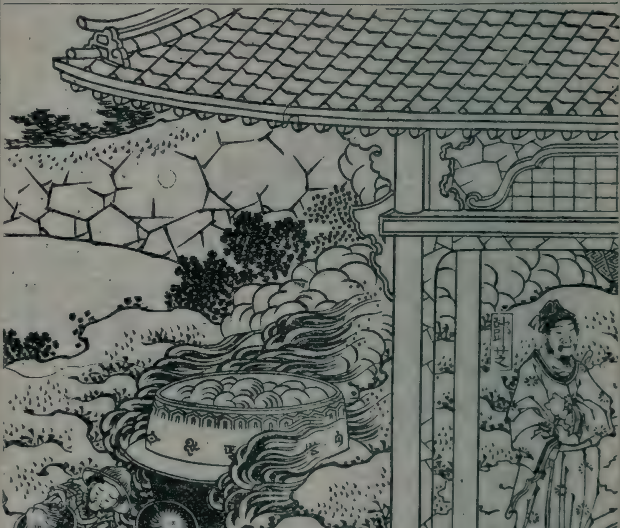
何ぞ聽ん。張溫問て曰、天に足ありや。秦宓答て曰、あり、詩に曰、天歩艱難と、足なくんば何を以てか歩ん。張溫問て曰、天に姓ありや。秦宓答て曰、いづくんぞ姓なかるべき。張溫が曰、なんの姓ぞ。秦宓が曰、姓は劉なり。張溫が曰、なにとて知たる。秦宓が曰、天子姓は劉、これを以て知。張溫問て曰、日は東に生ずるか。秦宓が曰、東に生ずと云ども西に沒す。この時秦宓が詞滔々として水の流るゝが如くなりければ、滿座みな大に驚き、張溫も口を閉て茫然として居たりけり。時に秦宓問て曰、先生は吳の國の名士、すでに天の事を以て某に問玉ふは必ず能天の理を明め玉へるならん、昔し混沌すでに分れ陰陽すでに定れる時、輕して清る者は上り浮で天となり、重して濁れる者は下り凝て地となる、共工氏の戰やぶるゝに至て頭を以て不周山に觸、天柱折け地維缺、天は西北に傾き地は東南に陷入と云り、天すでに輕く清で上り浮べる者ならば何ぞ西北に傾かん、輕く清外は還て是なに物ぞ、願くは先生これを敎玉へ。張溫これを聞て酒に醉たるが如く又愚癡なるが如く、答ふべき詞なくして席を避て、意ざりき蜀中に多く俊才を出さんとは、今高論を聽て某が茅塞を開くと云ければ、孔明その愧んことを恐れ、善言を以て之を慰め、席間の問答は皆一時の戯なり、足下深く國家を安ずるの道を知玉ふ、何ぞ唇を弄ぶの戯談あらんと云ければ、張溫拜して之を謝す。孔明又鄧芝を使とし張溫

和なりしが今すでに崩御し玉ひ、又近ごろ主上寶位に卽玉ひ、深く吳王の德を慕て親く對面せざることを恨玉ふ、望らくは大夫國に皈て善言を以て吳王に奏し、長く好を結で共に魏の賊を平げ、萬年の計を成玉へと云ければ、張溫目を斜にして孔明を望み、談り笑ふこと舊の如し。次の日後主金帛を張溫に賜ひければ、孔明百官と共に錦の類を餞し、城南の亭上に酒宴を設て慇懃に別を送る所に、忽ち一人醉に乘じて座中に入ければ、張溫怒れる色あり。其人昂然として長揖し、憚ところもなく上座に着ければ、張溫喜ず、孔明に問て申けるは、これは何者にに候ぞ。孔明が曰、これは益州の學士にて秦宓字は子勑と云もの也。張溫あざ笑て曰、名は學士と云ども、未だ胸中の學ところを知ず。秦宓色を正して曰、わが蜀の國には三尺の童子も尙みな學ぶ、何に況や我をや。張溫が曰、汝なにをか學び得たる。秦宓が曰、上は天文に至り下は地理に至り、三敎九流諸子百家こと〴〵く通ぜずと云ことなく、古今の興廢聖賢の經傳總て覽ずと云こと無、汝わが學ぶ所を問は何とて我を輕んずる。張溫笑て曰、汝すでに廣言を放つ、我まづ天の事を問ん、天に頭ありや。秦宓答て曰、頭あり。張溫が曰、頭いづくにかある。秦宓が曰、西方にあり、詩に曰、乃眷西顧と、此を以て推時は頭必ず西にあり。張溫問て曰、天に耳ありや。秦宓答て曰、天は處レ高而聽レ卑、詩に曰、鶴鳴二九皐一、聲聞二于天一と、耳なくんば

恐くは卿蜀の國に入、孔明に遭て孤意を達すること能まじ。張溫が曰、大王なにとて自ら其志を失ひ玉へる、孔明眞に當世の英雄ならば臣も亦今の世の人傑なり、聖人も云ずや、舜も人也我も亦人也と、臣なんぞ孔明を怕れん、古の大舜も猶效ひ及ぶべし、何に況や今の人をや。孫權これを聞てつひに張溫を使として鄧芝と蜀に入て孔明と連和の事を調へしむ。この時孔明は鄧芝が日を經て回らざるを以て後主に見て奏して曰、鄧芝ゆいてより已に十日餘に及べり、必ず事を調べし、吳の國には賢人多し、必ず使を馳て答禮すべし、陛下よく禮貌を嚴にして之を敬ひ、彼に其威德の盛なるを見せしめ玉へ、吳蜀もし好を結ぶ時は魏の勢背て境を犯さじ、臣その隙に兵を起して南蠻國を攻平げ、後の禍を除て其のちに魏を伐ん、魏滅る時は吳は自ら服すべし、然る時は漢の天下再び興らん。時に外より報じて、吳の孫權いま張溫を使とし、鄧芝と蜀に入て回禮せしむと告ければ、後主乃ち文武の臣を丹墀に集め、鄧芝に命じて張溫をむかへさせ玉ふ。張溫みだりに志を得て昂然として殿に上りければ、後主禮を施し殿の左に坐を賜ひ、酒宴を設て重く持成、酒宴すでに了ければ百官みな張溫を客屋に送て休しむ。次の日孔明酒宴を設けて持成ければ、張溫みだりに傲り放にして、蜀の人物われに及ぶ者あらじと思ひ傍若無人なる體をなせども、孔明いよ〳〵重く敬ひ、酒半酣に至て申けるは、先帝初め吳と不

王は乃ち命世の英賢、孔明も亦一時の豪傑、蜀に山川の險あり、呉に三江の固あり、若共に好を結で唇齒と成ば、進んでは天下を幷べく退ては鼎足にして立べし、今大王身を屈して魏に臣と稱す、魏必ずその朝覲を望み、東宮太子を求て内侍とし、人質を取んと云ん、若その命に從ひ玉はずんば詔を奉て攻きたり、蜀の勢も流に乘じて大に進まん、此の如にして呉の國なほ安穩ならんと思ひ玉ふか、若大王某が言を然らずとし玉はば、能この事を思ひ玉へ、某いま大王の前に死して說客の名を絕んとて、殿上を走り下り鼎の中に飛んとす。孫權急ぎ曳止め後堂に入て酒宴を設け、上賓の禮を以て敬ひ、先生の言よく孤意に合へり、ねがはくは蜀と好を結ぶべし、先生このことを後主に告て長く唇齒を成しめよと云ければ、鄧芝が曰、今某を烹殺んとし玉ひしも大王なり、又某を用ひて好を結ばんとし玉ふも大王なり、大王なほ狐疑して心決せずんば、何を以てか信を天下に取ん。孫權が曰、孤心の内明ならず、先生幸に教よとて鄧芝を十日あまり宮中に留め、諸の官人を集て申けるは、孤江南八十一州荊楚九郡の地を保て、反て西蜀片田舍の國に及ばず、蜀に鄧芝あり君命を辱ず、呉の國に孤使と成て蜀に行、よく好を修すべき人なし。諸人これを聞て詞を出す者なかりける所に、忽ち一人すゝみ出、臣ねがはくは使たらんと呼はりければ、諸人これを見るに呉郡の張溫字は惠恕と云もの也。孫權が曰、

大なる斧を持長き戟を横たへて威風凛々たるを見て已に早く其意を曉り、全く怕るゝ色なく昂然として殿前に到り、鼎に油を沸せる有を看て莞　笑て進みければ、近臣引て呉主に見えしむ。鄧芝長揖して拜せざりければ、孫權簾を捲せ叱て申けるは、汝は何等の奴原なれば我前に來て拜をせざる。鄧芝昂然として答て曰、上國の勅使は小邦の主を拜せず。孫權いよ〳〵怒て曰、汝三寸の舌を掉て酈食其が齊に說し例に效んと欲するか、汝たとひ古の隨何、陸賈が再び生れたる辯ありとも、安んぞ孤心を動　ことを得ん、汝早くこの油の鼎に入べし。鄧芝あざ笑て申けるは、人みな呉の國に賢人多しと云、何ぞ料ん一人の儒者を此ほどに怕れんとは。孫權申けるは、孤なんぞ汝が如き一匹夫を怕れん。鄧芝が曰、すでに我を怕れずんば何ぞ我きたり說ことを愁る。孫權が曰、汝孔明に效て說客となり、孤を說て魏と交を絕せ、却て蜀と好を結しめん爲にあらずや。鄧芝が曰、われは乃ち蜀中の儒者、特に呉の國の利害の爲に來れり、何ゆゑに武具を列ね鼎を設て一人の使を拒んとする、何とて氣量の物を容ること能はざる。孫權これを聞て左右の武士を追退け、殿上に請て坐を賜ひ、呉魏の利害先生ねがはくは明に敎よと云ければ、鄧芝が曰、大王の心は好を蜀に結んと思玉ふか、魏に結んと思玉ふか。孫權が曰、孤蜀と好を結んことを願ふ、但恐らくは後主の始終を全うすること能はざらんことを。鄧芝が曰、大


鄧芝

孫權

でに危き時は、某大軍を引て急々に攻入、早く成都を乗取べし、もし四路の寄手打負なば御方敢て兵を動さじ、此一つには曹丕が求に逆はず、二つには蜀の怨を結ばず、深く上策とすべし。孫權これに從ひ、日を擇で蜀を攻んとて魏の使を囘し、密に人を遣して四路の勝負を窺ひ聞しむるに、遼東の勢は西平關に出て馬超を怕れて引退き、南蠻の勢は四郡を攻けるが、魏延に疑兵の計を用られて盡く逃囘り、上庸の孟達は俄に病を受て半途より引囘し、曹眞は陽平關に出て要害を趙雲に占られて一人も進むこと能はず、斜谷に陣を取けるが、了に打負て退たりと報じければ、孫權これを聞て文武の臣を集て申けるは、陸遜が詞まことの神算なり、孤もし妄に兵を進めば又蜀の怨を結ぶべし。時に近臣告て曰、蜀の國より鄧芝と云もの使たり。張昭が曰、これは孔明が兵を退くるの計にて、鄧芝を使として說客たらしむる者なり。孫權問て曰、いかゞ之に答ふべきぞ。張昭が曰、殿の前に大なる鼎を置、數百斤の油を貯へて能々炭火を撥してこれを沸し、強く壯なる武士千餘人を擇で手ごとに刀を持せ、宮門の前より直ちに殿前まで排列し、其のち鄧芝を呼で彼がいかに口を開くを見玉へ、若說客を成ば、昔し酈食其が齊に說たる例に效てこの鼎にて烹殺さんと云玉へ。孫權これに從ひ大なる鼎に油を沸し、千餘人を左右に立て鄧芝を招き入ければ、鄧芝衣冠を整へて宮門に到り、左右の武士手ごとに刀を提げ

ん。此に因て次の日孔明朝に出て後主に奏し、鄧芝を使として呉に行しむ。

○秦宓張温大論天

この時呉の國には陸遜が蜀の大軍を燒やぶり、魏の勢を退けたる功を以て、輔國將軍江陵侯に封じて荊州の牧を領せしむ。時に張昭、顧雍等相議し、宜く改元あるべしとて黄武元年と改む。この時魏の曹丕五路の兵を起し、蜀を伐んとて先呉の國へ使を遣しければ、孫權よび入て對面するに、使申けるは、魏適に兵を起して呉を襲んとせしは、蜀主玄德が利害を說て救を求しに因て也、今これを悔れども及ばず、是ゆゑに五路の大軍を起して蜀を滅さんとす、若呉の勢を起して共に川口より攻玉はば、必ず蜀の國を二つに分て相保ち、長く好を結ぶべし。孫權これを聞て心決せず、張昭、顧雍等と議しければ、張昭が曰、いま陸遜きはめて計あり、召て之を問玉へ。孫權乃ち陸遜を召てこの事を問に、陸遜答て曰、曹丕魏の國に雄據して坐ら中國を鎭れば、急には中々圖難からん、今又その命に負て兵を起さずんば、必ず仇を結ぶべし、臣料に呉の國と魏の國と共に賢才多しと申せども、孔明が計に及ぶ者なし、今まづ勉て曹丕が求に從ひ、軍馬を揃て蜀に向ふ體を見せ、密に四路の寄手の勝負を窺ひ、もし蜀の勢打負て國す

心を安んじ玉へと云ければ、後主の宣く、太后も自ら來て丞相に此事を問んと宣へり、今朕丞相の詞を聞て夢の初て覺るが如し、何の憂か有んとて共に數盃を傾け、酒宴休で出玉へば、百官久しく門外に立、後主の顏色喜を含で出玉ふを見て皆心の內怪み疑ふ。後主御駕を促して還幸し玉へば、孔明拜し別れて遍く百官を見るに、一人天を仰で打笑ひ、甚だ喜を成ものあり。孔明これを見るに、義陽新野の人に鄧芝字は伯苗とて、漢の司馬鄧禹が後胤乃ち蜀の戸部尙書なりければ、密に人を出して鄧芝を留め、書院に入て半日ばかり閑談し、今天下三分して鼎の如くに峙つ、蜀は乃ち漢の正統なり、我吳魏を伐て天下を一統せんと欲す、先いづれの國を討べきぞと問ければ、鄧芝答て曰、今愚意を以て論ずるに、魏は漢の逆賊なれども其勢ひ甚だ大にして急には中々動し難からん、只時を待て徐々と討玉へ、今主上初て寶位に昇り玉ひ、民の心いまだ安からず、宜く吳の孫權と好を結で脣齒の交をなし、先君の舊怨を捨玉はば、此乃ち長久の計ならん。孔明笑て曰、われ之を思ふこと久し、いまだ其人を得ざることを憂ひしに、今日方にこれを得たり。鄧芝が曰、丞相なん人をか得玉ふぞ。孔明が曰、不レ辱ニ君命一可レ謂レ士、御邊にあらずんは叶まじ。鄧芝が曰、某才淺く智薄して恐くは丞相の大用に負ん。孔明が曰、われ明日天子に奏し、御邊を請て吳に使たらしめん。鄧芝が曰、捨玉はずんば必ず行

出右に入、右に出左に入、疑兵の計を成しむ、南蠻の勢その地の利を失ひ、唯一勇の力を恃で心甚だ疑を成ものなれば、必ず敢て進むこと能じ、此二路憂るに足ざる也、又上庸の孟達が漢中に向ふ、臣料に孟達は元蜀の大將、頗る詩書の義を知て李嚴と生死の交を結べり、臣適に成都に囘る時李嚴を留て永安城を守しむ、此に因て臣自ら一つの書簡を造り、李嚴に命じて手づから之を書せ、使を以て孟達に送らしむ、孟達その書を見ば必ず輕々しく進むこと能ず、心の內定まらずして虛病して半途より退くべし、此三路憂るに足ず、又曹眞が陽平關を攻る、この處は究竟の要害なれば容易に破るべき關にあらず、臣すでに趙雲に計を授け、緊く難處を守て出て戰ふこと勿らしむ、曹眞これを見ば久しからずして自ら退かん、此四路憂るに足ず、されども、萬一不虞の失あらんことを怕れ、密に關興、張苞二人に各三萬の精兵を授け、左右に分て五方の攻口を救しむ、此故に一人もこのことを知もの無、只吳の孫權は兵を起と云ども輕々しく動ず、もし四路の勢打勝て蜀中甚だ危き時は、必ず急に進んで攻かゝるべし、若四路の寄手打負ば安んぞ敢て進ん、臣料るに吳主孫權は必ず曹丕が三度まで吳を攻たりし怨を含で其命に從ふまじ、然れども一人辯舌の人を使とし、吳の國に行て利害を說しめ、先吳の勢を退かしめば、四路の敵は彌憂るに足ず、いまだ吳に使すべき人を得ず、臣深く之を思ふ、陛下御

き杖を弃て地に拜伏す。後主答禮して宣けるは、今五路の兵境を犯して事甚だ急なり、丞相いかなる故に府上に出て事を議せざる。孔明笑つて後主を請じて内に入奉りけれども、後主心の内いまだ安からず。孔明奏して曰、五路の兵境を犯す、臣なんぞ之を知ざるべき、今池の邊にて魚を觀るも思ふ所あるゆゑ也。後主の宣く、如何してこの禍を救ん。孔明が曰、臣計を定めて軻比能、孟獲、曹眞、孟達四路の兵を已に退けたり、但呉の孫權を退くべき計なかりしに、屹と案じ出せることあり、舌のきゝたる人を使とし、利害を說て退けしめんと欲すれども、いまだ宜き人を得ず、陛下必ず之を憂ひ玉ふな。後主驚て宣く、丞相果して鬼神不測の機あり、ねがはくは敵を退くるの計を聞ん。孔明が曰、先帝危に臨で陛下を臣に託し玉ふ、臣いつくんぞ暫も怠らん、成都の百官各その職を司て皆兵法の妙を知ず、鬼神も測こと能ざる此を機と云ふ、安んぞ他人に漏さんや、今遼東の軻比能が西平關を攻る、臣量るに馬超素より羌胡の心を知れり、羌胡の勢みな馬超を怕て神威大將軍と號す、此に因て檄文を馳て馬超に計を授け、緊く西平關を守て四方の路に奇兵を伏せ、毎日勢を換て之を拒しめ、羌胡の勢もし順時は金銀禮物を與て心を結ばしめ、もし逆時は精兵を以て之を拒しむ、此一路必ず憂るに足ず、又南蠻の孟獲が四郡を攻る、臣すでに檄文を飛して魏延に計を授け、一手の勢を率して左に

卽玉ひ、魏の曹丕五路の兵を起して境を侵す、事すでに急なり、丞相いかなれば病に託して出玉はざると呼はりければ、内より人出て申けるは、丞相明日早天に出て都堂にて事を議せんとす、暫く御皈あれとて馳入ければ、董允、杜瓊嘆息して空く回り、次の日百官を伴ひ都堂に來て孔明今や出ると相待、晨より暮に及べども更に出ざりければ、百官みな怨を含で退散す。次の日早天に後主朝に出玉ひければ、杜瓊列を出て曰、今事急にして丞相さらに朝せず、陛下自ら御駕を枉て丞相の府に御行し、親く計を問玉へ。後主これに從ひ百官を引て先養老宮に入、呉太后に見えて右の趣を告玉へば、太后驚て宣けるは、丞相いかなれば先君の遺勅に負ける、吾自ら行て丞相にこの事を告ん。董允奏して曰、太后かるぐしく出玉ふこと勿れ、臣量に丞相必ず高明の計あらん、天子まづ御行なりて若諾ずんば太后又太廟の中に出て孔明を召よせ、直にこの事を問玉へ。太后これに從ひ玉ひ、後主御駕を枉て直ちに丞相府に到り玉へば、門を守る者共ことぐく地に拜伏す。後主問て宣けるは、丞相は何くにか在。門吏答て曰、何處に居玉ふも更に知ず、只臣等に命じて固く門を守り、百官を内に入しむること勿と云玉へり。後主乃ち車より下て歩行して獨り第三重の門に入玉へば、孔明只一人竹の杖に倚池の邊に立て魚を觀居たり。後主良久く其後に立玉ひ、丞相安樂なりやと宣ひければ、孔明後を顧て大に驚

張遼、徐晃なんど云舊日の大將は皆列侯に封ぜられ、冀州、青州、合淝等の城を守て老年を養てぞ居たりける。去ほどに蜀の後主劉禪は已に皇帝の位に卽玉ひてより舊日の功臣に封賞を加へ、朝廷の政務は皆孔明が裁斷に任せらる。時に皇后いまだ立ざりければ、孔明百官と胥議し上言して申けるは、故車騎將軍張飛が女甚だ賢德ありて年十七歳なり、これを皇后に備へ玉へとて、了に張飛が女を正宮に冊き入。時に建興元年秋八月、近臣禍を告て申けるは、いま曹丕五路の大軍を起して直ちに蜀を取んとす、第一路は遼東の軻比能西平關を犯し、第二路は南蠻王孟獲益州の四郡を襲ひ、第三路は吳主孫權峽口より川に入、第四路は反將孟達上庸の勢を起して漢中を犯す、第五路は曹眞を大都督として陽平關を取しむ、此五路の勢都合五十萬餘騎なり、孔明に告んと欲するに、如何なる故やらん孔明數日朝に出玉はず。後主これを聞て大に驚き、汗ながれて背を浹し、急ぎ丞相の府下に使を遣して孔明を朝に召玉ふ。使命半日ばかり有て囘り來り、丞相近比病を受て如何に申せども朝に出玉はずと奏しければ、後主いよいよ怕れ驚き、黃門侍郎董允、諫議大夫杜瓊二人を丞相の府に遣し、直に孔明が床の下に到て此事を告知しめよと宣へば、二人勅を承り丞相の府に入んとすれども、門を守る者堅く拒で入ことを放さず。杜瓊大音あげ、先帝危に臨で孤を丞相に託す、今主上始て寶位に

ずカを竭して幼主を扶ん、陛下かるぐ〵しく伐玉ふこと勿れ。時に一人すゝみ出笑て申けるは、この時に乘て蜀を伐ずんば何の時を期すべきぞ。諸人これを見れば河内溫城の人に司馬懿字は仲達なり。曹丕が曰、朕兵を起して蜀を伐んと欲す、卿いかなる計かある。司馬懿が曰、若只中國の勢を起さば急々には勝ことを得じ、必ず内外より夾で攻るの計を用ひ、孔明に首尾相救こと能ざらしめば、必ず大なる功を成ん、須く五路の大軍を起し玉へ。曹丕問て曰、五路とは何ぞ。司馬懿が曰、遼東鮮卑國へ使を馳て、國王軻比能に金帛を送て其心を結び、遼西羌胡の勢十萬を起して陸路より西平關を攻取しめん、此一路なり、又南蠻國へ書簡を送り、國王孟獲に恩賞を與て十萬の蠻兵を起し、益州の永昌、牂牁、越嶲等の處を攻させ、蜀の南を擊しめん、此二路なり、又吳の國に使を遣し、地を割て隣好を結んと約し、孫權に十萬の勢を興して兩川、峽口を攻させ、難所に由て逕に涪城を取しめん、此三路なり、又降將孟達に命じて上庸の勢十萬を起して西の方漢中より攻入しめん、此四路なり、次に大將軍曹眞を大都督とし、十萬の勢を率して京兆より陽平關に出て直ちに蜀を代しめん、此五路なり、この五十萬の大軍五路に分れて進みなば、孔明いかに太公望が妙才ありとも安んぞ之に當ん。曹丕限なく喜び、密に使を馳て四路の勢を起させ、其のち曹眞を大都督として直ちに陽平關に攻入しむ。この時

伏惟、大行皇帝邁仁樹徳、覆燾無疆。昊天不弔、寢疾彌留。今月二十四日奄然升遐。臣切號咷若喪考妣。乃顧遺詔事、惟大宗動容損益。百僚發哀滿三日除服、到葬期復如禮。其郡國太守相都尉縣令長、三日便除服。臣亮親受敕戒、震畏神靈、不敢有違。臣請宣下奉行。

孔明百官を集めて曰、國一日も君なくんば有べからず、早太子を帝位に即奉り、漢の正統を繼しめんとて劉禪を皇帝の位に上せ、章武三年を建興元年と改む。劉禪字は公嗣、時に御年十七歳。孔明を尊で丞相武鄕侯に封じて益州の牧を領せしめ、後八月に先帝を惠陵に葬て昭烈皇帝と謚し、吳皇后を皇太后として養老宮に入、甘夫人を昭烈皇后と謚して天下に大赦を行ひ、國中一應の事務みな孔明に任せ玉ふ。

○曹丕大興五路兵

蜀帝すでに永安宮にて崩御し玉へる由魏の國に聞えければ、曹丕喜で申けるは、玄德すでに死せり、朕又なんの憂かあらん、其國中主なきに乘て早く大軍を起して滅べし。賈詡諫て曰、玄德すでに亡と申せども、必ず孤を孔明に託すべし、玄德つねに善人を用ひたれば、孔明必

再拜して父とすべしとて、二人の皇子に命じて拜せさせ玉ひければ、孔明が曰、臣肝腦地に塗るとも安んぞ能知遇の恩を報ずることを得ん。帝李嚴に向て宣く、朕すでに孤を丞相に託す、汝等必ず怠ること勿れ。又趙雲に向て宣く、朕つねに卿と患難の中に相從て久しく戎馬の間に奔走す、何ぞ期せん此地に別れんとは、卿朕が故き交を想ひ、早晩幼子を顧て朕が言に負こと勿れ。趙雲地に拜哭して曰、臣ねがはくは犬馬の勞を效して社稷を扶ん。帝百官を顧て宣けるは、朕一々付屬すること能ず、皆よく保愛せよとて忽然として崩じ玉へり。時に聖壽六十三歳、章武三年夏四月二十四日なり。文武の百官哀み哭き、孔明等梓宮を奉じて成都に回りければ、太子劉禪城を出て遠く迎へ、靈柩を正殿の内に安んじ、哀痛して祭りを成玉ひ、遺詔を開き看玉ふに、其詔に曰、

朕初得病疾、但下痢耳。後轉生雜病、殆不自濟。朕聞、人年五十不稱夭壽。今年六十有餘、死復何恨。但以卿兄弟爲念耳。勉之勉之。勿以惡小而爲之、勿以善小而不爲。惟賢德、可以服人。卿父德薄不足效也。卿與丞相從事、事之如父。勿怠勿忘。卿兄弟更求聞達、至囑々々。

群臣遺書を讀了ければ、孔明乃ち上書して曰、

臣を殿中に呼、紙筆を求めて自ら太子の方へ遺詔を送り玉ひ、孔明に向て宣けるは、朕書を讀ずと云ども粗大畧を知れり、聖人の曰、鳥之將死其鳴也哀、人之將死其言也善と、朕もと卿等と共に曹賊を滅して漢室を興さんとする所に、不幸にして卿等と中道にして別る、丞相この遺書を劉禪に送り與て、尋常の言と爲しむること勿れ、凡そ事ことぐ～く敎よ。孔明等みな地に拜泣して曰、ねがはくは陛下龍體を重しとし玉へ、臣等ことぐ～く犬馬の勞を施して陛下知遇の恩に報ずべし。帝又孔明を扶け起し、一つの御手には涙を掩ひ、一つの御手には其肩を撫、朕いま死ん、一大事の一言あり、丞相に告んと宣ひければ、孔明が曰、陛下ねがはくは隱し玉ふことなく明に語り玉へ。帝の宣く、君が才曹丕に十倍す、必ず能邦を安んじて大事を成ん、もし太子劉禪輔べくんば卽ち輔け、不才にして輔べからずんば君自ら蜀の主となれ。孔明之を聞て遍身に汗を流し手足措を失ひ、地の上に拜泣して曰、臣いづくんぞ敢て股肱を盡し其忠貞の節を效して、之に繼に死を以てせざらんやとて、頭を以て地を叩き、兩眼より血を出しければ、帝又孔明を龍床の上に坐せしめ、魯王劉永、梁王劉理を前に呼で宣ひけるは、爾等よく朕が言を記せよ、朕死して後は爾兄弟みな丞相を父として怠ることなく之に事よ、萬一怠ことあらば天人共に誅して不孝の子たるべし。又孔明に向て宣く、丞相坐せよ、朕が子

かと宣へば、關羽申けるは、臣は今生の陽人にあらず、乃ち冥途の陰鬼なり、平生信義を失はざるを以て天帝勅して神とし玉へり、兄も二人の弟と近き内に會し玉はん。帝これを聞て哀み哭き、忽然として驚き覺、傍を觀玉へども二人の弟も見えざりければ、急に人を呼で時刻を問玉ふに、三更なりと答ふ。帝嘆て宣く、朕この世に在こと久しかるまじとて急に成都へ使を馳、丞相孔明、尚書令李嚴等を永安宮に招き玉ふ。孔明勅を承て、太子劉禪を成都に殘し留め、魯王劉永、梁王劉理二人の皇子を伴ひ奉り、永安宮に來て帝の已に危なり玉ふを見て龍床の下に拜哭しければ、帝近臣に勅して孔明を龍床の上に坐せしめ、自ら其背を撫て宣ひけるは、朕丞相を得てより已に帝業を成ことを得たり、何ぞ期せん智術淺陋にして丞相の諫を用ひず、自ら浩る敗を取んとは、この故に成都に囘て丞相に面を對せんことを羞、しかれども今日病すでに危し、豈丞相を請て託するに後の大事を以てせざることを得んやとて御涙に咽び玉へば、孔明も涙を流して曰、ねがはくは陛下よく龍體を保て天下の望を副玉へ。帝傍を望み玉ふに馬良が弟馬謖床の傍に在ければ、近侍の者を盡く退けて又孔明を坐せしめ、丞相つねに馬謖が才を如何思へると問玉ふ。孔明答て曰、この人は當世の英雄なり。帝の宣く、然らず、朕此人を視るに言その實に過たり、必ず大に用ふべからず、丞相よく之を察せよと宣ひ、又諸の

蜀帝の夢に両人の亡卦に會す
蜀帝

関羽魂
張飛魂

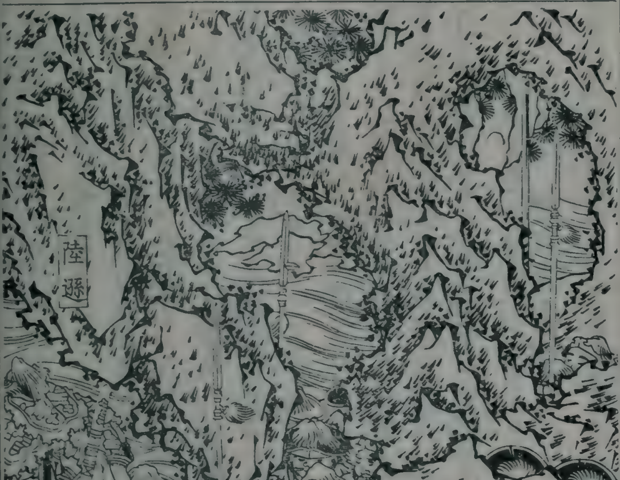
之を知ず、後陣の大勢を引て寄來りければ、吳の勢却て羨溪より殺出して散々に打やぶる。此に依てこの手の寄手は叶ずして退き、魏主曹丕に見えて右の趣を告ければ、曹丕大に驚く所に、早馬來て告て曰、曹眞、夏侯尙、兵を引て南郡を攻る所に、陸遜内に伏せ諸葛瑾外に伏せ夾んで攻けるゆゑ、御方打負て退きたり。其言いまだ了ざる所に、又早馬到來し、曹休兵を引て洞口を攻る所に、吳の大將呂範計を用て散々に蒐やぶり、御方夥しく討れぬと告ければ、曹丕三方の御方やぶれたるを聞て喟然として長嘆し、朕賈詡、劉曄が諫を聽ず、果してこの敗を取れりと云て、時に炎天の暑氣に値て疫疾行れければ、了に軍を收て洛陽に回り、此より吳の國と又不和なり。この時蜀の帝は永安宮に御座在て御心地煩はしく、群臣に對面せんことを羞て成都へも皈らせ玉はず。章武三年夏四月に及て御惱しきりに重く、關羽、張飛を哭玉ひて病すでに四肢に入、兩眼漸く昏うして近侍の人をも見ることを厭はせ玉ひ、或夜あたりの人を退て獨り龍床の上に臥玉ふ所に、俄に陰風颼々として燭すでに滅んとして復明に、誰とも知ず二人御傍に立ければ、帝怒て宣く、朕心の内惱亂して汝等に且く退けと云、何ゆゑに又來れる、早々に退けと叱り玉へども、其人更に出ざりければ、帝自ら傍なる斧を執、起てこれを見玉ふに、燈の影幽にして關羽、張飛二人忽然として侍立せり。帝驚て二人の弟なほ此世に在

に回り玉はんと諫めけれども、曹丕更に之を用ひず。去ほどに吳の大將朱桓、濡須に出て陣を取けるが、曹仁が大軍羨溪を攻る由を聞て手下の勢を盡く羨溪に分ち遣し、自ら五千餘騎を率して濡須の城を守る所に、忽ち曹仁が大將常雕と云もの、諸葛虔、王雙と五萬餘騎にて寄ると告ければ、諸軍みな怕るゝ色あり。朱桓時に年二十七歲、きはめて膽量ありければ劍を執て曰、凡そ兩軍相戰ふ、勝負は大將に在て士卒に在ず、兵の多きも兵の寡も汝等なんぞ怕るべき、兵法に曰、客兵倍して主兵半者、主兵尙能勝二于客兵一と、此は兵の平川曠野に在て蒐合の軍するを云、我いま曹仁を觀るに本より智勇の大將にあらず、況や千里の路を來て人馬共に疲る、我汝等を引て山上の城を守り、南は大なる江に臨み北は險しき山を負、これ逸を以て勞を待、百たび戰て百たび勝の勢也、曹丕自ら來るとも我なんの怕か有んとて旗を偃鼓を息、人なき體に見せて居たりければ、魏の先陣常彫精兵を引て寄きたる。朱桓は鳴を靜めて音もせず、敵すでに門外まで近付ける時、矢倉の上に一聲の鐵砲を鳴し、色々の旗を一度に颯と指あげて、朱桓只一騎馬を飛して討て出、常彫と戰ひ三合ならざるに馬より下に斬て落す。吳の勢これに氣を得て一度に城中より突出し、短兵急に斬て廻りければ、魏の大勢ことごとく亂れて討るゝ者數を知ず、谷の底に蒐落され、人馬いやが上に重り死す。朱桓打勝て勇み喜ところに、曹仁は

るは、臣久しく蜀帝に事へ、誠の心を推て疑ふこと無、なんぞ臣が一族を殺し玉はん、是虚説ならんと云ければ、曹丕げにもと同じ、賈詡を召て申けるは、朕天下を一統せんとす、先蜀を取べきか先呉を取べきか。賈詡が曰、玄德が雄才なる、更に孔明を兼て能蜀の國を保つ、呉の孫權は長江の險に據て、陸遜兵を要害に屯す、皆かる〴〵しく謀り難し、臣よく諸の大將を見るに、玄德、孫權に敵すべき者なし、然れども陛下の天威つひには天下を一統し玉ふべし、只よく國を守て呉蜀人のある時を窺ひ、虚に乘て伐玉へ。曹丕が曰、朕すでに大軍を三路に分て直ちに呉の國を攻んとす、豈勝ざるの理あらんや。尚書劉曄諫て曰、近ごろ呉の大將陸遜蜀の七十萬騎を打破り、上下心を齊して更に江湖の險阻を保つ、倉卒には破り難からん。曹丕が曰、汝前には呉を攻よと勸め、今又諫るは何ゆゑぞ。劉曄が曰、時に同からざることあり、さきには呉の勢しきりに蜀軍に破られ、其勢ひ漸く危かりし時、陛下もし攻玉はば一鼓して破るべし、今陸遜蜀軍を破て鋭氣日比に百倍せり、何を以てか攻ることを得玉ふべき。曹丕が曰、朕が意すでに決せり、卿再び諫ること勿れとて、自ら御林の軍を起して三方の御方に接應す。劉曄又曰、蜀の勢すでに備を成て、大將呂範は洞口に出て曹休を防ぎ、諸葛瑾は南郡に出て曹眞を防ぎ、朱桓は濡須を守て曹仁を防ぐ、三路の御方いまだ利あらず、陛下自ら向ひ玉ふとも必ず徒

得て這々白帝城に入せ玉ふ所に、馬良飛が如に馳きたり、已に御方の破れたるを見て後悔して已ず、孔明が言を以て逐一帝に奏しければ、帝嘆て宣く、朕早く丞相の言を聞ば今日の敗軍を致まじ、何の面目ありて成都に回て群臣に對面せんとて、白帝城を改めて永安宮と號し、御駕を駐て都に回り玉はず。馮習、張南、傅彤、程畿、沙摩柯等みな敵に討れぬと聞えしかば、哀み哭き玉ふ所に、近臣奏して曰、舟手の大將黃權江北の勢を引て盡く魏に降れり、陛下彼が妻子一族を誅して其罪を正し玉へ。帝宣ひけるは、黃權吳の兵に隔られ江北の岸に在て、皈んと欲するに路なく、已ことを得ずして魏に降れり、朕黃權に負けり、黃權が朕に負にあらず、何ぞ其妻子を罪せんとて、黃權が家には初の如く俸祿を賜て妻子一族を育玉ふ。この時黃權は舟手の勢を引て魏に降り、入て曹丕に見ければ、曹丕が曰、汝いま朕に降る、陳平、韓信が古の名を慕んと欲するか。黃權淚を流して申けるは、臣久しく蜀帝の恩を被り、殊遇甚だ厚く、臣を大將として江北の勢を督さしむる所に、吳の大軍に路を塞がれ皈るべき樣なく、此に來て陛下に降る、敗軍の大將一死を免れば幸なり、安んぞ敢て古人を慕ん。曹丕尤と喜て鎭南將軍に封じければ、黃權堅く辭して更に受ず。時に近臣奏して曰、只今蜀中より細作回り、黃權が魏に降れるを以て蜀帝怒て其妻子一族共をこと〴〵く誅し候と報じ來れり。黃權これを聞て申け

陸遜石陣に入て黄承彦に逢ふ
黄承彦


陸遜

玉へるか。黄承彦が曰、變化無窮して學こと能ず。陸遜自ら馬より下拜謝して囘りければ、諸將みな曰、この人は孔明が舅なり、何ゆゑに殺し玉はぬぞ。陸遜が曰、われを扶くる仁者の人なり、何ゆゑに殺すべき、諸葛孔明は眞の臥龍なり、我これに及ばずとて、急に軍を收て國に囘りければ、諸將問て曰、蜀の勢こと〴〵く滅て白帝城に逃あつまる、宜く勢ひに乘て討やぶるべし、今石陣を見て退き玉ふは何ゆゑぞ。陸遜が曰、われ石陣を怕て退くに有ず、推量するに魏の曹丕は奸雄の計父曹操に劣ことなし、今御方の討勝たるを聞ば、必ず我等が追蒐て遠く蜀の國に攻入、急に囘まじきことを料て虚に乘て吳の國を襲ふべし、我これを防ん爲なりとて、一人の大將を殘して後陣を護らせ、自ら大軍を引て飛が如くに囘りければ、案の如く未だ二日を過ざるに三方より早馬きたり、魏の曹丕大軍を三路に分ち、曹仁は濡須より進み、曹休は洞口より出、曹眞は南郡より發し、その勢みな雲霞の如く吳の國に向ふと告ければ、陸遜大に笑て曰、みな我料る所に出ず、我すでに其備を成せりとて、大將を分て防しむ。

○白帝城蜀帝託孤

章武二年夏六月、吳の陸遜蜀の勢を猇亭夷陵の地に破りければ、帝散々に打成れ、趙雲が救を

術なり、何の益か有とて、五六騎を引て坡を下り、直ちに石陣の中に到り、能々これを窺ひ見るに、手下の大將告て曰、日も已に暮て候に、都督早く囘り玉へ。陸遜馬を囘して出んとすれば、忽然として狂風起り、砂を飛し石を走しめ、天地須臾に變化して怪き石峨々として尖こと劍の如く、岸拍波滔々として鼓の音喊の聲に異ならざりしかば、陸遜大に驚き、我孔明が計に中れりと云て急に囘らんとする時、亂石路に横たはりて出べき樣もなかりければ、如何せんと驚く處に、一人の老翁忽然として出來り、陸遜が馬の前に立笑て申けるは、將軍この陣を出んと思ひ玉ふか。陸遜が曰、ねがはくは老翁われを引て出し玉へ。老翁乃ち杖を携て徐々と出けるに、何の碍もなく易々と引て出ければ、陸遜問て曰、老翁は如何なる人ぞ。答て曰、老夫は乃ち黃承彥なり、先年某が婿諸葛孔明蜀の國へ入時、此處に石を排して陣勢を布、八陣の圖と名づく、此乃ち八門遁甲の休、生、傷、杜、景、死、驚、開を按じて、毎日毎時變化すること端なく、十萬の精兵に比すべし、孔明別るゝに臨んで某に申けるは、後に吳の國の大將この陣に入て迷べし、必ず引て出すなと云けるが、某年老てこの山に隱れ專ら道義を學所に、今日岩の上より望めば將軍死門より陣中に入玉ふ、必ず陣法を知玉はぬ者なりと思ひ、良久しく見居たれば果して迷ひ玉へり、某坐ら視るに忍ず、生門より引出せり。陸遜が曰、老翁この陣を習ひ

路、劉寧は手下の兵を引て降人となり、七百里が間に弃たる兵粮武具ことごとく呉の兵に取れけり。陸遜大に勝利を得て、蜀帝を擒にせんとて自ら大軍を率して飛が如くに追掛、すでに夔關の前に近付、馬上より向を望ば、山に傍江に臨で一陣の殺氣天を撞て起りけり。乃ち諸大將を顧て申けるは、これは必ず敵の伏勢ならん、輕々しく進むべからずとて十里あまり引退き、平野に出て陣勢を張、敵の來を相待、ひそかに斥候の兵を遣して行先の樣を窺しむれば、程なく回り來て曰、能々向の體を窺に、敵は一人も見えず候。陸遜怪み馬より下て山の上より望み見れば、殺氣凛々として復起る。此に依て心の内安からず、再び人を遣して仔細に窺ひ探しむるに、其人回り來て、更に一騎の迹も見えず候と申す。陸遜いよいよ怪み、日の傾に從て次第に殺氣加りければ、心猶豫して定まらず、又人を遣して能々見せしむるに、其人回り來り、江の邊に大なる石八九十亂れ散て、人は獨も見えず候と答ふ。陸遜餘の不思議さに處の人を呼て、江の邊に亂れたる石の堆きは如何なる故ぞと問に、土人みな答て曰、先年諸葛孔明蜀の國に入時兵を驅て此に來り、石を排して沙の上に陣勢を成玉ひけるが、常に雲の如くなる氣起る、この處は魚腹浦と申所にて候。陸遜これを聞て了に馬に打のり、數十騎を引て坡の上に立、よくよく石陣を見るに、四方八面ことごとく門戸ありければ、あざ笑て申けるは、これ人を惑の

蜀の大將傅彤は跡に引下りて追かくる敵を防けるが、呉の大勢に四方を圍れ、命を弃て戰ひければ、呉の大將丁奉大音あげて申けるは、蜀の大將死する者數を知ず、降る者きはめて多し、汝が主の玄德も已に生取にせられたり、汝なんぞ早く降らざる。傅彤怒て申けるは、われは乃ち漢の大將、安んぞ呉の犬に降らんやとて、槍を撚て大勢の中を蒐やぶり、力を奮て散々に戰ひ、百餘合にして圍を出ること能ざりければ、長く嘆じて口中より血を吐、つひに亂軍の中にて切死にぞしたりける。蜀の祭酒程畿は只一騎江の邊に逃わしり、舟手の勢を下知して敵に向はしめんとする所に、呉の大勢勝に乘て攻ければ、蜀の勢四角八方へ散亂す。手下の將士大音あげ、程祭酒いそぎ馬に乘て走り玉へと呼はりければ、程畿怒て申けるは、君に從て戰に出る毎に、了に一度も逃ること無とて、呉の勢すでに四方に圍ければ、自ら首を刎てぞ死にける。蜀の先鋒張南は久しく夷陵の城を圍で孫桓を攻て居けるが、忽ち馮習馬を飛して馳きたり、御方の破れたる由を告ければ、張南大に驚き、城を打すて帝を救んとて進む所に、呉の勢すでに攻きたり、孫桓城を開て後より蒐り夾んで攻ければ、張南、馮習力を盡して時うつるまで戰ひ、了に出ること能はずして亂軍の中にぞ死したりける。南蠻王沙摩柯は只一騎江の邊を逃わしりけるが、呉の大將周泰に追付られ、引回して三十餘合戰ひ、了に討れて死にける。蜀の大將杜

より喊を咄と造り、呉の大將朱然一軍を引て岸の上より殺到しければ、帝叫で朕この處に死せんと宣ふ。關興、張苞力を盡して打破んとするに、呉の勢鏃を揃て射たりしかば、皆重き傷を被て盡く追回さる。時に又後より喊を作て陸遜大軍を引て谷の中より出ければ、帝いかゞせんと怕れ玉ふ所に、鼓の聲天地を崩が如く、朱然が軍勢俄に亂れて散々に成ければ、帝大に喜び、朕又生たりと宣ひ、援の勢を誰ぞと問玉へば、常山の趙雲なりと奏す。この時趙雲は江州に在けるが、遙に東南の火を望み見て心の内安からず、兵を引て來ける所に、帝散々に亂て走り玉ひければ、槍を提て突て入。陸遜兼て趙雲が名を聞知ければ、其旗を見て急に軍を引返す。趙雲勇を奮て四方八面を蒐やぶり、呉の大將朱然に出合、只一槍に刺殺して呉の勢を追ちらし、帝を守護して白帝城に走りければ、帝宣ひけるは、朕いま生ることを得たり、手下の大將を如何して救ん。趙雲が曰、敵軍急に追きたる、久しく此に停べからず、陛下先白帝城に入て敗軍を集め玉へ、臣再び兵を引て諸將を救ん。帝これに從ひ、纔に打殘されたる百餘人を從て白帝城にぞ入玉ひける。

○魚腹浦八陣伏ニ陸遜ヲ一

走り玉ふに、徐盛兵を引て追來り、夾んで攻ければ、帝怕れ驚ていかゞせんと哭玉ふ所に、忽ち喊を吶と造て一彪の軍馬突て入、つひに帝を救ひ出す、これ乃ち張苞なり。帝圍を逃て散散に走り玉ふ所に、向より一手の勢きたりければ、張苞これを見るに敵には有で御方の大將傅彤なり。乃ち一手に合せて走り玉へば、呉の勢つゞいて追きたる。帝馬を飛して走り玉ふ所に、前に一つの山あり、馬鞍山と名づく。張苞、傅彤帝を守護して山に上んとすれば、陸遜大軍を引て傍より打て出、四方を圍で餘さじと取こむる。帝震ひ怕れ、山の頂に陣を取て張苞、傅彤に山の口を固く守らせ、暫く息を休て四方を望み見玉ふに、火の光遠近に打つゞき、死人上が上に重り臥、呉の大軍次第に加り、馬鞍山を取捲て四方より火を掛ければ、帝膽を冷し魂を失玉ふに、忽ち火の光の中より一人の大將五六騎を引て山に登る。帝これを見玉へば乃ち關興なり。地に拜伏して申けるは、四方火の光大にして久しく此山に停がたし、陛下いそぎ白帝城に走て再び軍馬を集め玉へ。帝の宣く、誰か能後陣に備ん。傅彤が曰、臣ねがはくは命を弃て敵を防ん。帝乃ち關興を前に備へ張苞を後に備て、其日の暮方に山を下て走り玉へば、呉の勢これを見て我先に高名せんとて大軍潮の湧が如に追かくる。帝あまりに事急なりければ、諸軍に命じて皆甲袍を卸せ、弓箭を折て火を付、路を燒塞で追手をぞ防ぎ玉ひける。時に向

るは、昨夜の戰に盡く討取たり、安ぞ再び來らん。程畿が曰、昨夜の敵は陸遜が軍を試る計なり、能々用心し玉ふべし。時に先手の陣より山の上を遠く望めば、呉の勢こと〴〵く東の方に向ひ去と報じければ、帝宣けるは、此は疑兵の計なり、妄に動こと有べからずとて、關興、張苞二人に各五百餘騎を授て諸所の陣を巡しめ玉ふ。すでに暮に及て關興回り奏して江北の陣中に火起候と云ければ、帝乃ち關興に江北を救しめ、張苞に江南を巡しめ、能々虛實を察して呉の勢來らば早く報ぜよと宣へば、二人兵を引て打出たり。已に初更の時分に至て東南の風しきりに起り、後陣の左に火燒あがりければ急に救んとする時、又右の方に火起り、風は急なり、火の勢次第に盛にして樹木こと〴〵く燒著、喊の聲地に震て左右の陣中上を下へと騷動し、軍馬みだれて後陣の內へ走り入ければ、御林の軍互に自ら踐蹈して死する者その數を知ず。呉の勢喊を造り走り散て火を掛ければ、勢の多少も見わけ難く、帝驚て急に馬に打のり、馮習が陣へ走り玉ふに、馮習が陣にも火の光天を焦して江南江北車輪の如くなる熖、十里二十里が間に飛ちり、其光白日の如くなりければ、馮習數十騎を引て走りけるに、呉の大將徐盛大勢にて取かこみ、了に一人も殘さず射殺し、直ちに帝を追て進みける。帝は陣々に火の掛りたるを見て西に向て走り玉ふ所に、呉の大將丁奉一軍を引て路を塞ぎければ、又取て回して

て餘さじと攻ければ、淳于丹這々に逃れ出、百騎ばかりに打なされ散々に走りけるを、蜀の勢のがさじと追かくる。時に徐盛、丁奉二手に分れて討て出呉の勢を救ひければ、蜀の勢みな引て回りける。淳于丹鎧に立たる矢をも拔ず、陸遜に見て罪を請ければ、陸遜が曰、これ汝が罪にあらず、我まづ敵の虚實を試ん爲なり、蜀を破るの法われ自ら曉れり。徐盛、丁奉が曰、蜀の兵その勢大にして如何して破るべき、箇様なる軍をせば徒に人を損ぜん。陸遜笑て曰、わが計今の天下に孔明より外には知ものあらじ、幸に孔明この處にあらず、天われに成功を賜なりとて、遂に大小の將士を盡く集め、朱然は舟手より兵を進めて、明日の午の刻に東南の風吹起らば船の上に茅を積、計に依て行べし、韓當は一軍を引て江北の岸に攻かゝり、周泰は一軍を引て江南の岸に攻かゝり、毎手に乾ける柴を持、内に硫黄焔硝を包み、直ちに蜀の陣に推よせ風に順て火を掛よ、蜀の兵四十餘箇所の陣屋を連ぬ、只一陣を間て火を放時は、風急にして鄰の陣は自ら燒ん、諸軍みな腰に兵粮を付て暫も休ず、晝夜に進んで蜀の國に追て入、玄德を生取べしと下知しければ、諸軍みな勇進んで令を聞。この時蜀の陣には帝諸の官人を集て呉を破るの計を議し玉ふ所に、中軍に立たる旗風無に自ら倒ければ、帝乃ち程畿に問て宣けるは、此いかなる兆なるぞ。程畿が曰、今夜呉の勢夜討に來る兆なり。帝宣け

とて詐玉ふぞ。孔明が曰、後明かに見るべし、今強て問こと勿れ。馬良乃ち表章を求め、馬を飛して打起ければ、孔明も成都に回て救の勢をぞ集ける。去ほどに呉の大都督陸遜は蜀の勢の陣を移してより、みな油斷して更に用心なきを窺ひ、大小の將士を本陣に集て申けるは、われ君の命を受この處に來てより、終に一度も出て戰はず、今蜀の陣を見て其動靜を知に足り、此ゆゑに先江南の岸なる陣屋を攻んと欲す、誰か行て之を討ん。其言いまだ了ざるに、韓當、周泰、凌統、齊くすゝみ出て曰、某ねがはくは行ん。陸遜更に用ひず、獨り階前の末將淳于丹と云ものを呼て申けるは、われ汝に五千餘騎を授く、江南第四の陣屋は蜀の大將傅彤が守る所なり、汝今夜攻かゝりて功を立よ、我自ら兵を引て相救ん。淳于丹命を受て出ければ、陸遜又徐盛、丁奉を呼て曰、汝二人各三千の兵を率し、五里ばかり出て陣を屯し、若淳于丹打負て追かくる敵あらば速に之を救て相共に回り來れと云ければ、二人兵を引て打出たり。日も已に暮に及びければ、淳于丹五千餘騎を引て打起、三更の時分に江南の陣に到り、鼓を鳴し喊を造て攻かゝりければ、蜀の陣中より一彪の軍馬打て出、大將傅彤槍を撚て突てかゝる。淳于丹散々に亂れて走りければ、忽ち喊の聲響て一手の勢路を遮り、蜀の大將趙融眞先に馬を出す。淳于丹路を奪て走り、大半討れて逃る所に、山の後より南蠻の勢渦まき出、大將沙摩柯勇を振

に虚實を窺て呉の國を襲んとす。この時馬良は路を急で漢中に囘り、孔明に見て繪圖を出し、今御方の勢陣屋を移して江を中に夾み、七百里が間に四十餘箇所の陣を張、みな山に依林に沿て兵を屯す、天子いま臣に命じて丞相に問しめ玉ふと云ければ、孔明よく／＼見了て案をはたと打、苦げに叫で曰、これ何人の勸て陣屋を此處へ移しめたるぞ、其人を斬て弃べし。馬良答て曰、皆これ天子の自ら爲玉ふ所なり、他人の知れる事にあらず。孔明歎て申けるは、漢朝の氣數すでに盡たり。馬良その故を問に、孔明答て曰、中に原濕を包で陣屋を結は此兵家の忌なり、敵もし火を以て攻ば、如何して拒ことを得ん、豈七百里に陣屋を連ねて敵を拒もの有んや、禍必ず遠からじ、陸遜固く守りて久しく出ざる者は、偏に此を待もの也、御返速に囘り、天子を諫て陣屋を改め作らしめ玉へ、諸將の陣屋箇樣に遠く相阻る時は、急なる事有ても救ひ難し。馬良が曰、某が囘らざる以前に呉の勢若戰勝ば如何すべき。孔明が曰、呉の勢たとひ勝たりとも陸遜敢て追來らじ。馬良が曰、いかなる故ぞ。孔明が曰、陸遜心の内に魏の勢の後を襲んことを怕て、敢て遠くは呉を離じ、主上もし敗れ玉はば、直ちに白帝城に入れ奉れ、我先年蜀に入時、十萬の勢を魚腹浦に伏置たり、陸遜もし追きたらば我必ず擒にせん。馬良怪で申けるは、某魚腹浦を往來すること數箇度に及べども、遂に兵を一人も見ず、丞相なに

の計ならん。帝宣けるは、今呉の軍民膽を冷して、風を望んで竄かくる、朕長く驅て大に進む、何の碍か有ん、若徒に歳月を送ば、何れの時にか功を成ん。百官再三諫れども帝つひに從ひ玉はず。遂に舟手の勢を二手に分ち、黄權を大將として江北の兵を督して魏の勢を防しめ、帝自ら江南の諸軍を領じ、江を夾で陣屋を結び、鼓躁して進み玉ふ。魏の細作之を聞、急ぎ都に入て曹丕に報じ、今蜀の勢深く呉の境に入て、四十餘箇所の陣屋を造て七百里が間に連り、皆山に沿林に依て陣を取、又舟手の大將黄權兵を引て江北の岸に陣を取、毎日百里あまり出て巡檢仕り候、其意を知がたしと告ければ、曹丕天を仰で笑て曰、玄德が死限近付たり。群臣驚て其故を問ば、曹丕が曰、玄德更に兵法を知ず、豈七百里が間に陣屋を連て敵を拒ものの有んや、中に原濕を包て兵を屯するは此兵家の忌なり、玄德必ず呉の陸遜が手に敗られん、朕この故に其死せんことを知、十日を過ずして必ず消息あらん。群臣さらに信なりとせず、兵を起して備を成んと云ければ、曹丕が曰、陸遜もし勝ば必ず呉の大軍を引て蜀の國に攻入べし、朕その虚に乘て大勢を三手に分、一齊に攻かゝらば、呉の國を取んこと掌の中にあり。群臣みな賀して曰、此眞に神妙の計なり、曹丕乃ち曹仁に一軍を付て濡須に向はせ、曹休に一軍を付て洞口より進ませ、曹眞に一軍を付て南郡より蒐らせ、三路の軍馬日を定て打起、ひそか

く計に通ず、其軍勢始て集りし時は、法度正しく行はれて輕々しく敵しがたし、今守ること日久うして、兵疲れ意怠、この故に破るべきを知と云ければ、諸將初めて其理に服す。陸遜已に蜀の勢を破る計を決し、了に書簡を封じて呉王孫權に獻る。その辭に曰、

切以、夷陵要害之地、乃國家之關防也。雖レ爲レ易レ得、亦復易レ失。若一失レ之、非レ損二一郡之地一、卽荊州可レ憂矣。臣今日爭レ之、必令二事諧一。劉備干二冒天常一、不レ守二窟穴一而自送レ死。臣雖二不才一、憑二奉威靈一以レ順討レ逆、破レ敵在二于卽今一。論二備于前後一、多レ敗少レ成、不レ足レ爲レ憂。臣初疑二水陸倶進一。今棄レ船就レ歩、處々結レ營。察二其布置一、必無二良策一。伏惟、至尊高レ枕無レ憂、指レ日報二勝報一也。臣陸遜百拜。

呉王孫權これを見て大に喜び、江東又この異人を得たり、孤なにをか憂ること有ん。諸將みな頻に陸遜を懦弱なりと云ども、孤ひとり信なりとせざりしが、今この言を觀るに果して妙論なりとて、いよ〳〵呉の勢を起して相扶しむ。この時蜀の勢は猇亭の要害に支へられて、陸路より進むこと能はざりければ、帝こと〴〵く舟手の勢を驅て、流に乘じて大に進み、江に沿て水寨を作て深く呉の境に入しめ玉へば、黃權諫て曰、舟手の勢水に從て下り、進む時は易く退く時は甚だ難し、臣ねがはくは前手に進んで敵に當らん、陛下よろしく後陣に備玉へ、此萬全

るは、前なる谷の內に隱々として殺氣あり、其下に必ず敵の伏勢あらん、この故に吳班に疲れたる勢を付て敵を誘んと計りし者なり、諸將必ず出ること勿れ、三日の內に谷の內なる伏勢空しく出て回るべしと制しければ、諸人みな其懦弱なるを笑て只攻口を固く守る。次の日蜀の勢關門の前に推よせ、吳班自ら戰を催し、武を輝し威を揚て樣々に罵り、多く衣を解甲を卸で睡なんどしければ、徐盛、丁奉來て陸遜に見て曰、蜀の勢あまり傍若無人の體を成候、某等ねがはくは出て之を討ん。陸遜笑て曰、汝等みな血氣の勇に傲て、豈孫吳が玄妙の處を知んや、汝等後日に敵の計なるを思ひ知べし。徐盛が曰、蜀の勢こと〴〵く陣を移し了ば、いかゞして之を破らん。陸遜が曰、われ偏に蜀軍の陣を移んことを願ふ。諸人これを聞て大に笑ひ、退て皆攻口を守り、三日すぎて關上より望に吳班が勢次第に退きければ、陸遜鞭を以て指をしへ、谷の內より殺氣起れり、玄德必ず出べしと云ける所に、案の如く蜀の精兵八千餘騎猛虎の威をなし、帝を守護して出ければ、吳の勢これを見て盡く膽を冷す。陸遜が曰、われ初より計を知て汝等が戰んと云を許ず、今伏勢すでに出たり、蜀を破んこと十日の內を出ず。諸將みな曰、蜀を破ることは已に遲し、今五六百里に入て七八月を經、その要害こと〴〵く備れり、今これを討ば御方却て敗べし。陸遜が曰、汝等みな兵法を知ず、玄德は世の梟雄にして更に深

の勢必ず討て出べし。帝宣ひけるは、吳班に一萬あまり老つかれたる兵を授け、吳の陣へ推よせて平野に陣を張せ、朕自ら八千餘騎の精兵を從て谷の内に深く藏れ、若陸遜討て出ば吳班に命じて詐て敗軍せさせ、吳の勢の追きたるを、朕自ら出て其皈る路を塞ん、もし陸遜を擒にせば、吳を破んこと一擧にあり。文武の百官みな賀して曰、陛下の神機妙算たれか之に及ぶ者あらん。馬良が曰、この比諸葛孔明漢中に出て諸處の要害に勢を添、魏の軍勢の寇に具ふ、幸に程近く候へば、いそぎ此邊の地理を繪に寫して、只今陣を移べき處を孔明に問玉へ。帝宣けるは、朕本より兵法を知、なんぞ遙々と孔明に問ん。馬良が曰、聖人も、兼聽則明、偏聽則蔽と云へり、陛下よく察し玉へ。帝宣けるは、汝いそぎ諸處の陣取を繪に寫して四至八道の圖を畫き、自ら漢中に入て孔明に問、もし宜からざる處あらば早々に皈り來れ。馬良詔を受て打立ければ、蜀の軍勢みな此間の暑氣に苦で我先にと陣屋を移す。吳の大將韓當、周泰二人この由を聞、いま蜀の軍兵みな陣屋を山林に移す、虚に乘て討んと告ければ、陸遜天の賜と喜び、急ぎ馳來て望み見るに、年老疲たる蜀の勢一萬に足ず、麓の原に推よせて中軍に先鋒吳班と書たる大旗あり。周泰すゝみ出て曰、我この敵を視て小兒の戲と存ずる也、ねがはくは韓當と二手に分れて之を討、若勝ずんば軍法を被らん。陸遜良久く望み視て鞭を擧て申け

○蜀帝夜走ル白帝城ニ

章武二年夏六月蜀の軍勢毎日戰を催せども、吳の勢みな要害を守て一人も出ざりければ、帝御心の内悅び玉はず。時に馬良奏して申けるは、陸遜は年若しと申せども深く計に通じて尋常の及ぶ所にあらず、今陛下遠くこの地に來り、春より夏に及で戰を挑み玉ふ、敵みな固く守て出ざるは、必ず御方の軍中に變あるを待ものならん、願は能察し玉へ。帝宣ひけるは、彼なんぞ計あらん、但御方の勢を怕るゝ故なり、朕すでに戰ひ勝て、吳の將士こと〴〵く膽を冷す、焉ぞ再び出ん。先鋒馮習が曰、時いま夏の半にて炎天の暑氣甚しく、大軍廣野に陣を取て赤火の中に在が如く、水を運に路遠して諸軍多く病に臥、いかゞして之を救はん。帝宣けるは、今敵の勢固く守て一人も出ず、諸處の陣を山林の陰に移し、溪に沿水に近付て暫く此暑氣を凌ぎ、秋に至て涼き時、力を合せて一度に進まん。馮習喜び、詔を諸處の陣々に傳て山の陰林の間へ陣を移べしと觸ければ、馬良又奏して曰、もし陣を移とて諸軍一度に動きなば、吳

は周瑜に劣ず、輕々しくすべからず。帝宣けるは、朕久く兵を用て此年に及べり、今却て黄口の孺子に及ざらんや、汝多く疑ふこと勿れ、朕が生捉を見よとて自ら先陣に進て攻蒐り玉へば、呉の大將韓當これを見て陸遜に告知さしむ。陸遜きゝあへず諸將の妄に動んことを畏れ、自ら馬を飛して馳きたる。韓當は馬を山の上に立、遠く蜀の勢を望み見るに、山に漫り野に滿て黄羅の傘蓋風に飄りければ、自ら山を下て討んとする所に、陸遜馬を飛して馳きたれり。韓當が曰、あれに黄羅の蓋を飄すは必ず蜀の帝ならん、我ねがはくは行て討ん。陸遜が曰、蜀主大軍を起して東に下り、十餘箇處の陣に戰ひ勝て鋭氣まさに盛なり、宜く高に居て險阻を守り、輕々しく出べからず、出る時は御方必ず兵を損ぜん、今たゞ士卒を揃て能々攻口を守り、敵陣に變あるを窺て勢に乘て破るべし、今敵軍みな平原廣野の間に馳騁して甚だ其志を得たり、彼戰を求とも御方更に出ずんば、この炎天に氣力を疲して、必ず山林樹木の間に陣を移さん、其時を窺て我必ず計を用ふべし、將軍暫く風火の性を靜て國を安ずるの計を思ひ玉へと制しければ、韓當理に服して面には許應すれども、心中には敵を挫の勇あり、蜀の大軍呉の勢の出ざるを見て樣々に惡口しければ、陸遜下知を傳へ、皆耳を塞で聽ざらしめ、自ら陣々を打廻り、諸將を撫慰して堅く守らしむ。

の甚しき也、われは生ることを貪て死を怕るゝ人にあらず、汝戰を休て其鋭氣を失んとするはいかなる道理ぞと云ければ、相集れる諸大將こと〴〵く叫で曰、韓將軍の言理に當れり、我等ねがはくは命を弃て戰を決せん。陸遜手に劒を執て申けるは、玄德が威勢天下に震て曹操だも尙怕る、いま大軍を引て深く國の境に入、これ容易の敵にあらず、汝等もろ〳〵の大將みな久しく國恩を被る、唯よく志を合せて共に國の仇を退け、主上の恩を報ずべし、我一つの計あり、汝等が知ところにあらず、汝等もし順ずんば是國命に背なり、我一介の書生たりと云ども、今主上の選に因てこの重任を被る者は、我に尺寸の取べきこと有を以て也、汝等よくよく要害を守て妄に動ことを成こと勿れ、若令に違ものは必ず皆劒を以て罪を正さんと云ければ、諸人みな憤を含で退きける。この時蜀帝は猇亭より川口に至るまで四十餘箇所の陣屋を造り、前後七百里に連て夜は篝火の光天に耀き、晝は旌旗の影日を蔽ふ。浩る所に細作來り、吳王孫權いま陸遜を用て大都督とし、固く要害を守て一人も出ること無と告ければ、帝問て宣けるは、陸遜はいかなる人ぞ。馬良奏して曰、陸遜は江東の書生、年幼と申せども才深して計多し、前に荊州を襲ひ取しは皆この人の計なり。帝怒て宣ひけるは、奴が計に因て朕が二人の弟を失へり、何ぞ早く告ざるとて、卽時に兵を進んとし玉へば、馬良諫て曰、陸遜が才

ること勿れと云ければ、諸人默然として言を出す者もなし。時に周泰すゝみ出て曰、いま安東將軍孫桓は乃ち主上の姪にして夷陵の城に取こめられ、內に兵粮なく外に援の勢なし、都督幸に來り玉へり、早く妙計を運して孫桓を救ひ出し、主上の御心を安からしめ玉へ。陸遜が曰、われ本より孫桓は深く諸軍の心を得たれば、必ず能力を併せて守らんことを知、いま救はずとも城の破る程のことは候まじ、我蜀軍を打やぶらば、夷陵の圍自ら解ん。諸人これを聞て皆大に笑ひ、こと〴〵く退きければ、韓當ひそかに周泰に向て曰、この者を用ひて軍をせば國の滅んこと目前にあり、御邊いかゞ思ひ玉へる。周泰が曰、われ適に言を以て試るに、更に一つも計なし、安んぞ能蜀を破らん。次の日陸遜下知を傳へ、諸將みな能々攻口を堅く守り、一人も出て戰ふこと勿れと觸ければ、諸人みなあざ笑て用ふる者ぞ無りける。其次の日陸遜もろもろの大將を集め、我主上の命を受諸路の軍馬を總督して、昨日すでに三令五申汝等に命じて諸處の攻口を堅く守らしむ、何ゆゑに下知を用ざると云ければ、韓當が曰、われ破虜將軍に從て江南を平げてより數百度の戰を經、その外の諸將も或は討逆將軍に從ひ或は當今の主上に從て、皆堅を破り鋭を摧勇士なり、然るに今主上汝を封じて大都督とし、蜀の敵を破らしめ玉ふ、汝なんぞ計を定めて戰を決せず、却て攻口を堅く塞ぎ敵の自ら滅るを待んとする、是謀なき

孤に告よ。陸遜が曰、臣君の恩を受ること久し、假令命を捨とも何ぞ少も辭することを行ん、願くは明日文武の大將を盡く集めて、大王自らこの劍を某に授玉へ。闞澤申けるは、古より大將を用ふるには高く臺を築て諸人を集め、白旄、黄鉞、印綬、兵符を授て曰、閫より内は寡人これを主る、閫より外は將軍これを制せよ、此の如くにして名正く言順て大事必ず成就す、大王よろしく此禮を用ひ、日を擇で壇を築き、陸遜を大都督に封じ玉ひなば、諸人自ら服すべし。呉主孫權これに從ひ、夜を日に繼で壇を築せ、盡く百官を集め、陸遜を召て壇に登せ、大都督右護軍鎭西將軍に拜して婁侯に封じ、寶劍印綬を賜て六郡八十一州幷に荊州諸路の軍馬を惣領せしめ、閫より内は寡人これを主る、閫より外は將軍これを制せよ、先斬て後に報ずべしと云ければ、陸遜命を承て壇を下り、徐盛、丁奉を護衛とし、諸路の軍馬を調て水陸並び進み、即日にぞ打起ける。この由先達て諸所の攻口に沙汰ありければ、韓當、周泰等大に驚き、主上いかなれば浩る腐れ儒者を用ひて大軍を防んとし玉ふぞと云ける所に、間もなく陸遜馳きたりければ、諸將昂然として敢て服せず。陸遜大將の帳に陞て軍の評議しけるに、諸大將已ことを得ずして來り集りければ、陸遜諸人に向て、我いま主上の命を受、大將軍と爲て蜀の敵を破る、軍中に常の法あり、諸將よく〳〵守て背こと勿れ、王法には親なし、自ら悔

陸遜幸に荊州にあり、此人名は儒生たりと申せども、雄才大略周瑜に劣ず、適に關羽を破りしも皆陸遜が計なり、君もしこの人を用ひ玉はば、蜀の勢を破んこと掌の内にあり、如この人を用ひ玉ひて萬一も失あらば、一番に某が首を刎玉へ。孫權が曰、汝が薦にあらずんば孤必ず大事を悞んとて、卽時に陸遜を招ければ、張昭が曰、陸遜は文字の人、豈蜀の勢を破ることを得んや。顧雍が曰、陸遜年若して才疎なり、恐くは諸將みな之に服せじ、服せざる時は亂を生ず、禍を取の道なり。步隲が曰、陸遜は下吏となりて人の下知を聽べし、若大事に任ぜば其宜にあらず。闞澤叫で申けるは、若陸遜を用ひ玉はずんば國必ず破るべし、某ねがはくは一家の命を掛て之を薦ん。孫權が曰、孤も久く陸遜が奇才を知、必ず大事を托すべし。闞澤が曰、大王もし諸人の言を聽玉はば、陸遜心の儘に才を展ること能じ。時に陸遜來れりと報じければ、孫權乃ち呼入て申けるは、いま蜀の勢境に在て國中大に亂る、孤いま汝を用ひて軍馬を總督しめ、この敵を破るべし。陸遜が曰、國中の文武みな主上の舊臣なり、某年若して才疎薄なり、安んぞ諸人の上に居ん。孫權が曰、闞澤しきりに一家の命を掛て汝を薦む、孤も素り汝が才を知、いま拜して大都督とす、汝必ず辭すること勿れ。陸遜が曰、若文武の諸將某に服せずんば如何ん。孫權自ら佩たる劍を授て曰、もし汝が下知に背もの有ば、先斬て後に

靈位を設させ、自ら祭を成て匣の中なる首を見玉ふに、面の色さらに變ぜざりければ、哭き哀玉ふこと甚だ切なり。張苞刀を持て范疆、張達を寸々に砍、父の靈を祭ければ、帝怒りの氣なほ已ず、兵を進めんと議し玉ふ。馬良奏して曰、二弟の讐こと〴〵く誅して其恨を雪玉へり、呉の大夫程秉きたり、荊州を返し孫夫人を送り、長く好を結んで魏を伐んことを願ふ、陛下いかゞ答へ玉はん。帝怒て宣けるは、朕が常に齒を切ものは孫權なり、今もし好を結びなば昔日二弟の盟に背ん、朕まづ呉を平げて次に魏を討、天下を一統して光武の中興に效んと欲す、急ぎ使の首を刎て呉の交を絶と宣へば、百官再三諫て漸に呉の使を救ひ出す。程秉は事の叶ざるを見て震ひ怕れ、頭を抱へて鼠の逃るが如く走り去けり。

○陸遜定レ計破二蜀兵一

程秉這々逃かへり、事の諧ざる由を告ければ、孫權色を失ひ、手足を張て怕れ戰く。時に一人すゝみ出て曰、目前幸ひに擎天の柱あり、何ぞ此人を用て蜀の勢を破り玉はざる。諸人これを見れば闞澤字は德潤なり。孫權問て曰、汝いかなる人を薦て我を救ん。闞澤が曰、昔し呉の國の大事は盡く周瑜に決し、後に魯肅これに代て又呂蒙に及べり、今呂蒙すでに亡と云ども、

苞哀み哭き地に拜して申けるは、伯父の仇は此の如く滅たるに、臣が父の仇いまだ一人をも殺し得ず、何れの時にか報ずべき。帝宣けるは、汝さのみ深くな憂ひそ、朕まさに吳の國を討平げ、吳の狗を殺し盡して汝が父の仇を報じ、寸々に切て醢に爲んと宣へば、張苞拜謝して退出す。この時蜀軍の威風遠近に震ひければ、吳の國の人民こと〴〵く膽を冷し日夜哭き號ぶ聲絕ず。韓當、周泰も力を失てすべき樣なく、急ぎ早馬を打て吳主に報じ、糜芳、傅士仁二人馬忠が首を取て蜀に囘りたれば、蜀主怒て了に二人を醢にし玉へりと云。孫權これを聞て文武を集めて議しければ、步隲が曰、蜀主の恨るは呂蒙、潘璋、馬忠、糜芳、傅士仁なり、この者は皆關羽を殺せる讐なれども、今すでに盡く亡たり、只范疆、張達二人は張飛を殺せる者共なり、今この處に殘り居る、急ぎ生取て蜀の陣に送り張飛が首を囘し、又使を以て荊州を返し、孫夫人を送り遣し、表を上て和睦を求め、共に魏を滅して天下を正さんと願ひ玉はば、蜀の勢自ら退かん。孫權これに從ひ、沉香の木を以て匣を作り、張飛が首を入て能々封じ、武士に命じて范疆、張達を擒にし、檻車の中に囚て程秉を使とし、書簡を捧げて猇亭に到らしむ。この時帝は兵を進めんとし玉ふ所に、近臣奏して曰、吳の孫權使を以て張車騎の首を送り、范疆、張達を擒にして來り候。帝これを聞て手を以て額を撫、これ天の賜なりとて張苞に命じて張飛が

諸軍げにもと同じければ、糜芳これを聞て大に驚き、急ぎ傅士仁を呼で申けるは、諸軍の心すでに變ぜり、二人の命いかゞして全きことを得ん、今蜀の天子深く恨み玉ふ者は馬忠なり、我等馬忠が首を取、ゆいて天子に獻つり、適に呉に降れるは已ことを得ざる故なり、いま天子の來り玉ふを知て特に回り來れりと云ん。傅士仁が曰、無用々々、行ば必ず禍に逢べし。糜芳が曰、蜀の太子劉禪は吾爲に眞の姪なり、殊に天子は寬仁にして德厚し、何ぞ我等を殺し玉はんとて、三更の時分に馬忠をひそかに刺ころし、首を取て數十騎を從へ、猇亭に來て先馮習、張南に見え、次の日天子に見えて馬忠が首を獻り、地に拜哭して申けるは、臣等元より謀反の心なかりし處に、呂蒙いつはりの計を用て關羽已に討れ玉ひぬと沙汰し、出抜て城門を開きしかば、臣等已ことを得ずして呉に降れり、今天子の自ら來り玉ふ由を聞、この仇を殺して陛下の恨を雪ぐと奏しければ、帝怒て宣けるは、朕蜀を出てより日すでに久し、汝等なんぞ早く來て罪を請ざる、今日その危に臨で此に來り、言を巧にして身を全せんとす、朕もし汝等を宥ば九泉の下に至て何の面目にか關羽に對面せんとて、關興に命じて陣中に關羽が靈位を設け、帝自ら馬忠が首を以て祭を成、哭き哀み玉ふこと甚だ切なり。次に關興に命じ、糜芳、傅士仁が首を斬て汝が父を祭れと宣へば、關興乃ち二人が衣服を剝取、靈前に引出して首を斬。時に張

父を生取し仇なりと見ければ殺氣天を突、青龍刀を舞して斬て蒐る。馬忠その勢に畏れ馬を打て走りければ、手下に百餘騎ありける勢共大音聲を擧て申けるは、敵は只一騎なり、我等みな力を盡して生取んとて四方より一度に進み、關興を取卷ければ、馬忠これを見て又引回して攻戰ふ。關興只一騎なれば力疲て危き處に、一彪の軍馬西北の角より打て出たり。此乃ち張苞が關興を尋ぬる勢なりければ、馬忠救の來るを見て早々に逃わしる。關興、張苞勝に乘て追とこ ろに、忽然として麋芳、傅士仁二手に分れて馬忠を尋ね來り、兩軍又大に戰ふ。時に吳の大將凌統又一軍を引て來りければ、關興、張苞小勢にて防こと能はず、了に退て猇亭に回り、帝に見えて潘璋が首を奏しければ、帝御心喜で諸軍に恩賞を施し玉ふ。吳の大將馬忠は韓當、周泰に見えて潘璋が討れたる由を告、手分を定めて各陣屋を守りけるが、軍士傷を病もの數を知ず。麋芳、傅士仁は江に沿て陣を取けるに、其夜の三更に軍中に哭く聲しければ、麋芳ひそかに之を聞に、諸軍みな申けるは、われ等は本荊州の者なるが、呂蒙が詭の計に逢て已ことを得ずして吳に降る、今蜀の天子自ら大軍を引て關羽の爲に讐を報じ玉ふ、吳の滅んこと目の前にあり、偏に恨めしきは麋芳、傅士仁なり、我この二人が首を取、ゆいて天子に獻らば、必ず重く恩賞し玉はん。其内一人申けるは、急にせば仕損ずべし、陣中の虛なるを待て首を取ん。

田夫
関貞

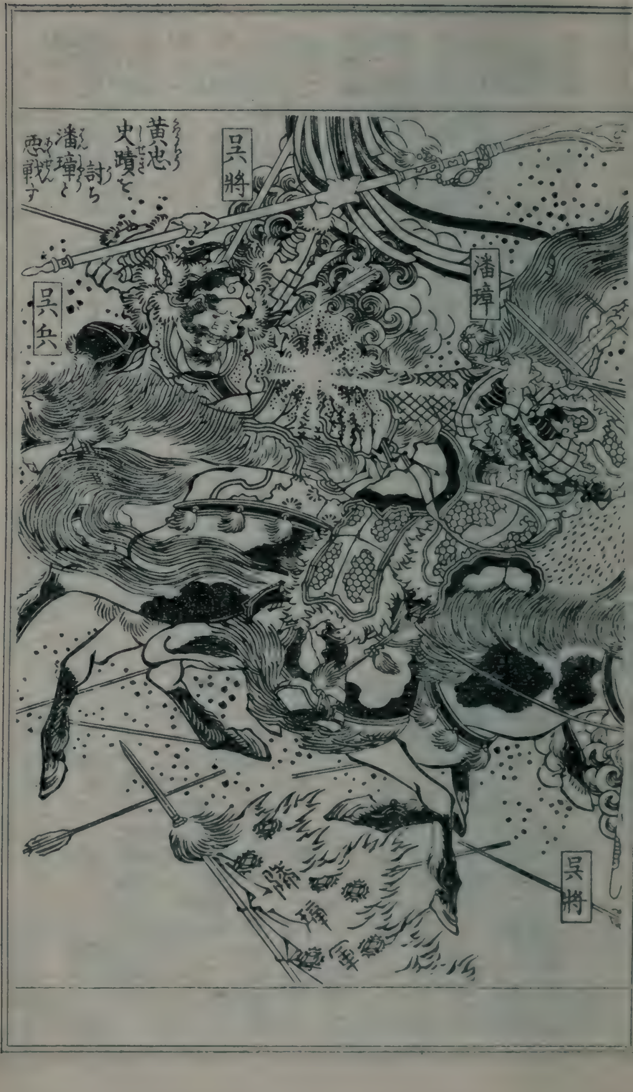
関羽霊

が曰、この像は我父なり。老翁大に驚て地の上に再拜しければ、關興問て曰、老夫いかなれば我父を供養せるぞ。老翁答て曰、此處は皆關將軍の治め玉ひし地なり、常に恩德を施し玉ひしかば、世に存へ玉ふ時だも每〻家に祭を成り、況んや今神明と成玉ふをや、老夫つねに蜀の勢の來るを待、いま將軍に逢奉るは百姓の幸なりとて、酒を出して持成、馬に秣喂鞍を卸して休しむる所に、已に三更の後叉門を叩音しければ、老翁出て何ものぞと問ふに、一人の大將答て曰、われは吳の潘璋と云もの也、路暗して回るべき方なし、この處に宿を借んとて堂中へ進み來る。關興天の賜なりと思ひ手に劍を提て、反賊走こと勿れと呼はりければ、潘璋驚き急に引回して出んとするに、忽ち門外に面は重棗の如く、丹鳳の眼臥蠶の眉、長き髯を垂て綠の袍に金の鎧を被たる大將、劍を提て出來る。潘璋これを見るに分明に關羽なりしかば、あつと叫で魂を失ひ、叉内へ回らんとする時、關興一刀に斬殺し、血を瀝て父の像を祭り、この時父が使たる靑龍の偃月刀を取回しぬれば、心の內喜て首を取て馬上に挂り、老翁に暇を乞て出ければ、老翁乃ち潘璋が屍を燒て地に埋む。關興は只一騎二三里ばかり出ける處に、忽ち人馬の聲しければ、馬を立て之を見るに、一彪の軍馬蒐出、眞先に進むは潘璋が手下の大將馬忠なり。關興を屹と見るに主の首を馬の上に挂りたれば、こは如何にと驚馬を飛して討て蒐る。關興も

云もの、其面は血を噀たるが如く、碧の眼星の如く光り、手に大なる鐵蒺藜を提げ、腰に兩張の弓を掛、威風あたりを拂て馬を進むる形勢恰も惡鬼羅刹の如なれば、甘寧その勢に敵すべき樣なく、馬を打て走りけるを、沙摩柯弓を取て丁と射る。甘寧その矢に盔の眞甲を射られ、矢を帶ながら富池口と云ところまで走り、茂たる樹の下に坐して死けるが、數百の鴉樹の上に群て其屍を繞ければ、吳王孫權あつく葬り、廟を立て之を祭る。今に至るまで富池口には甘寧が廟とて祀あり。往來の人之を祭れば靈驗甚だ明に、神の使なりとて數百の鴉その人を送るとかや。蜀の勢猇亭の戰に大なる功を得て皆一處に集りけるが、關興一人見えざりければ、帝怪で張苞等を分て尋ねさせらる。此時關興は吳の勢を追かけて潘璋に出合、父を殺せるの讐のがさじと呼はりければ、潘璋怕て山の中へ逃入けるを、關興跡を慕て追かけ、山際に入て往來しけるが、日すでに暮て路を失ひ、星の光を指南にて谷陰なる家に行、時二更の比なりければ、門を荒らかに叩くに、內より一人の老翁立出、深更に來る者は誰ぞと問。關興が曰、われは戰に出たる大將なるが、路に迷て此に來れり、願くは一夜の宿をも借、一飯の飢をも救ひ玉へ。老翁乃ち引て內に入ければ、關興內の樣を見るに、一つの堂ありて燈火明かに照し、中央に父の關羽が像を掛たりければ、哀み哭て之を拜す。老翁問て曰、將軍いかなれば哭玉へる。關興

馬を出す。蜀の陣には黄羅の傘蓋風に揺て白旄黄鉞前後を護り、帝自ら營門に出玉へば、韓當大音あげて曰、陛下いま蜀の君と成て何ゆゑに輕々しく戰場に出玉へる、若不虞の禍あらば悔るとも及ぶまじ。帝遙に鞭を擧、汝等は呉の國の狗、なにとて朕が弟を害したる、誓て天地日月を共にせじ、若早く降參せば其一命を扶べしと罵り玉へば、韓當御方を顧て曰、誰か出て蜀の陣を破らん。手下の大將夏恂が曰、ねがはくは敵を破んとて槍を撚て馬を出せば、蜀の陣より張苞矛を舞して蒐出、馬を飛し喚て掛る。夏恂その勢に膽を冷し、震ひ怕れて走らんとすれば、呉の陣より之を見て周泰が弟に周平と云もの馬を打て蒐りけるを、蜀の陣より關興刀を提て迎へ戰ふ。時に張苞叫ぶ聲雷の如く、夏恂を馬より突落しければ、周平怕れて逃んとする處を、關興、薙刀の柄を取のべ一刀に斬て落し、勢ひに乘て大に進めば、韓當も陣中へ逃入て再び出ず。帝これを見玉ひ、虎の父に犬の子なしと云て感嘆し玉ひ、鞭を擧て招き玉へば、大軍喊を作て一度に進む。呉の勢いよ〳〵破れて散々に成ければ、八路の蜀軍その勢ひ泰山の如く、呉の勢を縱横に蒐立るに、屍は遍野に横たはり、血は流れて河をなす。呉の大將甘寧は船中に在て痢病重りけるが、蜀の勢の急に進む由を聞、馬に乘て退かんとするに、南蠻の軍兵一度に追かけ、皆髪をさばき跣足にして長き槍を使ひ、或ひは弩を張斧を提て、大將沙摩柯と

はり、三十里あまり追かけしかば、忽然として四方に喊を作て呉の伏勢こと〴〵く起り、右に周泰左に韓當、前に潘璋あり後に淩統あり。黄忠眞中に取籠られて逃るべき路なく、俄に大風ふき起て石を飛し沙を飜しければ、黄忠驚て急に退かんとする時、呉の大將馬忠馬を飛して山の上より斬て下る。黄忠力疲て敵すること能ず、馬忠に肩を射られて已に馬より落んとす。呉の勢之を見て一度に喊を吶と造り四方より攻る所に、忽然として後に二手の勢殺到し、呉の兵を四角八方へ蒐散して黄忠を救ひ回る。黄忠を救ふものは乃ち關興、張苞なり。黄忠年老血衰て矢瘡以ての外に苦痛し、已に危なりければ、帝自らその陣中に來り、黄忠が背を撫て、老將軍に傷を被らしむるは朕が過なりと宣へば、黄忠が曰、臣は乃ち一人の武士、幸に陛下に事て厚恩を受、年すでに七十五歳なれば命も何ぞ惜に足ん、陛下よく龍體を保て中國を平げ玉へと云了り、忽然として息絶ければ、帝深く哀み玉ひ、今夜まづ棺槨を具て成都に送り葬らしめ、長嘆して宣ひけるは、五虎の大將すでに三人亡て、朕なほ讐を復すること能はず、眞に深く痛べしとて、自ら御林の軍を引て直ちに猇亭に出玉ひ、諸大將を會して水陸共に進み、黄權を舟手の大將とし、帝自ら陸の勢を驅て鼓譟して進み玉へば、馬良等みな諫れども聽玉はず。時に章武二年二月中旬、蜀の大軍八路に分て猇亭に進みければ、呉の大將韓當、周泰陣を張て


黄忠史蹟を討ち潘璋と悪戦す
呉将
潘璋
呉兵
呉将

黄忠
蜀兵
史蹟

老たりとせん、昨日天子老たる者は物の用に立ずと宣ふ、我この故に此に來て吳の大將と勝負を決して、老たるか老ざるかを知しめん。時に吳の勢已に寄きたると告ければ、黃忠奮然として馬にのり刀を提て躍り出る。馮習再三諫て、老將軍かる〴〵しく出玉ふなと云けれども、黃忠耳にも聞入ず、馬を打て出ければ、急ぎ吳班に命じて戰を助しむ。黃忠自ら吳の陣に進み、誰か出て我と戰はんと呼はりければ、吳の潘璋が內に史蹟と云る大將、黃忠が年老たるを欺き槍を撚て馬を出し、戰ひ三合ならざるに一刀に斬て落さる。潘璋これを見て關羽が使ひし青龍の偃月刀を提て討て蒐り、戰ひ數合にして勝負を分たず。黃忠は命を惜ず勇を震て惡戰しければ、潘璋かなひ難く思ひ、馬を打て逃わしる。黃忠のがさじと追蒐ければ、吳班その失あらんことを怕れ兵を引て戰を助け、全く勝て回りけり。時に關興、張苞兵を引て馳きたり、我等二人天子の勅命を承はり、來て老將軍の戰を助く、今すでに大なる功を建玉へり、本陣に回て天子に見え玉へと云けるに、黃忠敢て從はず。次の日潘璋又推よせければ、自ら馬を出さんと勇む。關興、張苞二人、將軍は年老玉へり、我等も共に出て助んと云ければ、黃忠更に從はず。吳班又助んと云けれども黃忠いよ〳〵從はず。自ら五千餘騎を率して討て蒐り、戰ひ五六合にして潘璋刀を拖て走りければ、黃忠のがさじと追蒐、われ關羽が爲に仇を報ず、何くへか逃ると呼

寧この時痢病を患と云ども、催促數度に及びければ、已ことを得ずして打起けり。

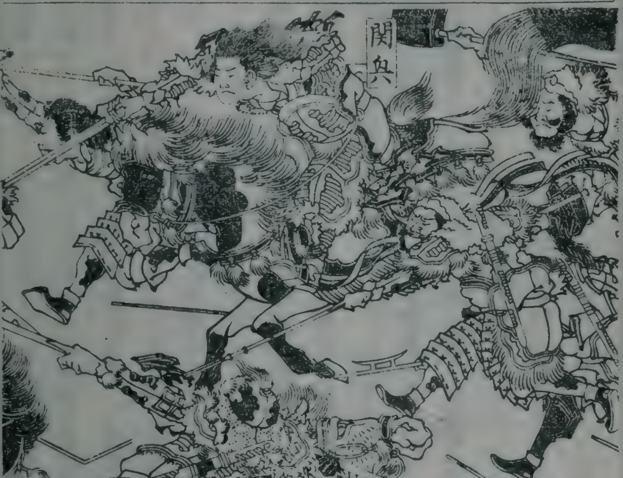
○蜀帝大戰猇亭

時に章武二年春正月帝大軍を引て、巫峽、建平より夷陵の界に及ぶまで七十餘里の間に四十餘箇所の陣屋を連ね、關興、張苞がしきりに功あるを以て近臣に命じて酒を賜ひ、大に嘆じて、昔より朕に從ふ大將は皆年老て物の用に立ず、今この二人此の如く英雄なれば、吳を滅さんこと掌にありと宣ひける處に、忽ち吳の大將韓當、周泰二人打て出たりと奏しければ、誰をか遣べきと宣ふに、近臣奏して曰、老將黃忠五六騎を引て吳に降れり。帝笑て曰く、黃忠は敵に降る如きの大將にあらず、朕が悞りて昔より從ふ大將は年老て物の用に立ずと云しに氣を激し力を奮て出たるなり、彼すでに七十に餘りぬれば、必ず失あらんと思ふ也、關興、張苞いそぎ行て相助け、若少しの功あらば早々に囘らしめよと宣へば、二人命を受て打出たり。黃忠は五六騎を引て直に夷陵の陣に到りければ、馮習、張南問て曰、老將軍こゝに來り玉ふは如何なる故ぞ。黃忠が曰、われ長沙より天子に跟ひ、多く艱難を歷て戰に臨ごとに了に先を蒐て敵を破らずと云ことなし、今已に年七十に餘れども猶十斤の肉を食ひ、臂に二石の弓を挽、なんぞ之を

げにもとて一萬の勢を授しかば、崔禹陸に上て打向ふ。この夜馮習、張南大軍を二手に備て孫桓が陣に推よせ、四方より火を掛ければ、呉の勢大に亂て散々に逃わしる。崔禹は遙に火の起るを望み、路を急で救はんとする所に、忽然として谷の内に鼓の聲天地を崩し、左より關興右より張苞二手の勢打て出、夾んで攻ければ、崔禹さればこそとて急に退かんとする時、張苞馬を飛して路を遮り、只一合に生取て回りければ、其勢こと〴〵く討れけり。朱然この由を聞て以ての外に周章し、舟手の勢を五六十里退け、要害に陣を張て救の來を待居たり。孫桓は陸の陣を燒れ、殘少に討れし、散々に逃走て何くにか足を留んと問ければ、軍士答て曰、これより北夷陵の城は屈強の要害なり。孫桓これを聞て夷陵の城に入ければ、蜀の大軍喊を作て追かけ、四方を圍で息をも繼ず城を攻たり。關興、張苞は崔禹を生取て柹歸に回り、軍の樣を奏しければ、帝大に喜び、崔禹が首を刎て重く諸軍を賞し玉ふ。此より威風いよ〳〵振て、呉の國の將士みな膽を冷ところに、孫桓、朱然頻に救を乞ければ、孫權色を失ひ、文武の臣を集ていかゞせんと評商す。張昭が曰、いま諸大將多く世を辭すと申せども猶十餘人の大將あり、何ぞ蜀の勢を怕るべき、韓當を大將とし周泰を副將とし、潘璋を先手とし凌統を後備とし、甘寧を諸方の救とし、十萬の勢を起して防しめ玉へ。孫權これに從ひ、卽時に諸將に觸を成けるが、甘

ん。馮習が曰、孫桓は數日の戰に負て多く將士を討れたりと云ども、舟手の大將朱然は江の畔に陣を取る、今もし深入して孫桓が陣を攻ば、朱然が舟手の勢陸に上て我囘る路を塞がん。張南が曰、この事きはめて易し、關興、張苞に各五千餘騎を付て谷の内に伏おき、若朱然が勢舟より上らば兩方より夾んで討しめん。吳班が曰、この計好とは申せども、不如士卒を詐て朱然が陣に降參させ、今夜蜀の勢みな孫桓が陣を夜討にすると告させなば、朱然必ず火の起を見て來り救ん、その時伏勢を以て之を討ば、大事必ず調ん。馮習、張南これに從ひ、先關興、張苞を谷の内に伏おき、士卒に命じて計を行しむ。朱然が番の兵蜀の士卒を生取、舟に囘りて何ものぞと問ば、士卒答て曰、われ等は皆蜀の馮習が士卒なるが、賞罰の明ならざるに因て來り降る、願くは一大事を告申ん。朱然が曰、いかなる事ぞ。士卒告て曰、今夜蜀の勢は虛に乘て孫桓の陣を夜討にし、火を付て燒んとす。朱然これを信じて好も知せたりとて、使を以て其事を孫桓に告知せけるを、關興中途に伏て其使を斬殺す。朱然は浩る事をも知ず、已に孫桓に告知せたれば定めて固く用心して防べし、吾も陸に上て其後を圍み、蜀の勢の囘る路を遮んと云ければ、大將崔禹諫て曰、士卒の申ところ輕々しく信とし玉ふな、萬一いつはりの計ある時は、御方水陸共に破るべし、將軍は只この處を守り玉へ、某ねがはくは陸に上らん。朱然

関興李異を討て張苞を救ふ
李異
譚雄


関興
張苞

仆て張苞地上に落ける所を、李異斧を以て張苞が眞甲を眞二つに破んとするに、後より關興刀を舞して馳きたり、李異が首を討落して張苞を救ひ回る。孫桓これを見て大に怒り、次の日兵を押て眞先に出ければ、張苞、關興馬を双べて陣前に進む。孫桓刀を揮て馬を交へ、關興と三十餘合戰ていまだ勝負を分たざりければ、張苞矛を舞して突て蒐る。孫桓馬を打て走りければ、關興張苞のがさじと追蒐、蜀の先陣馮習、張南大軍を驅て大に進む。張苞勇を振て眞先に進みけるが、呉の大將謝旌に出合、矛を舞して馬より下に刺殺す。呉の勢いよ〳〵亂れて四角八方へ逃走りければ、蜀の軍勢十分に勝て戰を收めけるに、關興一人見えざりしかば、張苞心驚き、わが弟もし失あらば我命も存し難しと云て又馬に打のり、二三里ばかり出て尋る處に、忽ち關興左の手に刀を提げ右の手に敵の大將を生取きたる。張苞それは何ものぞと問に、關興笑て曰、われ先に進んで戰ひける處に、昨日御邊が馬を射たりし呉の大將譚雄に出あひ、追掛て生取きたれり。張苞限なく喜び、共に本陣に回りて譚雄が首を刎、血をしぼりて死たる馬の魂を祭り、表を以て天子に奏す。孫桓は數度の戰に打まけ、賴切たる三人の大將を討れ、力盡勢ひ孤にして敵を防こと能ざれば、早馬打て孫權に救を求む。蜀の先陣張南は馮習と議して申けるは、いま呉の勢破れて氣を失ふ、唱やこの時に乘て大に進み、敵の陣を踏やぶりて病の根を拔つくさ

駕すでに秭歸まで來りけるが、この注進を聞て大に怒り、孫桓なに者なれば敢て朕が軍に當んとはする、朕自ら打やぶらんと宣へば、關興奏して曰、これ等の敵を臣に命じて討しめ玉へ。帝宣けるは、汝ゆいてこの敵を擒にし來れ、朕汝が壯氣を視ん。關興拜して出ければ、張苞奏して曰、關興すでに敵に向ふ、臣ねがはくは行て助ん。帝宣けるは、汝相助んと願ふ眞に妙なり、いそぎ打向て力を併せ、必ず事を輕んずること勿れ。張苞大に喜び、關興と共に先手に進み、大軍山に漫り野を蔽ひ、陣勢を張て鼓角の聲天地を動す。孫桓これを見て兵を引て打て出、李異、謝旌を左右に備へ、自ら馬を旗の下に躍せければ、蜀の陣より張苞矛を横たへ、關興刀を提て馬を出し、孫桓匹夫只今斬るべき頸を以て、何ゆゑに天兵を防んとするやと罵りければ、孫桓聲を擧て申けるは、量に汝が亡人は履を販席を織たる小兒なり、汝が父は已に頭もなき鬼となれり、何ゆゑに此に來て命を失んとする。張苞腹を立矛を舞して蒐りければ、孫桓自ら出んとするに、後より謝旌馬を飛して蒐出、これ程の敵に何ぞ君を勞せしむべき、某が生取を見玉へと云て、張苞と三十餘合戰ひけるが、叶ずして逃かへる。張苞急に追掛ければ、吳の陣より李異又馬を蒐出し、大なる斧を舞して又張苞と二十餘合戰ひ、いまだ勝負を分ざる所に、吳の陣より譚雄と云る大將弓を挽て丁と射る。その矢乘たる馬の胸を射洞しければ、倒に

ば、文武を集て計を問に、一人も言を出もの無りければ、長嘆して申けるは、前には周瑜、魯肅、呂蒙相つゞいで孤を扶しに、今は一人も孤と憂を共にする者なし。時に年若き大將一人すゝみ出て曰、主上兵を千日が間養ひ玉ふは、一日の用に備んが爲なり、諸の將士舌を結び口を閉て一言をも出さぬは是いかなる道理ぞ、臣年幼と申せども常に兵書を學べり、ねがはくは數萬の勢を引て蜀の仇を退けん、臣が手下に李異、謝旌とて萬夫不當の大將二人あり、必ず玄德を擒にして吳の災を除くべし。諸人これを見れば武衛都尉孫桓字は叔武、時に年二十五歲なり。孫權が曰、わが姪眞に勇なりと云ども、如何んがせん年甚だ幼し、必ず一人の大將を副て共に力を助しめん。時に一人すゝみ出て曰、某ねがはくは孫將軍と共に蜀の兵を退治せん。諸人これを見れば丹陽故彰の人に虎威將軍朱然字は義封なり。孫權然るべしと喜び、水陸の勢五萬を授て孫桓を左都督に封じ、朱然を右都督に封ず。蜀の勢已に宜都まで攻入たると告ければ、朱然まづ二萬五千餘騎を率して宜都の界に陣を取、三手に分れて敵を待。この時蜀の先陣吳班大軍を引て眞先に進に、已に川口を出てより到る處風を望で歸降し、刄に血を塗ずして宜都の界まで攻入、その勢洋々として遠近震ひ怖れけり。時に吳の大將孫桓兵を引て打出たりと報じければ、吳班まづ使を以て馮習、張南に告、この由を帝に奏せしむ。この時帝の御

あわてて車より飛下ければ、忽ち一人大に哭き、吾等みな身を捨命を抛こと能ず、我君に他人の官爵を受しむることの口惜さよと呼はる者あり。邢貞これを聞て感嘆し、呉の國には斯る忠義の勇士あり、久しく人の下に在ものに非と云て、哭く者を誰ぞと問ば、乃ち偏將軍徐盛なり。孫權已に魏の封爵を受ければ、文武の諸將こと〴〵く拜賀す。孫權乃ち珠玉、犀角、玳瑁、翡翠、孔雀、鬪鴨、鳴雞、山雉等の物を集め、曹丕に獻りて恩を謝したれば、張昭諫て曰、この禮物甚だ過たり。孫權笑て、人の心は慾に飽こと無して利を以て結べし、今この禮物は皆石瓦の類なり、何ぞ惜に足んと云ければ、諸人こと〴〵く嘆伏す。

○關興張苞破㆓呉兵㆒

この時蜀の大軍白帝城に屯して半月ばかり人馬を息めける所に、呉の孫權救を魏に求むと云ども、曹丕敢て兵を發せず、只呉王に封じたるばかりなりと告る者ありければ、帝大に喜び、兵を下知して打起玉ふ所に、南蠻王沙摩柯と云もの、夷の勢數萬騎を引て馳きたり、洞溪の大將杜路、劉寧二人、二手の勢を引て加りければ、水陸共に進んで威風遠近を震動し、舟手の勢は已に巫口まで出、陸路の勢は秭歸まで出たり。呉の孫權は王位に登と云ども魏の救きたらざれ

陛下に順ふの禮をなし、内には誠の心無して漸に怠るべし、その時陛下怒をなし、兵を起して討玉はば、孫權必ず江南の民に告て、孤禮を盡して魏に事へ、臣たるの道を失はざるに、今ゆゑ無に攻きたる、是必ず江南の人民を擒にして、美き女を取て婢妾とし、金銀を掠取ん爲なりと云ん、然る時は吳の民これを信なりとして力を盡して戰ひ、威風つねよりも十倍せん、今陛下時に乘て平げ玉はずんば、後に大なる悔あらん。曹丕が曰、いやとよ、朕は吳をも助ず蜀をも助ず、正統に居して安きこと泰山の如く、吳と蜀と力を盡して戰ひ、若一國滅なば一國は大に疲ん、朕その虛に乘て之を滅さん、事すでに決せり、汝多く諫ること勿れとて、了に其諫を用ひざれば、劉曄慙愧して退きけり。去ほどに魏の太常卿邢貞は趙咨と共に吳の國に到り、先人を遣し、勅使を承はりて此に來れりと云ければ、孫權自ら遠く出て迎へんとす。顧雍諫て曰、君すでに江東の國を保て、豈他人の官爵を受玉はんや。孫權が曰、昔し漢の高祖は項羽が封を受て漢中の王となれり、皆時に因者也、われ何ぞ之を恥んとて、百官を引きて城を出、はる〴〵と迎けるに、邢貞自ら上國の勅使なりとて敢て車より下ず、傍若無人なる體にて入ければ、張昭腹を立て前に進み、聲を勵して申けるは、汝上國の使なればとて妄に自ら無禮をなす、吳の國に智勇の人物なしと思ふか、又は吳の國に刀と云もの無と思ふか。邢貞怕れ驚き、

あり、伐玉ふとも何ぞ怕れん。曹丕が曰、吳人つねに魏を畏るゝか。趙咨が曰、精兵百萬、江漢を池とす、何ゆゑに魏を畏べき。曹丕が曰、吳の國に汝が如き者いか程かある。趙咨が曰、聰明特達なる者八九十人、某が如きものは車に載斗にて量とも數へ難し。曹丕嘆じて曰、使ニ于四方一不レ辱ニ君命一可レ謂レ士と云るは汝がことなりとて、乃ち孫權を吳王に封じ、九錫を加へて太常卿邢貞を使とし、趙咨と共に吳に行しむ。趙咨恩を謝して退出しければ、劉曄すゝみ出、曹丕を諫て曰、いま孫權蜀の勢の寄るを畏れ、暫く臣と稱して我國に諂ふ、臣が愚意を以て思ふに、今吳と蜀と戰ふは乃ち天より滅なり、陛下もし大將を擇で數萬の勢を授け、江を渡て之を襲しめ、蜀その外を攻、魏その內を攻ば、吳の國の滅んこと十日の外に出べからず、吳もし滅る時は蜀豈ひとり存せんや、願くは陛下これを察し玉へ。曹丕が曰、孫權すでに禮を以て朕に服す、朕もし之を攻ば信を天下に失べし、況や初て帝位に登る、暫く詐の計を用ふまじ。劉曄が曰、孫權英雄の才ありと云ども、その身わづかに漢より封ぜられたる驃騎將軍南昌侯の職なり、官輕き時は勢ひ微なり、吳の民これに因て魏を怕るゝの心あり、今王位に進め玉ふ時は、陛下と一階を隔るばかり也、禮秩衣冠こと〲く相亂らん、今陛下その詐の使を信じて王位に封じ、九錫を加玉ふ、是虎に翼を添なり、孫權もし蜀の兵を退けなば、外には

ん、何の面目ありて生て回らん。孫權乃ち表を作て臣と稱し、于禁を送り回して趙咨を使たらしむ。趙咨すでに魏の都に到り、先太尉賈詡に見て其事を語る。次の日賈詡朝に出て吳の國より中大夫趙咨と云もの表を捧て使たりと報じければ、曹丕笑て曰、これ蜀の勢の寄るを怕て援を求ん爲なりとて、呼入て對面し、表を披き見て問て曰、汝が主人孫權は何等の人ぞ。趙咨答て曰、乃ち聰明仁智雄畧の主なり。曹丕大に笑ければ、趙咨問て曰、陛下なにを笑玉へる。曹丕が曰、朕汝が主人を讃すること甚だ過たるを笑ふ。趙咨が曰、陛下某が詞の過たるに有ざるを聞玉はんか。曹丕が曰、汝が詞もし理に合はば、朕その願ひに從べし。趙咨が曰、魯肅を凡夫の内より擇しは是その聰なり、呂蒙を士卒の列より拔たるは是その明なり、于禁を獲て害せざるは是その仁なり、荊州を取て刀に血を付ざるは是その智なり、三江に據て天下を虎視するは是その雄なり、身を屈して魏に從ふは是その略なり、これを以て論ずる時は、豈聰明仁智雄畧の主にあらずや。曹丕が曰、孫權も學問したるか。趙咨が曰、主人兵船數萬艘を江に浮べ、精兵を集たること百餘萬、つねに賢に任じ能を使て志經畧を存す、若暇ある時は經傳を博覽し、歷代の史籍を評す、乃ち丰采奇異の人なり、豈章を尋ね句を摘の諸生に效んや。曹丕が曰、朕いま吳を伐んと欲するは如何ん。趙咨が曰、大國征伐の兵あれば、小國も亦守禦の備

よと申し候へ、朕自ら吳の國を踏破て萬分が一の恨を雪ん。諸葛瑾事の諧ざるを知て震ひ怕れ、頭を抱へて回り去。この時吳の國には張昭ひそかに孫權に見て申けるは、諸葛瑾久しく回らざるは、蜀の大軍に怕て和睦の使に事を託、直に降參したるにて候はん。孫權が曰、孤諸葛瑾と死生不易の盟あり、彼孤に負ず、孤彼に負ず、昔し諸葛瑾が柴桑に在し時、孔明江を渡て吳に來れり、孤乃ち諸葛瑾に向て、汝と孔明とは骨肉を分たる兄弟なり、何ぞこの處に留めざると云ければ、諸葛瑾答て、孔明すでに玄德に事て、義更に二心なし、必ず此に留らじ、猶某が他に行ざるが如しと云り、此一言神明を貫に足り、今日爭か蜀に降らん、孤と彼とが交は他人の言を以て間べきに非。その詞いまだ了ざるに諸葛瑾回りぬと報じければ、張昭甚だ愧て退出す。諸葛瑾內に入、いかに申せども蜀帝和睦に從はずと云ければ、孫權大に驚き色を失て申けるは、然る時は國すでに危し。時に一人すゝみ出て曰、某一つの計あり、この危を救べし。諸人これを見れば中大夫趙咨なり。孫權問て曰、汝いかなる計かある。趙咨が曰、君いそぎ魏の曹丕に表を上て救を求玉へ、某その使と成て許都に到り、利害を說て曹丕に漢中を襲しむべし、然る時は蜀の勢自ら退かん。孫權喜て曰、この計きはめて善、汝もし行ば吳の國の威風を失ふこと勿れ。趙咨が曰、もし少にても國の威勢を落ことあらば、必ず江の中に身を投

も知せず了に荊州を攻取たり、主人孫權は呂蒙が關羽を殺したる由を聞て後悔すれども及ばず、これ乃ち呂蒙が過にして主人の知ところに有ず、今呂蒙世を辭して讐すでに亡、孫夫人久しく陛下を慕て常に對面せんことを望玉ふ、此ゆゑに主人いま某を使とし、荊州を初の如く返し、降參の者を生取て獻り、孫夫人を送り回して永く唇齒の好を結び、共に曹丕を伐て簒逆の罪を正さんと欲す、未審尊意いかん。帝怒て宣けるは、孫權すでに關羽を害して朕が股肱を廢す、今日又言を巧にして來り說んとするか。諸葛瑾が曰、臣ねがはくは輕重大小を以て之を論ぜん、陛下は乃ち漢室の皇叔、いま漢の天子すでに曹丕に殺され玉ふ、陛下この讐を討て簒逆の罪を正さず、偏に關羽一人の爲に自ら大軍を起して山川の難所を渉り、來て雌雄を決し玉ふ、是大義を捨て小義に就なり、中原は乃ち海内の地、洛陽、長安は、皆大漢業を創るの都なり、陛下これを取ことを思はず、偏に荊州を爭玉ふ、是重を弃て輕を取なり、天下みな陛下の位に即玉ひぬれば、必ず漢室の再び興んことを思ふ、然るに一人の大將の爲に萬乘の身を輕じ玉ふ、是計を失るにあらずや、願くは陛下これを察し玉へ。帝いよ〳〵怒て宣けるは、我弟を殺せるの讐天地日月を共にせず、朕命の有ん限は誓て兵を退けじ、孔明がことを思はずんば今先汝が首を刎んずれども、暫は預け置、早く回りて孫權に頸を洗て刀を受

めて申けるは、いま劉玄德すでに帝位に登り、七十餘萬の精兵を率してこの處へ寄來る、その勢ひ泰山の如し、如何して防べき。諸人みな色を失ひ、互に面を合せて答ふる者なかりければ、諸葛瑾が曰、某久しく君の恩を受、ねがはくは一命を棄て蜀主に見え、利害を說て兩國を和睦せしめ、共に魏を伐て天下を正さしめん。孫權然るべしと喜ければ、諸葛瑾つひに出向ふ。時に章武元年秋八月、帝大軍を進めて夔關に到り、御駕を白帝城に留て、先手の勢すでに川口へ出たる所に、近臣奏して曰、吳の國より諸葛瑾使たり。帝大に怒て急ぎ追返せと下知し玉へば、黃權諫て曰、諸葛瑾は孔明が兄なり、何ゆゑに追かへし玉へる、先招き入て其從ふべきには從、從ふまじきには從はず、乃ち孫權が罪を責て此者に知しめ玉へ。帝これに從ひ、呼入て對面し玉へば、諸葛瑾地の上に拜伏す。帝の宣けるは、汝こゝに來るは必ず事の故あらん。諸葛瑾が曰、臣が弟久しく陛下に事ふ、此ゆゑに斧鉞の誅を避ず、特に來て荊州の事を奏す、近ごろ關羽荊州を守り玉ふ、主人孫權しきりに好を結んと欲すれども、關羽更に從ひ玉はず、却て呂蒙と不和にして、動れば關羽に罵り辱しめらる、此主人孫權怨を積の一つ也、その後關羽襄陽を取玉ひし時、曹操しば〳〵漢の天子の勅命と號して、使を以て主人孫權に荊州を襲ひ取しむ、然れどもその詐ならんことを疑て孫權つひに從はざる所に、呂蒙ひそかに兵を起して主人に

ち一行の鴈雲の間を過ければ、我この第二なる鴈を射て落さんとて仰のけに成て射たりければ、その鴈弦に應じて落にけり。文武の官僚あ射たり〳〵と感じければ、張苞大に怒り馬に飛のり、丈八の矛を提て、汝われと戰ひを決せんやと呼はりければ、關興も馬に打のり、刀を舞して蒐出、汝よく矛を使ば我叉刀を使べしと云て鋒を交んとするに、帝叱て無禮するなと呼はり玉へば、二人馬より下て地に伏す。帝宣けるは、朕涿郡より汝二人が父と生死の交を結て、骨肉よりも相親めり、今二人は乃ち昆仲の分なり、父が昔の義を思ひ、吉凶共に救ひ扶て其親情に背こと勿れ、何ぞ一言の忿に同士軍を仕出して其大義を失へる、父の喪いまだ遠からざるに、猶此の如く相爭ふ、況や他日をや、汝二人の内年長ぜるを兄と定めよ。張苞が曰、臣は關興より一歳長ぜり。帝乃ち關興に命じて張苞を再拜せさせ、箭を折て誓を爲し、永く兄弟の約を成しめ玉ひ、吳班すでに先鋒たり、朕自ら汝二人と後陣に備んとて、各精兵三千餘騎を授け、水陸二手に分てその勢ひ潮の湧が如く吳の國に向ひ玉ふ。

○趙咨入レ魏説二曹丕一

范疆、張達二人張飛が首を取て吳に降り、事の樣を告ければ、孫權大に驚き、文武の大將を集

呉を攻んとす、仙翁ねがはくは吉凶を決し玉へ。李意が曰、これ天數なり、老夫が知ところにあらず。帝再三問玉ひければ、李意乃ち紙筆を求て兵馬武具の類四千餘張を畫き、一々手を以て扯やぶり、又一つの大なる人形を畫き、地の上に仰のけに臥たるを、傍に一人土を掘て埋んとする體を寫し、上に一つの白の字を書、拜し別て回りければ、帝心の內喜び玉はず、此狂人なり、何ぞ用ふるに足んとて、火を以て燒弃玉ふ。時に張苞奏して曰、呉班が勢すでに來れり、臣ねがはくは先手に進ん。帝その志を壯なりとして先鋒の印を渡さんとし玉へば、又一人すゝみ出て曰、先鋒の印を某に授玉へ、彼讐を報ずるの心あれば、某も讐を報ずるの心あり。諸人これを見れば關羽が次男關興なり。地の上に拜伏し涙を流して申けるは、臣が父すでに呉の爲に害せられたり、臣ねがはくは無用の身を捨て、上は父兄の讐を報じ、下は自己の恥を雪ん、願くは先鋒の印を授玉へ。張苞申けるは、父の讐呉の國にあり、此ゆゑに我すでに先鋒の仰を被れり。關興が曰、汝いかなる能ありて此職を受んとする。張苞が曰、われ幼より武藝を學て箭空く發ことなし。帝の宣けるは、朕ねがはくは二人の武藝を試ん。張苞乃ち二百歩の外に一面の旗を立、旗の上に紅の驗を付、弓を取て三度放に、みな驗に中りければ、諸軍ことごとく驚嘆す。關興も弓を取て進み出、御邊が弓勢なんぞ奇とするに足んと云ける所に、忽

吉凶を知て當世の神仙なりと聞り、早く天子に奏してこの人を招き、試に今度の吉凶を問ん。百官これに從ひ、李意が事を奏しければ、帝乃ち陳震に命じて迎させらる。陳震いそぎ成都に回り、案内者を尋ねて深く青城山に入けるに、淸雲隱々として瑞氣よの常ならず。忽ち一人の童子きたり、先生は陳震に非やと問ければ、陳震驚て曰、童子いかなれば吾名を知れる。童子が曰、昨日わが師の申しは、明日必ず蜀の天子より使ありて、陳震と云ふ人きたらんと云り。陳震いよ〳〵不思議に思ひ、これ眞の神仙なりとて、廬の外に拜伏しければ、李意迎て内に入しむ。陳震が曰、天子いそぎ仙翁に一見せんことを願ひ玉ふ、望らく駕を促して出玉へ。李意が曰、われ年老て山を出ること能はず。陳震が曰、もし仙翁出玉はずば、某如何して容く回らん。李意已ことを得ず再三に及で從ひければ、陳震まづ使を馳て其趣を報ず。帝自ら百官を引て五里ばかり出て迎玉ひ、李意が體を見玉ふに、鶴髮童顏灼々として光を放ち、身古柏の如なりければ、營中に請じて禮を施し玉ふ。李意が曰、老夫は乃ち山中の賤人、無學にして識こと無、なにゆゑに招玉ふぞ。帝宣けるは、朕關羽、張飛と生死の交を結て、共に戎馬の間に奔走すること二十年に餘れり、諸人みな朕が中山靖王の後なるを以て、遂に推て帝位に卽しむ、今二人の弟すでに害せられて、讐こと〴〵く吳の國にあり、この故に大軍を起して

下令大軍を起して呉の國を討んとし玉ふ、何ゆゑに痛く哭て自ら龍體を損ひ玉ふぞ。帝張苞に向て宣けるは、卿吳班と先手に進て父の讐を報ずべきや。張苞が曰、爲レ父爲レ君死と云とも何ぞ辭せん。帝乃ち張苞を先手とし玉ふ所に、近臣又奏して曰、一手の軍馬風擁して馳來り候。帝これを見玉へば關羽が次男關興なり。帝頻に關羽が事を想うて聲を放て哭玉へば、百官諫て曰、龍涙落レ地亢旱三年と云り、陛下よく社稷を以て重しとし玉へ。帝宣けるは、朕昔し布衣の中より關羽、張飛と生死の交を結び、今朕は天子と成て二人の弟は不幸にして早く死したり、今又二人の姪を見るに、心共に鐵石の如し、安んぞ哭ざらんとて、聲を放て長嘆し、昏絶し玉ふこと數度に及びければ、百官みな張苞、關興に向て、二將軍暫く退て帝の龍體を養しめ玉へと云。二人退て出ければ、近臣奏して曰、陛下御年六旬に過て日夜甚だ憂ひ玉はば、恐くは龍體を損ずべし。帝宣けるは、二人の弟すでに亡て朕ひとり世にあり、是昔日の約に背なりとて、頭を以て地を叩き、聲を放て哭玉ふ。百官これを見て議して申けるは、今主上初て帝位に卽玉ひ、自ら七十餘萬の大軍を起して遠く呉の國を伐玉ふ、殊に日夜哭き哀み玉ひて其兆不吉なり、如何して之を解すべき。陳震が曰、成都の青城山に李意と云る隱者あり、此人は漢の文帝の時より此山に住で今に至るまで三百餘年、上は天文に通じ下は地利を察し、能人の

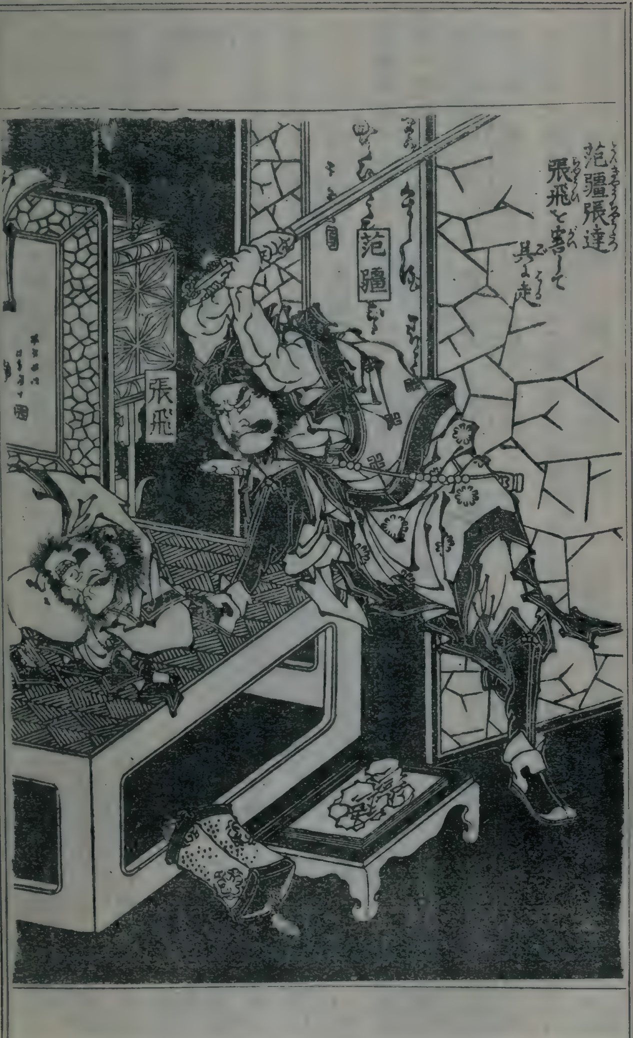
通俗三國志　巻之三十五

○蜀帝興レ兵伐レ呉

章武元年七月丙寅の日、帝七十五萬の勢を調へ、呉を攻んとて已に成都を出玉へば、孔明大小の百官を從へ、十里送りて還けり。この夜帝俄に御心驚き肉顫ければ、出て天文を觀玉ふに、西北の方に一つの星あり、大さ斗の如くにして忽ち地に墜たりければ、御心疑ひ、急ぎ人を走らしめて孔明に問玉ふ。孔明奏して、これ一人の大將を失ふべし、三日の内に驚あらんと申ければ、帝これに因て暫く陣を張て進玉はず。時に近臣奏して、閬中の張飛が大將に呉班と云もの、早馬を馳て表を上ると告ければ、帝慌驚き手足措を失て、噫わが弟喪たるかとて表を開て見玉へば、果して張飛夜中に酒を過し痛く寢入たる所を、范彊、張達二人ひそかに首を取て呉に降れりと書たり。帝聲を放て哀み哭き、遙に望で魂を祭り玉ふ。次の日一彪の軍馬飛が如くに馳來り候と奏しければ、帝自ら出て之を見玉ふに、一人の大將白き袍を被て地の上に拜伏す。諸人これを見れば張飛が嫡子張苞なり。帝大に哭玉ひければ、群臣みな諫て曰、陛

歲なり。軍中これを聞つけ、兵を起して追蒐しかども、及ばずして回りければ、手下の大將吳班いそぎ表を上て天子に奏し、長子張苞に棺槨を具させ、弟張紹に閬中を守しむ。

張達


范疆張達
張飛を害して
呉よ走
范疆
張飛

打起んとす。手下の大將范疆、張達と云もの二人すゝみ出て申けるは、只今仰を被る兵船武具白旗袍の類は容易に調ること成がたし、暫く日限を延玉へ。張飛怒て申けるは、われ兄の讐を報ずるに、今日の内にも敵の境に到ざることを恨む、汝いかなれば吾命に背ごとて、武士に命じて二人を樹の上に縛り付、背を四十枚打せ、若明日に盡く調はずんば必ず二人が首を刎んと呼はりければ、范疆、張達深く怨み、共に船の中に回て議して申けるは、今日潜る責を受と云ども、いかゞして明日の内に調へん、元より此人性烈きこと火の如くなれば、明日調はずんば必ず我等を殺べし。張達が曰、彼が我を殺ざる以前に我まづ彼を殺すべし。范疆が曰、いかゞして前に近付ん。張達が曰、運は天にあり、我等もし運盡なば彼を殺こと能はじ、彼いつも酒に醉て床の上に倒れ臥す、今夜もし酒を飲ば我等が運の盡ざるなりとて、密に之を窺ひける。この夜張飛は神思昏亂して坐臥安からざりし故、手下の大將に問て曰、吾いま頻に心驚き肉動は如何なる故ぞ。諸將答て曰、これ君の關公を思ひ玉ふ故なり。張飛乃ち諸將と酒をのみ、覺ず醉て帳中に臥ければ、范疆、張達ひそかに喜び、皆懐に刀を藏して初更の比内に入、俄に軍の大事ありと詐て直ちに床の前に到る。時に張飛よく寐入て鼾の音雷の如くなりければ、二人つひに其首を討落し、數十人を引て船にのり、吳の國へぞ走りける。張飛死する時五十五

て幸なり。百官みな奏して曰、秦宓は良臣なり、願くは一命を扶玉へ。帝宣けるは、暫く獄中に捕へ置、朕が讐を報じて回る時、首を刎て罪を正さん。孔明これを聞て又表を獻り、諫て曰、

臣亮等切以、呉賊逞鄭武之心、致荊州覆亡之禍、損將星於牛斗、折天柱于楚地。此情哀痛、將興問罪之師。廊廟同謀、悉起發忿之議。皆以爲、遷漢鼎者罪出曹賊、隔劉祚者過非孫權。蓋謂、魏賊若梟除、則呉寇自然賓服。願陛下納秦宓金石之言、抑卞莊刺虎之勇、以養士卒力、別作良圖、則社稷幸甚、天下幸甚。

帝大に怒り、表を地に擲て宣けるは、朕が意已に決せり、再び諫る者は劒を以て法を正さんとて、遂に孔明を留め太子を保て兩川を守らしめ、驃騎將軍馬超は弟馬岱と鎮北將軍魏延を助て共に漢中を守らしめ、虎威將軍趙雲は後陣に引下て兵糧を送り運ばしめ、黄權、程畿を參謀とし、馬良、陳震に文書を掌しめ、黄忠を先鋒とし、馮習、張南を副將とし、傅彤、張翼を中軍護尉とし、趙融、廖淳を後備とし、其外宗徒の大將數百人、並に五谿、蠻夷等の兵都合七十五萬、章武元年七月上旬に成都を起て進發す。この時張飛は閬中に馳回り、手下の勢にことごとく白旗を指せ白き袍を被せて、呉を平げ關羽が讐を報ぜんとて、已に日を定めて

んや、陛下もし打起玉はずんば、臣一丈の身を弃て關羽が爲に讐を報じ、若報ずること能はずんば、命を捨て再び陛下に見候はじ。帝宣けるは、朕必ず汝と共に行ん。張飛が曰、昔日の誓天下こと〴〵く之を知る、陛下必ず人に笑ひ恥しめられ玉ふな。帝宣けるは、汝いそぎ手下の勢を引て閬中より出よ、朕大軍を起して江州にて出合、吳を滅して恨を雪べし。張飛が曰、臣いづくんぞ片時も悞らん。帝宣けるは、朕本より汝が酒後に怒を發して、妄りに士卒を鞭打ことを知、これ大なる禍の端なり、今より後よく〳〵愼め。張飛階を下りて謹で拜謝し、又閬中へ回りける。次の日帝又兵を起し玉ひければ、學士秦宓すゝみ出、大に諫て曰、陛下いま大軍を起して弟の讐を報じ玉ふ、臣思ふに甚だ不可なり、陛下萬乘の身を弃て小なる義を成玉はんは、是古人の取ざる所なり、殊に關羽は賢を輕んじ士に傲り、剛にして自ら高りて此禍を惹出せり、天の亡せるには有ず、願くは陛下よく思ひ玉へ。帝宣けるは、關羽は朕と一體なり、豈昔日の盟を忘んや。秦宓又曰、陛下諫に從ひ玉はずんば、必ず大なる敗あらん、但惜べし新に創玉へる天下つひに他人の物と成ん。帝大に怒て宣けるは、朕兵を起して敵に向ふ、汝いかなれば不吉の言を出せるとて、武士に命じて首を討しめんとし玉ふ。秦宓色をも變ぜず笑て申けるは、臣いま死すとも恨なし、國中の民の塗炭に逢ことを見ること無ん、是反

自ら天子に見て一番の先手を受、孝を掛て吳を破り、逆賊を擒にして兄の靈前に祭べしとて、勅使と打つれ成都に來る。此時帝は每日教場に出御なりて自ら軍馬を調練し玉ひ、日を擇で軍を起さんとし玉ふ。是に於て文武の百官こと〴〵く丞相府に集り、孔明に告て申けるは、いま天子初て帝位に登り、自ら兵を起し玉ふは社稷を重ずる所以にあらず、丞相なにとて之を諫め玉はざる。孔明が曰、われ已に再三强く諫れども帝更に聽玉はず、今日百官こと〴〵く吾に從て教場に來り、共に天子を諫玉へとて、一同に奏して曰、古の詞に、千金の子は坐する時に不レ垂レ堂と云り、陛下九五の位を受、祖宗の統を傳へ玉ひ、德を以て人を服することを思はず、一時の怒に因て自ら大軍を起し、山川の險阻を經て矢石を冒玉ふは、宗廟を重ずる所以にあらず、若又關羽が義を思ひ讐を復せんと欲し玉はば、一人の大將に命じて兵を統て伐しめ玉へ。帝これを聞て少し御心を回され、朕且く兵を罷て別に良計を成んと宣ふ所に、忽ち張飛きたれりと奏す。帝いそぎ召よせ玉へば、張飛直ちに演武堂に來て地に拜伏し、帝の御足を抱て大に哭く。帝も張飛が背を撫聲を放て泣玉へば、張飛が曰、陛下いま天子と成て早むかしの誓を忘玉へるか、關羽が讐を何とて早く報じ玉はざる。帝宣けるは、百官みな諍ひ諫む、此ゆゑに輕々しく打起がたし。張飛が曰、他人は皆富貴を樂む、豈われ等が昔日の盟を知

諸將酒を進て心を慰んとすれば、張飛もし醉時は妄に怒の氣いよ〳〵盛にして、士卒を痛く鞭打けるゆゑ、死する者も多かりけり。常に醉ては南を望で齒を切り、怒り恨ること甚だしく、醒時は聲を放て痛く哭き、悲ること堪がたし。時に勅使ありと報じければ、張飛いそぎ出迎へ、詔を聞て之を讀に、其詔に曰、

朕承天序、嗣奉洪業、除殘靖亂、未燭厥理。今寇虜作害、民被荼毒。思漢之士、延頸鶴望。朕用怛然、坐不安席、食不甘味、整軍誥誓、將行天討。以君忠毅、侔蹤召虎、各宣遐邇。故特顯命、高墉進爵、兼司于京。其誕將天威、柔服以德、伐叛以刑、稱朕意焉。詩不云乎、匪疚匪棘、王國來極、肇敏戎功、用錫爾祉、可不勉歟。

章武元年五月　日　詔

張飛官爵を受て北を望んで拜謝し、酒宴を設て勅使を持なし、吾兄の讐重きこと山嶽の如し、朝廷の臣なんぞ奏聞して早く吳の國を伐しめざるやと問ければ、使答て曰、多く魏を討て次に吳を伐玉へと勸る者あり。張飛怒て曰、これ如何なる言ぞ、昔し桃園に義を結し時、誓て生死を同うせんと約せり、今不幸にして關羽すでに半途に亡ぶ、吾なんぞ獨り富貴を身に受けんや、

朕桃園に義を結て關羽、張飛と生死の交を誓しに、今關羽不幸にして呉の孫權に害せられたり、此天地を共にせざるの讐なり、朕いま帝位に即は皆卿等が扶による、若關羽が仇を報ぜざれば是昔日の盟に背く、朕いま傾國の兵を起し、呉を滅して逆賊を擒にし、關羽が靈を祭て此恨を雪んと思ふなり。時に趙雲すゝみ出て申けるは、無用々々、輕々しく呉を討べからず、宜く先魏を討玉へ、魏滅なば呉自ら服せん、今曹丕漢帝を弑して神人共に怒る、陛下もし渭水の河上に兵を屯して魏の逆賊を討玉はゞ、關東の忠ある者、必ず粮を裹み馬に策打て王の師を迎べし、若魏を捨て呉を討玉はば、兵勢一たび交て豈よく解することを得べけんや、陛下之を察し玉へ。帝宣けるは、孫權朕が弟を殺して、殊に糜芳、傅士仁、潘璋、馬忠こと〴〵く呉の國にあり、此みな歯を切の讐なり、朕その肉を食ひ其九族を滅さんと欲す、卿なにとて之を阻つる。趙雲又曰、天下は重く、讐を報ずるは輕し、陛下これを詳にし玉へ。帝答て宣はく、朕もし關羽が仇を雪ずんば、萬里の江山ありとも豈貴に足んや、朕が意すでに決せり、卿再び諫ること勿れとて、即時に南蠻國へ勑使を遣して夷の勢五萬餘騎を借玉ひ、又閬中へ勑使を馳て張飛を車騎將軍領司隷校尉とし、西鄕侯に封じて閬州の牧を兼させらる。この時張飛は閬中を守て關羽が呉の爲に殺されたる由を聞、日夜哀み哭て涙衣を濕し、目を怒して大に恨む。手下の

戮殺主后。滔天滅夏、罔顧天顯。操子丕載其凶逆、竊居神器。群下將士以爲、社稷隳廢、備宜修之嗣武二祖、躬行天罰。備雖無德懼忝帝位、詢於庶民、外及蠻夷君長、僉曰、天命不可以不答、祖業不可以久替、四海不可以無主、率土式望在備一人。備畏天明命、又懼漢室將湮於地。謹擇元日與百僚登壇、以受皇帝璽綬。修燔瘞告、類於天神。惟神饗祚於漢家、永綏四海。

漢中王玉璽を受て壇上に捧げ、四面に之を讓て、劉備元より才德なし、才德ある人これを受よと宣へば、孔明奏して曰、主上四海を平定して、功德天下に昭なり、況や是大漢の宗親、宜く正位に即玉ふべし、今すでに天に告て祭を成玉へり、又なんぞ讓玉ふ。是に於て文武の百官ことごとく萬歲を呼、拜舞禮了て章武元年と改元し、國を大蜀と號し、吳氏を立て皇后とし、長子劉禪を太子とし、次の子劉永を魯王とし、三子劉理を梁王とし、孔明を丞相とし、許靖を司徒とし、大小の官人ことごとく封賞ありて、天下に大赦を行はしむ。

○范疆張達殺張飛

漢中王すでに皇帝の位に即玉ひ、次の日文武の百官朝廷に集りければ、帝詔を降して宣はく、

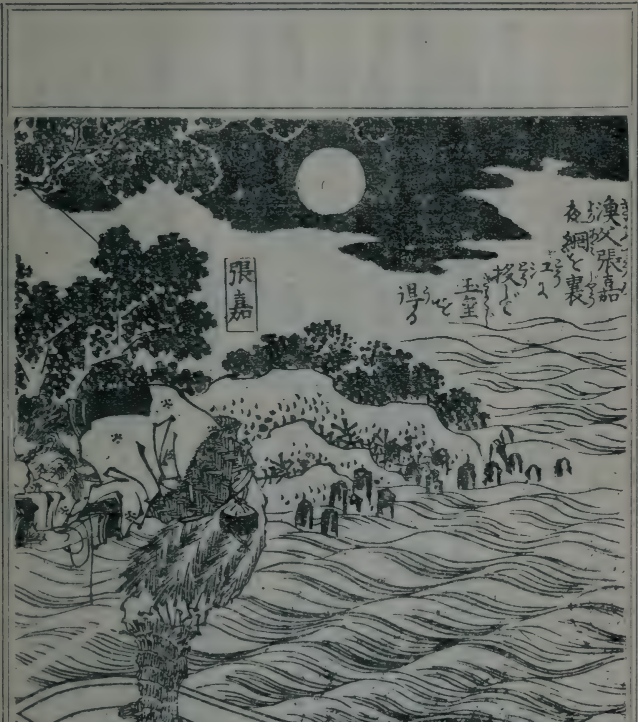
天下の人の議論を恐て也。孔明が曰、古より名不レ正則言不レ順、言不レ順則事不レ成と云り、今主上名正しく言順ふ、誰か不可なりと云もの有ん、豈聞玉はずや、天の與るを取ざれば反て其咎を受と云り。漢中王の曰、軍師の病の痊を待てこの事を行べし。孔明がはと起あがり、側なる屏風をはたと撃ば、文武の百官ことごとく外より入、地に拜伏して曰、主上すでに許容し玉へり、吉日を擇で大禮を行べし。漢中王これを見玉へば、乃ち太傅許靖、安漢將軍糜竺、青衣侯尚擧、陽泉侯劉豹、別駕從事趙祚、治中從事楊洪、議曹從事杜瓊、勸學從事張爽、太常卿賴忠、光祿卿黃權、祭酒何會、學士尹默、司業譙周、太司馬殷純、偏將軍張裔、少府王謀、昭文博士伊籍、從事秦宓等を初として、其餘の文武數を知ず。漢中王宣ひけるは、卿等われを不義に陷入んと欲するか。孔明奮然として曰、大事すでに定れり、日を擇で臺を築くべしとて、漢中王を送て宮中に回し奉り、乃ち博士許慈、諫議郎孟光二人に命じて成都武擔の南に臺を築しめ、大禮すでに畢ければ、百官鑾駕を整て漢中王を迎へ、壇に上て祭を設け、譙周壇の上に在て高聲に祭文を讀。その文に曰、

惟建安二十六年四月丙午朔、越二十日丁巳、皇帝備致ニ用玄牡一、昭告ニ皇天上帝后土神祇一。漢有ニ天下一、曆數無レ疆。曩者王莽簒盜、光武皇帝震怒致レ誅、社稷復存。今曹操阻レ兵、殘忍

じ玉はずんば、是不忠不孝の人なり、今蜀中の民みな主上を天子として、漢帝の御爲に恨を雪んと欲す、主上もし從ひ玉はざる時は、是民の望を失なり、願くは能察し玉へ。漢中王宣けるは、孤は景帝の子孫なりと云ども、涿郡の一村夫なり、普天の下率土の濱、曾て一つも德澤を施さず、今もし自ら帝位に登ば、必ず簒弑の名を得べし、孤たとひ死すとも不忠不孝のことをせじ、卿等われを勸て萬載の惡名を取しむること勿れ。諸官再三諫と云ども、漢中王つひに許應し玉はざりければ、孔明一の計を定め、ひそかに百官と相議し、自ら病重と云て出ざりけり。漢中王この由を聞玉ひ、孔明が家に行て自ら床の邊に到り、軍師いかなる病ぞと問玉へば、孔明答て曰、心憂て焚が如し、命も定めて久しからじ。漢中王大に驚き、如何なる病ぞと問玉ひ、再三に及べども孔明目を塞ぎ、病重しとばかり云て更に答へず。漢中王しきりに問玉ふ時、孔明嘆じて申けるは、臣むかし草の廬を出てより主上に從て今に至り、計を勸れば必ず用ひられ、已に巴蜀の地を取て臣が夙昔の言に負ず、今主上に事ふる文武の官人數百員、みな主上を君として共に官爵を身に受、光を先祖に耀さんと欲する所に、主上かたく拒で受玉はず、此ゆゑに百官みな怨を含で外に去んとする意あり、若百官こと／＼く散て吳魏の敵せめ來らば、如何して防べき、臣これに因て憂に沈めり。漢中王の曰、われ堅く從ふまじきに有ず、

讖明徵。聞黃龍現武陽赤水、九日乃去、孝經援神契曰、德至淵泉、則黃龍現者君之象也。易乾九五、飛龍在天。大王當龍登帝位也。近有襄陽張嘉、特送玉璽。璽潛漢水、伏於淵泉暉景燭耀、靈光徹天。夫漢者高祖本所起、定天下之國號也。大王襲先帝軌跡、亦興於漢中也。今天子玉璽神光先現、璽出襄陽漢水之末、明大王承其下流、授與大王。以天子之位、瑞命符應、非人力所致。昔日有赤烏白魚之瑞、咸曰、休哉。一祖受命圖書先著、以爲徵應。今上天告祥、群儒英俊並進河洛、孔子讖記咸悉俱至。伏爲大王出自孝景皇帝、中山靖王之胄、本支百世、乾祇降祚、聖姿碩茂、神武在躬、仁覆德積、愛人好士、是以四海歸心焉。考省靈圖、啓發緯纖、神明之表、名諱昭著、宜即帝位、以纘二祖、紹嗣昭穆、天下幸甚。

漢中王見了て大に驚き、卿等われを不忠不孝の人と爲んと欲するかと宣ひければ、孔明奏して曰、曹丕だも尙自ら立て帝となる、況や主上は漢室の苗裔、たれか然らずと云もの有ん。漢中王色を變じて宣けるは、孤豈逆賊の所爲に效んやとて、袖を拂て後宮に入玉ひければ、百官みな退出す。三日すぎて後孔明又百官を引て朝に出、こと〳〵く漢中王の前に拜伏し、許靖奏して申けるは、今漢の天子すでに曹丕に殺され玉へり、主上もし帝位に卽て師を起し、此仇を報


漁父張嘉夜網を襄江に投じて玉璽を得る
張嘉

夜痛く哭玉ひ、飲食共に進まず。百官に命じて孝を掛させ、遙に許昌を望んで祭をなし、孝愍皇帝と諡して此より病に染で事を理玉ふこと能はず、一切の政務を皆孔明に委せ玉ふ。其次の年辛丑春三月、襄陽に張嘉と云る漁翁あり。或夜襄江に出て漁をする所に、水の底より一道の光起て直ちに天漢を侵しければ、網を擧て之を捕に、乃ち一つの玉璽を得たり。怪て能々見るに、金光燦爛として瑞氣盤旋し、上に八字あり、受命于天、既壽永昌と篆字にて刻ければ、扨は此ぞ聞ゆる傳國の玉璽ならん、漢中王は仁德已に天下に及て、漢の統を繼玉ふべし、之を獻らばやと思ひ、密に成都に入て孔明に獻る。孔明限なく喜び、重く恩賞を與へて玉璽を收め、太傅許靖、光祿大夫譙周等を集て此事を議しければ、譙周が曰、近ごろ祥風慶雲空中より下り、成都の西北の角に黃氣數十丈ありて霄に沖る、帝星畢胃昴の分に現じて煌々として月の如し、此まさに漢中王の帝位に卽て、漢の正統を繼玉ふべき瑞兆なり、今又玉璽を得るは乃ち天の賜なり、何の疑か候べき。孔明此に因て大小の官人を伴ひ、漢中王を請て帝位に卽玉へと勸む。其表に曰、

臣亮等言、近者曹丕簒弑、湮滅漢室、竊據神器、劫迫忠良、酷烈無道、人鬼忿毒、咸思劉氏。今上無天子、海內惶々、靡所式仰。羣下前後、上書者八百餘人、咸稱述符瑞圖

に帝位に即玉ひぬれば、早く劉氏を何れの處へも移し玉へとて、獻帝を引下し奉り、臺の下に跪かしめければ、賈詡が曰、公卿に封じて即日に行しむべし。曹丕乃ち獻帝を山陽公に封じければ、華歆劍を取聲を勵して曰、一帝を立て一帝を廢するは古の常例、今上の仁慈汝を殺に忍玉はず、封じて山陽公とす、今日早く山陽にゆき、詔して召ずんば、必ず都に入こと勿れ。獻帝御涙せきあへ玉はず、拜謝して馬に打のり、すご〳〵として去玉へば、之を見る人哭ずと云ものなし。曹丕群臣を顧て、舜禹の事朕これを知と云ければ、羣臣みな萬歳を三聲呼。曹丕乃ち天地を拜せんとする所に、忽然として一陣の風ふき起り、砂を飛し石を走しむること雨よりも急にして、前後俄に暗く成、咫尺の内をも見わけ難く、臺上の燭火こと〴〵く滅ければ、曹丕驚き倒て地に昏絶す。諸人たすけて宮中に入ければ、半時ばかりして生出、四五日は朝に出ること能はず。病の少し痊るを待て華歆を司徒に封じ、王朗を司空に封じ、こと〴〵く百官に賞を施し、鑾駕に乘て許昌より洛陽に到り、宮殿をぞ造りける。

○漢中王即皇帝位

漢中王は成都に在て曹丕が漢の天子を弑奉り、自ら大魏皇帝と成たる由を聞玉ひ、大に驚て曰

けて公卿庶民を集め、明白に位を讓玉へ、然る時は陛下の子々孫々長く魏の恩を被り玉ふべし。帝これに從ひ、太常院官に命じて地を繁陽に卜せしめ、三重の高き臺を築き、十月庚午の日寅の時を擇で、帝乃ち曹丕を臺の上に請じ、自ら玉璽を捧て位を禪玉へば、大小の官人四百餘員、御林虎賁の軍勢三十餘萬、及び匈奴單于化外の人こと〴〵く臺下に集る。帝位を禪て冊文を讀玉へば、萬人跪て之を聞。その文に曰、

咨爾魏王、昔者唐堯禪位於虞舜、舜亦以命禹。天命不於常、惟歸有德。漢道陵遲、世失其序。降及朕躬、大亂滋昏、羣兇恣逆、宇内顚覆。頼武王神武、拯茲難於四方。惟清區夏、以保綏我宗廟。豈予一人獲乂、俾九服實受其賜。今王欽承前緒、光于乃德、恢文武之大業、昭爾考之弘烈。皇靈降瑞、人神告徵、誕惟亮采。師錫朕命、僉曰、爾度克協於虞舜、用率我唐典、敬遜爾位。於戲天之曆數在爾躬、允執其中、天祿永終。君其祗順大禮、饗萬國、以肅承天命。

曹丕八般の大禮を受て、了に帝の位に登りければ、賈詡大小の百官を引て盡く臺下に朝せしめ、延康元年を改めて黃初元年と號し、國を大魏と號す。曹丕自ら官人に命じて天下に大赦を行しめ、父曹操を太祖武德皇帝と謚しければ、華歆が曰、天に二つの日なく民に二人の王なし、已

詔を造らせ、高廟使張音を勅使として二人の御女を車にのせ、玉璽を捧て魏王宮に到らしめ玉ふ。曹丕詔を披き見るに、其文に曰、

惟延康元年十月己酉、皇帝詔曰、咨爾魏王上書謙讓、朕切爲、漢道陵遲、爲日已久、幸賴武王操德膺符運、奮揚神武、芟夷兇暴淸定區夏。今王丕纘承前緒、至德光昭、聲教被四海、仁風扇鬼區、天之曆數實在爾躬。昔虞舜有大功二十、而放勳禪以天下、大禹有疏導之績、而重華禪以帝位。漢承堯運、有傳聖之義、加順靈祇紹天明命、釐降二女以嬪于魏。使行御史大夫張音持節奉皇帝璽綬、永爲人君。萬國敬仰天威、允執其中、天祿永終、敬之哉。

曹丕見了て大に喜び、密に賈詡に問て申けるは、いま二度詔を受と云ども、孤たゞ位を奪へりと人の沙汰せんことを恐るゝ也。賈詡が曰、これ甚だ易ことなり、再び玉璽を返して堅く辭し申し、密に華歆に命じて一つの臺を作らしめ、受禪臺と名付て吉日を擇び定め、大小の百官四夷八方の人を集め、天子に自ら玉璽を捧て天下を主上に禪らしめば、智者の謗を塞つべし。曹丕しかるべしと喜び、又表を上て玉璽を囘す。張音內裏に入て魏王受ずと奏しければ、帝群臣に問て宣けるは、魏王受ず、いかゞせん。華歆が曰、陛下一の臺を築き、受禪臺と名づ

期、是曆數昭明、信可知矣。夫大道之行、天下爲公、選賢與能。故唐堯不私於厥子、而名播於無窮、朕義而慕焉。今其追踵堯典、禪位與丞相魏王、無得辭焉。

曹丕見了て即ち禪を受んとしければ、司馬懿諫て曰、主上かる〴〵しくし玉ふな、已に詔ありて玉璽を禪玉ふと云ども、表を上て再三謙辭して天下の人の謗を免れ玉へ。曹丕これに從ひ、王朗に表を作らせ、玉璽を返し獻りければ、帝その表を聞玉ふに、表に曰、

臣丕謹奉受詔。伏惟、陛下以垂世之詔、禪無功之臣。使臣聞知肝膽摧裂不知所措。切以、堯讓大位於賢、巢由避跡、後世稱之。臣才鮮德薄、安敢奉命。請於盛世別求大賢、以禮讓之、庶免萬年之議論也。臣丕謹納還璽綬、待死闕下。不勝惶懼戰慄之至、奉表以聞。

帝表を叡覽ありて御心疑ひ、羣臣を顧て、魏王禪を受ず、いかゞすべきと問玉へば、華歆奏して曰、陛下いま唐堯の聖に效んと欲し玉ふか。帝宣ひけるは、如何なる故ぞ。華歆が曰、昔し唐堯二人の御女あり、娥皇、女英と云り、位を舜に禪り玉へども舜さらに受玉はざれば、了に二人の御女を妻せて後に帝位を禪玉へり、此に因て今の世までも大聖人の德と稱す、陛下幸に二人の御女あり、何ぞ唐堯に效て魏王に妻せ玉はざる。帝これに依て已ことを得ず、復桓楷に

だ過たり。帝怕れ驚き、袖を拂て起玉ひければ、王朗屹と華歆に目加せするに、華歆走り寄て御衣の袖を扯止、色を變じて申けるは、陛下の御意許と許さゞると早く一言を以て決し玉へ。帝怖れ戰て答へ玉ふこと能ざる所に、忽ち曹洪、曹休二人劍を帶て殿に上り、符寶郎は何くに在と問ければ、一人すゝみ出て曰、符寶郎こゝにあり。曹洪劍を拔て玉璽符寶を求んとしければ、符寶郎祖弼罵りて申けるは、玉璽は乃ち天子の寳なり、安んぞ汝等に與ん。曹洪大に怒り、武士に命じて祖弼を外に引出し、首を斬て弃たりければ、帝大に怖れ玉ひ、階下に武き魏の勢甲を被て戈を持、數百人あつまりたるを見玉ひて御淚血を洒ぎ、祖宗の天下何ぞ期せん、一旦に廢せんとは、朕九泉の下に死して何の面目ありて先帝に見ゆべきとて哭き玉ひ、乃ち群臣に向て宣けるは、朕ねがはくは天下を以て魏王に禪り、心安く一期を暮さば幸ならん。賈詡が曰、臣等いづくんぞ敢て陛下に負ん、陛下いそぎ詔を降して萬人の心を安し玉へ。帝御淚さらに止らず、乃ち桓楷、陳羣に命じて禪國の詔を作しめ、華歆を使とし、玉璽を捧て百官と共に魏王宮に行て曹丕に讓り與させらる。曹丕大に喜び、開て之を讀に、其詔に曰、

朕在位三十二年、遭天下蕩覆、幸賴祖宗之靈、危而復存。然今仰瞻天文、俯察民心、炎精之數既終、行運在乎曹氏。是以前王既樹神武之績、今王久光耀明德、以應其

ゑに出玉はざる。帝御涙を流して宣けるは、汝が兄わが位を奪ん爲に、百官をして迫しむ、朕この故に朝に出ず。曹皇后怒て申けるは、汝わが兄の國を奪逆賊なりとす、汝漢の高祖と云しも本これ豐沛の一匹夫、なほ強を頼で秦の天下を奪ひ取れり、吾父は四海を掃ひ平て、吾兄しきりに大功あり、何ぞ帝位に即ざるべき、汝位に登て已に三十餘年、もし吾父を得ずんば早く微塵にせらるべしと罵り、車に乘て出んとす。帝いよ〳〵驚て急ぎ御衣を更て前殿に出玉ひければ、華歆奏して曰、陛下早く臣が諫に依て禍に遭ことを免れ玉へ。帝哭て宣けるは、汝等は皆漢の祿を食こと年久し、殊に功臣の子孫多き中に、何とて朕が憂を分る者ひとりも無ぞ。華歆が曰、陛下もし天下を魏王に禪玉はずんば、旦夕大なる禍あらん、臣等敢て陛下に忠なきに有ず。帝宣けるは、誰か朕に禍する者あらん。華歆が曰、天下の人こと〴〵く陛下人君の福なく、四海の大亂に及ぶことを知、魏王もし朝に在ずんば、陛下を弑もの公庭に滿塞らん、陛下なほ恩を以て德に報ずることを知玉はずば、天下の人こと〴〵く陛下を伐ん。帝の宣く、昔し桀紂無道にして生民を殘暴せしかば、天下の人こと〴〵く之を誅せり、朕は位に即てより三十餘年、兢々業々として嘗て非禮の事を行はず、天下の人たれか朕を伐に忍ん。華歆大に怒り聲を荒らげて曰、陛下德なく福なくして自ら帝位に居玉ふは、桀紂が殘暴より甚

臣等司天の職を掌り、夜天文を考へ視るに、炎漢の氣數すでに盡て、陛下の帝星光を隱して明ならず、魏王の乾象天を極め地を際る、言を以て伸がたし、殊に其讖文に、鬼邊に在て委相連る、當に漢に代るべし、言東に在て午西に在、兩日並び光して上下に移ると云り、此を以て論ずる時は、陛下早く位を禪玉へ、鬼邊に在て委相連るは乃ち魏の字なり、言東に在て午西に在とは乃ち許の字なり、兩日並び光は乃ち昌の字なり、此は魏許昌に在て漢の禪を受べきの象なり、ねがはくは陛下よく察し玉へ。帝宣けるは、祥瑞讖文みな是謬の虛說なり、安んぞ輕輕しく萬世不朽の基を捨べけん。華歆又曰、陛下大に差れり、昔し三皇五帝德を以て相讓り、德なきは德あるに讓る、此に依て三皇より以來みな子孫に傳て德を論ぜざれば、桀紂に至て天下これを誅す、天下は一人の天下に有ず、乃ち天下の人の天下也、陛下早く退て德ある人に讓玉へ、遲き時は變を生ぜん。王朗又奏して曰、古より以來興ることあれば必ず亡ることあり、盛なること有ば必ず衰ることあり、豈不ㇾ亡の國不ㇾ敗の家あらんや、漢朝相傳て四百餘年、いま氣運すでに盡たり、自ら迷を執て禍を招き玉ふな。帝痛く哭て後殿へ逃入玉ひければ、百官みな大に笑て退き、次の日又ことごとく朝に集り、內官に命じて帝を請じ出さしむるに、帝怖て出玉はざりければ、曹皇后問て曰、いま百官みな陛下を朝に請て政を問んとす、何ゆ

禪しむべし。時に侍中劉廙、辛毘、劉曄、尚書令桓楷、陳矯、陳羣等を初として、宗徒の文武四十餘人みな來て太尉賈詡、相國華歆、御史大夫王朗に見て右の趣を告ければ、賈詡笑て曰、諸人の意見よくも吾機に合へりとて、華歆、王朗と共に中郎將李伏、太史丞許芝等を伴ひ、内殿に入て漢の天子に見え、華歆奏して申けるは、臣伏て魏王曹丕を觀るに、位に登てより恩徳を四方に布、仁慈よく萬物に及で、古に越今に騰る、唐虞と云ども爭か之に過ん、羣臣みな漢の運已に盡たるを見て共に相議し、陛下の堯舜に效て山川社稷を以て魏王に禪り、上は天の命に從ひ、下は民の意に合ひ玉はんことを望む、然る時は陛下自ら安閑にして少しも憂候はじ、是祖宗の幸甚萬民の大慶ならんと申ければ、帝これを聞し食て暫はものを宣はず。良ありて百官を覷ひ、哀み哭て宣ひけるは、朕よく高祖三尺の劍を提て、秦を平げ楚を滅して、新に天下を創立し玉ひ、世統相續て四百餘年傳りたるを想に、朕眞に不才なれども又大なる惡逆をも成ず、安んぞ祖宗の大業を等閑に弃るに忍ん、汝もろ〳〵の臣再びよく公計を議せよ。華歆乃ち李伏、許芝を引て御前ちかく進み、陛下もし信なりとし玉はざれば、此二人に能問玉へと奏す。時に李伏申けるは、魏王位に卽てより、麒麟出鳳凰來り黃龍現じ、嘉禾瑞草甘露の奇祥こと〴〵く數へ難し、是天象を垂て魏まさに漢の禪を受べきを示もの也。許芝奏して曰、

る人は、豈女童の情を懐んや。漢中王の曰、後には縦ひ孤子を殺こと有んとも、孤今日忠義の人を殺に忍ず。文武の諸臣これを聞て盡く涙を流しければ、武士奏して申けるは、劉封誅せらるゝ時、悔らくは孟達が勸を聽ずして、今果してこの難を受と申したり。漢中王これを聞て涙を流して宣はく、孤子九泉の下に於て必ず深く孤を恨んとて、關羽が事を嘆き玉ふ上に、又劉封を惜玉ひ、食事も進ず了に病に染玉へり。

○廢漢帝曹丕奪位

曹丕は魏王の位に登て、建安二十五年を延康元年と改め、夏六月に文武の百官を伴ひ、精兵三十萬騎を引て沛の譙縣を巡り、先祖の墓を祭て榮華を故郷に耀しければ、郷の老人道の岐に出て酒を獻り、漢の高祖沛に還玉ひし例に效ふ。是年の七月に大將軍夏侯惇病すでに危と告ければ、曹丕速に鄴郡に回りけるが、數日以前すでに死したり。曹丕自ら孝を掛て東門の外に殯し、禮を厚して之を葬る。時に八月の間石邑縣に鳳凰來儀し、臨淄城に麒麟出、鄴郡に黄龍現ずと報じければ、曹丕が手下の百官こと〴〵く相議して曰、いま上天象を垂、これ魏王漢に代て天下を治め玉ふべき瑞兆也、いそぎ受禪の禮を調へ、漢帝を勸て天下を魏王に

び招けば、城の後より徐晃が一軍討て出たり。劉封いよ〳〵亂て散々に走ければ、魏の大勢すき間もなく追掛、劉封が五萬の勢わづか二百餘騎に打なされ、成都を指て逃わしり、漢中王に見て地に拜伏し、右の趣を語りければ、漢中王大に怒て曰、辱子なんの面目ありて此に來れる。劉封が曰、叔父の難を救ざるは某が所爲にあらず、孟達が阻しに因て也。漢中王いよ〳〵怒て曰、汝も定めて人の食を食ひ、人の衣を被べし、假令土木を以て作れる人なりとも、讒賊の言を聽て救ざることを得べけんや。劉封淚を流して曰、一旦孟達に利害を以て說れ、此大なる罪を得たり。漢中王猶豫して御心いまだ決せざる所に、忽ち孔明來りければ、辱子かゝる科を犯す、何の法を以て正すべきぞと問玉へば、孔明耳を附て私語き、この子きはめて心剛し、今除ずんば後必ず子孫の禍を成んと申す。漢中王これを聞て武士を下知して劉封を推出さしめ、早く首を斬と宣ひ、其手下の兵を召て事の樣を問玉ふに、孟達降參を勸と云ども、劉封書簡を扯やぶり、使の首を刎て從はざりしと一々に奏しければ、漢中王これを聞て急に心を改め、此子尤罪ありと云ども、斯る忠義の志あり、凜然として愛するに堪たりとて、速に召かへし玉ふ時、すでに首を斬て持きたりければ、漢中王大に哭き、孤かる〴〵しく愕て股肱を廢すと宣へば、孔明が曰、主上もし國家久遠の計を思ひ玉はば、何ぞ之を惜に足ん、大業を建んと欲す

樊城を守らしめ、原より徐晃、夏侯尙二人この所に在ければ、共に兵を起して上庸を攻取しむ。孟達拜謝して襄陽に到り、劉封が五十里離て陣を取たる由を聞、一通の書簡を封じ、使をしたてて持せつかはす。劉封ひらき見るに、早く魏に降て吾と共に心安く富貴を受よ、御邊一旦漢中王と父子の約を成と云ども、元は羅侯氏の子なり、魏に事て舊の羅侯氏の統を繼玉へと書たりければ、怒て其書簡を扯やぶり、此賊すでに吾叔姪の義を悞り、又父子の間を妨んとす、此われを引て不忠不孝の人と成もの也とて、遂に使の首を刎、兵を進めて出向ふ。孟達これを聞て腹を立、一陣に馬を蒐出しければ、劉封大音あげて曰、國に背く逆賊いづくんぞ陣前にて間諜の計をなす。孟達も音を舉て曰、汝が死せんこと已に項の上に臨めり、却て迷を執て省こと能はず、なんぞ禽獸に異ならんや。劉封大に怒り、刀を舞して馬を交へ、戰ひ三合ならざるに孟達敗て走りければ、劉封これを追こと二十餘里。時に四方の伏勢こと〴〵く起り、左に夏侯尙、右に徐晃、喊の聲地に震て三方より攻ければ、劉封そくばく討れて這々上庸の城に走り、門を開けと呼はりければ、矢倉の上より矢を射ること雨の如く、申耽大音あげて、我すでに魏に降れりと呼はりければ、劉封怒て城を攻んとする所に、後より孟達が勢追かけしかば、留るべき力なく、房陵の城へ走る所に、此にも魏の旗を挿で申儀矢倉に立のぼり、旗を持て一た

れ兄弟久しく魏に降の心あり、將軍いま表を作て漢中王に暇を乞、魏に降て事へ玉はば、曹丕必ず重く用ん、某兄弟も共に跡より降るべし。孟達この議に從ひ、表を作り漢中王に獻て別をなし、その夜五十餘騎を率して魏に降る。劉封この由を聞つけ、追蒐て討留んとすれども及ばずして空く囘る。孟達が使表を持て成都に到りければ、漢中王ひらき見ていよ〳〵怒り、匹夫われに叛のみならず、文辭を以て戲を成かとて、急ぎ孔明を呼よせ、軍師早く兵を起してこの國賊を生取きたれと宣へば、孔明が曰、無用なり、但劉封に命じて孟達を討しめ玉へ、劉封もしは勝ことを得るとも、又は打負たりとも、必ず成都に囘るべし、其時に擒にし玉はば、二つの害を除べし。漢中王これに從ひ、綿竹へ使を遣して劉封に命じ玉へば、劉封卽時に兵を起して孟達を生取んとす。この時孟達は鄴郡に入て魏に降りければ、曹丕對面して問て曰、汝ここに來るは詐にあらずや。孟達が曰、臣さきに關羽の危を救ざる罪により、漢中王怒て殺んとす、此ゆゑに來り降る、豈他の意あるべけんや。曹丕いまだ信とせざる所に、忽ち劉封五萬の勢を率し、襄陽に推よせて孟達と戰ひを催と告ければ、曹丕が曰、汝もし眞の降參ならば、襄陽に行て、劉封が首を取きたれ。孟達が曰、臣利害を說ば必ず兵を動さずして劉封をも御方に降らしめん。曹丕げにもと喜び、散騎常侍建武將軍平陽亭侯領新城の太守に封じ、行て襄陽、

り厚かりしゆゑ、此計を聞て急ぎ書簡を封じて使に持せ、密に孟達に告んとしけるが、その使南の城門より出て馬超が夜巡の兵に生取る。馬超その書簡を開き見て直ちに彭義が家に到りければ、彭義迎て酒宴をなす。酒すでに半に及んで馬超言を以て探て曰、御邊初め漢中王に重く用ひられ玉ひしが、今は何とて薄なりたる。彭義酒に酔て申けるは、老革慌悖豈道に足んや。馬超が曰、某も深く心に怨を懐く。彭義が曰、御邊もし手下の兵を引て孟達と外より攻玉はば、我蜀の兵を率して内應を成ん。馬超が曰、御邊の言よく我心に合へり、明日計を議せんとて、相別て直ちに漢中王に見え、右の趣を告ければ、漢中王大に怒り、即時に彭義を擒にし、獄に下して拷問し玉ふ。彭義獄中に在て後悔すれども及ばず、孔明に書簡を送り、我悞て酒後に無用の言を出すと云ども、本心より出るに有ず、願くは救て命を助玉へと云ければ、孔明ひらき見てあざ笑ひ、漢中王に其書簡を奏す。漢中王いかゞせんと問玉へば、孔明が曰、これ狂人なり、了には大なる害を成ん。此に因て漢中王乃ち彭義を獄中にて誅し玉ふ。彭義死して後孟達この事を傳へ聞、驚て膽を冷ところに、忽ち使きたり、劉封を召て綿竹を守らしめ玉ふと云ければ、孟達以ての外に周章し、上庸の都尉申耽、申儀兄弟を呼て此事如何せんと評商す。申耽が曰、某一つの計あり、此禍を免れしめん。孟達が曰、ねがはくは教玉へ。申耽が曰、わ

通俗三國志

卷之三十四

○漢中王怒殺劉封

建安二十五年の春、漢中王は曹丕が魏王の位に登り、逆威を震て漢の天子を蔑にし奉る由を聞玉ひ、文武の臣を集て宣ひけるは、曹操すでに死して曹丕又王位に即、みだりに勢ひを成て漢帝を威し奉る、此に因て呉の孫權も手を束て臣と稱す、孤まづ呉の國を伐て關羽が讐を雪ぎ、次に魏を討て逆徒の本を絶んと欲るは如何に。時に廖化すゝみ出、地に拜哭して申けるは、關羽を敵に討せしは實に劉封、孟達が救ざるに因て也、早く二人の罪を正し玉へ。漢中王の曰、われ此事を忘居たり、使を馳て此處へ召よせん。孔明諫て曰、必ず急に召べからず、宜く緩々と圖玉へ、急ならば必ず變あらん、此二人を一郡の太守に封じて、其後に生取玉へ。漢中王これに從ひ、使を以て劉封に綿竹を守れと命ぜらる。斯に彭義字は永年と云もの、本より孟達と交

卷之五十

鄧艾鍾會大爭功……六六五
姜維一計害三賢……六七一
司馬炎纂受禪臺……六七九
羊祜病中薦杜預……六八八
王濬計取石頭城……六九七

孔明遺計斬魏延……四四三
魏折長安承露盤……四五四
仲達興兵定遼東……四六二

卷之四十五

仲達謀殺曹爽……四七一
仲達父子執政……四八〇
姜維大戰牛頭山……四九二
吳魏交兵戰徐塘……四九九
孫峻計殺諸葛恪……五〇五

卷之四十六

姜維計困司馬昭……五一五
司馬師廢魏主曹芳……五二一
文鴦一騎退魏兵……五二九
姜維洮西破魏兵……五三九
鄧艾段谷破姜維……五四五

卷之四十七

司馬昭破諸葛誕……五五五
于詮淮南死節……五六二
姜維長城戰鄧艾……五六九
孫綝廢吳主孫亮……五七五

卷之四十八

姜維祁山布八陣……五八五
司馬昭弑魏主曹髦……五九四
姜維棄車大戰……六〇〇
姜維大戰洮陽城……六〇七

卷之四十九

姜維沓中避禍……六一七
鄧艾鍾會破漢中……六二四
姜維大戰劍門關……六三三
鄧艾越嶺襲成都……六四〇
諸葛瞻大戰鄧艾……六四七
蜀主劉禪輿櫬降魏……六五四

孔明秋夜祭瀘水……一八九
孔明初上出師表……一九六
趙雲大破魏兵……二〇六
孔明智取三郡……二一四
孔明計伏姜維……二一九

卷之四十

孔明祁山破曹眞……二三一
孔明大破鐵車兵……二三九
司馬仲達擒孟達……二四八
仲達計取街亭……二六〇
孔明智退仲達……二六八
孔明揮涙斬馬謖……二七八

卷之四十一

陸遜石亭破曹休……二八五
孔明再上出師表……二九四
孔明二出祁山……三〇〇
孔明遺計斬王雙……三〇九
孔明三出祁山……三一六
孔明計破仲達……三二八

卷之四十二

仲達興兵寇漢中……三四一
孔明四出祁山……三四八
孔明祁山布八陣……三五六
孔明五出祁山……三六六
木門道萬弩射張郃……三七五

卷之四十三

孔明六出祁山……三八五
孔明造木牛流馬……三九五
孔明葫蘆谷燒仲達……四〇九
孔明秋夜祭北斗……四二〇
孔明秋風五丈原……四二七

卷之四十四

死孔明走生仲達……四三五

通俗三國志下卷 目錄

卷之三十四

漢中王怒殺劉封……一
廢漢帝曹丕奪位……六
漢中王卽皇帝位……一四
范疆張達殺張飛……二一

卷之三十五

蜀帝興兵伐吳……二一
趙咨入魏說曹丕……三五
關興張苞破吳兵……四二
蜀帝大戰猇亭……五〇
陸遜定計破蜀兵……六三

卷之三十六

蜀帝夜走白帝城……六九
魚腹浦八陣伏陸遜……七九
白帝城蜀帝託孤……八三
曹丕大興五路兵……九五
秦宓張溫大論天……一〇二

卷之三十七

曹丕泛龍舟伐吳……一一三
孔明興兵征南蠻……一二三
孔明一擒孟獲……一二九
孔明二擒孟獲……一三九
孔明三擒孟獲……一四五

卷之三十八

孔明四擒孟獲……一五三
孔明五擒孟獲……一五七
孔明六擒孟獲……一六八
孔明七擒孟獲……一七八

卷之三十九

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

DS
748
.2
C3619
1912
v.3

LIBRARY
SEP 03 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

通俗

三國志

下巻

DS
748
.2
C3619
1912
v.3

Ch'en, Shou
Tsuzoku sangokushi

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

有朋堂文庫